兵庫県文化財調査報告　第325冊

姫路市

北　条　遺　跡

―ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ―

平成２０（２００８）年３月

兵庫県教育委員会

北条遺跡

兵庫県文化財調査報告　第325冊

兵庫県教育委員会

姫　路　市

北　条　遺　跡
（ほうじょう）

―JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ―

２００８年3月

兵庫県教育委員会

姫路平野中心部 南上空から

遺跡全景 東上空から

巻首図版 2

調査地全景 北西上空から

調査地全景 北東上空から

ＳＨ04

ＳＢ13－Ｐ７断面

巻首図版 4

弥生時代前期 壺

弥生時代前期 甕

奈良時代の土器

ＳＥ01出土遺物

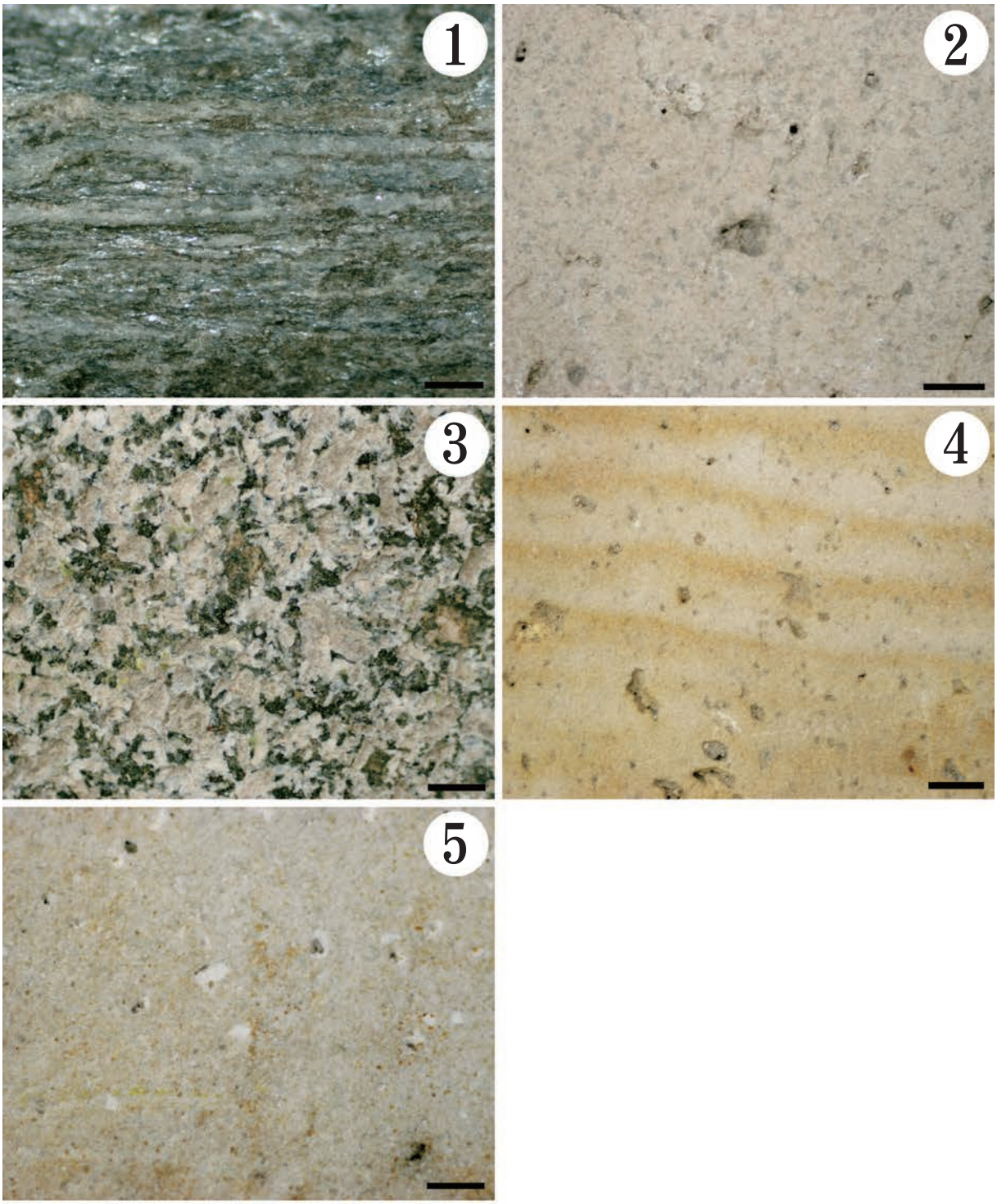
巻首図版 6

奈良時代の須恵器

奈良時代の土師器

出土平瓦

巻首図版 8



1．結晶片岩（報告No.Ｓ１）　2．シルト岩（報告No.Ｓ２）　3．花崗閃緑岩（報告No.Ｓ３）
4．流紋岩（報告No.Ｓ４）　5．流紋岩（報告No.Ｓ５）

石器表面の実体顕微鏡写真（スケール：２㎜）

例　　言

1．本書は、姫路市北条に所在する北条遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査はＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に先立つもので、兵庫県中播磨県民局姫路土木事務所からの委託を受け、兵庫県教育委員会が平成８年度に本発掘調査を実施した。発掘調査は、株式会社神崎組が発掘作業を請負い、実施した。

発掘調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（当時）山田清朝・國本綾子が担当した。

3．調査後の空中写真の撮影は、株式会社　ジェクトに委託して行った。他の遺構の写真撮影・実測は調査員が実施した。

4．整理作業は、平成18年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所、平成19年度は兵庫県立考古博物館にて実施した。

5．遺物のネーミング・接合・実測・復元・トレースについては上記整理保存班で行った。

6．遺物写真の撮影は、平成18年度に谷口フォト株式会社に委託し、行った。

7．奈良時代の須恵器の胎土分析を三辻利一（大阪大谷大学）、出土石製品の石材鑑定・出土種子の同定・サヌカイトの産地同定・炭化材の樹種同定を株式会社パレオ・ラボに依頼し、それぞれ報告をいただいた。報告者名は、各報告の文頭に記してある。また、微凹地出土の歯については、独立行政法人奈良国立文化財研究所　松井　章氏に鑑定していただいた。

8．調査は、三角点をもとに三級基準点を設置しておこなった。調査時には旧測地系に基づき測量を実施したが、本報告では世界測地系に変換している。調査地は第Ｖ系に位置する。

9．本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。

10．本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。

11．本書の編集は岸野奈津子の補助を得て山田が行い、第４章を除いては全て山田が執筆した。

12．本報告にかかわる遺物・写真は兵庫県立考古博物館に保管している。

13．最後に、発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。ここに感謝の意を表するものである。

秋枝　　芳（姫路市教育委員会）・高橋　　学（立命館大学）・口野　博史（神戸市教育委員会）

三辻　利一（大阪大谷大学）　　・千葉　　豊（京都大学）　・株式会社パレオ・ラボ

凡　　例

1．建物の規模は芯々間を基準としている。

2．土器の番号は、未実測のものも含めて付けてある。瓦もこの中に含まれるものである。金属器は、頭にMを、石器は頭にＳをつけ、土器とは別に番号を付けてある。瓦については、土器の範疇で扱っている。

3．土器は、基本的には断面を塗りつぶしているが、須恵器出現以降の土器については、土師器を白抜きとしている。また、瓦と瓦器の断面は網掛けしている。

4．遺構の略称は、以下のように呼称している。

SH：竪穴住居跡　　SB：掘立柱建物跡　　P：柱穴　　SK：土坑　　SD：溝

SE：井戸　　SX：墓

5．第１図は、カシミール３Ｄを使用している。

6．第２図は、国土地理院発行1/200,000地形図「姫路」を使用している。

7．第３図は、国土地理院発行1/25,000地形図「姫路南部」「姫路北部」を使用している。

8．第４図・第７図・第10図・第11図は、姫路市発行1/2,500都市計画図を基本とし、それぞれのスケールに縮小している。

9．第５図は、昭和41年国土地理院発行　1/25,000土地条件図「姫路」を基本としている。

10. 第６図は、明治40年陸地測量部作成1/10,000地形図を基本としている。

11. 第156図掲載のＸ線透過写真は、当博物館調査部岡本一秀により魚住分館にて撮影されたものである。

12. 第３章で報告する時期は、第５章での検討結果を受けてのものである。

目　　次

第１章　北条遺跡
第１節　地理的環境……1
第２節　歴史的環境……6
第２章　調査の経緯
第１節　調査の起因……8
第２節　確認調査……10
第３節　本発掘調査……11
第４節　整理・保存作業……12
第３章　調査の成果
第１節　基本層序と遺構の検出……13
第２節　遺構と遺物……16
１．微凹地……16
２．縄文時代の遺構と遺物……47
３．弥生時代の遺構と遺物……53
４．古墳時代後期の遺構と遺物……68
５．奈良時代～平安時代前期の遺構と遺物……79
６．平安時代後期の遺構と遺物 ……186
第４章　自然科学分析
第１節　北条遺跡出土須恵器の産地問題 ……（三辻　利一）192
第２節　北条遺跡出土サヌカイトの産地推定 ……竹原　弘展（パレオ・ラボ）199
第３節　石器の石材同定 ……藤根　　久・中村賢太郎（パレオ・ラボ）202
第４節　北条遺跡から出土した大型植物化石 ……藤根　　久（パレオ・ラボ）206
第５節　北条遺跡住居跡カマド内出土炭化材の
樹種同定 …藤根　　久・佐々木由香（パレオ・ラボ）210
第５章　まとめ
第１節　遺物 ……212
１．出土土器の検討 ……212
２．出土瓦について ……230
３．火打金について ……231
第２節　遺構 ……234
第６章　総括 ……249

挿　図　目　次

第１図　姫路市の位置……ix
第２図　姫路市（1：400000）……1
第３図　北条遺跡の位置（１：25000）……2
第４図　調査位置図（１：5000）……3
第５図　姫路平野の地形分類（１：50000）…4
第６図　遺跡周辺の微地形……5
第７図　周辺の遺跡（１：10000）……6
第８図　周辺遺跡と微地形（１：25000）……7
第９図　竣工後の北条遺跡……8
第10図　事業予定地と関連遺跡（１：15000）…9
第11図　確認調査位置図（１：5000）……10
第12図　調査前の北条遺跡（東から）……11
第13図　調査風景……11
第14図　現場事務所内での水洗作業……11
第15図　トレース作業……12
第16図　基本土層図……13
第17図　検出遺構……14
第18図　基本土層……15
第19図　微凹地の掘削作業……16
第20図　微凹地横断図 (1) ……16
第21図　微凹地横断図 (2) ……17
第22図　出土石器 (1) ……22
第23図　出土石器 (2) ……22
第24図　微凹地出土土器 (1) ……23
第25図　微凹地出土土器 (2) ……24
第26図　微凹地出土土器 (3) ……25
第27図　微凹地出土土器 (4) ……26
第28図　微凹地出土土器 (5) ……27
第29図　微凹地出土土器 (6) ……28
第30図　微凹地出土土器 (7) ……29
第31図　縄文時代の遺構……46
第32図　ＳＫ06……48
第33図　ＳＫ06出土石器……49
第34図　ＳＫ08……49
第35図　出土縄文土器……51
第36図　弥生時代の遺構……52
第37図　ＳＨ01……53
第38図　Ｐ２出土状況……54
第39図　ＳＨ02……55
第40図　ＳＨ02内土坑……55
第41図　ＳＨ02出土石器……56
第42図　ＳＨ03の検出作業……56
第43図　ＳＨ03……57
第44図　ＳＨ03中央土坑……58
第45図　ＳＤ01……59
第46図　ＳＤ03の検出作業……61
第47図　ＳＤ03……61
第48図　弥生時代の土器……66
第49図　古墳時代の遺構……67
第50図　ＳＨ04……68
第51図　ＳＨ04カマド……69
第52図　ＳＨ04内土坑……69
第53図　ＳＨ04内土器出土位置……70
第54図　ＳＨ04の検出……70
第55図　ＳＢ01……71
第56図　ＳＤ04……72
第57図　ＳＤ05……73
第58図　ＳＤ06……73
第59図　古墳時代の土器……76
第60図　奈良時代の遺構……77
第61図　奈良時代の遺構　竪穴住居跡……78
第62図　ＳＨ05……79
第63図　ＳＨ05内カマド……80
第64図　ＳＨ05内遺物出土位置……81
第65図　奈良時代の遺構　掘立柱建物……82
第66図　ＳＢ02……83
第67図　ＳＢ03……84
第68図　ＳＢ04……86
第69図　ＳＢ05……87
第70図　ＳＢ06……88
第71図　ＳＢ06－Ｐ３出土石器……89
第72図　ＳＢ07……89

第73図　ＳＢ08……90
第74図　ＳＢ09の検出……91
第75図　ＳＢ09－Ｐ10……91
第76図　ＳＢ09……92
第77図　ＳＢ10……94
第78図　ＳＢ11……95
第79図　ＳＢ12……97
第80図　ＳＢ13の調査……98
第81図　ＳＢ13……99
第82図　ＳＢ14 ……101
第83図　ＳＢ15の調査 ……102
第84図　ＳＢ15 ……103
第85図　ＳＢ15　柱穴断面 ……103
第86図　ＳＢ16 ……105
第87図　ＳＢ17 ……106
第88図　奈良時代の遺構　柱穴 ……107
第89図　出土火打金 ……114
第90図　奈良時代の遺構　土坑・井戸・墓 …117
第91図　ＳＫ11 ……118
第92図　ＳＫ19 ……121
第93図　ＳＫ23 ……122
第94図　ＳＫ25 ……123
第95図　ＳＫ27 ……123
第96図　ＳＫ30 ……125
第97図　ＳＫ33 ……126
第98図　ＳＥ01 ……128
第99図　328内面……129
第100図　330内面 ……129
第101図　ＳＸ01……130
第102図　ＳＸ01の調査……131
第103図　奈良時代の遺構　溝……132
第104図　ＳＤ08……133
第105図　ＳＤ24……139
第106図　奈良時代の遺構　畠……141
第107図　畠１……142
第108図　畠２……143
第109図　畠３……144
第110図　畠４……145
第111図　畠５……146
第112図　畠６……146
第113図　畠７……147
第114図　畠７の調査……148
第115図　畠８……149
第116図　畠９……150
第117図　奈良時代の土器 (1) ……174
第118図　奈良時代の土器 (2) ……175
第119図　奈良時代の土器 (3) ……176
第120図　奈良時代の土器 (4) ……177
第121図　奈良時代の土器 (5) ……178
第122図　奈良時代の土器 (6) ……179
第123図　奈良時代の土器 (7) ……180
第124図　奈良時代の土器 (8) ……181
第125図　奈良時代の土器 (9) ……182
第126図　奈良時代の土器 (10) ……183
第127図　奈良時代の土器 (11) ……184
第128図　平安時代後期の遺構……185
第129図　ＳＤ29……187
第130図　ＳＫ37……188
第131図　出土銅銭……189
第132図　平安時代後期の土器……189
第133図　札馬窯群の須恵器の両分布図……194
第134図　白沢２・３号窯の須恵器の両分布図194
第135図　投松２・３・５号窯の
須恵器の両分布図 …195
第136図　姫路群の須恵器の両分布図……195
第137図　加古川群と姫路群の相互識別
（Ｋ・Ｃａ・Ｒｂ・Ｓｒ） ……196
第138図　北条遺跡出土須恵器の産地推定
（Ｋ・Ｃａ・Ｒｂ・Ｓｒ） ……197
第139図　北条遺跡出土須恵器の両分布図……198
第140図　北条遺跡出土サヌカイト判別図(1)…200
第141図　北条遺跡出土サヌカイト判別図(2)…201
第142図　南西日本の概略地質図……204
第143図　近畿南西部の地質図……205
第144図　舞鶴帯・上郡帯および周辺の地質図 205
第145図　出土大型植物遺体……209

第146図　竪穴住居跡ＳＨ05カマド内の
炭化材と樹種顕微鏡写真 ……211
第147図　弥生時代後期～古墳時代前期の土器…215
第148図　奈良時代出土須恵器の分類……218
第149図　須恵器杯Ａの法量分布……219
第150図　須恵器杯Ｂの法量分布……220
第151図　奈良時代出土土師器の分類 (1) ……222
第152図　奈良時代出土土師器の分類 (2) ……223
第153図　奈良時代土師器
杯・椀・皿の法量分布 ……223
第154図　奈良時代土師器　杯・椀の法量分布224
第155図　奈良時代土師器　皿の法量分布……225
第156図　Ｍ１Ｘ線透過写真……231
第157図　奈良時代掘立柱建物の棟軸方向……235
第158図　遺構の変遷 (1) ……238
第159図　遺構の変遷 (2) ……239
第160図　遺構の変遷 (3) ……240
第161図　遺構の変遷 (4) ……241
第162図　遺構の変遷 (5) ……242
第163図　遺構の変遷 (6) ……243
第164図　遺構の変遷 (7) ……244
第165図　遺構の変遷 (8) ……245
第166図　遺構の変遷 (9) ……246
第167図　建物の方位と周辺遺跡の方位……248

表　目　次

第１表　微凹地出土土器観察表 (1) ……30・31
第２表　微凹地出土土器観察表 (2) ……32・33
第３表　微凹地出土土器観察表 (3) ……34・35
第４表　微凹地出土土器観察表 (4) ……36・37
第５表　微凹地出土土器観察表 (5) ……38・39
第６表　微凹地出土土器観察表 (6) ……40・41
第７表　微凹地出土土器観察表 (7) ……42・43
第８表　微凹地出土土器観察表 (8) ……44・45
第９表　縄文土器観察表……50・51
第10表　弥生時代の土器観察表 (1) ……62・63
第11表　弥生時代の土器観察表 (2) ……64・65
第12表　ＳＢ01　建物・柱穴規模一覧表……71
第13表　古墳時代の土器観察表……74・75
第14表　ＳＢ02　建物・柱穴規模一覧表……83
第15表　ＳＢ03　建物・柱穴規模一覧表……84
第16表　ＳＢ04　建物・柱穴規模一覧表……86
第17表　ＳＢ05　建物・柱穴規模一覧表……87
第18表　ＳＢ06　建物・柱穴規模一覧表……88
第19表　ＳＢ07　建物・柱穴規模一覧表……90
第20表　ＳＢ08　建物・柱穴規模一覧表……90
第21表　ＳＢ09　建物・柱穴規模一覧表……93
第22表　ＳＢ10　建物・柱穴規模一覧表……93
第23表　ＳＢ11　建物・柱穴規模一覧表……96
第24表　ＳＢ12　建物・柱穴規模一覧表……98
第25表　ＳＢ13　建物・柱穴規模一覧表 ……100
第26表　ＳＢ14　建物・柱穴規模一覧表 ……101
第27表　ＳＢ15　建物・柱穴規模一覧表 ……104
第28表　ＳＢ16　建物・柱穴規模一覧表 ……105
第29表　奈良時代の土器観察表 (1) ……152・153
第30表　奈良時代の土器観察表 (2) ……154・155
第31表　奈良時代の土器観察表 (3) ……156・157
第32表　奈良時代の土器観察表 (4) ……158・159
第33表　奈良時代の土器観察表 (5) ……160・161
第34表　奈良時代の土器観察表 (6) ……162・163
第35表　奈良時代の土器観察表 (7) ……164・165
第36表　奈良時代の土器観察表 (8) ……166・167
第37表　奈良時代の土器観察表 (9) ……168・169
第38表　奈良時代の土器観察表 (10) ……170・171
第39表　奈良時代の土器観察表 (11) ……172・173
第40表　平安時代後期の土器観察表……190・191
第41表　北条遺跡出土須恵器の分析データ …193
第42表　原石採取地と判別群名称 ……199

第43表　産地推定結果一覧 ……200
第44表　石器の詳細と石材結果 ……202
第45表　大型植物化石一覧表 ……206
第46表　兵庫県下　出土山形火打金一覧 ……232
第47表　奈良時代の遺構一覧 ……237

巻首図版目次

巻首図版１
　姫路平野中心部　南上空から
　調査地全景　東上空から
巻首図版２
　調査地全景　北西上空から
　調査地全景　北東上空から
巻首図版３
　ＳＨ04　　ＳＢ13－Ｐ７断面
巻首図版４
　弥生時代前期　壺　　弥生時代前期　甕
巻首図版５
　奈良時代の土器
　ＳＥ01出土遺物
巻首図版６
　奈良時代の須恵器　　奈良時代の土師器
巻首図版７
　出土平瓦
巻首図版８
　石器表面の実体顕微鏡写真

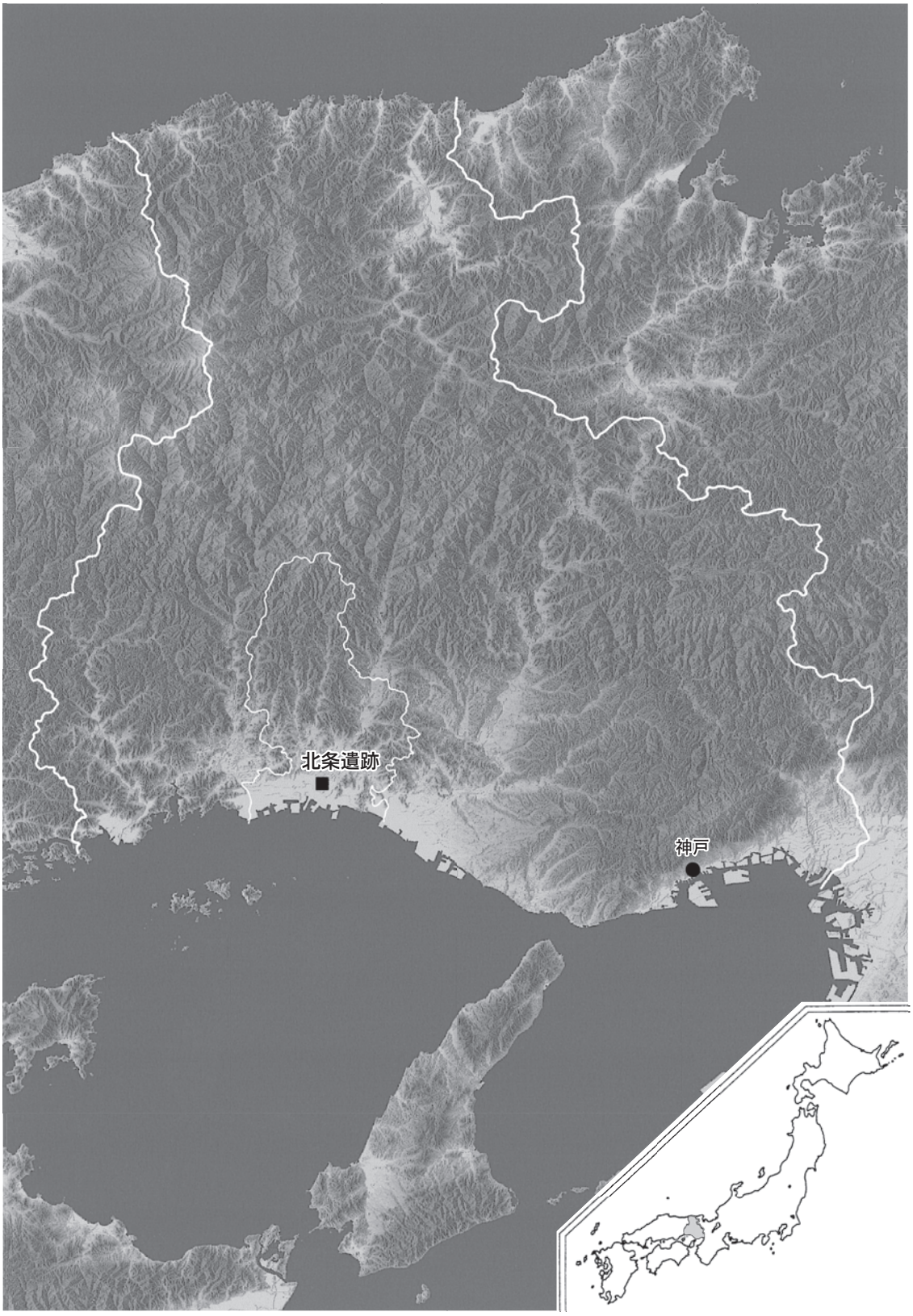
写真図版目次

写真図版１　遺跡
　遺跡の位置(米軍撮影空中写真)
写真図版２　遺構
　俯瞰　上空から
写真図版３　遺構
　全景　東上空から　　全景　東から
写真図版４　遺構
　全景　西上空から　　全景　西から
写真図版５　遺構
　中央部　東から　　中央部　西から
写真図版６　遺構
　微凹地全景　南東から
　微凹地断面（西側）　南から
　微凹地断面（東側）　南から
写真図版７　遺構
　ＳＫ06断面　東から
　ＳＫ08断面　東から
写真図版８　遺構
　ＳＨ01全景　西から
　ＳＨ02全景　西から
写真図版９　遺構
　ＳＨ02－Ｐ２　西から
　ＳＨ02－Ｐ１　平面西から
　ＳＨ02－Ｐ１　断面西から
　ＳＨ02－Ｐ３　西から
　ＳＨ02－Ｐ４　西から
　ＳＨ02　土坑２　西から
　ＳＨ02　ＳＫ01全景　南西から
写真図版10　遺構
　ＳＨ03　南東から
　ＳＨ03　Ｐ１　北から
　ＳＨ03　Ｐ３　北から
　ＳＨ03　Ｐ４　北から
　ＳＨ03　166出土状況　南から

ＳＨ03　168出土状況　南から
写真図版11　遺構
ＳＨ03　中央土坑断面　南東から
ＳＨ03　中央土坑　南東から
写真図版12　遺構
ＳＤ01断面　北から
ＳＤ01　174出土状況　南から
ＳＤ01　173出土状況　南東から
ＳＤ03断面　南から
写真図版13　遺構
ＳＨ04　南から
ＳＨ04　土器出土状況　南から
写真図版14　遺構
ＳＨ04　カマド　南から
ＳＨ04　カマド横断面　南から
ＳＨ04　カマド西側土器出土状況　南から
ＳＨ04　土坑断面　西から
写真図版15　遺構
ＳＤ04断面　南西から
ＳＤ05断面　南西から
ＳＤ06断面　南から
写真図版16　遺構
ＳＨ05全景 東から
ＳＨ05　Ｐ1断面　東から
ＳＨ05　Ｐ2断面　東から
ＳＨ05　Ｐ3断面　西から
ＳＨ05　Ｐ4断面　西から
写真図版17　遺構
ＳＨ05　カマド全景　東から
ＳＨ05　カマド横断　東から
ＳＨ05遺物出土状況　東から
写真図版18　遺構
ＳＨ05 カマド付近遺物出土状況　北から
ＳＨ05 カマド付近遺物出土状況　東から
ＳＨ05土器出土状況　東から
ＳＨ05瓦出土状況　北から
写真図版19　遺構
ＳＢ03全景　北から
ＳＢ04－Ｐ３断面　北から
ＳＢ04－Ｐ９断面　北から
ＳＢ04－Ｐ４断面　北から
ＳＢ04－Ｐ７断面　東から
ＳＢ06－Ｐ５断面　東から
ＳＢ06－Ｐ６　土器出土状況　東から
写真図版20　遺構
ＳＢ09　全景　東から
ＳＢ09－Ｐ３断面　東から
ＳＢ09－Ｐ10　西から
ＳＢ07－Ｐ１断面　北から
ＳＢ17－Ｐ２　南から
ＳＢ10－Ｐ２　南から
写真図版21　遺構
ＳＢ13　全景　西から
ＳＢ13－Ｐ７　東から
ＳＢ13－Ｐ14 西から
ＳＢ15全景　南から
ＳＢ16全景　西から
写真図版22　遺構
Ｐ03　土器出土状況　東から
Ｐ08　土器出土状況　南から
Ｐ09　土器出土状況　北西から
Ｐ30　土器出土状況　東から
Ｐ40　土器出土状況　西から
Ｐ06　断面　東から　　Ｐ27　断面　西から
写真図版23　遺構
ＳＫ11　断面　西から
ＳＫ19　断面　西から
ＳＫ23　断面　南から
ＳＫ21　断面　南から
写真図版24　遺構
ＳＫ25　断面　西から
ＳＫ27　断面　南西から
ＳＫ28　断面　南から
ＳＫ33　断面　北西から

写真図版25　遺構
ＳＥ01　全景
ＳＥ01　土器出土状況　東から
ＳＥ01　土器出土状況　南西から
写真図版26　遺構
ＳＸ01全景　西から
ＳＸ01断面　西から
写真図版27　遺構
ＳＤ11断面　南から
ＳＤ16断面　東から
ＳＤ20断面　南から
ＳＤ23断面　東から
ＳＤ24断面　南から
畠７　南から
写真図版28　遺構
ＳＤ29断面　南から
ＳＫ37断面　南から
写真図版29　遺物
微凹地出土土器（１～８）
写真図版30　遺物
微凹地出土土器（９～11・15～17）
写真図版31　遺物
微凹地出土土器（18～22・26・27･30）
写真図版32　遺物
微凹地出土土器（23・25・28・29・31・32）
写真図版33　遺物
微凹地出土土器（33～36・41・43・44）
写真図版34　遺物
微凹地出土土器（37～40・42・48・52～54）
写真図版35　遺物
微凹地出土土器（55・58～63）
写真図版36　遺物
微凹地出土土器（64～69・71）
写真図版37　遺物
微凹地出土土器（76～78・81～83）
写真図版38　遺物
微凹地出土土器（84・85・87・88・90）
写真図版39　遺物
微凹地出土土器（93・94・101・105・109・113・118・119）
写真図版40　遺物
微凹地出土土器（120・121・126・134）
写真図版41　遺物
微凹地出土土器（135～145）
写真図版42　遺物
ＳＫ06出土土器（146～155）
包含層出土土器（156）
写真図版43　遺物
ＳＨ02出土土器（159・160）
ＳＨ03出土土器（165・166・168）
ＳＤ01出土土器（169・172・173）
写真図版44　遺物
ＳＤ01出土土器（174・176・181）
包含層出土土器（184）
写真図版45　遺物
ＳＨ04出土土器（185・187・191・192）
ＳＨ05出土土器（198～200・203・204）
写真図版46　遺物
ＳＨ05出土瓦（205・206）
写真図版47　遺物
ＳＨ05出土土器（208）
ＳＢ03出土土器（213）
ＳＢ04出土土器（214）
ＳＢ06出土土器（218・219）
写真図版48　遺物
ＳＢ09出土土器（220・223・224）
ＳＢ11出土土器（231・233）
ＳＢ15出土土器（243）
写真図版49　遺物
ＳＢ13出土瓦（236）　Ｐ02出土土器（247）
ＳＢ17出土土器（248）
Ｐ07出土土器（252）
Ｐ49出土土器（397）　Ｐ28出土土器（284）
Ｐ25出土土器（279・280）
Ｐ33出土土器（295）

写真図版50　遺物
Ｐ08出土土器（253・255）
Ｐ09出土土器（256）
Ｐ11出土土器（259）　Ｐ15出土土器（260）
Ｐ16出土土器（266）　Ｐ18出土土器（270）
Ｐ21出土土器（273）
写真図版51　遺物
Ｐ21出土土器（274）
Ｐ24出土土器（276・277）
Ｐ31出土土器（290）
Ｐ34出土土器（297）　Ｐ41出土瓦（307）
写真図版52　遺物
Ｐ44出土瓦（308）
ＳＫ32出土土器（309～315）
写真図版53　遺物
ＳＫ09出土土器（316）
ＳＥ01出土土器（318～325）
写真図版54　遺物
ＳＥ01出土土器（326～331・333）
写真図版55　遺物
ＳＥ01出土土器（335・338）
ＳＤ24出土土器（342・344）
畠９出土土器（352）
写真図版56　遺物
ＳＥ01出土瓦（339）　畠６出土土器（345）
畠９出土土器（353）
包含層出土土器（354・357・359）
写真図版57　遺物
包含層出土土器（358・363・364・368・369・378・381・382）
写真図版58　遺物
包含層出土瓦（383～385）
写真図版59　遺物
包含層出土瓦（387・389・391）
写真図版60　遺物
包含層出土瓦（392）
包含層出土土器（400）
ＳＫ37出土土器（398・399）
微凹地出土石器（Ｓ１・Ｓ２）
写真図版61　遺物
ＳＫ06出土石器（Ｓ３）
ＳＨ02出土石器（Ｓ４）
ＳＢ06-Ｐ３出土石器（Ｓ５）
Ｐ36出土金属製品（Ｍ１）
包含層出土金属製品（Ｍ２）



第１図　姫路市の位置

第１章　北条遺跡

第１節　地理的環境

１．地理的位置

姫　路　市　　北条遺跡は、姫路市北条に所在する。姫路市は、兵庫県第二の都市で、瀬戸内海に面した、旧播磨地域の中央部に位置する（第１図）。平成18年３月27日に、いわゆる平成の大合併により、飾磨郡家島町・同安富町・同夢前町および神埼郡香寺町を併せ、現在の姫路市となっている。市域の面積は534.27㎢、人口は約53万人（平成19年３月現在、姫路市ホームページによる）である。市域は、西側を揖保郡太子町・たつの市（平成７年10月に合併後改称）・宍粟市、東側を神崎郡福崎町・同市川町・加西市・高砂市と接している。

姫路市は、古代においては山陽道を中心とした交通の要衝として、江戸時代以降は姫路

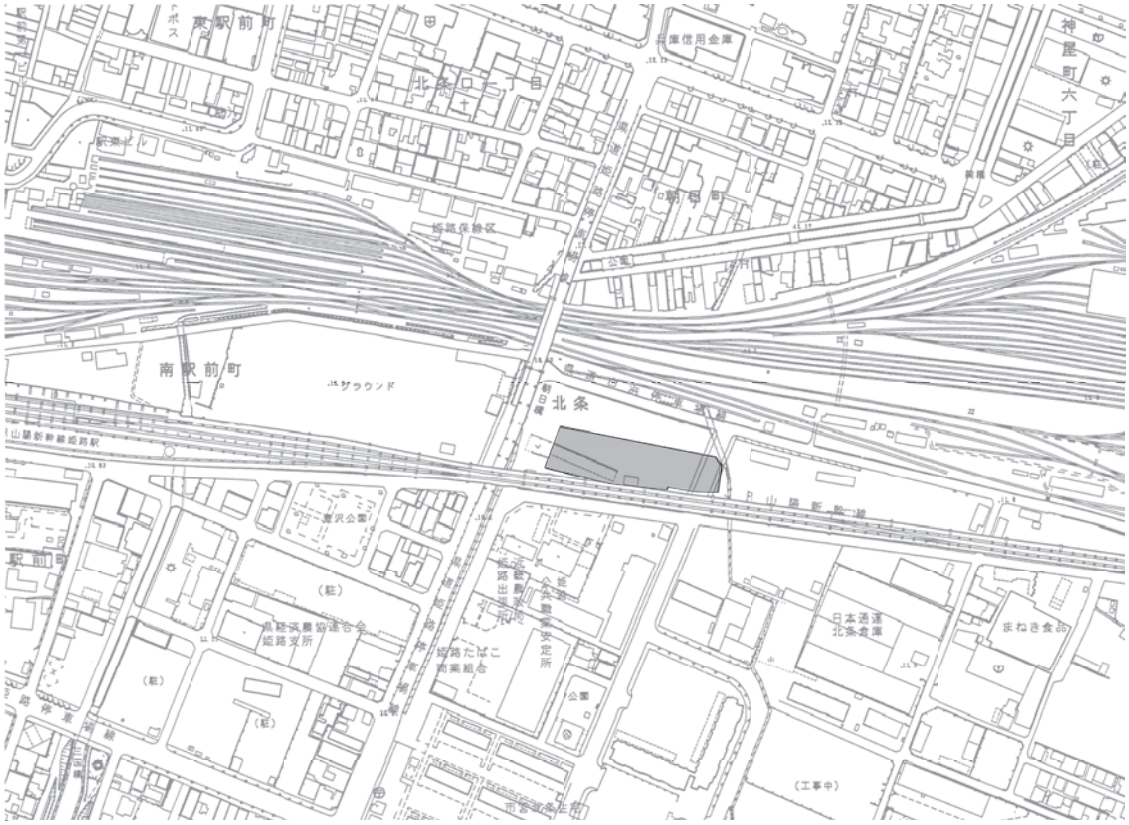
第２図　姫路市（１：400000）

城を中心とした城下町として栄えてきた町である。また、昭和時代においては、沿岸部を中心に製鉄業を中心とした企業城下町として発展してきた。

現代においても、瀬戸内側と日本海側を結ぶ交通（播但連絡道路・ＪＲ播但線・国道312号）の起点ともなり、交通の要衝として重要な位置を占めている。そして、平成８年４月１日には中核都市に移行している。

北条遺跡　北条遺跡は、姫路市の中心部、ＪＲ姫路駅の東約600ｍに所在する（第３図）。朝日橋（ＪＲ高架完成後、消滅）の東側にあたる。現在の山陽新幹線と山陽本線の間に挟まれた、東西に長い範囲である。江戸時代においては、その城下には含まれず、その南域外に位置した（写真図版１）。

第３図　北条遺跡の位置（１：25000）



第４図　調査位置図（１：5000）

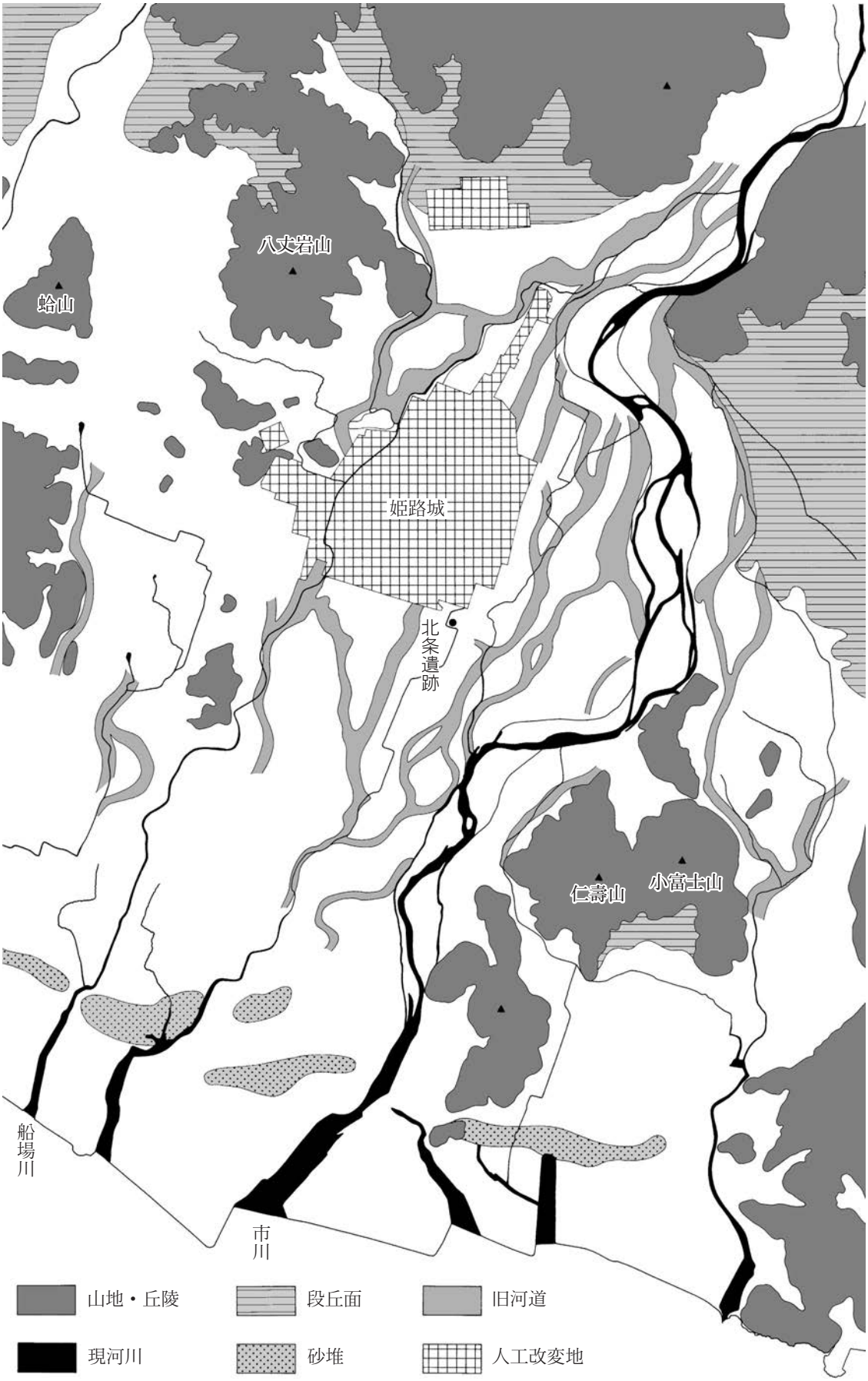
調　査　前　　調査地は、調査前は駐車場として利用されていた。それ以前については、明治40年の地形図によると、「ライジングサン石油株式会社姫路漕油所」が所在していたことがわかる。調査において、これによる撹乱が調査区北西部で認められた。

２．地形的位置

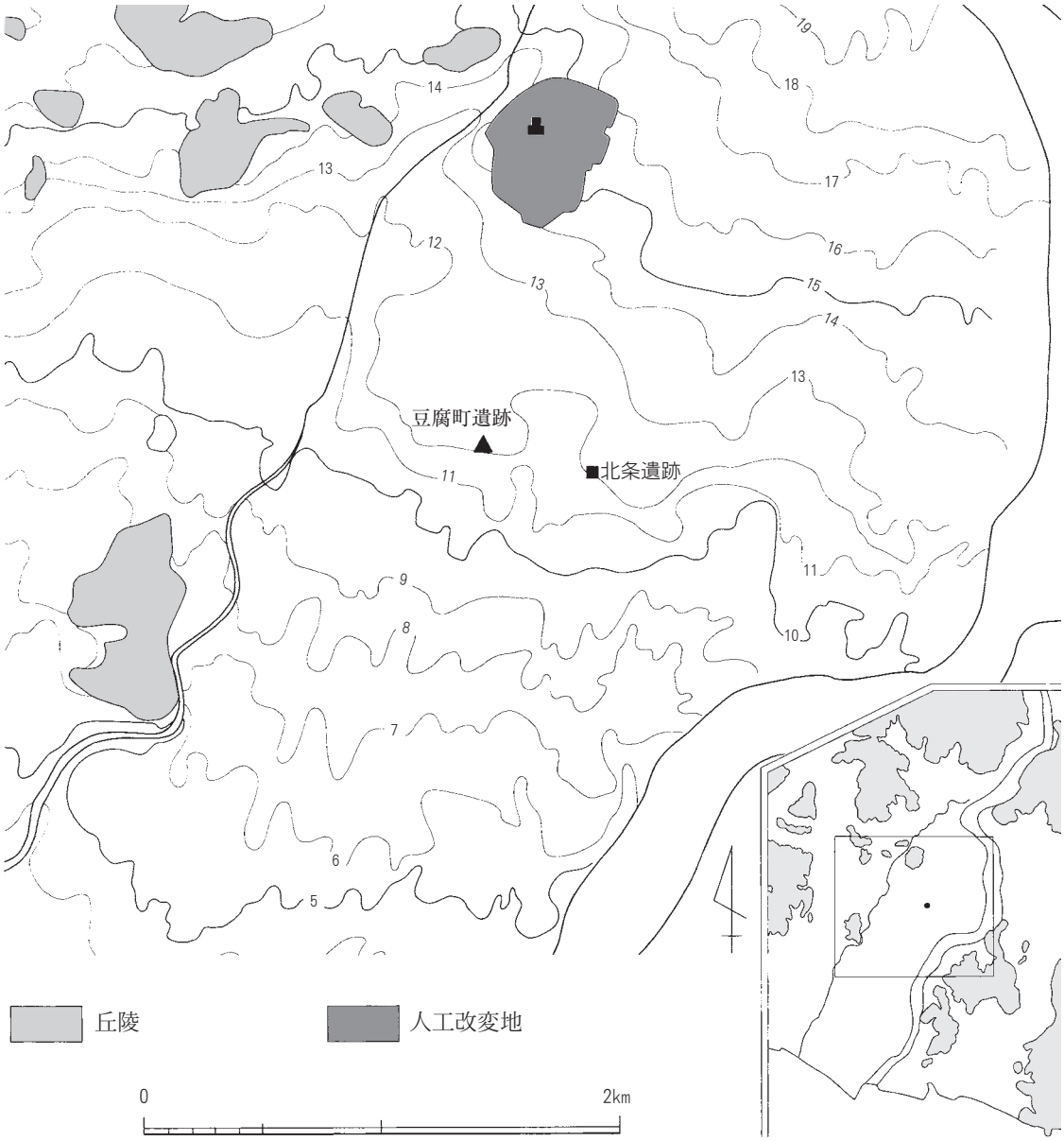
市　　川　　北条遺跡は、市川下流域に形成された姫路平野のほぼ中央部に立地する。姫路平野を形成した市川は、朝来市生野町の三国岳（855ｍ）付近を源とする一級河川で、神崎郡神河町・市川町・福崎町を経て、姫路市飾磨区妻鹿で播磨灘に注いでいる。全長73㎞を測り、その流域面積は496㎢に及ぶ。

姫路平野　　現在の市川は、姫路市の中心部を大きく迂回するように東側に蛇行し、姫路平野の東縁をなしている。しかし、明治40年に作成された地形図・昭和41年に作成された土地条件図（1：25000）をもとに復元した地形分類図（第５図）をみると、小河川が網状に流れていたようである。現在、その幾筋かが用水路として遺存している。姫路城の西側を流れる船場川もその一つである。また、調査地の東側を南流する用水路（第４図）についても、その一つと考えられる。

微地形分析　　本遺跡の西側と東側にも、旧河道を復元することができる。この東西の旧河道に挟まれた一帯は、第６図の等高線図によると、一つの微高地として復元することができる。よって、北条遺跡は、北東から南西方向に舌状に拡がる微高地上に立地することが理解できる。そして、西側の旧河道の西側に豆腐町遺跡が、東側の旧河道の東側に市之郷遺跡が、それぞれ立地していることが理解できる（第８図）。



第５図　姫路平野の地形分類（１：50000）



第６図　遺跡周辺の微地形

また、今回報告する調査では、後述するように、縄文時代の遺構が検出されている。よって、北条遺跡は、完新世段丘Ⅰ面上に立地するものと考えられる。なお、調査地を覆う鉄道施設に伴う盛土（厚さ１ｍ～1.5ｍ）を除いた旧地表面の標高は、10.25ｍ～10.65ｍである。

ちなみに、第５図によると、姫路平野における更新世段丘の形成がわずかである。これは、姫路平野の形成が、完新世以後に急速に形成されたものと考えられる。

海岸線の復元

また、地形面分析（第５図）によると、当遺跡の南側約３㎞で、砂堆を少なくとも２列確認することができる。この砂堆より海側については、後世の埋立地（近世以降も含む）と考えられる。よって、北条遺跡から当時の海岸線までの距離は、直線で約3.0kmと復元できる。

第２節　歴史的環境

はじめに　北条遺跡周辺には多くの遺跡が周知されている。ここでは、当遺跡に近接し、調査が行われた遺跡について、紹介する。対象となるのは、北条遺跡・（仮称）姫路駅周辺第４地点遺跡・豆腐町遺跡・南畝町遺跡である（第７図）。

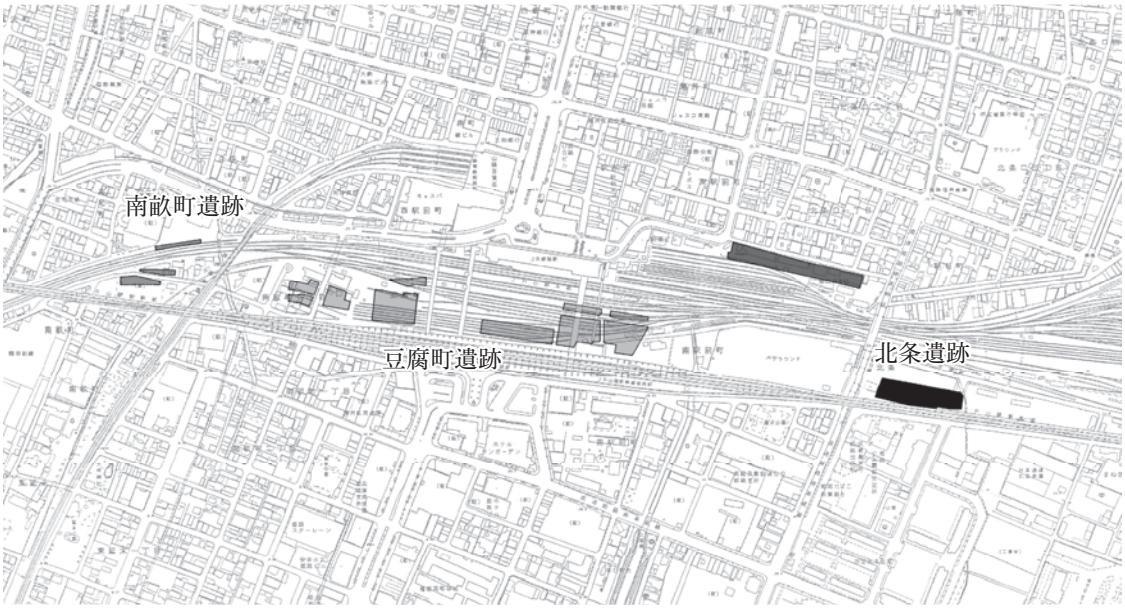
なお、他の周辺の遺跡については、豆腐町遺跡の報告においてまとめられている[1]ので、これを参照されたい。

北条遺跡　平成８年度に姫路市教育委員会により、調査が行われている[2]。この結果、弥生時代前期の溝・土坑、弥生時代中期後半の土器溜り、７世紀末の掘立柱柱穴列・大型土坑・溝・素掘り井戸、12世紀後半の溝・柱穴・土坑などが検出されている。この他、弥生時代前期の土器・木製品、７世紀末～８世紀初頭の土器・布目瓦・円面硯、12世紀後半の土器が多く出土した旧河道も検出されている。

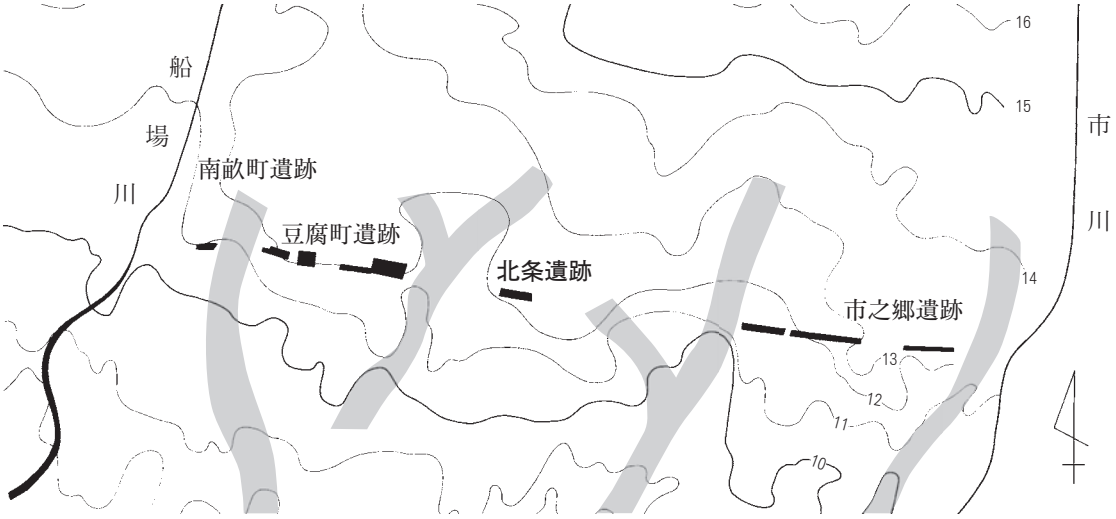
なお、当遺跡に関しては、ここで報告する北条遺跡以外に、もうひとつ南側に北条遺跡が周知されている（県遺跡番号：020458）。明らかに混乱を招きかねない状況である。今後の課題といえよう。

第４地点遺跡　平成10年度と平成11年度に姫路市教育委員会により、調査が行われている[3]。この結果、古墳時代後期の流路、平安時代後半の木組み井戸、江戸時代の姫路城外堀と並行する石組溝・畑跡、などが検出されている。

豆腐町遺跡　平成10年度から平成18年度にかけて、兵庫県教育委員会により断続的に調査が行われている。その成果の一部は、平成18年度に調査報告書としてまとめられている[4]。これによると、弥生時代の溝・土坑、奈良～平安時代の掘立柱建物・井戸・土坑・旧河道、中世の掘立柱建物・土坑・水田などが明らかとなっている。特に、奈良～平安時代の二彩壺・漆工房関連遺物・墨書土器（「郡」・「郷」）の出土は、本遺跡との関連においても、注目されるものである。



第７図　周辺の遺跡（１：10000）



第８図　周辺遺跡と微地形（１：25000）

南畝町遺跡　　平成11年度から平成15年度にかけて、兵庫県教育委員会により断続的に調査が行われている[5]。弥生時代中期と後期の溝が検出されている。この他、弥生時代中期から奈良・平安時代にかけての土器が出土している。

小　　結　　上記の遺跡の調査は、いずれもＪＲ山陽本線等連続立体交差事業を中心とした一連の事業に伴い、行われたものである。これらの遺跡を第８図の微地形図と重ね合わせると、互いに旧河道を隔てた微高地上に立地していることが理解できる。

〔註〕

（１）　岡田　章一「遺跡をとりまく環境」『豆腐町遺跡Ⅰ－JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』兵庫県教育委員会　2007

（２）　秋枝　芳「北条遺跡（第１次調査）」『ＴＳＵＢＯＨＯＲＩ　平成８年度（1996）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　1998

（３）　秋枝　芳・中川　猛「（仮称）姫路駅周辺第４地点遺跡（第１次）」『ＴＳＵＢＯＨＯＲＩ　平成11年度（1999）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2000

中川　猛「（仮称）姫路駅周辺第４地点遺跡（第２次）」『ＴＳＵＢＯＨＯＲＩ　平成11年度（1999）姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会　2000

（４）　岡田　章一他『豆腐町遺跡Ⅰ－ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』兵庫県教育委員会　2007

（５）　松岡　千寿「南畝町遺跡」『平成11年度　年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　2000

中川　渉・松岡　千寿「南畝町遺跡」『平成12年度　年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　2001

仁尾　一人「南畝町遺跡」『平成14年度　年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　2003

仁尾　一人「南畝町遺跡」『平成15年度　年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　2004

第２章　調査の経緯

第１節　調査の起因

ＪＲ高架事業　今回の調査は、ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴うものである。この事業は、ＪＲ姫路駅およびその東側車両基地一帯を対象とした、ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業、姫路駅周辺土地区画整理事業、街並み・まちづくり総合支援事業、関連道路事業と平行して計画されているものである（第10図）。計画では、平成14年竣工の予定であったが、平成20年２月現在においても、工事は続けられている。ただし、北条遺跡に関しては、工事は完了している（第９図）。

第９図　竣工後の北条遺跡

発掘調査　これらの事業に伴う調査は、鉄道高架事業に伴う発掘調査を兵庫県教育委員会が、区画整理に伴う調査を姫路市教育委員会が、それぞれ分担して実施している。本報告が刊行される時点では、これらの事業に伴う発掘調査は、兵庫県教育委員会・姫路市教育委員会とも、ほぼ完了している。

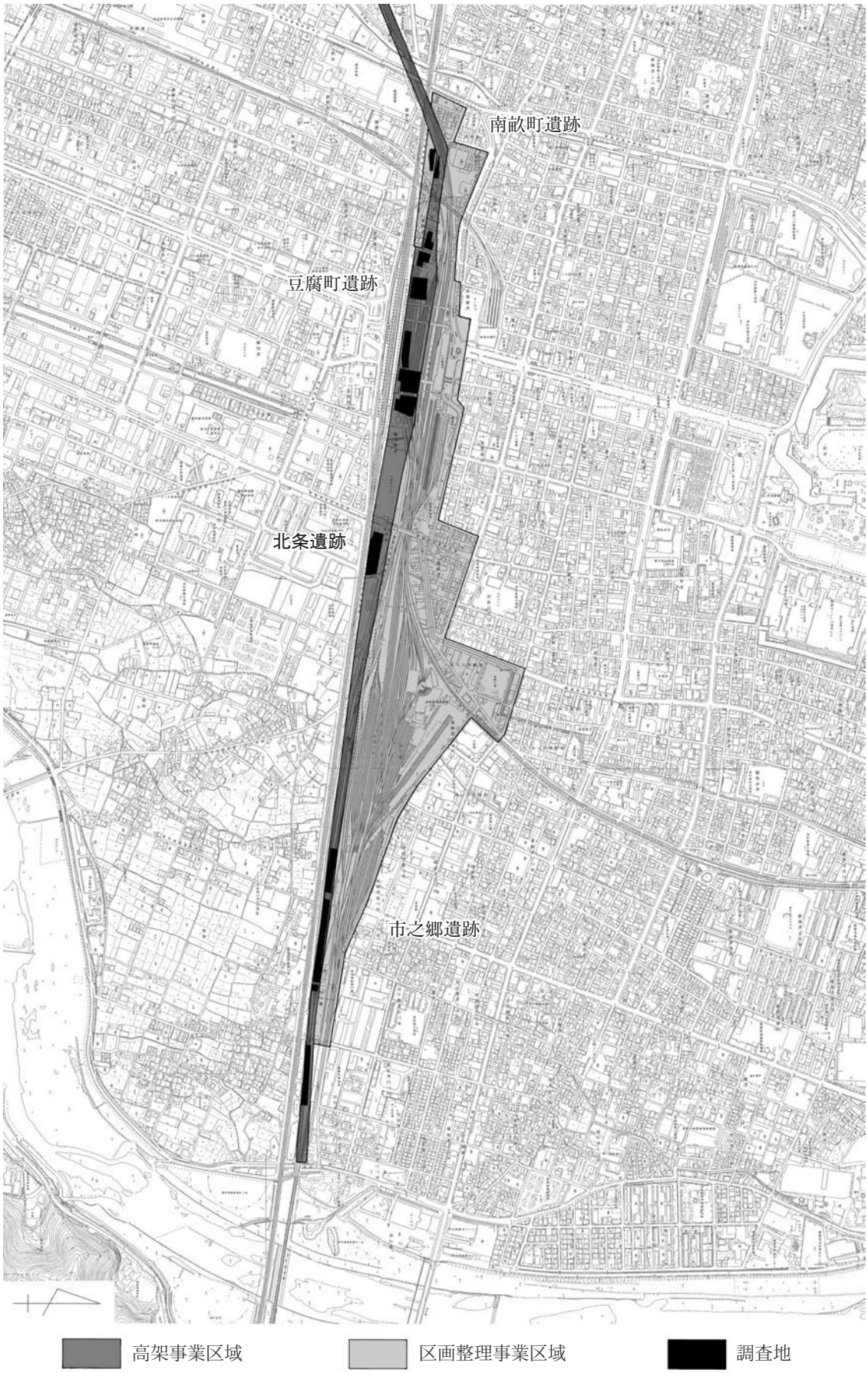
上記事業に伴い、兵庫県教育委員会が対象とした遺跡は、西側から、西延末遺跡・南畝町遺跡・豆腐町遺跡・北条遺跡・市之郷遺跡の５遺跡である。すでに、市之郷遺跡[1]と豆腐町遺跡[2]の一部については、整理まで完了し、報告書が刊行されている。今回報告する北条遺跡は、３冊目の報告書となるものである。

また、姫路市教育委員会も、市之郷遺跡と北条遺跡の発掘調査を実施している。ただし、報告書は未刊行である。

〔註〕

（１）　山田清朝『市之郷遺跡－ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－』兵庫県教育委員会　2005

（２）　岡田章一他『豆腐町遺跡Ⅰ－ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』兵庫県教育委員会　2007



第10図　事業予定地と関連遺跡（１：15000）

第２節　確認調査

概　　要　　北条遺跡の本発掘調査の契機となった確認調査は、同じ事業により実施した市之郷遺跡の確認調査と併せて実施している。確認調査は、計４次にわたって行われている（第１次確認調査～第４次確認調査）が、北条遺跡に直接係る確認調査は、第１次確認調査・第３次確認調査・第４次確認調査の３次の調査である。詳細については、兵庫県教育委員会『市之郷遺跡』2005を参照されたい。各確認調査の内容は、以下の通りである（第11図）。

第１次確認調査　平成５年度に実施した。

調査番号　930104

調査日時　平成５年７月５日～７日

調　査　員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　吉田　昇

調査内容　今回報告する地区より東側の地区を対象とした。２ｍ×２ｍのグリッドを16箇所に設定し、遺構・遺物の確認に努めた。いずれのグリッドにおいても遺構・遺物は確認されず、対象地全域には、埋蔵文化財は包蔵されていないものと判断するに至った。

第３次確認調査　平成５年度に実施した。

調査番号　930167

調査日時　平成５年11月27日

調　査　員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　吉田　昇

調査内容　朝日橋より東側の地区を対象とした。２ｍ×２ｍのグリッドを６箇所に設定し、遺構・遺物の確認をおこなった。調査の結果、一部を除いて、弥生時代と中世の遺構と遺物を確認した。この結果にもとづき実施したのが、今回報告する本発掘調査である。

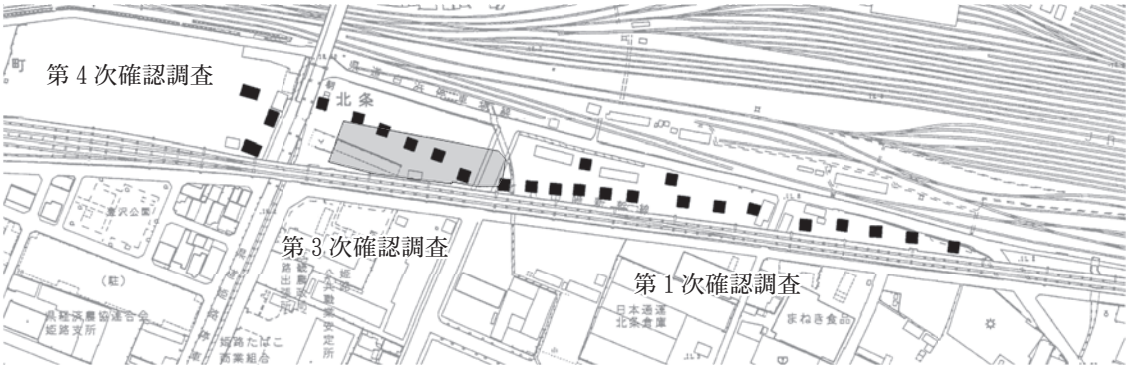
第４次確認調査　平成８年度に実施した。

調査番号　960325

調査日時　平成８年11月19日

調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　山田清朝・國本綾子

調査内容　朝日橋より西側の地区を対象とした。２ｍ×６ｍのトレンチを３箇所に設置し、北条遺跡の西側の範囲の確定に努めた。本発掘調査実施した地区で検出された遺構基盤層を確認するとともに、２箇所のトレンチにおいて遺構を確認した。以上から、当地まで北条遺跡の範囲が拡がることが明らかとなった。



第11図　確認調査位置図（１：5000）

第３節　本発掘調査

調査概要　本発掘調査は、前節の確認調査の結果を受け、平成８年８月５日から11月14日にかけて実施した。ただし、調査対象とした地区は、朝日橋より東側である。発掘調査は、盛土層および旧耕作土層（第16図）を重機により掘削し、以下を人力によりすすめていった（第13図）。

また、遺構検出後、小型ヘリコプターにより全景写真の撮影を実施した。調査成果の図化については、調査員と調査補助員により実測していった。また、調査と平行して、現場事務所内にて、出土遺物の水洗を行った（第14図）。

なお、遺跡調査番号は960042、調査面積は3542㎡である。

第12図　調査前の北条遺跡（東から）

第13図　調査風景

調査体制　以下の通りである。

調　査　員　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
山田　清朝・國本　綾子

調査補助員　山本　陽子・中谷　悟史・中塚　克浩
白髭　武・香西　亜由美

室内作業員　森崎　由紀子・曽我　瑞恵
覚野　郁子・鞍野　愛

第14図　現場事務所内での水洗作業

第４節　整理・保存作業

調査終了後、平成18年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて、同19年度は兵庫県立考古博物館にて、報告書の刊行を目途とした整理作業をおこなった。各年度の、作業内容・体制は以下のとおりである。また、土器の水洗作業については、現場事務所にて、発掘調査と平行しておこなった。

平成18年度　土器のネーミング・接合・実測・復元・写真撮影を行った。また、これと平行して、出土金属製品の保存処理作業を行った。

整理担当職員 整理保存班　岡田章一・岡本一秀（保存処理担当）
調　査　班　山田清朝
嘱　託　員　岸野奈津子・眞子ふさ恵・西口由紀・木村淑子・小野潤子・三好綾子
奥野政子・又江立子・荒木由美子・藤池かづさ

平成19年度　遺構図・実測図の整図・レイアウト・トレース、そして原稿執筆・編集作業をおこない、本書の刊行にいたった。

出土遺物をまとめるにあたって、縄文土器に関して、千葉　豊先生に実見していただき、御教示いただいた。

また、奈良時代の出土須恵器の胎土分析を大阪大谷大学三辻利一先生に、微凹地出土サヌカイトの産地同定・石器の石材鑑定・ＳＨ05出土炭化材の樹種同定・微凹地およびＳＥ01出土種子の同定を株式会社パレオ・ラボにそれぞれ依頼し、分析結果を得るとともに、玉稿をいただいた。これらは、第４章にまとめてある。

さらに、微凹地出土の歯について、独立行政法人奈良国立文化財研究所　松井　章先生に同定していただいた。同定結果については、本文中（第３章第２節）に記載してある。

整理担当職員 整理保存班　岡田章一
調　査　班　山田清朝
嘱　託　員　岸野奈津子

第15図　トレース作業

第３章　調査の成果

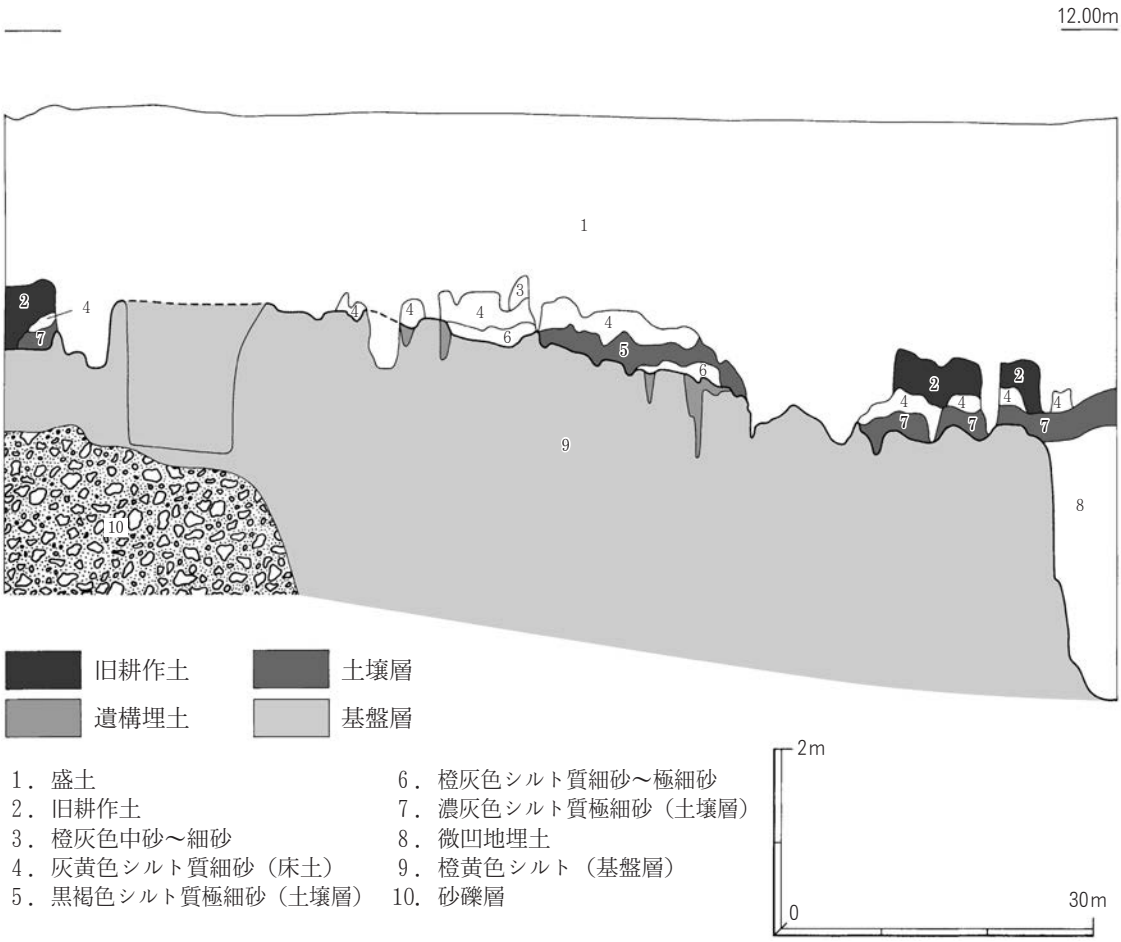
第１節　基本層序と遺構の検出

１．基本層序

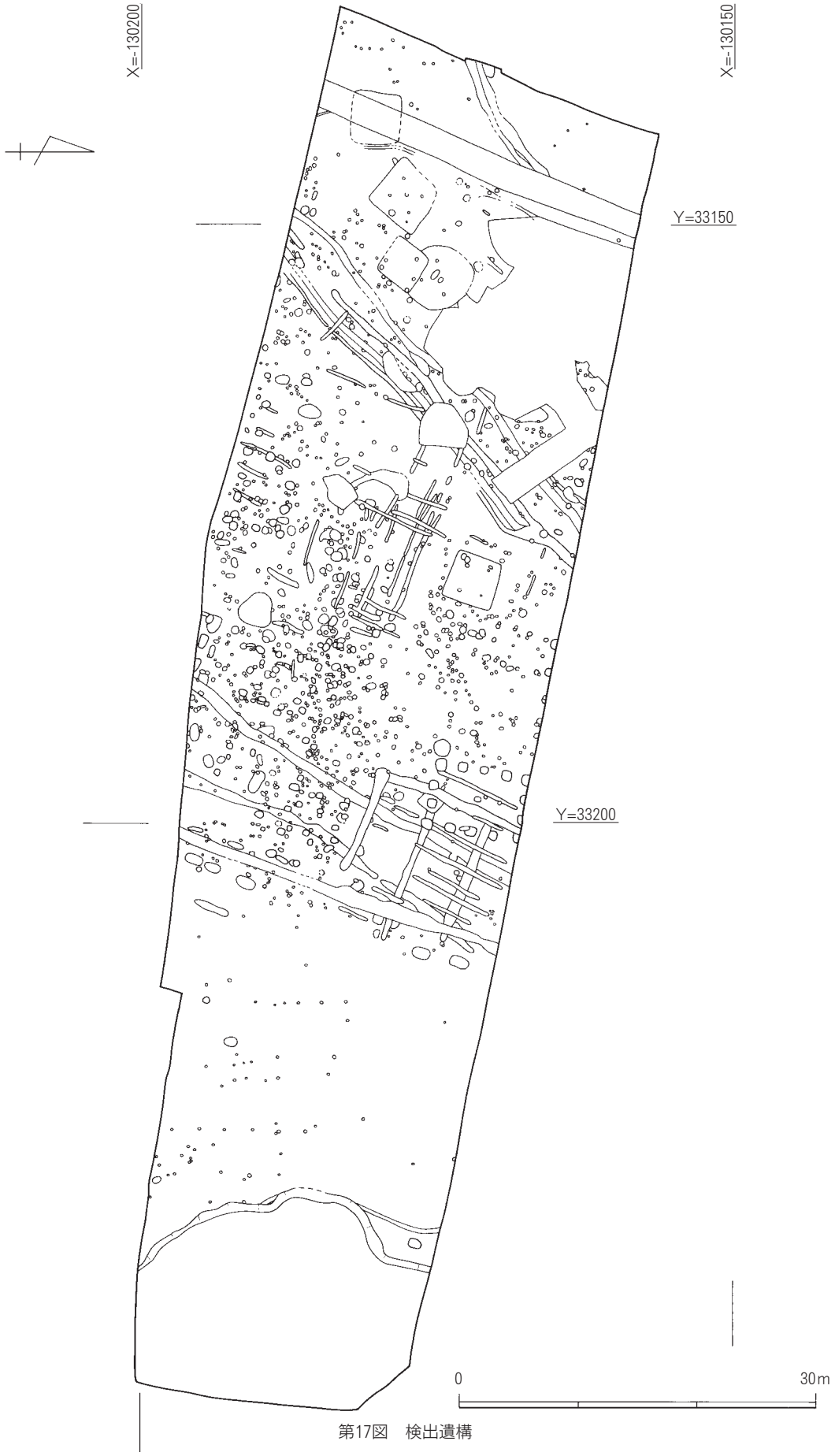
基本層序　調査地は、後世の撹乱を多くの地点で受けており、基本的な層序が良好な状態で観察できる範囲が限られている。比較的良好に観察できる調査区中央部北壁を中心にまとめると、上から、①盛土層、②旧耕作土層、③床土層、④土壌層、⑤微凹地埋土、⑥基盤層、の層序が認められる(第16図・第18図)。

盛　土　第１層が相当し、調査地全域に認められる。１ｍ～1.5ｍの堆積が認められ、東側ほど厚くなっている。明治時代の鉄道敷設に伴い、整地層として盛られた層と考えられる。調査前、当地は駐車場となっていたことから、この盛土層中には、より新しい整地層も含まれるものである。

旧耕作土　第２層が相当し、調査地の東側と西側の一部で認められた。当初は、調査地全域にあったものと考えられるが、調査区中央部から西側にかけては標高が高いことから、後世の削平を受けた結果と考えられる。その上面の標高は調査区東部で8.50ｍ、西端部で9.30ｍを測る。



第16図　基本土層図



第17図　検出遺構

床　　土　　第４層が相当し、上層の旧耕作土に伴う層である。灰黄色シルト質細砂からなる。上層の第３層についても、同様の層と考えられる。

土 壌 層　　第５層と第７層が相当し、調査区中央部から東側にかけて認められた。また、調査区西端部でも部分的に観察することができた。基盤層（第９層）上部が土壌化した層と考えられる。

第18図　基本土層

その上面の標高は、東側ほど低くなっている。その厚さは約30cmである。また、この下層の第６層についても、土壌化は進行していないものの、ほぼ同時期に形成された層の一部と考えられる。

基 盤 層　　橙黄色シルト（第９層）と砂礫層（第10層）からなる。第10層は、縄文海進以降に堆積し、姫路平野の基盤をなす層と考えられ、調査区西側で観察することができた。第９層は、本遺跡の基盤となる層である。第10層の凹地部分を埋没させるように堆積した層と考えられ、礫層が認められない調査区東側を中心に堆積していた。最大で３ｍの堆積が観察された。

微凹地埋土　　調査区東側で観察された層である。当地の地積状況の詳細に関しては、次節で報告する(16頁)。

２．調査の概要と遺構の検出

検 出 遺 構　　調査の結果、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑・井戸・墓等が明らかとなった。掘立柱建物を構成する以外の柱穴もかなり多数検出されている。これとは別に、調査区の東端で微凹地を検出した。これらの遺構は、いずれも同一面で検出されている。

遺構の時期　　上記の遺構の時期は、縄文時代後期から江戸時代初頭までと、複数の時代に及ぶものである。

報告の手順　　以上から、本報告では、①微凹地と出土遺物、②縄文時代の遺構・遺物、③弥生時代の遺構・遺物、④古墳時代後期の遺構・遺物、⑤奈良時代の遺構・遺物、⑥平安時代後期の遺構・遺物、にわけて報告していくことにする。なお、③の弥生時代は古墳時代前期（布留式）までを、④の古墳時代後期は７世紀前半までを、⑤の奈良時代は平安時代前半までを、それぞれ含むものである。

また、特に奈良時代を中心とした遺構の検出状況を見ると、調査区中央部に顕著な集中が認められる（第60図）。そして、この集中部の東西両側は、遺構の分布が希薄となっている。特に、東側は顕著である。そこで、本報告においては、遺構の集中する箇所を、「中央部」と呼称し、報告していくことにする。

第２節　遺構と遺物

概要　　調査区東部で検出した旧河道状の落ち込みである。調査時においては旧河道として調査を進めていったが、東側肩部を検出していないことから、本報告では微凹地として報告する。ただし、旧河道の可能性を否定するものではない。

なお、微凹地中央部に南北方向にのびる埋設管があり、調査時においても機能していたことから、調査することはできなかった。

第19図　微凹地の掘削作業

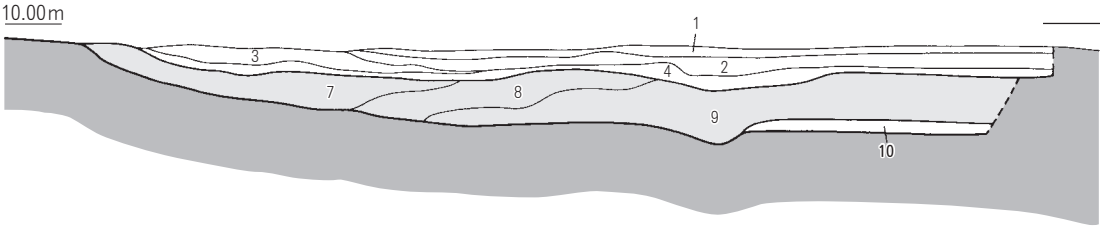
形状・規模　　東端部は調査区外までひろがり、未検出である。検出できた規模は、東西方向で19.30ｍである。最深部における西側肩部と比高は1.77ｍで、その標高は7.95ｍである。

埋没状況　　大きく、上層・中層・下層の３層に分けることができる（第20図・第21図）。なお、今回報告する調査地の東側に、南流する小規模な用水路が存在する（第４図）。この用水路が、本微凹地の最終的な痕跡の可能性が高い。

上層　　１～６の６層からなる。いずれも、顕著に土壌化した湿地性の堆積層である。また、２層と４層中には、炭片が多く含まれていた。層中からは、奈良時代～江戸時代にかけての土器が出土している。

中層　　７～９の３層からなる。いずれも、洪水に起因して堆積した層である。いずれの層中でも、ラミナを顕著に観察することができた。11層と13層からは、炭片が少なからず含まれていた。層中からは、弥生時代中期～後期の土器が出土している。

下層　　10～13の４層からなる。いずれも、顕著に土壌化した湿地性の堆積層である。また、２層と４層中には、炭片が多く含まれていた。層中からは、縄文時代後期～弥生時代前期の土器が出土している。



１．淡褐灰色砂混じりシルト～砂質シルト（上層）
２．黒色シルト～暗褐灰色シルト（上層）
３．暗灰色シルト（上層）
４．暗黒灰色シルト（上層）
５．暗灰色シルト（上層）
６．淡青灰色砂質シルト（上層）
７．青灰色中細砂～暗灰色シルト（中層）
８．青灰色中細砂～黒灰色砂混じりシルト（中層）
９．青灰色中細砂～暗灰色砂混じりシルト（中層）

第20図　微凹地横断図（１）

出土遺物　　上層・中層・下層の各層から、時期の異なる土器が出土している（第24図～第30図）。

下層出土土器　縄文時代後期・縄文時代晩期・弥生時代前期の土器が出土している。縄文時代後期と縄文時代晩期の土器はわずかで、大半が弥生時代前期の土器である。

縄文後期　深鉢（１～３）が出土している。１～３は深鉢の口縁部片である。１の外面には凹線状の沈線が施されているが、沈線間には縄文は認められない。また、２・３は、口縁部内面端部付近に１条の沈線が施され、その上側には縄文が認められる。

縄文晩期　壺（５）・浅鉢（６）・深鉢（４・７～11）・鉢底部（12～14）が出土している。

壺　　５の１個体である。外面はていねいなヘラミガキにより仕上げられている。また、屈曲部には1条のヘラ描沈線が施されている。断面観察によると、内傾接合によっており、より弥生土器とは特徴を異にする。口縁部には径４㎜の紐穴があけられている。

浅鉢　　６の１個体が出土している。口縁部は鍵形口縁をなし、端部は内側に肥厚する。体部は横方向のヘラミガキ、口縁部は横ナデ調整により、ていねいに仕上げられている。口縁部は内傾接合によっている。

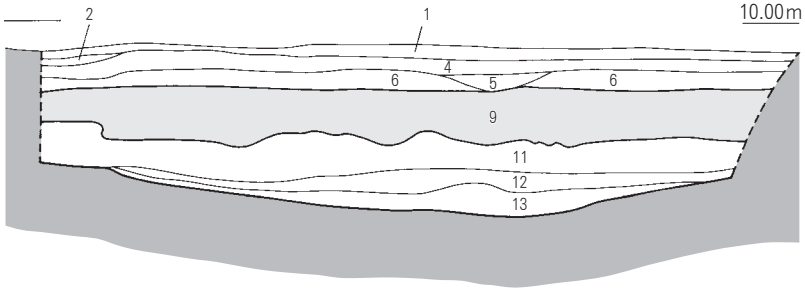
深鉢　　４の外面には、１条の横方向の沈線と、その下側に縦方向の鋸歯状の沈線が認められる。７は口縁部の小片であるが、外面に「コ」字形の刺突文が２列施されている。

９・10は船橋式の、11は長原式の突帯文土器である。いずれも口縁部を中心とした小片で、１条の突帯が貼り付けられている。ただし、突帯が貼り付けられる位置が異なる。また、10の突帯頂部及び11の突帯頂部・口縁端部には、それぞれＤ～Ｖ字形・Ｖ字形のキザミ目が施されている。

鉢　　12～14は鉢の底部片である。いずれも上げ底傾向にあり、14の底部から体部への変換部はつまみ出すような指オサエにより整形され、高台状をなしている。

弥生前期　壺・甕・甕蓋が出土している。

壺　　15～54の40個体分を図化した。完存もしくは完形に復元できる個体はなく、小片のものが多い。いずれも広口壺に分類されるものである。ただし、法量的にはバリエーションが認められる。ここでは、頸部から体部にかけての整形手法及び装飾手法をもとに分類し、報告する。その主な内容は、①段が認められるもの、②削り出し突帯を有するもの、③ヘラ描沈線により装飾するもの、④貼付け突帯を有するもの、⑤上記以外のもの、である。他に、底部片について別途報告する。



洪水層

10. 暗黒灰色シルト（下層）　12. 黒色砂混じりシルト（下層）
11. 暗黒灰色シルト（下層）　13. 暗灰色シルト（下層）

0　3 m

第21図　微凹地横断図（２）

段　　段が認められるものは、15〜18の４個体である。15は小型の広口壺で、複数の小片をもとに図上復元したものである。口頸部境と頸体部境に段が認められる。頸部の段の下側に３条の、体部の段付近に５条の、ヘラ描沈線が施されている。

16は、頸部から体部にかけての小片で、体部に段が認められる。外面は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。

17と18は口縁部を中心に残存する個体で、口縁部と頸部の境に段が認められる。なかでも17の段はわずかに観察できる程度である。また、18外面のヘラミガキは、内外面とも横方向に施されている。

削り出し突帯　削り出し突帯が認められるのは、19〜22の４個体である。19は、頸部と体部の境を削り出し、突帯上に３条のヘラ描沈線が施されている。ただし、口縁部側の削り出しは、ヘラ描沈線により明確ではない。20は、突帯の削り出しが上下とも明瞭で、突帯上に１条のヘラ描沈線が施されている。内面のヘラミガキは、縦方向に近い。21も同様に削り出しにより突帯が整形され、突帯上に２条のヘラ描沈線が施されている。22は体部上半に施され、突帯上に２条のヘラ描沈線が施されている。

沈線　　体部を中心にヘラ描沈線が施された一群である。いずれも広口壺の一部と考えられる。23・25〜35の12個体が該当する。沈線の断面形がコ字形をなす明確な沈線が横方向に施されたもの（23・25〜31）と、断面形が微細な鋭角三角形をなす沈線が施されたもの（32〜35）とに、２分できる。

前者は、26を除いては、体部上半に施されており、２条から５条の沈線が施されている。なかでも、３条施された例が最も多く認められる。また、26は、体部上半（３条）と頸部（２条＋α）の２箇所にヘラ描沈線が施されている。

後者は、より装飾性のたかいものである。32は、比較的明確な３条のヘラ描沈線の上側に平行する５条からなる沈線が、斜方向と縦方向に施されている。33は、横方向の沈線の下側に平行する２条＋αと３条＋αからなる斜方向の沈線が施されている。いずれも、その断面が鋭利な沈線である。34は、３条からなる沈線が波状に施されている。35は、平行する２条の沈線間に竹管文が施されている。なかでも、33と34の沈線は、非常に細かい沈線で、肉眼での観察はやや困難である。

この他、48の頸部には横方向と斜方向からなる沈線が施されている。さらに、54の底部には、木葉文が描かれている（写真図版34）。

貼付け突帯　突帯が貼付けられたものである。36〜43の８個体が該当する。貼付けられる部位は、口縁部（43）・頸部（36・41）・体部（37〜40・42）の３タイプが認められる。また、突帯断面がシャープな断面三角形をなす41以外は、突帯頂部に指頭圧痕文を施すもの（36・37・39・40・42）とキザミ目を施すもの（38・43）の２タイプである。

突帯は、１条（39）・２条・３条（40）と、バリエーションが認められる。また40は、体部の２箇所（１条・３条）に突帯が貼り付けられている。下側の突帯には棒状工具による圧痕が施されている。37は、３条の突帯が貼り付けられているが、中間部の突帯はシャープな断面三角形をなすのに対し、他は頂部にヘラ状工具による圧痕文が施されている。

この他、43は口縁端部内面に２条の突帯が認められ、端部も横ナデにより突帯状をなし、

いずれの頂部にもキザミ目が施されている。

他　　口縁部片（44〜48）と底部片（49〜54）が出土している。

口縁部片は、法量的な差は認められるが、いずれも広口壺の口縁部と考えられる。45を除いては、内外面ともていねいなヘラミガキにより仕上げられている。44の口縁端部が凹線状をなす以外、基本的に同様の形態的特徴を有している。また、前述したように、48の外面にはヘラ描沈線が施されている。この他、47に関しては、胎土・色調等の特徴から、21と同一個体の可能性が考えられる。

底部片は、49・50・52〜54と51とに分類できる。前者は、当該期に特徴的な広口壺の底部と考えられる。法量的には個体差が認められる。このなかで、50と53の底部中央には、焼成後に穿孔が施されている。また、49の底部側面には横方向（右→左）のヘラ削りが、底部には一定方向のヘラ削りが施されている。内面は粗いヘラナデ調整により仕上げられている。さらに、54は、底部に木葉文が施されるとともに、底部側面はヘラナデ調整により仕上げられている。

後者は51の１個体で、体部が球形を呈するものである。基本的な整形技法は前者と同じであるが、底部側面が横方向（右→左）の粗いヘラ削りにより仕上げられている。また底部外面のナデ調整も、粗い仕上げである。

甕　　完存するもの、もしくは完形に復元できるものはなく、口縁部を中心とした個体と、底部を中心としたものとからなる。口縁部形態から、如意形を呈するものと、逆Ｌ字形を呈するものが出土している。両タイプとも、外面に煤が付着したものが多く、使用後廃棄されたものと考えられる。

如意形甕　口縁部下にヘラ描沈線を施すもの（58・61〜68）と、施さないもの（55〜57・59・60）とに分類できる。

前者は、ヘラ描沈線が最大で５条施されている。これらは、口縁端部に、キザミ目を施すもの（63〜68）と施さないもの（58・61・62）の、両タイプが認められる。法量的な差も顕著である。このなかで、63については、小片のため明確にできないが、ヘラ描沈線を螺旋状に施したようで、基本的には３条であるが、一部４条の箇所も認められる。

後者についても、口縁端部にキザミ目を施すもの（55・57・59・60）と、施さないもの（56）とが認められる。法量的な差も認められる。このなかで、56については、口縁部の折り返しが他の如意形甕とは異なることから、縄文土器の可能性も考えられる。また、前者の外面はヘラミガキにより仕上げられる例が多いのに対して、56を除いては、ヘラミガキは認められない。

逆Ｌ字甕　69の１点のみである。口縁端部外側に突帯を貼付けている。突帯は、横ナデ調整により断面三角形に仕上げられ、頂部にキザミ目が施されている。また、口縁部下には５条のヘラ描沈線が認められる。

底部　　図化できたのは４個体分（70〜73）である。このなかで、71の底部中央部には、焼成前に穿孔が施されている。また、内面にヘラミガキ痕が認められる。この他、70の底部は楕円形に歪んでいる。73は他の底部と異なり、外面はヘラナデ、内面は指ナデにより仕上げられている。

甕蓋　図化できたのは74の１個体である。外面に、顕著な煤の付着が認められる。

鉢　図化できたのは75と76の２個体である。75は口縁部の小片で、胎土の特徴から当該期に位置付けたものである。内面は縦方向の、外面は斜方向のヘラナデにより仕上げられている。76は大型の鉢で、頸部下外面に３条のヘラ描沈線が施されている。うち２条の沈線に、継ぎ目が認められる。内外面ともていねいなヘラミガキにより仕上げられている。

弥生中期　当該期の土器の出土量はわずかで、図化できたのは壺（80）と甕（78･79）に限られる。壺は、広口壺の底部と考えられる。甕は、法量および口縁部の形態が異なる。

弥生後期　いわゆる庄内併行期までを含むもので、壺・甕・高坏が出土している。量的には、中期よりは多いが、前期と比べると明らかに少ない。

壺　長頸壺（81・82）・広口壺（83）・直口壺（84）が出土している。長頸壺は、２個体とも同タイプに分類できるものである。ただし、81は体部から口縁部にかけて、叩き目が顕著に観察できる。また、82の内面のナデ調整は、横方向→縦方向の順に施されている。直口壺の84は、体部内面の粘土痕が顕著で、粘土積み上げ後粗いヘラナデ調整により仕上げられている。また、外面は、体部を縦方向のヘラミガキで仕上げた後、頸部は横方向のヘラミガキにより仕上げられている。

高坏　図化できたのは85と86の２個体である。85は、口縁部から体部にかけて明確に屈曲するのに対して、86は口縁部から体部にかけては緩やかな曲線をなしている。85は、全体的に磨滅傾向にあるが、口縁端部と体部から口縁部にかけての変換部外面は、強いナデ調整により凹線状をなしている。

甕　いわゆるＶ様式系甕と、庄内式甕の２タイプが認められる。前者は、88・89の２個体を図化することができた。図化できなかったが、体部片が数個体分出土している。後者は、90の１個体である。体部片と口縁部片を図上復元したものである。体部外面上半部の叩きは細、筋でほぼ水平方向である点が特徴的で、胎土は在地のものである。

この他87については、庄内式甕の範疇ではないが、その影響下にある甕と考えられる。叩き痕は認められず、尖底が特徴的である。器高9.5cmと大変小型である。

中層出土土器　奈良時代と平安時代後期の土器が出土している。

奈良時代　器種としては、土師器・須恵器・製塩土器・瓦が出土している。

須恵器　杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・皿Ａ・皿Ｂ・稜椀蓋・稜椀・壺・甕等が出土している。

杯Ａ　91～94の４個体を図化した。口径に対して器高の低い91・92と、器高の高い93・94と、法量にバリエーションが認められる。前者の底部は、回転ヘラ削りによりていねいに仕上げられている。

杯Ｂ蓋　95～97の３個体を図化した。つまみまで残存する個体は認められない。図化できなかったが、つまみは釦状のものが多く出土している。

杯Ｂ　98～103の６個体を図化した。法量に差が認められ、100については、稜椀の底部の可能性も考えられる。

皿Ａ　104～106の３個体を図化した。法量・形態に差が認められる。104・105は底部から口縁部にかけて明確に屈曲するのに対して、106は緩やかに立ち上がる。

皿Ｂ　107の１個体である。法量からみて、高台が小規模である。

稜椀蓋　108の１個体である。天井部を中心に残存し、つまみは環状をなす。

稜椀　109の１個体である。完形に復元できる個体で、全体的にていねいに仕上げられている。

壺　110～116の７個体である。バリエーションが顕著で、壺Ｃ（110）・壺Ｋ（111・114）・壺Ｑ（113）・壺Ｌ（115）・壺底部（116）に細分できる。116については、壺Ｎに分類される可能性が高い。また、図化できなかったが、壺Ｄと考えられる把手が２点（120・121）出土している(写真図版40)。胎土・技法等の特徴の類似から、同一個体の可能性が考えられる。

甕　体部片が多く出土しているが、口縁部片を欠き、図化できたのは117と118の２個体に限られる。117は、甕Ａに、118は甕Ｅもしくは甕Ｄに分類されるものと考えられる。

他　小片のため器種を特定できないが、墨書された小片が出土している（119：写真図版39)。外面に墨書されているが、一部の残存のため解読は困難である。

土師器　皿Ａ・杯Ａ・甕・椀・カマドが出土している。

皿Ａ　122と123の２個体を図化することができた。両個体とも同様の技法により仕上げられているが、123の口縁端部内面は、強いナデにより沈線状をなしている。また、いずれも暗文を観察することはできなかった。

杯Ａ　124の１個体を図化することができた。全体的に磨滅が著しく、詳細な調整・暗文等は観察できない。口縁端部内面に沈線は認められない。

甕　甕は体部片が多く出土しているが、図化できたのは125の１個体に限られる。長胴甕に分類されるものである。

カマド　焚口部分が出土している。小片のため、図化はできなかった。

製塩土器　焼塩壺の小片が出土している。１～２㎜大の砂粒を多く含むもので、内外面とも粗い手づくねにより仕上げられている。

瓦　平瓦が出土している。図化できたのは126の１点のみである。

平安時代　須恵器・土師器・瓦質土器が出土している。

須恵器　椀の底部片が出土している。図化できたのは、127と128の２個体である。２個体ともほぼ同時期に位置付けられるもので、底部は回転糸切りにより切り離されている。

土師器　椀・杯・羽釜が出土している。

椀　口縁部片（129）と底部片（130・131）が出土している。当該期の椀としては、口縁部が内湾傾向にある。底部片は、高台付椀の高台部で、細部の特徴を異にする。

杯　杯Ａに分類される132の１個体を図化することができた。全体的に器壁が厚く、底部から体部への変換部が緩やかな曲線をなしている。

羽釜　133の１個体を図化することができた。口縁部～鍔部を中心に残存するが、体部は砲弾形をなすものと考えられる。体部外面のヘラナデは粗い仕上げで、縦方向（上→下）に施されている。

瓦質土器　羽釜が１点出土している。図化できなかったが、砲弾形をなすタイプで、鍔を中心に残存する。

その他　馬の右上顎臼歯が出土している。臼歯が萌出中であることから、1.5～２才の若い馬であるとの、松井　章氏による鑑定結果が得られている。奈良時代と考えられる。

上層出土土器　桃山時代から江戸時代にかけての、陶器・染付磁器が出土している。

陶　　器　備前焼・丹波焼・唐津焼が出土している。

備 前 焼　Ｖ期に位置付けられる擂鉢が出土している。図化できたのは134の１個体のみである(第30図)。他に、底部片なども出土している。

丹 波 焼　図化できなかったが、甕の口縁部片が出土している。18世紀代に位置付けられるものである。

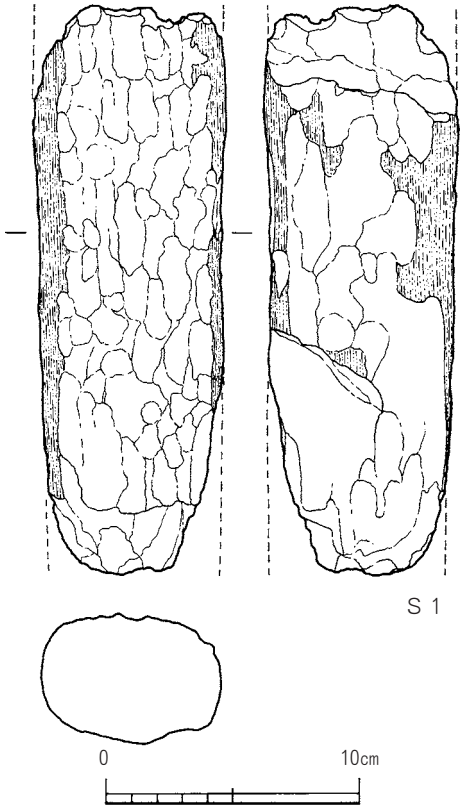
唐 津 焼　碗・皿・盤が出土している（写真図版41)。いずれも小片のため、図化できなかった。碗（135～141）が最も多く出土しているが、底部を中心とした小片に限られる。135と138の見込みには胎土目が、140と141の見込みには砂目が認められる。いずれも17世紀初頭に位置付けられるものである。

皿（142～144）は、内面見込みに胎土目が認められる。17世紀初頭と考えられる。また、盤（145）についても、底部を中心に残存し、見込みには砂目が認められる。17世紀前半に位置付けられる。

染付磁器　伊万里産の碗・皿・盤、瀬戸産の碗・皿が出土しているが、いずれも小片のため図化することはできなかった。

伊万里産では、初期伊万里の碗の底部が１点出土している。高台畳付部分は、砂の付着が顕著である。17世紀初頭と考えられる。

このほか、18世紀以降の碗・皿が出土している。多くは、伊万里産と考えられるが、19世紀以降と考えられる瀬戸産の染付磁器も出土している。

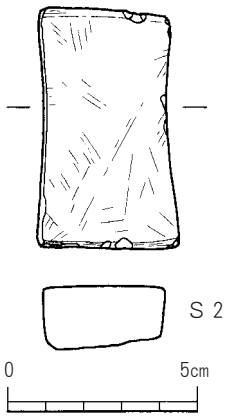


第22図　出土石器（１）

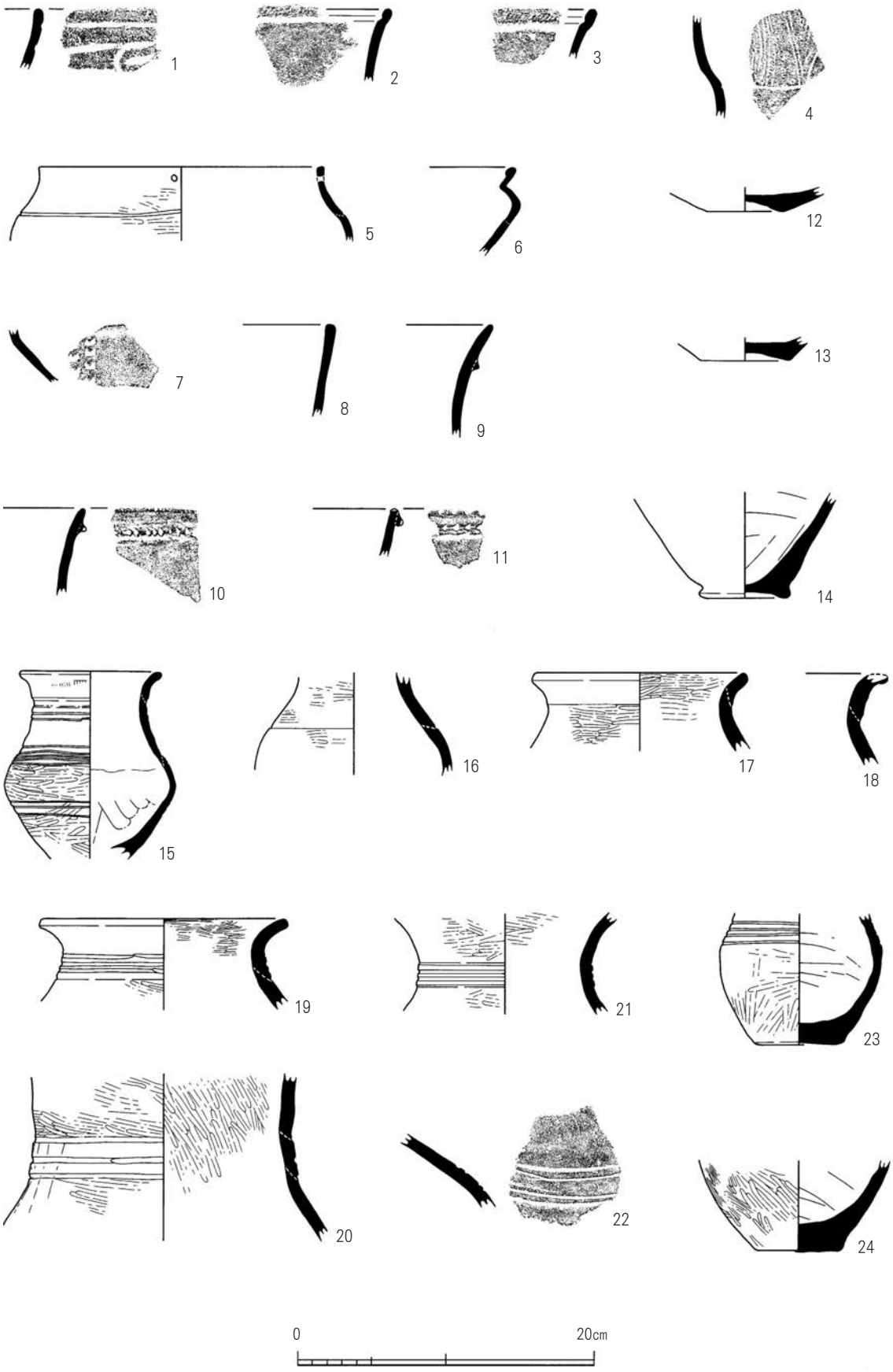
出土石器　下層からＳ１が、上層からＳ２が出土している。

Ｓ１(第22図)は、結晶片岩製の石棒の一部と考えられる。部分的に、敲打による加工痕が認められる。両端とも欠損し、全長22.50cm残存する。断面は楕円形をなし、その規模は7.65cm×5.20cmである。1269ｇ。

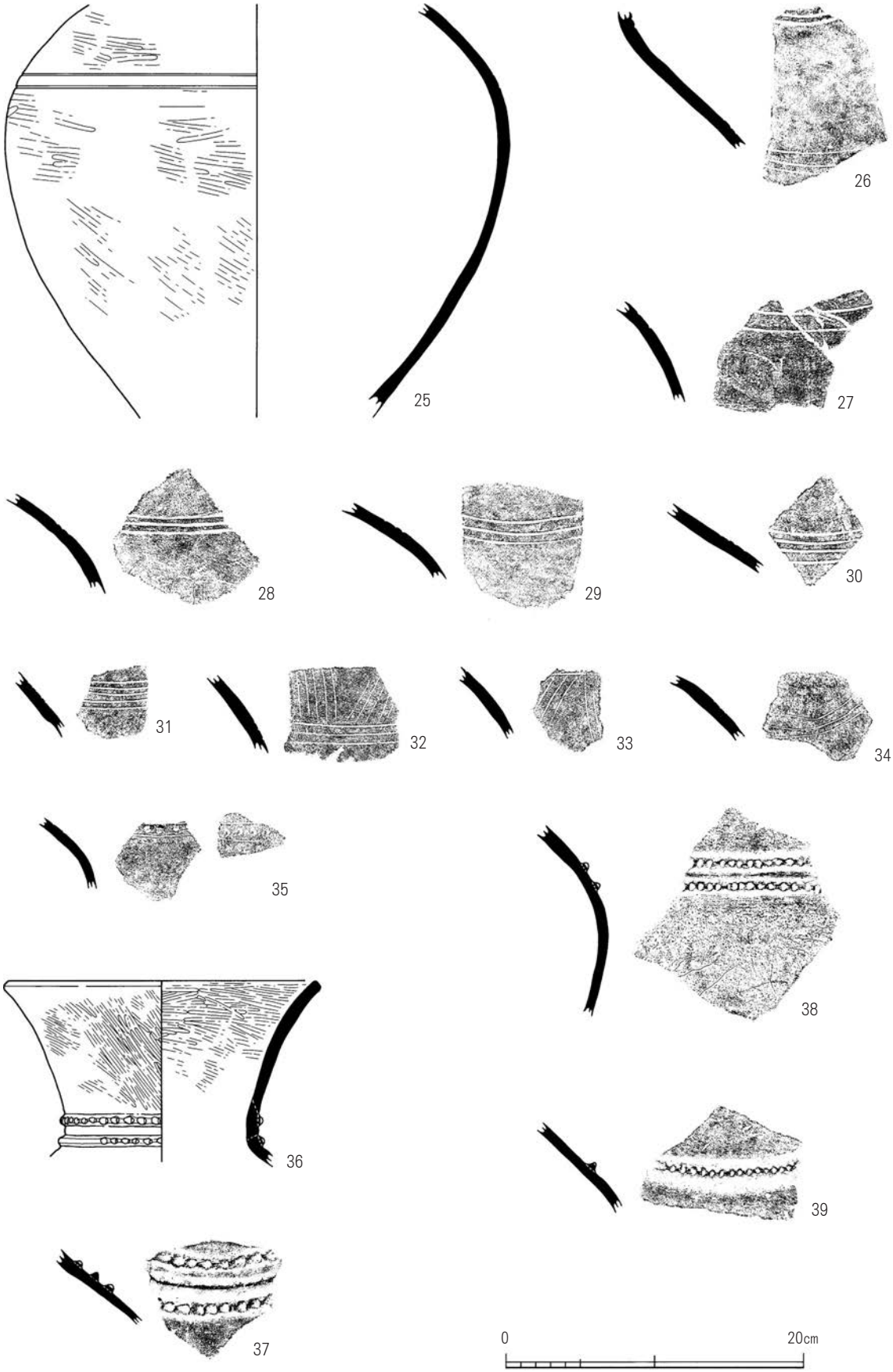
Ｓ２は、砂質シルト岩製の砥石である（第23図)。対をなす２面を使用（１次使用）後、これらの面に直交するよう分割し、その分割面を再利用（２次使用）している。１面は未使用である。全長6.3cmを測り、断面は3.72cm×1.58cmの長方形をなす。71.6ｇ。中層から出土していることから、奈良時代から平安時代にかけての資料と考えられる。



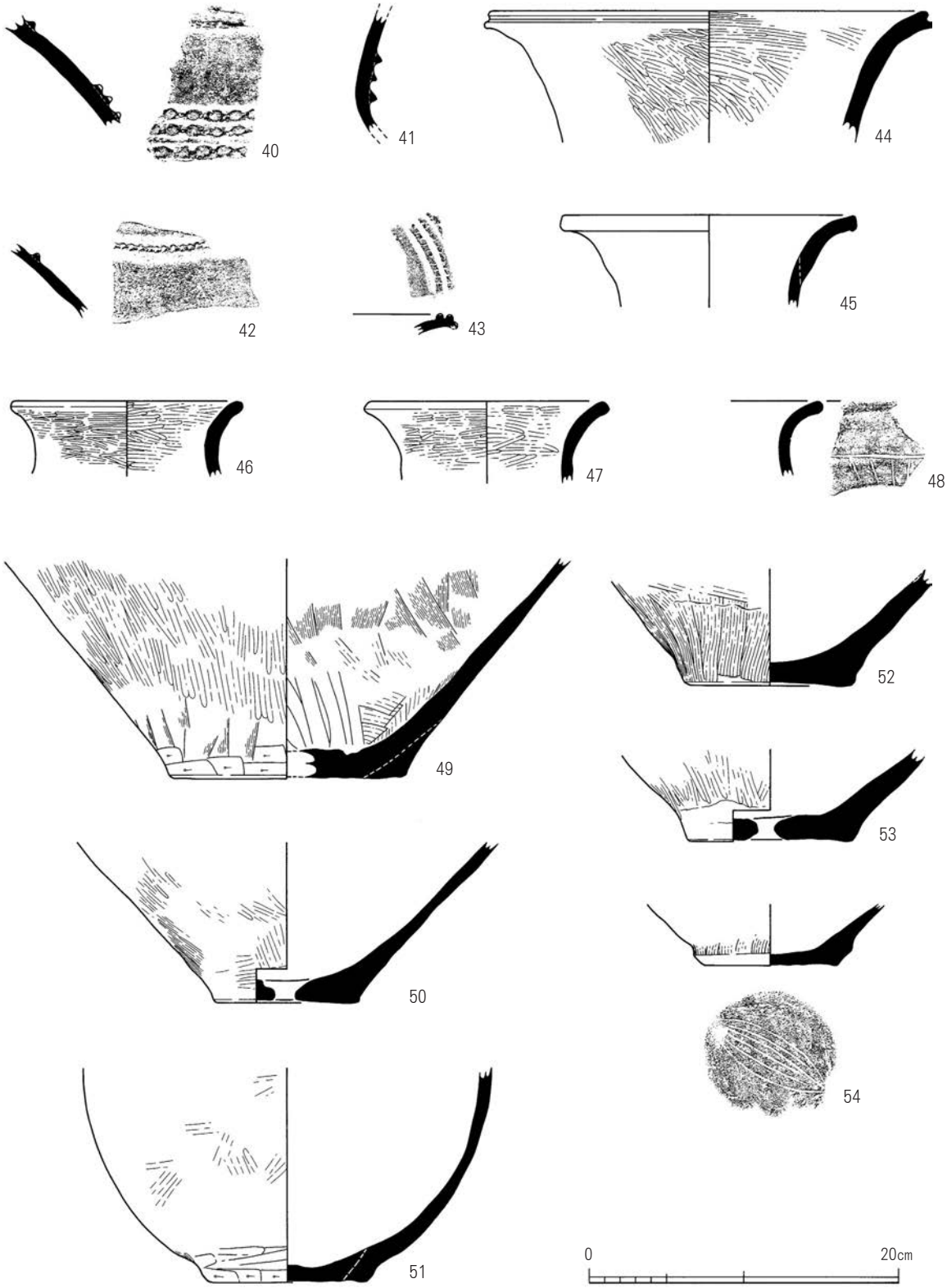
第23図　出土石器（２）



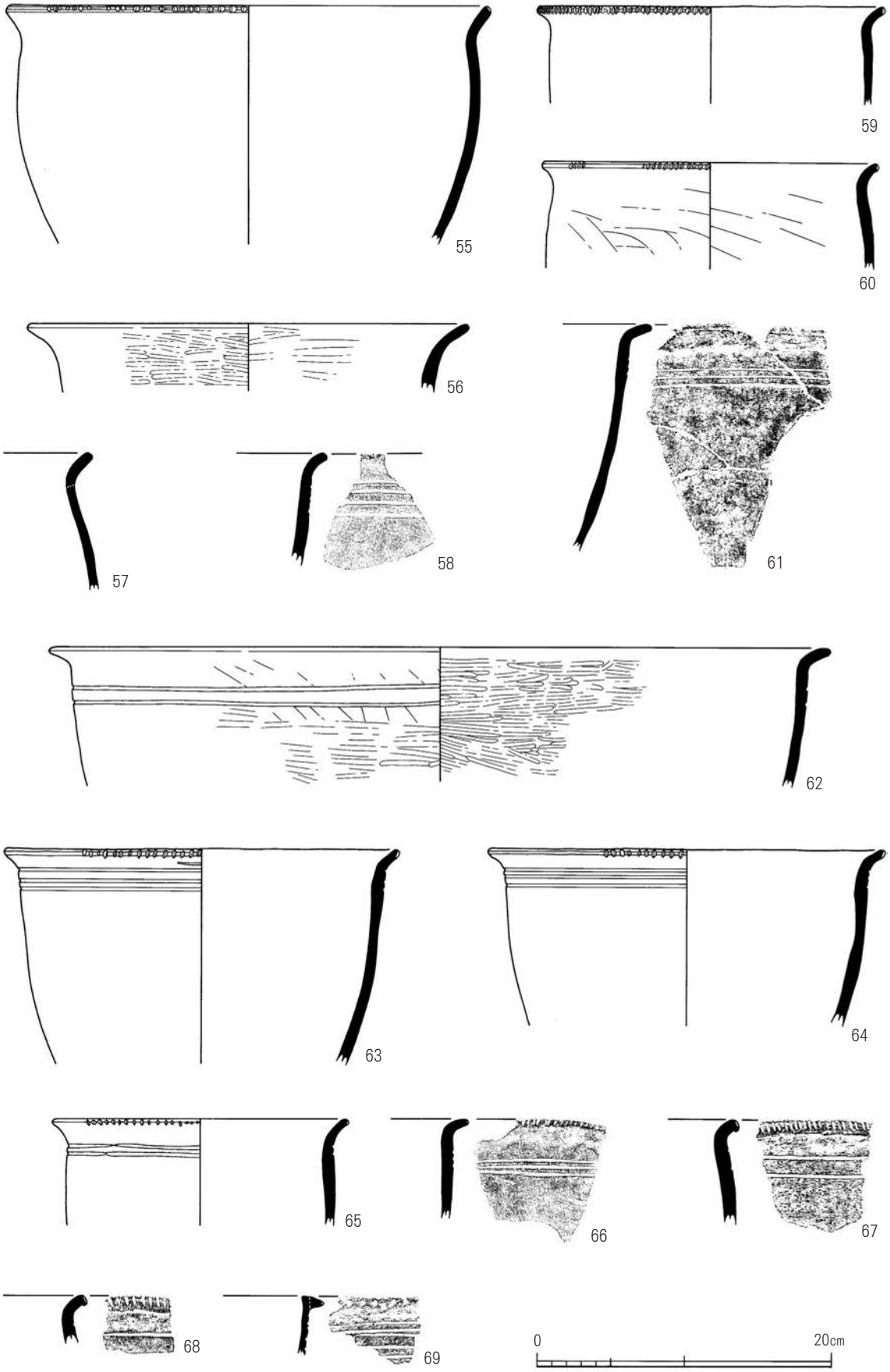
第24図　微凹地出土土器（１）



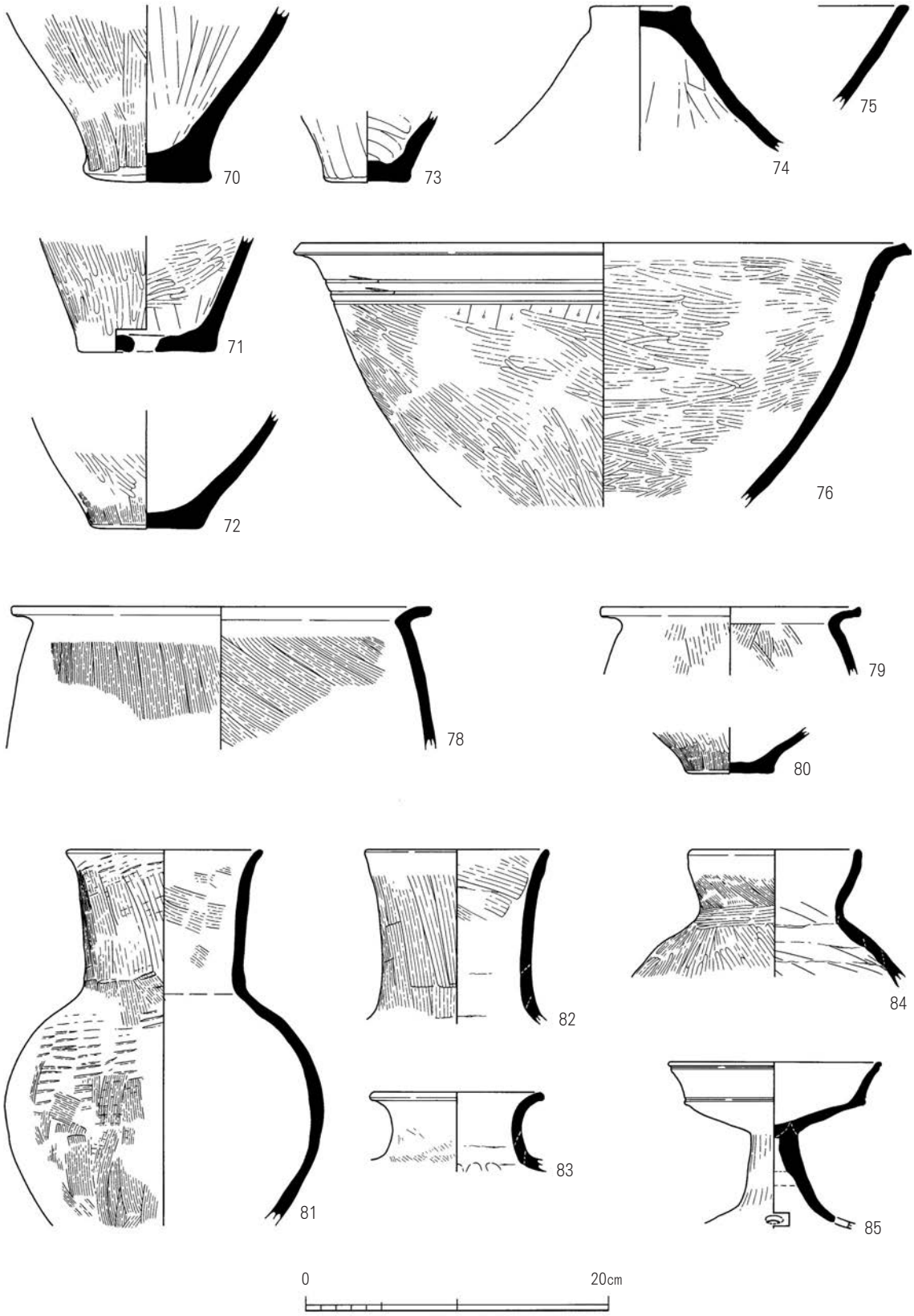
第25図　微凹地出土土器（２）



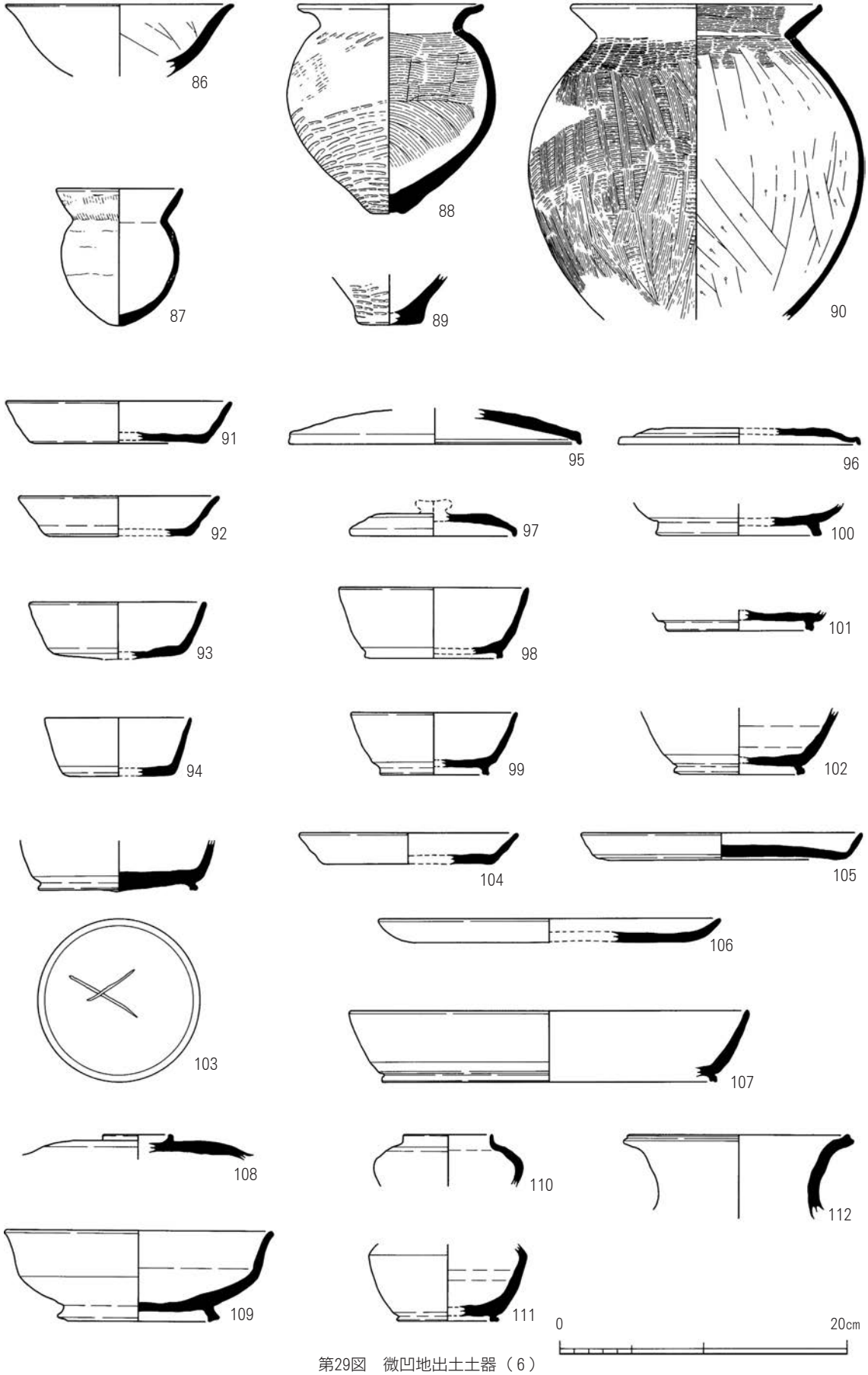
第26図　微凹地出土土器（３）



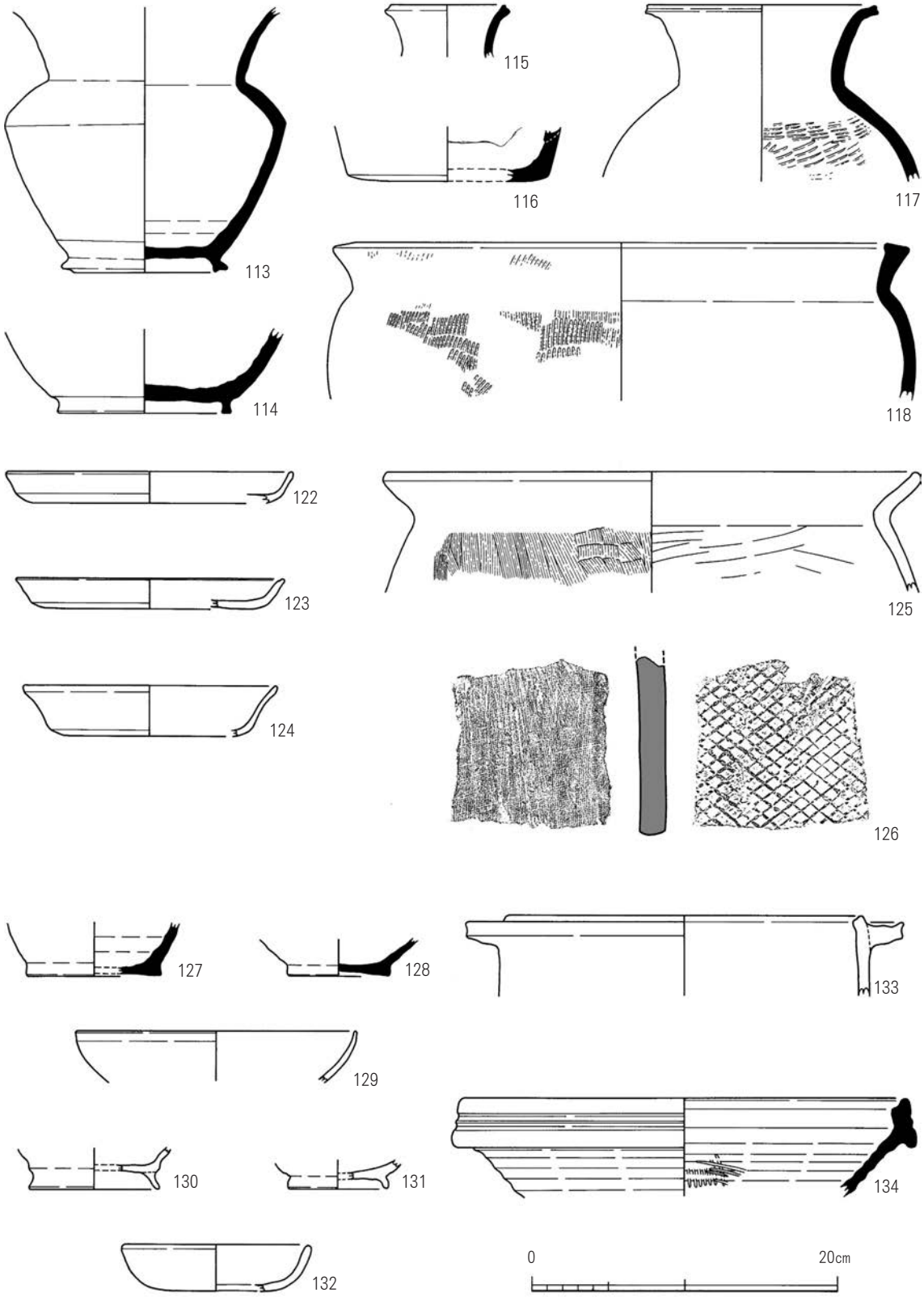
第27図　微凹地出土土器（４）



第28図　微凹地出土土器（５）



第29図　微凹地出土土器（６）



第30図　微凹地出土土器（７）

第１表　微凹地出土土器観察表（１）

No.	種別	器種	遺構名	時　期	法　量（cm）						残存状況	焼成	色　調
					口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
1	縄文	深鉢	微凹地	縄文時代後期					4.05		口縁部わずか		灰黄褐
2	縄文	深鉢	微凹地	縄文時代後期					4.80		口縁部わずか		灰黄褐
3	縄文	深鉢	微凹地	縄文時代後期					3.10		口縁部わずか		灰黄褐
4	縄文	深鉢	微凹地	縄文時代晩期					6.40		体部わずか		黄灰～にぶい黄褐
5	縄文	壺	微凹地	縄文時代晩期	18.80	19.40	23.00		5.00		口縁部1/10		にぶい黄橙～褐灰
6	縄文	浅鉢	微凹地	縄文時代晩期					6.00		口縁部わずか		にぶい黄橙～黒
7	縄文	深鉢	微凹地	縄文時代晩期					3.60		口縁部わずか		灰黄褐～褐灰
8	縄文	深鉢	微凹地	縄文時代晩期					6.20		口縁部わずか		灰黄褐～にぶい黄橙
9	縄文	深鉢	微凹地	縄文時代晩期					7.50		口縁部わずか		黄灰
10	縄文	深鉢	微凹地	縄文時代晩期					5.80		口縁部わずか		灰黄褐
11	縄文	深鉢	微凹地	縄文時代晩期					3.10		口縁部わずか		黒～灰黄褐
12	縄文	鉢	微凹地	縄文時代晩期				5.20	1.60		底部完存		灰黄～黄灰
13	縄文	鉢	微凹地	縄文時代晩期				6.15	1.50		底部完存		灰黄褐
14	縄文	鉢	微凹地	縄文時代晩期				6.20	7.10		底部完存		灰黄褐～にぶい黄橙
15	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期	9.00	7.60	11.60		12.60		口縁部1/8・体部1/7		暗灰黄～灰黄褐
16	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期			13.20		6.90		体部1/4		灰黄褐～にぶい黄橙
17	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期	13.90	12.40			5.30		口縁部1/4		黄灰～黒
18	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					6.00		口頸部小片		にぶい橙～灰黄褐
19	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期	16.00	13.60			6.10		口縁部1/4		灰黄～黄灰

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
0.5～２㎜大の石英・長石・雲母・チャート非常に多く含む	外面：磨り消し縄文。 内面：ナデ調整。		24	29
0.5～1.5㎜大の石英・長石・チャート・雲母含む	外面：口縁端部縄文。 内面：口縁端部沈線。	内外面とも磨滅顕著	24	29
１～1.5㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：ナデ調整→口縁端部縄文。 内面：ナデ調整→口縁端部縄文・沈線。		24	29
１～2.5㎜大の長石・チャート・石英・クサリ礫含む	外面：ナデ調整→沈線文。 内面：ナデ調整。	外面煤付着	24	29
１～４㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：ヘラミガキ→ヘラ描沈線。 内面：口縁部指オサエ・ナデ調整。体部ナデ調整。	紐穴径0.4㎝	24	29
0.5～1.5㎜大の長石・石英含む	外面：体部ヘラミガキ。口縁部横ナデ。 内面：体部ヘラミガキ。口縁部横ナデ。	内面黒色磨研	24	29
0.5～１㎜大の長石・雲母・石英多く含む	外面：ハケ調整→刺突文。 内面：ナデ調整。		24	29
0.5～１㎜大の長石・石英・クサリ礫含む	外面：条痕。 内面：条痕。		24	29
１～3.5㎜大の長石・チャート多く含む		内外面とも磨滅のため調整の観察不可	24	30
１～２㎜大・５～６㎜大の石英・チャート・長石・雲母含む	外面：体部ナデ調整→口縁部突帯貼付け→横ナデ。 内面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	外面煤付着	24	30
0.5～2.5㎜大の長石・石英含む	外面：ヘラミガキ→口縁部突帯貼付け→横ナデ調整。 内面：指オサエ・ナデ調整。		24	30
１～4.5㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：底部ナデ調整。 内面：ナデ調整。	体部外面磨滅	24	－
0.5～１㎜大の長石・チャート・石英非常に多く含む		内外面とも磨滅のため、調整の観察不可	24	－
1～３㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：ナデ調整。 内面：底部ユビナデ調整。体部板ナデ調整。		24	－
１～２㎜大の石英・長石・チャートやや多く含む	外面：体部ヘラミガキ→ヘラ描沈線。口縁部ハケ調整→ナデ。 内面：体部ユビオサエ・ユビナデ。口縁部ナデ調整。		24	30
１～2.5㎜大の石英・長石・チャート・雲母含む	外面：ヘラミガキ。 内面：ユビオサエ・ナデ調整→頸部板ナデ調整。		24	30
１～３㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：頸部～体部ヘラミガキ。口縁部横ナデ調整。 内面：頸部～体部ナデ調整。口縁部ヘラミガキ。		24	30
１～４㎜大の石英・長石・クサリ礫やや多く含む	外面：ヘラミガキ。 内面：頸部ナデ調整。口縁部ヘラミガキ。		24	31
１～2.5㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：頸部削りだし突帯→ヘラ描沈線。口縁部・体部ヘラミガキ。 内面：体部～頸部ナデ調整。口縁部ヘラミガキ。		24	31

第２表　微凹地出土土器観察表（２）

No.	種別	器種	遺構名	時　期	法　量（cm）						残存状況	焼成	色　調
					口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
20	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期		17.20			11.30		頸部1/4		灰白～にぶい黄橙
21	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期		11.60			6.80		頸部1/3		灰黄褐～にぶい黄橙
22	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					4.90		体部わずか		にぶい黄橙～灰黄褐
23	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期			10.90	6.15	8.80		底部完存・体部1/2弱		灰黄～灰白
24	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期				5.75	6.20		底部完存		灰黄
25	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期			34.00		27.60		体部1/5		浅黄橙～淡橙
26	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					9.10		体部わずか		灰黄褐～灰黄
27	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					6.70		体部わずか		灰黄褐～黄灰
28	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					6.70		体部小片		灰黄
29	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					5.05		体部小片		にぶい黄橙～灰黄褐
30	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					4.50		体部わずか		灰黄～暗灰黄
31	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					4.35		体部小片		灰白
32	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					5.20		体部小片		にぶい黄橙～灰黄褐
33	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					4.80		体部わずか		灰白～灰黄
34	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					4.30		体部わずか		灰黄褐～黒褐
35	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					4.70		体部わずか		灰黄褐～にぶい黄橙
36	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期	20.60	13.10			12.50		口頸部1/4		灰黄
37	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					5.00		体部わずか		にぶい黄褐～灰黄褐
38	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					12.80		体部わずか		灰白

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
１～３㎜大のチャート・長石・石英・クサリ礫多く含む	外面：頸部削り出し突帯→ヘラ描沈線→体部・口縁部ヘラ描沈線→ヘラミガキ。 内面：体部ナデ調整。口縁部ヘラミガキ。		24	31
１～２㎜大のチャート・長石・石英・クサリ礫やや多く含む	外面：削りだし突帯→ヘラ描沈線。頸部ヘラミガキ。 内面：頸部以下ナデ調整。口縁部ヘラミガキ。		24	31
１～２㎜大の長石・チャート・石英・クサリ礫やや多く含む	外面：ヘラミガキ（タテ方向）→ヘラ描沈線。 内面：ナデ調整（ヨコ方向）・ユビナデ。		24	31
１～３㎜大のチャート・長石・石英やや多く含む	外面：底部ナデ調整。底部～体部指オサエ。体部ヘラミガキ→ヘラ描沈線。 内面：底部～体部下半指オサエ・ナデ調整。体部上半ナデ調整。		24	32
１～３㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：底部ナデ・指オサエ。体部ヘラミガキ。 内面：ユビナデ(螺旋状)。		24	－
１～３㎜大のチャート・長石・石英・クサリ礫含む	外面：ヘラミガキ・ヘラ描沈線。 内面：ナデ調整。		25	32
１～３㎜大のチャート・長石・雲母多く含む	外面：体部中位ナデ調整。体部上半ヘラミガキ→ヘラ描沈線。 内面：ナデ調整。		25	31
１～2.5㎜大の長石・チャート・石英・雲母含む	外面：ヘラミガキ（ヨコ方向）→ヘラ描沈線。 内面：指オサエ・ナデ調整。		25	31
１～２㎜大の石英・長石・チャートやや多く含む	外面：ヘラミガキ（ヨコ方向）→ヘラ描沈線。 内面：ナデ調整。		25	32
１～３㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：ヘラミガキ（ヨコ方向）→ナデ・ヘラ描沈線。 内面：ナデ調整。		25	32
１～４㎜大のチャート・長石・石英・雲母多く含む	外面：ヘラミガキ（ヨコ方向）→ヘラ描沈線。 内面：ナデ調整。		25	31
0.5～２㎜大のチャート・長石・雲母・石英含む	外面：ヘラミガキ→ヘラ描沈線。 内面：ナデ調整・ユビオサエ。		25	32
１～２㎜大の石英・長石やや多く含む	外面：ヘラミガキ→ヘラ描沈線。	内面磨滅	25	32
0.5～2.5㎜大の長石・石英含む	外面：ナデ調整→ヘラ描沈線。 内面：ナデ調整。		25	33
１～3㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：ヘラミガキ→ヘラ描沈線。 内面：ヘラナデ調整。		25	33
0.5～３㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：ヘラミガキ→ヘラ描沈線・竹管文。 内面：ナデ調整。		25	33
0.5～３㎜大の石英・長石・チャート・雲母・クサリ礫含む	外面：頸部ヨコナデ→突帯貼付け→キザミ目。口縁部ヘラミガキ。 内面：頸部ナデ調整。口縁部ヘラミガキ。		25	33
１～2.5㎜大の石英・長石・チャート・雲母やや多く含む	外面：ナデ調整→ヨコナデにより突帯貼付け。 内面：指オサエ・ナデ調整。		25	34
１～3.5㎜大のチャート・長石・石英・雲母多く含む	外面：ヘラミガキ（上半横方向・下半縦方向）→突帯貼付け→横ナデ調整。 内面：板ナデ調整・指オサエ。		25	34

第３表　微凹地出土土器観察表（３）

No.	種別	器種	遺構名	時　期	法　量（cm）						残存状況	焼成	色　調
					口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
39	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					6.00		体部わずか		にぶい黄橙
40	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					7.10		体部わずか		灰黄褐～にぶい橙
41	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					7.90		頸部わずか		灰白～黄灰
42	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					4.70		体部わずか		にぶい橙～にぶい黄橙
43	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					1.30		口縁部わずか		黒褐
44	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期	28.00				8.50		口縁部1/4		灰白～にぶい黄
45	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期	18.60				5.90		口縁部1/4弱		にぶい黄橙～浅黄橙
46	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期	14.10	11.80			4.90		口縁部1/4		黒褐～黄灰
47	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期	14.80	11.00			5.30		口縁部1/7		黒～灰黄褐
48	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期					4.80		口縁部わずか		灰黄褐
49	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期				15.30	14.10		底部2/5		褐灰
50	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期				9.50	10.35		底部完存		灰黄
51	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期			26.40	10.20	13.80		底部1/2・体部1/5		灰黄褐～にぶい橙
52	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期				11.00	7.50		底部完存		褐灰～灰白
53	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期				10.70	6.00		底部完存		灰黄褐～黄灰
54	弥生	壺	微凹地	弥生時代前期				10.20	3.95		底部完存		灰黄褐～灰黄
55	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期	32.40	30.80	31.20		16.20		口縁部1/5		灰黄褐
56	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期	29.60	26.50			4.65		口縁部1/8		浅黄橙～灰白
57	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期					9.30		口縁部わずか		にぶい黄橙～灰黄褐

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
0.5～2.5㎜大のチャート・長石・石英やや多く含む	外面：ヘラミガキ→キザミ目突帯ヨコナデにより貼付け。 内面：指オサエ・ナデ調整。		25	34
１～２㎜大の長石・チャート・クサリ礫多く含む	外面：ヘラナデ→横ナデにより突帯貼付け。 内面：指オサエ・ナデ調整。		26	34
１～３㎜大のチャート・長石・石英・クサリ礫多く含む	外面：突帯貼付け→横ナデ調整。 内面：ナデ調整。		26	33
0.5～2.5㎜大のチャート・長石・石英・雲母含む	外面：ナデ調整→横ナデ調整により突帯貼付け。 内面：ナデ調整。		26	34
0.5～１㎜大の長石・石英含む	外面：ナデ調整→キザミ目。 内面：ナデ調整。		26	33
１～４㎜大の石英・長石・チャート・クサリ礫多く含む	外面：口縁部指オサエ→頸部～口縁部ヘラミガキ→端部凹線。 内面：ヘラミガキ。		26	33
１～６㎜大のチャート・長石・石英・クサリ礫非常に多く含む	外面：頸部指オサエ→ナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：頸部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		26	－
１～４㎜大の長石・石英・チャート多く含む	外面：ヘラミガキ。 内面：ヘラミガキ。	外面黒色磨研	26	－
１～3.5㎜大のチャート・長石・石英・クサリ礫含む	外面：口縁部ヘラミガキ。口縁端部横ナデ調整。 内面：口頸部ヘラミガキ。	21と同一個体の可能性有	26	－
0.5～２㎜大の長石・石英・チャート・クサリ礫含む	外面：ヨコナデ調整→ヘラ描沈線。 内面：ヘラミガキ（ヨコ方向）。		26	34
１～５㎜大の長石・石英・チャート非常に多く含む	外面：底部ヘラ削り。体部ハケ調整→下位ヘラ削り→ナデ・中位ヘラミガキ。 内面：ハケ調整→ヘラナデ。		26	－
１～2.5㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：底部ヘラナデ調整。体部ヘラミガキ。 内面：底部指オサエ・ナデ調整→体部ナデ調整。	底部中央部に焼成後穿孔（径1.3㎝）	26	－
１～3.5㎜大のチャート・長石・クサリ礫やや多く含む	外面：底部ナデ調整。体部下端ヘラ削り。体部ヘラミガキ。 内面：ナデ調整。体部中位ユビオサエ。		26	－
１～３㎜大のチャート・長石・雲母・石英非常に多く含む	外面：底部ヘラナデ。体部ハケ調整→ヘラミガキ。 内面：指オサエ・ナデ調整。	外面被熱	26	34
１～３㎜大のチャート・長石・石英非常に多く含む	外面：底部ユビオサエ。体部下半ナデ調整。体部ヘラミガキ。 内面：底部ユビナデ。体部ナデ調整。	底部中央部に焼成後穿孔（径1.1㎝）	26	34
１～2.5㎜大のチャート・石英・長石非常に多く含む	外面：底部ナデ→ヘラ描沈線。体部ハケ調整→ヘラナデ調整。 内面：底部ユビナデ→体部ナデ調整。	底部木葉文	26	34
0.5～２㎜大の石英・チャート・長石含む	外面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。端部キザミ目。 内面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	外面煤多量に付着	27	35
１～３㎜大のチャート・石英・長石・クサリ礫非常に多く含む	外面：ヘラミガキ（ヨコ方向）。 内面：ヘラミガキ（ヨコ方向）。		27	－
１～３㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整→端部キザミ目。 内面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	外面煤多量に付着	27	－

第４表　微凹地出土土器観察表（４）

No.	種別	器種	遺構名	時期	法量（cm）						残存状況	焼成	色調
					口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
58	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期					7.60		口縁部わずか		灰白～黄灰
59	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期	23.20	21.80			6.60		口縁部1/4		灰黄褐～にぶい黄橙
60	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期	22.40	21.40			7.20		口縁部1/8		灰黄褐～黒褐
61	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期					15.40		口縁部～体部わずか		にぶい黄橙～灰黄褐
62	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期	51.80	50.00			9.40		口縁部1/8		灰黄～灰白
63	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期	26.50				14.60		口縁部1/8		灰黄褐～にぶい橙
64	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期	26.50	24.70			12.00		口縁部1/8		褐灰～にぶい橙
65	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期	19.70	18.20			7.20		口縁部1/7～頸部1/4		灰黄褐～黒褐
66	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期					6.70		口縁部わずか		浅黄橙～淡赤橙
67	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期					7.10		口縁部わずか		灰黄～黒
68	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期					3.30		口縁部わずか		灰黄～黄灰
69	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期					4.05		口縁部わずか		灰黄～暗灰黄
70	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期				8.40	11.60		底部完存		灰黄褐～灰褐
71	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期				9.30	7.65		底部完存		にぶい黄橙～褐灰
72	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期				7.50	7.80		底部完存		灰白～暗灰黄
73	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期				5.80	4.70		底部完存		灰黄褐～褐灰
74	弥生	甕蓋	微凹地	弥生時代前期					9.60		天井部完存		橙～褐灰
75	弥生	鉢	微凹地	弥生時代前期					6.90		口縁部わずか		にぶい橙～淡赤褐
76	弥生	鉢	微凹地	弥生時代前期	39.90				17.40		口縁部1/4		にぶい黄橙～灰黄褐

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
１～３㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：ナデ調整→ヘラ描沈線（３条）→口縁部横ナデ調整。 内面：ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		27	35
１～３㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部ナデ調整。口縁部横ナデ調整→端部キザミ目。 内面：体部ナデ調整。口縁部横ナデ調整。	体部外面煤付着	27	35
１～2.5㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：体部板ナデ→口縁部横ナデ調整→端部キザミ目。 内面：体部板ナデ・ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	体部外面煤付着	27	35
１～３㎜大のチャート・長石・石英・クサリ礫やや多く含む	外面：体部～頸部ヘラミガキ→頸部ヘラ描沈線（３条）。口縁部横ナデ調整。 内面：体部指オサエ・ナデ調整。口縁部横ナデ調整。		27	35
0.5～２㎜大の石英・チャート・長石含む	外面：頸部板ナデ→体部ヘラミガキ→ヘラ描沈線（２条）。口縁部板ナデ→横ナデ。 内面：体部～頸部ヘラミガキ（ヨコ方向）。口縁部横ナデ調整。	内面黒色研磨？	27	35
0.5～３㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：体部ナデ調整→頸部ヘラ描沈線。口縁部ユビオサエ→横ナデ→端部キザミ目。 内面：体部指オサエ・ナデ調整。口縁部ユビオサエ→横ナデ。	体部～頸部外面煤付着。	27	35
0.5～２㎜大の石英・長石・チャートやや多く含む	外面：体部ナデ調整→頸部ヘラ描沈線（３条）。口縁部指オサエ→横ナデ調整→端部キザミ目。 内面：体部指オサエ・ナデ調整。口縁部指オサエ→横ナデ調整。		27	36
１～４㎜大の長石・石英・チャート・雲母多く含む	外面：体部ナデ調整→ヘラ描沈線（２条）。口縁部横ナデ調整→端部キザミ。 内面：体部ナデ調整。口縁部横ナデ調整。	体部～頸部外面煤付着	27	36
１～４㎜大のチャート・長石・石英・クサリ礫含む	外面：体部ナデ調整→ヘラ描沈線（３条）。口縁部横ナデ調整→端部キザミ目。 内面：体部板ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		27	36
１～３㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：体部ヘラミガキ→ヘラ描沈線（２条）。口縁部指オサエ→横ナデ調整→端部キザミ目。 内面：体部ナデ調整→口縁部指オサエ→横ナデ調整。		27	36
0.5～2.5㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：頸部ナデ調整→ヘラ描沈線（１条）。口縁部指オサエ→横ナデ調整→端部キザミ目。 内面：頸部ナデ調整。口縁部指オサエ→横ナデ調整。		27	36
１～３㎜大のチャート・石英・長石多く含む	外面：体部ヘラ描沈線（５条）。口縁部横ナデ調整→端部キザミ目。 内面：体部～口縁部指オサエ→ナデ調整。	体部外面煤付着	27	36
１～３㎜大のチャート・長石多く含む	外面：体部ハケ調整。 内面：底部未調整。体部ヘラナデ調整。	外面煤付着。外面被熱	28	－
１～３㎜大のチャート・石英・雲母やや多く含む	外面：ヘラミガキ。 内面：ヘラミガキ。	底部中央焼成前穿孔（径1.5㎝）	28	36
１～3.5㎜大のチャート・長石・石英・クサリ礫多く含む	外面：底部ナデ調整。ハケ調整→ヘラミガキ。 内面：底部指オサエ・ナデ調整。体部板ナデ調整。	外面煤付着	28	－
１～２㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：底部ナデ調整。体部ヘラナデ調整。 内面：ナデ調整。		28	－
１～2.5㎜大の石英・長石・チャートやや多く含む	外面：天井部指オサエ→ナデ調整。体部ナデ調整。 内面：天井部ナデ調整。体部ナデ調整。	外面煤付着。 天井部径6.0㎝	28	－
１～2.5㎜大の石英・長石・チャート・クサリ礫多く含む	外面：ヘラミガキ。 内面：ヘラミガキ。		28	－
１～2.5㎜大の長石・石英・チャート多く含む	外面：体部ヘラ削り→ヘラミガキ。口縁部横ナデ調整。 内面：体部～口縁部ヘラミガキ。	内面黒色研磨？	28	37

第５表　微凹地出土土器観察表（５）

No.	種別	器種	遺構名	時　期	法　量（cm）						残存状況	焼成	色　調
					口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
77	弥生	甕	微凹地	弥生時代前期							体部わずか		灰黄褐～褐灰
78	弥生	甕	微凹地	弥生時代中期	27.50	24.90			9.40		口縁部1/5		にぶい黄橙～褐灰
79	弥生	甕	微凹地	弥生時代中期	16.90	14.40			4.50		口縁部1/8		灰白～にぶい橙
80	弥生	壺	微凹地	弥生時代中期				5.90	3.00		底部完存		灰黄～黄灰
81	弥生	壺	微凹地	弥生時代後期	12.30	10.40	21.00		24.80		口頸部1/4		にぶい黄橙～褐灰
82	弥生	壺	微凹地	弥生時代後期	12.00	9.90			11.50		口頸部1/2		灰黄褐～にぶい黄橙
83	弥生	壺	微凹地	弥生時代後期	11.00	8.50			5.20		口縁部2/3		にぶい黄橙～灰黄褐
84	弥生	壺	微凹地	弥生時代後期	11.00	9.40			8.40		口頸部完存		にぶい黄橙～灰白
85	弥生	高坏	微凹地	弥生時代後期	13.70				10.90		口縁部1/9・脚柱部完存		にぶい黄橙～浅黄橙
86	弥生	高坏	微凹地	弥生時代後期	15.50				5.00		口縁部1/5		にぶい黄橙～にぶい黄褐
87	弥生	甕	微凹地	弥生時代後期	8.70	6.60	8.20	1.00	9.50		口縁部2/5・底部完存		灰黄
88	弥生	甕	微凹地	弥生時代後期	12.70	9.85	14.45	2.50	14.50		口縁部1/4・体部～底部完存		灰黄褐～灰黄
89	弥生	甕	微凹地	弥生時代後期				4.40	3.50		底部1/2		灰白～灰黄
90	弥生	甕	微凹地	弥生時代後期	17.20	14.00	23.40		21.90		口縁部1/7・体部1/3		灰黄褐～褐灰
91	須恵器	杯Ａ	微凹地	奈良時代	15.50			12.30	2.90		口縁部わずか・底部1/6	良好	灰
92	須恵器	杯Ａ	微凹地	奈良時代	13.70			10.20	2.80		口縁部1/6・底部1/4	良好	灰～灰白
93	須恵器	杯Ａ	微凹地	奈良時代	11.90			8.80	3.95		1/4	良好	灰
94	須恵器	杯Ａ	微凹地	奈良時代	10.10			7.80	4.05		口縁部わずか・底部1/3	良好	灰～灰白
95	須恵器	杯Ｂ蓋	微凹地	奈良時代	20.10				2.40		口縁部1/4弱	良好	灰～黄灰

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
0.5～２㎜大の石英・長石・母・チャート含む	外面：ナデ調整→ヘラ描沈線。 内面：ナデ調整。		－	37
１～２㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。		28	37
0.5～1.5㎜大の石英・長石・チャート・クサリ礫含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。		28	－
１～2.5㎜大の長石・石英・クサリ礫含む	外面：底部ハケ調整。体部ハケ調整→ヘラミガキ。 内面：ナデ調整。		28	－
１～４㎜大の長石・石英・クサリ礫含む	外面：体部～口縁部叩き整形→ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ナデ調整→口頸部ハケ調整・ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		28	37
0.5～４㎜大の長石・チャート・石英・クサリ礫含む	外面：頸部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：頸部ナデ調整→口縁部ハケ調整→横ナデ調整。		28	37
１～５㎜大の石英・長石・クサリ礫含む	外面：頸部ハケ調整→口頸部横ナデ調整。 内面：体部ユビナデ。口頸部横ナデ調整。		28	37
１～３㎜大のチャート・クサリ礫・石英・長石含む	外面：体部～口縁部ハケ調整→体部ヘラミガキ・口縁部横ナデ調整。 内面：体部ヘラミナデ調整。口縁部横ナデ調整。		28	38
１～３㎜大のチャート・長石・クサリ礫・石英やや多く含む	外面：脚部ヘラミガキ？・体部ナデ調整。口縁部横ナデ調整。 内面：口縁部横ナデ調整。	脚部に透かし（径1.2㎝）。脚高6.2㎝。	28	38
0.5～２㎜大の長石・石英・クサリ礫・チャート含む	外面：杯部ヘラ削り→ナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：杯部板ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		29	－
0.5～1.5㎜大の長石・チャート・雲母含む	外面：体部ナデ調整・口縁部ハケ調整。 内面：体部～口縁部ナデ調整。		29	38
１～３㎜大の石英・長石・クサリ礫・チャート含む	外面：体部叩き整形→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。	体部～頸部外面煤付着。	29	38
１～３㎜大の長石・チャートやや多く含む	外面：体部叩き整形・底部ナデ調整。 内面：ヘラナデ調整。		29	－
１～２㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：体部叩き整形→ハケ調整。口縁部横ナデ調整。 内面：体部ヘラ削り→上半ハケ調整。口縁部横ナデ調整。	体部下半煤付着。在地産。	29	38
	外面：底部回転ヘラ削り→ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		29	－
	外面：底部ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。 内面：底部～口縁部回転ナデ調整。	外面に火襷痕あり。	29	－
	外面：底部ヘラ切り→ナデ調整。体部下半回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		29	39
	外面：底部回転ヘラ削り→ナデ調整。体部～口縁部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整・口縁部回転ナデ調整。		29	39
	外面：天井部回転ヘラ削り→ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。 内面：天井部ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。	内面墨？付着。	29	－

第６表　微凹地出土土器観察表（６）

No.	種別	器種	遺構名	時　期	法　量（cm）						残存状況	焼成	色　調
					口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
96	須恵器	杯Ｂ蓋	微凹地	奈良時代	16.80				1.10		口縁部1/9・天井部1/6	良好	灰～灰白
97	須恵器	杯Ｂ蓋	微凹地	奈良時代	11.25				1.60		口縁部1/4・天井部1/3	やや不良	灰
98	須恵器	杯Ｂ	微凹地	奈良時代	13.00			9.60	4.90	0.40	口縁部1/8・底部わずか	不良	灰白
99	須恵器	杯Ｂ	微凹地	奈良時代	11.40			7.60	4.30	0.50	口縁部わずか・底部1/5	やや不良	灰白
100	須恵器	杯Ｂ	微凹地	奈良時代				11.50	2.30	0.75	底部1/2弱	良好	灰
101	須恵器	杯Ｂ	微凹地	奈良時代				10.20	1.50	0.70	底部1/4	良好	灰白
102	須恵器	杯Ｂ	微凹地	奈良時代				9.10	4.65	0.55	底部1/2弱	良好	灰～灰白
103	須恵器	杯Ｂ	微凹地	奈良時代				11.10	3.60	0.40	底部完存	良好	灰
104	須恵器	皿Ａ	微凹地	奈良時代	15.00			11.70	2.15		口縁部1/6	良好	灰白
105	須恵器	皿Ａ	微凹地	奈良時代	19.40			17.30	1.90		口縁部1/7・底部3/4	良好	灰
106	須恵器	皿Ａ	微凹地	奈良時代	23.50			19.00	1.65		口縁部わずか・底部1/7	良好	灰
107	須恵器	皿Ｂ	微凹地	奈良時代	27.50			23.25	4.95	0.45	口縁部1/12・底部1/14	良好	灰
108	須恵器	稜椀蓋	微凹地	奈良時代					1.75		つまみ～体部1/3	良好	灰
109	須恵器	稜椀	微凹地	奈良時代	18.40			11.20	6.30	0.85	口縁部1/3・底部1/2弱	良好	灰～灰白
110	須恵器	壺Ｃ	微凹地	奈良時代	6.10	6.30	10.40		3.60		口縁部1/10・体部1/7	良好	灰
111	須恵器	壺Ｋ	微凹地	奈良時代			11.00	7.10	5.40	0.40	底部1/3・体部1/6	良好	灰～灰白
112	須恵器	壺	微凹地	奈良時代	15.20	11.10			5.80		口縁部1/10	良好	灰
113	須恵器	壺Ｑ	微凹地	奈良時代		12.90	18.30	10.80	17.30	1.00	頸部1/2・体部3/4・底部ほぼ完存	良好	灰
114	須恵器	壺Ｋ	微凹地	奈良時代				11.40	5.60	0.80	底部1/5	良好	灰

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
	外面：天井部回転ヘラ削り。口縁部回転ナデ調整。 内面：天井部回転ナデ調整→ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。		29	－
	外面：天井部回転ヘラ削り→ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。 内面：天井部～口縁部回転ナデ調整。		29	－
	外面：底部ナデ調整。体部～口縁部回転ナデ調整。 内面：底部～口縁部回転ナデ調整。		29	－
	外面：底部～口縁部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整。体部～口縁部回転ナデ調整。		29	－
	外面：底部ナデ調整・体部回転ナデ調整→高台回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	内面・高台外面に墨付着。	29	－
	外面：底部ナデ調整→高台回転ナデ調整。体部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→体部回転ナデ調整。	底部外面爪圧痕あり。底部外面墨書あり。	29	39
	外面：底部ナデ→高台回転ナデ調整。体部下半ヘラ削り→回転ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	内面全面・底部外面墨付着。	29	－
	外面：底部回転ヘラ削り・体部回転ナデ調整→高台回転ナデ調整 内面：底部ナデ調整→体部回転ナデ調整。	底部外面ヘラ記号あり。	29	－
	外面：底部ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。 内面：底部～口縁部回転ナデ調整。		29	－
	外面：底部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ調整。 内面：底部～口縁部回転ナデ調整。		29	39
	外面：底部回転ヘラ削り→回転ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。 内面：底部～口縁部回転ナデ調整。		29	－
	外面：体部下半回転ヘラ削り→底部～口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		29	－
	外面：つまみ内ナデ調整。つまみ回転ナデ調整。天井部回転ヘラ削り→回転ナデ調整。 内面：天井部回転ナデ調整→ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。	つまみ径4.9㎝・つまみ高5㎜。	29	－
	外面：底部ナデ調整・回転ヘラ削り→回転ナデ調整。高台回転ナデ調整。体部回転ヘラ削り→回転ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。 内面：底部～体部回転ナデ調整→ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。		29	39
	外面：体部回転ヘラ削り→回転ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		29	－
	外面：底部ナデ調整。高台回転ナデ調整。体部下半回転ヘラ削り→回転ナデ調整。体部上半回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		29	－
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		29	－
	外面：体部下半回転ヘラ削り→高台～底部回転ナデ調整。頸部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	頸部外面自然釉付着。	30	39
	外面：底部指オサエ・ナデ調整・体部回転ヘラ削り→回転ナデ調整→高台貼付けに伴う回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		30	－

第７表　微凹地出土土器観察表（７）

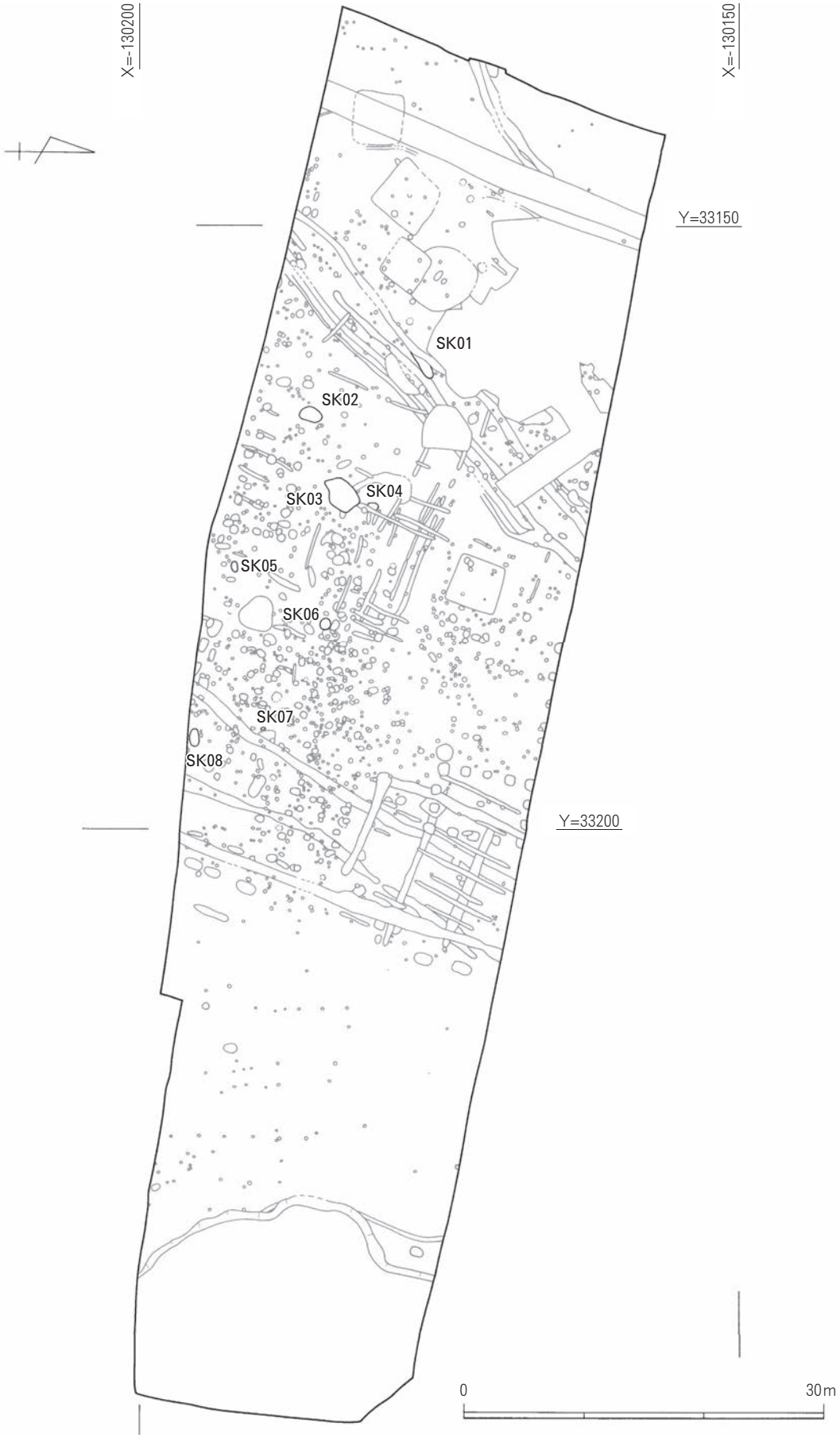
No.	種別	器種	遺構名	時　期	法　量（cm）						残存状況	焼成	色　調
					口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
115	須恵器	壺Ｌ	微凹地	奈良時代	7.45	5.85			3.45		口縁部1/4	良好	灰
116	須恵器	壺	微凹地	奈良時代				13.10	3.50		底部1/4弱	良好	灰
117	須恵器	甕Ａ	微凹地	奈良時代	14.75	10.85			11.50		口縁部わずか・頸部～体部1/6	良好	灰
118	須恵器	甕	微凹地	奈良時代	34.60	35.00	38.30		10.30		口頸部1/8	不良	灰白
119	須恵器	不明	微凹地	奈良時代							わずか	不良	灰白
120	須恵器	壺Ｄ	微凹地	奈良時代							把手完存	良好	灰白～灰
121	須恵器	壺Ｄ	微凹地	奈良時代							把手完存	良好	灰～灰白
122	土師器	皿Ａ	微凹地	奈良時代	18.60			15.20	2.00		口縁部1/12		橙～にぶい橙
123	土師器	皿Ａ	微凹地	奈良時代	17.40			13.70	2.00		口縁部1/9		にぶい黄橙
124	土師器	杯Ａ	微凹地	奈良時代	16.50			11.30	3.30		口縁部1/12		浅黄
125	土師器	甕	微凹地	奈良時代	34.70	31.00			7.90		口縁部1/5		暗灰黄～灰黄
126	瓦	平瓦	微凹地	奈良時代							1/4以下	不良	灰白
127	須恵器	椀	微凹地	平安時代				8.80	3.50	0.85	底部1/3	良好	灰
128	須恵器	椀	微凹地	平安時代				6.60	2.40	0.70	底部1/2	良好	灰白
129	土師器	椀	微凹地	平安時代	18.20				3.40		口縁部1/9		灰白～灰黄
130	土師器	椀	微凹地	平安時代				8.50	2.75	1.10	底部1/4		浅黄橙
131	土師器	椀	微凹地	平安時代				6.60	1.85	0.60	底部1/3		灰黄
132	土師器	杯Ａ	微凹地	平安時代	12.00			5.70	3.00		口縁部1/6		灰黄
133	土師器	羽釜	微凹地	平安時代	23.00		29.50		5.30		口縁部1/8		暗灰黄～浅黄

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	内面自然釉付着。	30	－
	外面：底部叩き→ナデ。体部回転ヘラ削り→回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	内面粘土紐痕顕著に残存。	30	－
	外面：体部回転ヘラ削り→回転ナデ調整→口頸部回転ナデ調整。 内面：体部同心円文→ナデ調整→口頸部回転ナデ調整。		30	－
0.5～1.5㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：体部～口縁部叩き整形→口縁部横ナデ調整。 内面：体部中位同心円文→体部ナデ調整→口縁部～頸部横ナデ調整。		30	39
	外面：ヘラ切り未調整。 内面：ナデ調整。	外面に墨書。	－	39
	外面：ヘラナデ調整。 内面：同心円文→ナデ調整。		－	40
	外面：ナデ調整。 内面：同心円文→ナデ調整。		－	40
0.5～１㎜大の長石・クサリ礫含む	外面：底部ヘラ削り→ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	暗文観察不可。	30	－
0.5～1.5㎜大の石英・長石含む	外面：底部回転ヘラ削り→ナデ→口縁部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。		30	－
0.5㎜以下の長石・雲母・クサリ礫含む	外面：底部ヘラ削り→ナデ→口縁部横ナデ調整。 内面：横ナデ調整。		30	－
0.5～１㎜大の長石・チャート・雲母含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部板ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		30	－
	外面：布目→ヘラナデ。 内面：斜格子叩き。	333ｇ	30	40
	外面：底部回転糸切り。体部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	底部内面に自然釉付着。	30	－
	外面：底部回転糸切り。体部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→体部回転ナデ調整。		30	－
0.5㎜以下の雲母・石英・クサリ礫含む	外面：口縁部横ナデ調整。 内面：ナデ調整。		30	－
0.5～１㎜大の石英・長石・チャート・クサリ礫含む	外面：底部ナデ調整→高台～体部回転ナデ調整。	内面磨滅のため調整観察不可。	30	－
0.5㎜以下の長石・石英含む	外面：底部ナデ調整→高台～体部回転ナデ調整。	内面磨滅のため調整観察不可。	30	－
0.5㎜以下の雲母・石英含む	外面：底部～体部指オサエ・ナデ調整。口縁部横ナデ。 内面：底部指オサエ・ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		30	－
0.5～1.5㎜大の長石・石英・チャート・クサリ礫含む	外面：体部粗いヘラナデ→鍔～口縁部横ナデ調整。 内面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	鍔下面に煤付着。	30	－

第８表　微凹地出土土器観察表（８）

No.	種別	器種	遺構名	時　期	法　量（cm）						残存状況	焼成	色　調
					口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
134	備前焼	擂鉢	微凹地	桃山時代	28.60				6.45		口縁部1/8	良好	赤褐
135	唐津焼	碗	微凹地	江戸時代初頭				4.00	2.40	0.25	底部1/4	良好	にぶい褐～灰
136	唐津焼	碗	微凹地	江戸時代初頭				4.00	3.25	0.20	底部1/3	良好	にぶい黄褐～灰
137	唐津焼	碗	微凹地	江戸時代初頭				6.10	3.15	0.40	底部1/2	良好	にぶい赤褐～灰
138	唐津焼	碗	微凹地	江戸時代初頭				3.90	2.10	0.40	底部1/2	良好	にぶい橙～灰
139	唐津焼	碗	微凹地	江戸時代初頭				3.70	3.70	0.95	底部完存	良好	にぶい褐～灰
140	唐津焼	碗	微凹地	江戸時代初頭				4.80	1.65	0.65	底部2/3	良好	黄灰～灰オリーブ
141	唐津焼	碗	微凹地	江戸時代初頭				5.20	2.80	0.95	底部1/2	良好	にぶい橙～灰白
142	唐津焼	皿	微凹地	江戸時代初頭				4.40	1.65	0.60	底部1/2	良好	にぶい橙～灰
143	唐津焼	皿	微凹地	江戸時代初頭					2.10		体部小片	良好	にぶい黄橙～灰黄
144	唐津焼	皿	微凹地	江戸時代初頭				3.90	1.75	0.50	底部1/2	良好	にぶい橙～灰黄
145	唐津焼	盤	微凹地	江戸時代初頭				11.40	3.85	1.50	底部1/8	良好	にぶい橙～灰

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整→卸目。	Ⅴ期。	30	40
	外面：ヘラナデ調整→体部上半施釉。 内面：回転ナデ調整→施釉。胎土目。	底部三日月高台。	－	41
	外面：回転ヘラナデ調整→体部上半施釉。 内面：回転ナデ調整→施釉。	底部三日月高台。	－	41
	外面：回転ヘラナデ調整。 内面：回転ナデ調整→施釉。	外面部分的に施釉。	－	41
	外面：回転ヘラナデ調整。 内面：ナデ→施釉。胎土目。	外面未施釉。	－	41
	外面：回転ナデ調整→高台～体部施釉。 内面：回転ナデ調整→施釉。	外面の施釉部分的。	－	41
	外面：回転ヘラ削り。 内面：施釉。砂目。	底部外面・体部下半の一部未施釉。	－	41
	外面：ヘラナデ→施釉。 内面：施釉・砂目。		－	41
	外面：ヘラナデ調整。 内面：ナデ調整→施釉。胎土目。	外面未施釉。	－	41
	外面：回転ヘラナデ調整→施釉。 内面：回転ナデ調整→施釉。胎土目。	絵唐津。 体部下半未施釉。	－	41
	外面：ヘラナデ調整。 内面：ナデ調整→施釉。胎土目。	外面未施釉。	－	41
	外面：ヘラナデ。 内面：施釉・砂目。		－	41



第31図　縄文時代の遺構

２．縄文時代の遺構と遺物

（１）概　　要

検出した遺構は、土坑に限られる。土坑は８基（ＳＫ01～ＳＫ08）検出されている。その分布は、調査区中央部に限られる(第31図)。

（２）土　　坑

ＳＫ01

検出状況　調査区西部で検出した（第31図)。ＳＫ02の北西、ＳＫ03・ＳＫ04の西側に位置する。古墳時代の溝（ＳＤ04）に一部切られているが、ほぼ全体が検出されている。

形状・規模　平面形は長楕円形を呈し、溝状に近い形状である。その規模は、長軸方向で2.64m、その直交方向で64cm～80cmを測る。横断面は緩やかなＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは15cmである。主軸方向は、北東－南西方向である。

埋没状況　暗黄灰色極細砂～中砂１層からなる。

出土遺物　縄文土器の小片が出土している。小片のため、器種の特定は困難である。

時　　期　出土土器から、縄文時代後期を中心とした時期と考えられる。

ＳＫ02

検出状況　調査区西部で検出した(第31図)。ＳＫ01の南東、ＳＫ03の南西に位置する。他の遺構との明確な切り合い関係は認められず、全体が検出されている。

形状・規模　平面形は不整形な楕円形を呈する。その規模は、長軸方向で1.92m、その直交方向で1.20mを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは８cmである。

埋没状況　暗灰黄色中砂～細砂１層からなる。層相から判断して、自然に埋没し、土壌化したものと考えられる。

出土遺物　縄文土器の小片が出土している。小片のため、器種の特定は困難である。

時　　期　出土土器から、縄文時代後期を中心とした時期と考えられる。

ＳＫ03

検出状況　調査区中央部南西側で検出した(第31図)。ＳＫ04の南、ＳＫ02の北東に位置する。一部の遺構に切られているが、大きな影響は認められず、全体が検出されている。

形状・規模　平面形は不整形な形状をなす。その規模は、長軸方向で3.14m、その直交方向で2.18mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは1.10mである。

埋没状況　黒褐色シルト質細砂～灰黄色シルト質細砂からなる。層相から判断して、風倒木が腐敗し、そのまま埋没したものと考えられる。

出土遺物　縄文土器の小片が出土している。小片のため、器種の特定は困難である。

時　　期　出土土器から、縄文時代後期を中心とした時期と考えられる。

ＳＫ04

検出状況　調査区中央部南西側で検出した(第31図)。ＳＫ03の北側に位置する。奈良時代の畠をなす小溝に切られ、一部を欠く。

形状・規模　平面形は隅丸方形をなすものと考えられる。その規模は、長軸方向で92cmを測り、その直交方向で52cm残存する。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは12cmである。

出土遺物　縄文土器の小片とサヌカイトの剥片１点が出土している。縄文土器は、小片のため器種の特定も困難である。また、残存状況が良好とはいいがたく、模様も観察できない。

時期　出土土器から、縄文時代後期～晩期と考えられる。

ＳＫ05

検出状況　調査区中央部南側で検出した（第31図)。ＳＫ03の南東、ＳＫ06の南西に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、全体が検出されている。

形状・規模　平面形は楕円形をなす。その規模は、長軸方向で92cm、その直交方向で52cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは８cmである。

埋没状況　黄色シルト混じり暗灰色砂質シルト１層からなる。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

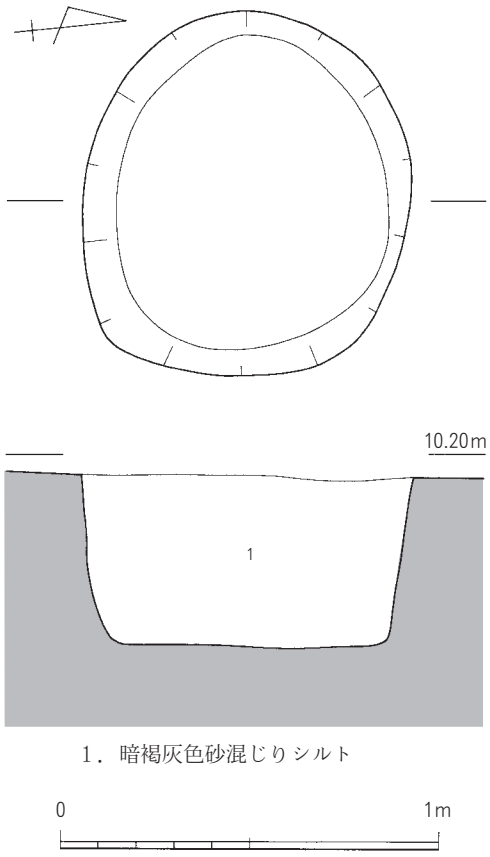
時期　出土遺物からの時期の特定は困難であるが、後に報告するＳＫ08と埋土が同じであることから、ほぼ同様の時期、縄文時代と考えられる。

ＳＫ06（写真図版７・42・61）

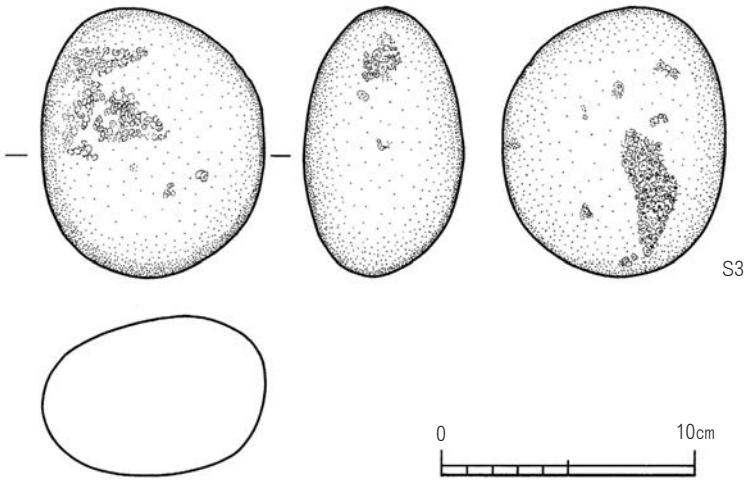
検出状況　調査区中央部で検出した（第31図)。ＳＫ05の北東、ＳＫ08の北西に位置する。他の遺構との明確な切り合い関係はなく、全体が検出されている。

形状・規模　平面形はほぼ円形をなし、その規模は90cm×95cmである。横断面は箱形に近い逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは45cmである。主軸方向は、ほぼ東西方向である。

埋没状況　暗褐灰色砂混じりシルト１層からなる(第32図)。層相から判断して、人為的に埋められた層と考えられ、埋土内には１～３cm大の焼土塊や炭片が比較的多く混入していた。



第32図　ＳＫ06



第33図　ＳＫ06出土石器

出土遺物　　土器と石器が出土している。

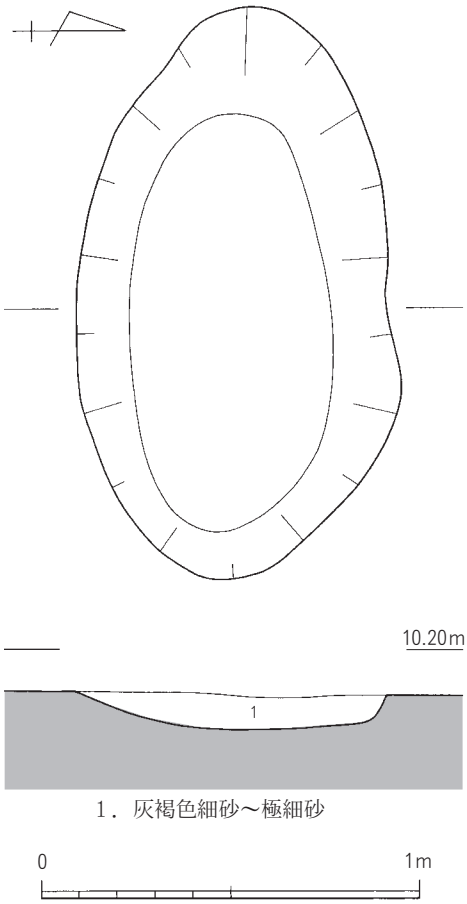
土　　器　数点がまとまって出土している（第35図）。点数としては十数点出土しているが、状態の比較的良好な破片（146～151）を中心に図化を行った。これらは、残存状況が良好ではないため接合はできなかったが、胎土・色調等の特徴から、本来は同一個体であった可能性が考えられる。

146～148は、深鉢の口縁部片である。146の外面に条痕を観察できる以外は、磨滅が著しく、調整等は観察できない。149は、鉢の底部である。体部外面にわずかにナデ調整の痕跡を観察することができる。

150～155は体部の小片で、150と151の拓本を掲載した以外、図化できなかった。いずれも、外面に条痕を観察することができる（写真図版42）。

石　　器　敲石１点（Ｓ３）が出土している（第33図）。花崗閃緑岩の円礫を転用したもので、一部に磨り面が認められる。全長10.58cm、幅8.78cm、厚さ6.25cmを測る。814.9ｇ。

時　　期　出土遺物から判断して、縄文時代後期と考えられる。



第34図　ＳＫ08

ＳＫ07

検出状況　　調査区中央部南側で検出した（第31図）。ＳＫ08の北西に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、全体が検出されている。

形状・規模　　平面形は楕円形をなす。その規模は主軸方向で40cm、その直交方向で30cmを測る。横

断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは10cmである。

出土遺物　縄文土器の小片が出土している。

時　　期　出土遺物から判断して、縄文時代と考えられる。

ＳＫ08（写真図版７）

検出状況　調査区中央部南東側で検出した（第31図）。ＳＫ07の南東に位置する。南側肩部が柱穴を切っている以外は、他の遺構との明確な切り合い関係はなく、全体が検出されている。

形状・規模　平面形は長楕円形をなす。その規模は、主軸方向で1.52m、その直交方向で86cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは9.0cmである。

埋没状況　灰褐色細砂～極細砂１層からなる(第34図)。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　縄文土器の小片が出土している。器種の特定は困難である。

時　　期　出土遺物から判断して、縄文時代と考えられる。

第９表　縄文土器観察表

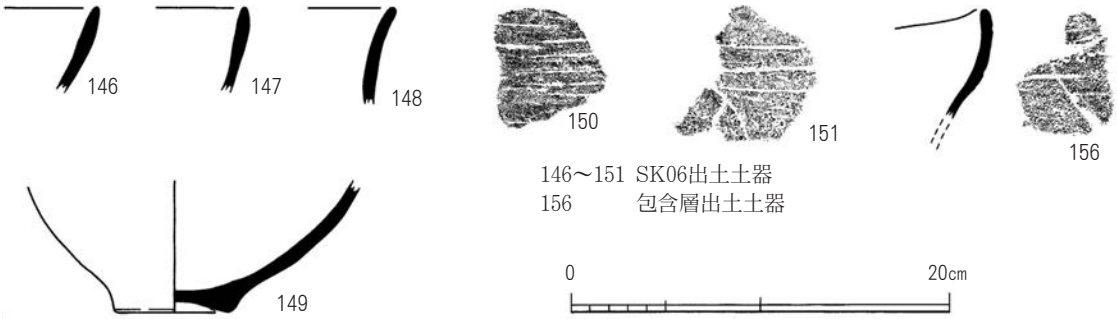
No.	種別	器種	遺構名	時期	法量（cm）						残存状況	焼成	色調
					口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
146	縄文	深鉢	ＳＫ06						4.50		口縁部わずか		黄灰～暗灰黄
147	縄文	深鉢	ＳＫ06						4.50		口縁部わずか		灰黄～淡黄
148	縄文	深鉢	ＳＫ06						5.00		口縁部わずか		にぶい黄～暗灰黄
149	縄文	深鉢	ＳＫ06					6.30	7.00		底部完存		にぶい黄橙
150	縄文	深鉢	ＳＫ06								体部わずか		にぶい黄橙～灰
151	縄文	深鉢	ＳＫ06								体部わずか		橙～灰白
152	縄文	深鉢	ＳＫ06								体部わずか		にぶい黄橙～黄灰
153	縄文	深鉢	ＳＫ06								体部わずか		にぶい黄橙～黄灰
154	縄文	深鉢	ＳＫ06								体部わずか		にぶい黄橙～黄灰
155	縄文	深鉢	ＳＫ06								体部わずか		浅黄橙～橙
156	縄文	深鉢	包含層						5.80		口縁部わずか		灰褐～にぶい黄橙

（３）その他（写真図版42）

包含層出土土器

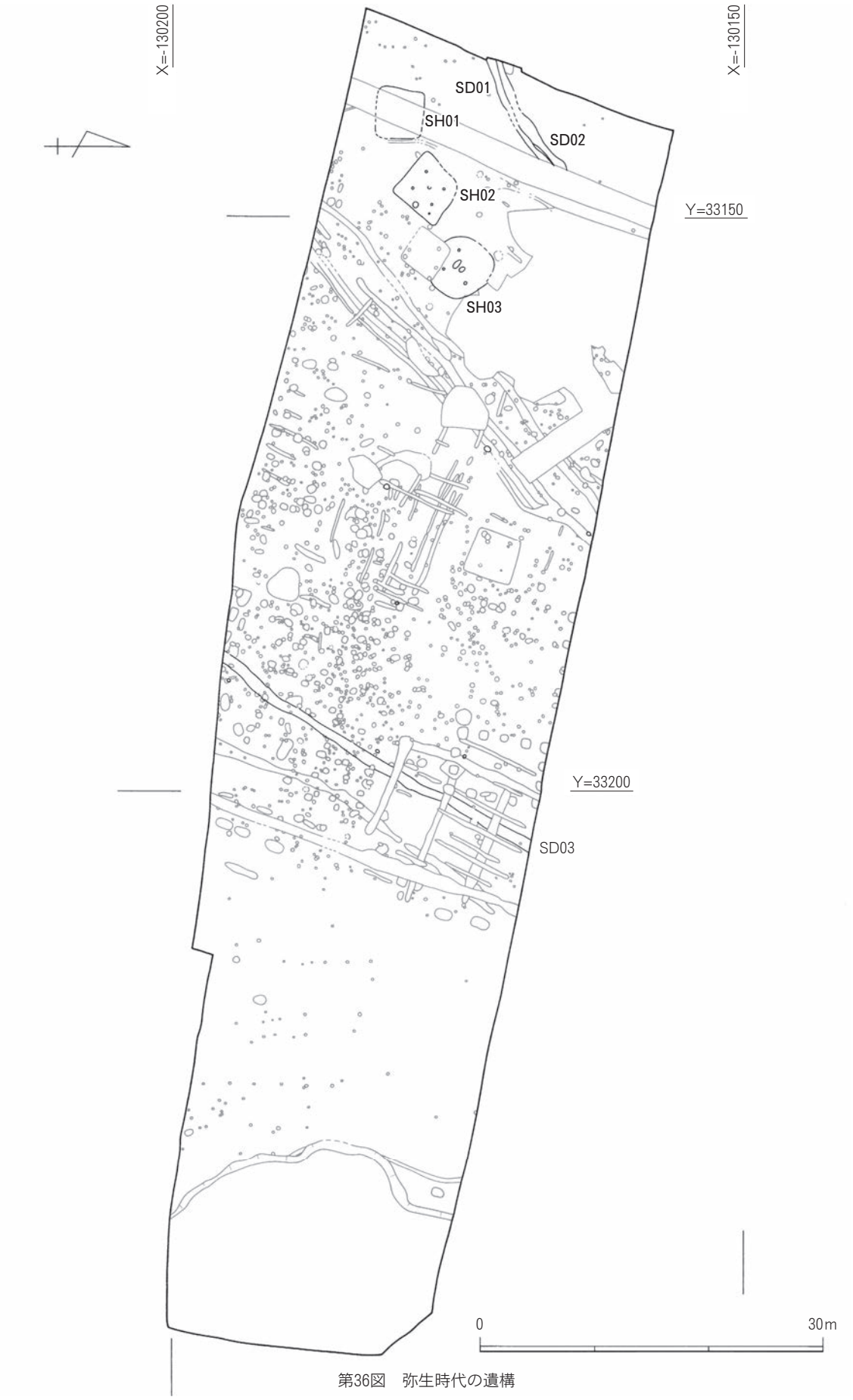
この他、包含層から当該期の土器が出土しているので、ここで報告する。出土量は少なく、図化できたのは、156の１点に限られる（第35図）。

156は、弥生時代の住居跡ＳＨ03埋土中から出土したものであるが、当該遺構とは時期的に全く合致しないため、包含層出土土器として扱うこととしたものである。縄文時代後期の深鉢の口縁部片と考えられ、外面には、沈線文と半截竹管文を観察することができる。内面は磨滅が著しく、調整等は観察できない。



第35図　出土縄文土器

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
１～3.5㎜大の長石・石英・クサリレキ多く含む	内面：条痕文。	外面磨滅のため調整観察不可。	35	42
１～４㎜大の石英・長石・チャート・クサリレキ非常に多く含む		内外面とも磨滅のため調整観察不可。	35	42
１～3.5㎜大の長石・石英・クサリレキ非常に多く含む		内外面とも磨滅のため調整観察不可。	35	42
１～3.5㎜大の長石・石英・雲母・クサリレキ・チャート多く含む	外面：ナデ調整。	内面の調整磨滅のため不明。	35	42
１～３㎜大のチャート・長石・石英非常に多く含む	外面：条痕文。	磨滅のため内面調整観察不可。	35	42
0.5～2.5㎜大の長石・チャート・クサリレキ含む	外面：条痕文	磨滅のため内面の調整観察できない。	35	42
0.5～２㎜大の長石・チャート・雲母多く含む	外面：条痕文	磨滅のため内面の調整観察不可。	－	42
0.5～3.5㎜大のチャート・長石・石英非常に多く含む	外面：条痕文。	磨滅のため内面の調整観察不可。	－	42
0.5～3㎜大のチャート・長石・石英・クサリレキ多く含む	外面：条痕文。	磨滅のため内面の調整観察不可。	－	42
0.5～３㎜大の長石・チャート・石英非常に多く含む	外面：条痕文。 内面：条痕文。		－	42
0.5～1.5㎜大の長石・チャート・石英非常に多く含む	外面：半截竹管文・沈線文。	内面磨滅顕著。ＳＨ03出土。	35	42



第36図　弥生時代の遺構

３．弥生時代の遺構と遺物

（１）概　　要

竪穴住居跡・柱穴・溝状遺構を検出している。一部の柱穴・溝を除いては、調査区西側に集中して検出されている。

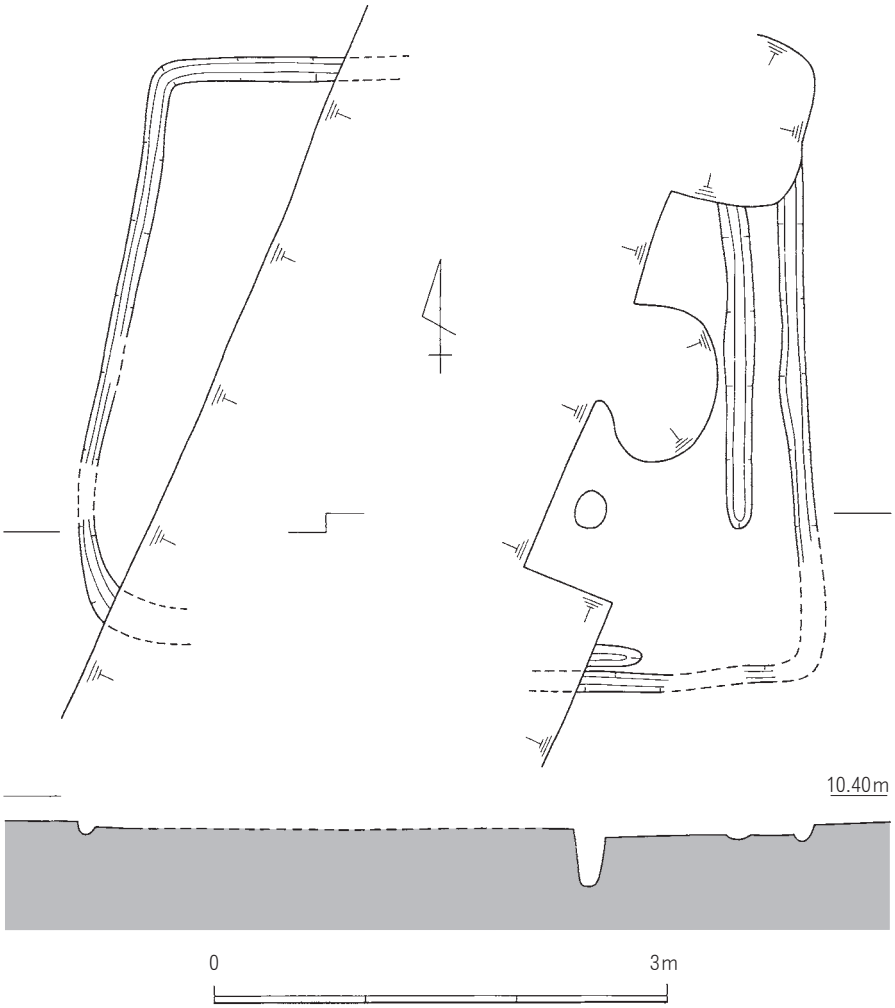
（２）竪穴住居跡

ＳＨ01（写真図版８）

検出状況　調査区南西隅で検出した（第36図）。ＳＨ02の南西側、ＳＤ01・ＳＤ02の南側に位置する。他の遺構との明確な切り合い関係は認められないが、全体の1/2以上が後世の撹乱を受けている。このため、検出できた範囲はわずかである。

形状・規模　平面形は方形を志向するが、北辺と西辺は直交せず、全体的に台形をなす（第37図）。大半が撹乱を受けているため、規模を明確にすることは困難であるが、東西方向で4.85m、南北方向で4.20mと復元される。

検出面からの深さはわずか９cmで、床面での標高は10.33mである。床面積は、20.3㎡と復元される。



第37図　ＳＨ01

屋内施設　　主柱穴と周壁溝を検出している。

主柱穴　　柱穴は、当住居跡南東隅にあたるＰ１の１穴のみである。床面における平面形は、径20cmの円形をなし、床面からの深さは56cmを測る。

周壁溝　　撹乱を受けていない箇所については、全周する。床面における検出幅は18cmを測り、床面からの深さは3.5cmである。

また、東辺と南辺の内側で、全周する周壁溝と平行する溝が検出されている。その規模は、周壁溝と同規模で埋土も同じことから、建替えに伴う周壁溝の一部と考えられる。ただし、前後関係を明らかにすることはできない。この内側の周壁溝を基準とした住居跡の規模は、東西4.45m、南北4.05mと復元することができる。

埋没状況　　暗灰色シルト質極細砂１層からなる。

出土遺物　　小型丸底壺１個体分（157）が、周壁溝内から出土している（第48図）。体部内面は、横方向のヘラナデ調整により仕上げられている。

時　　期　　出土遺物から判断して、古墳時代前期と考えられる。

ＳＨ02（写真図版８・９・43・61）

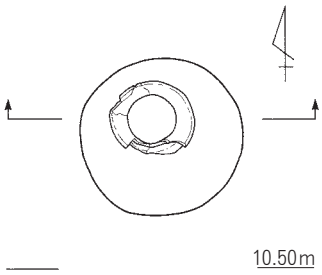
検出状況　　調査区南西部で検出した（第36図）。ＳＨ01の北東、ＳＨ03の南西に位置する。他の遺構との明確な切り合い関係は認められないが、北隅を中心とした全体の約1/4が後世の撹乱を受けている。ただし、この撹乱の深度が比較的浅いため、撹乱内においても、周壁溝の一部と主柱穴（Ｐ４）を検出することができた。

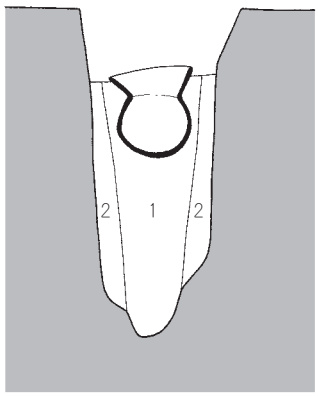
形状・規模　　平面形は方形をなし、その規模は、北東-南西方向で4.65m、北西-南東方向で4.73mと、ほぼ方形に近い（第39図）。検出面からの深さはわずか５cmで、床面での標高は10.38mである。また、南東辺と南西辺を基準とした床面積は、18.2㎡である。

屋内施設　　柱穴・周壁溝・土坑を検出している。

主柱穴　　４穴（Ｐ１～Ｐ４）からなる。平面形は、いずれも円形をなす。床面における規模・深さは、Ｐ１が23cm・16cm、Ｐ２が21cm・44cm、Ｐ３が22cm・44cm、Ｐ４が22cm・23cm、である。この他、Ｐ１を除く３穴で柱痕を確認することができ、その規模は、Ｐ２が14cm、Ｐ３が８cm、Ｐ４が10cmである。また、主柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間が2.20m、Ｐ２－Ｐ３間が1.90m、Ｐ３－Ｐ４間が2.10m、Ｐ４－Ｐ１間が1.80mである。

特に、Ｐ２においては、柱抜き取り後にほぼ完形の小型丸底壺（159）が正立させた状態で入れられている様子を、観察することができた（第38図）。



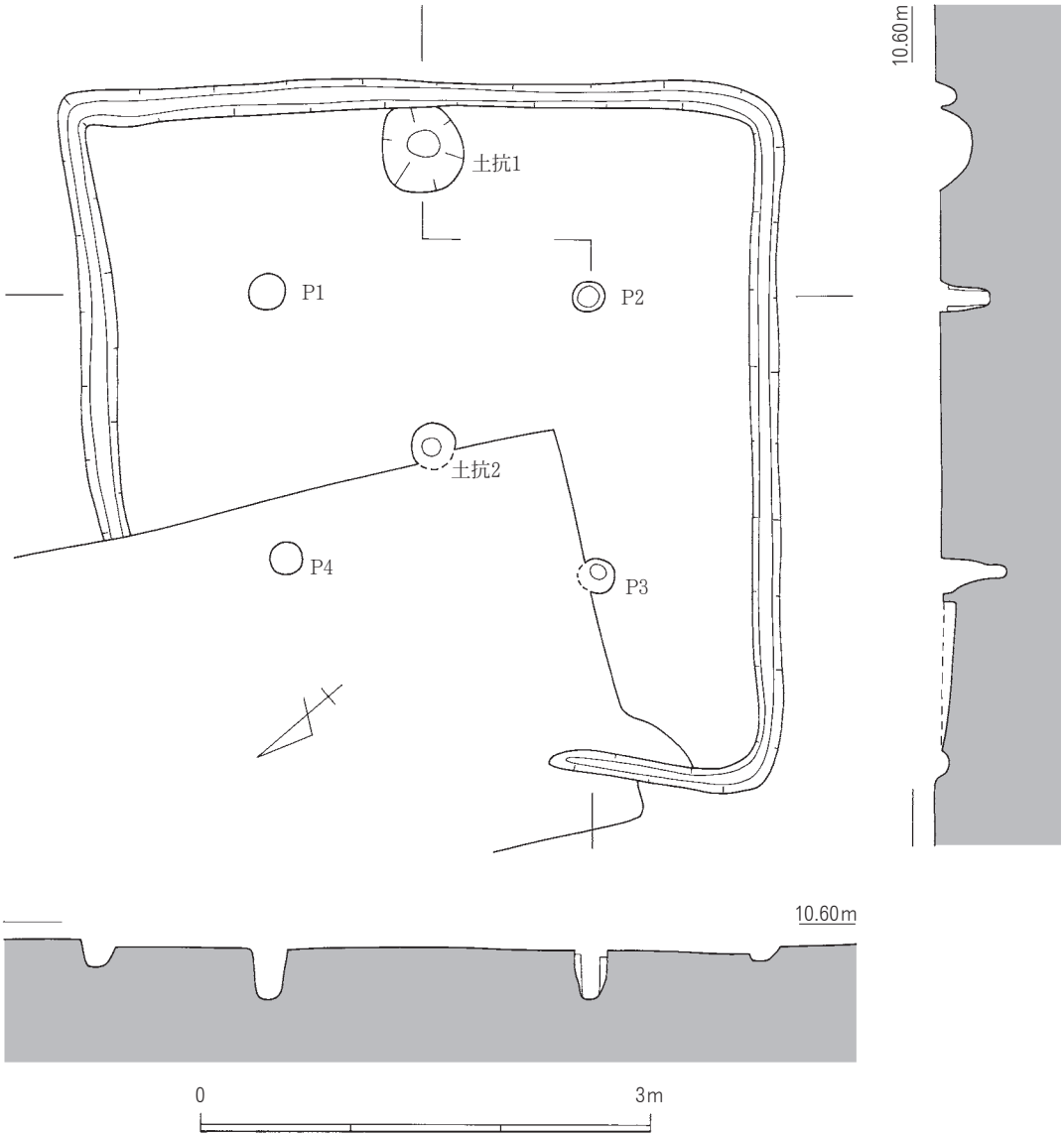


1．黄灰色シルト質砂混じり
　灰色シルト質細砂～中砂
2．灰色シルト質砂混じり
　黄灰色シルト質極細砂

0　　30cm

第38図　Ｐ２出土状況

周壁溝　　北隅を中心とした1/4を除いては、全周する。床面に



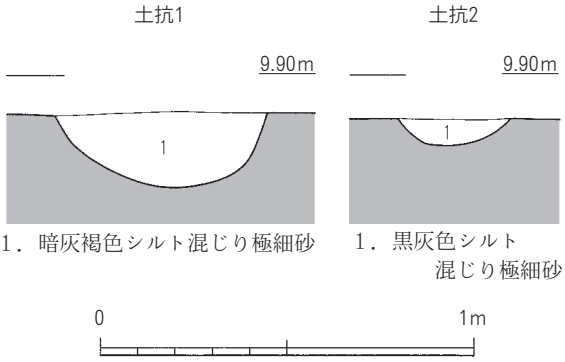
第39図　ＳＨ02

おける検出幅は21cmを測り、床面からの深さは4.5cmである。なお、土坑１に接する箇所においては、図化できなかったが、小型丸底壺が出土している。

土　　坑　２基（土坑１・土坑２）検出している（第40図）。

土 坑 1　住居跡南東辺中央部に接する位置で検出された。床面における規模は、主軸方向・その直交方向とも56cmを測り、平面形は円形傾向の方形をなす。最深部における床面からの深さは20cmである。

埋土は、暗灰褐色シルト混じり極細砂１層からなり、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。また、当土坑内からは小型丸底壺が１個体（158）出土している。



第40図　ＳＨ02内土坑

土 坑 2　当住居跡中央部で検出された。主柱穴の対角線の交点上に位置する。後世の撹乱により、検出できたのは全体の約2/3に限られる。平面形は、径21cmの円形と復元され、最深部における床面からの深さは７cmである。埋土は、黒灰色シルト混じり極細砂１層からなり、炭片がわずかに含まれていた。その層相から、人為的に埋められたものと考えられる。

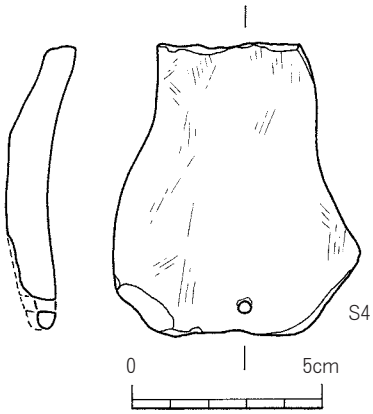
埋 没 状 況　黒灰色シルト混じり極細砂１層からなる。その層相から、埋められたものと考えられる。

遺物出土状況　主柱穴Ｐ１内から、160の甕が出土している。また、Ｐ２内から小型丸底壺（159）が出土している。正立した状態で出土しており（第38図）、柱穴断面の観察から、柱抜き取り後に入れられたものと考えられる。この他、土坑１内から158の小型丸底壺が出土している。

出 土 遺 物　土器と石器が出土している。

土　　器　小型丸底壺（158・159）と甕（160）が出土している（第48図）。甕は、口縁部片と体部片を図上で復元したものである。口縁部はく字形をなし、端部は丸く納められている。体部内面は、中位以下が縦方向（下→上）の後横方向（左→右）のヘラ削りにより仕上げられている。

石　　器　Ｓ４の１点が、土坑１から出土している（第41図）。流紋岩を転用したもので、厚さ1.10cmの扁平で湾曲したものである。外面および側面の一部に自然面が残っている。端部付近に１箇所、径３㎜の穿孔が認められるが、当遺物の用途は不明である。また、もう一端は欠損している。7.65cm残存し、最大幅は6.48cmである。88.0ｇ。



第41図　ＳＨ02出土石器

時　　期　出土遺物から判断して、古墳時代前期と考えられる。

ＳＨ03（写真図版10・11・43）

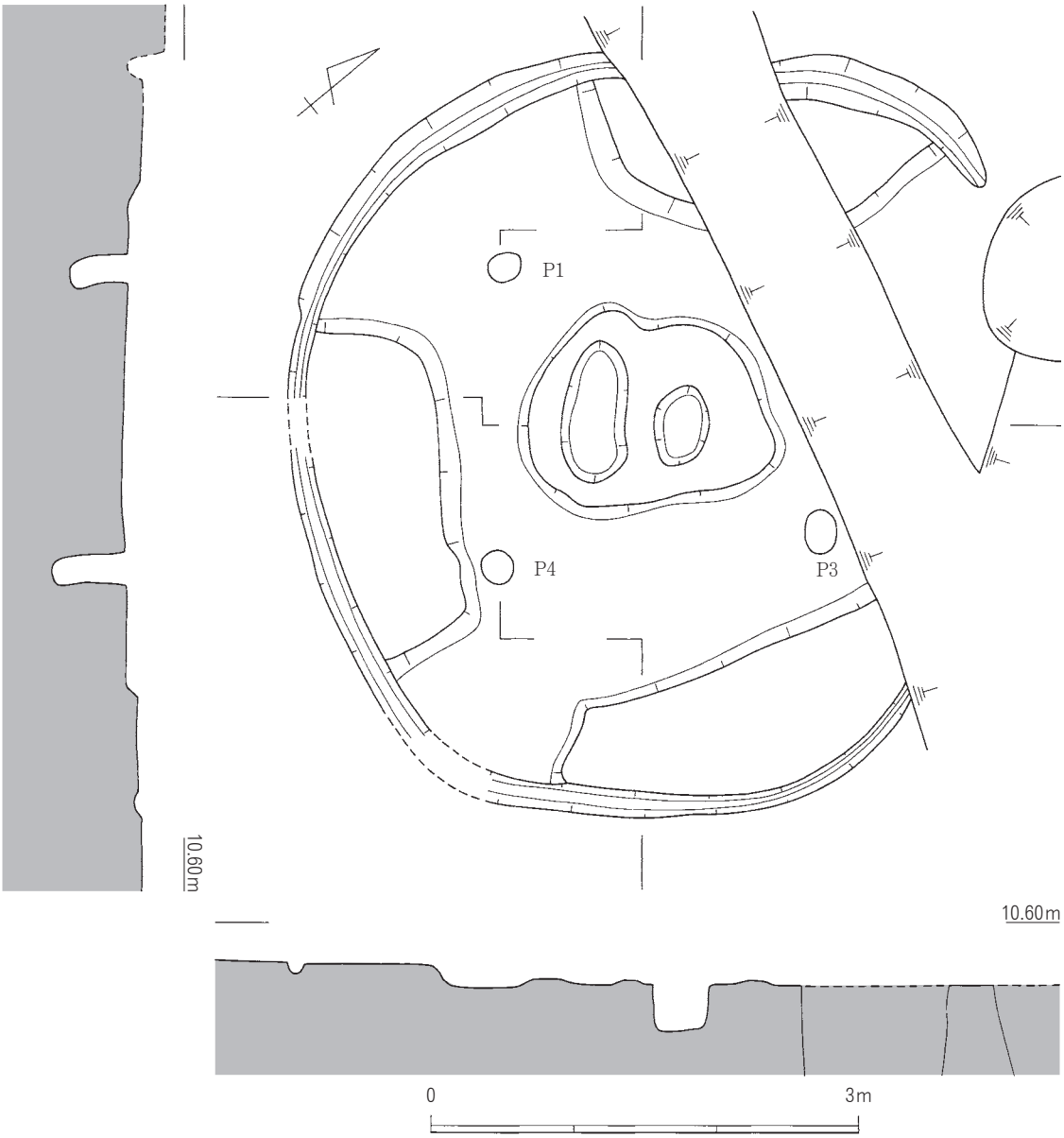
検 出 状 況　調査区南西部で検出した（第36図）。ＳＨ02の北東側に位置する。古墳時代後期の住居跡ＳＨ04と切り合い関係にあり、ＳＨ04に切られている。ただし、ＳＨ04の床面が浅いことから、この切り合う箇所においても、周壁溝を中心に残存していた。

しかし、本住居跡中央部の北側は、東西方向に幅約１ｍの撹乱を受け、この箇所については遺存していなかった。また、北東部も撹乱を受け、住居跡の一部は検出できなかった。

形状・規模　平面形は円形を基本とするが、部分的に直線的な箇所も認められ、全体的に歪んだ形状をなしている（第43図）。その規模は、北西－南東方向で5.35ｍを測る。検出面からの深さは20cmで、床面での標高は10.17ｍである。また、床面積は、23.2㎡と復元される。

第42図　ＳＨ03の検出作業

屋 内 施 設　柱穴・周壁溝・中央土坑・高床部を検出している。



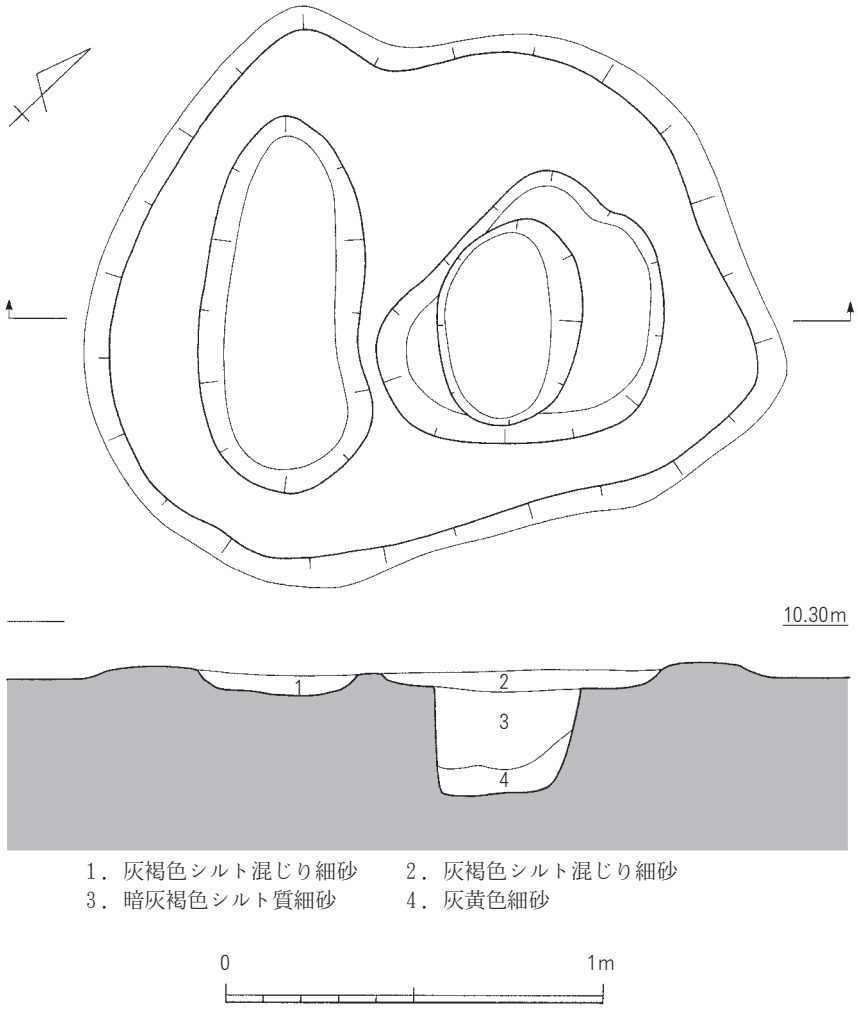
第43図　ＳＨ03

主　柱　穴　　当初は４穴であったものと考えられるが、Ｐ２を欠く。このため、検出できたのはＰ１・Ｐ３・Ｐ４の３穴である。平面形は、いずれも円形もしくは楕円形をなす。床面における径はいずれも20cmで、深さはＰ１が38cm、Ｐ３が56cm、Ｐ４が48cmである。主柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ４間が2.10m、Ｐ３－Ｐ４間が2.30mである。

周　壁　溝　　住居跡肩部を検出した範囲においては、全周する。床面における検出幅は18cmを測り、床面からの深さはわずか３cmである。

中央土坑　　住居跡中央部で検出した。いわゆる「イチマル土坑」である（第44図）。平面形が長楕円形の土坑（土坑Ａ）と楕円形の土坑（土坑Ｂ）がセットとなっている。また、これらの土坑の周囲は土手状をなすが、床面との比高はわずか４cmである。土手の幅は一定しておらず、上面の幅は10cm～30cmを測る。

土　坑　Ａ　　長軸方向で１m、その直交方向で47cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における土手上面からの深さは５cmである。埋土は、灰褐色シルト混じり細砂１層からなり、南



１．灰褐色シルト混じり細砂　　２．灰褐色シルト混じり細砂
３．暗灰褐色シルト質細砂　　４．灰黄色細砂

第44図　ＳＨ03中央土坑

東側を中心とした底部には炭が薄く堆積していた。その厚さは数ミリ程度である。

土坑Ｂ　長軸方向で52cm、その直交方向で38cmを測る。横断面は箱形に近く、最深部における土手上面からの深さは33cmである。埋土は、暗灰褐色シルト質砂と灰黄色細砂の２層からなる。層相から判断して、いずれも人為的に埋められたものと考えられる。また、これらの上に、土手を埋没させるように灰褐色シルト混じり細砂が認められた。当層についても、人為的に埋められたものと考えられる。

高床部　北西部・南西部・東部の３箇所（高床部１・高床部２・高床部３）で認められ、各高床部間が途切れた状態で検出されている。その間隔は、高床部１－高床部２間が2.3m、高床部２－高床部３間が1.3mである。各高床部の平面形は、高床部１と高床部２は台形状をなし、高床部３は三日月状をなす。いずれも、地山を削りだして整形したもので、床面との比高は８cmである。

埋没状況　暗褐色シルト混じり極細砂１層からなる。

遺物出土状況　主柱穴Ｐ４内から163の甕が、中央土坑内から161の甕が出土している。

出土遺物　壺・甕（161～164）・高坏（165～167）・鉢（168）が出土している（第48図）。

壺　小片のため図化できなかったが、広口壺の肩部片が出土している。

甕　出土した個体は底部片に限られる。163を除いては、外面はハケ調整により仕上げられ

ている。また、内面の調整は、164を除いては、ハケもしくはナデ調整により仕上げられている。164は、縦方向のヘラ削りにより仕上げられている。

なお、164については、その形態的特徴から鉢の可能性も考えられる。

高　　坏　　坏部を中心とした個体（165・166）と脚部（167）が出土している。

坏部の165と166は、タイプを大きく異にする。165は、椀形の高坏である。内外面とも縦方向のヘラミガキにより仕上げられているが、やや雑な仕上げである。また、口縁端部は、内外面をつまむような強い横ナデ調整により、仕上げられている。

166は坏形の高坏である。強い横ナデ調整により、口縁端部外面に１条の、体部との境界部に２条の凹線が認められる。

鉢　　168の１個体である。小型の鉢で、底部中央に径3.5㎜の穿孔が認められる。

時　　期　　出土土器から判断して、弥生時代後期中葉と考えられる。

（３）柱　　穴

６穴検出した。調査区中央部から西側に散在する傾向にあり（第36図）、建物を復元することはできなかった。また、これらの柱穴内から、良好な遺物も得られなかった。このため、本項では、当該期の柱穴が検出されていることのみを報告しておく。

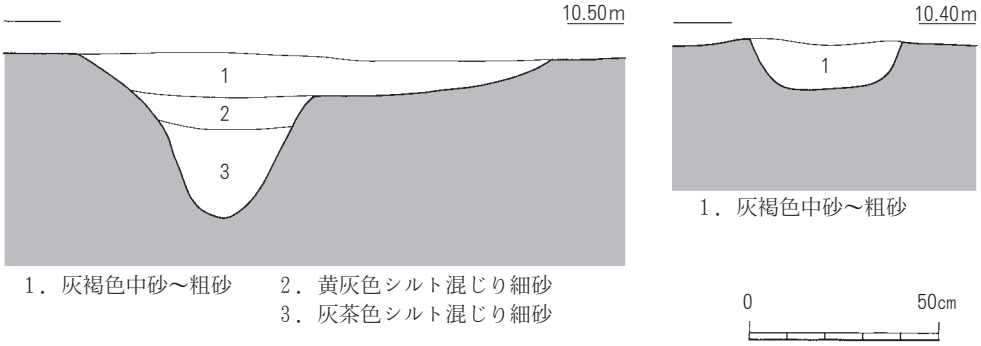
（４）溝 状 遺 構

３条（ＳＤ01～ＳＤ03）検出した。

ＳＤ01（写真図版12・43・44）

検出状況　　調査区西端部で検出した（第36図）。ＳＨ01の北側、ＳＨ02・ＳＨ03の西側に位置する。北東－南西方向にやや弧状をなしてのびる溝で、ＳＤ02とほぼ平行し、一部切り合い関係にあり、ＳＤ02を切っている。ただし、北東端は後世の撹乱を受け途切れている。また、南西側は、調査区外まで伸びている。

形状・規模　　検出した長さは11.04ｍである。横断面は一定しておらず、北東部は逆台形なす。一方、南西部は、緩やかな凹地にＵ字形に掘り込まれている（第45図）。前者の規模は、検出面における幅40cm、検出面からの深さ13cmを測る。後者の規模は、凹地を含めた幅は1.25ｍ、Ｕ字形の掘り込みの幅は50cmを測り、検出面からの深さは44cmである。底部の標高は、北東側で10.31ｍ、南西側で10.04ｍと、南西側に傾斜している。



第45図　ＳＤ01

埋没状況　北東部は１層、南西部は３層からなる（第45図）。北東部の１層と、南西部の３層は、その層相から判断して、人為的に埋められたものと判断される。一方、南西部の１層・２層は、洪水砂により埋没している。以上から、当溝は基本的には人為的に埋められた後、凹地を中心に、自然に埋没したものと判断される。

出土遺物　壺・甕・高坏・鉢の各器種が出土している（第48図）。

壺　複合口縁壺（169・170・172）・底部（171）が出土している。複合口縁壺の169と170は在地産と考えられるが、172は胎土・形態的特徴から讃岐産と考えられる。172の口縁部外面上端部と複合部には、それぞれ２条の浅い凹線が施されている。

甕　Ｖ様式系甕（175・177・180・181）と庄内式甕（182）の２タイプが出土している。

Ｖ様式系甕は、いずれも底部のみの残存である。175と177は、わずかに平底の形態をとどめるが、180と181は尖底形態をなす。また、180と181は叩きにより整形されているが、175では認められない。

この他179も、叩き整形痕は認められないが、Ｖ様式系甕に分類されるものと考えられる。外面は強い縦方向のナデ調整により仕上げられている。また、178も同タイプの底部であるが、中央部に径７㎜の穿孔が焼成前に施されている。

庄内式甕は、わずかに口縁部が残存する。胎土の特徴は在地の特徴を示すもので、いわゆる生駒西麓産ではない。

この他、176は外面を粗く抉るようなヘラ削りにより仕上げられている。甕以外の器種の可能性も考えられる。

高　坏　椀形高坏の坏部と脚部が出土している。ただし、小片のため図化できなかった。

鉢　大型鉢（173）と小型の台付鉢（174）が出土している。173は、底部がヘラナデ調整により仕上げられ、わずかに平底形態をなす。174は、半球形の体部に台部が指オサエにより貼付けられている。

時　期　出土遺物から判断して、庄内併行期と考えられる。

ＳＤ02

検出状況　調査区西部で検出した（第36図）。北東－南西方向にわずかに弧状をなしてのびる溝で、南西端は調査区外にのびている。北東端は後世の撹乱を受け、調査区内で途切れている。ＳＤ01とほぼ平行し、一部切り合い関係にあり、ＳＤ01に切られている。

形状・規模　検出した長さは12ｍである。横断面は皿形をなす。検出面における幅は47cmを測り、検出面からの深さは５cmである。底部の標高は、北東端で10.31ｍ、南西端で10.04ｍと、わずかに南西側に傾斜している。

埋没状況　灰黄色シルト質細砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

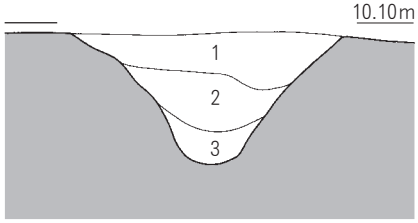
時　期　出土遺物から判断することは困難であるが、ＳＤ01との切り合い関係から、弥生時代後期と判断される。

ＳＤ03（写真図版12）

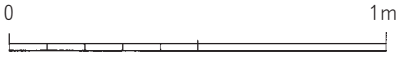
検出状況　調査区中央部東側で検出した（第36図）。北北東－南南西方向にほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区外に伸びている。数箇所で奈良時代の鋤溝に切られている。

第46図　ＳＤ03の検出作業

形状・規模　検出した長さは31.60ｍである。横断面は緩やかなＵ字形をなす。検出面における幅は65～70cmを測り、検出面からの深さは32cmである。底部の標高は、北東端で9.70ｍ、南西端で9.65ｍと、わずかに南西側に傾斜している。



1．黒灰色シルト質細砂～中砂
2．暗灰黄色シルト質細砂
3．灰黄色シルト混じり暗灰色細砂



第47図　ＳＤ03

埋没状況　３層からなる（第47図）。最下層の３層は、層中に黄褐色シルトがブロック状に混入し、人為的に埋められたものと判断される。１層と２層は、自然に堆積し、土壌化したものと判断される。

出土遺物　弥生土器の壺・甕・高坏の各器種が出土している。壺を除いては、小片のため図化できなかった。

壺　頸部片（183）が出土している（第48図）。広口壺の頸部と考えられる。器壁が薄く仕上げられる。

甕　Ｖ様式系甕が出土している。粗い叩き目を有する体部片が出土している。

高坏　脚部が出土している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期中葉と考えられる。

（５）その他（写真図版44）

包含層出土土器　遺構には伴わないが、比較的良好な資料が包含層から出土しているので、ここで報告する。当該期の土器は、量的には少なく、図化できたのは184の１個体のみである（第48図）。

壺の底部から体部にかけて残存するもので、底部には丸底化の傾向が認められる。この底部には、内面に２箇所、外面に１箇所、径４～５㎜の円錐形の抉りが認められる（写真図版44）。穿孔を試みたが、未貫通に終わったものと考えられる。いずれも、焼成前に行われている。この他、底部から体部への変換部に１箇所、径４㎜の穿孔が認められる。

第10表　弥生時代の土器観察表（１）

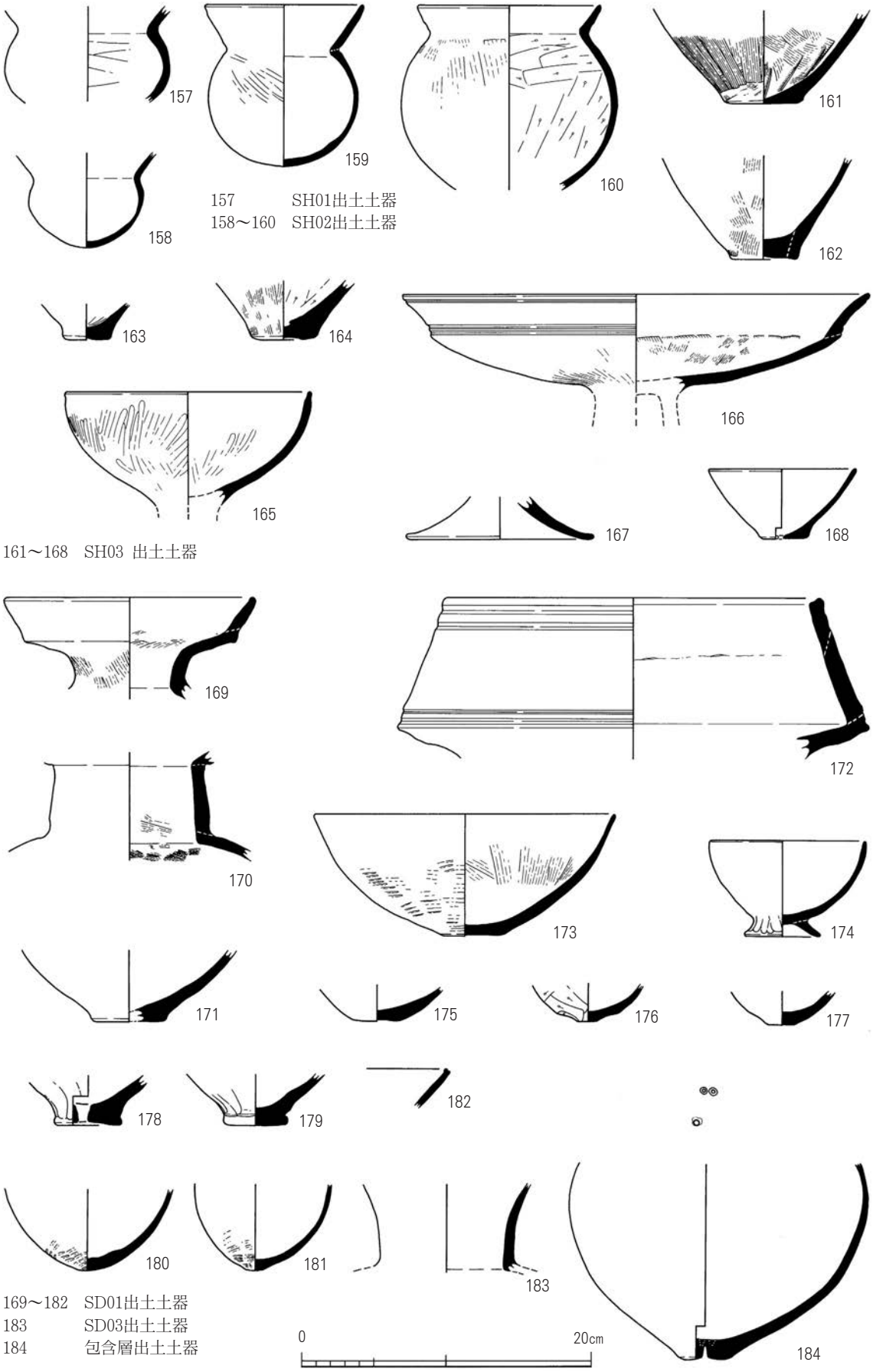
No.	種　別	器　種	遺構名	法　量（cm）						残存状況	焼成	色　調
				口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
157	弥生	小型丸底壺	ＳＨ01		9.70	11.40		6.65		頸部～体部2/5		橙～灰白
158	土師器	小型丸底壺	ＳＨ02		7.30	7.90		6.55		頸部わずか・体部～底部ほぼ完存		灰白
159	土師器	小型丸底壺	ＳＨ02	10.80	7.70	10.35		11.15		口縁部1/2・頸部～体部ほぼ完存		灰黄褐～褐灰
160	土師器	甕	ＳＨ02	12.50	11.00	15.00		12.80		口縁部1/10・体部1/2		灰黄～にぶい黄橙
161	弥生	甕	ＳＨ03				5.40	6.50		底部完存		にぶい褐～にぶい橙
162	弥生	甕	ＳＨ03				4.70	7.00		底部3/4		灰黄褐～にぶい黄橙
163	弥生	甕	ＳＨ03				3.40	2.50		底部完存		にぶい黄橙
164	弥生	甕	ＳＨ03				4.70	4.10		底部完存		灰黄褐～橙
165	弥生	高坏	ＳＨ03	16.80				7.85		口縁部1/3		浅黄橙～橙
166	弥生	高坏	ＳＨ03	32.00				6•8		口縁部1/4		にぶい黄橙～にぶい橙
167	弥生	高坏	ＳＨ03				13.00	2.90		脚端部1/10		にぶい黄橙～浅黄橙
168	弥生	鉢	ＳＨ03	10.10			3.25	4.90		底部完存・口縁部1/8		にぶい黄橙
169	弥生	壺	ＳＤ01	17.00	7.60			7.00		口縁部1/6		浅黄橙～灰白
170	弥生	壺	ＳＤ01		11.10			7.55		頸部1/3		灰白～黄灰
171	弥生	壺	ＳＤ01				5.30	5.00		底部1/3		にぶい黄褐～灰黄褐
172	弥生	壺	ＳＤ01	25.80				11.10		口縁部1/5		にぶい褐～にぶい橙
173	弥生	鉢	ＳＤ01	20.60			4.50	8.40		口縁部1/8・底部完存		にぶい黄橙
174	弥生	鉢	ＳＤ01	10.70			5.30	6.65		口縁部1/3・底部完存		にぶい橙～浅黄橙
175	弥生	甕	ＳＤ01				3.20	2.40		底部3/4		浅黄橙～橙
176	弥生	甕	ＳＤ01					2.65		底部完存		浅黄橙

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
１～２㎜大のチャート・長石・石英含む	外面：体部ナデ調整・頸部横ナデ調整。 内面：体部ヘラナデ調整。		48	－
0.5～３㎜大の長石・チャート・クサリレキ含む	外面：頸部～口縁部横ナデ調整。 内面：頸部～口縁部横ナデ調整。	体部内外面磨滅顕著のため調整観察不可。	48	－
0.5～１㎜大の長石・チャート・雲母含む	外面：体部ハケ調整→ナデ調整。口縁部横ナデ調整。 内面：体部ヘラミナデ→ナデ調整。口縁部横ナデ調整。		48	43
１～２㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ヘラ削り削り（下→上⇒左→右）	体部下半外面磨滅。	48	43
１～３㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：叩き→ハケ調整。 内面：ハケ調整。		48	－
0.5～２㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：底部指オサエ・体部ハケ調整。 内面：ナデ調整。		48	－
１～３㎜大の長石・チャート多く含む	外面：磨滅。 内面：ハケ調整。		48	－
１～３㎜大の長石・チャート・石英・クサリレキ多く含む	外面：底部ナデ調整・体部ハケ調整。 内面：ヘラ削り。		48	－
0.5～３㎜大のチャート・長石・クサリレキ・石英含む	外面：口縁部横ナデ調整→体部ヘラミガキ。 内面：口縁部横ナデ調整→体部ヘラミガキ。		48	43
0.5～４㎜大の長石・石英・チャート・雲母・クサリレキ含む	外面：体部ヘラミガキ・口縁部横ナデ→凹線。 内面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ。		48	43
１～４㎜大のチャート・長石・石英・クサリレキやや多く含む		内外面とも磨滅顕著のため調整観察不能。	48	－
１～3.5㎜大の長石・チャート・石英多く含む		内外面とも磨滅顕著のため調整観察不能。	48	43
１～２㎜大のチャート・石英・長石非常に多く含む	外面：体部～口縁部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：頸部ハケ調整→頸部ナデ調整・口縁部横ナデ調整。		48	43
0.5～３㎜大のチャート・長石・雲母含む	外面：体部ナデ調整。頸部横ナデ調整。 内面：体部ハケ調整。頸部ハケ調整→ナデ調整。		48	－
１～７㎜大の長石・チャート・クサリレキ・石英含む	外面：ナデ調整。 内面：ナデ調整。		48	－
１～２㎜大の長石・雲母・クサリレキ・チャート含む	外面：横ナデ調整。 内面：横ナデ調整。	讃岐産。	48	43
0.5～２㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：底部ヘラナデ。体部叩き→ナデ調整。 内面：ハケ調整。		48	43
１～３㎜大の石英・チャート・クサリレキ・長石やや多く含む	外面：脚部指オサエ・ナデ調整。口縁部横ナデ調整。 内面：ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		48	44
0.5㎜以下の雲母・石英・クサリレキわずかに含む	外面：ナデ調整。 内面：板ナデ調整→ナデ調整。		48	－
１～２㎜大のチャート・長石・クサリレキ多く含む	外面：ヘラ削り。 内面：ナデ調整。		48	44

第11表　弥生時代の土器観察表（２）

No.	種　別	器　種	遺構名	法　量（cm）						残存状況	焼成	色　調
				口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
177	弥生	甕	ＳＤ01					2.30		底部完存		橙～灰白
178	弥生	甕	ＳＤ01				4.60	3.50		底部2/5		浅黄橙
179	弥生	甕	ＳＤ01				4.30	3.60		底部完存		にぶい黄橙～灰黄褐
180	弥生	甕	ＳＤ01					5.60		底部完存		にぶい橙
181	弥生	甕	ＳＤ01					6.00		底部完存・体部1/5		浅黄橙～にぶい橙
182	弥生	甕	ＳＤ01					2.60		口縁部わずか		灰白～灰黄
183	弥生	壺	ＳＤ03		9.20			6.00		頸部1/4		橙～浅黄橙
184	弥生	壺	包含層			21.60	3.65	13.45		底部完存・体部1/4		にぶい橙～黄灰

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
0.5～４㎜大のチャート・石英・長石・クサリレキ多く含む	外面：ナデ調整。	内面磨滅のため調整観察不可。	48	－
１～２㎜大の長石・雲母・クサリレキ・石英含む	外面：底部ナデ調整。体部指オサエ→ナデ調整。 内面：ナデ調整。	焼成後穿孔（径1.15～0.7㎝）。	48	－
１～3.5㎜大のチャート・長石・石英含む	外面：体部ナデ調整。 内面：ユビナデ・ナデ調整。		48	－
１～２㎜大のチャート・長石・クサリレキ・石英含む	外面：底部叩き→ナデ調整。 内面：指オサエ・ナデ調整。		48	－
0.5～１㎜大のチャート・長石・クサリレキわずかに含む	外面：底部～体部叩き→体部ナデ調整。 内面：ナデ調整。		48	44
0.5～２㎜大のチャート・石英・雲母含む	外面：横ナデ調整。 内面：横ナデ調整。	在地産。	48	－
１～２㎜大の長石・チャート・石英・クサリレキ含む		内外面とも磨滅のため調整観察不可。	48	－
0.5～1.5㎜大の長石・チャート・クサリレキ・石英含む	外面：ナデ調整。 内面：ナデ調整。	底部に焼成前穿孔３穴（内２穴は未貫通）。	48	44

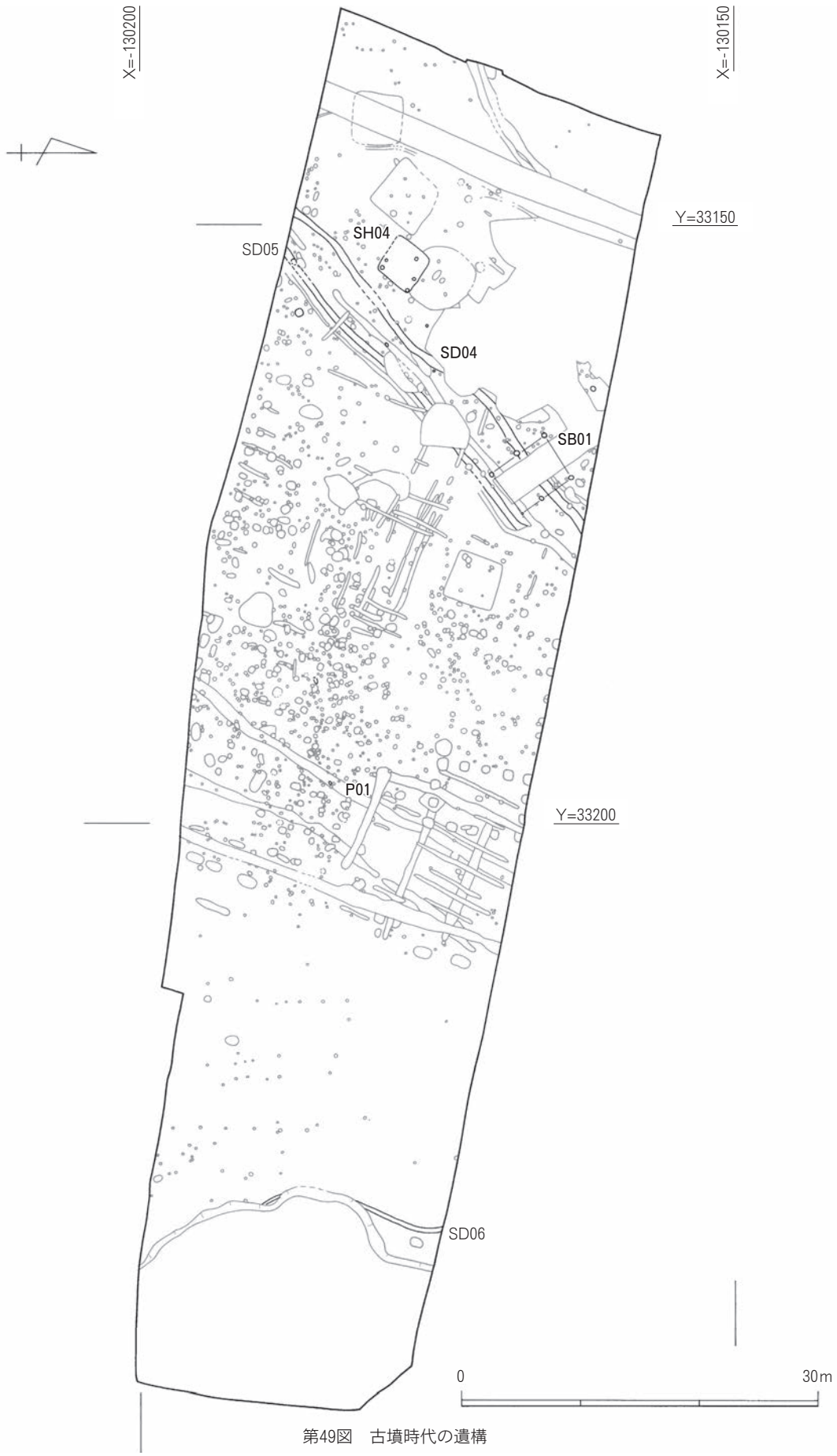


157　　SH01出土土器
158～160　SH02出土土器

161～168　SH03 出土土器

169～182　SD01出土土器
183　　SD03出土土器
184　　包含層出土土器

第48図　弥生時代の土器



第49図　古墳時代の遺構

古墳時代

４．古墳時代後期の遺構と遺物

（１）概　　要

竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柱穴・溝状遺構を検出している。

（２）竪穴住居跡

１棟（ＳＨ04）検出した。

ＳＨ04（写真図版13・14・45）

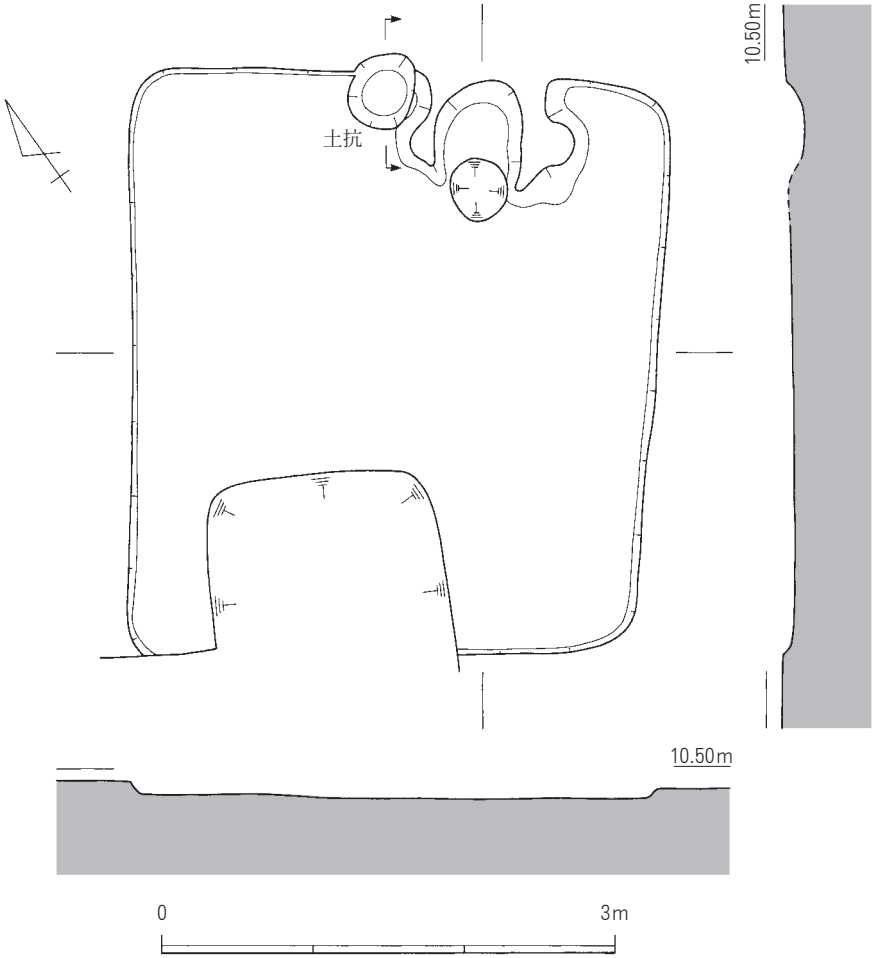
検出状況　調査区南西部で検出した（第49図）。ＳＤ04の西側に位置する。弥生時代の竪穴住居ＳＨ03と切り合い関係にあり、ＳＨ03を切っている。ただし、南半の1/2は撹乱を受け、南辺の大半は検出できなかった。

形状・規模　平面形は、主軸方向で3.80m、その直交方向で3.50mを測り、長方形を呈する（第50図）。各辺の規模は、北辺が3.50m、東辺が3.68m、南辺が3.40m、西辺が3.85mである。

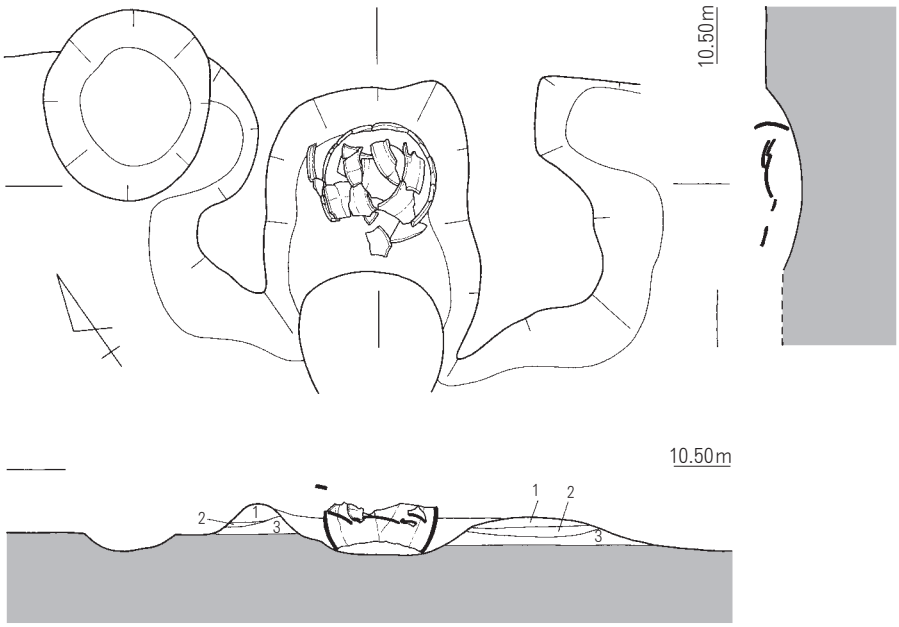
検出面からの深さはわずか７cmで、床面での標高は10.31mである。床面積は、11.5㎡である。

屋内施設　カマドと土坑を検出している。主柱穴および周壁溝は検出されなかった。

カマド　住居跡北辺中央部より東側で検出した（第50図）。住居跡北辺より半環状に土手がのび、



第50図　ＳＨ04



１．褐灰色シルト混じり細砂（盛土）
２．炭層・灰層
３．黄褐灰色シルト混じり細砂（盛土）

0　1m

第51図　ＳＨ04カマド

その間が浅く掘り窪められている（第51図）。ただし、焚口付近は、後世の柱穴に切られている。

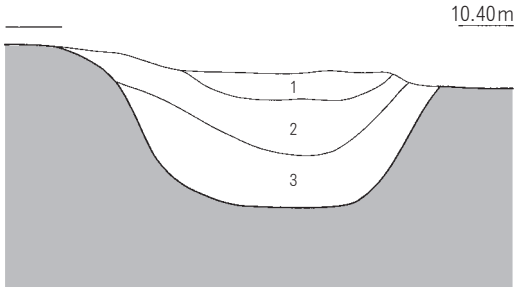
土手は、２層の盛土から成形されており、盛土と盛土の間には炭層・灰層が認められた。幾度か造り直されているものと考えられる。

土手の規模は、基底部における北辺からの長さは、西側で72cm、東側で84cmを測り、それぞれの床面レベルでの幅は、西側で32cm、東側で63cmである。土手内側床面レベルでの規模は36cmを測り、土手間最深部との比高は13cmである。また、土手中央部における住居跡床面との比高は両側とも８cmである。

土手に囲まれた凹地北端部には、土師器の甕（192）が、胴部で打ち欠かれ、倒立した状態で検出された。支脚としての機能をなしていたものと考えられる。

土　　坑　住居跡北辺中央部で１基検出した。カマドの西側に隣接する。当初、住居跡北辺からはみ出す形で検出されたため、当住居跡を切る遺構と考えていたが、①住居跡プラン確認レベルでは土坑全体のプランが確認できなかったこと、②土坑内出土土器が住居跡の時期と同じであることなどから、当住居跡に伴う遺構と判断したものである。

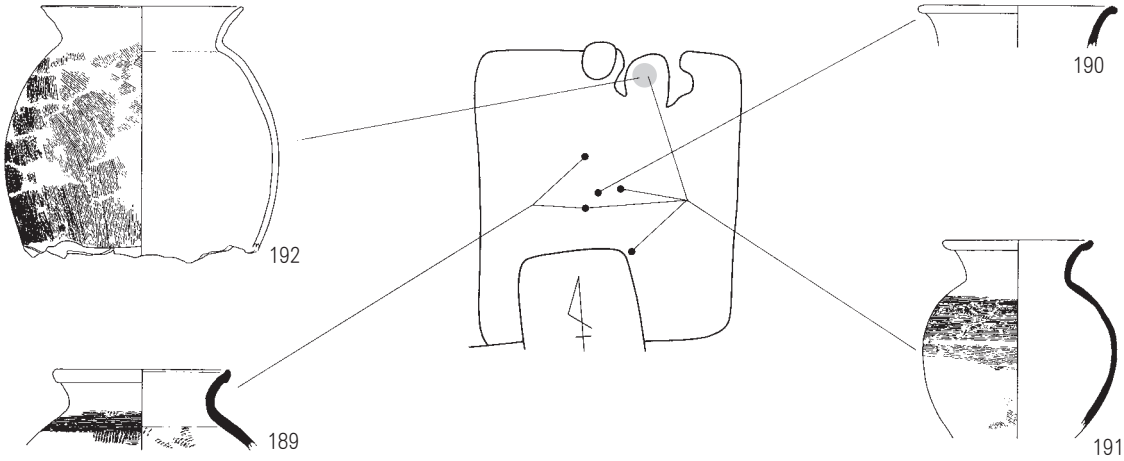
平面形は楕円形をなし、その規模は主



１．暗茶褐色シルト質極細砂
２．暗灰色シルト質極細砂（焼土・炭片含む）
３．暗黄灰色シルト質極細砂

0　50cm

第52図　ＳＨ04内土坑



第53図　ＳＨ04内土器出土位置

軸方向で56cm、その直交方向で45cmを測る。横断面は逆台形をなし、住居跡検出面からの深さは21cm、床面からの深さは15cmを測る。埋土は３層からなり、第２層については、北側から流れ込んだ状況が認められ、焼土・炭片が比較的多く含まれていた（第52図）。

埋没状況　暗褐灰色シルト混じり極細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

土器出土状況　当住居跡出土土器の多くは、192がカマド内から出土した以外は、住居跡中央部の床面から集中して出土している（第53図）。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している。

須恵器　杯蓋・杯身・壺が出土している（第59図）。

杯蓋　185～187の３点出土している。いずれも特徴を同じくするもので、天井部のヘラ削りの範囲が、約2/3まで及んでいる。

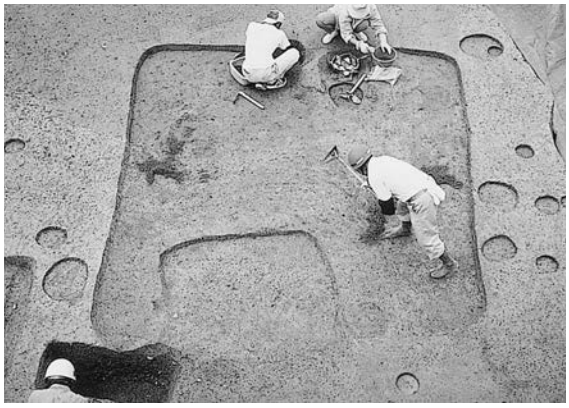
杯身　188の１点出土している。口縁端部の特徴が、杯蓋より若干新しい傾向にある。

壺　189～191の３個体出土している。３個体ともほぼ同タイプの壺と考えられるが、口縁端部の特徴が、若干異なる。外面の叩きは、平行叩きが一定方向に施されている。

土師器　甕（192）と高坏が出土している。192は、長胴タイプの甕と考えられるが、前述したとおり体部下半が打ち欠かれている。口縁部外面には、口縁部整形のための指頭圧痕がわずかに認められる。体部外面は、ていねいなハケ調整により仕上げられている。

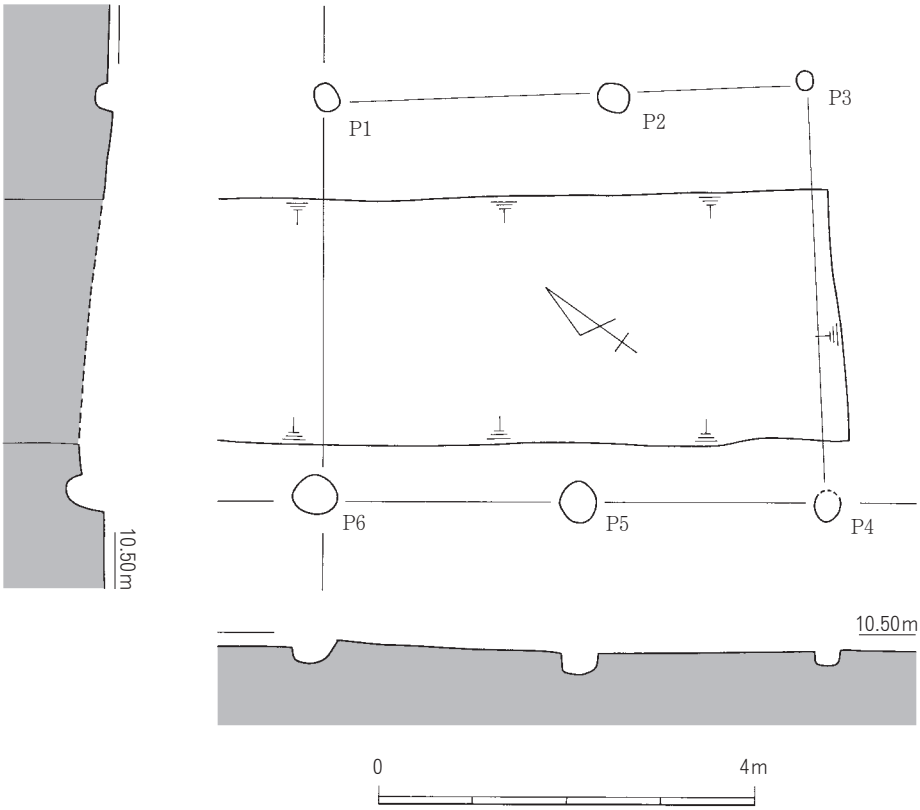
なお、高坏は脚柱部片が１点出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、古墳時代後期（ＭＴ15型式）と考えられる。



第54図　ＳＨ04の検出

古墳時代



第55図　ＳＢ01

（３）掘立柱建物跡

１棟（ＳＢ01）検出した。

ＳＢ01

検出状況　調査区中央北西部で検出した（第49図）。ＳＤ05の北西側に位置し、ＳＤ04と平面的に一致する。これらの溝とは、棟軸方向がほぼ同じである。Ｐ４が柱穴に切られている以外、明確な他の遺構との切り合い関係は認められない。なお、当建物の中央部3/4ほどは、後世の撹乱を受けている。

建物　桁行２間の側柱建物と考えられる（第55図）。梁行方向については、前述したように大きな撹乱を受けており、１間なのか２間なのか明確にできない。南西桁行を基準とした棟軸方向は、N37°30″Wを示す。各柱穴間の距離は第12表のとおりである。

第12表　ＳＢ01　建物・柱穴規模一覧表

	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北桁行	Ｐ１-Ｐ２	3.05	5.10	2.55
	Ｐ２-Ｐ３	2.05		
東梁行	Ｐ３-Ｐ４	4.50	4.50	4.50
南桁行	Ｐ４-Ｐ５	2.70	5.50	2.75
	Ｐ５-Ｐ６	2.80		
西梁行	Ｐ６-Ｐ１	4.25	4.25	4.25

柱穴番号	柱穴規模（cm）	柱痕規模（cm）	深さ（cm）
Ｐ１	25.0	－	11.0
Ｐ２	23.0	－	10.5
Ｐ３	18.0	－	10.0
Ｐ４	28.0	－	13.5
Ｐ５	30.0	－	20.0
Ｐ６	47.0	－	17.8

柱　　穴　　平面形は円形を指向するが、全体的に歪んだ形状である。各柱穴の規模は第12表のとおりである。

出土遺物　　Ｐ６から須恵器の杯身と土師器の高坏が出土している。いずれも小片のため、図化できなかった。

時　　期　　出土遺物から判断して、古墳時代後期（飛鳥Ⅰ）と考えられる。

（４）柱　　穴

当該期の柱穴については、多くは検出されておらず、調査区中央部から西側にかけて散在する。このため、建物を復元することはできなかった。ただし、これらの柱穴のなかで、比較的良好な遺物が出土したものがある。そこで、本項では、この柱穴の出土遺物を中心に報告する。

Ｐ01

検出状況　　調査区中央部東側で検出した（第49図）。

出土遺物　　須恵器の杯蓋（193）が出土している（第59図）。口縁部のみの小片である。

時　　期　　出土遺物から判断して、古墳時代後期（飛鳥Ⅰ期）と考えられる。

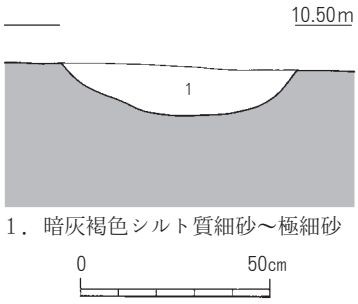
（５）溝状遺構

３条（ＳＤ04～ＳＤ06）検出した。

ＳＤ04（写真図版15）

検出状況　　調査区中央部西側で検出した（第49図）。ＳＨ04の東側に位置する。また、ＳＤ05の西側に位置し、ほぼ平行する。北東－南西方向に直線的に伸びる溝で、両端とも調査区外まで伸びている。部分的に後世の撹乱を受けているが、明確な遺構相互の切り合い関係は認められない。

形状・規模　　全長36.50m検出した。横断面は浅い皿形もしくは逆台形をなし、検出面における幅は48cm～81cmを測る。最深部における検出面からの深さは10cmである。底部の標高は、北東端で10.27m、南西端で10.21mと、わずかに南西側へ傾斜している。



第56図　ＳＤ04

埋没状況　　暗灰褐色シルト質細砂～極細砂１層からなる（第56図）。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　　土師器・須恵器・製塩土器が出土している（第59図）。

土師器　　皿と甕の体部片が出土している。甕は、長胴タイプに分類されるものである。いずれも小片のため、図化はできなかった。

須恵器　　杯Ｈ（196）・杯蓋・甕が出土しているが、杯蓋と甕については、小片のため図化できなかった。196は、天井部の約2/3にヘラ削りが及んでいる。杯蓋はＴＫ217型式に位置付けられるものである。甕は、口縁部と体部片が出土している。

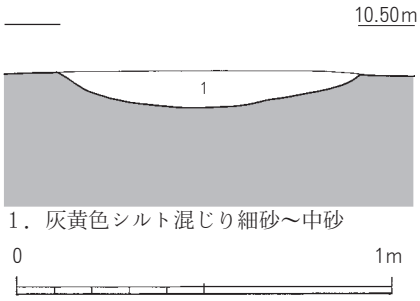
製塩土器　　焼塩壺（197）が出土している。小片のため、図化はできなかった。

時　　期　　出土遺物から判断して、古墳時代後期（飛鳥Ⅱ期）と考えられる。

ＳＤ05（写真図版15）

検出状況　調査区中央部西側で検出した（第49図）。ＳＨ05の西側に位置する。北東－南西方向にほぼ直線的に伸びる溝で、両端とも調査区外までのびている。奈良時代の遺構（ＳＤ14）に一部切られている以外、明確な遺構との切り合い関係は認められないが、後世の撹乱を受け、数箇所で寸断されている。

形状・規模　全長36.20ｍ検出した。横断面は浅いⅢ形をなし、検出面における幅は38cm～82cmを測る。最深部における検出面からの深さは９cmである。底部の標高は、北東端で10.23ｍ、南西端で10.21ｍと、南西側へわずかに傾斜している。



第57図　ＳＤ05

埋没状況　灰黄色シルト混じり細砂～中砂１層からなる（第57図）。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している（第59図）。

土師器　杯と甕の体部片が出土している。いずれも小片のため、図化はできなかった。

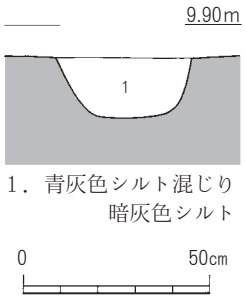
須恵器　杯Ａが１点（195）出土している。杯Ｈ蓋の可能性も考えられるが、口縁部の形態から杯と判断した。底部はヘラ切り未調整である。

時期　出土遺物から判断して、古墳時代後期（飛鳥Ⅲ期）と考えられる。

ＳＤ06（写真図版15）

検出状況　調査区東部で検出した（第49図）。微凹地の西側に位置する。南北方向に蛇行気味に伸びる溝で、南端部は微凹地肩部に切られている。北端部は調査区外まで伸びている。

形状・規模　全長17.00ｍ検出した。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は28cm～40cmを測る。最深部における検出面からの深さは12cmである。底部の標高は、北端部で9.58ｍ、南端部で9.64ｍと北側へ傾斜している。



第58図　ＳＤ06

埋没状況　青灰色シルト混じり暗灰色シルト１層からなる（第58図）。層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の小片と、須恵器の甕の体部片が出土している。いずれも図化はできなかった。

時期　出土遺物から判断して、古墳時代後期（ＴＫ217型式）と考えられる。

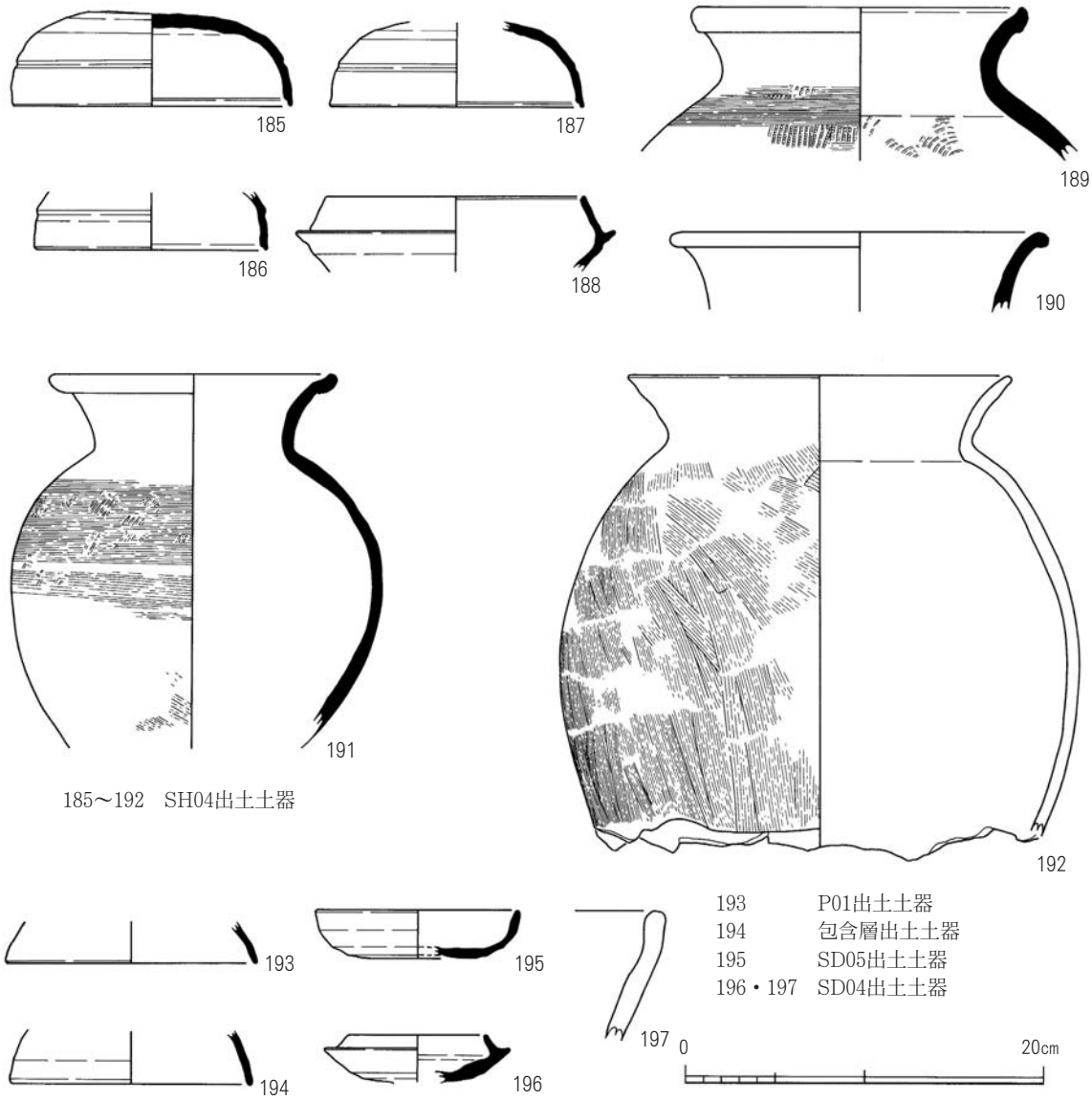
（６）その他

包含層出土土器　当該期の包含層から出土した土器について報告する。ここで報告するのは、194の１個体である（第59図）。須恵器の杯蓋で、Ｐ01出土土器（193）と同タイプに分類されるものである。

第13表　古墳時代の土器観察表

No.	種　別	器　種	遺構名	法　量（cm）						器高	焼成	色　調
				口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
185	須恵器	杯蓋	ＳＨ04	15.40				5.30		口縁部3/4・天井部完存	良好	灰
186	須恵器	杯蓋	ＳＨ04	12.85				3.20		口縁部1/8	良好	灰
187	須恵器	杯蓋	ＳＨ04	14.10				4.75		口縁部1/4	やや不良	灰
188	須恵器	杯身	ＳＨ04	14.25		17.80		4.20		口縁部1/7	やや不良	灰
189	須恵器	壺	ＳＨ04	18.20	15.30			8.60		口縁部～頸部1/5	不良	黄灰～灰黄
190	須恵器	壺	ＳＨ04	19.90				4.40		口縁部1/6	やや不良	灰
191	須恵器	壺	ＳＨ04	15.20	11.20	20.65		21.00		口縁部若干・頸部1/2・体部3/4	やや不良	灰白
192	土師器	甕	ＳＨ04	20.60	16.90	28.90		27.20		口縁部2/3・体部1/2		にぶい黄橙～橙
193	須恵器	杯蓋	Ｐ01	13.90				2.30		口縁部1/9	良好	灰白
194	須恵器	杯蓋	包含層	13.40				3.00		口縁部1/7	良好	灰～灰白
195	須恵器	杯Ａ	ＳＤ05	11.20			7.10	2.65		1/6	良好	灰～灰白
196	須恵器	杯身	ＳＤ04	7.60		10.40	6.10	2.70		口縁部1/6	良好	灰～灰白
197	製塩土器	焼塩壺	ＳＤ04					7.25		口縁部～体部わずか		灰白～淡黄

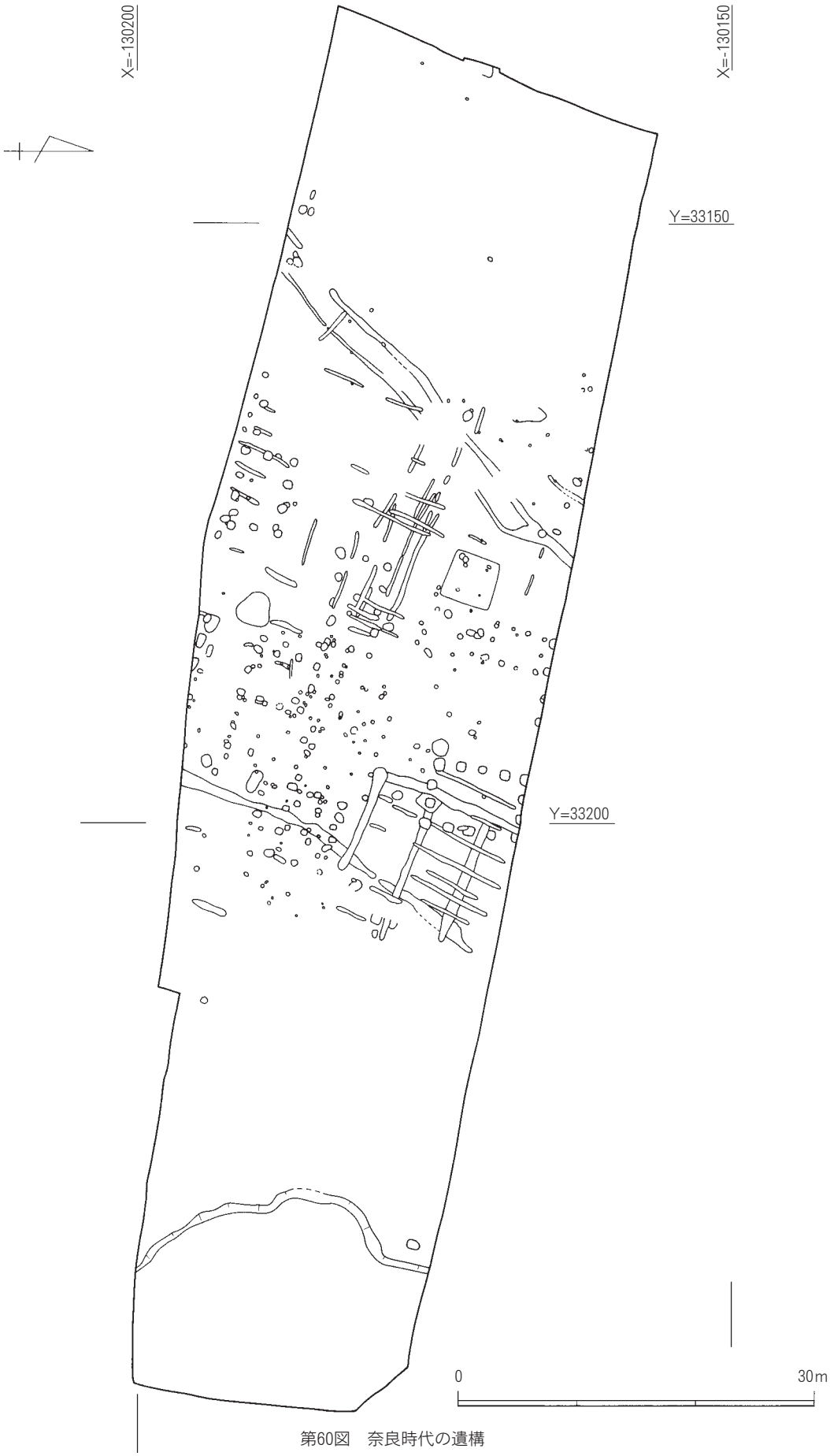
胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
	外面：天井部回転ヘラ削り・口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		59	45
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		59	－
	外面：天井部回転ヘラ削り・口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		59	45
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		59	－
	外面：体部叩き→カキメ・口縁部回転ナデ調整。 内面：体部～頸部同心円文→ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。		59	－
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		59	－
	外面：体部叩き整形→下半ナデ調整・口頸部回転ナデ調整 →体部上半カキメ。 内面：体部同心円文→ナデ調整→口頸部回転ナデ調整。		59	45
0.5～1.5㎜大の長石・チャート・石英・クサリレキ多く含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部指オサエ・ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		59	45
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		59	－
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		59	－
	外面：外底部ヘラ切り→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		59	－
	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		59	－
１～４㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：指オサエ・ナデ調整。 内面：指オサエ・ナデ調整。		59	－



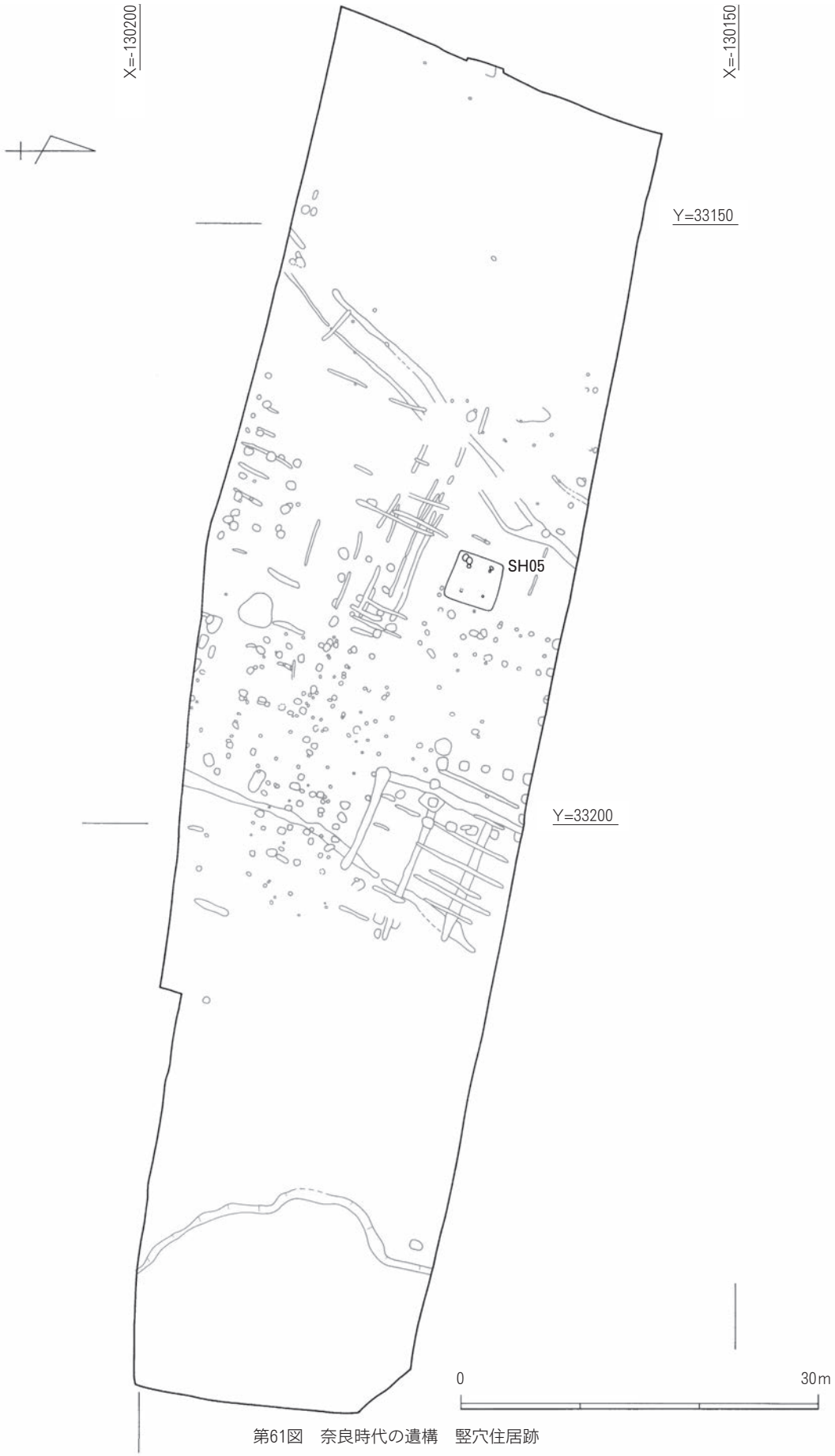
185～192　SH04出土土器

193　P01出土土器
194　包含層出土土器
195　SD05出土土器
196・197　SD04出土土器

第59図　古墳時代の土器



第60図　奈良時代の遺構



第61図　奈良時代の遺構　竪穴住居跡

５．奈良時代～平安時代前期の遺構と遺物

（１）概　　要

今回の調査で、当該期の遺構・遺物が最も多く検出されている。遺構としては、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柱穴・井戸・土坑・溝状遺構・畠を検出している（第60図）。

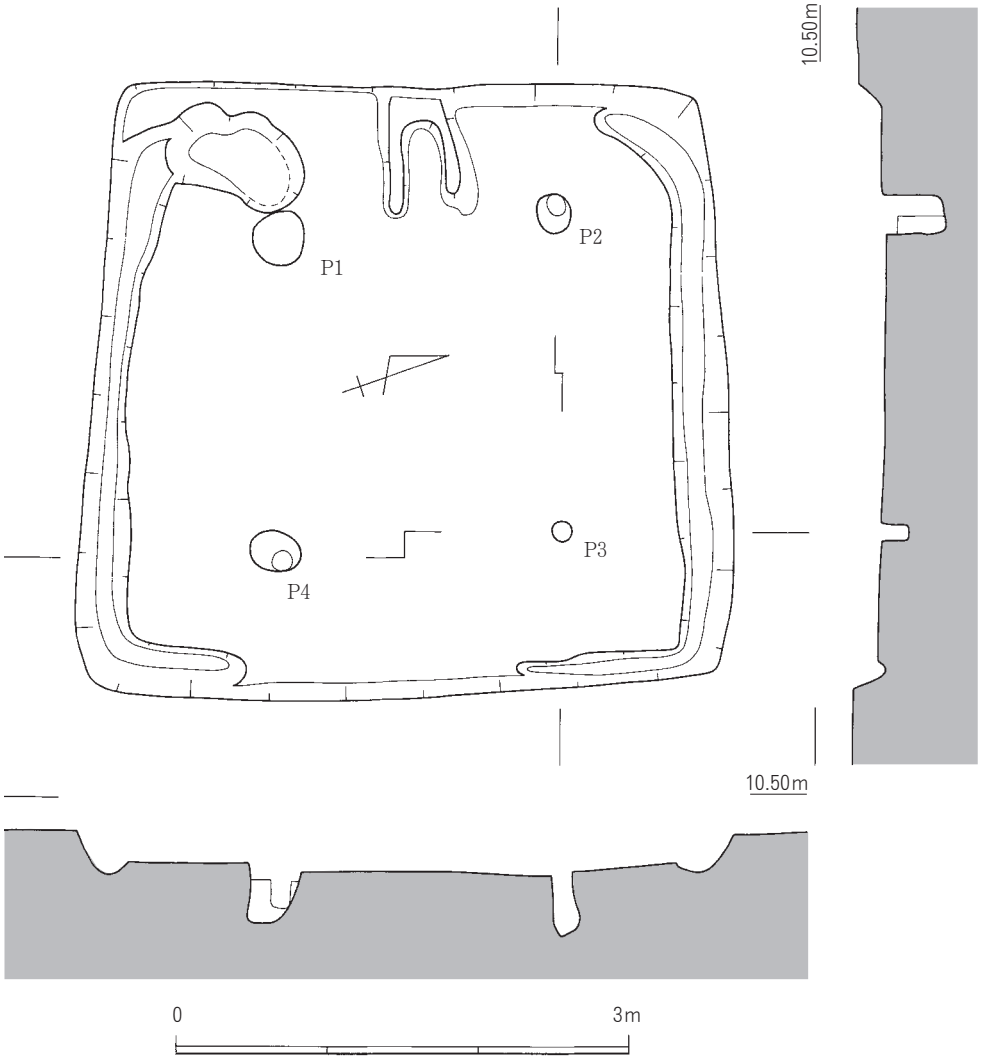
（２）竪 穴 住 居

１棟（ＳＨ05）検出した（第61図）。

ＳＨ05（写真図版16～18・45～47）

検出状況　調査区中央部北側で検出した（第61図）。ＳＢ05の西側、畠４の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、住居跡全体が検出されている。

形状・規模　平面形は、主軸方向で4.03ｍ、その直交方向で4.22ｍを測り、ほぼ方形に近い形状をなす。各辺の規模は、北辺が3.80ｍ、東辺が4.20ｍ、南辺が4.03ｍ、西辺が3.70ｍである。検出面からの深さは18cmで、床面での標高は10.06ｍである。床面積は、15.35㎡である。



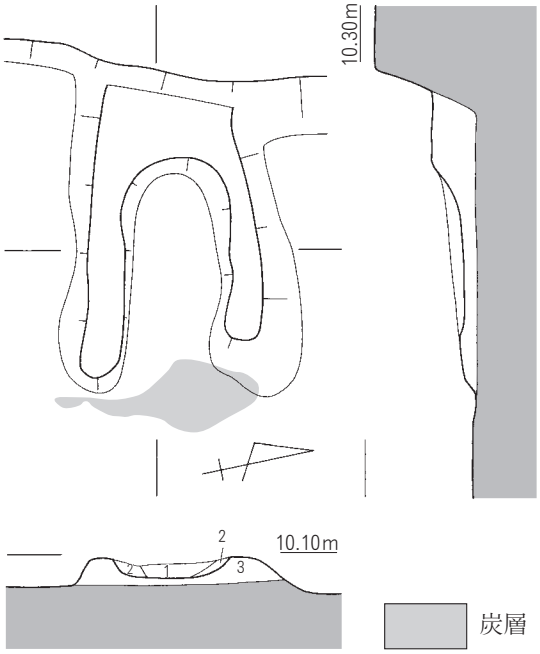
第62図　ＳＨ05

屋内施設　カマド・主柱穴・周壁溝・土坑を検出した（第62図）。

カ　マ　ド　住居跡西辺ほぼ中央部で検出した。住居跡北辺より半環状に土手がのび、その間が浅く掘り窪められ、焚口をなしている。全体的に盛土により成形されており、焚口内には焼土が堆積していた。

土手の底部、床面上には炭片が多く認められたことから、何度か造り替えられた可能性が考えられる。また、焚口前面には、炭の集中が50cm×20cmの範囲で認められた。

土手の規模は、西辺からの長さが、床面で85cmを測り、それぞれの床面での幅は、南側で19cm、北側で25cmである。焚口の規模は、主軸方向で62cm、その直交方向で25cmを測る。また、土手頂部との比高は５cmである。



１．灰橙色シルト質細砂（焼土）
２．淡黒灰色細砂～中砂（炭片含む）
３．灰黄色シルト混じり細砂（盛土）

0　1m

第63図　ＳＨ05内カマド

主　柱　穴　４穴（Ｐ１～Ｐ４）検出した。Ｐ１－Ｐ２間、Ｐ３－Ｐ４間が住居跡のラインと平行せず、４穴は平行四辺形をなす。各柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形をなす。各柱穴の床面での規模・深さは、Ｐ１が32cm・42cm、Ｐ２が20cm・42cm、Ｐ３が10cm・19cm、Ｐ４が30cm・45cmである。また、Ｐ２とＰ３では柱痕を確認することができ、その径は、Ｐ２が13cm、Ｐ４が10cmである。

柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間が1.86m、Ｐ２－Ｐ３間が2.10m、Ｐ３－Ｐ４間が1.90m、Ｐ４－Ｐ１間が2.10mである。

周　壁　溝　北辺と南辺を中心に検出した。西辺ではほとんど認められず、東辺では中央部を除く東辺の約1/3で検出した。また、南西隅は、土坑に合流している。床面での幅は30cmを測り、最深部での床面からの深さはわずか６～８cmである。

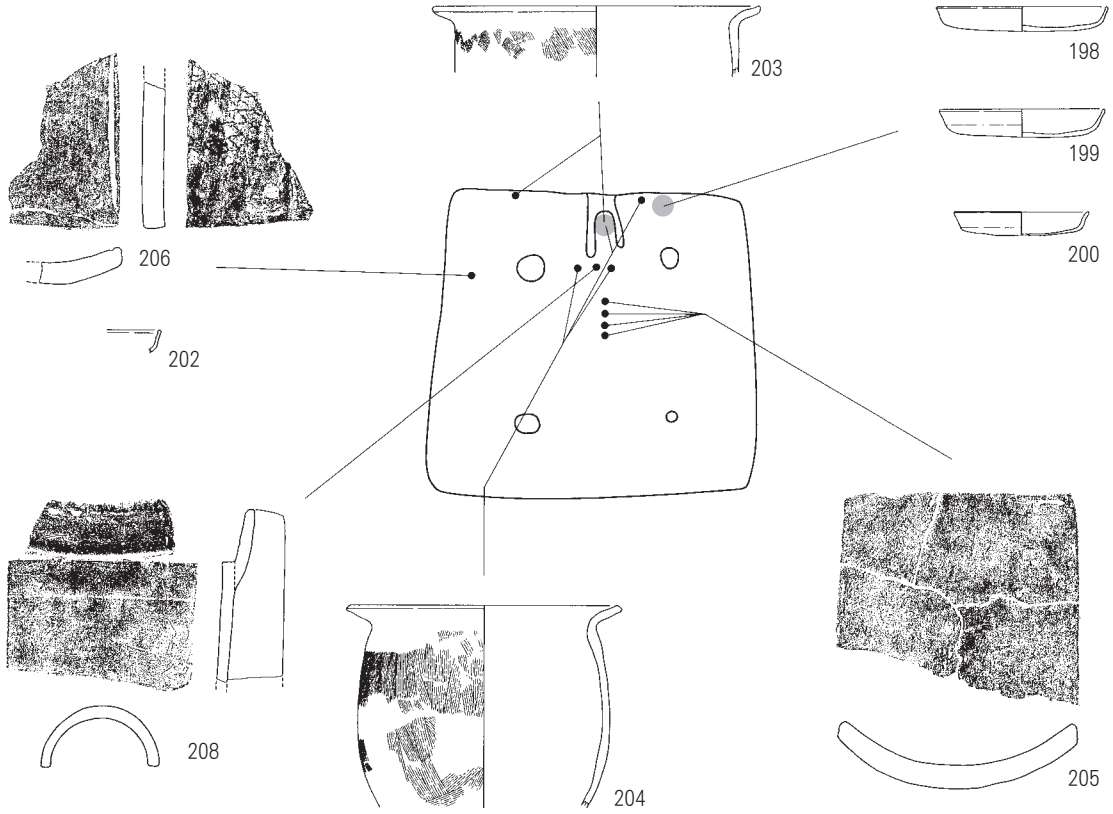
土　　坑　住居跡南西隅で１基検出した。部分的に歪な形状をなすが、全体的には長楕円形傾向にある。床面での規模は、長軸方向で96cm、その直交方向で46cmを測り、最深部における床面からの深さは14cmである。

埋没状況　黄褐色細砂混じり暗灰色シルト質極細砂１層からなる。

土器出土状況　当住居跡出土土器の多くは、カマドを中心とした床面上から出土している（第64図）。特に、平瓦の出土状況は、床面に敷かれたような状況を示している。

出土遺物　土師器・須恵器・瓦類が出土している（第117図・第118図）。

土　師　器　皿（198～201）・杯（202）・甕（203・204）・カマドが出土している。



第64図　ＳＨ05内遺物出土位置

皿　　基本的には同タイプのもので、調整も同技法によっている。ただし、口縁端部の仕上げは、198・199・201が内側端部に親指を当てるようなナデ調整により仕上げるのに対して、200はやや外反させるようなナデ調整により仕上げられている。いずれも、残存状況が良好ではないため、暗文の有無を判断することはできなかった。

杯　　わずかに口縁部片が残存する。口径を復元できないため、皿に分類される可能性もあるが、ここでは杯として報告する。口縁端部は、内端部に強い横ナデ調整を施すことにより、内端部は沈線状に窪んでいる。皿同様、暗文を観察することはできなかった。

甕　　２個体とも長胴タイプに分類されるものである。調整技法も同じである。ただし、口縁端部の形態は若干異なり、203は端部がわずかにつまみあげられるのに対して、204は外方向へつまみ出すようなナデにより端面が外傾する。

カマド　　小片のため図化できなかったが、焚口の小片が出土している。

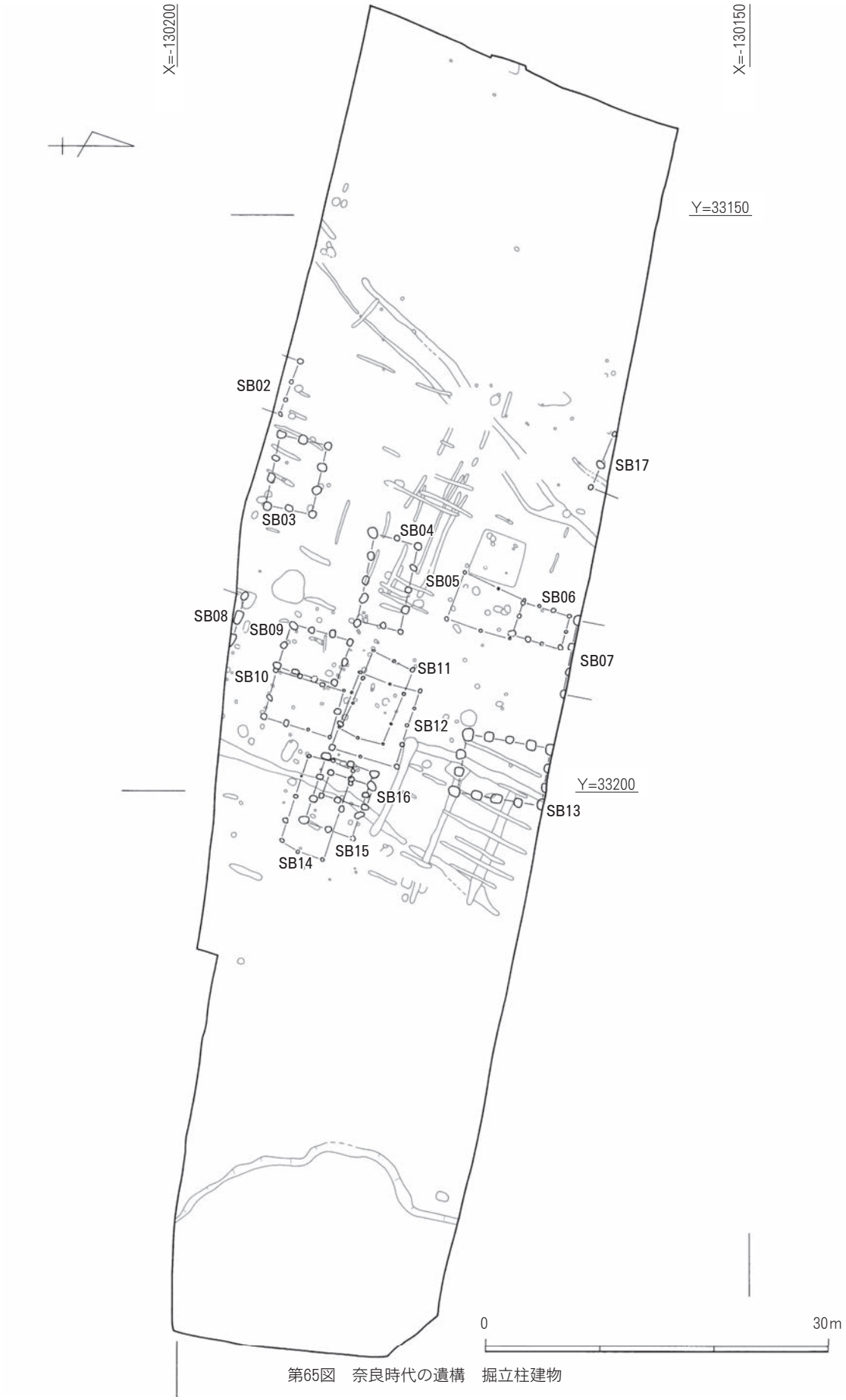
須恵器　　甕の底部片・杯Ｂ蓋の一部が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。土師器に比べて、その出土量もわずかである。

瓦　　平瓦（205・206）と丸瓦（208）が出土している。

平瓦　　205は、狭端面から両側面にかけて残存する。凸面はわずかに格子状の叩きを観察することができる。206は、広端部隅を中心に残存する。凸面は格子叩きが施されている。

丸瓦　　208は、玉縁式に分類されるもので、玉縁を中心に残存する。

時期　　第５章第２節における検討結果から、奈良時代中期（Ｉ－２期）に位置付けられる。



第65図　奈良時代の遺構　掘立柱建物

（３）掘立柱建物跡

16棟（ＳＢ02～ＳＢ17）検出した。これらの建物は、平面的な重複が認められ、棟軸方向に違いが認められることから、数期にわたって建てられたものと考えられる。

ＳＢ02

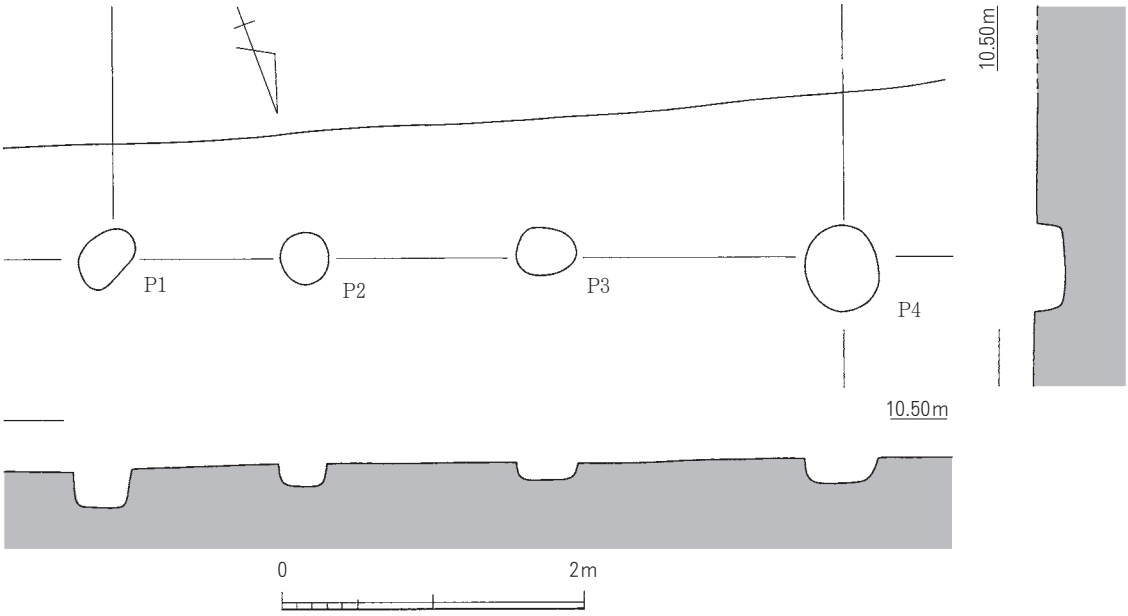
検出状況　調査区中央部南端で検出した（第65図）。ＳＢ03の南西・畠１の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められないが、検出できたのは建物の北桁行のみで、当建物の大半は調査区外に拡がっている。

建　　物　桁行３間の側柱建物と考えられる（第66図）。梁行方向については、１穴も検出できなかったため、その規模を明らかにすることはできない。北桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ70°Ｗを示す。各柱穴間の距離は第14表のとおりである。

柱　　穴　平面形は円形を指向する。当該期の柱穴としては、比較的小規模である。各柱穴の規模等は第14表のとおりである。

出土遺物　Ｐ４から須恵器の甕の体部片、土師器の杯が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時　　期　第５章第２節における検討結果から、奈良時代後期（Ⅱ－１期）に位置付けられる。

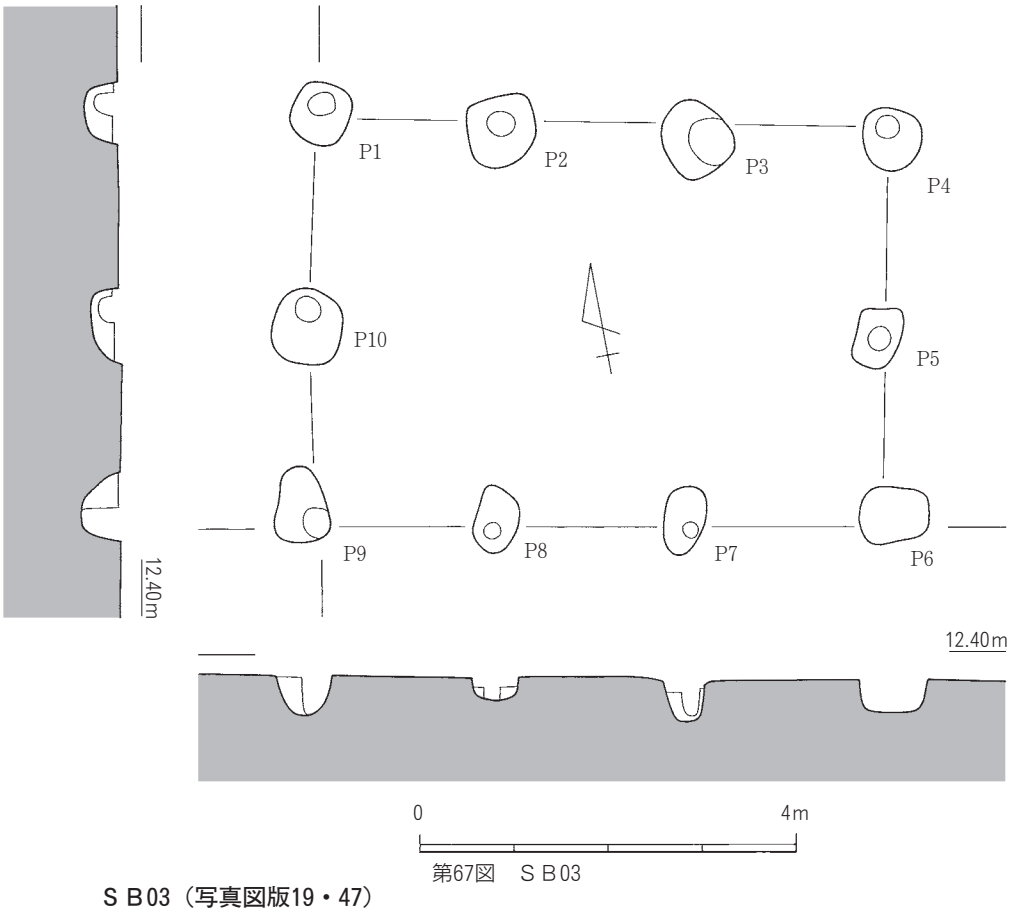


第66図　ＳＢ02

第14表　SB02　建物・柱穴規模一覧表

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	1.34	4.96	1.65
	Ｐ２－Ｐ３	1.64		
	Ｐ３－Ｐ４	1.98		

柱穴番号	柱穴規模（cm）	柱痕規模（cm）	深　さ（cm）
Ｐ１	28.0	－	21.1
Ｐ２	32.0	－	13.8
Ｐ３	40.0	－	10.5
Ｐ４	48.0	－	13.8



第67図　ＳＢ03

ＳＢ03（写真図版19・47）

検出状況　　調査区中央部南端で検出した（第65図）。当建物は調査区内におさまり、全体が検出されている。ＳＢ02の北東に位置する。畠１と平面的に重複し、本建物を構成する柱穴との切り合い関係から、畠１を切っている。

建　　物　　２間×３間の側柱建物である（第67図）。南桁行を基準とした棟軸方向は、N10°Wを示す。各柱穴間の距離等は第15表のとおりで、南桁行と西梁行を基準とした当建物の面積は26.5㎡である。

第15表　ＳＢ03　建物・柱穴規模一覧表

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	1.90		
	Ｐ２－Ｐ３	2.20		
	Ｐ３－Ｐ４	1.85	5.95	1.98
東梁行	Ｐ４－Ｐ５	2.25		
	Ｐ５－Ｐ６	1.90	4.15	2.07
南桁行	Ｐ６－Ｐ７	2.15		
	Ｐ７－Ｐ８	2.10		
	Ｐ８－Ｐ９	1.85	6.10	2.03
西梁行	Ｐ９－Ｐ10	2.20		
	Ｐ10－Ｐ１	2.15	4.35	2.17

柱穴番号	柱穴規模（㎝）	柱痕規模（㎝）	深　さ（㎝）
Ｐ１	60.0	24.0	33.5
Ｐ２	72.0	25.0	31.0
Ｐ３	70.0	44.0	59.0
Ｐ４	65.0	17.0	29.0
Ｐ５	40.0	10.0	42.0
Ｐ６	74.0	－	37.0
Ｐ７	40.0	13.0	39.0
Ｐ８	48.0	20.0	23.0
Ｐ９	64.0	40.0	43.0
Ｐ10	72.0	25.0	35.0

柱　　穴　　基本的に平面形は方形を指向するが、円形傾向の柱穴も認められる。このなかで、Ｐ６に関しては、当初土坑として調査を進めていったが、他の柱穴との位置関係およびその断面形から、当建物を構成する柱穴であるとの結論に至ったものである。このため、平面的に柱痕を確認することはできなかった。

また、Ｐ５においては、柱抜き取り後に12cm大の円礫が抜き取り穴内に埋められた状況を確認することができた。各柱穴の規模等は第15表のとおりである。

出土遺物　　須恵器と土師器が出土している（第118図）。これらの土器のなかで、Ｐ４から210～213が一括で出土している。

土師器　　杯（209・210・212）・皿（211）・甕が出土している。

杯は、２タイプに分類できる。209は口縁部を外側にわずかに折り返し、端部をわずかに上方につまみ上げるような横ナデ調整を加えている。一方、210と212については、端部をわずかに折り返し、内端部をつまむような横ナデ調整を加え、内端面がわずかに沈線状をなしている。

皿は、皿Ａと皿Ｂの２タイプが出土している。皿Ａは211の１個体である。暗文を観察することはできなかった。皿Ｂも、高台部を中心とした小片で、図化できなかった。

甕については、体部片・口縁部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。体部片には、外面に煤の付着が認められる。

須恵器　　杯Ａと杯Ｂ蓋が出土している。杯Ａは213の１個体である。杯Ｂ蓋については、小片のため図化できなかった。

時　　期　　第５章第２節における検討結果から、奈良時代中期（Ｉ－２期）に位置付けられる。

ＳＢ04（写真図版19・47）

検出状況　　調査区中央部西側で検出した（第65図）。当建物は調査区内におさまり、全体が検出されている。ＳＢ05の南側、ＳＢ09の北西側、ＳＢ11の西側に位置する。また、畠３・畠４・畠６と平面的に重複するが、本建物の柱穴の一部が畠３・畠６を構成する溝に切られている。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

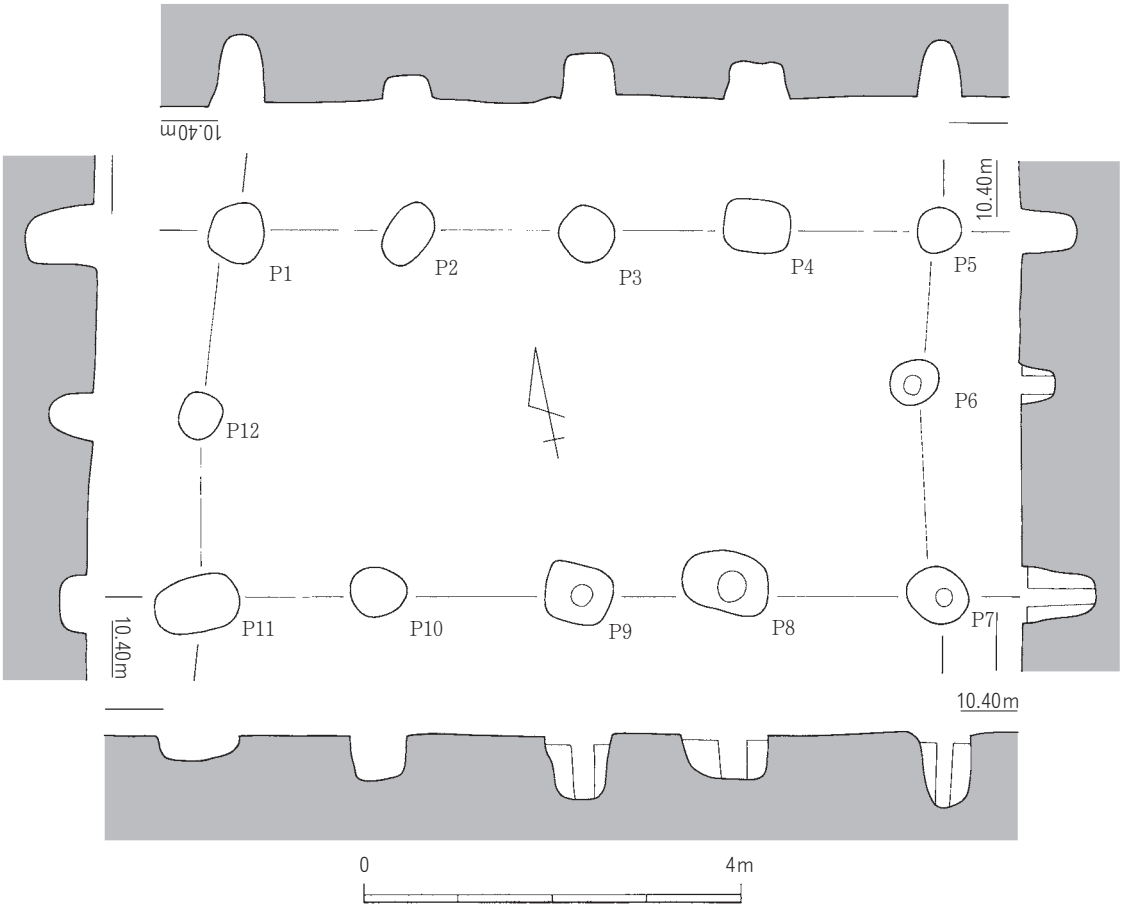
建　　物　　２間×４間の側柱建物である（第68図）。ただし、梁行方向の柱の並びは、やや乱れている。また、第16表のとおり、柱穴間の距離が一定していない。南桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ70°Ｗを示す。各柱穴間の距離等は第16表のとおりで、南桁行と東梁行を基準とした当建物の面積は、31.5㎡である。

柱　　穴　　平面形は方形を指向するものが大半であるが、いずれも歪んだ形状をなしている。また、柱穴平面の方向と建物棟軸方向が一致するものは、Ｐ４に限られる。規模は全体的に大型である。ただし、柱痕を確認できたのは、Ｐ６～Ｐ９の４穴に限られる。４穴のなかで、Ｐ８を除いては、掘り方の規模からすると、小規模である。

なお、各柱穴の規模等は第16表のとおりである。

出土遺物　　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　　杯の小片が出土している。胎土の特徴から、陶邑産の可能性が考えられる。ただし、小片のため図化できなかった。



第68図　ＳＢ04

土　師　器　　甕が出土している。図化できたのは、Ｐ７から出土した214のみである。完形に復元できる個体で、丸胴タイプの甕である。体部内面のナデ調整はていねいではなく、粘土紐痕が顕著に観察できる。また、体部外面には部分的に指オサエ痕が認められる。

時　　期　　第５章第２節における検討結果から、奈良時代中期（Ⅰ－２期）に位置付けられる。

第16表　ＳＢ04　建物・柱穴規模一覧表

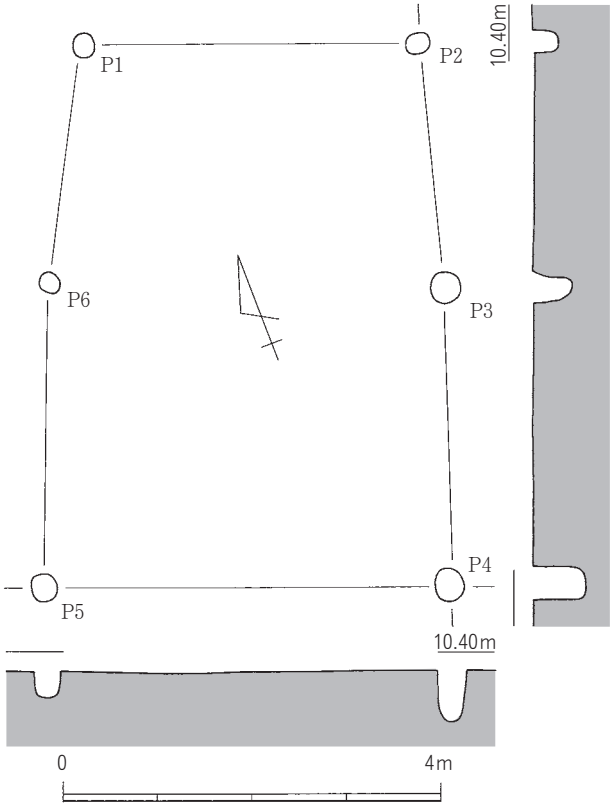
	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	1.80		
	Ｐ２－Ｐ３	1.90		
	Ｐ３－Ｐ４	1.85		
	Ｐ４－Ｐ５	1.95	7.50	1.87
東梁行	Ｐ５－Ｐ６	1.60		
	Ｐ６－Ｐ７	2.25	3.85	1.92
南桁行	Ｐ７－Ｐ８	2.25		
	Ｐ８－Ｐ９	1.63		
	Ｐ９－Ｐ10	2.20		
	Ｐ10－Ｐ11	1.90	7.98	1.99
西梁行	Ｐ11－Ｐ12	2.00		
	Ｐ12－Ｐ１	1.95	3.95	1.97

柱穴番号	柱穴規模（cm）	柱痕規模（cm）	深　さ（cm）
Ｐ１	55×65	－	75.0
Ｐ２	70×43	－	22.5
Ｐ３	55×55	－	44.0
Ｐ４	70×55	－	38.0
Ｐ５	45×45	－	59.0
Ｐ６	46×55	18.0	35.0
Ｐ７	55×65	18.0	36.0
Ｐ８	93×63	30.0	45.0
Ｐ９	70×60	22.0	67.0
Ｐ10	58×53	－	36.0
Ｐ11	90×58	－	24.0
Ｐ12	53×50	－	44.5

ＳＢ05

検出状況　調査区中央部北側で検出した（第65図）。当建物は調査区内におさまり、全体が検出されている。ＳＢ04の北側、ＳＢ06の南側、ＳＨ05の東側、畠４・畠６の北側に位置する。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

建物　１間×２間の側柱建物である（第69図）。北梁行と南梁行はほぼ平行するが、桁行方向に関しては、柱の並びは整然としていない。南梁行の直角方向を基準とした棟軸方向は、N20°Ｅを示す。各柱穴間の距離等は第17表のとおりで、南梁行と東桁行を基準とした当建物の面積は24.9㎡である。



第69図　ＳＢ05

柱穴　平面形は円形をなし、ほとんどが径30cm以下と小型の柱穴である。このため、柱痕を確認できた柱穴は認められない。各柱穴の規模等は第17表のとおりである。

出土遺物　須恵器・土師器・製塩土器が出土している。

須恵器　杯Ｂ（215）と杯の口縁部片が出土している（第118図）。後者については、小片のため図化できなかった。215は、底部のみの残存で、高台は回転ナデ調整により貼り付けられている。Ｐ４から出土している。

土師器　甕の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

製塩土器　焼塩壺の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　第５章第２節における検討結果から、奈良時代後期（Ⅱ－１期）に位置付けられる。

第17表　ＳＢ05建物・柱穴規模一覧表

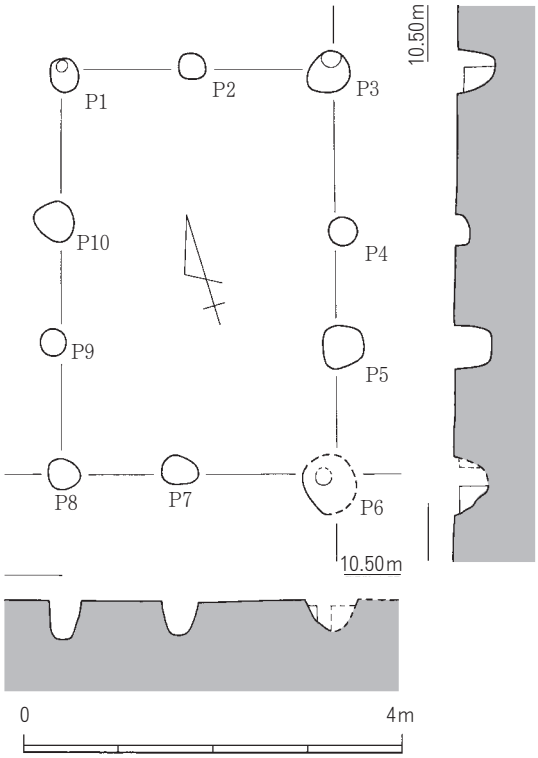
	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北梁行	Ｐ１－Ｐ２	3.50	3.50	3.50
東桁行	Ｐ２－Ｐ３	2.65	5.80	2.90
	Ｐ３－Ｐ４	3.15		
南梁行	Ｐ４－Ｐ５	4.30	4.30	4.30
西桁行	Ｐ５－Ｐ６	3.22	5.72	2.86
	Ｐ６－Ｐ１	2.50		

柱穴番号	柱穴規模（㎝）	柱痕規模（㎝）	深さ（㎝）
Ｐ１	23.0	－	47.0
Ｐ２	25.0	－	29.0
Ｐ３	32.0	－	41.0
Ｐ４	30.0	－	53.0
Ｐ５	26.0	－	25.0
Ｐ６	21.0	－	37.0

ＳＢ06（写真図版19・47）

検出状況　調査区中央部北側で検出した（第65図）。当建物は調査区内におさまり、全体が検出されている。ＳＢ05の北側、ＳＢ07の南側、ＳＨ05の北東側に位置し、ＳＢ07とは棟軸方向をほぼ同じくする。一部の柱穴が他の柱穴に切られている以外は、他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

建物　２間×３間の側柱建物である（第70図）。柱の並びはほぼ整然としており、東桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ18°Ｅを示す。各柱穴間の距離等は第18表のとおりで、南梁行と東桁行を基準とした当建物の面積は、11.9㎡である。



第70図　ＳＢ06

柱穴　平面形は方形を指向するものと、円形傾向にあるものとが混然としており、形状は一定していない。また、規模も全体的に小規模で、50cmを超えるものは認められない。柱痕を確認できたのは、Ｐ１・Ｐ３・Ｐ６の３穴に限られ、Ｐ３の22cmが最大と、いずれも小規模である。埋土は灰色系である。

なお、各柱穴の規模等は第18表のとおりである。

出土遺物　土器・瓦・石器が出土している。

土器　土師器の杯・甕（218）・堝（217）・カマド（219）と製塩土器が出土している（第118図）。217と219は、Ｐ６から製塩土器とともに出土している。なお、須恵器は出土していない。

第18表　ＳＢ06　建物・柱穴規模一覧表

	柱間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北梁行	Ｐ１－Ｐ２	1.37	2.87	1.44
	Ｐ２－Ｐ３	1.50		
東桁行	Ｐ３－Ｐ４	1.80	4.35	1.45
	Ｐ４－Ｐ５	1.20		
	Ｐ５－Ｐ６	1.35		
南梁行	Ｐ６－Ｐ７	1.50	2.75	1.38
	Ｐ７－Ｐ８	1.25		
西桁行	Ｐ８－Ｐ９	1.40	4.35	1.45
	Ｐ９－Ｐ10	1.30		
	Ｐ10－Ｐ１	1.65		

柱穴番号	柱穴規模（cm）	柱痕規模（cm）	深さ（cm）
Ｐ１	30×35	12.0	23.0
Ｐ２	27×26	－	60.9
Ｐ３	45×45	22.0	38.5
Ｐ４	30×30	－	15.0
Ｐ５	42×45	－	39.0
Ｐ６	－	17.0	36.0
Ｐ７	38×30	－	35.1
Ｐ８	32×33	－	41.0
Ｐ９	28×29	－	51.5
Ｐ10	42×42	－	41.8

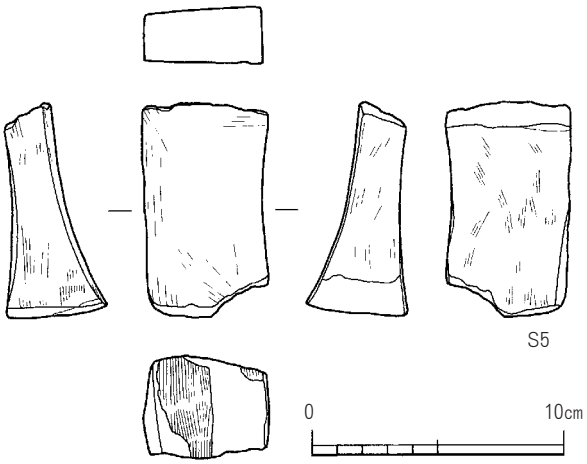
土　師　器　杯は、口縁部を中心とした小片で、図化はできなかった。甕は、218の１個体である。丸胴タイプの甕と考えられる。この他、外面に煤の付着した体部片も出土している。堝は、217の１個体を図化することができた。口縁端部は、強い横ナデ調整により凹線状をなしている。

カマドは、口縁部から把手にかけて残存する。把手は、幅8.20cm、長さ2.80cmを測り、口縁部下に貼付けられている。貼付けに際し、粘土の補強はわずかである。把手貼付け後、体部がハケ調整により仕上げられている。口縁端部は横ナデ調整により、外傾する端面を有する。

製塩土器　焼塩壺の小片が出土している。

瓦　Ｐ５から平瓦が出土している。凹面には布目を観察することができるが、凸面には叩き痕を観察することはできない。

石　器　Ｐ３から砥石（Ｓ５）が出土している（第71図）。流紋岩を転用したもので、４面が使用されている。全長8.42cm、幅5.00cm、厚さ4.0cmを測る。171.9ｇ。



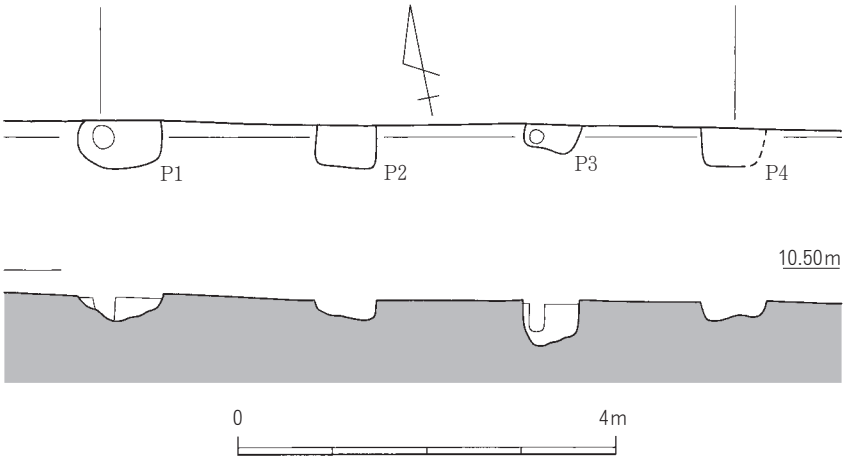
第71図　ＳＢ06－Ｐ３出土石器

時　期　第５章第２節における検討結果から、奈良時代中期（Ｉ－３期）に位置付けられる。

ＳＢ07（写真図版20）

検出状況　調査区中央部北側で検出した（第65図）。南桁行のみの検出で、大半は調査区北側に拡がっており、当建物の一部を検出したにとどまる。ＳＢ06の北側に位置し、ＳＢ06とは棟軸方向をほぼ同じくする。他の遺構との切り合い関係は、認められない。

建　物　桁行３間の側柱建物と考えられる（第72図）。梁行の規模については、明確にできない。南桁行を基準とした棟軸方向は、N75°Wを示す。各柱穴間の距離等は第19表のとおりである。



第72図　ＳＢ07

第19表　ＳＢ07　建物・柱穴規模一覧表

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
南桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.60	6.65	2.22
	Ｐ２－Ｐ３	2.00		
	Ｐ３－Ｐ４	2.05		

柱穴番号	柱穴規模（cm）	柱痕規模（cm）	深　さ（cm）
Ｐ１	90.0	22.0	25.0
Ｐ２	63.0	－	16.0
Ｐ３	58.0	15.0	47.0
Ｐ４	68.0	－	18.0

柱　　穴　　いずれの柱穴も、その北側半分が調査区外に拡がっており、柱穴全体を検出できたものは認められない。残存する限りにおいて、平面形は基本的に方形を指向する。このなかで、Ｐ１とＰ３で柱痕を確認することができた。埋土は灰褐色系である。

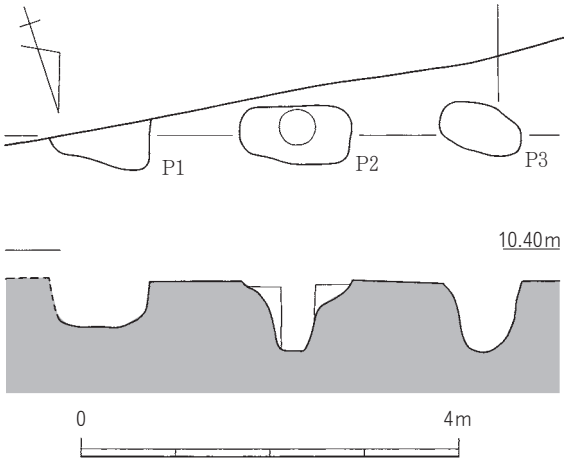
なお、各柱穴の規模等は第19表のとおりである。なお、第19表の柱穴の規模は、東西方向の規模を示したものである。

出土遺物　　土師器の杯Ａと製塩土器が出土している。杯Ａは口縁部を中心とした小片で、焼成は不十分である。製塩土器は、焼塩壷の小片が出土している。いずれも小片のため、図化できなかった。なお、須恵器は出土していない。

時　　期　　第５章第２節における検討結果から、奈良時代後期（Ⅱ－５期）に位置付けられる。

ＳＢ08

検出状況　　調査区中央部南側で検出した（第65図）。検出できたのは、直線的に並ぶ３穴（２間）のみである。柱穴の規模・形状がほぼ同じで、並びの方向が他の建物とほぼ同じであることから、建物の一部と判断したものである。ＳＢ09の南側、ＳＢ03の東側に位置し、両建物と棟軸方向をほぼ同じくする。ＳＤ22と切り合い関係にあり、ＳＤ22を切っている。



第73図　ＳＢ08

建　　物　　建物大半は調査区南側に拡がっており、建物の一部を検出したにとどまる（第73図）。このため、梁行にあたるのか桁行に当たるのかも、判断できない。３穴を基準とした棟軸方向は、Ｎ72°Ｗを示す。各柱穴間の距離は第20表のとおりである。

第20表　ＳＢ08　建物・柱穴規模一覧表

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
南桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.15	4.15	2.08
	Ｐ２－Ｐ３	2.00		

柱穴番号	柱穴規模（cm）	柱痕規模（cm）	深　さ（cm）
Ｐ１	1.05×α	－	50.0
Ｐ２	1.18×0.60	38.0	75.0
Ｐ３	0.9×0.52	－	73.0

柱　　穴　　柱穴全体を検出できたのは、Ｐ２とＰ３に限られ、Ｐ１については一部を検出したにとどまる。Ｐ２については、当初土坑と判断して調査を進めていったが、Ｐ１とＰ３と直線的に並び、かつ断面観察において柱痕を確認できたことから、柱穴と判断するに至ったものである。平面形は、いずれも長方形傾向にあり、一辺１ｍを超える大型の柱穴である。

なお、各柱穴の規模等は第20表のとおりである。

出土遺物　　須恵器・土師器・瓦が出土している。

須恵器　　ⅢＡ（216）と杯Ｂ蓋が出土している（第118図）。216は、Ｐ１から出土したもので、口縁部外面には、工具痕らしき痕跡が認められる。杯Ｂ蓋については、小片のため図化できなかった。

土師器　　甕の体部片が出土している。外面には煤の付着が認められる。

瓦　　丸瓦の一部が出土している。凹面には布目が観察される。

時　　期　　第５章第２節における検討結果から、奈良時代中期（Ⅰ－３期）に位置付けられる。

ＳＢ09（写真図版20・48）

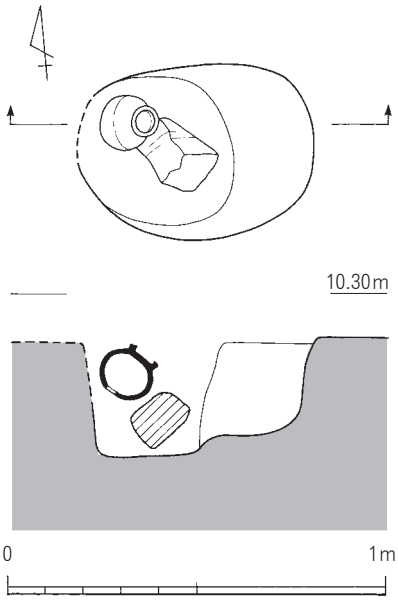
検出状況　　調査区中央部南側で検出した（第65図）。当建物は調査区内におさまり、全体が検出されている。ＳＢ08の北側、ＳＢ10の西側、ＳＢ11の南側に位置する。特に、ＳＢ10とは棟軸方向を同じくし、近接している。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

第74図　ＳＢ09の検出

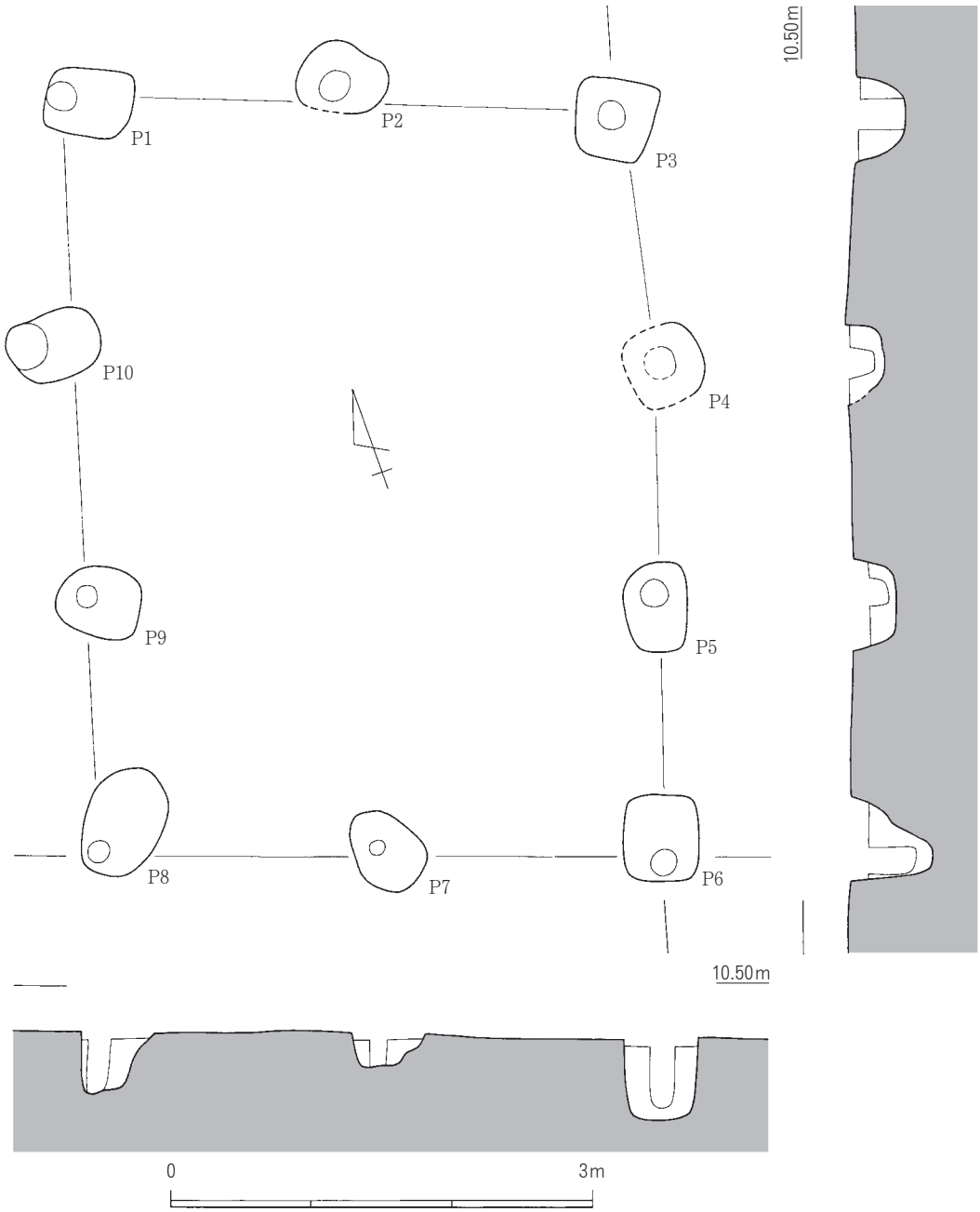
建　　物　　２間×３間の側柱建物である（第76図）。柱の並びは、部分的に整然としていない箇所も認められる。南梁行の直角方向を基準とした棟軸方向は、Ｎ20°Ｅを示す。各柱穴間の距離等は第21表の通りで、南梁行と西桁行を基準とした当建物の面積は、21.7㎡である。

柱　　穴　　基本的に平面形は方形を指向するが、楕円形に近い柱穴も認められる。また、全体的に方形傾向の柱穴の主軸方向は、棟軸方向と一致しない傾向にある。いずれの柱穴においても、その断面観察の結果、柱を建てるため、周囲の土がつき固められていた（写真図版20）。

この他、Ｐ８においては、柱抜き取り後人頭大の扁平な円礫が埋められた様子を観察することができた。Ｐ10では、柱抜き取り後に頸部で打ち欠かれた須恵器の壺（223）が、角礫とともに入れられていた（第75図）。なお、各柱穴の規模等は第21表のとおりである。



第75図　ＳＢ09－Ｐ10



第76図　ＳＢ09

出土遺物　　須恵器・土師器・製塩土器が出土している（第118図）。

須恵器　杯Ｂ蓋（222）・杯・壺Ｌ（223）が出土している。

222は口縁部の小片で、Ｐ５から出土している。223は、頸部以上を欠くが、体部以下は完存する。高台は、強い横ナデ調整により貼付けられ、整形されている。体部内面は、頸部が狭小のため観察できない。杯は、口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

土師器　皿（220）・杯・甕・カマド（221・224）の各器種が出土している。

皿は、220の１個体である。杯は、Ｐ９から出土しているが、小片のため図化できなかった。口縁端部内面は、強い横ナデ調整により、沈線状をなしている。

カマドは、221がＰ１から、224がＰ９から出土している。221は底部の小片である。224（写真図版48）は焚口側部の小片である。

第21表　ＳＢ09　建物・柱穴規模一覧表

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北梁行	Ｐ１－Ｐ２	1.90	3.90	1.95
	Ｐ２－Ｐ３	2.00		
東桁行	Ｐ３－Ｐ４	1.75	5.25	1.75
	Ｐ４－Ｐ５	1.60		
	Ｐ５－Ｐ６	1.90		
南梁行	Ｐ６－Ｐ７	2.05	4.03	2.01
	Ｐ７－Ｐ８	1.98		
西桁行	Ｐ８－Ｐ９	1.80	5.40	1.80
	Ｐ９－Ｐ10	1.80		
	Ｐ10－Ｐ１	1.80		

柱穴番号	柱穴規模（cm）	柱痕規模（cm）	深　さ（cm）
Ｐ１	48.0	18.0	35.0
Ｐ２	46.0	12.0	26.0
Ｐ３	40.0	34.0	15.0
Ｐ４	55.0	26.0	22.0
Ｐ５	47.0	29.0	20.0
Ｐ６	53.0	57.0	18.0
Ｐ７	47.0	23.0	12.0
Ｐ８	58.0	40.0	17.0
Ｐ９	50.0	20.0	15.0
Ｐ10	48.0	28.0	28.0

杯と甕についても、小片のため図化できなかった。杯は、Ｐ８とＰ９から出土しているが、いずれも口縁部片で、口縁端部内面は強い横ナデ調整により沈線状をなしている。甕は、口縁部片と体部片が出土している。体部片の外面には、煤の付着が認められる。

製塩土器　Ｐ１とＰ５から焼塩壺が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時　　期　第５章第２節における検討結果から、奈良時代後期（Ⅱ－１期）に位置付けられる。

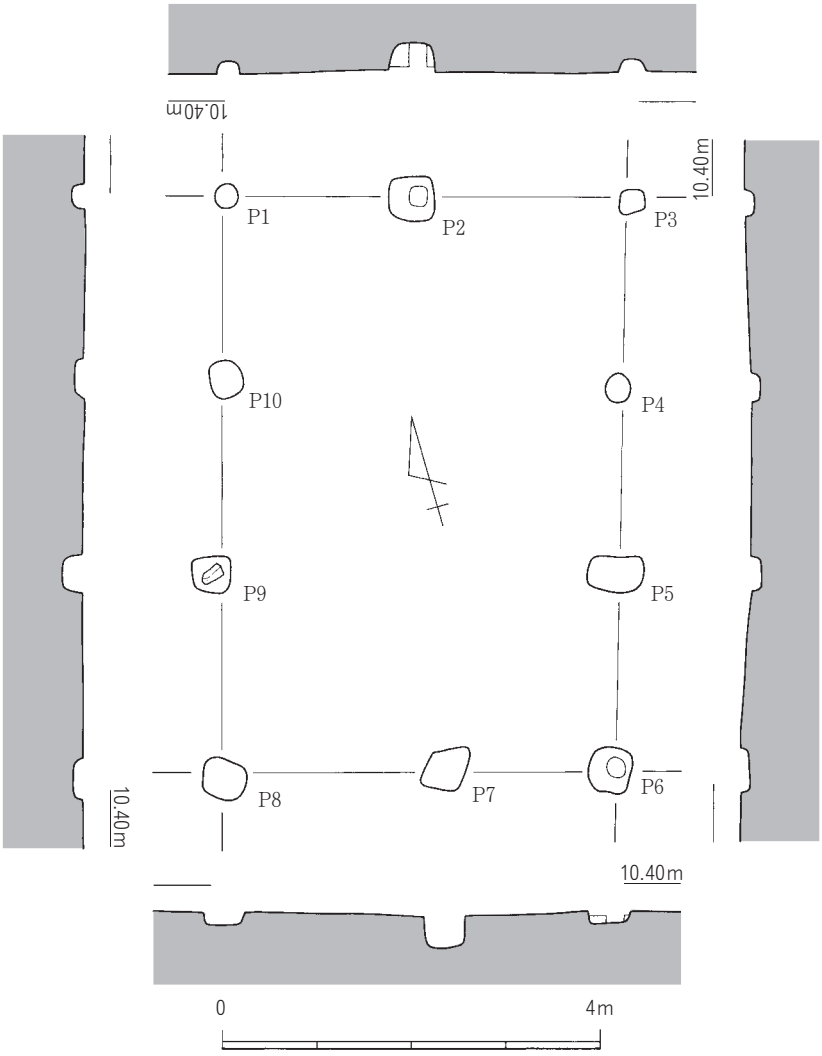
ＳＢ10（写真図版20）

検出状況　調査区中央南東側で検出した（第65図）。当建物は調査区内におさまり、全体が検出されている。ＳＢ09の東側、ＳＢ12の南側に位置する。建物を構成する一部の柱穴に切り合い関係が認められる以外、顕著な切り合い関係は認められない。

第22表　ＳＢ10　建物・柱穴規模一覧表

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北梁行	Ｐ１－Ｐ２	2.05	4.30	2.15
	Ｐ２－Ｐ３	2.25		
東桁行	Ｐ３－Ｐ４	1.95	5.90	1.96
	Ｐ４－Ｐ５	1.95		
	Ｐ５－Ｐ６	2.00		
南梁行	Ｐ６－Ｐ７	1.80	4.10	2.05
	Ｐ７－Ｐ８	2.30		
西桁行	Ｐ８－Ｐ９	2.15	6.10	2.03
	Ｐ９－Ｐ10	2.05		
	Ｐ10－Ｐ１	1.90		

柱穴番号	柱穴規模（cm）	柱痕規模（cm）	深　さ（cm）
Ｐ１	25.0	－	13.0
Ｐ２	48×48	19.0	28.5
Ｐ３	28×25	－	9.6
Ｐ４	30.0	－	6.0
Ｐ５	35×50	－	12.0
Ｐ６	45×47	20.0	6.0
Ｐ７	50×40	－	37.1
Ｐ８	47×42	－	11.3
Ｐ９	40×40	－	19.8
Ｐ10	33×40	－	8.5



第77図　ＳＢ10

建　　物　　２間×３間の側柱建物である（第77図）。両梁行はほぼ平行するが、桁行はわずかに方向を違えている。北梁行の直角方向を基準とした棟軸方向は、N16°Ｅを示す。各柱穴間の距離等は第22表のとおりで、柱間はほぼ一定している。南梁行と東桁行を基準とした当建物の面積は、24.1㎡である。

柱　　穴　　基本的に平面形は方形を指向するが、Ｐ１とＰ４は円形に近い形状をなす。方形の柱穴についても、一辺50cmを超えるものはなく、全体的に小規模な柱穴である。また、方形傾向の柱穴の主軸方向は、棟軸方向とほぼ一致する傾向にある。柱痕を確認できたのは、Ｐ２とＰ６の２穴に限られるが、Ｐ２の柱痕の平面形は方形をなしていた（写真図版20）。

なお、各柱穴の規模等は第22表のとおりである。

出土遺物　　須恵器・土師器・製塩土器が出土している（第119図）。

須恵器　　杯Ｂ・杯・甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。杯Ｂは底部片が、甕は体部片が出土している。杯は口縁部を中心に残存し、火襷痕が認められる。

土師器　　杯Ａ（225）・甕・甑（226）の各器種が出土している。図化した225と226は、ともにＰ２から出土している。226については、甑以外の可能性も十分考えられる。

杯は、口径に対して器高が低いもので、暗文は観察できない。甑は口縁部を中心にわず

かに残存するもので、器種は確定的ではない。甕は、体部片・底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。外面には煤の付着が認められる。

製塩土器　Ｐ５とＰ６から焼塩壺が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時　　期　第５章第２節における検討結果から、奈良時代後期（Ⅱ－４期）に位置付けられる。

ＳＢ11（写真図版48）

検出状況　調査区中央南東側で検出した（第65図）。当建物は調査区内におさまり、全体が検出されている。ＳＢ09・ＳＢ10の北側、ＳＢ15の西側に位置する。また、ＳＢ12と平面的にほぼ重複するが、前後関係は不明である。

建　　物　２間×３間の側柱建物である（第78図）。ただし、桁行・梁行とも平行ではなく、平面的に歪んだ形状をなしている。特に、東梁行の柱穴の並びは直線的ではない。

西梁行の直角方向を基準とした棟軸方向は、Ｎ24°Ｗを示す。各柱穴間の距離等は第23表のとおりであるが、その間隔は一定していない。特にその傾向は、北桁行で顕著である。また、南桁行と西梁行を基準とした当建物の面積は、28.6㎡である。

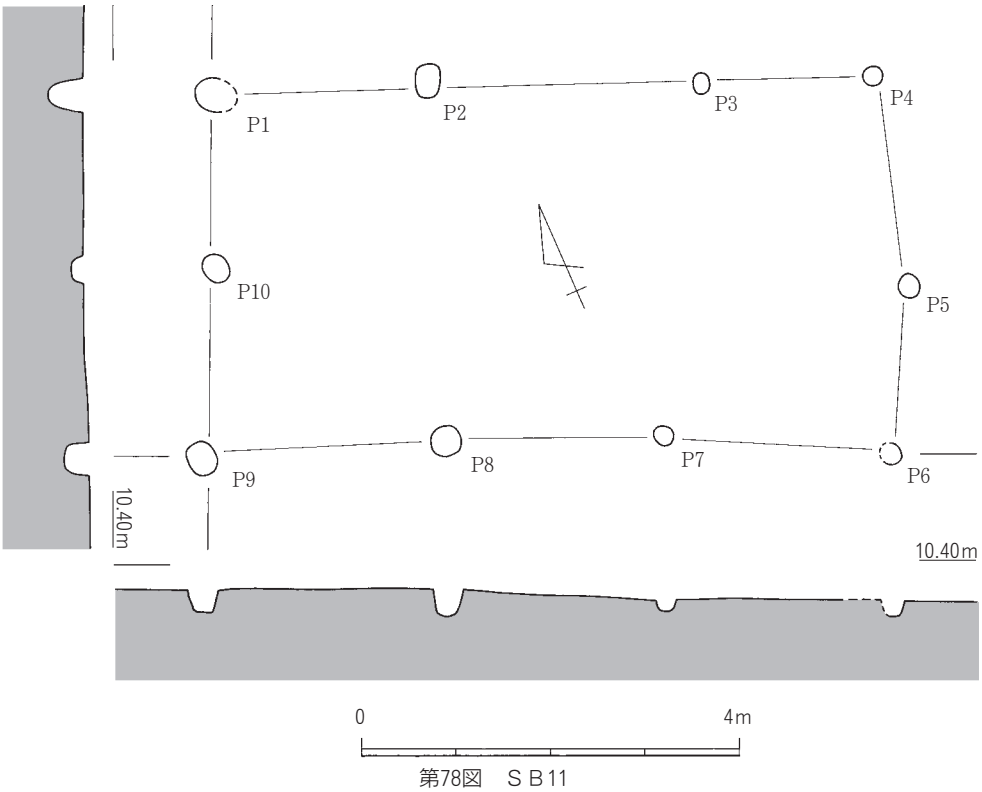
柱　　穴　平面形は基本的に円形傾向にある。各柱穴の規模等は第23表のとおりであるが、全体的に小型である。検出面からの掘り込みも浅く、最も深い柱穴で、Ｐ１の35cmが最深である。また、柱痕を確認できた柱穴は認められなかった。

このなかで、Ｐ２とＰ８の底部には、柱を支えるための石が置かれていた。また、Ｐ１では、柱抜き取り後に土器（231）が入れられている様子を観察することができた。

出土遺物　須恵器・土師器・製塩土器が出土している（第119図）。

須恵器　杯Ａと杯Ｂの底部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

土師器　杯Ｂ蓋（227）・杯（228～230）・椀（231・232）・皿（233）・甕の各器種が出土している。



第78図　ＳＢ11

第23表　ＳＢ11　建物・柱穴規模一覧表

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.25		
	Ｐ２－Ｐ３	2.90		
	Ｐ３－Ｐ４	1.82	6.97	2.32
東梁行	Ｐ４－Ｐ５	2.25		
	Ｐ５－Ｐ６	1.80	4.05	2.02
南桁行	Ｐ６－Ｐ７	2.40		
	Ｐ７－Ｐ８	2.35		
	Ｐ８－Ｐ９	2.60	7.35	2.45
西梁行	Ｐ９－Ｐ10	2.05		
	Ｐ10－Ｐ１	1.85	3.90	1.95

柱穴番号	柱穴規模（cm）	柱痕規模（cm）	深　さ（cm）
Ｐ１	35.0	－	35.5
Ｐ２	30.0	－	5.2
Ｐ３	15.0	－	4.8
Ｐ４	20.0	－	13.3
Ｐ５	25.0	－	6.1
Ｐ６	20.0	－	15.2
Ｐ７	20.0	－	11.6
Ｐ８	35.0	－	30.0
Ｐ９	30.0	－	22.8
Ｐ10	30.0	－	10.5

杯Ｂ蓋は、口縁部がわずかに残存するものである。Ｐ９から出土している。

杯は、228～230の口縁部を中心とした小片で、底部まで残存するものは認められない。立ち上りの角度及び形態から判断して、後述する椀に分類される可能性も否定できない。

椀は231と232の２個体分を図化することができた。なかでも、231は完形に復元できるもので、内外面ともヘラミガキによりていねいに仕上げられている。また、高台もナデ調整により貼り付けられている。232は、231より高台高が高い傾向にある。

皿は、233の１点である。中心部を欠くため、高杯の杯部に相当する可能性も否定できない。口径から判断すると、皿の可能性が高い。Ｐ８から出土している。

甕については、小片のため図化できなかった。数点出土しているが、堝に近い形態のものと、それ以外の２タイプが認められる。いずれのタイプも、外面に煤の付着が認められる。

製塩土器　Ｐ１から焼塩壺が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時　　期　第５章第２節における検討結果から、奈良時代後期（Ⅱ－２期）に位置付けられる。

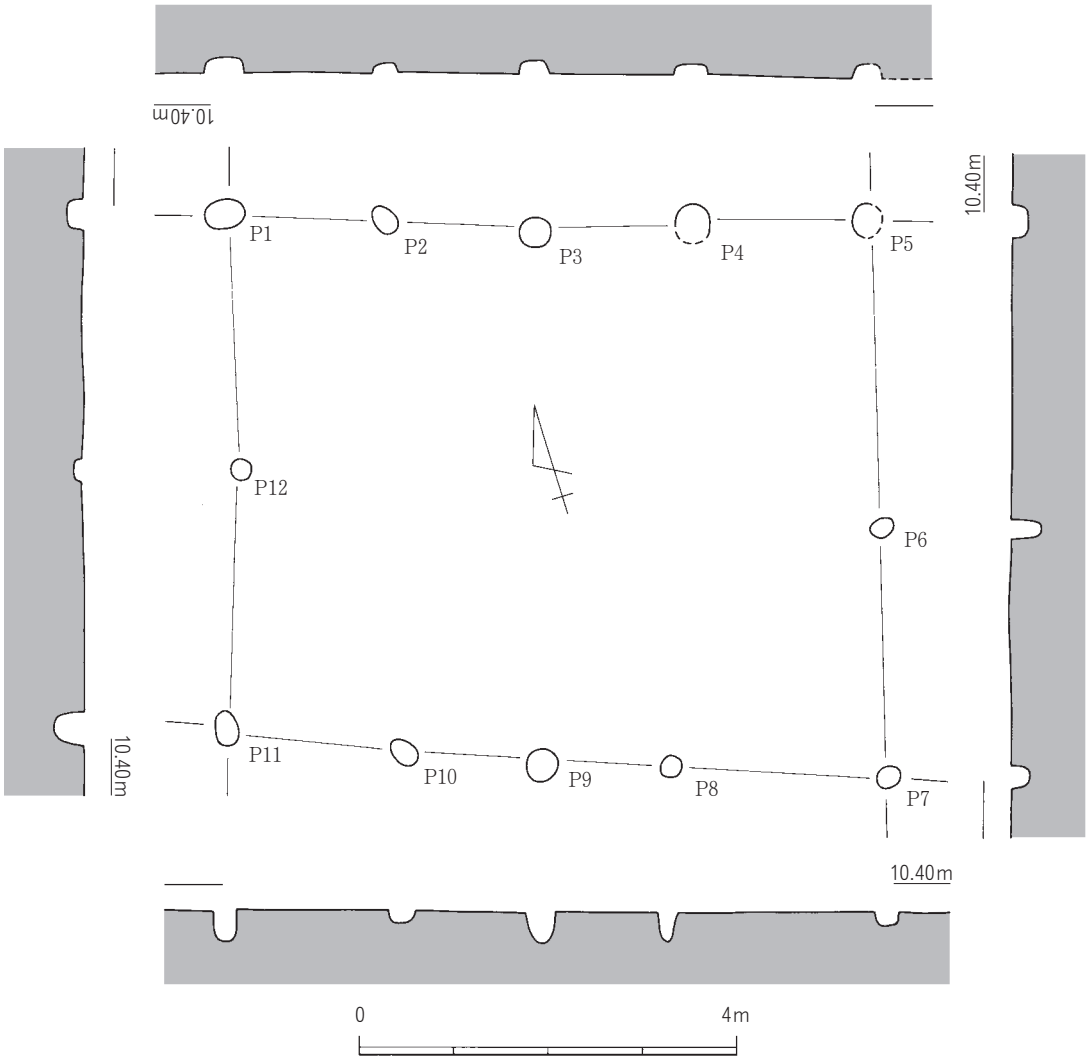
ＳＢ12

検出状況　調査区中央部東側で検出した（第65図）。当建物は調査区内におさまり、全体が検出されている。ＳＢ10の北側、ＳＢ13の南側、ＳＢ15の西側に位置し、ＳＢ11とは平面的に重複する。ＳＢ11との新旧関係については、遺構からは明らかにできなかった。なお、他の遺構とは、明確な切り合い関係は認められない。

建　　物　２間×４間の側柱建物である（第79図）。東西の梁行はほぼ平行するが、桁行は平行せず、全体的にやや歪んだ平面形をなす。また、南桁行に代表されるように、柱穴間の距離は一定していない。さらに、梁行と桁行の柱穴間距離の差が顕著である。

東梁行の直角方向を基準とした棟軸方向は、Ｎ75°Ｗを示す。各柱穴間の距離等は第24表のとおりである。また、東梁行と北桁行を基準とした当建物の面積は、39.9㎡である。

柱　　穴　平面形は円形もしくは楕円形をなし、全体的に小規模である。検出面からの深さも浅い



第79図　ＳＢ12

傾向にある（第24表）。

このなかで、Ｐ８とＰ10においては、掘り方内に礫を入れ、根固めとしている様子が認められた。この他、Ｐ11においては、柱抜き取り後、円礫が入れられていた。

なお、各柱穴の規模等は第24表のとおりである。

出土遺物　須恵器・土師器・製塩土器・瓦が出土している（第119図）。

須恵器　杯と蓋が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。杯は底部を中心とした小片で、高台は認められない。蓋は、薬壺の蓋が出土している。

土師器　椀（234）・杯Ｂ蓋・甕・カマド（235）の各器種が出土している。図化できたのは、椀とカマドに限られ、他は小片のため図化できなかった。

234は、第５章第１節での検討結果から、椀として報告する。口縁部を中心に被熱痕が認められる。

カマドの235は、焚口部の上半部を中心に残存する。庇はわずかに残存し、体部のハケ調整後、焚口の上側に貼り付けられている。内面には、庇貼付けの際の抑えの圧痕が、大きな窪みとなって認められる。焚口の枠は横ナデ調整により仕上げられている。

この他、甕の体部片・口縁部片が出土しているが、体部外面には煤の付着が認められる。

第24表　ＳＢ12　建物・柱穴規模一覧表

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	1.70		
	Ｐ２－Ｐ３	1.60		
	Ｐ３－Ｐ４	1.65		
	Ｐ４－Ｐ５	1.85	6.80	1.70
東梁行	Ｐ５－Ｐ６	3.25		
	Ｐ６－Ｐ７	2.63	5.88	2.94
南桁行	Ｐ７－Ｐ８	2.25		
	Ｐ８－Ｐ９	1.35		
	Ｐ９－Ｐ10	1.45		
	Ｐ10－Ｐ11	1.90	6.95	1.73
西梁行	Ｐ11－Ｐ12	2.75		
	Ｐ12－Ｐ１	2.70	5.45	2.72

柱穴番号	柱穴規模（cm）	柱痕規模（cm）	深　さ（cm）
Ｐ１	30×45	－	14.0
Ｐ２	30×20	－	10.5
Ｐ３	35	－	9.8
Ｐ４	40	－	13.3
Ｐ５	35	－	12.8
Ｐ６	25×20	－	29.0
Ｐ７	26×21	－	30.0
Ｐ８	22.0	－	31.0
Ｐ９	35.0	－	31.8
Ｐ10	30×20	－	11.3
Ｐ11	40×25	－	34.1
Ｐ12	20	－	7.2

また、杯Ｂ蓋は釦状をなすつまみを中心に残存する。

製塩土器　Ｐ２とＰ３から焼塩壺が出土しているが、小片のため図化できなかった。

瓦　Ｐ１から丸瓦が出土している。玉縁式に分類されるもので、その玉縁部分が残存している。焼成は良好で、須恵質になっている。

時　期　第５章第２節における検討結果から、奈良時代後期（Ⅱ－５期）に位置付けられる。

ＳＢ13（写真図版21・49）

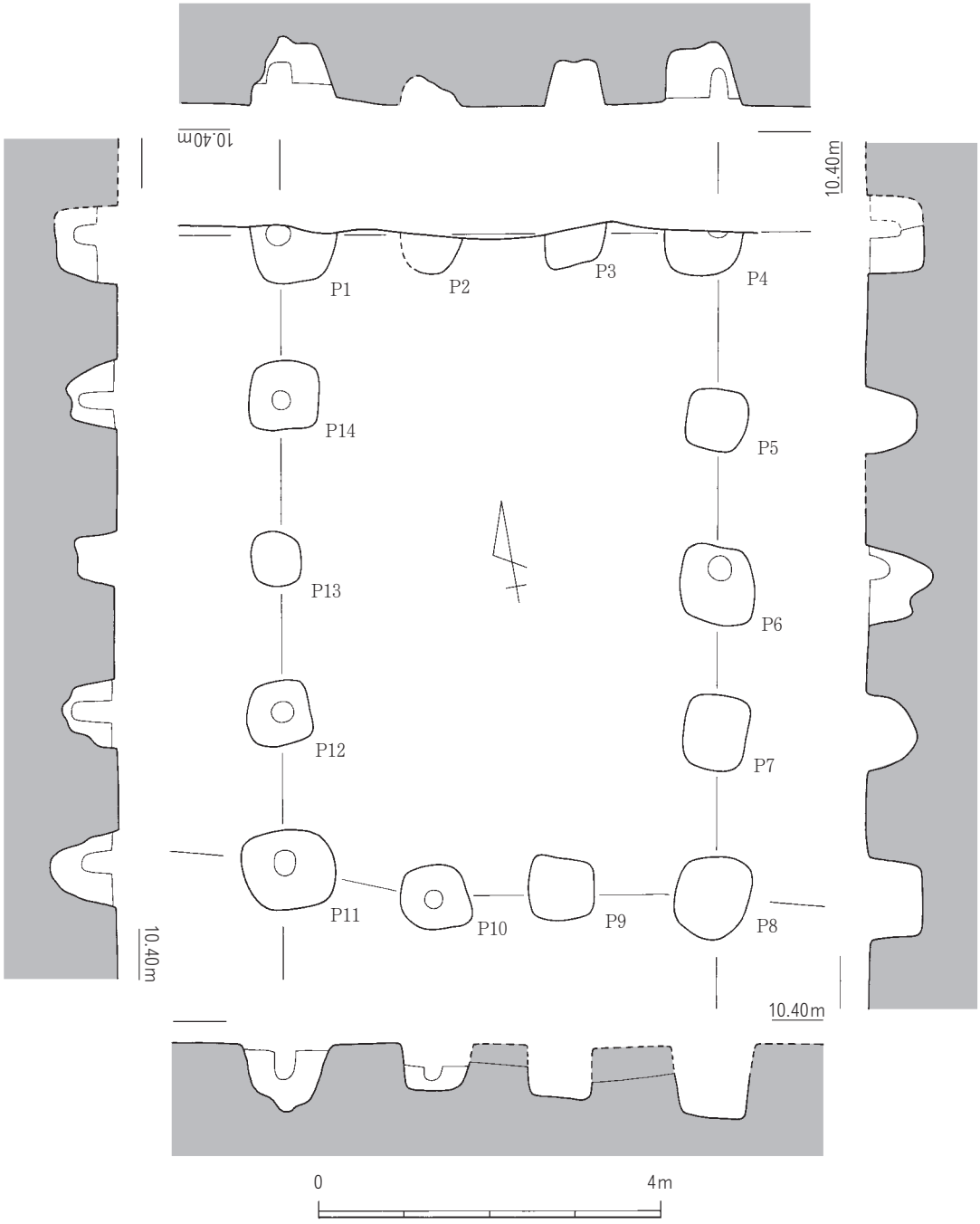
検出状況　調査区中央部北側で検出した（第65図）。当建物は調査区内にほぼおさまり、全体が検出されている(第80図)。ＳＢ15・ＳＢ16の北西側、ＳＢ12の北側、ＳＥ01の北東側に位置する。畠７・畠９と平面的に重複し、本建物を構成する柱穴（Ｐ８）が畠９の溝を切っている。また、ＳＤ24をも切っている。

第80図　ＳＢ13の調査

建　物　３間×４間の側柱建物である（第81図）。ただし、南梁行の柱穴の並びは直線的ではない。

東桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ10°Ｅを示す。各柱穴間の距離等は第25表のとおりである。また、南梁行と東桁行を基準とした当建物の面積は39.8㎡で、今回の調査で検出した建物のなかでは大型の建物である。

柱　穴　平面形は基本的に方形を指向する。ただし、北梁行の４穴（Ｐ１～Ｐ４）の北側約1/2は調査区外にあたり、全体を検出することはできなかった。方形傾向の柱穴の主軸方向は、



第81図　ＳＢ13

棟軸方向とほぼ同じ傾向にある。Ｐ１・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ10～Ｐ12・Ｐ14を除いては、柱痕を平面的にも、断面観察においても観察することはできなかった。ただし、いずれの柱穴内においても、柱を埋める際に搗き固められた様子を観察することができた。

なお、各柱穴の規模等は第25表のとおりである。

出土遺物　須恵器・土師器・製塩土器・瓦が出土している。

須恵器　Ｐ９から杯Ａが出土しているが、小片のため図化できなかった。底部から体部にかけて残存するが、焼成は不充分である。

土師器　杯・杯Ｂ・甕・把手の各器種が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。杯に関しては、口縁部を中心に残存するもので、杯Ａか杯Ｂの峻別は困難である。甕は、

第25表　ＳＢ13　建物・柱穴規模一覧表

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北梁行	Ｐ１－Ｐ２	1.80		
	Ｐ２－Ｐ３	1.70		
	Ｐ３－Ｐ４	1.70	5.20	1.73
東桁行	Ｐ４－Ｐ５	2.25		
	Ｐ５－Ｐ６	1.73		
	Ｐ６－Ｐ７	1.90		
	Ｐ７－Ｐ８	2.00	7.88	1.97
南梁行	Ｐ８－Ｐ９	1.80		
	Ｐ９－Ｐ10	1.50		
	Ｐ10－Ｐ11	1.75	5.05	1.68
西桁行	Ｐ11－Ｐ12	1.75		
	Ｐ12－Ｐ13	1.77		
	Ｐ13－Ｐ14	1.90		
	Ｐ14－Ｐ１	1.90	7.32	1.83

柱穴番号	柱穴規模（cm）	柱痕規模（cm）	深　さ（cm）
Ｐ１	90×７＋α	28.0	81.5
Ｐ２	70×45＋α	－	23.0
Ｐ３	70×45＋α	－	56.0
Ｐ４	90×50＋α	22.0	78.0
Ｐ５	70×70	－	47.0
Ｐ６	85×90	27.0	80.0
Ｐ７	75×85	－	60.0
Ｐ８	85×100	－	58.0
Ｐ９	77×75	－	20.0
Ｐ10	80×75	14.0	55.0
Ｐ11	90×105	25.0	79.0
Ｐ12	75×75	20.0	65.0
Ｐ13	57×65	22.0	12.0
Ｐ14	80×80	－	62.0

長胴タイプの体部片が出土しており、外面に煤の付着が認められる。把手は、カマドもしくは竈の一部と考えられる。

製塩土器　Ｐ１から焼塩壺が出土しているが、小片のため図化できなかった。

瓦　Ｐ８から丸瓦（236）が出土している（第119図）。玉縁式に分類されるもので、その玉縁部分が残存している。玉縁部凸面はヘラナデ調整により、段部は横方向のナデ調整により仕上げられている。また、玉縁端面・丸瓦側面は、ヘラ削りにより整形されている。

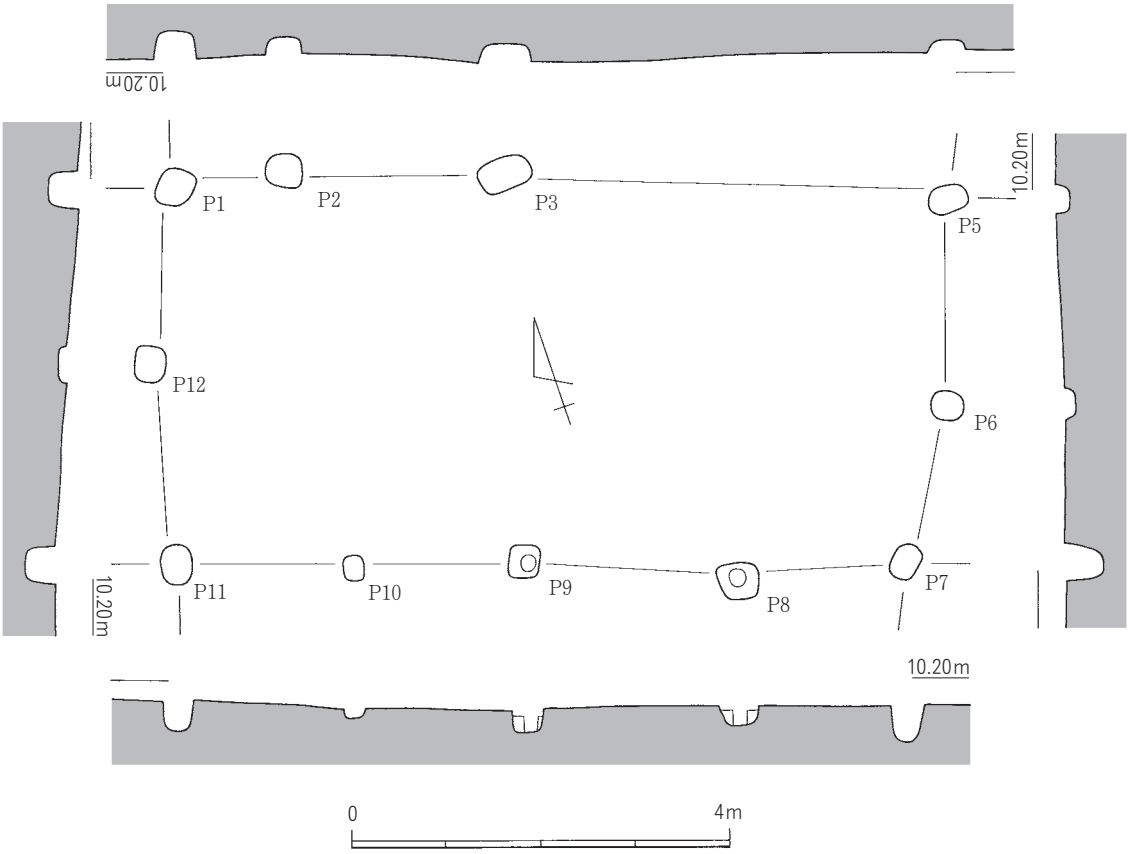
時　期　第５章第２節における検討結果から、奈良時代後期（Ⅱ－３期）に位置付けられる。

ＳＢ14

検出状況　調査区中央部東側で検出した（第65図）。当建物は調査区内にほぼおさまり、全体が検出されている。ＳＢ12の東側、畠７～畠９の南側に位置する。当建物は、ＳＢ15・ＳＢ16と平面的に重複するが、調査では、両者との前後関係を明らかにすることはできなかった。

また、Ｐ10は、ＳＤ26を検出した段階で検出したものであるが、調査では両者の前後関係を明確にすることはできなかった。この他の遺構との明確な切り合い関係は、認められなかった。

建　物　２間×４間の側柱建物である（第82図）。このなかで、Ｐ４は撹乱を受け、検出することができなかった。桁行方向についてはほぼ直線的で、北側と南側とはほぼ平行している。一方梁行方向については直線的ではなく、西側と東側は平行しない。なかでも、東梁行は直線的ではない。よって、平面形もやや歪んだ形状となっている。また、柱間規模にも差が認められ、特に北桁行が顕著である。Ｐ１とＰ２の間隔が極端に狭くなっている。



第82図　ＳＢ14

北桁行の直角方向を基準とした棟軸方向は、N69°Wを示す。また、北桁行と西梁行を基準とした当建物の面積は、33.4㎡である。各柱穴間の距離等は第26表のとおりである。

柱　　穴　　平面形は基本的に方形を指向するが、正方形に近いものと長方形をなすものとが認められる。また、方形傾向の柱穴の主軸方向は、棟軸方向とほぼ同じ傾向にある。いずれの柱穴とも、一辺の規模が50cmを超えるものはなく、全体的に小型である。このなかで、柱

第26表　ＳＢ14　建物・柱穴規模一覧表

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	1.20		
	Ｐ２－Ｐ３	2.30		
	Ｐ３－Ｐ４			
	Ｐ４－Ｐ５	4.75	8.25	2.06
東梁行	Ｐ５－Ｐ６	2.15		
	Ｐ６－Ｐ７	1.70	3.85	1.92
南桁行	Ｐ７－Ｐ８	1.80		
	Ｐ８－Ｐ９	2.25		
	Ｐ９－Ｐ10	1.85		
	Ｐ10－Ｐ11	1.90	7.80	1.95
西梁行	Ｐ11－Ｐ12	2.15		
	Ｐ12－Ｐ１	1.90	4.05	2.02

柱穴番号	柱穴規模（cm）	柱痕規模（cm）	深　さ（cm）
Ｐ１	40×36	－	32.5
Ｐ２	38×35	－	17.0
Ｐ３	35×60	－	21.5
Ｐ４	－	－	－
Ｐ５	42×29	－	8.5
Ｐ６	34×30	－	10.0
Ｐ７	40×30	－	40.0
Ｐ８	41×40	18.0	18.8
Ｐ９	33×35	15.0	25.0
Ｐ10	22×25	－	8.0
Ｐ11	45×35	－	35.1
Ｐ12	33×39	－	5.9

痕を確認することはできたのは、Ｐ８とＰ９に限られる。なお、各柱穴の規模等は第26表のとおりである。

出土遺物　須恵器・土師器・製塩土器が出土している（第119図）。

須恵器　Ｐ９から杯Ａの口縁部片と壺の体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

土師器　杯Ａ（237）・杯・甕（238）の各器種が出土している。

杯Ａの237は、口縁端部内面にわずかに沈線状の窪みが認められる。この他、口縁部を中心に残存する杯に関しても、同様な特徴が認められるものが出土している。一方、沈線が全く認められない杯も出土している。

甕は、図化できたのは238の１個体である。ただし、238のような丸胴タイプ以外に、長胴タイプのものが出土している。いずれも、体部外面に煤の付着が認められる。

製塩土器　Ｐ11から焼塩壺が出土しているが、小片のため図化できなかった。

瓦　Ｐ９から平瓦が出土している。凹面には布目が出土している。

時期　第５章第２節における検討結果から、奈良時代後期（Ⅱ－２期）に位置付けられる。

ＳＢ15（写真図版21・48）

検出状況　調査区中央部東側で検出した（第65図）。当建物は調査区内にほぼおさまり、全体が検出されている。ＳＢ10の北東側、ＳＢ12の東側、畠９の南側に位置する。また、ＳＢ16と平面的に重複するが、柱穴相互の切り合い関係は認められず、遺構からその前後関係を明らかにすることはできない。

第83図　ＳＢ15の調査

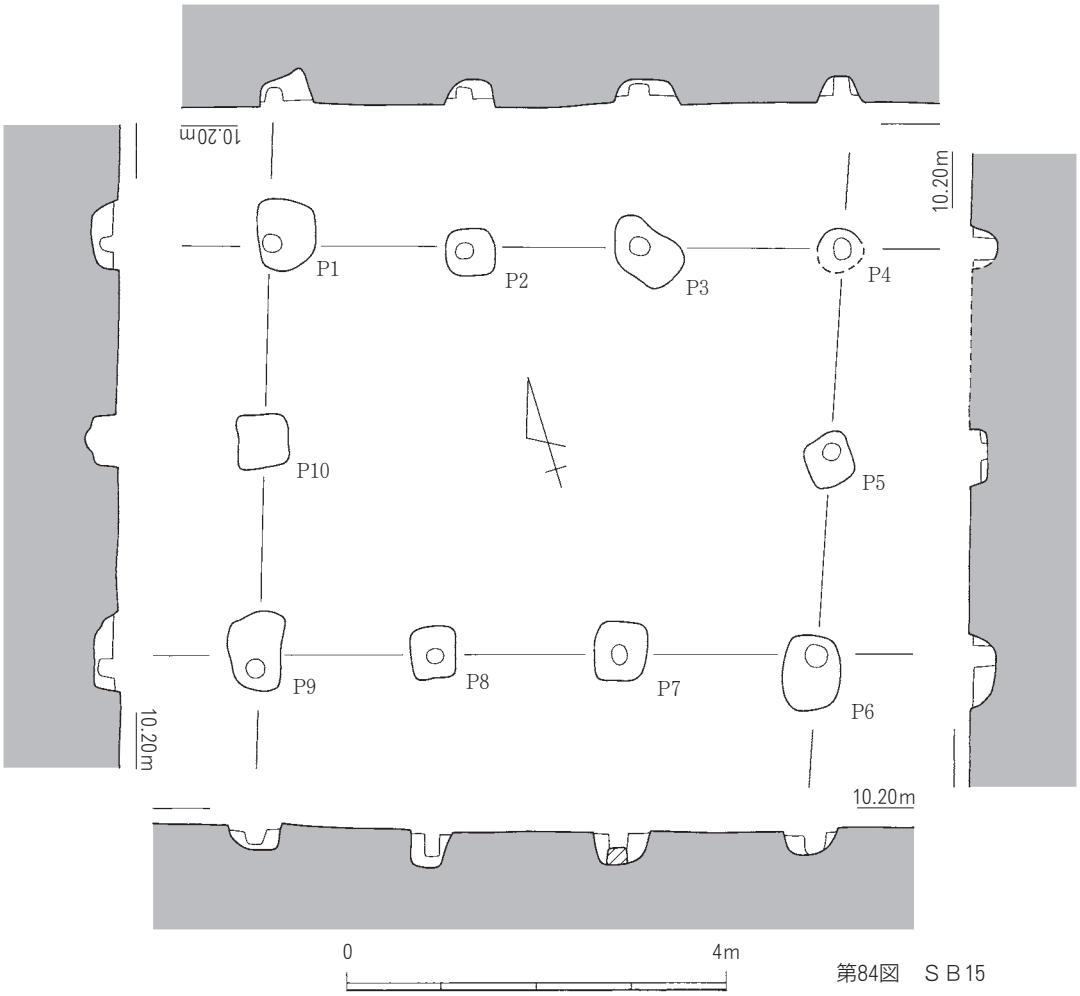
建物　２間×４間の側柱建物である（第84図）。このなかで、Ｐ４の約1/2は撹乱を受け、全体を検出することはできなかった。また、両桁行および両梁行はほぼ平行するが、桁行と梁行は直交せず、全体的に平行四辺形状をなしている。

南桁行を基準とした棟軸方向は、N73°Wを示す。各柱穴間の距離等は第27表のとおりである。また、南桁行と東梁行を基準とした当建物の面積は、25.4㎡である。

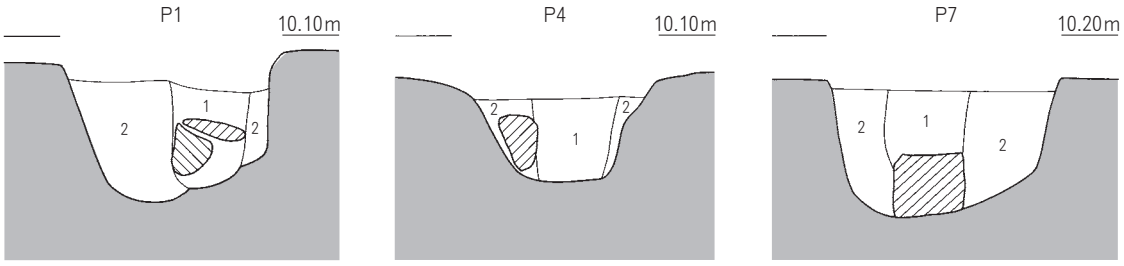
柱穴　平面形は基本的に方形傾向にある。また、方形傾向の柱穴の主軸方向は、Ｐ３とＰ５を除いては、棟軸方向とほぼ一致する傾向にある。また、Ｐ10を除いては、柱痕を確認することができた。確認できた柱痕の規模は、径20cm前後とほぼ一定している。

Ｐ１・Ｐ２・Ｐ６～Ｐ９の掘り方内には、柱と同規模の礫が置かれており（第85図）、礎石の機能をなしたものと考えられる。さらにＰ８においては、柱抜き取り後、礫が埋められている様子を観察することができた（第85図）。

また、Ｐ10の掘り方内からも数石の亜円礫が検出されたが、柱痕との関係を明らかにすることはできなかった。この他、Ｐ４の掘り方内には比較的大きな礫が、柱痕に接するように置かれていた。柱の倒壊を防ぐためと考えられる。なお、各柱穴の規模等は第27表のとおりである。



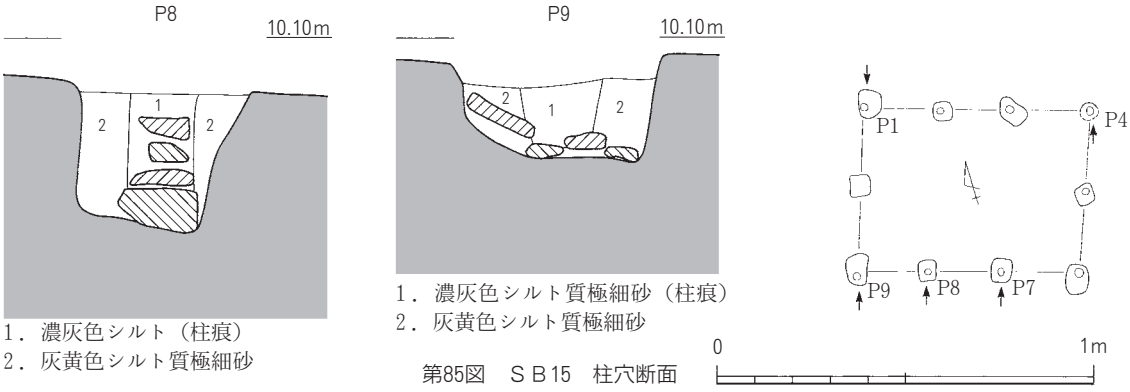
第84図　ＳＢ15



1．濃灰色シルト質細砂（柱痕）
2．灰黄色シルト質極細砂混じり
　　灰色シルト質細砂

1．濃灰色シルト質細砂（柱痕）
2．淡黄色シルト質極細砂混じり
　　灰色シルト質極細砂

1．濃灰色シルト（柱痕）
2．灰緑色シルト質極細砂



1．濃灰色シルト（柱痕）
2．灰黄色シルト質極細砂

1．濃灰色シルト質極細砂（柱痕）
2．灰黄色シルト質極細砂

第85図　ＳＢ15　柱穴断面

第27表　ＳＢ15　建物・柱穴規模一覧表

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北桁行	Ｐ１－Ｐ２	2.00		
	Ｐ２－Ｐ３	1.85		
	Ｐ３－Ｐ４	2.15	6.00	2.00
東梁行	Ｐ４－Ｐ５	2.15		
	Ｐ５－Ｐ６	2.15	4.30	2.15
南桁行	Ｐ６－Ｐ７	2.07		
	Ｐ７－Ｐ８	1.95		
	Ｐ８－Ｐ９	1.90	5.92	1.97
西梁行	Ｐ９－Ｐ10	2.37		
	Ｐ10－Ｐ１	2.15	4.52	2.26

柱穴番号	柱穴規模（cm）	柱痕規模（cm）	深　さ（cm）
Ｐ１	60×70	20.0	43.0
Ｐ２	52×50	22.0	30.0
Ｐ３	50×80	22.0	27.5
Ｐ４	50×15＋α	21.0	26.0
Ｐ５	50×50	－	15.0
Ｐ６	60×79	23.0	27.0
Ｐ７	56×62	18.0	36.0
Ｐ８	47×55	17.0	36.0
Ｐ９	52×83	18.0	26.0
Ｐ10	50×55	－	34.0

出土遺物　須恵器・土師器・製塩土器・瓦が出土している（第119図）。これらのなかで、240～244の４点はＰ３から一括して出土している。

須恵器　杯Ａ・杯Ｂ（244・245）・杯Ｂ蓋（243）・皿（241・242）が出土している。

杯Ａは、Ｐ３から出土しているが、小片のため図化できなかった。杯Ｂは、２点図化したが、２点とも同技法により仕上げられている。ただし、法量的には差が認められる。皿についても、図化した２点について、法量的な差が認められる。

土師器　杯（239・240）・皿・甕の各器種が出土している。

杯は、図化できたのは２点に限られ、いずれも口縁部を中心とした小片である。他に、239のように口縁端部内面に沈線状の窪みが認められるタイプが出土している。暗文を観察できるものは出土していない。

皿は、Ｐ９から出土しているが、小片のため図化できなかった。

甕は、口縁部片・肩部片・体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。体部片の外面には、煤の付着が認められる。

製塩土器　Ｐ３から焼塩壺が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時　期　第５章第２節における検討結果から、奈良時代中期（Ｉ－３期）に位置付けられる。

ＳＢ16（写真図版21）

検出状況　調査区中央部東側で検出した（第65図）。当建物は調査区内にほぼおさまり、全体が検出されている。ＳＢ12の東側、ＳＢ10の北東側、畠９の南側に位置する。また、ＳＢ14・ＳＢ15と平面的に重複するが、柱穴相互の切り合い関係は認められず、遺構からはその前後関係を明らかにすることはできない。

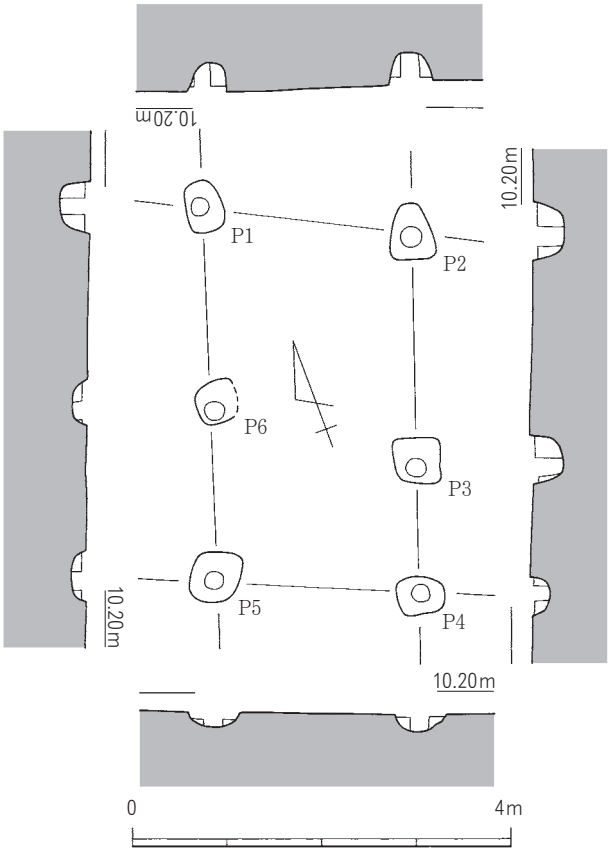
建　物　１間×２間の側柱建物である（第86図）。各辺とも平行・直交せず、全体的に平行四辺形状をなしている。

東桁行を基準とした棟軸方向は、Ｎ20°Ｅを示す。各柱穴間の距離等は第28表のとおり

である。特に、東桁行における柱穴間距離の差が顕著である。また、南梁行と東桁行を基準とした当建物の面積は、8.27㎡である。

柱　　穴　　平面形は、基本的に方形傾向にある。さらに、方形傾向の柱穴の主軸方向は、棟軸方向とほぼ同じ傾向にある。また、いずれの柱穴においても柱痕を確認することができた。確認できた柱痕の規模は、径15～20cmとほぼ一定している。一方、根固めの石等は認められなかった。

なお、各柱穴の規模等は第28表のとおりである。



第86図　ＳＢ16

出土遺物　　須恵器・土師器・製塩土器が出土している（第119図）。

須恵器　　壺の体部片が出土している。

土師器　　杯Ａ（246）と甕が出土している。

246は、口縁部内端面が、強い横ナデ調整により沈線状をなしている。この他、同様の沈線状をなす口縁部片が、Ｐ３から出土している。

甕は体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

製塩土器　　Ｐ２から焼塩壺が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時　　期　　第５章第２節における検討結果から、奈良時代後期（Ⅱ－１期）に位置付けられる。

第28表　ＳＢ16　建物・柱穴規模一覧表

	柱　間	柱穴間距離（m）	側面距離（m）	柱穴間平均距離（m）
北梁行	Ｐ１－Ｐ２	2.25	2.25	2.25
東桁行	Ｐ２－Ｐ３	2.43	3.76	1.88
	Ｐ３－Ｐ４	1.33		
南梁行	Ｐ４－Ｐ５	2.20	2.20	2.20
西桁行	Ｐ５－Ｐ６	1.77	3.94	1.97
	Ｐ６－Ｐ１	2.17		

柱穴番号	柱穴規模（cm）	柱痕規模（cm）	深　さ（cm）
Ｐ１	40×55	15.0	31.0
Ｐ２	50×59	20.0	37.0
Ｐ３	50×48	20.0	34.0
Ｐ４	50×38	16.0	19.0
Ｐ５	52×55	18.0	15.0
Ｐ６	45×45	20.0	16.0

ＳＢ17（写真図版20・49）

検出状況　調査区西部北側で検出した（第65図）。東西方向に直列する２間分を検出したにとどまる（第87図）。このため、検出した２間が桁行にあたるのか梁行にあたるのかについて、判断することはできない。ＳＢ06の西側、ＳＨ05の北西に位置する。直列する３穴の柱穴を検出したのみで、大半は調査区北側に拡がる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

建　　物　棟軸方向は、Ｎ24°Ｅを示す。柱穴間の距離は、Ｐ１－Ｐ２間で2.55m、Ｐ２－Ｐ３間で2.45mである。

柱　　穴　平面形は、３穴とも円形をなす。Ｐ２では柱痕を確認することができた。柱穴の規模・深さは、Ｐ１が40cm（復元径）・11.5cm、Ｐ２が30cm・36cm、Ｐ３が45cm・37cmである。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。

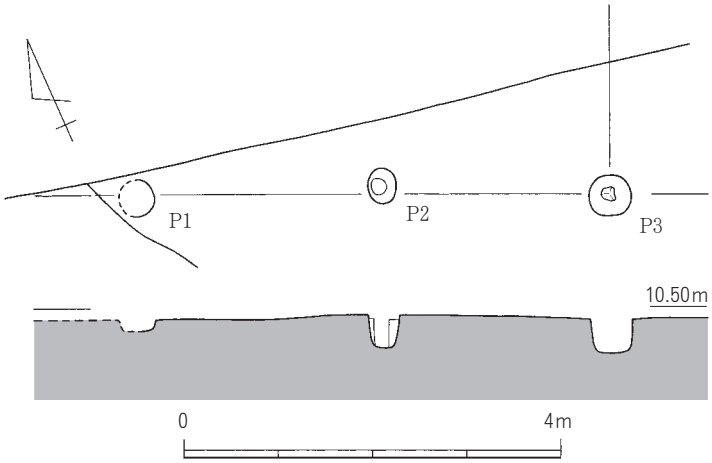
須恵器　杯もしくは蓋の小片が出土している。いずれの小片のため、図化できなかった。

土師器　杯Ａ・杯Ｂ・甕の各器種が出土している。

杯Ａは、Ｐ２から出土した248の１個体である（第119図）。口縁端部内面が、横ナデ調整によりわずかに沈線状をなす。杯Ｂは、Ｐ３から底部を中心とした小片（249）が出土している。底部は、高台を貼付け、ナデ調整により仕上げられている。

甕は、口縁部片と体部片が出土している。体部片は、長胴タイプに分類されるものである。

時　　期　第５章第２節における検討結果から、奈良時代後期（Ⅱ－２期）に位置付けられる。



第87図　ＳＢ17

第88図　奈良時代の遺構　柱穴

（４）柱　　穴

今回の調査では、多くの柱穴を検出している（第88図）。その多くは、上記の建物を構成するものである。しかし、建物を構成する柱穴以外にも、当該期の柱穴を多く検出している。これらのなかには、本遺跡を検討するうえで良好な資料が得られている。そこで、これらの柱穴について、出土遺物を中心に報告する。

Ｐ02（写真図版49）

検出状況　調査区西部中央で検出した（第88図）。

出土遺物　須恵器の杯の口縁部片と土師器の杯（247）が出土している（第119図）。247は、椀に近い形態をなす。須恵器の杯は、口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ03（写真図版22）

検出状況　調査区中央南東部で検出した（第88図・写真図版22）。Ｐ19の北側、Ｐ27の南側に位置する。

出土遺物　図化できなかったが、土師器の甕が出土している。丸胴タイプの体部片が出土している。外面に煤の付着が認められる。

時　　期　出土遺物から奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ05

検出状況　調査区中央部で検出した（第88図）。ＳＨ05の北西側、Ｐ40の東側に位置する。

出土遺物　土師器の皿（250）が出土している（第119図）。口縁部のみの小片で、口径の復元は困難である。皿に分類される可能性も考えられる。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代中期（Ｉ期）と考えられる。

Ｐ06（写真図版22）

検出状況　調査区中央部南西側で検出した（第88図）。Ｐ42の東側、Ｐ07の西側に位置する。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　杯Ｂ（251）と杯Ａの底部が出土している（第119図）が、杯Ａに関しては、小片のため図化できなかった。

土師器　皿の口縁部片と甕の体部片が出土している。いずれも小片のため、図化できなかった。甕の体部外面には煤の付着が認められる。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ07（写真図版49）

検出状況　調査区中央南西部で検出した（第88図）。Ｐ08の西側に位置する。

出土遺物　土師器の皿（252）が出土している（写真図版49）。小片のため図化できなかった。

時　　期　出土遺物から奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ08（写真図版22・50）

検出状況　調査区中央南西部で検出した（第88図）。Ｐ07の東側に位置する。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（第120図）。

須恵器　杯Ａ（255）と壺Ｎ（254）が出土している。254は、底部から体部下半にかけて残存する。底部から体部への変換部内面は、指オサエと粗いナデ調整により整形されている。

土師器　甕（253）が出土している。長胴甕に分類されるものである。

時期　出土遺物から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

Ｐ09（写真図版22・50）

検出状況　調査区中央北部で検出した（第88図）。ＳＨ05の東側、Ｐ10の北側、Ｐ11の南東側に位置する。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（第120図）。須恵器は杯Ａ（256）が、甕は体部片が出土している。

時期　出土遺物から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

Ｐ10

検出状況　調査区中央北部で検出した（第88図）。ＳＨ05の東側、Ｐ09の南西側、Ｐ11の南側に位置する。

出土遺物　土師器の甕が出土している。小片のため図化できなかった。

時期　出土遺物から奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ11（写真図版50）

検出状況　調査区中央北部で検出した（第88図）。ＳＨ05の北東側、Ｐ09・Ｐ10の北側に位置する。

出土遺物　土師器の甕（259）が出土している（第120図）。小片のため、口径を復元することはできなかった。

時期　出土遺物から奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ12

検出状況　調査区中央部で検出した（第88図）。Ｐ13の北西側、Ｐ43の北側に位置する。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。須恵器は甕の体部片が、土師器は杯Ａと高杯が出土している。いずれも小片のため、図化できなかった。

時期　出土遺物から奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ13

検出状況　調査区中央部で検出した（第88図）。Ｐ12の南東、Ｐ14の北西、Ｐ44の北側に位置する。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。須恵器は杯Ａ（257）が、土師器も杯が出土している。土師器の杯は、口縁部内端面が強い横ナデにより、沈線状をなしている。

時期　出土遺物から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

Ｐ14

検出状況　調査区中央部で検出した（第88図）。Ｐ13の南東側、Ｐ44の北東側に位置する。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。須恵器は杯Ｂ蓋（258）が、土師器は甕の体部片が出土している（第120図）。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

Ｐ15（写真図版50）

検出状況　調査区中央部で検出した（第88図）。Ｐ45の北側、Ｐ46の南側に位置する。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（第120図）。須恵器は杯Ｂが、土師器は杯Ａ（260・261）と椀（262）が出土している。260と261は口径に対して深い椀形をなすもので、262に対応する椀の可能性も考えられる。262は、比較的高い高台が貼り付けられ、回転ナデ調整により仕上げられている。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

Ｐ16（写真図版50）

検出状況　調査区中央部で検出した（第88図）。Ｐ15の南側、Ｐ23の西側に位置する。

出土遺物　須恵器・土師器・黒色土器・瓦が出土している（第120図）。

須恵器　杯の口縁部片と壺の体部片が出土している。いずれも小片のため、図化できなかった。

土師器　杯Ａ（263）・甕（265・266）・カマドが出土している。263は、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられているが、口縁部には特に強い横ナデ調整が加えられている。265と266は、長胴タイプの甕と考えられるが、266は堝に近い形態をとるものと考えられる。両個体とも、口縁端部が強い横ナデ調整によりつまみ上げられている。カマドは、小片のため図化できなかった。

黒色土器　底部片（264）が出土している。内黒タイプの椀で、底部を中心に残存する。底部は、高台を貼付け、ナデ調整により仕上げられている。ヘラミガキは施されていない。

瓦　平瓦が１点出土している。凹面には布目が認められ、凸面は斜格子の叩きが施されている。被熱痕が認められる。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

Ｐ17

検出状況　調査区中央部で検出した（第88図）。Ｐ20の北西側、Ｐ23の南側に位置する。

出土遺物　土師器の皿（267）と甕が出土している（第120図）。皿は、口縁部を中心とした小片である。口縁部は強い横ナデ調整により仕上げられている。甕は体部片が出土しており、外面に煤の付着が認められる。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

Ｐ18（写真図版50）

検出状況　調査区中央南端部で検出した（第88図）。Ｐ19の西側、Ｐ20の南側に位置する。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（第120図）。

須恵器　杯Ａ（268）・杯Ｂ・杯Ｂ蓋が出土している。杯Ｂ蓋は、つまみ部分が残存する。

土師器　杯Ａ（269）・甕・カマド（270・写真図版50）が出土している。269の口縁部内端面は、横ナデ調整によりわずかに沈線状をなしている。甕は、体部片が出土している。270は、小片のため図化できなかったが、焚口脚部の一部が出土している。

時期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ19

検出状況　調査区中央南端部で検出した（第88図）。Ｐ03の南側、Ｐ18の東側に位置する。

出土遺物　須恵器の杯Ａ（271）が出土している（第120図）。底部から体部にかけての変換部は、明確な稜をなしている。

時期　出土遺物から判断して、奈良時代中期（Ⅰ期）と考えられる。

Ｐ20

検出状況　調査区中央南部で検出した（第88図）。Ｐ17の東側、Ｐ18の北側、Ｐ21の南側に位置する。

出土遺物　須恵器の皿Ａ（272）と土師器の杯が出土している（第120図）。土師器の杯は、288のように、口縁部外側が沈線状をなしている。

時期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ21（写真図版50･51）

検出状況　調査区中央南部で検出した（第88図）。Ｐ20の北側、Ｐ22の南側、Ｐ27の西側に位置する。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（第120図）。

須恵器　杯Ｂ（273）が出土している。底部は、高台貼付け後、全て回転ヘラ削りにより仕上げられている。

土師器　杯と甕が出土している。杯は２タイプの出土が認められ、一つのタイプは図化した274である。底部を指オサエとナデにより整形後、ハケ調整により仕上げられている。底部内面にもわずかにハケ調整の痕跡を観察することができる。もう一タイプは小片のため図化できなかったが、口縁部内端面が沈線状をなしている。

甕は、体部片が出土している。

時期　出土遺物から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

Ｐ22

検出状況　調査区中央南側で検出した（第88図）。Ｐ21の北側、Ｐ23の東側、Ｐ24の南側に位置する。

出土遺物　土師器の杯Ａ（275）が出土している（第120図）。口縁部のみの残存であるが、椀に近い形態が想定される。

時期　出土遺物から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

Ｐ23

検出状況　調査区中央部で検出した（第88図）。Ｐ16の東側、Ｐ22の西側、Ｐ24の南側に位置する。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（第120図）。須恵器は杯の口縁部片が出土している。土師器は、杯Ａ（278）と甕が出土している。杯については、小片のため口径を復元することはできなかった。甕は、体部片が出土しており、外面に煤の付着が認められる。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

Ｐ24（写真図版51）

検出状況　調査区中央部で検出した（第88図）。Ｐ23の北側、Ｐ25の南側に位置する。

出土遺物　須恵器・土師器・瓦が出土している（第120図）。

須恵器　杯Ｂ（277）が出土している。他に、杯の口縁部片も出土している。

土師器　杯Ａ（276）・椀・甕が出土している。276は、他の杯とは異なり、口縁端部が外方につまみ出されている。椀は高台部を中心に残存する。甕は、口縁部片が出土している。276を除いては、小片のため図化できなかった。

瓦　凹面に布面が観察できる小片が出土している。小片のため、平瓦・丸瓦の峻別は困難である。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

Ｐ25（写真図版49）

検出状況　調査区中央部で検出した（第88図）。Ｐ24の北側、Ｐ26の南東側に位置する。

出土遺物　土師器と黒色土器が出土している（写真図版49）。

土師器　杯と甕が出土している。杯は口縁部片（279：写真図版49）と底部片が、甕は体部片が出土している。いずれも小片のため、図化できなかった。

黒色土器　椀（280）が出土している。内黒タイプで、口縁部内端面にわずかな沈線を確認することができる。内外面とも、ヘラミガキは観察できない。

時　　期　出土遺物、特に黒色土器の出土から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

Ｐ26

検出状況　調査区中央部で検出した（第88図）。Ｐ25の北西側、Ｐ46の東側に位置する。

出土遺物　須恵器の杯Ａ（281）と土師器の杯Ｂが出土している（第120図）。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ27（写真図版22）

検出状況　調査区中央南東部で検出した(第88図)。Ｐ03の北側、Ｐ21の東側、Ｐ28の南西側に位置する。

出土遺物　土師器の甕が出土している（第121図）。口縁部片（282）と体部片が出土している。282は、長胴甕に分類されるものと考えられる。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ28（写真図版49）

検出状況　調査区中央南東部で検出した（第88図）。Ｐ27の北東側、Ｐ29の南側、Ｐ30の西側に位置する。

出土遺物　須恵器・土師器・製塩土器が出土している。

須恵器　杯Ａの底部が出土している。小片のため図化はできなかった。

土師器　杯（284：写真図版49）・皿・甕（283）が出土している（第121図）。杯は口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。皿も、口縁部片が出土している。甕は口縁部片と体部片が出土しているが、図化できたのは283の口縁部片に限られる。

製塩土器　焼塩壺の口縁部片が出土している。小片のため、図化できなかった。

時期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ29

検出状況　調査区中央南東部で検出した（第88図）。Ｐ28の北側、Ｐ30の北西側、Ｐ32の南側に位置する。

出土遺物　須恵器・土師器・製塩土器が出土している（第121図）。

須恵器　皿Ｂ（285）が出土している。高台そのものは残存しないが、わずかに高台への変換部が確認できたため、皿Ｂとした。

土師器　甕（286・287）が出土している。286と287はタイプを異にするもので、286は砲弾形の体部を、287は球形の体部を有するものと考えられる。この他、丸底の底部片も出土している。

製塩土器　焼塩壺の小片が出土している。

時期　出土遺物から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

Ｐ30（写真図版22）

検出状況　調査区中央南東部で検出した（第88図）。Ｐ28の東側、Ｐ31の西側に位置する。

出土遺物　土師器の杯Ａ（288）・甕・堝（289）が出土している（第121図）。288は、口縁部が内外面を大きくつまむようなナデ調整により整形されている。また、口縁端部外面は特に強いナデ調整により、沈線状をなしている。

堝は、浅い鉢形をなす。頸部外面に親指を当て、口縁部を整形したようで、頸部外面には指オサエ痕が顕著に認められる。甕は、口縁部片と体部片が出土しており、体部外面には煤の付着が認められる。

時期　出土遺物から判断して、奈良時代中期（Ⅰ期）と考えられる。

Ｐ31（写真図版51）

検出状況　調査区中央南東部で検出した（第88図）。Ｐ30の東側、ＳＤ26の東側に位置する。

出土遺物　土師器の杯Ａ（290）と甕が出土している（第121図）。290は、ほぼ完形に復元できる個体で、底部と体部の変換部には弱い左方向のヘラ削りが施されている。また、口縁端部内面は強い横ナデ調整により、沈線状をなしている。他にも同様の口縁部片が出土している。

甕は、体部片が出土している。

時　　期　　出土遺物から判断して、奈良時代中期（Ⅰ期）と考えられる。

Ｐ32

検出状況　　調査区中央東側で検出した（第88図）。Ｐ29の北側、畠９の南側に位置する。

出土遺物　　須恵器の皿Ａ（306）と土師器の甕の肩部片が出土している（第121図）。

時　　期　　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ33（写真図版49）

検出状況　　調査区中央東側で検出した(第88図)。Ｐ34の西側、ＳＤ26の東側、ＳＤ27の西側に位置する。

出土遺物　　土師器の杯の底部片が出土している（295：写真図版49)。内面に漆の付着が認められる。

時　　期　　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ34（写真図版51）

検出状況　　調査区中央東側で検出した（第88図）。Ｐ33の東側、Ｐ35の西側に位置する。

出土遺物　　土師器の甕（296）とカマド（297）が出土している（第121図)。甕は296の１個体で、口縁端部外面は強い横ナデ調整により、２条の沈線が認められる。また、体部内面は磨滅が著しく、調整は観察できない。

カマド（297）は、図化できなかったが、口縁部片が出土している（写真図版51)。内面に煤の付着が認められる。

時　　期　　出土遺物から判断して、奈良時代中期（Ⅰ期）と考えられる。

Ｐ35

検出状況　　調査区中央部東側で検出した（第88図）。Ｐ34の東側に位置する。

出土遺物　　土師器の甕（294）が出土している（第121図)。長胴タイプの口縁部片であるが、全体的に磨滅が著しく、調整の観察は困難である。

時　　期　　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

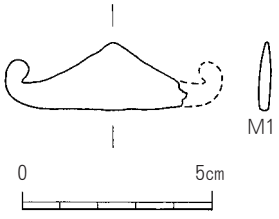
Ｐ36（写真図版61）

検出状況　　調査区中央部北側で検出した（第88図）。Ｐ37の南側、Ｐ47の西側に位置する。

出土遺物　　土器と鉄製品が出土している。

土　　器　　土師器の杯と甕、製塩土器が出土している。杯は口縁部片で、内端部が沈線状を呈している。甕は体部片が出土している。

鉄製品　　火打金（Ｍ１）が出土している（第89図)。いわゆる山形に分類されるものである。一部を欠くが、ほぼ全体の形状を復元することができる。その規模は、長さ2.70cmを測り、



第89図　出土火打金

幅は6.80cm残存する。打撃部の厚さは５㎜である。なお、エックス線透過撮影においても、紐穴は認められなかった（第156図）。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代中期（Ⅰ期）と考えられる。

Ｐ37

検出状況　調査区中央北側で検出した（第88図）。Ｐ36の北側、Ｐ38の西側に位置する。

出土遺物　土師器の杯（291）が出土している（第121図）。口縁部の小片であるが、他の杯と比較して、深く大型である。口縁部内端面は、強い横ナデにより沈線状を呈している。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代中期（Ⅰ期）と考えられる。

Ｐ38

検出状況　調査区中央部北側で検出した（第88図）。ＳＢ13の西側、Ｐ37の東側に位置する。

出土遺物　土師器の甕と製塩土器（292）が出土している（第121図）。甕は長胴タイプに分類されるもので、口縁部片が出土している。製塩土器は、焼塩壺の小片が出土している。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ39

検出状況　調査区中央部で検出した（第88図）。Ｐ12の北西側、ＳＫ24の南側に位置する。

出土遺物　土師器の堝（299）が出土している（第121図）。浅鉢型に分類されるものである。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代中期（Ⅰ期）と考えられる。

Ｐ40（写真図版22）

検出状況　調査区中央北西部で検出した（第88図）。ＳＢ17の西側に位置する。

出土遺物　土師器の甕（298）が出土している（第121図）。体部下半が残存し、丸胴タイプの甕に分類されるものである。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ41（写真図版51）

検出状況　調査区中央部西側で検出した（第88図）。Ｐ40の南側、ＳＫ15の西側に位置する。

出土遺物　須恵器の杯と丸瓦が出土している（第122図）。杯は口縁部を中心に残存するが、小片のため図化できなかった。焼成は不十分である。丸瓦（307）は、広端部を中心に残存する。凸面は縦方向のヘラ削りにより仕上げられ、凹面には布目が認められる。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ42

検出状況　調査区中央南西部で検出した（第88図）。Ｐ06の西側に位置する。

出土遺物　須恵器の杯蓋（303）と土師器の杯底部が出土している（第121図）。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ43

検出状況　調査区中央南側で検出した（第88図）。Ｐ12の南側、Ｐ13の西側、Ｐ44の北側に位置する。

出土遺物　須恵器・土師器が出土している（第121図）。

須恵器　杯Ｂ蓋が出土している。

土師器　杯Ａ（300）・杯Ｃ（301）・皿（302）が出土している。300は、口縁端部内面が強い横ナデ調整により、わずかに沈線状をなしている。暗文は施されていない。301は、底部まで残存しないため、杯Ａか杯Ｂの判断は困難である。端部の器壁は、強い横ナデ調整により薄く仕上げられている。内面に煤状の付着が認められる。皿は、口径に対してかなり浅い皿である。

時期　出土遺物から判断して、奈良時代中期（Ｉ期）と考えられる。

Ｐ44（写真図版52）

検出状況　調査区中央南側で検出した（第88図）。Ｐ13の南側、Ｐ14の西側に位置する。

出土遺物　平瓦（308）が出土している（第122図）。広端部右隅を中心に残存する。凸面には縄目叩きが、凹面には布目が認められるが、広端部付近は凹凸両面ともナデ調整により仕上げられている。また、側面・端面ともヘラ削りにより仕上げられている。

時期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ45

検出状況　調査区中央部で検出した（第88図）。Ｐ15の南側、Ｐ16の北西側に位置する。

出土遺物　須恵器の杯Ｂ蓋（304）が出土している（第121図）。

時期　出土遺物から判断して、奈良時代中期（Ｉ期）と考えられる。

Ｐ46

検出状況　調査区中央部で検出した（第88図）。Ｐ15の北側、Ｐ26の西側に位置する。

出土遺物　須恵器の杯Ｂ（305）と土師器の杯の小片が出土している（第121図）。305は、他の杯Ｂと比較して高台が小規模である。

時期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

Ｐ47

検出状況　調査区中央部で検出した（第88図）。ＳＥ01の南側に位置する。

出土遺物　土師器の甕（293）が出土している（第121図）。口縁部のみの残存であるが、長胴甕に分類されるものと考えられる。外面は磨滅が著しく、調整は観察できない。また、口縁部内面の上半はハケ調整、下半はナデ調整が施されているが、その前後関係は明らかにできない。

時期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

第90図　奈良時代の遺構　土坑・井戸・墓

（５）土　　坑

計29基（ＳＫ09～ＳＫ37）検出している。

ＳＫ09（写真図版53）

検出状況　調査区西端部中央に位置する（第90図）。他の遺構との切り合い関係は認められないが、一部は調査区外に拡がっている。

形状・規模　平面形は、検出した範囲において方形をなす。その規模は、長軸方向で80cm、その直交方向で70cm残存する。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは４cmである。

埋没状況　褐灰色シルト混じり細砂１層からなる。

出土遺物　須恵器の甕Ｃ（316）が出土している（第122図）。体部内面に当て具痕があり、大半はナデ調整により消されている。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

ＳＫ10

検出状況　調査区南西部に位置する（第90図）。ＳＫ12の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は長楕円形をなし、溝状に近い形態である。その規模は、長軸方向で91cm、その直交方向で35cmを測る。横断面は浅いＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは８cmである。

埋没状況　暗灰褐色砂混じりシルト１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　後述するＳＫ11と埋土が同じことから、奈良時代と考えられるが、小期を特定できない。

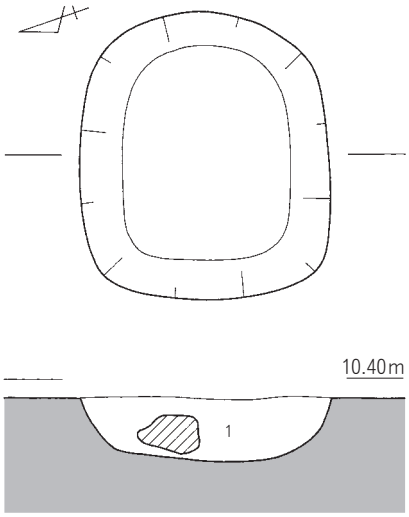
ＳＫ11（写真図版23）

検出状況　調査区南西部で検出した（第90図）。ＳＫ10の東側、ＳＫ12の南側、ＳＤ07の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は方形に近い隅丸長方形をなす（第91図）。その規模は、長軸方向で76cm、その直交方向で66cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは16cmである。

埋没状況　黄褐色シルト混じり灰茶色シルト混じり細砂１層からなる（第91図）。黄褐色シルトがブロック状に含まれることから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器・須恵器・瓦が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。特に土師器と須恵器は小片のため、器種の特定も困難である。瓦は、丸瓦



１．黄褐色シルト混じり
　　灰茶色シルト混じり細砂

0　50cm

第91図　ＳＫ11

の小片で、凹面には布目が認められる。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定できない。

ＳＫ12

検出状況　調査区南西部で検出した（第90図）。ＳＫ10の東側、ＳＫ11の南側、ＳＤ07の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は隅丸長方形をなす。その規模は、長軸方向で72cm、その直交方向で48cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは７cmである。

埋没状況　褐灰色シルト混じり極細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　ＳＫ11と埋土が同じことから、奈良時代と考えられるが、小期を特定できない。

ＳＫ13

検出状況　調査区南西部で検出した（第90図）。ＳＫ11・ＳＫ12・ＳＤ07の東側に位置する。ＳＫ14と切り合い関係にあり、ＳＫ14に切られている。このため、全体は検出されなかった。

形状・規模　平面形は、残存する範囲においては楕円形をなす。その規模は、長軸方向で50cm残存し、その直交方向で37cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは16cmである。

埋没状況　黄褐色シルト混じり灰褐色シルト混じり細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　ＳＫ11と埋土が同じことから、奈良時代と考えられるが、小期を特定できない。

ＳＫ14

検出状況　調査区南西部で検出した（第90図）。ＳＫ11・ＳＫ12・ＳＤ07の東側に位置する。ＳＫ13と切り合い関係にあり、ＳＫ13を切っている。このため完存する。

形状・規模　平面形は、楕円形をなす。その規模は、長軸方向で91cm、その直交方向で69cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは７cmである。

埋没状況　黒褐色シルト混じり細砂１層からなる。その層相から判断して、自然に堆積し、土壌化したものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　ＳＫ11と埋土が同じこと、およびＳＫ13との切り合い関係から、奈良時代と考えられるが、小期を特定できない。

ＳＫ15

検出状況　調査区中央部西側で検出した（第90図）。ＳＫ16の南側に位置する。柱穴を切る以外、他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は、楕円形をなす。その規模は、長軸方向で98cm、その直交方向で80cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは６cmである。

埋没状況　灰黄色シルト混じり細砂～中砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

土師器　杯Ａと甕が出土している。杯Ａは底部片が、甕は体部片が出土している。

須恵器　杯の口縁部片と甕の底部片が出土している。

時期　出土土器から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

ＳＫ16

検出状況　調査区中央部北西側で検出した（第90図）。ＳＫ15の北側に位置する。当遺構の大半が後世の撹乱を受けている。このため、検出できたのは、全体の1/2以下である。

形状・規模　多くが撹乱を受けているため、形状・規模等を明確にすることはできない。横断面は、検出した範囲では皿形をなし、最深部における検出面からの深さは16cmである。

埋没状況　暗黄褐色砂質シルト混じり暗灰褐色シルト質細砂～中砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の甕の体部片が出土しているが、小片のため図化はできなかった。

時期　出土土器から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定できない。

ＳＫ17

検出状況　調査区中央部北西側で検出した（第90図）。ＳＫ23の南側に位置する。ＳＤ05を検出した段階で、当遺構を確認したものである。ＳＤ05との正確な前後関係を調査では明らかにできなかったが、結果として完存する。

形状・規模　平面形は楕円形をなす。その規模は、長軸方向で90cm、その直交方向で65cmを測る。横断面はやや深い皿形をなし、最深部における検出面からの深さは11cmである。

埋没状況　暗灰色シルト混じり灰黄色シルト質細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器の杯の口縁部片と土師器の甕の体部片が出土している。いずれも、小片のため図化はできなかった。

時期　出土土器から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定できない。

ＳＫ18

検出状況　調査区中央部西側で検出した（第90図）。ＳＤ05の東側、畠３・畠４の北西側に位置する。検出位置及び平面形から判断して畠の溝の可能性も考えられたが、その深い断面形から土坑と判断したものである。当遺構は、他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は長楕円形をなす。その規模は、長軸方向で74cm、その直交方向で32cmを測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは10cmである。

埋没状況　暗黄褐色シルト混じり灰褐色シルト質細砂１層からなる。暗黄褐色シルトがブロック状

に含まれることから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　埋土の特徴が、後述するＳＫ19と類似することから奈良時代と考えられるが、小期を特定できない。

ＳＫ19（写真図版23）

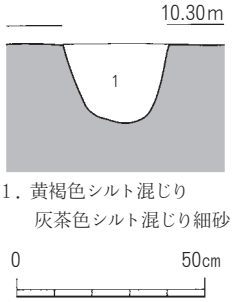
検出状況　調査区中央部北西側で検出した（第90図）。畠２・畠４の北西部に位置する。検出位置及び平面形から判断して畠の溝の可能性も考えられたが、その断面形から土坑と判断したものである。当遺構は、他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は、隅丸長方形に近い長楕円形をなす。その規模は、長軸方向で76cm、その直交方向で30cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは20cmである。

埋没状況　黄褐色シルト混じり灰茶色シルト混じり細砂１層からなる（第92図）。黄褐色シルトがブロック状に含まれることから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の甕の口縁部片と体部片が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

時　　期　出土土器から判断して、７世紀～８世紀と考えられる。



第92図　ＳＫ19

ＳＫ20

検出状況　調査区中央部南側で検出した（第90図）。畠１の東側に位置し、ＳＢ03南桁行と平面的に重複する。また、ＳＫ21と切り合い関係にあるが、ＳＫ21を切り完存する。

形状・規模　平面形は隅丸方形をなす。その規模は、長軸方向で70cm、その直交方向で60cmを測る。横断面はやや歪んだＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは31cmである。

埋没状況　上から黄褐色シルト混じり黒褐色シルト質極細砂、灰褐色シルト質細砂の２層からなる。上層については、黄褐色シルトがブロック状に含まれることから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　後述するＳＫ21との切り合い関係から、奈良時代と考えられるが、小期を特定できない。

ＳＫ21（写真図版23）

検出状況　調査区中央部南側で検出した（第90図）。畠１の東側に位置し、ＳＢ03南桁行と平面的に重複する。また、ＳＫ20と切り合い関係にあり、ＳＫ20に切られている。このため、当遺構の一部を欠く。

形状・規模　平面形は楕円形をなす。その規模は、短軸方向で60cmを測る。横断面は逆台形に近いＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは26cmである。

埋没状況　黒褐色シルト混じり灰茶色シルト混じり細砂１層からなる。黒褐色シルトがブロック状に含まれることから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の杯・甕、製塩土器（焼塩壺）が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。杯は口縁部を中心に残存し、内端面に沈線は認められない。甕と焼塩壺は体部片が出土している。焼塩壺に関しては、他の遺構から出土しているものと同じ特徴を有するものである。

時　期　出土土器から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定できない。

ＳＫ22

検出状況　調査区中央部南側で検出した（第90図）。ＳＫ08の西側に位置する。ＳＢ08の北西隅にあたり、同建物Ｐ３と切り合い関係にあり、これに切られている。このため、本遺構は一部を欠く。

形状・規模　平面形は隅丸方形をなす。その規模は、長軸方向で1.46ｍ、その直交方向で96cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは10cmである。

埋没状況　茶褐色シルト質細砂混じり灰色シルト質細砂１層からなる。茶褐色シルト質細砂がブロック状に含まれることから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　期　ＳＢ08との切り合い関係から、奈良時代中期（Ｉ－１期もしくはＩ－２期）と考えられる。

ＳＫ23（写真図版23）

検出状況　調査区中央部北西側で検出した（第90図）。ＳＨ05の北西側、ＳＤ08の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は長楕円形をなす（第93図）。その規模は、長軸方向で78cm、その直交方向で40cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは25cmである。

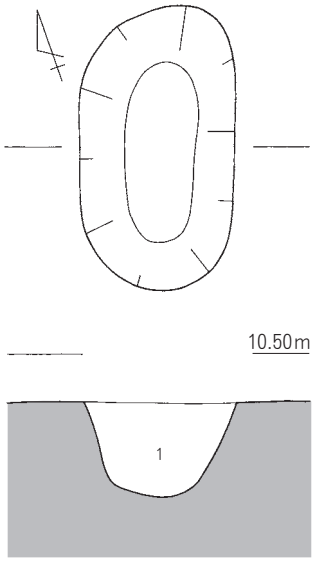
埋没状況　黄褐色シルト混じり灰褐色シルト質細砂１層からなる（第93図）。黄褐色シルトがブロック状に含まれることから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している。

土師器　杯・皿・甕が出土している。杯と皿は口縁部を中心に残存し、口縁部内端面には沈線が認められる。甕は体部片が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

須恵器　杯身・杯Ｂ蓋（317）・壺が出土している（第122図）。

時　期　出土土器から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。



第93図　ＳＫ23

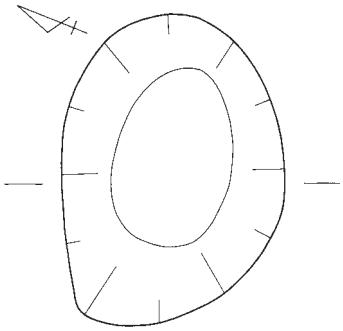
ＳＫ24

検出状況　調査区中央部で検出した（第90図）。ＳＨ05の南東側、ＳＢ04の北側、畠４の東側、畠５の北西側に位置する。他の遺構との明確な切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形は不整形である。その規模は、長軸方向で90cm、その直交方向で70cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは６cmである。

出土遺物　須恵器の椀の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。深さが約６cm強を測る。

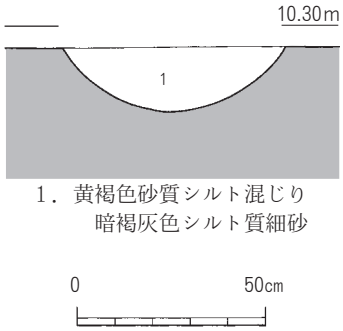
時　期　出土土器から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。



ＳＫ25（写真図版24）

検出状況　調査区中央北西部で検出した（第90図）。ＳＨ05の東側に位置する。柱穴と切り合い関係にあるが、これを切っている。よって、当土坑は完存する。

形状・規模　平面形は長楕円形をなす（第94図）。その規模は、長軸方向で86cm、その直交方向で62cmを測る。横断面は浅いＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは17cmである。



第94図　ＳＫ25

埋没状況　黄褐色砂質シルト混じり暗褐灰色シルト質細砂１層からなる。黄褐色砂質シルトがブロック状に含まれることから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の甕の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時　期　出土土器から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

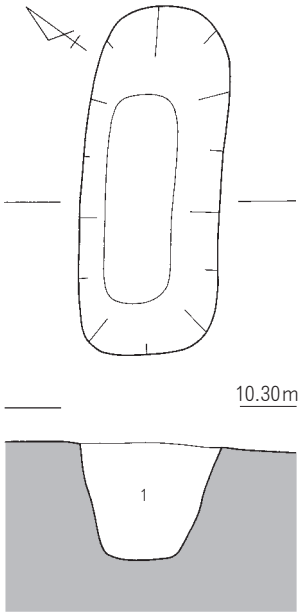
ＳＫ26

検出状況　調査区中央部北西側で検出した（第90図）。ＳＨ05の北東側に位置する。また、ＳＢ05と平面的に重複し、当該建物のほぼ中央部に位置する。また、Ｐ08と切り合い関係にあり、Ｐ08を切っている。このため、完存する。

形状・規模　平面形は楕円形をなす。その規模は、長軸方向で70cm、その直交方向で46cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは23cmである。

出土遺物　土師器の杯Ａの底部片が出土している。小片のため図化できなかった。

時　期　出土土器、およびＰ08との切り合い関係から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。



第95図　ＳＫ27

ＳＫ27（写真図版24）

検出状況　調査区中央部で検出した（第90図）。ＳＢ04の北側、ＳＢ05の東側、畠６の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は隅丸長方形をなす（第95図）。その規模は、長軸方向で92cm、その直交方向で46cmを測る。横断面は逆台形をなし、そのラインは直線的である。最深部における検出面からの深さは31cmである。

埋没状況　暗灰色シルト混じり暗褐灰色砂質シルト１層からなる（第95図）。基盤層の黄褐色砂質シルトもブロック状に含まれることから、人為的に埋められたものと考えられる。また、炭片も少なからず含まれている。

出土遺物　土師器・須恵器・製塩土器・瓦が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

土師器　杯もしくは皿の底部、甕の体部片、カマドの庇が出土している。このなかで、甕の体部片は、長胴甕に分類されるものである。

須恵器　杯Ａの底部片、杯の口縁部片、甕の体部片が出土している。

製塩土器　焼塩壺が出土している。

瓦　丸瓦の小片が出土している。凹面は、布目がナデによりほとんど消されている。

時期　出土土器から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

ＳＫ28（写真図版24）

検出状況　調査区中央南西部で検出した（第90図）。ＳＢ11・ＳＢ12と平面的に重複する。時期を特定できない土坑を切る以外、明確な切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は長楕円形をなす。その規模は、長軸方向で71cm、その直交方向で24cmを測る。横断面はＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは９cmである。

埋没状況　暗黄褐色砂質シルト混じり暗褐色シルト混じり細砂～中砂１層からなる。この層は、暗黄褐色砂質シルトがブロック状に混入していることから、人為的に埋められたものである。

出土遺物　全く出土していない。

時期　埋土の特徴から、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

ＳＫ29

検出状況　調査区中央南東部で検出した（第90図）。ＳＢ10南東隅の南東側、ＳＤ26の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は隅丸方形をなす。その規模は、長軸方向で1.10m、その直交方向で82cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは11cmである。

埋没状況　黄褐色砂質シルト混じり灰茶色細砂１層からなる。この層は、黄褐色砂質シルトがブロック状に混入していることから、明らかに人為的に埋められたものである。

出土遺物　全く出土していない。

時期　埋土の特徴から、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

ＳＫ30

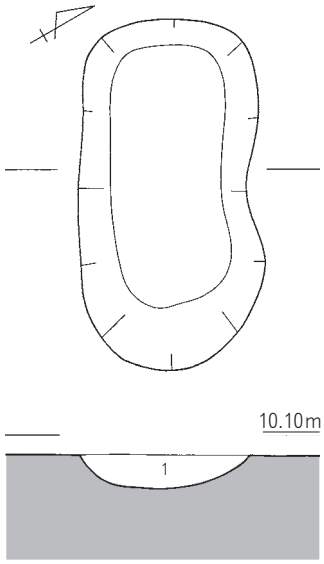
検出状況　調査区中央南西部で検出した（第90図）。ＳＢ10の東側、ＳＢ14・ＳＢ15の南側に位置し、これらの建物と主軸方向をほぼ同じくする。柱穴と切り合い関係にある以外、他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は隅丸長方形をなす(第96図)。その規模は、長軸方向で1.86ｍ、その直交方向で98cmを測る。横断面は緩やかな逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは18cmである。

埋没状況　１層からなる（第96図)。この層は、淡灰黄色シルト質細砂と暗灰色シルトがそれぞれブロック状になった層であることから、明らかに人為的に埋められたものである。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土遺物から時期を判断することは困難である。ＳＢ10・ＳＢ14・ＳＢ15と主軸方向を同じくすることから、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。



第96図　ＳＫ30

ＳＫ31

検出状況　調査区中央部北東側で検出した（第90図)。ＳＢ12の北側、ＳＢ13・ＳＫ32の南側に位置する。また、畠９と平面的に重複するが、その前後関係は調査では明らかにできなかった。他の遺構と切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は不整形である。その規模は、長軸方向で80cm、その直交方向で68cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは25cmを測る。

埋没状況　上から、灰褐色シルト質細砂～中砂、茶褐色シルト質細砂混じり灰黄色シルト質細砂の２層からなる。特に下層については、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器の小片が出土している。小片のため、器種の特定も困難である。

時　　期　出土土器から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。

ＳＫ32（写真図版52）

検出状況　調査区中央部北東で検出した（第90図)。ＳＫ31の北側に位置する。また、ＳＢ13南梁行、畠７と平面的に重複する。ＳＢ13－Ｐ９及びＳＤ24・畠９と切り合い関係にあり、Ｐ９とＳＤ24に切られ、畠９の溝を切っている。このため、一部を欠くとともに、Ｐ９が当遺構のほぼ中央部にあるため、良好な状態で検出されたとは言い難い状況である。

形状・規模　残存する限りにおいて、平面形は隅丸方形をなす。その規模は、長軸方向で1.90ｍ、その直交方向で1.35ｍ残存する。横断面は緩やかな逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは９cmを測る。

埋没状況　黄褐色砂質シルト混じり黒褐色砂質シルト１層からなる。この層は、黄褐色砂質シルトがブロック状に混入していることから、明らかに人為的に埋められたものである。

出土遺物　土師器・須恵器・製塩土器が出土している（第122図)。

土師器　甕の体部片・口縁部片、カマドの体部・把手が出土している。

須恵器　杯Ａ（309）・杯Ｂ（310）・長頸壺が出土している。310は、全体的に歪みが顕著である。

長頸壺は、口縁部片と肩部の小片が出土している。

製塩土器　数個体分出土している（311～315）が、図化できたのは３点（311～313）である。いずれも焼塩壺で、底部まで残存するものは認められない。内外面とも粗い仕上げで、指ナデ痕・指頭痕が顕著に認められる。また、胎土も、粗い砂粒を含む点も共通している。

時　　期　出土土器から判断して、奈良時代中期（Ⅰ－３期）と考えられる。

ＳＫ33(写真図版24)

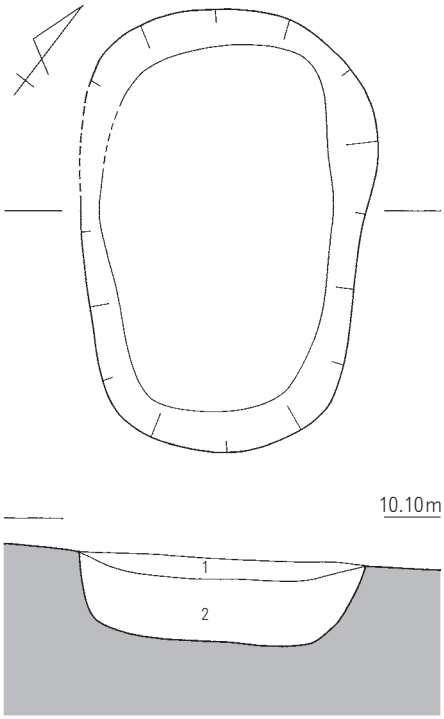
検出状況　調査区中央東部で検出した（第90図）。ＳＢ14・ＳＢ15の北側、畠９の南東部に位置する。平安時代後期の溝ＳＤ29と切り合い関係にあり、これに切られている。しかし、その影響は少なく、ほぼ完存する。

形状・規模　平面形は隅丸方形をなす（第97図）。その規模は、長軸方向で1.18m、その直交方向で74cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは21cmである。

埋没状況　２層からなる（第97図）。下層の黄灰色シルト混じり黒褐色シルトは、基盤層をブロック状に含むもので、人為的に埋められたものと考えられる。上層については、下層が土壌化した層と考えられる。

出土遺物　製塩土器と須恵器の小片が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。製塩土器は焼塩壺の一部が、須恵器は杯Ｂ蓋の一部が、それぞれ出土している。

時　　期　出土土器から判断して、奈良時代と考えられるが、小期を特定することは困難である。



第97図　ＳＫ33

ＳＫ34

検出状況　調査区中央部北東側で検出した（第90図）。ＳＢ14～ＳＢ16の北東側、ＳＫ35の北西側に位置する。畠７・畠９と平面的に重複し、畠９の鋤溝２に切られている。また、平安時代後期の溝ＳＤ29とも切り合い関係があり、ＳＤ29にも切られている。このため、当遺構の1/2以上は未検出である。

形状・規模　大半が切られており、全体の形状を明らかにすることはできない。検出した限りにおいては、隅丸方形もしくは楕円形をなすものと考えられる。規模については明確にできない。横断面は逆台形もしくは皿形をなし、最深部における検出面からの深さは14cmである。

埋没状況　黄褐色シルト混じり黒褐色砂混じりシルト１層からなる。黄褐色シルトがブロック状に混入することから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土遺物からの時期の特定は困難であるが、畠９との切り合い関係から、奈良時代中期（Ⅰ－１期）と考えられる。

ＳＫ35

検出状況　調査区中央部北東側で検出した（第90図）。ＳＢ14～ＳＢ16の北東側、ＳＫ34の南東側に位置する。畠７・畠９とその東側で平面的に重複する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は隅丸長方形をなす。その規模は、長軸方向で70cm、その直交方向で45cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは８cmである。

埋没状況　黒褐色シルト混じり暗灰色砂混じりシルト１層からなる。黒褐色シルトがブロック状に混入することから、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土遺物からの時期の特定は困難であるが、ＳＫ34と埋土の特徴が類似することから、奈良時代と考えられる。ただし、小期の特定は困難である。

ＳＫ36

検出状況　調査区中央北東部で検出した（第90図）。微凹地の北西肩部付近に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　平面形は隅丸長方形をなす。その規模は、長軸方向で1.08m、その直交方向で86cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは６cmである。

埋没状況　灰色シルト１層からなる。層相から判断して、自然に埋没したものと考えられる。

出土遺物　土師器と須恵器の小片が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。土師器は杯の口縁部片で、口縁部内面には沈線が認められる。須恵器は杯Ｂ蓋の一部である。

時　　期　出土土器から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

（６）井戸

１基（ＳＥ01）検出した。

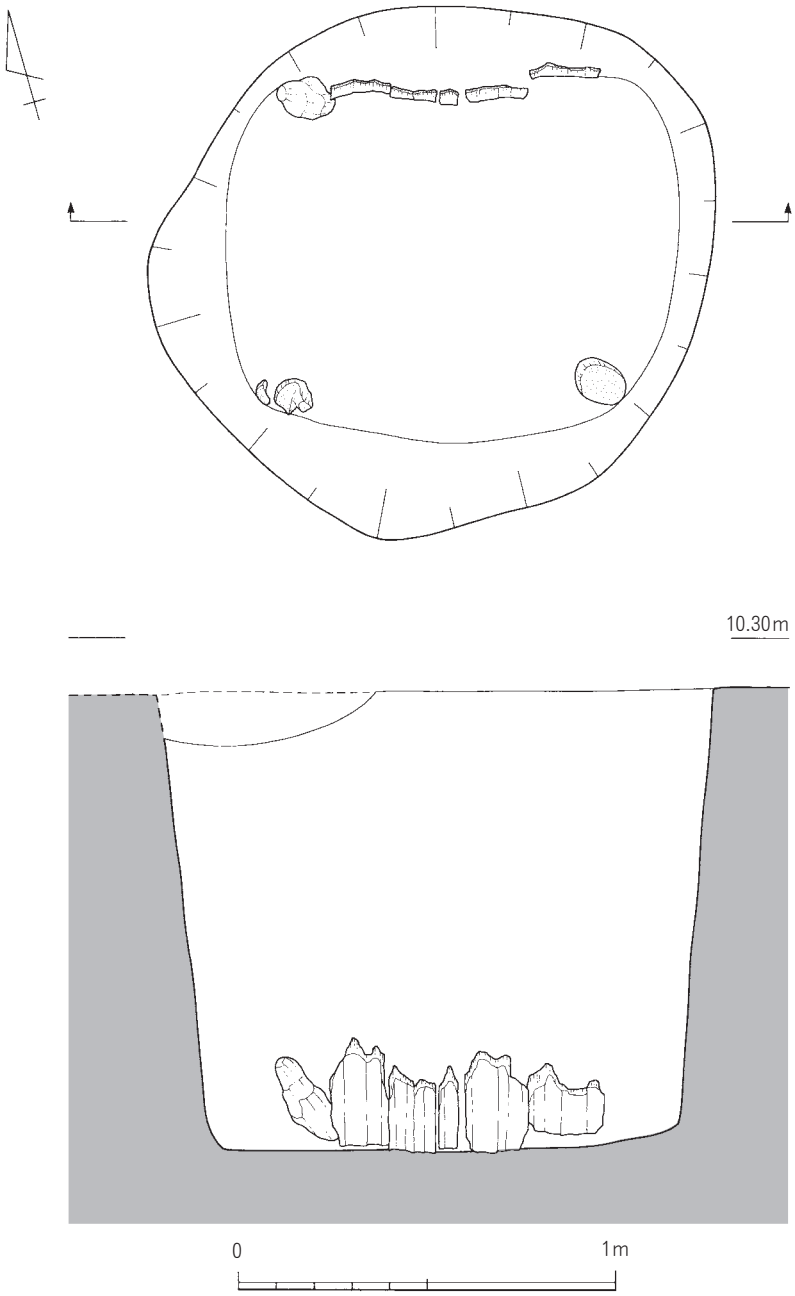
ＳＥ01（写真図版25・53～56）

検出状況　調査区中央部北側で検出した（第90図）。ＳＢ13の南西隅（Ｐ11）・ＳＫ32の西側に位置する。一部後世の撹乱を受けているが、他の遺構との切り合い関係は認められず、ほぼ完存する。

形状・規模　検出面における平面形は、円形を呈する（第98図）。一部歪んでおり、整円形をなさない。検出面における規模は、南北方向で1.37m、その直交方向で1.46mを測る。横断面は箱形に近い逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは1.22mを測る。

底部は方形に近い平面形をなす。その規模は、南北方向で95cm、その直交方向で1.20mである。底部の標高は、8.95mである。

埋没状況　上から、黄褐色シルト質砂混じり暗灰色シルト質砂、黒灰色シルトの順に堆積してい



第98図　ＳＥ01

た。上層については人為的に埋められた層、下層については自然堆積による層と、考えられる。

井　戸　枠　　木組みであるが、遺存状態は良好ではなく、底部にその一部がわずかに残存していた。底部４隅に柱が、北面に縦板が遺存しており、縦板組隅柱横桟どめ井戸と復元することができる。ただし、横桟は全く遺存していなかった。

隅柱は、最長で25cm遺存し、最大径は12cmである。縦板は、幅12cm～20cmを測り、最長で28cm遺存する。

出土遺物　　土師器・須恵器・瓦が出土している（第122～124図：巻首図版５）。大半が上層から出土している。この他、種子・炭化米・骨等も出土している。詳細は第４章を参照されたい。

土　師　器　　杯Ａ・皿・杯Ｂ蓋・甕・堝・カマドの各器種が出土している。

杯　Ａ　　５個体（320～324）図化することができた。形態・整形手法の違いから、①320～322、②323、③324の３タイプに分類できる。①に関しても、322は他の２個体より器壁が厚く、粗く仕上げられている。また、内面には煤の付着が認められる。この他320は、ひずみが顕著で、口径が最大で14cmの箇所も認められる。②は、底部から体部にかけての変換部外面を、回転ヘラ削りにより仕上げる点を特徴とする。また、法量的にも大型である。③は、②のヘラ削りに代わりヘラナデ調整により仕上げられている。また、杯Ａのなかで最も大型で、口縁端部が肥厚気味に内側に折り返されている。

皿　Ａ　　２個体（325・326）出土している。両個体は、法量的にも技法的にも、特徴を異にする。326は、外面にヘラナデ調整が加えられている。

杯Ｂ蓋　　２個体（318・319）図化したが、口縁端部の特徴を若干異にする。318は、内側に折り返され、わずかに肥厚傾向にある。一方、319は折り返されることなく、薄く仕上げられている。また、つまみの形態も若干異なる。いずれも、化粧土が塗られている。なお、319の内面は、磨滅が著しく、調整は観察できなかった。

鉢　　327の１個体出土している。体部の形態から浅鉢形の堝と判断したものである。口縁端部は、指オサエの後、横ナデ調整により仕上げられている。煤の付着は認められない。

甕　　328の１個体出土している。長胴タイプに分類される甕である。体部内面は、下半が不定方向のヘラ削りにより、上半部が縦方向の粗い指ナデ調整（第99図）により仕上げられている。また、頸部外面は強い横ナデ調整により、凹線状をなしている。

他に長胴と丸胴両タイプの体部片が出土し、ともに外面に煤の付着が認められる。

第99図　328内面

カマド　　３個体分（333～335）出土している。333は最も良好な個体で、焚口部を中心に残存する。外面は全体的にハケ調整により仕上げられ、横ナデ調整により庇が貼り付けられている。また、側面には舌状の把手が貼り付けられている。その幅は5.0cm、長さは3.70cmを測る。口縁端部は、外端部に粘土を継ぎ足し、横ナデ調整により外傾する端面が形成されている。庇下面には煤の付着が認められる。

334は、体部の裾である。小片のため、底径には若干の不安がある。335（写真図版55）は小片のため図化できなかったが、焚口部を中心に残存する。

製塩土器　　焼塩壺が２点（329・330）出土している。いずれも、内外面が指オサエと指ナデ調整により仕上げられている。また、330の内面には目の細かい布目（35本/cm）を観察することができる（第100図）。

第100図　330内面

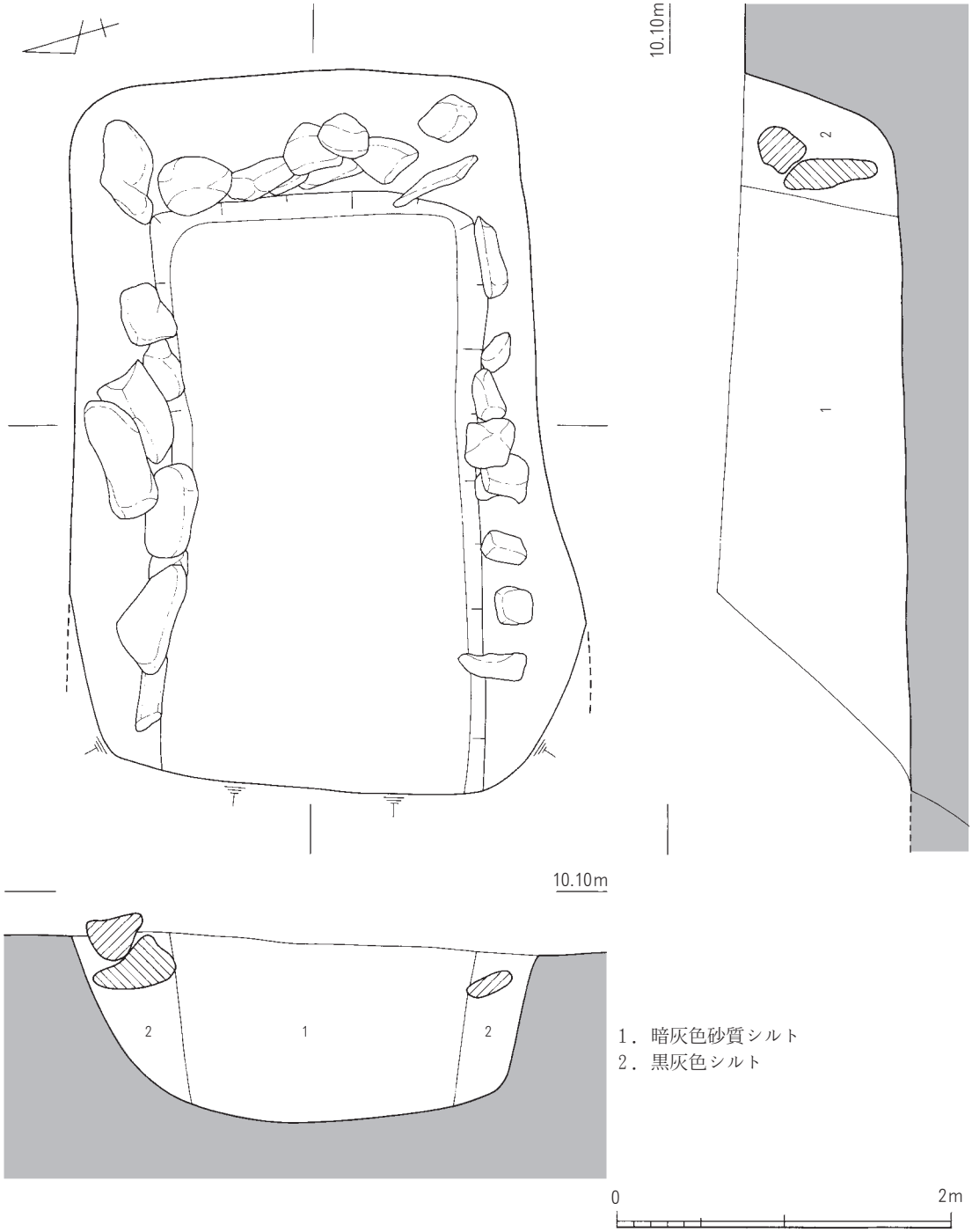
須恵器　　杯Ａ（332）・杯Ｂ蓋（331）・長頸壺・甕の各器種が出土している。332は、底部と体部の境が明瞭に屈曲し、底部は未調整である。杯Ｂ蓋は331の１個体である。長頸壺は頸部片が、甕は体部片が出土している。

瓦　　丸瓦（336・337）と平瓦（338・339）が出土している。

丸瓦はともに、凹面は布目を消すように粗いナデ調整により仕上げられている。また、側面はヘラ削りにより仕上げられている。

平瓦は、凸面を338が斜格子叩きにより、339が斜格子叩きにより仕上げられている。また、両個体とも、凹面は布目が認められ、縦方向のナデ調整が加えられるとともに、凹面には煤の付着が認められる。

時　　期　　第５章第２節での検討結果から判断してから、奈良時代中期（Ⅰ－２期）と考えられる。



第101図　ＳＸ01

（７）墓

１基（ＳＸ01）検出した。

ＳＸ01（写真図版26）

検出状況　調査区中央東側で検出した（第90図）。ＳＢ15の北東側、ＳＫ34の南側、ＳＫ35の西側に位置する。平安時代後期の溝ＳＤ29と切り合い関係にあり、西側約1/4が切られている。この他、畠７・畠９と平面的に重複するが、これらの遺構との前後関係を明らかにすることはできなかった。

形状・規模　残存する限りにおいて、掘り方の平面形は、隅丸長方形を呈するものと考えられる（第101図）。主軸方向で2.15m残存し、その直交方向で1.38mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは55cmである。

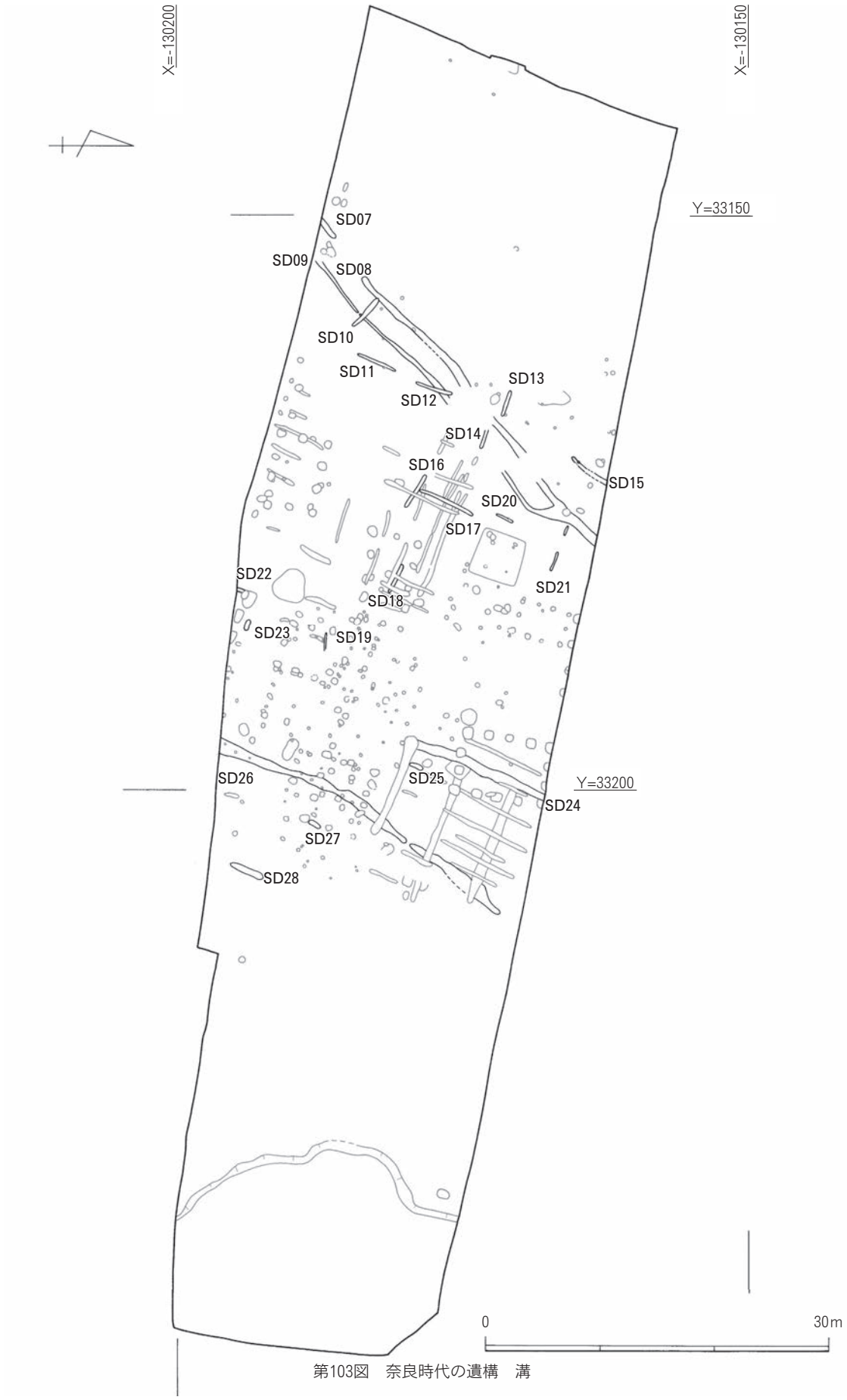
掘り方内には、10cm～40cm大の円礫が掘り方のラインに沿うように入れられていた。調査では明らかにすることはできなかったが、木棺を埋地した際の裏込めと考えられる。平面および横断面における土層観察においても、棺の外側のラインをわずかに観察することができた。これを元に復元される木棺の規模は、主軸方向で1.71m残存し、その直交方向で92cmとなる。

埋没状況　棺内には暗灰色砂質シルトが堆積していた。また、裏込め内の円礫は上層に限られ、以下は黒灰色シルトが埋められていた。

出土遺物　副葬品を含めて、遺物は全く出土していない。

時期　ＳＤ29との切り合い関係、主軸方向が掘立柱建物とほぼ同じことなどから、奈良時代を中心とした時期と考えられる。ただし、小期の特定は困難である。

第102図　ＳＸ01の調査



第103図　奈良時代の遺構　溝

（８）溝状遺構

ここでは、畠を構成する以外の溝状遺構について報告する。22条の溝（ＳＤ07～ＳＤ28）を検出している。その分布は調査区中央部に限られ、特にその東西両端に顕著である（第103図）。

ＳＤ07

検出状況　調査区中央部南西側で検出した（第103図）。ＳＤ09の西側に位置する。ＳＤ08の南西側延長上に位置することから、当初は同一の溝であった可能性が十分考えられる。北東－南西方向にほぼ直線的に伸びる溝で、北東側は調査区内で収束し、南西側は調査区外へのびている。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは、1.95ｍである。横断面は皿形をなし、検出面における幅は42cm～47cmを測る。最深部における検出面からの深さはわずか３cmである。底部の標高は、北東端で10.28ｍ、南西端で10.31ｍと、ほぼ一定している。

埋没状況　暗灰色砂質シルト１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時期　出土遺物から時期を特定することは困難である。当溝は、後述するＳＤ08の延長と考えられることから、奈良時代後期（Ⅱ－１期）と考えたい。

ＳＤ08

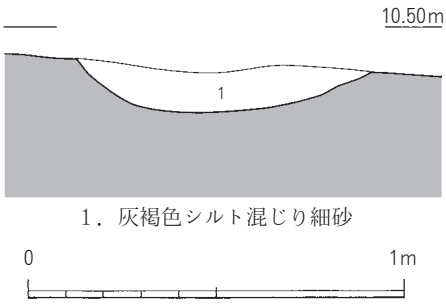
検出状況　調査区中央部西側で検出した（第103図）。ＳＨ05・畠１～畠４の西側に位置する。また、ＳＤ09の西側にほぼ平行する。北東－南西方向にほぼ直線的に伸びる溝で、北東側は古墳時代のＳＤ05と合流している。南西側は調査区内で収束している。ＳＤ10と切り合い関係にあり、ＳＤ10に切られている。この他、数箇所で後世の撹乱を受けている。

形状・規模　検出した長さは、26.60ｍである。横断面は皿形をなし、検出面における幅は43cm～80cmである。最深部における検出面からの深さは10cmを測る。底部の標高は、北東端で10.23ｍ、南西端で10.29ｍと、ほぼ一定している。

埋没状況　灰褐色シルト混じり細砂１層からなる（第104図）。

出土遺物　土師器の甕の体部片と、須恵器の椀の口縁部片・壺の体部片が出土している。いずれも、小片のため図化はできなかった。

時期　出土土器およびＳＤ10との切り合い関係から、奈良時代後期（Ⅱ－１期）と考えられる。



第104図　ＳＤ08

ＳＤ09

検出状況　調査区中央部南西側で検出した（第103図）。ＳＤ07及びＳＤ08の東側に位置し、ほぼ平行する。北東－南西方向にほぼ直線的に伸びる溝である。北東端は古墳時代の溝ＳＤ05と合流し、南西端は調査区外までのびている。

当遺構については、平面的には２条の溝からなる。調査時には異なる遺構としていたが、①同じ延長上にあり、②浅い遺構である、③埋土が同じであることから、途切れているものと判断し、同一の遺構として報告する。また、他に、後世の撹乱を受け途切れている。この他、ＳＤ10と切り合い関係にあり、これに切られている。

形状・規模　検出した長さは、途切れた箇所および撹乱を受けた箇所も含めて31.60ｍである。横断面は逆台形から皿形をなし、検出面における幅は22cm～40cmである。最深部における検出面からの深さは５cm～11cmである。底部の標高は、北東端で10.25ｍ、南西端で10.20ｍと、ほぼ一定している。

埋没状況　灰黄色シルト質細砂～極細砂１層からなる。

出土遺物　土師器の小片と須恵器の甕の体部片が出土している。いずれも、小片のため図化はできなかった。

時　　期　第５章第２節における検討結果から、奈良時代中期を中心とした時期と考えられる。

ＳＤ10

検出状況　調査区中央部南西側で検出した（第103図）。ＳＢ02の北西に位置する。ＳＤ08・ＳＤ09と切り合い関係にあり、直交し、両遺構を切っている。北西－南東方向にほぼ直線的にのびる溝である。両端とも調査区内で収束している。

形状・規模　検出した長さは、3.40ｍである。横断面は皿形をなし、検出面における幅は29cm～41cmである。最深部における検出面からの深さは４cmである。底部の標高は、北西端で10.25ｍ、南東端で10.21ｍと、ほぼ一定している。

埋没状況　暗黄褐色シルト質極細砂１層からなる。

出土遺物　土師器の高杯脚部が出土している。小片のため図化はできなかった。

時　　期　第５章第２節における検討結果から、奈良時代後期（Ⅱ－２期以降）と考えられる。

ＳＤ11（写真図版27）

検出状況　調査区中央部南西側で検出した（第103図）。ＳＢ02の北西、ＳＤ09の東側、ＳＤ12の南側に位置する。その位置関係から、本来はＳＤ12と同一の溝の可能性が考えられる。ほぼ南北方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは、3.67ｍである。横断面は浅いＵ字形をなし、検出面における幅は18cm～28cmである。最深部における検出面からの深さは６cmである。底部の標高は、（10.22ｍ）と一定している。

埋没状況　暗黄褐色砂質シルト混じり暗灰色細砂混じりシルト１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土遺物から時期を特定することは困難である。当溝は、後述するＳＤ12の延長と考えられることから、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えたい。

ＳＤ12

検出状況　調査区中央部西側で検出した（第103図）。ＳＤ11の北側、畠２の西側に位置する。ほぼ南北方向に直線的に伸びる溝で、両端とも調査区内で収束している。ＳＤ09と切り合い関係にあり、ＳＤ09を切っている。平面的位置、及び埋土の特徴から、先述したＳＤ11と同一の溝である可能性が高いものと考えられる。

形状・規模　検出した長さは、3.04ｍである。横断面は皿形をなし、検出面における幅は23cm～28cmである。最深部における検出面からの深さは６cmである。底部の標高は、北端部が10.31ｍ、南端部が10.27ｍとほぼ一定している。

埋没状況　暗黄褐色砂質シルト混じり暗灰色細砂混じりシルト１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土遺物から時期を特定することは困難である。ＳＤ11との関係およびＳＤ09との切り合い関係から、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えたい。

ＳＤ13

検出状況　調査区中央部西側で検出した（第103図）。ＳＤ08の西側に位置する。ほぼ東西方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは、2.47ｍである。横断面は皿形をなし、検出面における幅は24cm～34cmである。最深部における検出面からの深さは９cmである。底部の標高は、北端部が10.32ｍである。

埋没状況　灰褐色シルト混じり暗灰色細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の杯の口縁部片と、須恵器の杯の体部片が出土している。いずれも、小片のため図化はできなかった。なお、土師器の杯の口縁端部内面には沈線が認められる。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代中期（Ⅰ期）と考えられる。

ＳＤ14

検出状況　調査区中央部西側で検出した（第103図）。ＳＤ17の西側、ＳＤ13の東側に位置する。ほぼ東西方向に直線的に伸びる溝で、西側は後世の撹乱を受け、東側は調査区内で収束している。ＳＤ05と切り合い関係にあり、これを切っている。

形状・規模　検出した長さは、1.65ｍである。横断面はＵ字形をなし、検出面における幅は26cm～30cmを測る。最深部における検出面からの深さは10cmである。底部の標高は、東端部が10.18ｍ、西端部が10.22ｍとほぼ一定している。

埋没状況　淡黒灰色シルト混じり極細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の皿の口縁部片と、甕の体部片が出土している。甕は丸胴タイプと考えられる。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期の特定は困難である。

ＳＤ15

検出状況　調査区中央部北西側で検出した（第103図）。ＳＤ08の西側に位置し、ほぼ平行する。北東－南西方向にわずかに弧状をなして伸びる溝で、南西側は調査区内で収束し、北東側は調査区外までのびている。時期を特定できない土坑と切り合い関係にあるが、当該土坑を切っている。また、一部後世の撹乱を受けている。

形状・規模　検出した長さは、3.88ｍである。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は30cm～38cmを測る。最深部における検出面からの深さは６cmである。底部の標高は、北東端部が10.32ｍ、南西端部が10.36ｍとほぼ一定している。

埋没状況　灰黄色シルト混じり極細砂～細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の甕の体部片が出土している。小片のため図化はできなかった。

時　　期　出土遺物から判断して、奈良時代と考えられるが、小期の特定は困難である。

ＳＤ16（写真図版27）

検出状況　調査区中央部西側で検出した（第103図）。ＳＤ17の南側に位置し、畠２・畠３と平面的に重複する。ほぼ東西方向に直線的にのびる溝で、東側は調査区内で収束し、西側は後世の撹乱を受けている。畠２の鋤溝と切り合い関係にあり、これに切られている。

形状・規模　検出した長さは、3.10ｍである。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は26cm～32cmを測る。最深部における検出面からの深さは12cmである。底部の標高は、10.16ｍとほぼ一定している。

埋没状況　灰茶色シルト混じり細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器・須恵器・製塩土器が出土している。いずれも小片のため図化はできなかった。土師器は甕の体部片・杯または皿の一部が、須恵器は杯Ｂ蓋の口縁部片・杯Ａの底部～体部片、壺の体部片が、製塩土器は焼塩壺の小片が出土している。

時　　期　出土土器および、畠２との切り合い関係から、Ⅱ－３期以前と考えられる。

ＳＤ17

検出状況　調査区中央部西側で検出した（第103図）。ＳＤ16の北側に位置し、畠２・畠３・畠４と平面的に重複する。ほぼ南北方向に直線的に伸びる溝で、両端とも調査区内で収束している。畠３・畠４の鋤溝と切り合い関係にあり、これらを切っている。

形状・規模　検出した長さは、5.10ｍである。横断面は皿形をなし、検出面における幅は26cm～32cmを測る。最深部における検出面からの深さは４cmである。底部の標高は、北端が10.27ｍ、南端が10.19ｍとわずかに南側へ傾斜している。

埋没状況　褐灰色砂混じりシルト１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の甕の体部片が出土している。小片のため図化はできなかった。

時　　期　第５章第２節における検討結果から、奈良時代後期（Ⅱ－２期）と考えられる。

ＳＤ18

検出状況　調査区中央部で検出した（第103図）。ＳＨ05の南東側、ＳＤ17の東側に位置し、畠３・畠５・畠６と平面的に重複する。ほぼ東西方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。畠３・畠５・畠６の鋤溝と切り合い関係にあり、これに切られている。

形状・規模　検出した長さは、1.32ｍである。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は28cm～32cmを測る。最深部における検出面からの深さは８cmである。底部の標高は、東端が10.13ｍ、西端が10.17ｍと、ほぼ一定している。

埋没状況　暗褐灰色砂混じりシルト１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の甕とカマドの体部片が出土している。いずれも、外面には煤が付着している。

時　　期　第５章第２節における検討結果から、奈良時代中期（Ⅰ－１期）と考えられる。

ＳＤ19

検出状況　調査区中央部南側で検出した（第103図）。ＳＤ23の北側に位置する。また、ＳＢ09及び畠５と平面的に重複する。ほぼ東西方向に直線的に伸びる溝で、両端とも調査区内で収束している。ただし、東端部は時期の特定できない柱穴に切られている。また、畠５の鋤溝とも切り合い関係にあり、これを切っている。

形状・規模　検出した長さは、1.74ｍである。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は12cm～20cmを測る。最深部における検出面からの深さは６cmである。底部の標高は、10.09ｍとほぼ一定している。

埋没状況　灰色極細砂混じり暗褐灰色砂混じりシルト１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難であるが、第５章第２節における検討結果から、奈良時代後期（Ⅱ－５期）と考えられる。

ＳＤ20（写真図版27）

検出状況　調査区中央部北西側で検出した（第103図）。ＳＨ05の西側、ＳＤ17の北側、ＳＤ21の南側に位置する。ほぼ南北方向に直線的に伸びる溝で、両端とも調査区内で収束している。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは、1.77ｍである。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は14cm～30cmを測る。最深部における検出面からの深さは、５cmである。底部の標高は、10.23ｍでほぼ一定している。

埋没状況　黒灰色シルト混じり暗灰黄色砂質シルト１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難であるが、第５章第２節における検討結果から、奈良時代後期（Ⅱ－２期）と考えられる。

ＳＤ21

検出状況　調査区中央部北西側で検出した（第103図）。ＳＨ05の北西側、ＳＤ08の東側、ＳＤ20の北側に位置する。ほぼ東西方向に直線的に伸びる溝で、両端とも調査区内で収束している。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。一部途切れているが、同一の溝と判断して、報告する。

形状・規模　検出した長さは1.81ｍである。横断面は皿状をなし、検出面における幅は13cm～23cmを測る。最深部における検出面からの深さは、３cmである。底部の標高は、10.26ｍでほぼ一定している。

埋没状況　灰褐色シルト混じり極細砂～細砂１層からなる。

出土遺物　全く出土していない。

時　　期　出土土器から時期を特定することは困難であるが、ＳＤ20と方向性がほぼ一致することから、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

ＳＤ22

検出状況　調査区中央部南側で検出した（第103図）。ＳＤ23の西側、ＳＫ22の南側に位置する。また、ＳＢ08の西桁行と平面的に重複する。ほぼ南北方向に直線的に伸びる溝で、南端は調査区外へのび、北端はＳＢ08のＰ３に切られている。

形状・規模　検出した長さは90cmである。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は32cmを測る。最深部における検出面からの深さは８cmである。底部の標高は、南端部で10.06ｍである。

埋没状況　黄褐色砂質シルト混じり灰茶色細砂～中砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の甕の体部片、杯の口縁部片、カマドの体部片が出土している。杯の口縁端部内面には沈線が認められる。いずれも、小片のため図化はできなかった。

時　　期　第５章第２節における検討結果から、奈良時代中期（Ⅰ－２期）と考えられる。

ＳＤ23（写真図版27）

検出状況　調査区中央部南側で検出した（第103図）。ＳＢ08の北側、ＳＤ22の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　検出した長さは1.02ｍである。横断面はＵ字形をなし、検出面における幅は36cm～46cmである。最深部における検出面からの深さは、16cmである。底部の標高は、9.92ｍと一定している。

埋没状況　上から、暗灰褐色細砂～中砂、灰黄色シルト質細砂の２層からなる。２層とも、その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　壺の口縁部片（340）が出土している（第124図）。

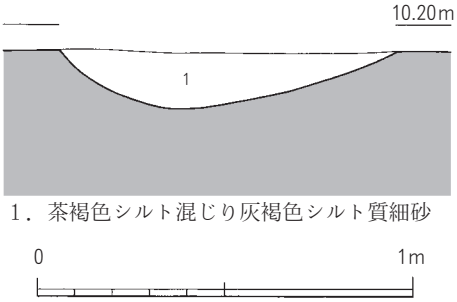
土師器　杯・甕・椀が出土している。杯は、口縁部片が出土しているが、端部内面に沈線は認められない。甕は丸胴タイプの一部と考えられる。いずれも、小片のため図化できなかった。

時　　期　出土土器から判断して、奈良時代後期（Ⅱ期）と考えられる。

ＳＤ24（写真図版27・55）

検出状況　調査区中央部北東側で検出した（第103図）。ＳＥ01の東側、ＳＤ25の西側に位置する。他に、ＳＢ13・畠７・畠９と平面的に重複する。北北東－南南西方向にほぼ直線的な溝で、北北東端は調査区外までのび、畠９を構成する溝・ＳＫ32を切っている。この他、ＳＢ13・畠７とも切り合い関係にあり、ＳＢ13の柱穴と畠７を構成する溝に切られている。

形状・規模　検出した長さは、12.10ｍである。横断面は皿形をなし、検出面における幅は58cm～1.04ｍである。最深部における検出面からの深さは、15cmである。底部の標高は、北北東端が9.98ｍ、南南西端が9.96ｍと、ほぼ一定している。



1．茶褐色シルト混じり灰褐色シルト質細砂

第105図　ＳＤ24

埋没状況　茶褐色シルト混じり灰褐色シルト質細砂１層からなる（第105図）。その層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　須恵器・土師器・製塩土器が出土している。

須恵器　杯Ａ・杯Ｂ蓋・甕が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。杯Ａは底部片と口縁部片が出土している。甕は体部と底部の小片が出土している。

土師器　皿Ｃ・甕・カマドが出土している（第124図）。

皿Ｃは、341の１個体である。底部から体部への変換部外面は、回転ヘラナデ調整により仕上げられている。甕は343の１個体で、長胴タイプに分類されるものである。口縁端部がわずかに肥厚気味である。カマド（342）は、口縁部を中心に残存する。残存する限りにおいては、焚口部は認められない。

製塩土器　焼塩壺（344）が出土している（写真図版55）。内外面とも、粗い指オサエにより整形されている。

時期　出土土器から判断して、奈良時代後期（Ⅱ－１期）と考えられる。

ＳＤ25

検出状況　調査区中央部北東側で検出した（第103図）。ＳＢ13・ＳＫ31の南側、ＳＢ12の北側、ＳＤ24の南東側に位置する。また、畠７・畠９と平面的に重複する。南北方向にほぼ直線的に伸びる溝で、両端とも調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

形状・規模　検出した長さは1.27ｍである。横断面はＵ字形をなし、検出面における幅は28cm～45cmである。最深部における検出面からの深さは、13cmである。底部の標高は、北端が9.98ｍ、南端が9.95ｍとほぼ一定している。

埋没状況　灰褐色シルト質細砂～中砂１層からなる。その層相から判断して、自然に堆積し土壌化したものと考えられる。

出土遺物　土師器の杯もしくは皿の一部と甕の体部片が出土している。いずれも、小片のため図化はできなかった。

時期　出土土器から判断して、奈良時代と考えられるが、小期の特定は困難である。

ＳＤ26

検出状況　調査区中央部東側で検出した（第103図）。ＳＤ27の西側に位置する。ＳＢ14～ＳＢ16及び畠７～畠９と平面的に一致する。北北東から南南西にやや弧状をなして伸びる溝で、北北東端は調査区内で収束し、南南西端は調査区外へ伸びている。途中途切れた箇所が認められるが、同じ延長上にあり、埋土等の特徴が一致することから、同一の溝として報告する。ＳＢ15－Ｐ３及び畠９の鋤溝と切り合い関係にあり、これらの遺構に切られている。

形状・規模　途切れた箇所を含めた検出長は29.00ｍである。横断面は皿形をなし、検出面における幅は27cm～1.18ｍである。最深部における検出面からの深さは、７cmである。底部の標高は、北北東端が9.91ｍ、南南西端が9.95ｍとほぼ一定している。

埋没状況　黒褐色砂混じりシルト～暗灰色シルト質細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の甕の体部片が出土している。小片のため図化はできなかった。

時　　期　第５章第２節における検討結果から判断して、奈良時代中期（Ｉ－１期）と考えられる。

ＳＤ27

検出状況　調査区中央部東側で検出した（第103図）。ＳＤ26の東側、ＳＤ28の北東側に位置する。また、ＳＢ15の南梁行と平面的に重複する。ほぼ南北方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは1.18ｍである。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は35cm～40cmである。最深部における検出面からの深さは、11cmである。底部の標高は、北端が9.95ｍ、南端が9.91ｍとほぼ一定している。

埋没状況　暗黄褐色細砂混じり暗灰色シルト質極細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器の小片、須恵器の杯Ｂ蓋が出土している。土師器の器種の特定は困難である。いずれも、小片のため図化はできなかった。

時　　期　出土土器から判断して、奈良時代と考えられるが、小期の特定は困難である。

ＳＤ28

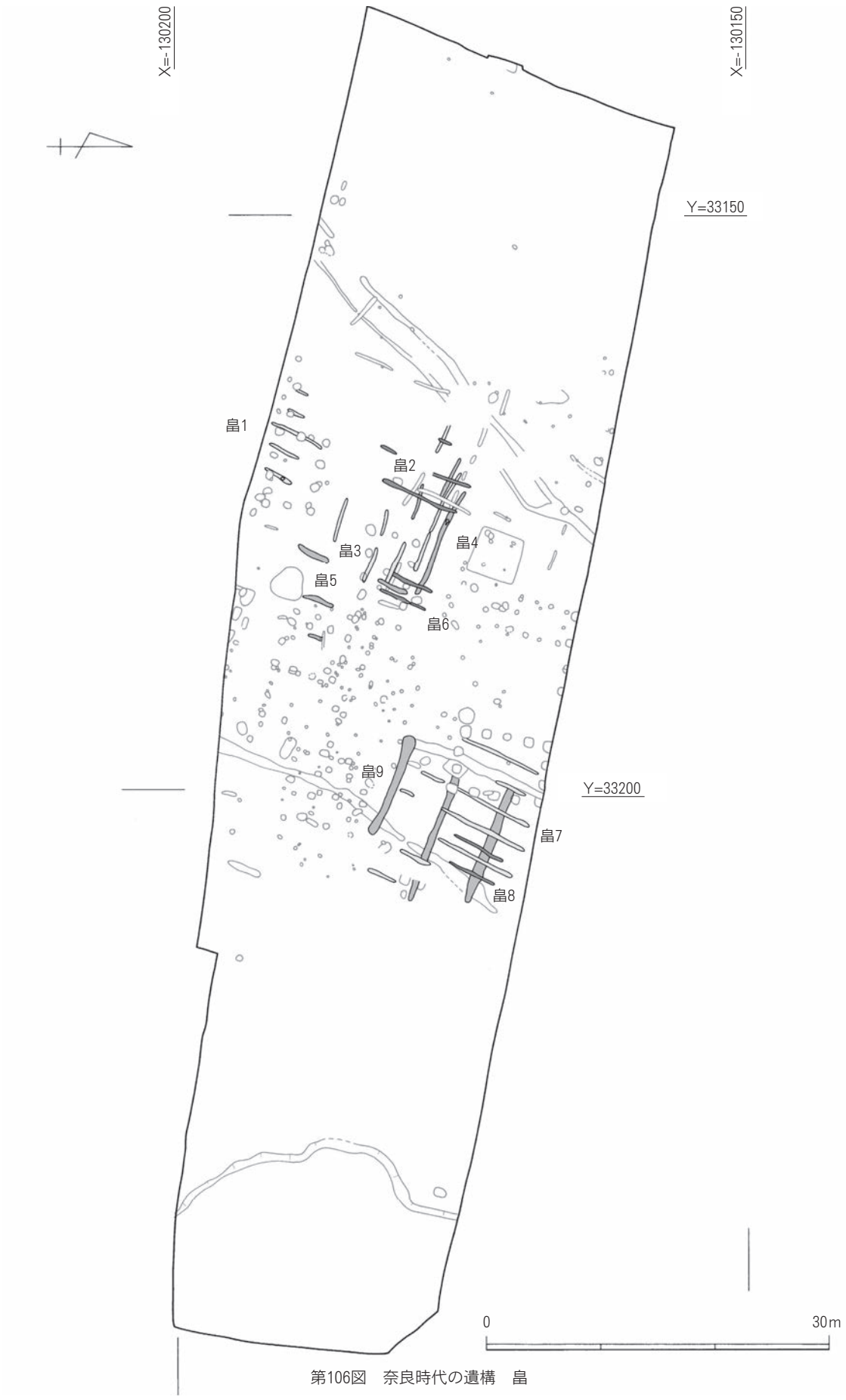
検出状況　調査区中央部南東側で検出した(第103図)。ＳＢ14・ＳＤ27の南東側に位置する。ほぼ南北方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した長さは3.02ｍである。横断面は逆台形をなし、検出面における幅は44cm～65cmである。最深部における検出面からの深さは、11cmである。底部の標高は、9.83ｍとほぼ一定している。

埋没状況　暗黄褐色シルト混じり暗灰色シルト質極細砂１層からなる。その層相から判断して、人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物　土師器のカマドの一部が出土している。小片のため図化はできなかった。

時　　期　出土土器から判断して、奈良時代と考えられるが、小期の特定は困難である。



第106図　奈良時代の遺構　畠

（８）畠

９区画（畠１～畠９）検出している（第106図）。なお、以下報告にあたって、溝の番号を図面上で左側から溝１・溝２のように呼称していく。

畠１

検出状況　調査区中央部南西側で検出した（第106図）。畠２～４・畠６の南側、ＳＢ02の北側に位置する。また、ＳＢ03と平面的にほぼ重複し、一部がＳＢ03の柱穴に切られている。溝３と比較して、他の溝の検出長が短いことから、多くの削平を受けているものと考えられる。

規　模　５条の溝からなる（第107図）。いずれの溝とも、その両端は調査区内で収束している。

畝　幅　検出面における肩部を基準とした畝幅は、溝１－溝２が1.63m、溝２－溝３が7.00m、溝３－溝４が1.58m、溝４－溝５が1.83mである。

畔　溝　各溝の横断面は浅いＵ字形もしくは皿形をなし、検出面における幅は、18cm～35cmを測る。最深部における検出面からの深さは６cm～14cmである。溝の長さは、溝３が最長で、4.95mを測る。他の溝の規模は、溝１が1.00m、溝２が1.60m、溝４が2.92m、溝５が2.82mである。溝３の全長と溝１－溝５間を基準とした、当畠の面積は34.60㎡（４畝）である。また、各溝底部の標高はほぼ一定している。

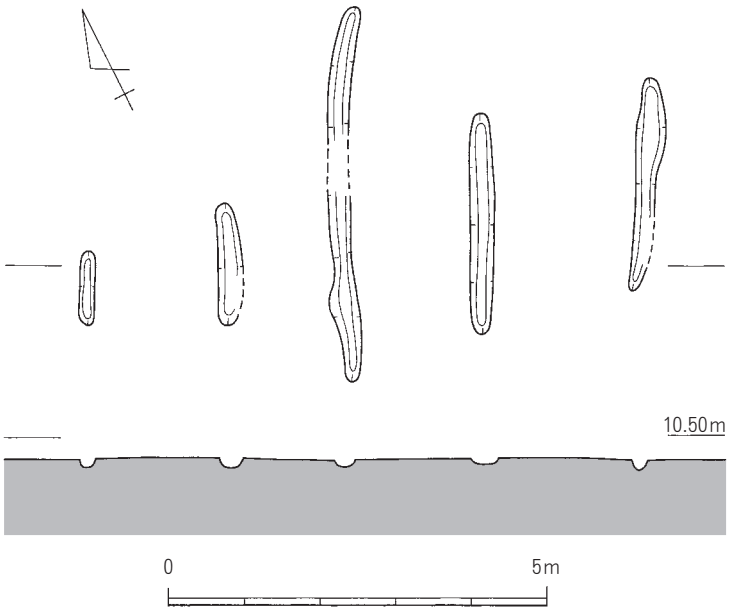
出土遺物　土師器・須恵器・製塩土器が出土している。いずれも、小片のため図化はできなかった。

土師器　杯の口縁部片、甕の口縁部片・体部片が出土している。杯の口縁部外端面には沈線が認められる。甕の外面には煤の付着が認められる。

須恵器　壺の一部が出土している。

製塩土器　焼塩壺の一部が出土している。

時　期　第５章第２節における検討結果から判断して、奈良時代中期（Ⅰ－１期）と考えられる。



第107図　畠１

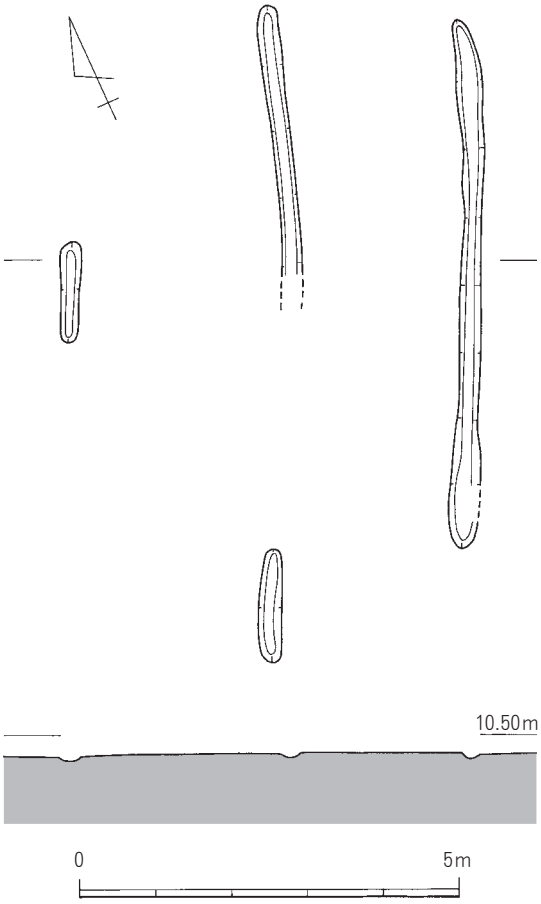
畠２

検出状況　調査区中央部西側で検出した（第106図）。ＳＢ03の北側、ＳＢ04の西側に位置する。畠３・畠４と平面的に重複し、畠２の溝が畠３・畠４の溝を切っている。

規　　模　３条の溝からなる（第108図）。溝１と他の溝とは、その規模に極端な差が認められるが、これらの溝はほぼ等間隔になることから、同じ畠をなす溝と判断したものである。

畝　　幅　検出面における肩部を基準とした畝幅は、溝１－溝２が2.65m、溝２－溝３が2.10mである。

畔　　溝　各溝の横断面は浅い皿形をなし、検出面における幅は25cm～30cmを測る。最深部における検出面からの深さは３cm～７cmである。溝の長さは、溝１が1.30m、溝３が6.98mである。また、溝２については、途中後世の撹乱を受け途切れているが、この間を含めた距離は8.65mである。溝２の全長と溝１－溝３間を基準とした、当畠の面積は43.25㎡（２畝）である。また、各溝底部の標高はほぼ一定している。



第108図　畠２

出土遺物　土師器・須恵器・製塩土器が出土している。いずれも小片のため図化はできなかった。

土師器は、杯の口縁部片、甕の体部片が出土している。杯の口縁部内面には沈線が認められる。甕は、長胴タイプの一部と考えられ、外面には煤の付着が認められる。

この他、須恵器は杯Ｂ蓋の天井部片が、製塩土器は焼塩壺の小片が出土している。

時　　期　第５章第２節における検討結果から判断して、奈良時代後期（Ⅱ－４期）と考えられる。

畠３

検出状況　調査区中央部西側で検出した（第106図）。ＳＨ05の南側、ＳＢ03の北側、ＳＢ04の西側に位置する。畠２・畠４・畠６と平面的に重複し、畠２の溝に切られ、畠６の溝を切っている。また、一部、畠５の溝に切られている。

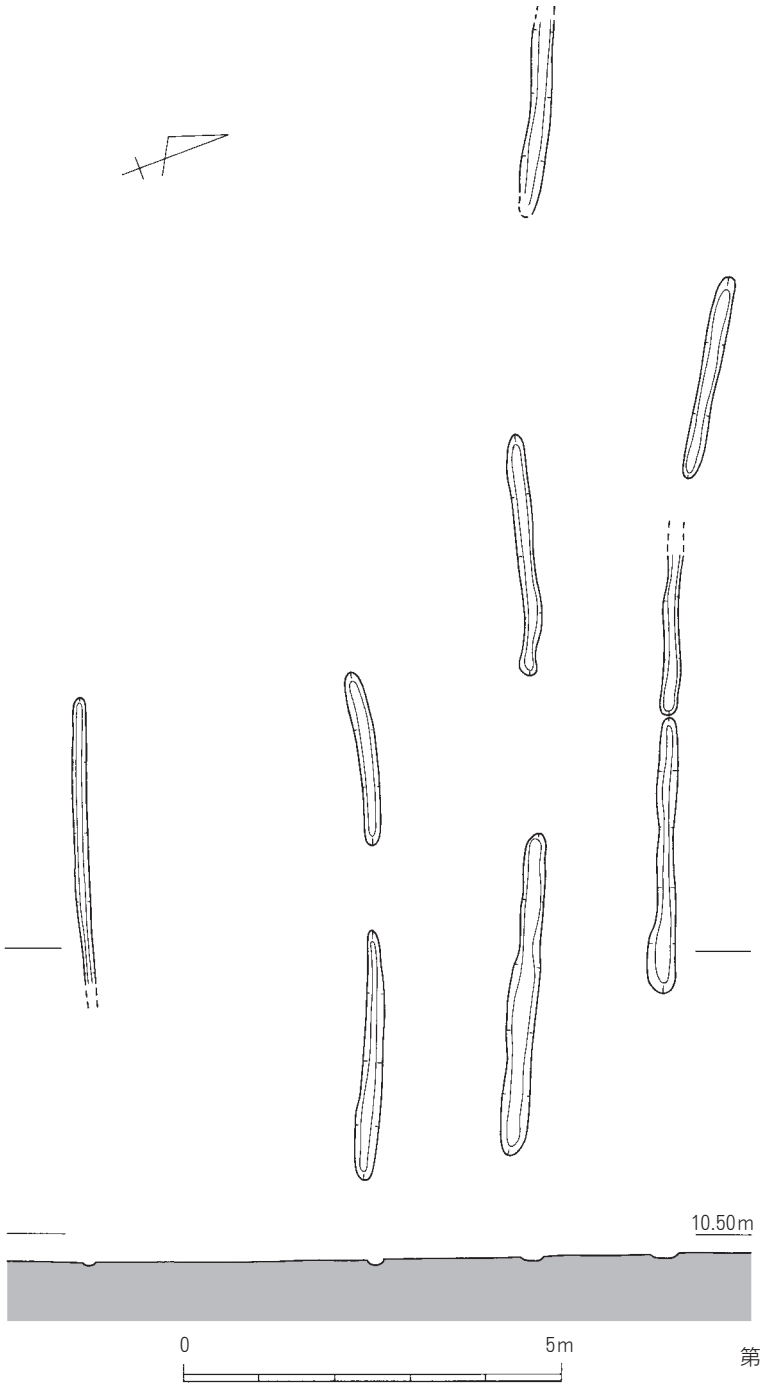
規　　模　４条の溝からなる（第109図）。溝１と溝２との間が他の溝相互の間隔と明らかに異なる。しかし、溝１－溝２間の間隔が、他の溝相互の間隔の約２倍である。また、溝１と他の溝がほぼ同規模で、埋土も同じである。そこで、当初は溝１と溝２の間にもう１条溝があったものと判断し、これらを１区画の畠としたものである。

畝　　幅　検出面における肩を基準とした畝幅は、溝１－溝２が3.10m、溝２－溝３が1.60m、溝３－溝４が1.45mである。

犂　　溝　各溝の横断面は浅い皿形をなし、検出面における幅は18cm～38cmを測る。最深部における検出面からの深さは５cm～７cmである。途切れた箇所を含めた溝の長さは、溝１が3.80m、溝３が15.00m残存し、溝２が6.72m、溝４が9.70mである。溝３の全長と溝１－溝４間を基準とした、当畠の面積は112.50㎡（４畝）である。また、各溝底部の標高はほぼ一定している。

出土遺物　土師器と須恵器が出土している。土師器は、甕の体部片とカマドの小片が出土している。甕は、丸胴タイプと長胴タイプの一部が認められ、後者の外面には煤の付着が認められる。須恵器は、杯の口縁部片と壺の体部片が出土している。

時　　期　第５章第２節における検討結果から判断して、奈良時代後期（Ⅱ－１期）と考えられる。



第109図　畠３

畠４

検出状況　調査区中央部西側で検出した（第106図）。ＳＨ05の南側、ＳＢ03の北側、ＳＢ04の西側に位置する。畠２・畠３・畠６と平面的に重複し、畠２と畠６の溝に切られている。また、畠３とは切り合い関係は認められず、調査では両者の前後関係を明らかにすることはできなかった。

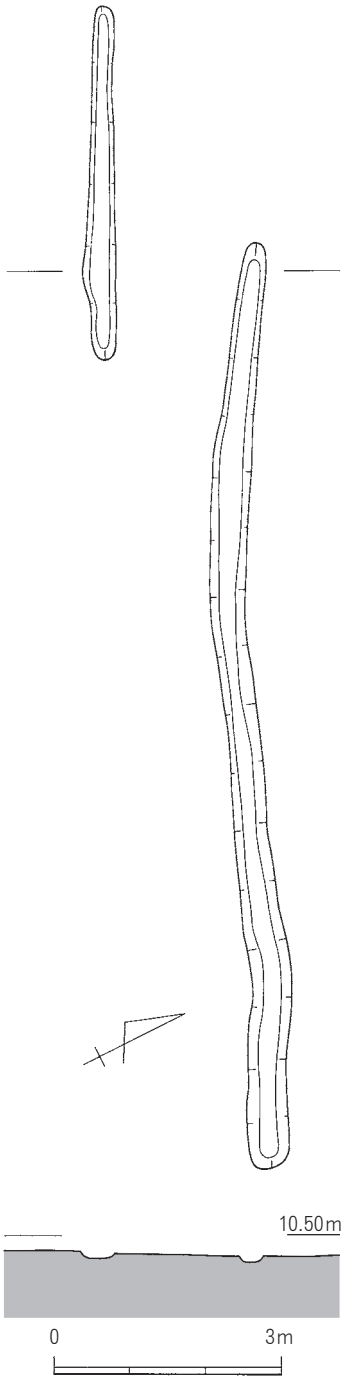
規模　２条の溝からなる（第110図）。

畝幅　検出面における肩部を基準とした畝幅は、1.00～1.50ｍである。

畔溝　溝１・溝２とも横断面は浅い皿形をなし、検出面における幅は30cm～50cmを測る。最深部における検出面からの深さは７cmである。溝の長さは、溝１が4.80ｍ、溝２が12.30ｍである。各溝底部の標高はほぼ一定している。

出土遺物　土師器・須恵器・製塩土器が出土している。いずれも小片のため図化はできなかった。土師器は甕の体部片・カマドの体部片が、須恵器は杯Ａの底部片が、製塩土器は焼塩壺の一部が、それぞれ出土している。

時期　第５章第２節における検討結果から判断して、奈良時代中期（Ⅰ－１期）と考えられる。



第110図　畠４

畠５

検出状況　調査区中央部南側で検出した（第106図）。ＳＢ03の東側、ＳＢ04の南側に位置する。畠３・畠６と平面的に重複し、畠３の溝を切っている。畠６とは切り合い関係は認められず、調査では両者の前後関係を明らかにすることはできなかった。また、ＳＢ09とは平面的に一部重複するが、調査では両者の前後関係は明確にできなかった。

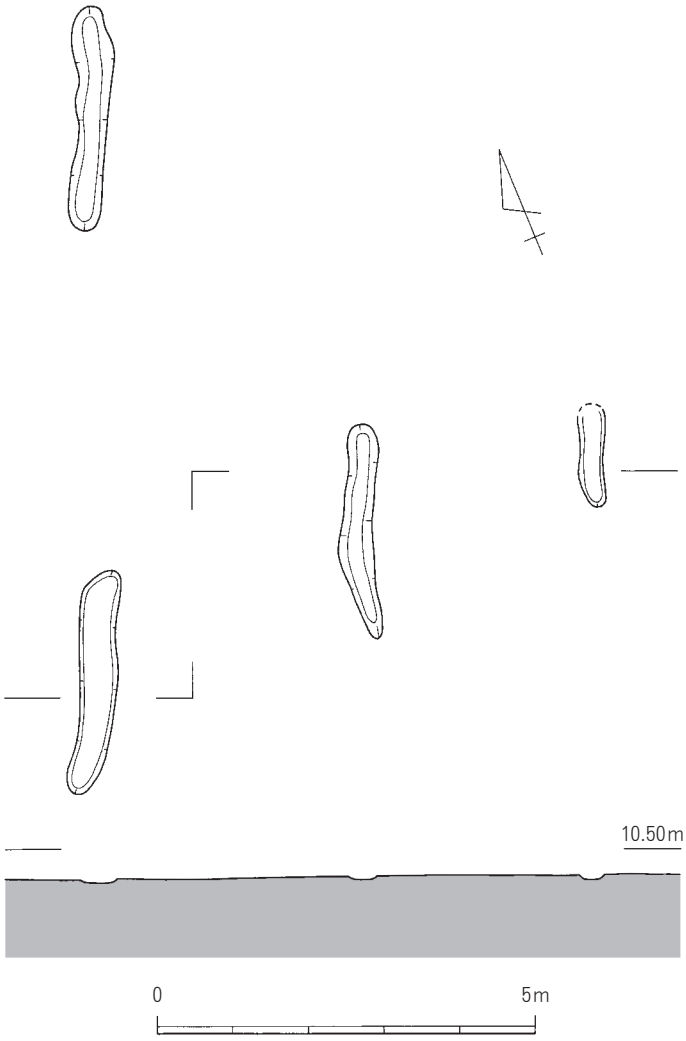
規模　３条の溝からなる（第111図）。溝１については、一部途切れているが、両溝の規模がほぼ同じで、直線上に位置することから、もとは同一の溝と判断したものである。

畝幅　検出面における肩部を基準とした畝幅は、溝１－溝２が2.85ｍ、溝２－溝３が2.70ｍである。

畔溝　いずれの溝とも、その横断面は浅い皿形をなし、検出面における幅は40cm～50cmを測る。最深部における検出面からの深さは４cmである。溝の長さは、溝１が10.43ｍ、溝２が2.84ｍを測り、溝３が1.26ｍ残存する。溝１の全長と溝１－溝３間を基準とした当畠の面積は、63.6㎡（２畝）である。また、各溝底部の標高はほぼ一定している。

出土遺物　土師器の甕の体部片が出土している。外面には煤の付着が認められる。

時期　第５章第２節における検討結果から判断して、奈良時代後期（Ⅱ－４期）と考えられる。



第111図　畠５

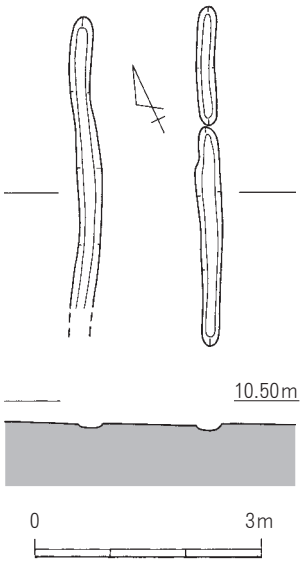
畠６（写真図版56）

検出状況　調査区中央部で検出した（第106図）。ＳＢ05の南側に位置する。畠３・畠４・畠５と平面的に重複し、畠４の溝を切り、畠３の溝に切られている。畠５とは、切り合い関係は認められず、調査では両者の前後関係を明らかにすることはできなかった。また、ＳＢ04とは平面的に重複するが、畠６の溝がＳＢ04の柱穴を切っている。

規　模　２条の溝からなる（第112図）。

畝　幅　検出面における肩部を基準とした畝幅は、1.20m～1.40mである。

畔　溝　溝１・溝２とも、その横断面は浅い皿形をなし、検出面における幅は27cm～35cmを測る。最深部における検出面からの深さは７cmである。溝の長さは、溝１が3.90m残存し、溝２は4.50mである。また、各溝底部の標高はほぼ一定して



第112図　畠６

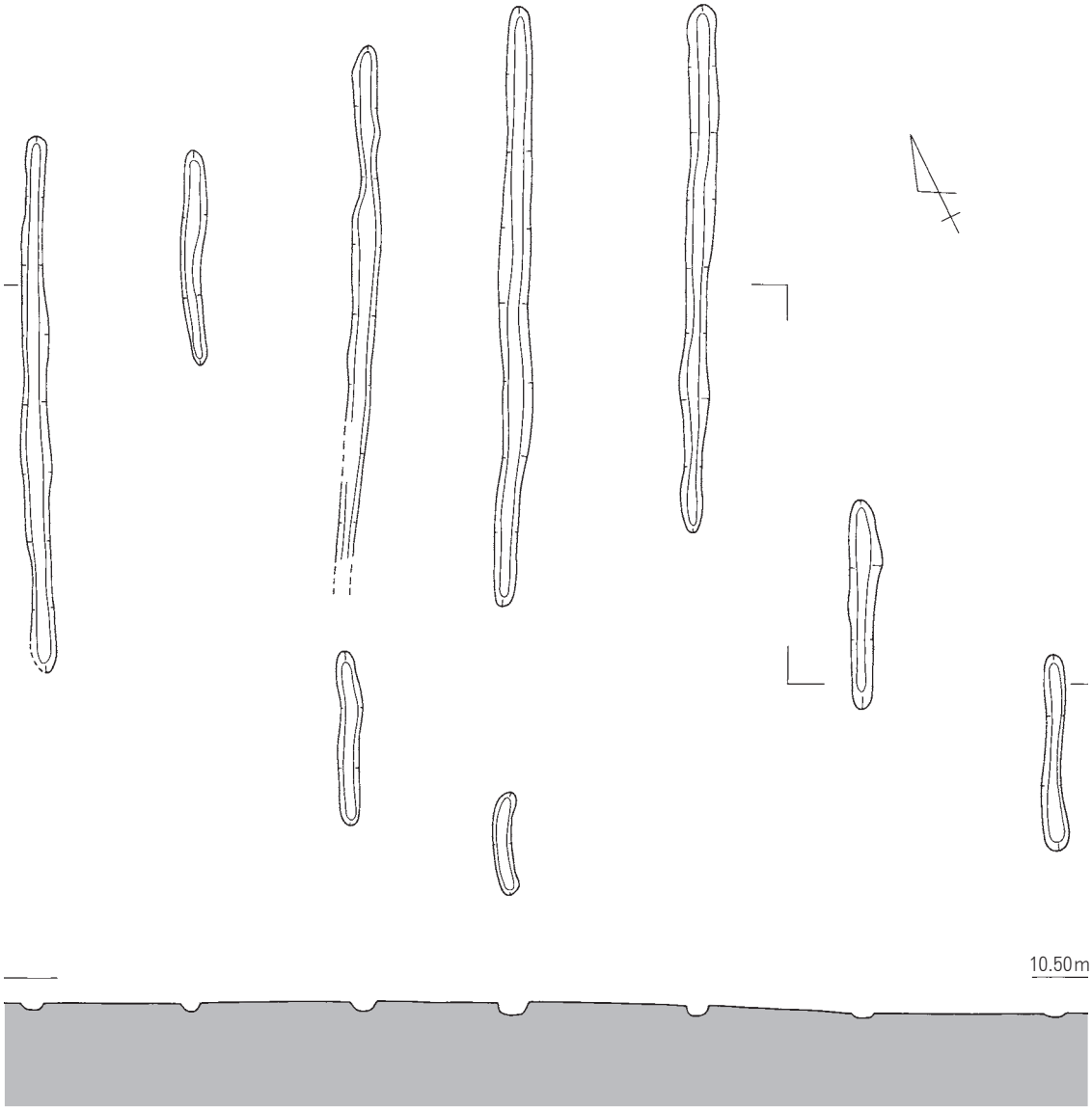
いる。

出土遺物　　土師器と須恵器が出土している（第124図）。

土師器　杯Ａと甕の体部片・口縁部片が出土している。甕については小片のため図化できなかった。杯Ａ（345）は、底部外面が一定方向のヘラ削りにより仕上げられ、口縁部への変換部のヘラ削りとは異なる。また、口縁端部外面は、このナデにより、わずかに沈線状をなす。溝１から出土している。

須恵器　杯の口縁部片と体部片が出土している。杯の体部片については、底部との変換部にヘラ削り痕が認められ、杯Ｇの一部の可能性も考えられる。

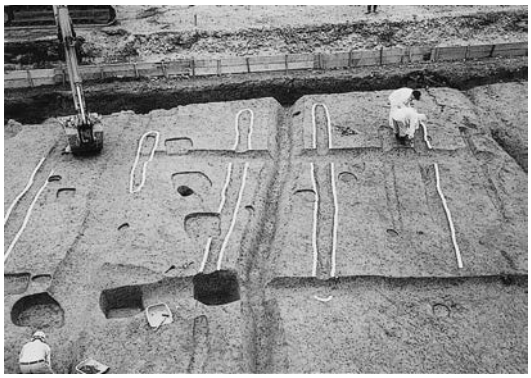
時　　期　　第５章第２節における検討結果から判断して、奈良時代中期（Ｉ－３期）と考えられる。



第113図　畠７

畠７（写真図版27）

検出状況　調査区中央部北東側で検出した（第106図）。ＳＢ15の北側に位置する。ＳＢ13・畠８・畠９とは平面的に重複し、畠９を切り、ＳＢ13の柱穴に切られている。畠８とは、切り合い関係は認められず、両者の前後関係は明らかにできない。



第114図　畠７の調査

規　　模　７条の溝からなる（第113図）。溝６と溝７については、調査時にはこの畠の一部とは認識していなかったが、他の溝相互の間隔とほぼ同じであり、溝の規模が同じであることから、この畠を構成する溝と判断したものである。

畝　　幅　検出面における肩を基準とした畝幅は、溝１－溝２が1.85m、溝２－溝３が1.95m、溝３－溝４が1.70m、溝４－溝５が2.10m、溝５－溝６が1.95m、溝６－溝７が2.30mである。

畔　　溝　各溝の横断面は浅いＵ字形もしくは皿形をなし、検出面における幅は25cm～45cmを測る。最深部における検出面からの深さは13cmである。溝の長さは、溝４が最長で、8.30mを測る。また、途切れる部分を含めた溝３の長さは、9.50mである。溝３の全長と溝１－溝７間を基準とした、当畠の面積は133㎡（６畝）である。また、各溝底部の標高はほぼ一定している。

出土遺物　土師器・須恵器・製塩土器が出土している（第125図）。

土師器　甕・カマド・椀・杯Ａが出土している。いずれも小片のため図化できなかった。甕は、口縁部片と長胴タイプの体部片が出土している。外面には煤の付着が認められる。

椀は、高台付椀の高台を中心とした小片が出土している。カマドは、体部の一部が出土している。杯Ａは、口縁部を中心に残存するが、内端部に沈線は認められない。

須恵器　杯Ｂ・杯Ｂ蓋・鉢・甕が出土している。

杯Ｂは347の１個体である。高台が小型で、内側に折り曲げられている。鉢は346の１個体である。口縁端部が玉縁状に肥厚している。この他、図化できなかったが、甕は体部の小片が出土している。346と347は、いずれも溝４から出土している。

製塩土器　焼塩壺が出土している。

時　　期　第５章第２節における検討結果から判断して、奈良時代後期（Ⅱ－２期）と考えられる。

畠８

検出状況　調査区中央部北東側で検出した（第106図）。ＳＢ15の北側に位置する。畠７・畠９とは平面的に重複し、畠９を切っている。畠７との前後関係は、調査では明確にできなかった。

規　　模　２条の溝からなる（第115図）。溝１・溝２とも、全体を検出することができた。

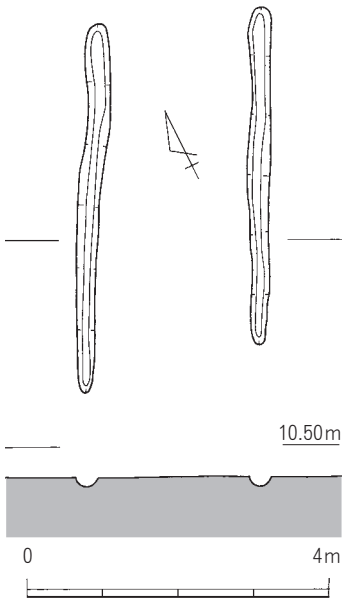
畝　　幅　検出面における肩部を基準とした畝幅は、2.00mである。

畔　　溝　各溝の横断面はＵ字形をなし、検出面における幅は、溝１が29cm、溝２が27cmである。

また、最深部における検出面からの深さは、溝１・溝２ともに12cmである。溝の長さは、溝１が4.90ｍ、溝２が4.45ｍである。溝１と畝幅を基準とした、当畠の面積は9.80㎡（１畝）である。また、各溝底部の標高はほぼ一定している。

出土遺物　土師器の甕の体部片と須恵器の杯の口縁部片が出土している。いずれも、小片のため図化はできなかった。

時　　期　第５章第２節における検討結果から判断して、奈良時代後期（Ⅱ－１期）と考えられる。



第115図　畠８

畠９（写真図版55・56）

検出状況　調査区中央北東側で検出した（第106図）。ＳＢ15の北側に位置する。ＳＢ13・畠７・畠８とは平面的に重複し、畠７・畠８に切られ、ＳＢ13の柱穴にも切られている。この他、ＳＫ32にも切られている。

規　　模　３条の溝からなる（第116図）。溝３以外は、西端部を他の遺構に切られ、全体の規模は不明である。３条の溝とも、他の畠の溝と比べて明らかに規模が大きいが、等間隔に平行することから、畠と判断したものである。

畝　　幅　検出面における肩部を基準とした畝幅は、溝１－溝２が4.20ｍ、溝２－溝３が4.30ｍである。

畝　　溝　各溝の横断面は浅いＵ字形もしくは逆台形をなし、検出面における幅は、溝１が73cm、溝２が60cm、溝３が70cmである。また、最深部における検出面からの深さは、溝１が20cm、溝２が25cm、溝３が７cmである。溝の長さは、溝３が9.30ｍを測り、溝１と溝２は、それぞれ10.55ｍ・11.50ｍ残存する。溝２の残存長と溝１－溝３間を基準とした、当畠の面積は120.70㎡（２畝）である。また、各溝底部の標高はほぼ一定している。

出土遺物　土師器・須恵器・製塩土器が出土している（第125図）。

土師器　Ⅲ Ａ（349・350）・甕・カマド・高杯が出土している。

Ⅲの349と350はほぼ同様の調整で仕上げられている。杯Ａの351は、法量から判断して、杯Ａに分類したものである（第５章第１節）。調整は、前２者と同じである。

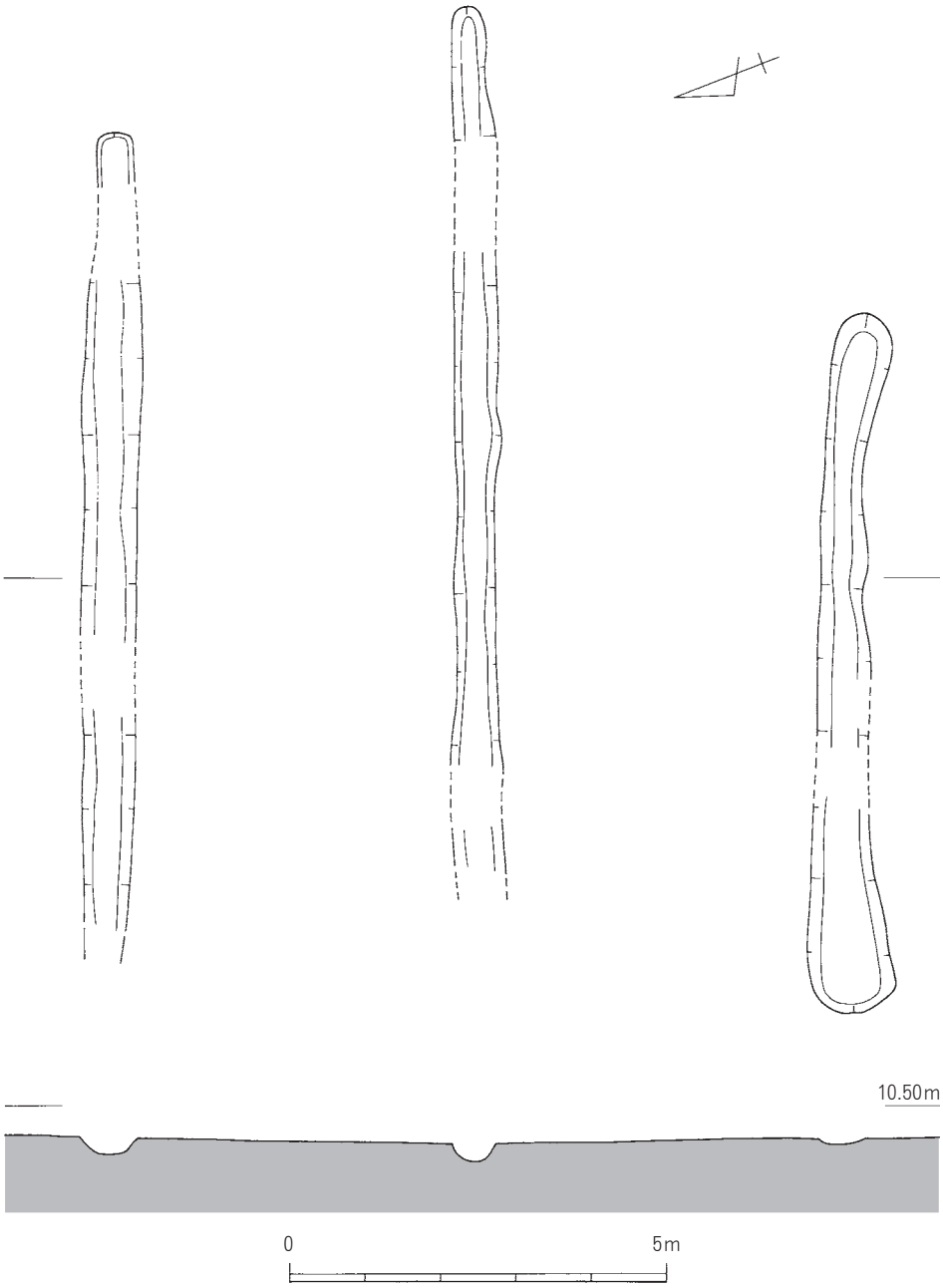
甕は、図化できたのは352の１個体である。丸胴タイプに分類されるものである。高坏は、脚柱部が出土している。

カマド（353）は、焚口部を中心に残存する。庇端部は、体部下端で内側に折り返されており、折り返し部分は球状をなしている。また、庇の折り返しにおいては、指オサエにより仕上げられている。さらに、口縁端部はヘラナデ調整により仕上げられ、端面を有する。

須恵器　杯Ｂ蓋（348）・Ⅲ・杯・杯Ｂ・長頸壺が出土している。杯は口縁部片が、杯Ｂは底部片が出土している。

製塩土器　焼塩壺の一部が出土している。

時　　期　第５章第２節における検討結果から判断して、奈良時代中期（Ⅰ－２期）と考えられる。



第116図　畠９

（９）その他（写真図版56～59）

遺構に伴う遺物以外に、当遺跡を検討するうえで良好な資料が包含層から出土している。そこで、以下、当該期の包含層から出土した土器について報告する。

包含層出土土器　土師器・須恵器・瓦が出土している（第125図～第127図）。

土　師　器　杯Ａ・皿Ａ・皿Ｂ・高杯が出土している。

杯Ａは356の１個体である。底部から口縁部にかけての変換部が緩やかで、口縁端部は強い横ナデ調整により、わずかに肥厚気味である。

皿Ａは355の１個体である。調整にあたって、ヘラ削りは施されていない。

皿Ｂは354の１個体である。大型の皿で、底部から体部への変換部に、断面蒲鉾形の高台が貼り付けられている。口縁端部は横ナデ調整により、わずかに肥厚傾向にある。また、

内面には１段の放射状暗文が施されている。

高杯は、357と358の２個体を図化した。いずれも脚柱部のみであるが、タイプを異にする。357は、脚柱高が低く、ヘラ削りにより10面体に仕上げられている。一方358は、脚柱部が長く、同じくヘラ削りにより10面体に仕上げられている。また、357に比べて、器壁が厚く仕上げられている。

須恵器　杯Ａ・杯Ｂ蓋・蓋・杯Ｂ・皿Ｂ・皿Ａ・台付皿・椀・壺・高杯・甕が出土している。

杯Ａは、359と360の２個体を図化した。法量を異にするとともに、359の底部はヘラ切り後回転ヘラ削りが施されているのに対し、360の底部にはヘラ削りは施されていない。

杯Ｂ蓋は、361～364の４個体を図化した。362の天井部内面がナデ調整により仕上げられている以外は、基本的に同じ調整法により仕上げられている。ただし、364が法量的に小型であり、つまみの形態も異なる。また、361は大型で、天井部の形態も異なる。

この他、372は、稜椀の蓋と考えられる。台付皿は、365の１個体である。

杯Ｂは、366と367の２個体を図化した。法量的に異なり、366は椀に近い形態である。また、367のほうが新しい傾向にある。

この他、小片のため器種の特定も困難であるが、杯類の一部に墨書が認められた（368・369：写真図版57）。その内容も、部分的で明らかにできない。

皿Ａは、371の１個体で、底部と体部の境は明確な稜をなす。また、底部外面には墨痕らしきものが認められる。皿Ｂは370の１個体を図化した。口縁端部は平坦面を有し、高台は直立する。

椀は373と374の２個体で、いずれも稜椀に分類されるものである。いずれも、体部が回転ヘラ削りにより仕上げられている。ただし、口縁部高に差が認められる。

壺は、375～379の５個体を図化した。全てタイプを異にするもので、375は壺Ｎもしくは Ｌ、376は壺Ｂの底部、377は壺Ｋの底部、378は壺Ｃ、379は壺Ｅの底部と考えられる。これらのなかで、377内面の指ナデは、粗い仕上げである。また、379は時期的に新しく位置付けられるものと考えられる。

この他、高杯（380）は脚部のみの残存である。甕は、381と382の２個体を図化したが、全体的に出土量はわずかである。381は小型の甕で、土師器の甕に近い形態的特徴を有している。382は、口縁部の小片である。外面には、上から、５条・３条・５条の櫛描波状文が施され、その下側は凹線状をなしている。

瓦　平瓦と丸瓦が出土しているが、丸瓦は量的に少なく、図化できるものはなかった。平瓦についても、量的には多くはなく、小片のものが多く出土している。平瓦は、凸面が縄目叩きにより整形されるもの（383～387）と格子叩きによるもの（388～391）とに分類できる。側面もしくは端面は、いずれもヘラ削りにより仕上げられている。また、凹面には全て、布目が認められる。この他、389の凹面には、縦方向の板ナデにより一部布目が消されている。

第29表　奈良時代の土器観察表（１）

No.	種別	器種	遺構名	法量（cm）						残存状況	焼成	色調
				口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
198	土師器	Ⅲ A	ＳＨ05	18.05			14.50	2.60		口縁部3/4・底部完存		橙
199	土師器	Ⅲ A	ＳＨ05	17.30			14.00	3.00		口縁部5/6・底部完存		灰白～浅黄橙
200	土師器	Ⅲ C	ＳＨ05	14.30			12.50	2.45		1/3		橙
201	土師器	Ⅲ C	ＳＨ05	13.35			8.90	2.10		口縁部1/8		橙
202	土師器	杯	ＳＨ05					2.40		口縁部わずか		橙～浅黄橙
203	土師器	甕	ＳＨ05	34.30	30.00			7.50		口縁部1/4		にぶい橙～褐灰
204	土師器	甕	ＳＨ05	28.20	23.60	26.60		21.30		口縁部1/2・体部2/3		浅黄橙～にぶい黄橙
205	瓦	平瓦	ＳＨ05							1/2	不良	淡黄～灰白
206	瓦	平瓦	ＳＨ05							1/4	不良	橙～褐灰
208	瓦	丸瓦	ＳＨ05							1/2	不良	浅黄橙
209	土師器	杯	ＳＢ03－Ｐ６	17.40				2.85		口縁部1/8		橙
210	土師器	杯	ＳＢ03－Ｐ４					2.90		口縁部わずか		浅黄橙～橙
211	土師器	Ⅲ A	ＳＢ03－Ｐ４	17.80			11.00	2.60		口縁部1/10・底部1/6		橙
212	土師器	杯A	ＳＢ03－Ｐ４	16.10			10.80	3.50		口縁部1/12・底部1/4		浅黄橙～橙
213	須恵器	杯A	ＳＢ03－Ｐ４	15.00			11.60	3.70		2/5	不良	灰白
214	土師器	甕	ＳＢ04－Ｐ７	14.00	11.80	13.00		10.50		口縁部1/5・体部以下完存		橙～にぶい橙
215	須恵器	杯B	ＳＢ05－Ｐ４				10.30	1.80	0.40	底部1/3	不良	灰白
216	須恵器	Ⅲ A	ＳＢ08－Ｐ１	24.70			20.30	2.00		口縁部1／9	良好	灰～灰白

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
0.5〜1.5㎜大の石英・長石・クサリ礫・雲母含む	外面：底部ナデ調整。体部回転ヘラナデ調整。口縁部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。	暗文観察不可。	117	45
0.5〜２㎜大の長石・クサリ礫・チャート・雲母含む	外面：底部ヘラナデ→体部回転ヘラナデ・口縁部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。	暗文観察不可。	117	45
0.5㎜以下のクサリ礫・雲母・長石含む	外面：口縁部回転ナデ調整。 内面：口縁部回転ナデ調整。	口縁部以外調整観察不可。	117	45
0.5㎜以下の長石・石英・雲母若干含む	外面：体部ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。 内面：体部ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。	暗文観察不可。	117	－
0.5㎜以下のクサリ礫・雲母・長石含む	外面：口縁部回転ナデ調整。 内面：口縁部回転ナデ調整。	暗文観察不可。	117	－
１〜２㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		117	45
１〜２㎜大の石英・チャート・クサリ礫多く含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部指オサエ・ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	体部下半煤付着。	117	45
	凹面：糸切り・布目→ナデ調整。 凸面：叩き。	2160ｇ	117	46
	凹面：布目。 凸面：叩き。	685ｇ	117	46
	凹面：布目。 凸面：玉縁部横ナデ・筒部ヘラデ。	655ｇ	118	47
0.5㎜以下の石英・クサリ礫・雲母わずかに含む	外面：横ナデ調整。 内面：横ナデ調整。	全体的に磨滅顕著。	118	－
0.5㎜以下の長石・雲母・クサリ礫含む	外面：口縁部横ナデ調整。 内面：口縁部横ナデ調整。	暗文観察不可。	118	－
0.5〜１㎜大の長石・石英・クサリ礫・雲母含む	外面：底部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	暗文観察不可。 化粧土有。	118	－
0.5〜１㎜大の長石・チャート・雲母・クサリ礫含む	外面：底部〜体部ヘラ削り→口縁部横ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	暗文なし。 内外面磨滅傾向。 化粧土有。	118	－
	外面：底部回転ヘラ削り→ナデ・口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		118	47
１〜２㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：体部〜口縁部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		118	47
	外面：底部回転ヘラ削り→ナデ・口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		118	－
	外面：底部回転ヘラ削り→弱いナデ→口縁部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整。→口縁部回転ナデ調整。		118	－

第30表　奈良時代の土器観察表（２）

No.	種別	器種	遺構名	法量（cm）						残存状況	焼成	色調
				口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
217	土師器	堝	ＳＢ06－Ｐ６	38.30	33.60			8.10		口縁部1/9		灰黄褐～浅黄橙
218	土師器	甕	ＳＢ06－Ｐ10	22.20	19.20			9.40		口縁部1/3		にぶい黄橙～にぶい橙
219	土師器	カマド	ＳＢ06－Ｐ６					14.40		小片		橙～にぶい褐
220	土師器	皿	ＳＢ09－Ｐ５	14.80			10.70	1.95		口縁部1/4・底部2/5		にぶい橙～橙
221	土師器	カマド	ＳＢ09－Ｐ１					9.75		一部		灰黄褐～にぶい橙
222	須恵器	杯Ｂ蓋	ＳＢ09－Ｐ５					1.45		口縁部～天井部1/12以下	良好	灰
223	須恵器	壺Ｌ	ＳＢ09－Ｐ10		4.20	15.20	8.80	13.30	1.00	体部～底部完存	良好	灰
224	土師器	カマド	ＳＢ09－Ｐ９							庇一部		浅黄橙～橙
225	土師器	杯Ａ	ＳＢ10－Ｐ２	15.00				2.60		口縁部1/8		橙
226	土師器	甑	ＳＢ10－Ｐ２					4.50		口縁部わずか		にぶい黄橙～灰黄褐
227	土師器	杯Ｂ蓋	ＳＢ11－Ｐ９	19.60				1.40		口縁部1/8		橙～灰白
228	土師器	杯Ａ	ＳＢ11－Ｐ９	14.40				2.55		口縁部1/8		にぶい橙～浅黄橙
229	土師器	杯Ａ	ＳＢ11－Ｐ８	12.40				3.10		口縁部1/8		橙
230	土師器	杯	ＳＢ11－Ｐ１					2.80		口縁部わずか		灰黄褐～にぶい橙
231	土師器	椀	ＳＢ11－Ｐ１	15.60			7.60	5.15	0.65	口縁部1/3・底部完存		にぶい橙～橙
232	土師器	椀	ＳＢ11－Ｐ８				7.60	3.30	0.80	底部1/6		灰白
233	土師器	皿	ＳＢ11－Ｐ８	13.40			10.90	1.25		1/4		浅黄橙
234	土師器	椀	ＳＢ12－Ｐ11	15.50			8.80	5.70		口縁部1/7		にぶい橙～にぶい黄橙

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
0.5～２㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部～口縁部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ナデ調整・口縁部横ナデ調整。		118	－
１～２㎜大の長石・チャート・石英多く含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ。	内面磨滅顕著。	118	47
１～２㎜大の石英・チャート・長石・クサリ礫含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ。 内面：指オサエ・ナデ調整。		118	47
0.5～1.5㎜大のチャート・長石・石英・雲母含む	外面：底部未調整。口縁部横ナデ調整。 内面：底部指オサエ・ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		118	48
0.5～1.5㎜大の長石・石英・チャート・クサリ礫含む	外面：ハケ調整。 内面：ハケ調整→ナデ調整。		118	－
	外面：天井部ヘラ削り→ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		118	－
	外面：体部回転ヘラ削り→上半回転ナデ調整。 底部回転ナデ→高台回転ナデ。	内面観察不可。	118	48
１～4.5㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：指オサエ・ナデ調整。 内面：指オサエ・ナデ調整。		－	48
0.5～１㎜大の長石・チャート・クサリ礫含む	外面：底部～体部ナデ→口縁部横ナデ調整。 内面：底部～体部ナデ→口縁部横ナデ調整。	暗文観察不可。	119	－
0.5～２㎜大のチャート・長石・石英多く含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		119	－
0.5～1.5㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：天井部ヘラ削り→口縁部横ナデ調整。 内面：天井部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	暗文観察不可。	119	－
0.5～１㎜大の長石・チャート・石英・クサリ礫含む	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		119	－
0.5～２㎜大の長石・石英・クサリ礫やや多く含む	外面：口縁部横ナデ調整。 内面：口縁部横ナデ調整。		119	－
0.5～１㎜大の長石・チャート含む	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		119	－
0.5～１㎜大の長石・石英・クサリ礫含む	外面：底部ナデ調整→体部～口縁部ナデ調整→ヘラミガキ→口縁部回転ナデ。 内面：底部ナデ・指オサエ→体部～口縁部回転ナデ調整→ヘラミガキ。	化粧土有。	119	48
0.5～１㎜大の長石・クサリ礫・石英含む	外面：高台ナデ調整・体部横ナデ調整。 内面：体部横ナデ調整。		119	－
0.5～１㎜大の長石・チャート・クサリ礫含む	外面：底部ナデ→口縁部横ナデ調整。 内面：底部ナデ→口縁部横ナデ調整。		119	48
0.5～１㎜大の石英・長石・チャート・クサリ礫含む	外面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	底部の調整観察不可。	119	－

第31表　奈良時代の土器観察表（３）

No.	種別	器種	遺構名	法量（cm）						残存状況	焼成	色調
				口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
235	土師器	カマド	ＳＢ12－Ｐ11					12.50		一部		にぶい橙～橙
236	瓦	丸瓦	ＳＢ13－Ｐ８							1/4	不良	灰白
237	土師器	杯Ａ	ＳＢ14－Ｐ６	15.50			10.70	3.05		口縁部1/10・底部1/6		橙～にぶい橙
238	土師器	甕	ＳＢ14－Ｐ11	15.60	13.40			5.70		口縁部わずか・頸部1/5		にぶい黄褐～にぶい橙
239	土師器	杯	ＳＢ15－Ｐ７	18.20				3.20		口縁部1/10		にぶい橙～浅黄橙
240	土師器	杯	ＳＢ15－Ｐ３					2.20		口縁部わずか		灰黄
241	須恵器	Ⅲ Ａ	ＳＢ15－Ｐ３					2.00		口縁部1/12以下	良好	灰～灰白
242	須恵器	Ⅲ	ＳＢ15－Ｐ３	28.80				2.60		口縁部1/10	良好	灰～灰白
243	須恵器	杯Ｂ蓋	ＳＢ15－Ｐ３	14.20				2.50		口縁部1/4・天井部1/2•つまみ完存	やや不良	灰白
244	須恵器	杯Ｂ	ＳＢ15－Ｐ３				14.30	2.00	0.70	底部1/8	やや不良	淡黄～黄灰
245	須恵器	杯Ｂ	ＳＢ15－Ｐ９	12.30			9.80	4.60	0.45	口縁部わずか・底部1/4	良好	灰～灰白
246	土師器	杯Ａ	ＳＢ16－Ｐ６	13.80			9.80	3.40		口縁部1/9・底部1/3		橙
247	土師器	杯	Ｐ02	11.30				3.00		口縁部1/4		橙～にぶい橙
248	土師器	杯Ａ	ＳＢ17－Ｐ２	16.30			11.60	3.50		口縁部1/2弱・底部完存		橙
249	土師器	杯Ｂ	ＳＢ17－Ｐ３				15.30	1.65	0.80	底部1/10		橙～浅黄橙
250	土師器	Ⅲ	Ｐ05					2.50		口縁部～底部わずか		橙
251	須恵器	杯Ｂ	Ｐ06				10.50	1.50	0.45	底部1/7	普通～やや不良	灰白
252	土師器	Ⅲ	Ｐ07							口縁部わずか		浅黄橙～橙

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
0.5〜2.5㎜大の長石・チャート・石英やや多く含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ・庇貼付け。 内面：ナデ調整・口縁部横ナデ調整。		119	−
	凹面：布目。 凸面：ナデ。 端面：ヘラ削り。	671ｇ	119	49
0.5〜１㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：底部指オサエ・ナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	暗文観察不可。 化粧土有。	119	−
0.5〜1.5㎜大の長石・石英含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ナデ調整・口縁部ハケ調整→横ナデ調整。	口縁部〜体部外面煤付着。	119	−
0.5〜１㎜大の長石・雲母・クサリ礫含む	外面：口縁部横ナデ調整。 内面：口縁部横ナデ調整。	暗文観察で不可。	119	−
0.5〜３㎜大の長石・石英・雲母・チャート・クサリ礫含む	外面：口縁部横ナデ調整。 内面：口縁部横ナデ調整。		119	−
	外面：底部回転ヘラ削り。口縁部回転ナデ調整。 内面：口縁部回転ナデ調整。		119	−
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		119	−
	外面：口縁部回転ナデ→天井部回転ヘラ削り・つまみ回転ヘラ削り→回転ナデ。 内面：回転ナデ調整。	つまみ径2.3㎝・つまみ高６㎜	119	48
	外面：底部回転ヘラ削り→ナデ・体部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→体部回転ナデ調整。		119	−
	外面：底部回転ヘラ削り→回転ナデ調整・口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		119	−
0.5〜３㎜大の長石・石英・クサリ礫・チャート・雲母含む	外面：底部回転ヘラ削り→ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	暗文観察不可。 化粧土有。	119	−
0.5〜６㎜大の長石・石英・クサリ礫多く含む	外面：横ナデ調整。 内面：横ナデ調整。		119	49
0.5〜１㎜大の長石・雲母含む	外面：底部ナデ調整。口縁部横ナデ調整。 内面：底部ナデ調整。口縁部横ナデ調整。	口縁部内面わずかに沈線。	119	49
0.5〜２㎜大の長石・チャート・雲母・クサリ礫含む	外面：ナデ調整。 内面：ナデ調整。		119	−
0.5〜1.5㎜大の長石・石英・チャート含む	外面：底部ヘラ削り→ナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	暗文観察不可。	119	−
	外面：底部回転ヘラ削り・体部回転ナデ調整。 内面：底部〜体部回転ナデ調整→底部ナデ調整。		119	−
0.5㎜以下の長石・石英・雲母・クサリ礫含む	外面：底部ナデ→口縁部横ナデ調整。 内面：横ナデ調整。	暗文観察不可。	−	49

第32表　奈良時代の土器観察表（４）

No.	種別	器種	遺構名	法量（cm）						残存状況	焼成	色調
				口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
253	土師器	甕	P08	29.00	23.90	26.50		24.50		口縁部1/6・頸部1/2・体部1/4		灰黄褐～浅黄橙
254	須恵器	壺N	P08				11.30	9.90		底部完存	良好	灰
255	須恵器	杯A	P08	12.50			9.90	3.90		口縁部1/2弱・底部3/5	やや不良	灰～淡黄
256	須恵器	杯A	P09	13.85			10.40	3.85		口縁部1/3・底部1/2	やや不良	灰白
257	須恵器	杯A	P13	16.20			11.50	2.85		口縁部わずか・底部1/5	やや不良	灰白～灰黄
258	須恵器	杯B蓋	P14	19.00				1.50		口縁部1/10	良好	灰
259	土師器	甕	P11					9.80		口縁部～体部わずか		にぶい黄橙
260	土師器	杯A	P15	13.10				2.90		口縁部1/5		にぶい橙～灰白
261	土師器	杯A	P15	12.15				3.15		口縁部1/6		浅黄橙～にぶい橙
262	土師器	椀	P15				9.00	2.90	0.95	底部1/6		橙～浅黄橙
263	土師器	杯A	P16	12.90				3.25		口縁部1/10		にぶい橙～にぶい黄橙
264	黒色土器	椀	P16				9.25	1.45	0.40	底部1/6		にぶい機橙
265	土師器	甕	P16	25.50	21.20			6.50		口縁部1/10		にぶい黄橙～にぶい黄褐
266	土師器	甕	P16	25.20	19.40			7.35		口縁部1/10弱		にぶい赤褐～灰褐
267	土師器	皿	P17					1.60		口縁部わずか		浅黄橙
268	須恵器	杯A	P18	14.80			11.30	3.50		口縁部わずか・底部1/3	良好	灰～灰白
269	土師器	杯A	P18	18.50			13.00	3.80		口縁部1/7・底部1/5		にぶい橙～橙
270	土師器	カマド	P18							一部		にぶい黄橙

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
0.5～３㎜大の長石・チャート・クサリ礫含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ。 内面：体部ナデ調整。口縁部横ナデ。	口縁部～体部外面煤付着。	120	50
	外面：底部指オサエ・ナデ調整・体部回転ヘラ削り→ 体部中位回転ナデ。 内面：底部指オサエ・ナデ調整→体部回転ナデ調整。		120	－
	外面：底部回転ヘラ削り→ナデ・口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		120	50
	外面：底部回転ヘラ削り・体部～口縁部回転ヘラ削り→ 口縁部横ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		120	50
	外面：底部回転ヘラ削り→ナデ・口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	内外面火襷痕あり。	120	－
	外面：天井部回転ヘラ削り・ナデ→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		120	－
0.5～２㎜大の長石・チャート・石英やや多く含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ナデ調整・口縁部横ナデ調整。		120	50
0.5～１㎜大の長石・石英・チャート含む	外面：体部～口縁部指オサエ・ナデ調整→ 口縁部横ナデ調整。 内面：横ナデ調整。	化粧土有。	120	50
0.5～1.5㎜大の長石・石英・チャート・クサリ礫含む	外面：体部～口縁部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：横ナデ調整。		120	－
0.5～１㎜大の石英・長石・チャート含む	外面：横ナデ調整。 内面：横ナデ調整。	化粧土有。	120	－
1～２㎜大の長石・石英・チャート・クサリ礫含む	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		120	－
0.5～２㎜大の長石・クサリ礫・チャート含む	外面：底部～体部ナデ調整→高台横ナデ調整。 内面：ナデ調整。	暗文観察不可。	120	－
１～３㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ハケ調整・ナデ調整→口縁部ハケ調整→ 横ナデ調整。	内面煤(？)付着。	120	－
0.5～２㎜大の石英・長石・チャート・クサリ礫多く含む	外面：体部～口縁部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ハケ調整→ナデ調整・口縁部ハケ調整→ヨコナデ調整。		120	50
0.5～１㎜大の長石・チャート・クサリ礫・石英・雲母含む	外面：底部ヘラ削り→ナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		120	－
	外面：底部回転ヘラ削り→ナデ調整・口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		120	－
0.5～1.5㎜大の長石・チャート・石英・クサリ礫含む	外面：底部指オサエ・ナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：口縁部横ナデ調整。	底部内面磨滅。 暗文なし。	120	－
0.5～2.5㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：指オサエ・ナデ調整。 内面：指オサエ・ナデ調整。		－	50

第33表　奈良時代の土器観察表（５）

No.	種別	器種	遺構名	法量（cm）						残存状況	焼成	色調
				口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
271	須恵器	杯Ａ	Ｐ19	11.90			9.70	4.10		口縁部1/6・底部1/9	良好	灰
272	須恵器	Ⅲ Ａ	Ｐ20	24.50				1.80		口縁部1/12	良好	灰
273	須恵器	杯Ｂ	Ｐ21	16.10			11.60	6.10	0.50	口縁部1/7・底部1/3	良好	灰～灰白
274	土師器	杯Ａ	Ｐ21	13.00			7.30	4.20		口縁部1/5・底部1/4		赤橙～灰白
275	土師器	杯Ａ	Ｐ22	12.00				2.40		口縁部1/6		にぶい橙
276	土師器	杯Ａ	Ｐ24	12.60			7.80	3.00		口縁部1/6		浅黄橙～橙
277	須恵器	杯Ｂ	Ｐ24				8.70	1.60	0.45	底部1/3	良好	灰
278	土師器	杯Ａ	Ｐ23					2.70		口縁部わずか		にぶい黄橙～浅黄橙
279	土師器	杯	Ｐ25							口縁部わずか		橙～浅黄橙
280	黒色土器	椀	Ｐ25							口縁部わずか		浅黄～黒
281	須恵器	杯Ａ	Ｐ26	14.70			12.00	2.70		口縁部1/7	良好	灰
282	土師器	甕	Ｐ27	23.20	20.40			5.60		口縁部わずか・頸部1/5		浅黄橙
283	土師器	甕	Ｐ28	15.70	13.40			4.90		口縁部1/6		にぶい橙～灰黄褐
284	土師器	杯	Ｐ28							口縁部わずか		橙～にぶい橙
285	須恵器	Ⅲ Ｂ	Ｐ29	30.90				2.50		口縁部1/10	良好	灰～灰白
286	土師器	甕	Ｐ29	20.40	15.80			7.70		口縁部1/10		にぶい橙
287	土師器	甕	Ｐ29	17.00	14.60			5.50		口縁部1/10		橙～にぶい黄橙
288	土師器	杯Ａ	Ｐ30	17.40			12.40	3.70		口縁部1/6		橙～浅黄橙

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
	外面：底部回転ヘラ削り・口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		120	－
	外面：底部回転ヘラ削り→回転ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		120	－
	外面：体部下半～底部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		120	50
0.5～２㎜大の長石・チャート・石英やや多く含む	外面：底部指オサエ・ナデ調整→ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：底部～口縁部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。	全体的に磨滅傾向。	120	51
0.5～１㎜大の長石・石英・クサリ礫含む	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	暗文観察不可。化粧土有。	120	－
0.5～1.5㎜大の石英・チャート・長石含む	外面：横ナデ。 内面：横ナデ。		120	51
	外面：底部ヘラ削り→ヘラナデ調整・底部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		120	51
0.5～1.5㎜大の長石・石英・チャート含む	外面：底部ヘラ削り→ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。 内面：口縁部回転ナデ調整。		120	－
0.5㎜以下の長石・石英・チャート含む	外面：横ナデ調整。 内面：横ナデ調整。		－	49
0.5～１㎜大の長石・チャート含む	外面：横ナデ調整。 内面：横ナデ調整。	口縁部内端面にわずかな沈線。	－	49
	外面：底部回転ヘラ削り→ナデ・口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		120	－
0.5～2.5㎜大のチャート・石英・長石非常に多く含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部板ナデ。口縁部横ナデ調整。		121	－
１～３㎜大のチャート・長石・石英含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部～口縁部ハケ調整。体部ナデ調整。		121	－
0.5～１㎜大の長石・クサリ礫・雲母含む	外面：体部ナデ→口縁部横ナデ調整。 内面：横ナデ調整。	口縁部内端面に沈線。化粧土有。	－	49
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	底部にわずかに高台の痕跡。	121	－
0.5～３㎜大の長石・チャート・雲母・石英含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ナデ。口縁部ハケ→横ナデ調整。		121	－
0.5～2.5㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ナデ調整・口縁部ハケ調整→横ナデ調整。		121	－
0.5～１㎜大の長石・チャート・雲母・クサリ礫含む	外面：体部ナデ・ユビオサエ。→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	暗文観察不可。化粧土有。	121	－

第34表　奈良時代の土器観察表（６）

No.	種別	器種	遺構名	法量（cm）						残存状況	焼成	色調
				口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
289	土師器	堝	P30	36.00	29.80			6.30		口縁部1/7		にぶい橙
290	土師器	杯A	P31	17.60			14.50	4.30		口縁部～底部1/4		にぶい橙
291	土師器	杯	P37					4.80		口縁部わずか		にぶい橙～浅黄橙
292	製塩土器	焼塩壺	P38					7.15		口縁部わずか		橙～にぶい褐
293	土師器	甕	P47	26.30	20.80			4.30		口縁部1/8		浅黄橙～灰黄褐
294	土師器	甕	P35	25.70	20.40			7.55		口縁部1/4弱		にぶい橙～灰白
295	土師器	杯	P33							底部わずか		浅黄橙
296	土師器	甕	P34	17.30	15.40			7.00		口縁部1/5		浅黄橙～灰白
297	土師器	カマド	P34							口縁部わずか		にぶい橙～灰褐
298	土師器	甕	P40			12.00		5.00		底部完存・体部1/3		にぶい橙
299	土師器	堝	P39	39.60				3.85		口縁部1/9		にぶい橙～褐灰
300	土師器	杯A	P43	13.00			10.00	3.80		口縁部1/7・底部1/5		にぶい黄橙
301	土師器	杯C	P43	13.00				2.25		口縁部1/8		にぶい黄橙～灰黄褐
302	土師器	Ⅲ	P43	13.70			11.40	1.15		口縁部わずか・底部1/8		浅黄橙
303	須恵器	杯蓋	P42	16.20				1.90		口縁部1/10	良好	灰白
304	須恵器	杯B蓋	P45	15.40				3.20		口縁部1/7	良好	灰
305	須恵器	杯B	P46				7.60	1.20	0.60	底部1/8	良好	灰
306	須恵器	ⅢA	P32	18.00			12.60	2.65		口縁部1/9	良好	灰白

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
0.5～２㎜大のチャート・長石・石英・雲母含む	外面：体部ハケ→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ナデ。口縁部ハケ調整。	口縁部～体部外面煤付着。	121	－
0.5～1.5㎜大のチャート・長石・雲母含む	外面：口縁部横ナデ調整。底部ヘラナデ調整。 内面：底部～体部変換部弱いヘラ削り。口縁部横ナデ調整 底部ナデ調整。	口縁部内面に沈線。化粧土有。	121	51
0.5～2.5㎜大のチャート・長石・石英含む。	外面：横ナデ調整。 内面：横ナデ調整。	口縁部内端部に沈線。	121	－
１～3.5㎜大の石英・長石・チャート・雲母非常に多く含む	外面：指オサエ・ナデ調整。	磨滅のため、内面の調整不明。	121	－
長石・石英・チャート含む	外面：磨滅。 体部ヘラ削り・口縁部ナデ調整・ハケ調整→横ナデ。 内面：調整。		121	－
１～２㎜大のチャート・長石・石英・クサリ礫やや多く含む	外面：体部ハケ調整。	磨滅のため内面の調整不明。	121	－
0.5～2.5㎜大のチャート・長石・雲母含む	外面：ナデ調整。 内面：漆付着。	内面漆付着。	－	49
0.5㎜以下の長石・チャート・石英含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：口縁部横ナデ調整。	体部内面磨滅。	121	－
0.5～２㎜大の長石・石英・クサリ礫含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：ナデ調整。	内面煤付着。	－	51
１～２㎜大の長石・チャート・石英・雲母やや多く含む	外面：ハケ調整。 内面：ユビオサエ→板ナデ。		121	－
0.5～１㎜大の石英・雲母・長石含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		121	－
0.5～１㎜大の長石・チャート・雲母含む	外面：底部ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	暗文無。	121	－
0.5㎜以下の長石・チャート・雲母含む	外面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：ハケ調整→横ナデ調整。	内面煤状のもの付着。	121	－
0.5～４㎜大の長石・石英・チャート含む	外面：底部指オサエ・ナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		121	－
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		121	－
	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		121	－
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		121	－
	外面：底部回転ヘラ削り→ナデ調整・口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		121	－

第35表　奈良時代の土器観察表（７）

No.	種別	器種	遺構名	法量（cm）						残存状況	焼成	色調
				口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
307	瓦	丸瓦	P41							1/2	不良	灰～灰白
308	瓦	平瓦	P44							1/4	不良	灰～灰黄
309	須恵器	杯A	SK32	13.35			10.30	3.05		1/4	良好	灰
310	須恵器	杯B	SK32	11.65			8.70	5.00	0.60	口縁部2/5・底部1/2	良好	灰
311	製塩土器	焼塩壺	SK32	12.80				6.45		口縁部1/4		にぶい褐
312	製塩土器	焼塩壺	SK32	9.70				7.15		口縁部1/4		明赤褐～橙
313	製塩土器	焼塩壺	SK32					7.40		口縁部わずか		明赤褐～にぶい橙
314	製塩土器	焼塩壺	SK32							口縁部わずか		橙
315	製塩土器	焼塩壺	SK32							口縁部わずか		明赤褐～橙
316	須恵器	甕C	SK09	31.50	31.00	38.00		10.50		口縁部わずか・頸部1/11	やや不良	灰
317	須恵器	杯B蓋	SK23	18.50				2.20		口縁部1/10	やや不良	灰～灰白
318	土師器	杯B蓋	SE01	13.95				2.90		ほぼ完存		にぶい橙～にぶい黄橙
319	土師器	杯B蓋	SE01	14.50				2.85		口縁部2/3・天井部～つまみ完存		橙～浅黄橙
320	土師器	杯A	SE01	13.20			9.65	4.15		3/4		浅黄橙～橙
321	土師器	杯A	SE01	13.60			9.80	3.80		1/3		浅黄橙～にぶい橙
322	土師器	杯A	SE01	13.40			9.50	4.40		口縁部4/5・底部完存		灰黄～にぶい黄橙
323	土師器	杯A	SE01	15.70			10.00	4.00		1/2		浅黄橙～橙
324	土師器	杯A	SE01	18.50			14.60	4.70		口縁部3/4・底部完存		浅黄橙～橙

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
	凹面：布目。 凸面：ヘラ削り。 端面：ヘラ削り。	1190ｇ	122	51
	凹面：布目。 凸面：縄目叩き。 側面：ヘラ削り。端面:ヘラ削り。	550g	122	52
	外面：底部回転ヘラ切り→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		122	52
	外面：底部ヘラナデ→高台貼付けによるナデ。 口縁部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。		122	52
１～３㎜大の長石・石英・雲母・クサリ礫非常に多く含む	外面：指オサエ・ナデ調整。 内面：体部ユビナデ→口縁部指オサエ。		122	52
１～4.5㎜大の石英・長石非常に多く含む	外面：指オサエ・ナデ調整。 内面：ユビナデ。		122	52
0.5～２㎜大の長石・石英・チャート含む	外面：指オサエ・ナデ調整。 内面：体部指オサエ・ナデ→口縁部指オサエ。		122	52
1～2㎜大の長石・石英含む	外面：指オサエ。 内面：指オサエ。		－	52
0.5～２㎜大の長石・石英含む	外面：指オサエ。 内面：指オサエ。		－	52
	外面：体部ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。 内面：体部当具痕→ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。		122	53
	外面：天井部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		122	－
0.5㎜大のチャート・クサリ礫わずかに含む	外面：つまみ回転ナデ調整。天井部～口縁部ヘラミガキ。 内面：回転ナデ調整。	つまみ径2.3㎝・つまみ高8.5㎜。化粧土有。	122	53
0.5～2.5㎜大のチャート・クサリ礫含む	外面：つまみ回転ナデ調整。天井部ナデ調整。	つまみ径2.6㎝・つまみ高8.5㎜。化粧土有。	122	53
0.5～１㎜大の長石・クサリ礫・石英含む	外面：底部～体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	暗文観察不可。化粧土有。	122	53
0.5～１㎜大のチャート・長石・クサリ礫わずかに含む	外面：底部ナデ調整→体部ナデ調整・口縁部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。	暗文観察不可。化粧土有。	122	53
0.5～2.5㎜大の長石・石英・チャート含む	外面：底部指オサエ・ナデ調整→体部指オサエ→口縁部横ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→口縁部横方向のナデ調整。	内外面煤付着。	122	53
0.5～１㎜大のクサリ礫・石英・雲母わずかに含む	外面：底部指オサエ・ナデ調整→体部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。	化粧土有。	122	53
0.5～１㎜大の長石・クサリ礫・チャート・石英含む	外面：底部ナデ調整→体部ヘラナデ調整→口縁部回転ナデ調整。 内面：底部指オサエ・ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。	暗文観察不可。化粧土有。	122	53

第36表　奈良時代の土器観察表（８）

No.	種別	器種	遺構名	法量（cm）						残存状況	焼成	色調
				口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
325	土師器	Ⅲ A	ＳＥ01	16.00			10.60	3.05		口縁部1/5・底部完存		橙～灰白
326	土師器	Ⅲ A	ＳＥ01	16.20			11.30	2.40		完存		浅黄橙～灰白
327	土師器	鉢	ＳＥ01	33.30	29.40			5.75		口縁部1/8		灰黄褐～にぶい橙
328	土師器	甕	ＳＥ01	26.20	23.40			16.80		口縁部1/3		にぶい黄橙～にぶい褐
329	製塩土器	焼塩壺	ＳＥ01	10.80		13.00		8.10		口縁部1/4		明赤褐
330	製塩土器	焼塩壺	ＳＥ01					5.50		口縁部わずか		にぶい橙
331	須恵器	杯Ｂ蓋	ＳＥ01	15.50				2.60		口縁部1/4・つまみ完存	良好	灰
332	須恵器	杯Ａ	ＳＥ01	9.70			7.00	3.50		1/4	やや不良	灰～灰白
333	土師器	カマド	ＳＥ01	20.00				19.00		口縁部1/3・庇1/2・把手		にぶい黄橙～灰黄褐
334	土師器	カマド	ＳＥ01				64.20	14.30		底部1/10弱		灰黄～暗灰黄
335	土師器	カマド	ＳＥ01							焚口部の一部		にぶい黄橙
336	瓦	丸瓦	ＳＥ01							1/4以下	良好	灰
337	瓦	丸瓦	ＳＥ01							1/4以下	不良	灰白
338	瓦	平瓦	ＳＥ01							1/4	不良	灰白～黄灰
339	瓦	平瓦	ＳＥ01							1/2	不良	灰白～灰黄褐
340	須恵器	壺	ＳＤ23	16.90				3.70		口縁部1/8	良好	灰～灰白
341	土師器	Ⅲ C	ＳＤ24	14.80			10.80	2.70		1/8		橙
342	土師器	カマド	ＳＤ24	27.00				9.25		口縁部1/6		にぶい黄橙～灰黄褐

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
0.5～１㎜大のチャート・クサリ礫わずかに含む	外面：底部指オサエ・ナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：底部指オサエ→口縁部横ナデ調整。	暗文観察不可。 化粧土有。	122	53
１㎜以下の長石・雲母・クサリ礫含む	外面：底部指オサエ→ヘラナデ調整→底部～体部ヘラナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：底部指オサエ・ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	暗文観察不可。 化粧土有。	122	54
１～２㎜大の長石・チャート・石英含む	外面：体部ハケ調整→口縁部ユビオサエ→横ナデ調整。 内面：体部ナデ調整。口縁部ハケ調整→ヨコナデ調整。		123	54
１～３㎜大の石英・長石・チャート・クサリ礫・雲母多く含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ。 内面：体部下半ヘラ削り→体部上半ユビナデ→口頸部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。		123	54
１～５㎜大の長石・チャート・雲母非常に多く含む	外面：指オサエ・ナデ調整。 内面：体部下半指オサエ。体部上半～口縁部ユビナデ。		123	54
１～３㎜大の石英・長石多く含む	外面：体部指オサエ・ナデ調整→口縁部指オサエ。 内面：体部指オサエ・ナデ調整。	内面に布目あり。	123	54
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整→天井部仕上げナデ。	つまみ径2.3㎝・つまみ高7㎜。	123	54
	外面：底部未調整。口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		123	－
１～２㎜大の長石・石英・チャート・雲母含む	外面：ハケ調整→把手横ナデにより貼付け。 内面：指オサエ・ナデ調整。	底幅26.6㎝。	123	54
１～２㎜大の長石・石英・チャート・雲母含む	外面：ハケ調整。 内面：ナデ調整。		123	－
１～３㎜大のチャート・長石・クサリ礫含む	外面：指オサエ・ナデ調整。 内面：指オサエ・ナデ調整。		－	55
須恵質	凹面：布目→ナデ。 凸面：ナデ調整。	580ｇ	124	－
	凹面：布目→ナデ調整。 凸面：ナデ調整。	447ｇ	124	－
	凹面：布目→ナデ調整。 凸面：叩き。	290ｇ	124	55
	凹面：布目→ナデ調整。 凸面：格子叩き。	978ｇ	124	56
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		124	－
0.5～1.5㎜大のクサリ礫・雲母・チャート含む	外面：底部ナデ調整→底部～体部回転ヘラナデ調整→口縁部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。	暗文観察不可。 化粧土有。	124	－
0.5～3.5㎜大のチャート・長石・石英・クサリ礫含む	外面：体部ハケ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：指オサエ・ナデ調整。		124	55

第37表　奈良時代の土器観察表（９）

No.	種別	器種	遺構名	法量（cm）						残存状況	焼成	色調
				口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
343	土師器	甕	ＳＤ24	24.70	20.80			7.45		口縁部1/5		浅黄橙～にぶい黄橙
344	製塩土器	焼塩壺	ＳＤ24							口縁部わずか		明赤褐
345	土師器	杯Ａ	畠６	18.00			13.70	3.90		口縁部3/5・底部完存		橙～浅黄橙
346	須恵器	鉢	畠７	17.65				5.50		口縁部1/6	良好	灰～灰白
347	須恵器	杯Ｂ	畠７	13.30			9.50	3.85	0.50	口縁部わずか・底部1/6	やや不良	灰白
348	須恵器	杯Ｂ蓋	畠９	14.30				1.85		口縁部5/6	やや不良	灰～灰白
349	土師器	皿Ａ	畠９	17.40			12.80	3.10		口縁部わずか・底部1/4		にぶい黄橙～橙
350	土師器	皿Ａ	畠９	17.30			14.00	2.65		口縁部1/4		橙～にぶい黄橙
351	土師器	杯Ａ	畠９	14.00			10.20	2.95		1/4		橙～浅黄橙
352	土師器	甕	畠９	14.90	12.40	14.60		9.10		口縁部～体部1/4		灰褐～にぶい橙
353	土師器	カマド	畠９	19.80			40.00	23.90		口縁部1/6・焚口1/2		浅黄橙～灰黄褐
354	土師器	皿Ｂ	包含層	26.10			23.00	2.70	0.20	体部1/8		橙
355	土師器	皿Ａ	包含層	19.60			15.10	2.15		1/6		浅黄橙～橙
356	土師器	杯Ａ	包含層	12.90				3.40		口縁部1/6		橙～浅黄橙
357	土師器	高杯	包含層					7.00		脚柱部完存		浅黄橙～にぶい橙
358	土師器	高杯	包含層					12.80		脚柱部完存		にぶい黄橙
359	須恵器	杯Ａ	包含層	14.60			11.50	3.35		1/3	良好	灰白
360	須恵器	杯Ａ	包含層	12.70			9.65	3.85		口縁部1/8・底部1/4	やや不良	灰～浅黄橙

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
１～2.5㎜大のチャート・長石・石英・クサリ礫多く含む	外面：体部ハケ調整→口頸部横ナデ調整。 内面：体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。		124	－
１～５㎜大の長石・石英・雲母多く含む	外面：指オサエ。 内面：指オサエ・ナデ調整。		－	55
0.5～２㎜大のチャート・長石・石英・雲母含む	外面：底部ヘラ削り。体部回転ヘラ削り。口縁部回転ナデ調整。 内面：底部指オサエ・ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。	暗文観察不可。	124	56
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		125	－
	外面：底部回転ナデ調整。体部下半回転ヘラ削り→回転ナデ。口縁部回転ナデ。 内面：回転ナデ調整。		125	－
	外面：天井部回転ヘラ切り→回転ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		125	－
0.5～１㎜大の長石・雲母・クサリ礫・チャート含む	外面：底部ナデ調整。体部ヘラ削り→ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。	暗文観察不可。	125	－
0.5～１㎜大のクサリ礫・雲母・長石含む	外面：底部ナデ調整。体部ヘラ削り。口縁部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。	全体的に磨滅傾向。	125	－
0.5～１㎜大の長石・雲母・クサリ礫含む	外面：底部ナデ調整→底部～体部下半ヘラ削り→口縁部横ナデ調整。 内面：底部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	暗文観察不可。化粧土有。	125	－
１～２㎜大のチャート・長石・石英やや多く含む	外面：体部ハケ調整→口頸部横ナデ調整。 内面：体部ナデ調整。口縁部横ナデ調整。	外面被熱。	125	55
１～2.5㎜大のチャート・長石・石英・クサリ礫含む	外面：体部ハケ調整→ナデ。口縁部ナデ調整→庇貼付け。 内面：指オサエ・ナデ調整。		125	56
0.5～1.5㎜大のチャート・雲母・クサリ礫含む	外面：底部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：横ナデ調整。	口縁部内面に斜方向の暗文。化粧土有。	125	56
0.5～１㎜大の長石・石英・雲母・クサリ礫・チャート含む	外面：底部ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。	暗文観察不能	125	－
0.5～２㎜大のチャート・雲母・長石・クサリ礫含む	外面：口縁部横ナデ調整。 内面：口縁部横ナデ調整。	内外面とも磨滅が顕著。暗文観察不能。	125	－
１～３㎜大の長石・チャート・石英・クサリ礫含む	外面：ヘラ削り。	脚高6.6㎝。	125	56
0.5～1.5㎜大の長石・クサリ礫・石英・チャート含む	外面：ヘラ削り。	脚高12.8㎝。	125	57
	外面：底部回転ヘラ切り→回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		125	56
	外面：底部ヘラ切り→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		125	－

第38表　奈良時代の土器観察表（10）

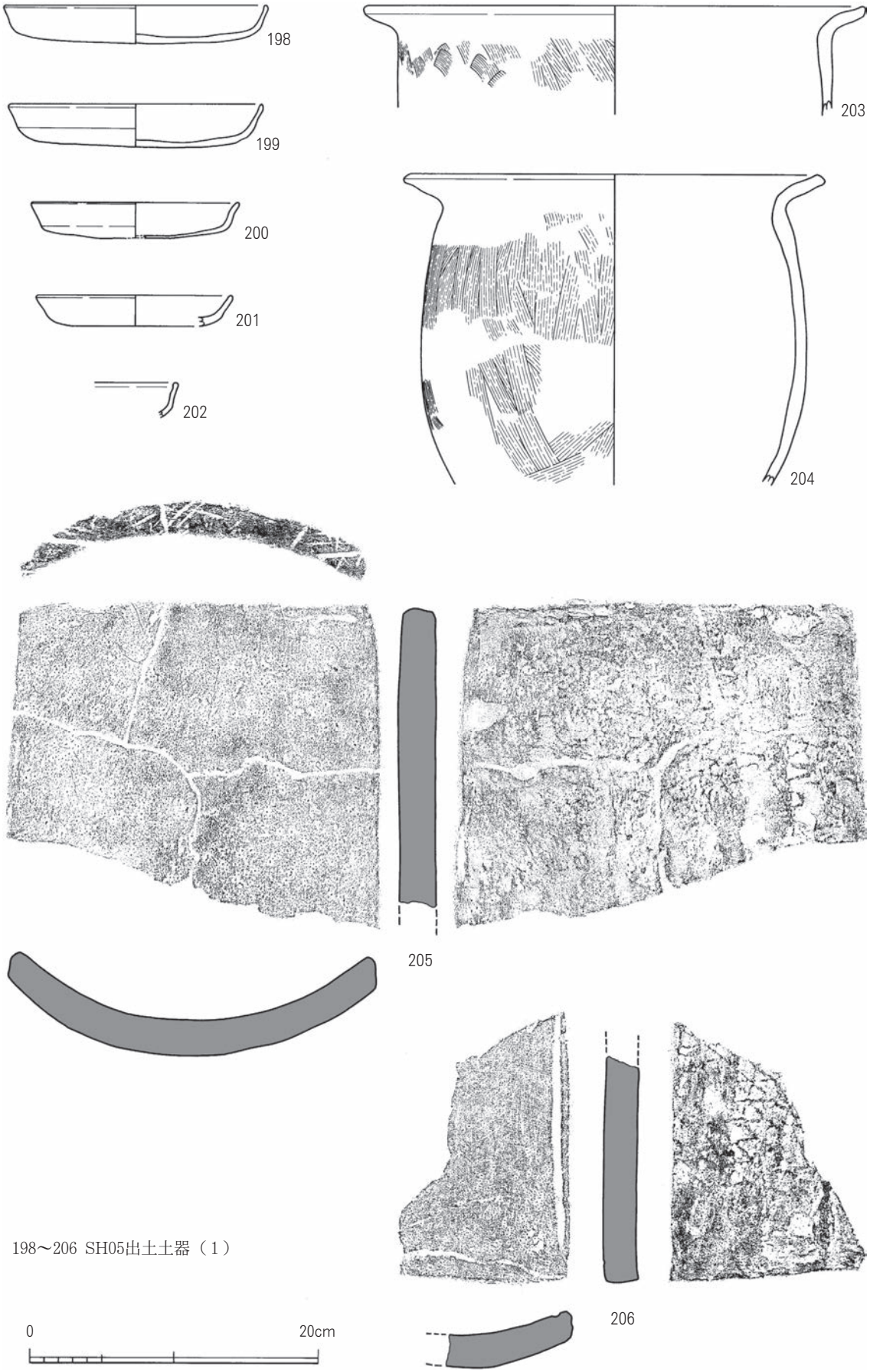
No.	種別	器種	遺構名	法量（cm）						残存状況	焼成	色調
				口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
361	須恵器	杯Ｂ蓋	包含層	16.80				2.60		口縁部1/6	良好	灰～灰白
362	須恵器	杯Ｂ蓋	包含層	13.90				3.45		口縁部1/6・つまみ完存	良好	灰白
363	須恵器	杯Ｂ蓋	包含層	15.70				2.25		口縁部1/2・つまみ完存	良好	灰
364	須恵器	杯Ｂ蓋	包含層	10.70				2.35		口縁部1/2弱・つまみ完存	良好	灰～灰白
365	須恵器	台付皿	包含層	14.70				2.15		口縁部1/8・つまみ1/6	良好	灰白
366	須恵器	杯Ｂ	包含層	17.40			11.90	6.35	0.70	口縁部1/8・底部1/4	良好	灰白
367	須恵器	杯Ｂ	包含層	16.90			10.70	4.35	0.75	1/4	良好	灰白
368	須恵器	杯	包含層							体部わずか	不良	灰白
369	須恵器	杯	包含層							体部わずか	不良	灰白
370	須恵器	皿Ｂ	包含層	23.10			20.70	2.45	0.70	1/10	やや不良	灰
371	須恵器	皿Ａ	包含層	21.40			18.50	2.45		1/8	良好	灰白
372	須恵器	稜椀蓋	包含層					1.60		つまみ完存	良好	灰
373	須恵器	稜椀	包含層					3.05		口縁部わずか	やや不良	灰白
374	須恵器	稜椀	包含層	17.00				4.60		口縁部1/10	やや不良	灰白
375	須恵器	壺	包含層	16.00	9.80			9.30		口縁部わずか・頸部1/2弱	良好	灰
376	須恵器	壺Ｂ	包含層				14.80	8.50		底部1/6	やや不良	灰白
377	須恵器	壺Ｋ	包含層				10.40	4.40	0.90	底部1/3	良好	灰白～灰
378	須恵器	壺Ｃ	包含層	6.10	6.40	10.00	5.40	5.70		口縁部1/8・体部～底部1/4	良好	灰

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
	外面：天井部回転ヘラナデ調整→天井部～口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	内面に重ね焼痕あり。	125	－
	外面：天井部回転ヘラナデ調整→つまみ回転ナデ調整・口縁部回転ナデ調整。 内面：天井部ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。	つまみ径2.45㎝・つまみ高6.5㎜。	125	－
	外面：天井部ヘラ削り→つまみ回転ナデ調整・口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	つまみ径2.60㎝・つまみ高7.5㎜。	125	57
	外面：天井部回転ヘラナデ調整→つまみ回転ナデ調整・口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	つまみ径1.60㎝・つまみ高 7 ㎜。	125	57
	外面：天井部回転ヘラナデ調整→回転ナデ調整→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	つまみ径7.8㎝・つまみ高 5 ㎜。	125	－
	外面：底部回転ヘラ切り→回転ナデ調整による高台貼付け→口縁部回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整。口縁部回転ナデ調整。		125	－
	外面：底部回転ナデ調整→回転ナデ調整による高台貼付け→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		125	－
	外面：ナデ調整。 内面：ナデ調整。	墨書あり。	－	57
	外面：ナデ調整。 内面：ナデ調整。	墨書あり。	－	57
	外面：底部回転ナデ調整→回転ナデ調整による高台貼付け→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		126	－
	外面：底部回転ヘラ削り→口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	底部に墨痕付着。	126	－
	外面：つまみ貼付け後回転ナデ調整→天井部回転ヘラナデ調整→回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	つまみ径4.5㎝・つまみ高1.10㎝。	126	－
	外面：体部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		126	－
	外面：体部回転ヘラ削り→体部～口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		126	－
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		126	－
	外面：底部ヘラナデ→ナデ調整。体部下端回転ナデ。体部回転ナデ調整→ナデ調整。 内面：底部～体部回転ナデ調整→底部ナデ調整。		126	－
	外面：底部ナデ調整・体部回転ヘラ削り→回転ナデ調整による高台貼付け。 内面：ユビナデ。		126	－
	外面：底部ヘラ切り。体部～口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		126	57

第39表　奈良時代の土器観察表（11）

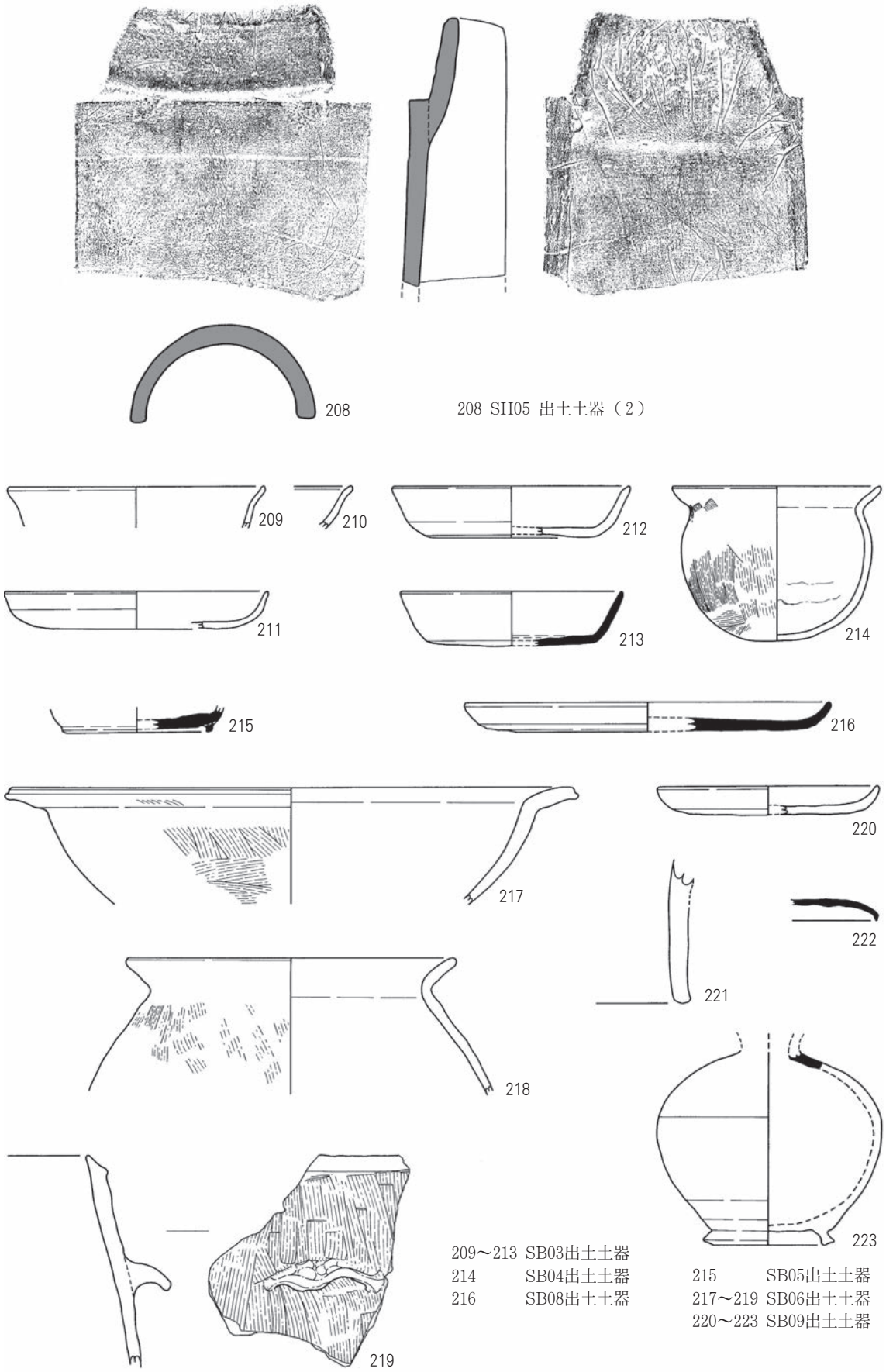
No.	種別	器種	遺構名	法量（cm）						残存状況	焼成	色調
				口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
379	須恵器	壺Ｅ	包含層				5.90	5.20	0.55	底部1/2弱	やや不良	灰～灰白
380	須恵器	高杯	包含層					12.30		脚柱完存	やや不良	灰白
381	須恵器	甕Ｂ	包含層	12.00	10.90			6.20		口縁部1/10・頸部1/6	やや不良	灰白
382	須恵器	甕Ａ	包含層					8.00		口縁部わずか	やや不良	灰白
383	瓦	平瓦	包含層							1/2	不良	灰黄褐～褐灰
384	瓦	平瓦	包含層							1/4以下	やや不良	灰～灰白
385	瓦	平瓦	包含層							1/4	不良	灰～灰白
386	瓦	平瓦	包含層							1/4	不良	灰白
387	瓦	平瓦	包含層							1/4以下	不良	灰白
388	瓦	平瓦	包含層							1/4以下	良好	灰白
389	瓦	平瓦	包含層							1/4以下	やや不良	灰～灰白
390	瓦	平瓦	包含層							1/4以下	不良	褐灰～灰黄褐
391	瓦	平瓦	包含層							1/4以下	不良	橙～明赤褐
392	瓦	平瓦	包含層							1/4以下	不良	灰白～にぶい黄橙

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
	外面：底部回転ナデ調整→回転ナデ調整による高台貼付け →体部ヘラナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		126	－
	外面：回転ナデ調整。 内面：脚部回転ナデ調整。杯部ナデ調整。		126	－
	外面：体部叩き整形→体部～口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		126	57
	外面：回転ナデ調整→櫛描波状文。 内面：回転ナデ調整。 側面：ヘラ削り。	外面自然釉付着。	126	57
	凹面：布目・糸切り。 凸面：縄目叩き→指オサエ・ナデ調整。 側面：ヘラ削り。	890 g	126	58
	凹面：布目。 凸面：縄目叩き・ナデ調整。 側面：ヘラ削り。	298 g	126	58
	凹面：布目・糸切り。 凸面：縄目叩き。 側面：ヘラ削り。	205 g	126	58
	凹面：布目。 凸面：縄目叩き。 側面：ヘラ削り。	225 g	126	－
	凹面：布目。 凸面：縄目叩き。 側面：ヘラ削り。	215 g	127	59
	凹面：布目・糸切り。 凸面：格子叩き。 側面：ヘラ削り。	352 g	127	－
	凹面：布目→板ナデ。 凸面：格子叩き。 側面：ヘラ削り。	155 g	127	59
	凹面：布目。 凸面：ヘラ削り→ナデ調整。 側面：ヘラ削り。	500 g	127	－
	凹面：布目。 凸面：格子叩き。 側面：ヘラ削り。	382 g・凸面に離れ砂あり。	127	59
	凹面：ナデ調整。 凸面：叩き→端部付近ナデ調整。 側面：ヘラ削り。	520 g	127	60

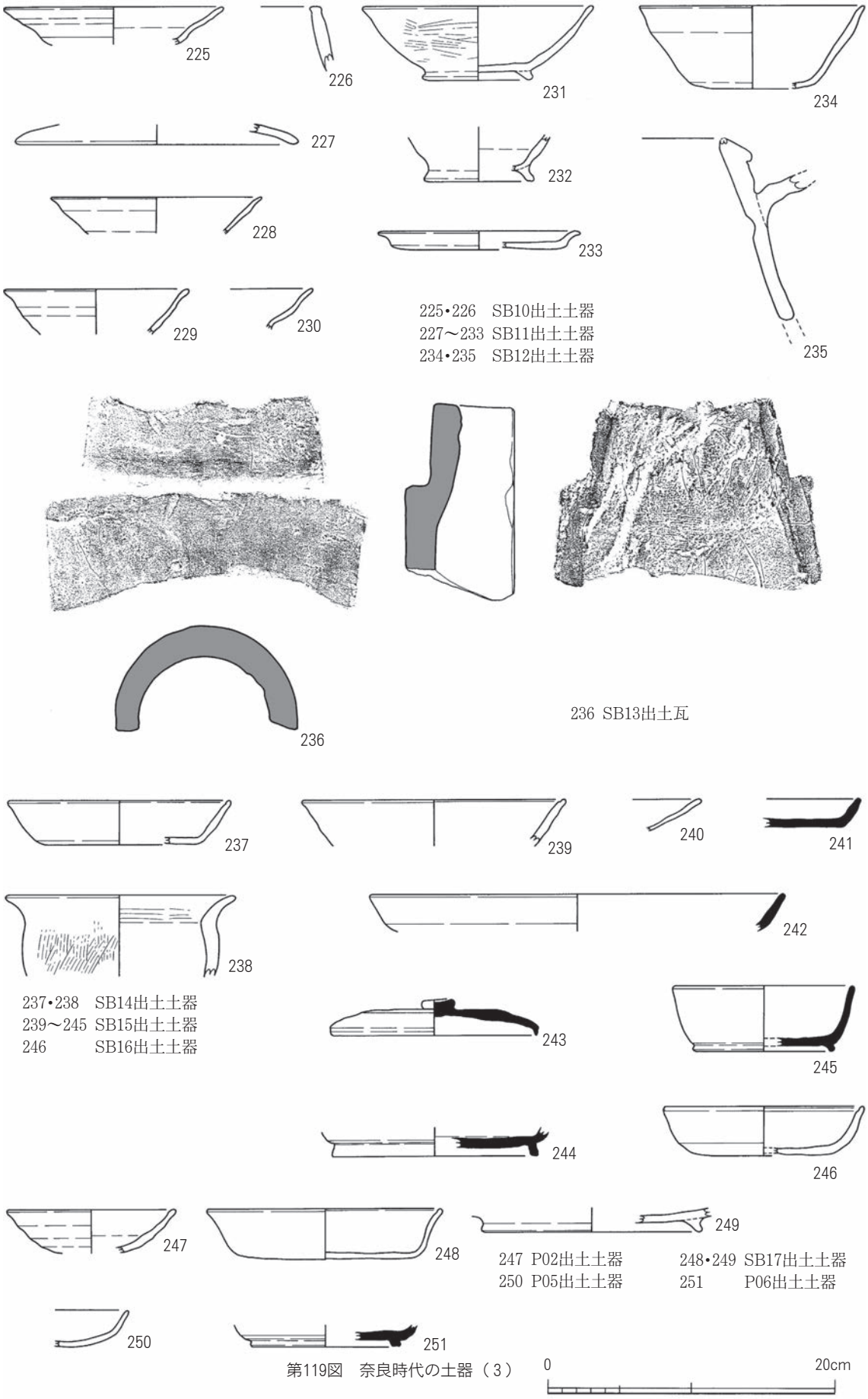


198～206 SH05出土土器（１）

第117図　奈良時代の土器（１）



第118図　奈良時代の土器（２）



225・226　SB10出土土器
227～233　SB11出土土器
234・235　SB12出土土器

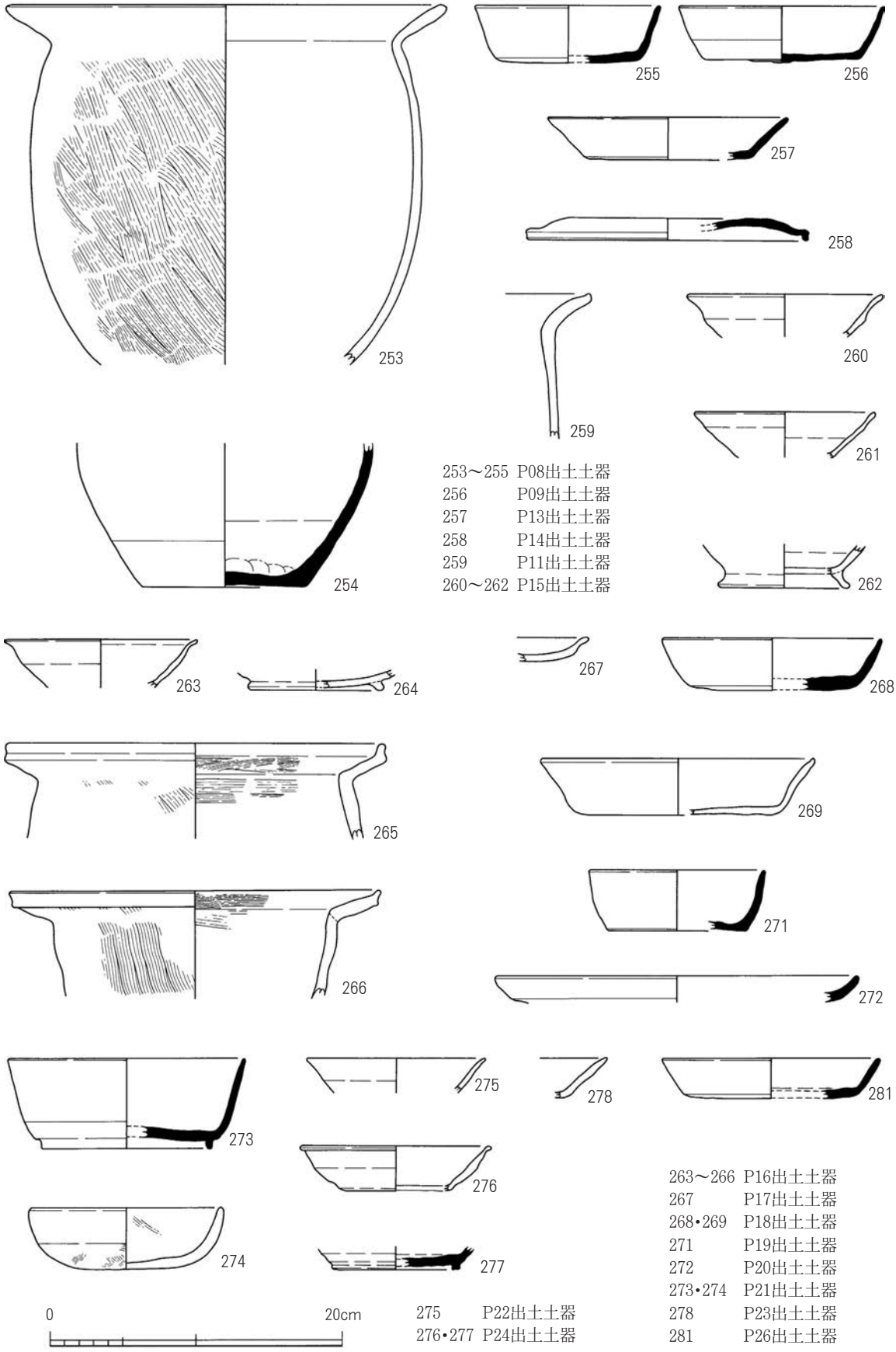
236 SB13出土瓦

237・238　SB14出土土器
239～245　SB15出土土器
246　　SB16出土土器

247 P02出土土器
250 P05出土土器

248・249 SB17出土土器
251　　P06出土土器

第119図　奈良時代の土器（３）

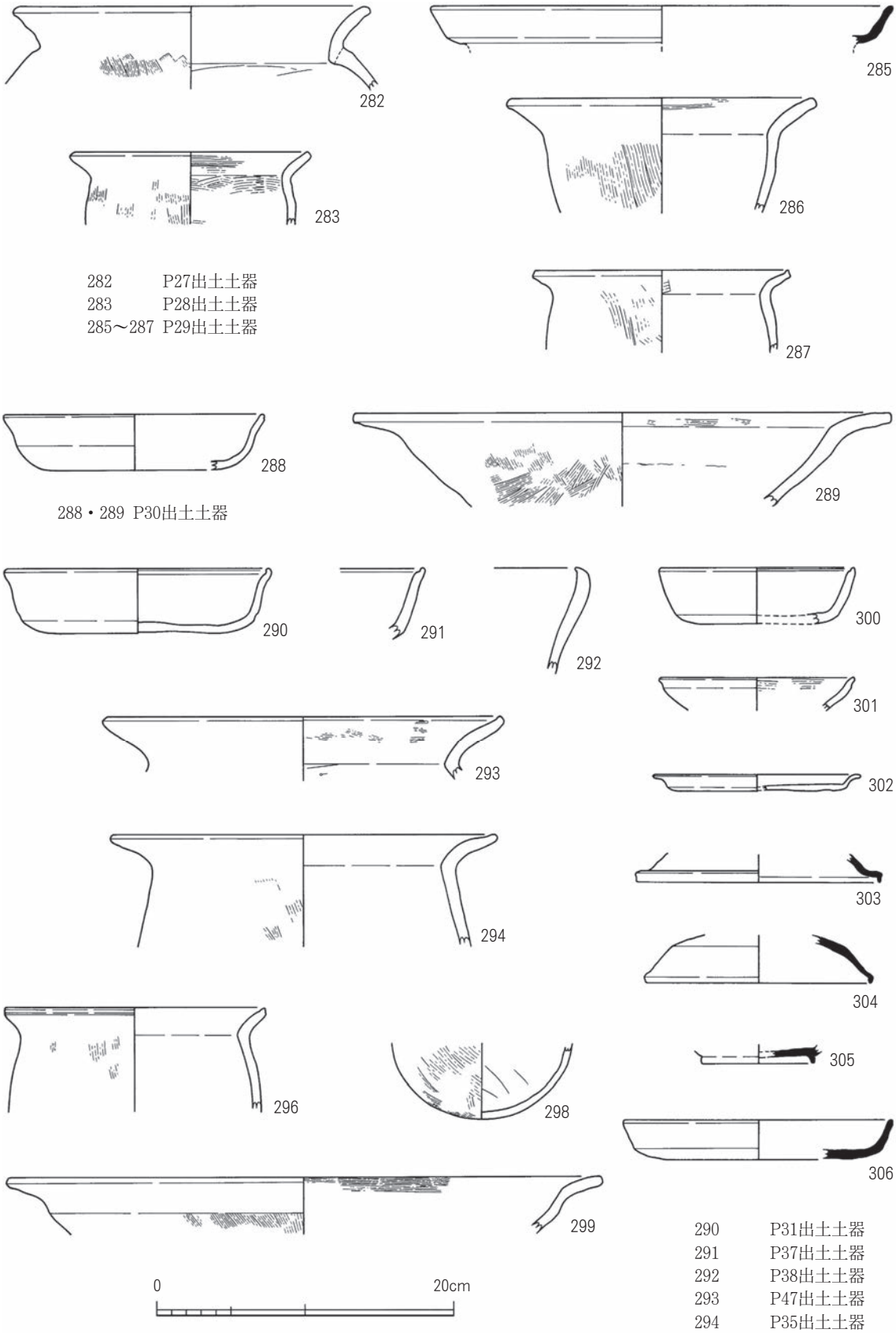


253～255　P08出土土器
256　P09出土土器
257　P13出土土器
258　P14出土土器
259　P11出土土器
260～262　P15出土土器

263～266　P16出土土器
267　P17出土土器
268・269　P18出土土器
271　P19出土土器
272　P20出土土器
273・274　P21出土土器
278　P23出土土器
281　P26出土土器

275　P22出土土器
276・277　P24出土土器

第120図　奈良時代の土器（４）



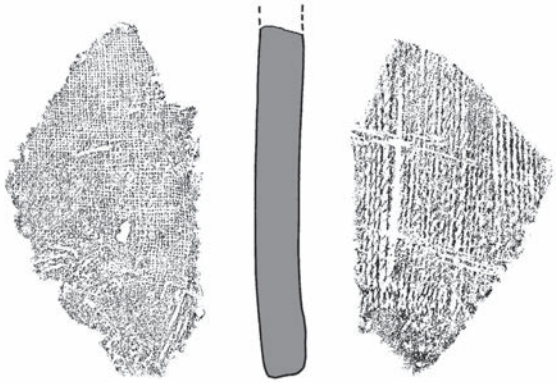
282　　P27出土土器
283　　P28出土土器
285～287　P29出土土器

288・289　P30出土土器

290　　P31出土土器
291　　P37出土土器
292　　P38出土土器
293　　P47出土土器
294　　P35出土土器
300～302　P43出土土器
306　　P32出土土器

296　P34出土土器
298　P40出土土器
299　P39出土土器
303　P42出土土器
304　P45出土土器
305　P46出土土器

第121図　奈良時代の土器（５）

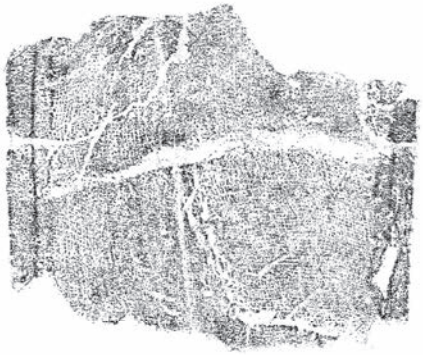


307

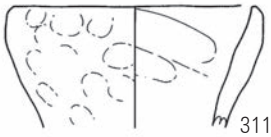
308

309

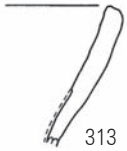
310



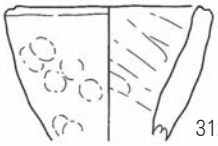
307 P41出土瓦　308 P44出土瓦



311

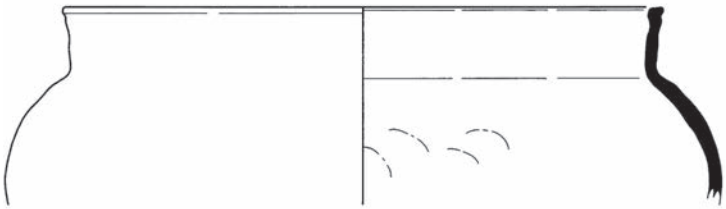


313



312

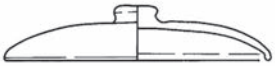
309～313 SK32出土土器



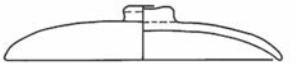
316

317

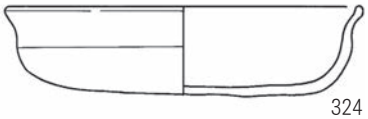
316 SK09出土土器
317 SK23出土土器
318～326 SE01出土土器（１）



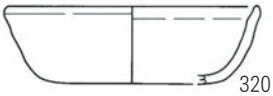
318



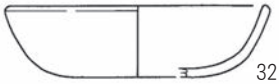
319



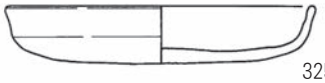
324



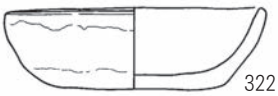
320



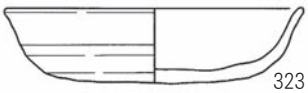
321



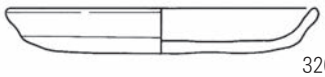
325



322



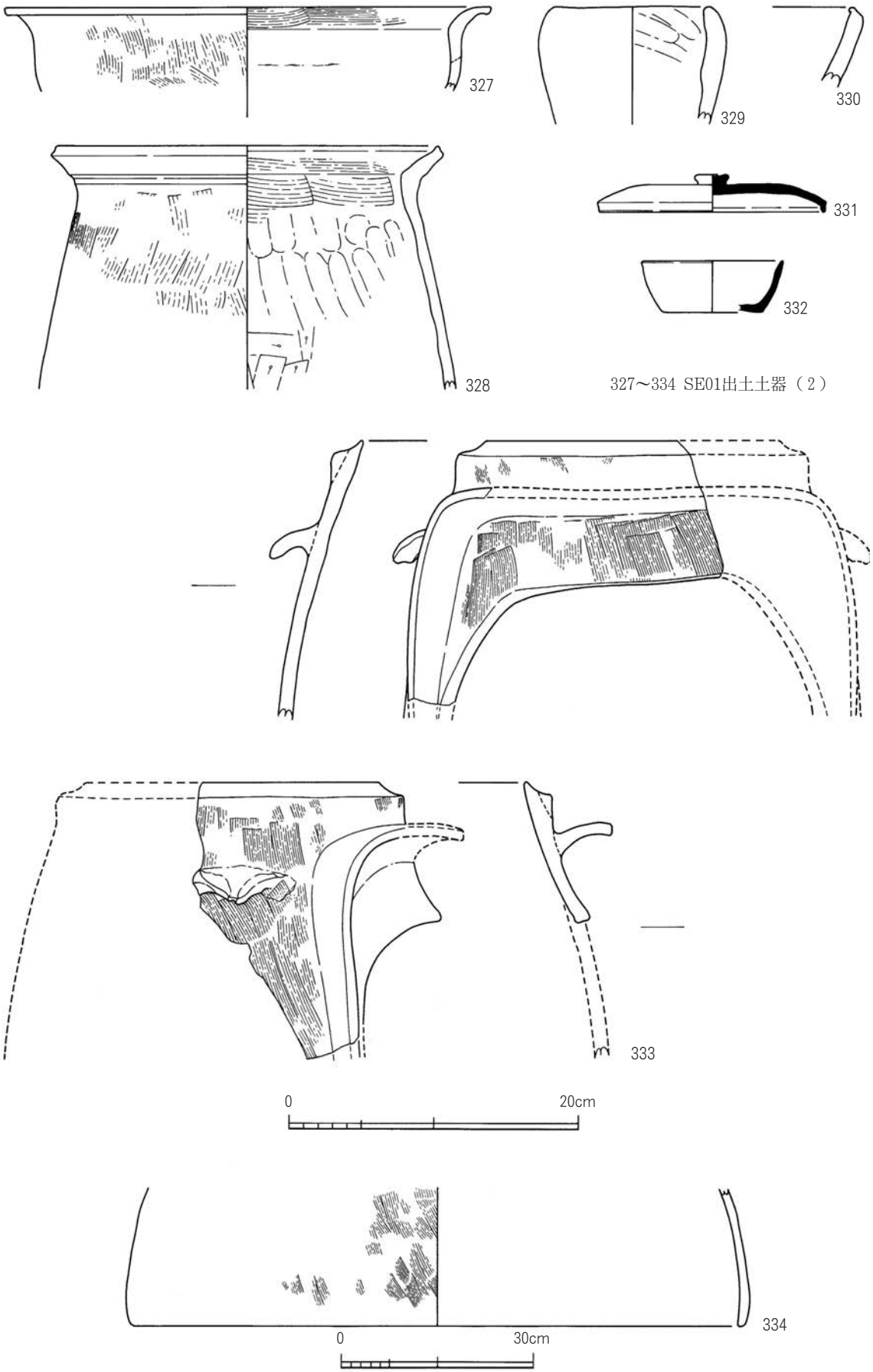
323



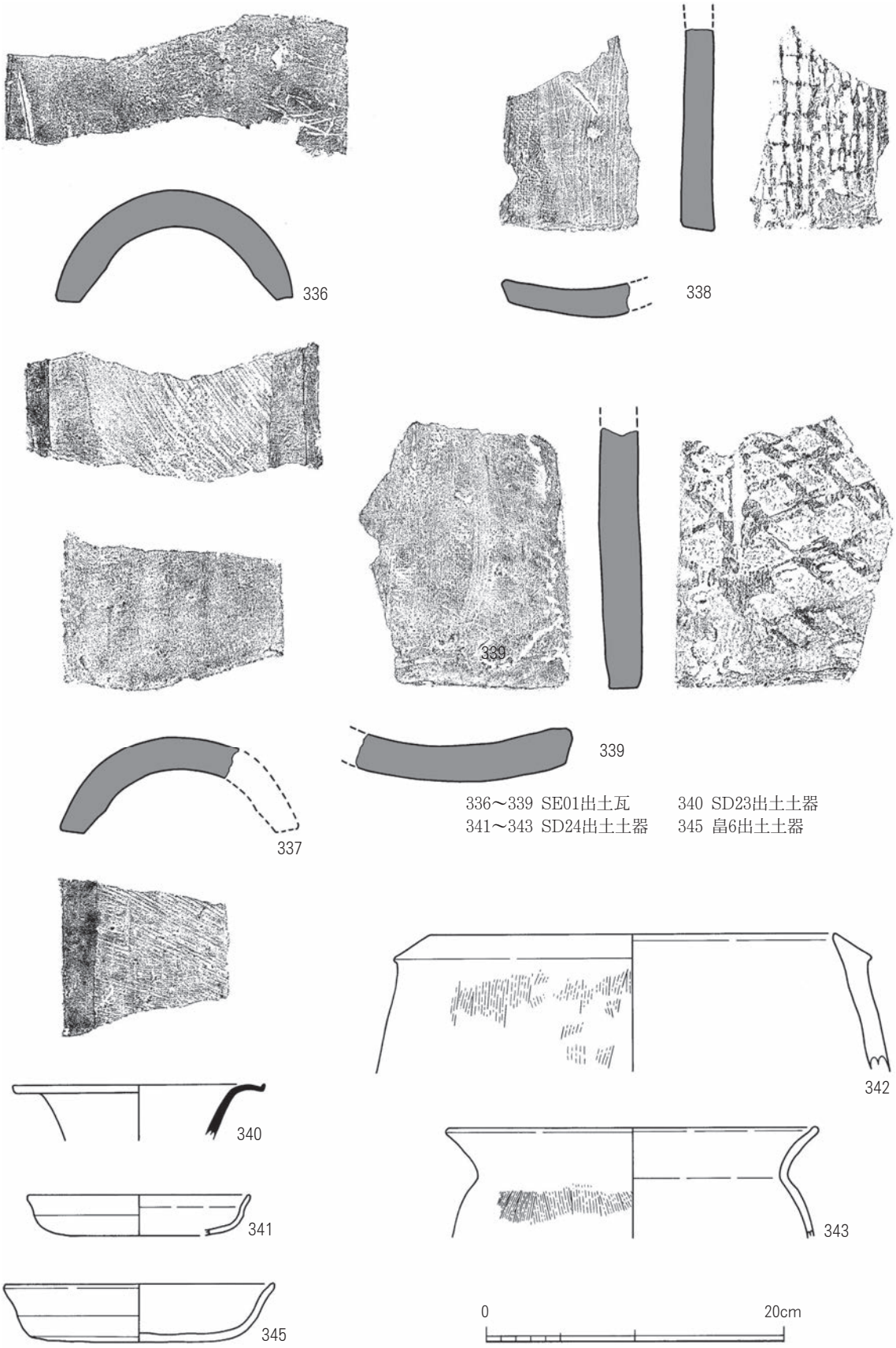
326

第122図　奈良時代の土器（６）

0　20cm

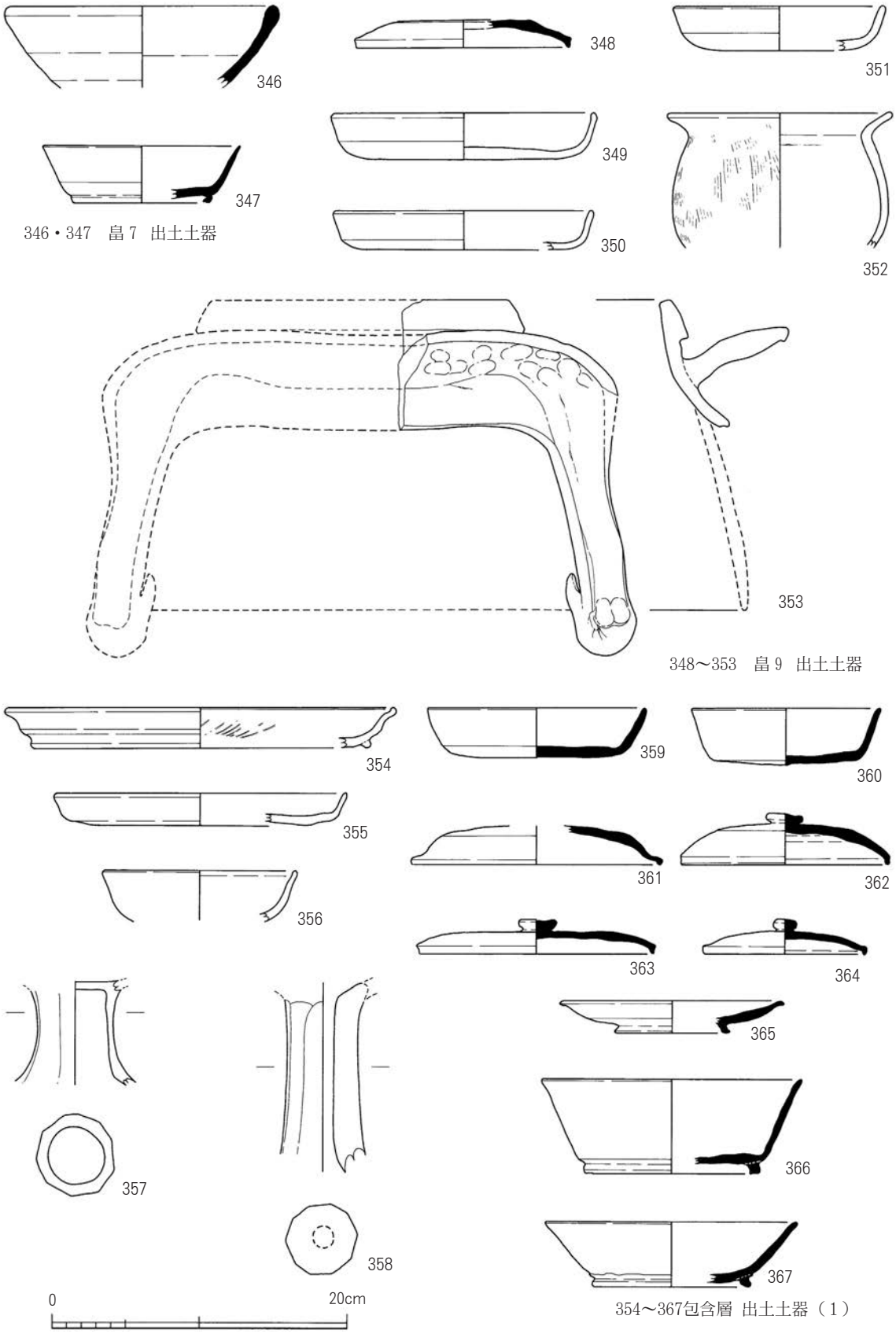


第123図　奈良時代の土器（７）

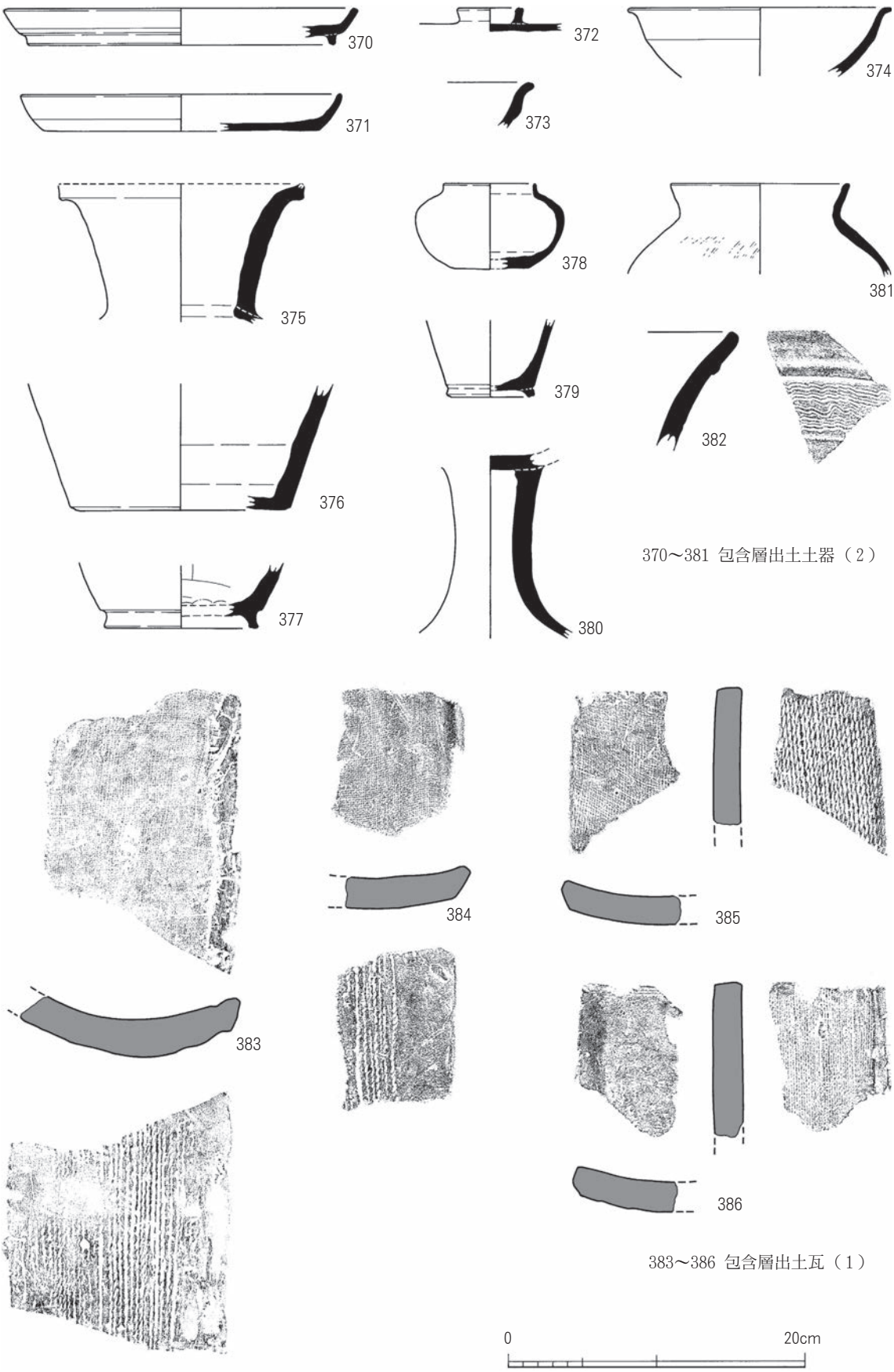


336～339 SE01出土瓦　　340 SD23出土土器
341～343 SD24出土土器　　345 畠6出土土器

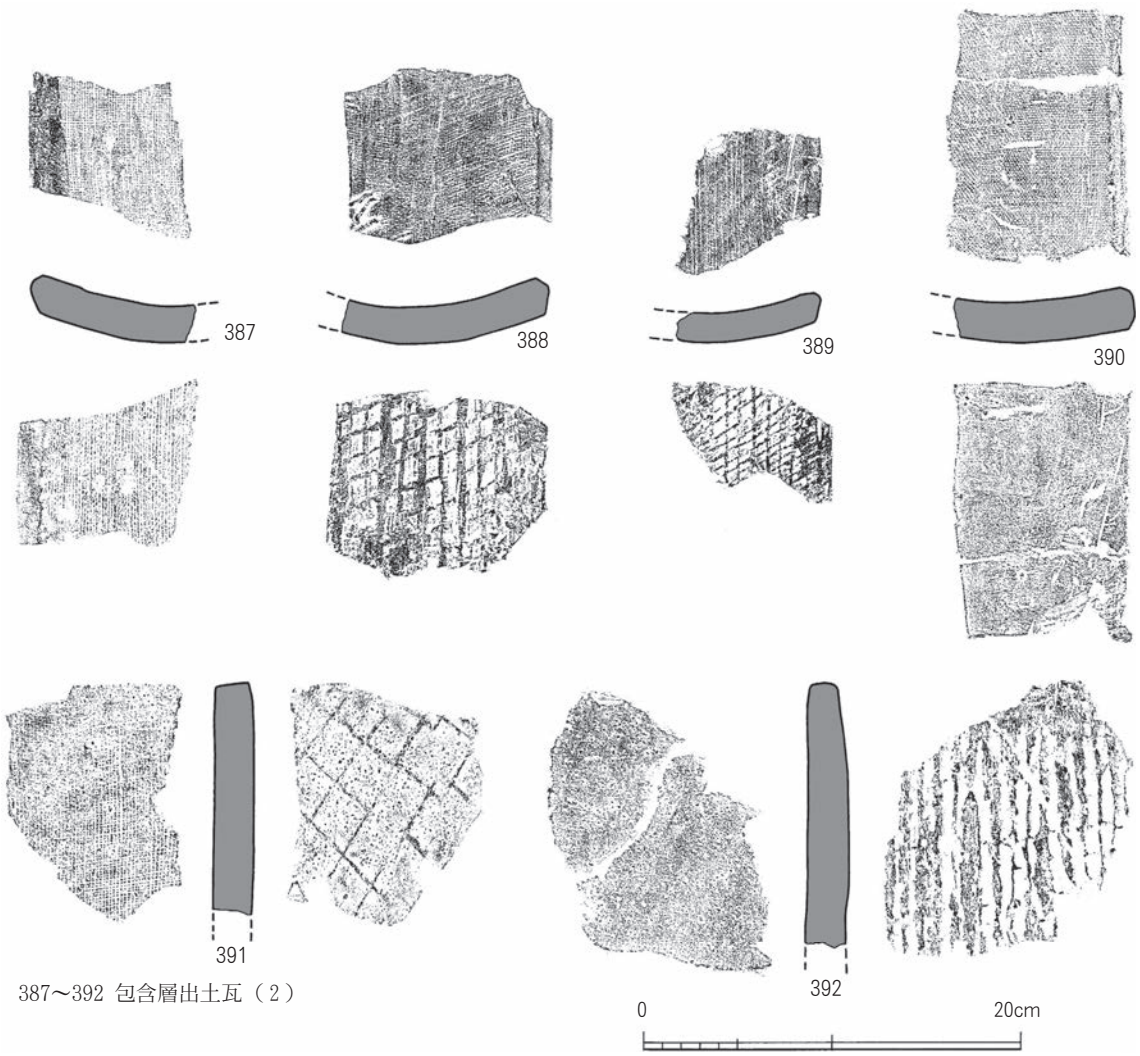
第124図　奈良時代の土器（８）



第125図　奈良時代の土器（９）

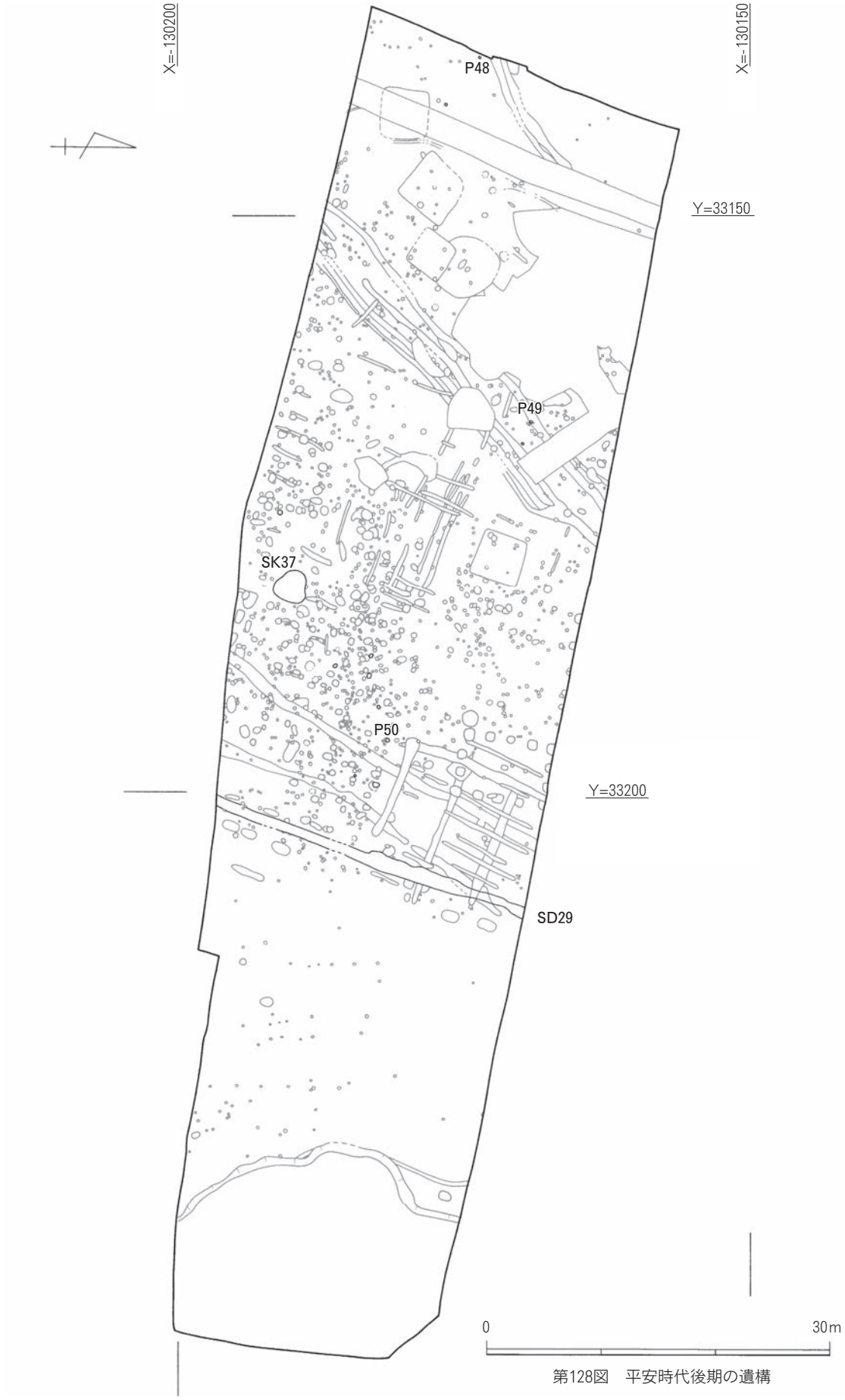


第126図　奈良時代の土器（10）



387～392 包含層出土瓦（２）

第127図　奈良時代の土器（11）



第128図　平安時代後期の遺構

６．平安時代後期の遺構と遺物

（１）概　　要

当該期の遺構・遺物は、奈良時代と比較すると、明らかに少ない。検出した遺構としては、柱穴・溝・土坑がある（第128図）。これらの遺構の分布は、調査区中央部から西端部にかけて散在する。

（２）柱　　穴

当該期の柱穴は、数穴に限られる。その分布も散在傾向にあり、これらの柱穴から建物を復元することはできなかった。以下、当該期の良好な資料が得られた柱穴に限り、報告する。

Ｐ48

検出状況　調査区西端中央部で検出した（第128図）。他の遺構との切り合い関係は認められない。

出土遺物　瓦器の椀（396）が出土している（第132図）。底部を中心に残存し、断面蒲鉾形の高台が貼り付けられている。暗文は観察できない。

時　　期　出土遺物から判断して、11世紀後半と考えられる。

Ｐ49（写真図版49）

検出状況　調査区中央北西部で検出した（第128図）。他の遺構との切り合い関係は認められない。

出土遺物　土師器の小皿（397）が出土している（写真図版49）。口縁部がわずかに残存する小片である。口縁部は１段の横ナデ調整により仕上げられている。

時　　期　出土遺物から判断して、11世紀後半～12世紀代と考えられる。

Ｐ50

検出状況　調査区中央部東側で検出した（第128図）。ＳＤ29の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している（第132図）。

土師器　椀・皿・甕が出土している。図化できたのは椀に限られる。椀は、394・395の２個体である。394も、395同様の高台を伴うものと考えられる。皿は、口縁部片が出土している。甕は、口縁部片と体部片が出土しており、体部片の外面には煤の付着が認められる。

須恵器　椀（393）が出土している。平高台を伴う椀の口縁部と考えられる。

時　　期　出土遺物から判断して、11世紀後半と考えられる。

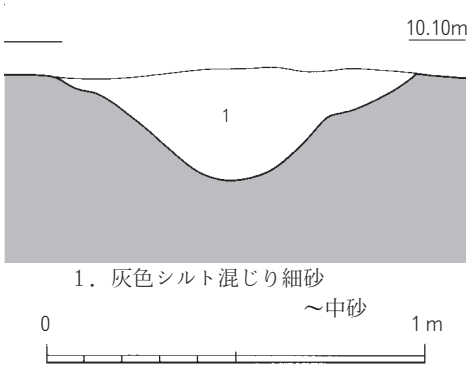
（３）溝

ＳＤ29（写真図版28）

検出状況　調査区中央部東端で検出した（第128図）。奈良時代のＳＢ15・畠７・畠８の東側に位置する。ほぼ南北方向に直線的にのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。また、ＳＢ14と畠９と切り合い関係にあり、ＳＢ14の柱穴および畠９の溝を切っている。

形状・規模　検出した長さは28.70ｍである。検出面における幅は60cm～1.52ｍである。横断面は緩

やかなＵ字形をなし、最深部における検出面からの深さは29cmである。底部の標高は、北端部で9.77ｍ、南端部で9.76ｍと一定している。



第129図　ＳＤ29

埋没状況　灰色シルト混じり細砂～中礫１層からなる（第129図）。層相から判断して、人為的に埋められた層と考えられる。

出土遺物　土師器の堝の体部片と、須恵器の椀の口縁部片が出土している。堝の外面には平行叩きがわずかに観察できる。いずれも、小片のため図化はできなかった。

時　　期　出土土器から判断して、平安時代後期（11世紀後半～12世紀）と考えられる。

（４）土　　坑

ＳＫ37（写真図版28・60）

検出状況　調査区中央部南側で検出した（第128図）。奈良時代のＳＢ08の北西、ＳＢ09の南西に位置する。他の遺構との明確な切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模　平面形はほぼ不整形な形態をなし（第130図）、その規模は南北方向で2.92ｍ、その直交方向で2.83ｍを測る。横断面は逆台形をなすが、その傾斜は東側に対しいて西側がかなり緩くなっている。最深部における検出面からの深さは97cmである。

埋没状況　３層からなる（第130図）。層相から判断して、いずれの層も人為的に埋められた層と考えられる。

時　　期　上層と下層から時期の異なる土器が出土している。

上層出土器　江戸時代後期の染付磁器が数点出土している。

下層出土器　土師器と須恵器が出土している（第132図）。

土師器　皿・杯・カマド・甕が出土している。

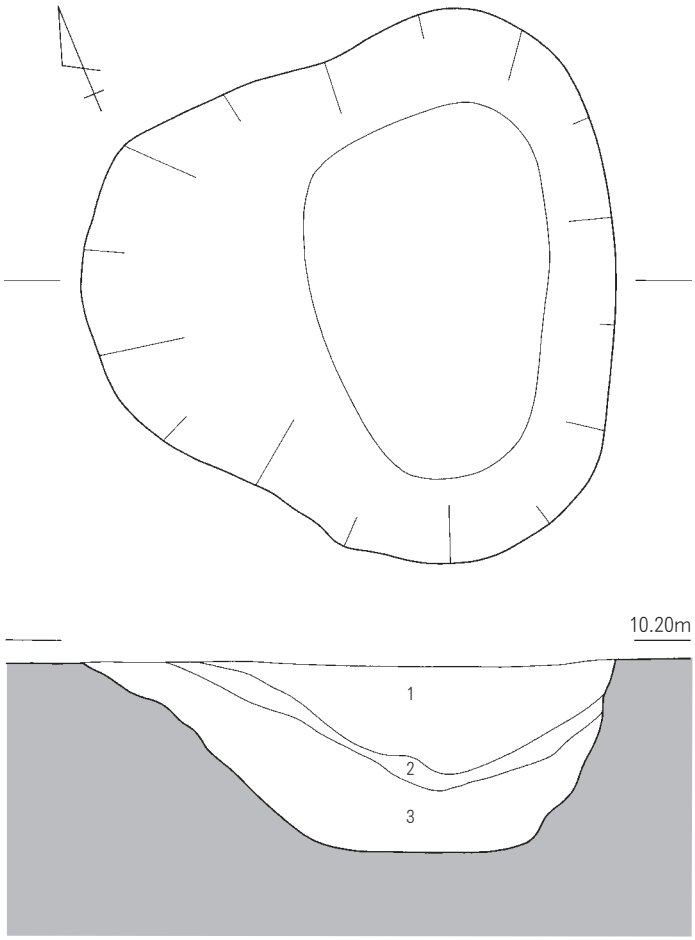
皿は、398と399の２個体を図化した。小型の皿であるが、両者は整形技法を異にする。398は底部の切り離しはヘラ切りによっているが、399は回転糸切りによっている。また、399の口縁端部には煤の付着が認められ、灯明皿として使用されていたものと考えられる。

この他、杯とカマドは口縁部片が、甕は口縁部片と体部片が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。

須恵器　杯Ａの底部が出土している。

製塩土器　焼塩壺が出土している。

時　　期　土師器の皿の形態から判断して、11世紀後半に掘削され、最終的に埋没したのは、江戸時代以降と考えられる。



１．灰黄色シルト質細砂～中砂
２．暗灰色シルト
３．灰黄色シルト質細砂混じり濃灰色シルト質細砂

0　2m

第130図　ＳＫ37

（５）その他（写真図版60・61）

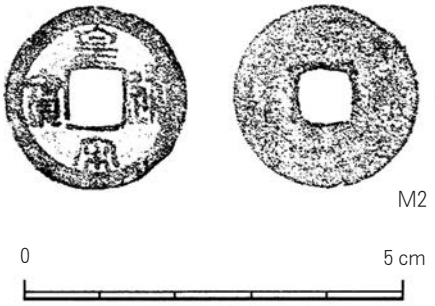
包含層出土土器　この他、包含層から当該期の土器および銅銭が出土しているので、ここで報告する。

土　　器　土師器と須恵器が出土している（第132図）。

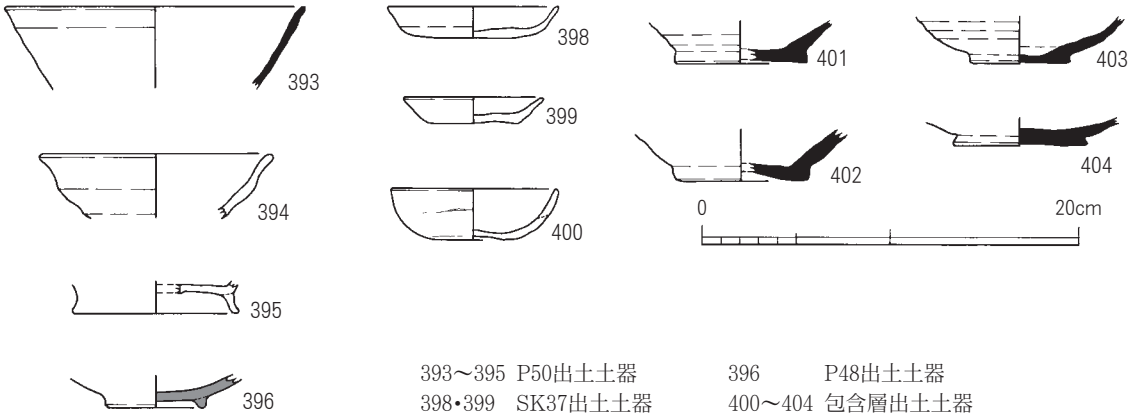
土 師 器　小皿（400）が出土している。全体的に手づくねにより整形され、最後に口縁部を中心に横ナデ調整により仕上げられている。粗い仕上げで、粘土の継ぎ目痕が認められる。外面全体に煤の付着が認められる。

須 恵 器　椀の底部（401～404）が出土している。402が時期的に古く位置付られ、底部はヘラにより切り離されている。他の３個体の回転糸切りと、製作技法も異にする。

銅　　銭　皇宗通宝（初鋳1038年）１点（Ｍ２）が出土している（第131図）。



第131図　出土銅銭



393～395 P50出土土器　　396　　P48出土土器
398・399　SK37出土土器　　400～404 包含層出土土器

第132図　平安時代後期の土器

第40表　平安時代以降の土器観察表

No.	種別	器種	遺構名	法量（cm）						残存状況	焼成	色調
				口径	頸径	最大径	底径	器高	高台高			
393	須恵器	椀	P50	15.60				4.35		口縁部1/8	良好	灰
394	土師器	椀	P50	12.00				3.35		口縁部1/10		灰黄褐～にぶい黄橙
395	土師器	椀	P50				8.80	1.80	1.00	底部1/9		黄灰～灰黄
396	瓦器	椀	P48				5.30	1.75	0.40	底部1/4		灰黄～黄灰
397	土師器	小皿	P49							口縁部わずか		浅黄橙～橙
398	土師器	小皿	SK37	8.90			6.85	1.70		口縁部1/12・底部1/3		にぶい黄橙
399	土師器	小皿	SK37	7.20			4.80	1.35		口縁部1/10・底部1/2		浅黄橙～橙
400	土師器	小皿	包含層	8.70			3.75	2.70		口縁部3/4・底部完存		灰白
401	須恵器	椀	包含層				7.00	2.30		底部1/3	良好	灰
402	須恵器	椀	包含層				7.00	2.70		底部1/3	やや不良	灰白
403	須恵器	椀	包含層				5.40	2.50		底部1/4	良好	灰白
404	須恵器	椀	包含層				7.10	1.50		底部完存	不良	灰白～にぶい黄橙

胎　　土	調　　整	備　　考	挿図	図版
	外面：回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	火襷痕あり。	132	－
0.5～1.5㎜大の長石・石英・チャート・雲母含む	外面：底部～体部ナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：口縁部横ナデ調整。	内面煤付着。	132	－
0.5～１㎜大の長石・石英・クサリレキ含む	外面：底部指オサエ・ナデ→高台回転ナデ調整。 内面：底部ナデ調整。体部回転ナデ調整。		132	－
１～２㎜大の長石・チャート含む	外面：ナデ調整。 内面：ナデ調整。	炭素の吸着不十分。	132	－
0.5～3.5㎜大の石英・長石・チャート多く含む	外面：底部ナデ→口縁部横ナデ調整。 内面：横ナデ調整。		－	49
0.5～１㎜大の長石・チャート・クサリレキ・雲母含む	外面：底部ヘラ切り→ナデ調整。口縁部横ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		132	60
0.5～１㎜大のクサリレキ・石英・長石含む	外面：底部回転糸切り。口縁部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	口縁部煤付着。	132	60
５㎜以下の石英・長石・チャート含む	外面：底部指オサエ・ナデ調整→口縁部横ナデ調整。 内面：底部～体部指オサエ・ナデ調整→口縁部横ナデ調整。	底部～口縁部外面煤付着。	132	60
	外面：底部回転糸切り。体部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		132	－
	外面：底部回転ヘラ切り。体部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。	底部火襷痕あり。	132	－
	外面：底部回転糸切り。体部回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		132	－
	外面：底部回転糸切り→回転ナデ調整。 内面：回転ナデ調整。		132	－

第４章　自然科学分析

第１節　北条遺跡出土須恵器の産地問題

三　辻　利　一（大阪大谷大学）

北条遺跡出土の奈良時代と推定される須恵器の蛍光Ｘ線分析の結果について報告する。

土器試料は表面を研磨したのち、タングステンカーバイド製の乳鉢の中で100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして10トンの高圧をかけてプレスし、内径20㎜、厚さ５㎜の錠剤試料を作成し、蛍光Ｘ線分析用の試料とした。

分析には理学電機製RIX2100（波長分散型）の装置を使用した。Ｘ線管球はRh管球（3.0kW）であり、使用条件は50kV、50mAである。この装置には50試料が同時に搭載できる自動試料交換器が連結されており、完全自動分析ができる装置である。

定量分析の標準試料には岩石標準試料JG-1が使用された。分析値はバックグラウンドを差し引いた正味のカウント数をJG-1の分析値で標準化した値で表示した。

今回分析した分析値は第41表にまとめられている。データ解析にはこれらの須恵器は地元、姫路の窯群の製品か、それとも、加古川市の札馬窯群の製品かを問う、２群間判別分析法が適用された。

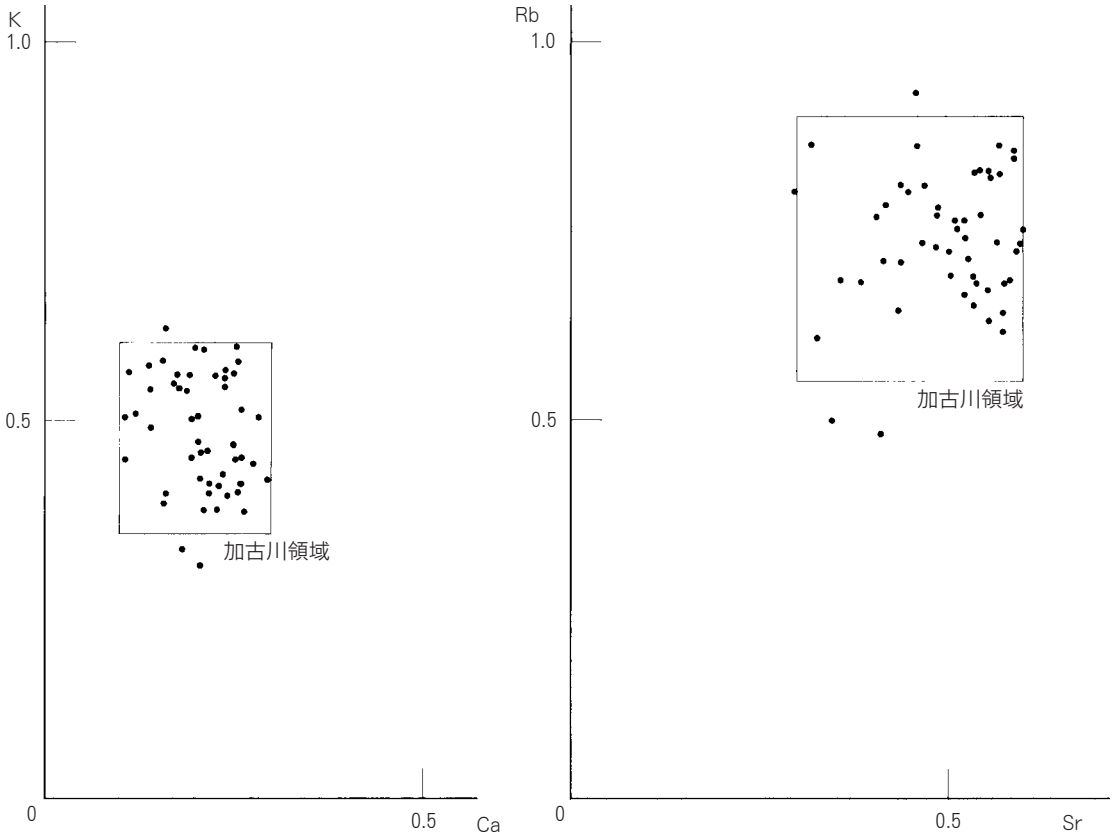
はじめに、母集団となる姫路窯群と札馬窯群の須恵器のK-Ca、Rb-Srの両分布図を比較した。札馬窯群の須恵器の化学特性から説明する。第133図には札馬窯群の中の札馬２・５号、札馬西の谷窯の須恵器の両分布図を示す。殆どの試料を包含するようにして、加古川領域を描いてある。もちろん、定性的な領域である。第134図には札馬窯群の中の白沢２・３号窯の須恵器の両分布図を示す。殆どの試料が加古川領域内に分布することがわかる。しかし、加古川領域内での分布ではとくに、Rb-Sr分布図で札馬２・５、西の谷窯の須恵器は加古川領域の右側に片寄って分布しているのに対して、白沢２・３号窯の須恵器は左下部分に偏在しており、両者の化学特性は必ずしも同じではないことがわかる。須恵器窯群内の個々の窯間にこのような小地域差があることが各地の窯群で観測されている。第135図には札馬窯群内の投松２・３・５号窯の須恵器の両分布図を示す。その分布は白沢２・３号窯の須恵器よりも、札馬２・５号窯、西の谷窯の須恵器の分布に類似する。いずれにしても、札馬窯群の各窯跡出土須恵器は加古川領域に分布しており、類似した化学特性をもつことがわかる。これに対して、姫路市の青山４号窯、青山いなり神社裏窯、桜峠１号窯の須恵器の両分布図を第136図に示す。両分布図で姫路群としてまとまることがわかる。そして、加古川群の須恵器に比べて、K、Rbが比較的多く、逆に、Ca、Srが比較的少ないことがわかる。その結果、両者は両分布図でずれて分布しており、その相互識別の可能性があることがわかる。そこで、K、Ca、Rb、Srの４因子を使用し、両者の２群間判別分析を試みた。その結果を第137図に示す。狭い重複領域があるももの、両者の相互識別は十分可能であることがわかる。

この判別図上に今回分析した北条遺跡出土須恵器をプロットした結果を第138図に示す。大部分の須恵器は加古川領域に分布し、地元、姫路市の製品ではなく、札馬窯群の製品である可能性が高いことを示している。No.８・15は地元産の可能性がある須恵器である。一方、不明領域に分布したNo.２・５・13の３点の須恵器は産地不明となった。北条遺跡出土須恵器のK-Ca、Rb-Sr分布図は第139図に示されている。第139図で産地不明となったNo.２・５・13の３点の試料は加古川領域からずれていることが

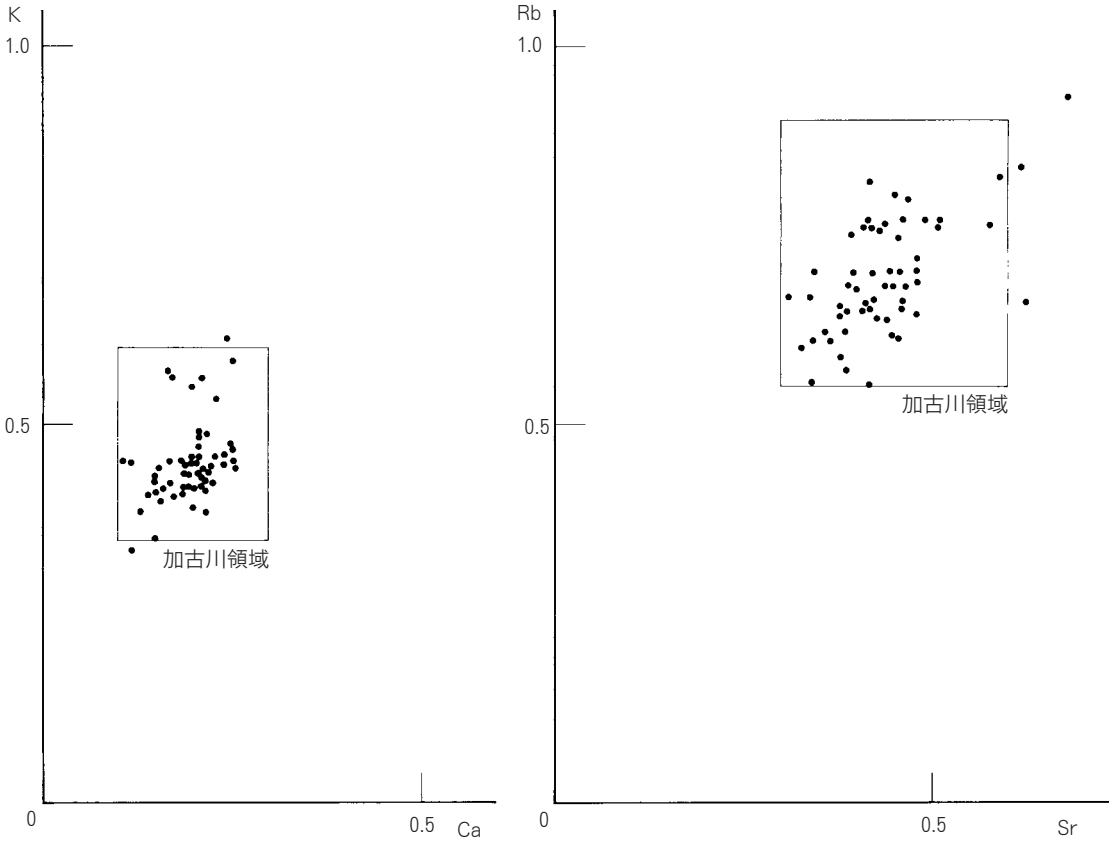
わかる。とくに、No. 2 ・13の 2 点はRb-Sr分布図で加古川領域を大きくずれて分布していることがわかる。この 2 点の試料にはFe量が多い点でも他の試料とは異なることも第41表からわかる。そして、大部分の試料は加古川領域に分布し、判別分析の結果が十分理解できることがわかる。なお、No. 8 ・15の 2 点の試料は両分布図で両領域が重複する領域に分布しており、その帰属の判断が難しい試料であることもわかる。しかし、明らかに化学特性が異なるNo. 2 ・13の試料を考慮に入れると、北条遺跡の奈良時代の須恵器は複数の生産地からの製品が混ざっていることは明らかである。No. 2 ・13の須恵器の形式や胎土の観察結果を加古川窯群産と推定された須恵器と比較してみることも必要であろう。

第41表　北条遺跡出土須恵器の分析データ

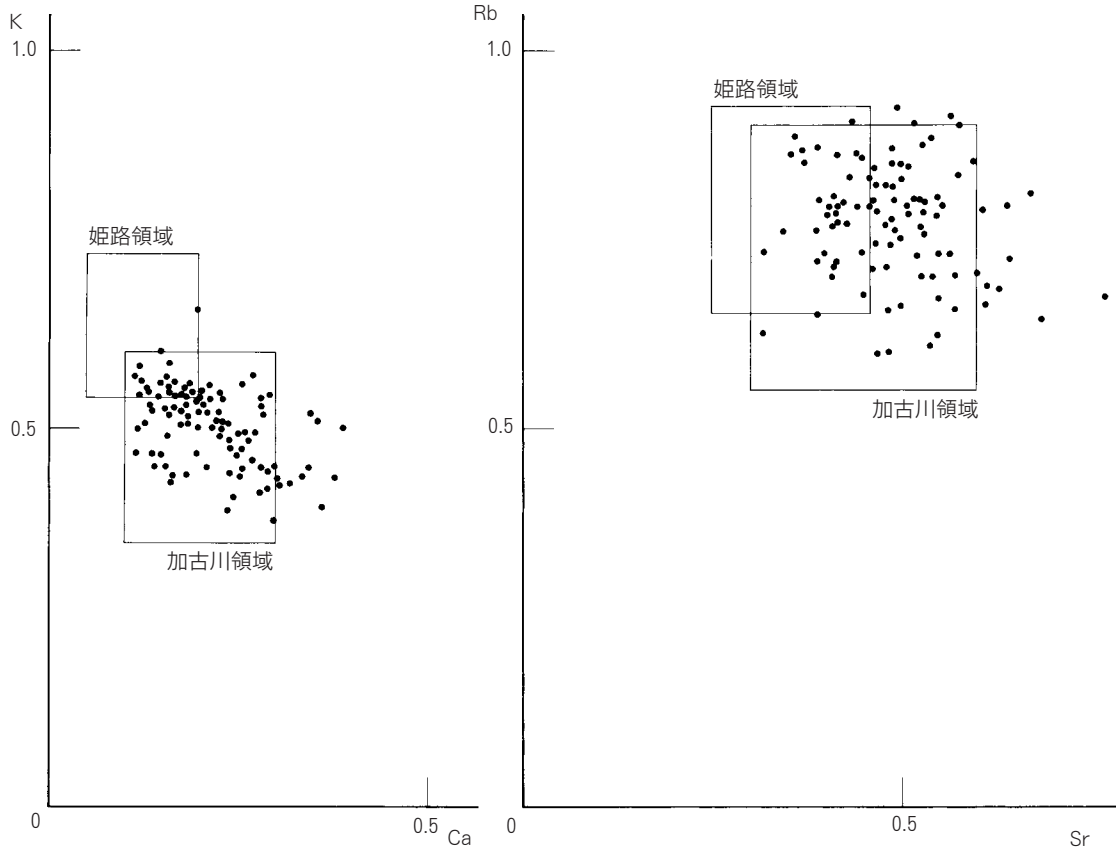
No.	報告No.	器　種	K	Ｃａ	Ｆｅ	Ｒｂ	Ｓｒ	Ｎａ
1	95	杯蓋	0.448	0.180	1.87	0.638	0.557	0.297
2	97	杯蓋	0.350	0.248	2.45	0.303	0.475	0.289
3	106	皿	0.573	0.207	1.44	0.926	0.498	0.223
4	108	稜椀蓋	0.533	0.177	2.00	0.748	0.384	0.157
5	117	壺	0.618	0.273	1.76	0.699	0.639	0.214
6	215	杯Ｂ	0.476	0.109	1.45	0.791	0.306	0.084
7	216	皿	0.548	0.233	1.26	0.858	0.552	0.208
8	268	杯Ａ	0.594	0.160	2.42	0.813	0.398	0.172
9	271	杯Ａ	0.502	0.078	1.71	0.654	0.318	0.219
10	316	壺	0.493	0.249	1.82	0.758	0.519	0.210
11	360	杯Ａ	0.440	0.128	1.93	0.694	0.350	0.181
12	361	杯蓋	0.577	0.181	1.23	0.824	0.513	0.172
13	375	壺	0.198	0.164	2.45	0.304	0.295	0.090
14	379	壺	0.467	0.188	1.53	0.675	0.495	0.145
15	380	高杯	0.559	0.138	1.67	0.779	0.356	0.186
16	381	甕	0.603	0.130	1.19	0.945	0.412	0.187



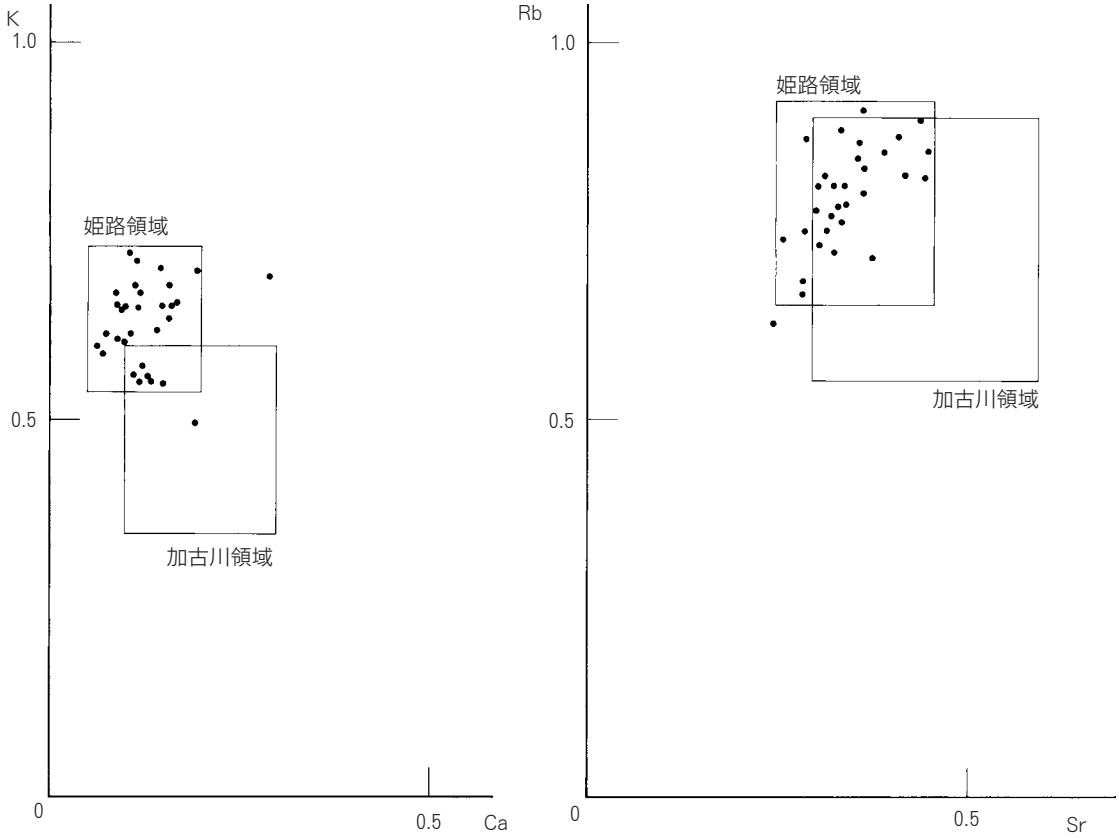
第133図　札馬窯群の須恵器の両分布図



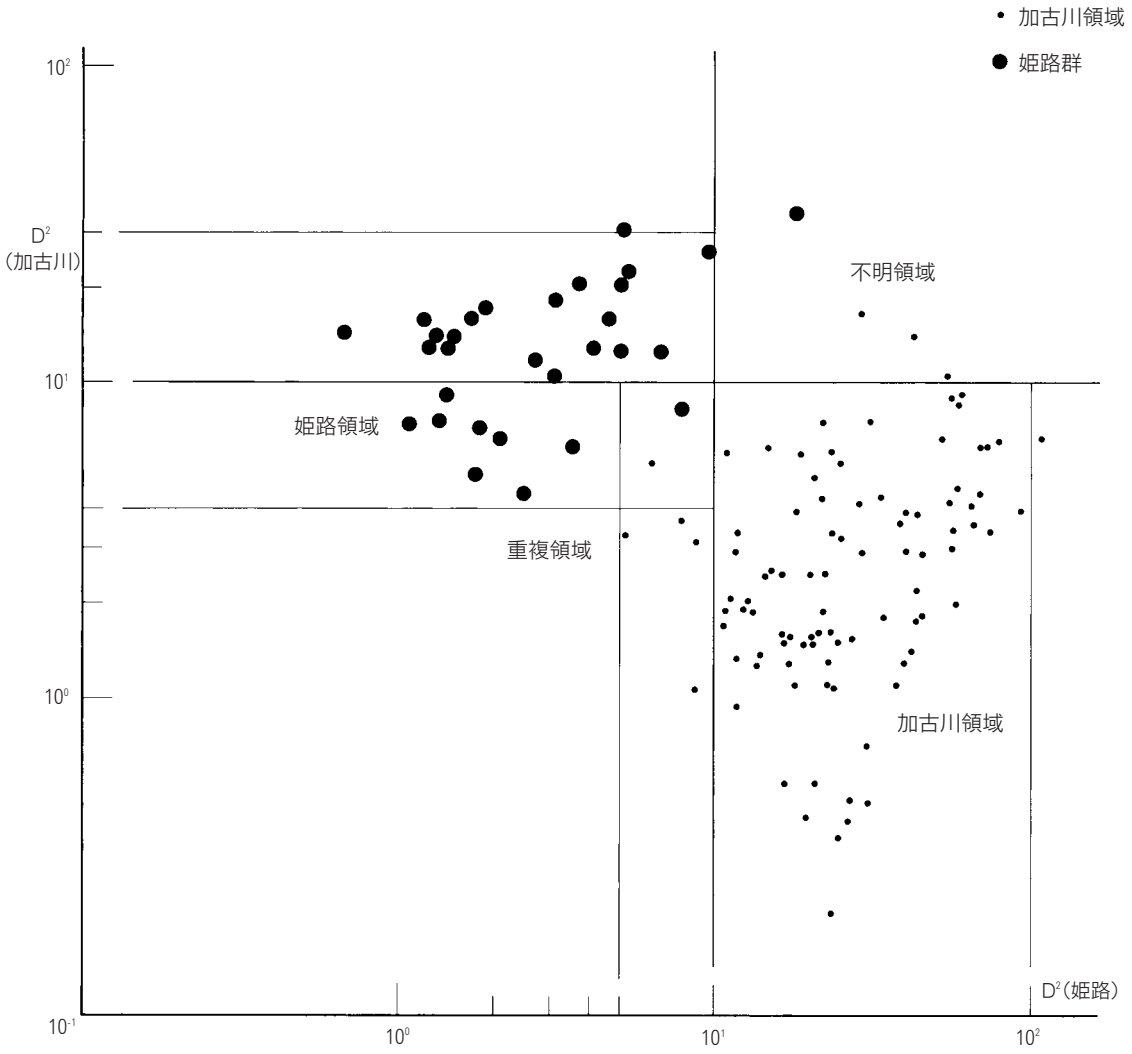
第134図　白沢２・３号窯の須恵器の両分布図



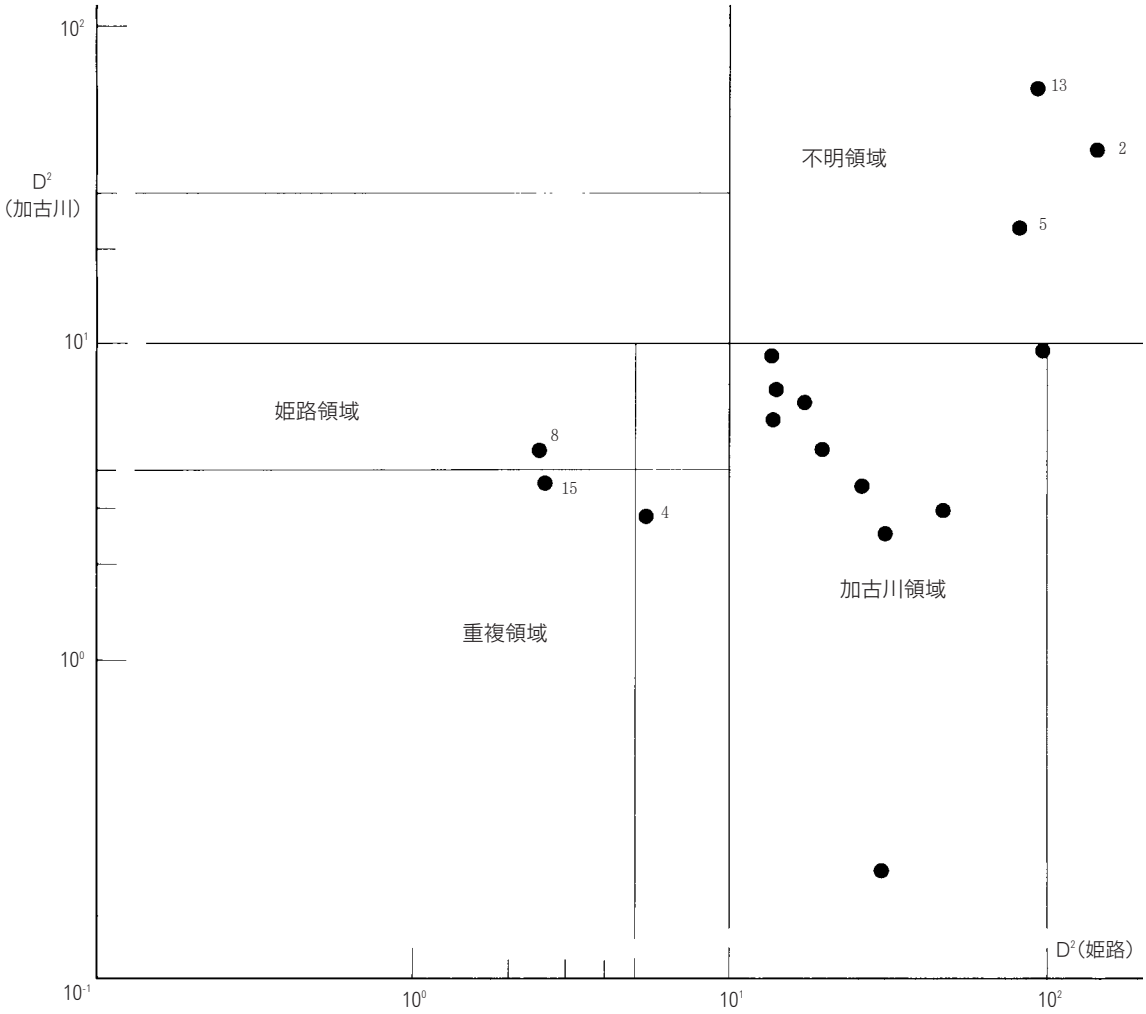
第135図　投松２・３・５号窯の須恵器の両分布図



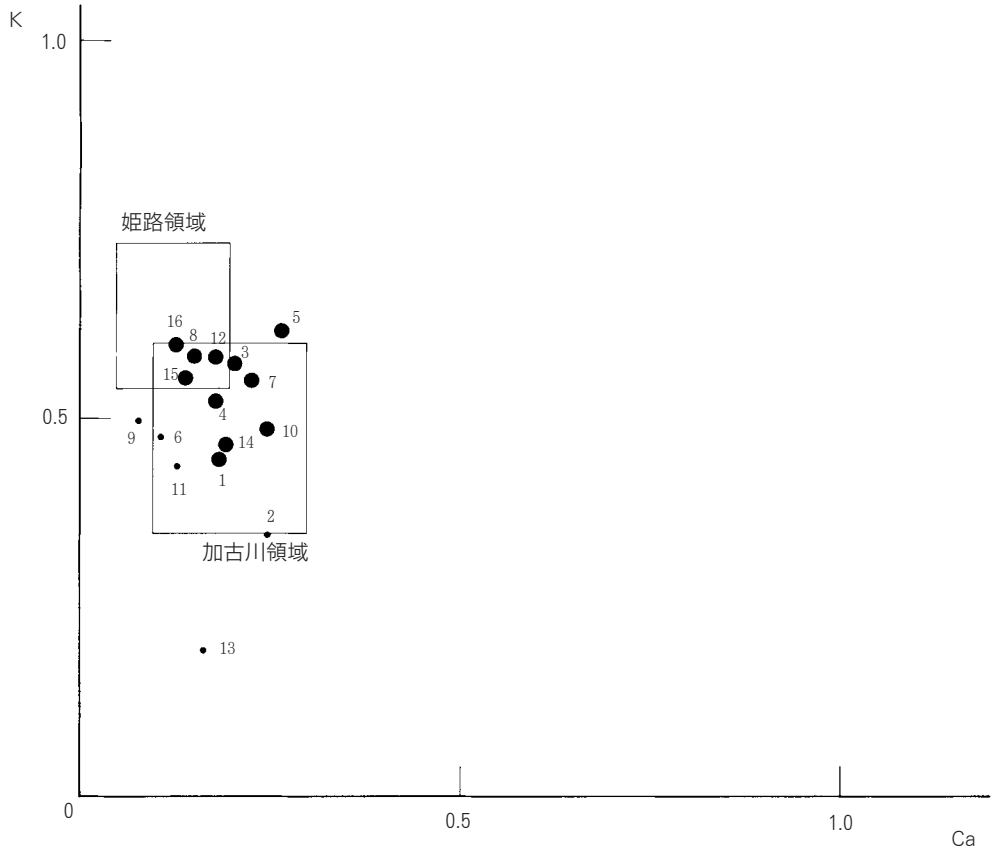
第136図　姫路群の須恵器の両分布図

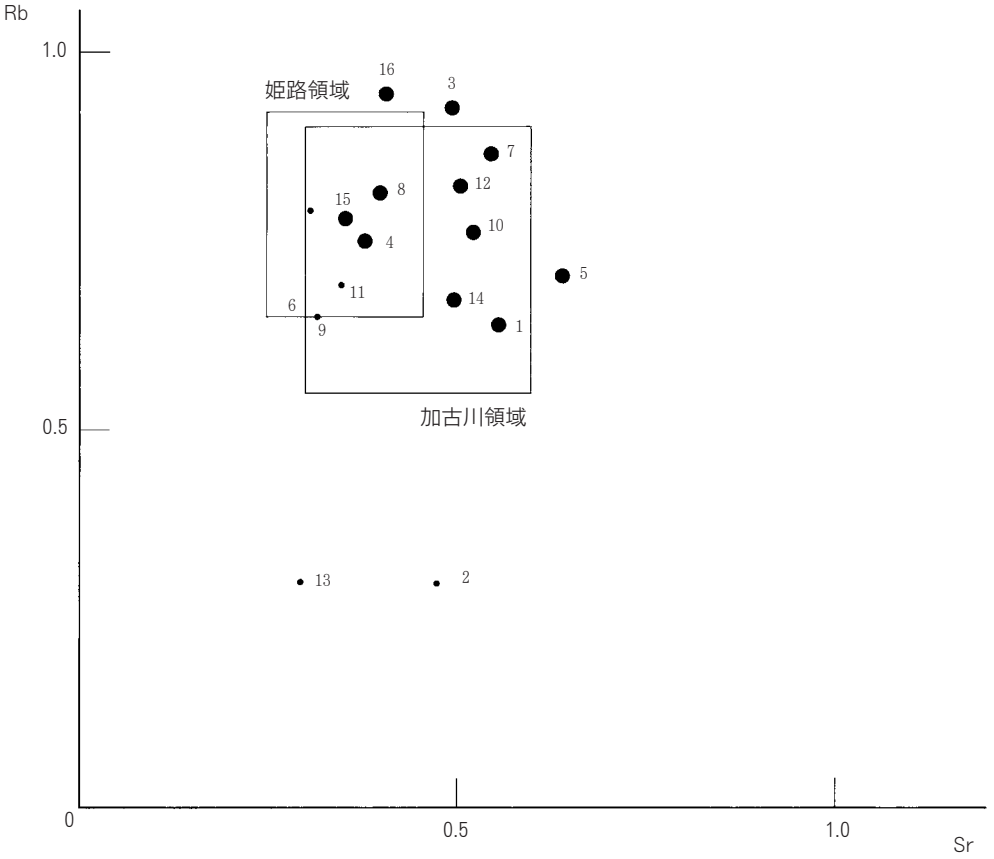


第137図　加古川群と姫路群の相互識別（Ｋ・Ｃａ・Ｒｂ・Ｓｒ）



第138図　北条遺跡出土須恵器の産地推定（Ｋ・Ｃａ・Ｒｂ・Ｓｒ）





第139図　北条遺跡出土須恵器の両分布図

第２節　北条遺跡出土サヌカイトの産地推定

竹　原　弘　展（パレオ・ラボ）

１．はじめに

姫路市北条に所在する北条遺跡は、集落跡で各時代の遺構・遺物が出土している。ここでは、微凹地最下層より出土した縄文時代晩期から弥生時代前期と考えられるサヌカイト資料について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

２．試料と方法

分析対象資料は北条遺跡より出土したサヌカイト11点である。試料は風化層に覆われていたため、一部分をサンドブラストを用いて新鮮面を表出させ、測定箇所とした。

分析装置は、（株）セイコーインスツルメンツ社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2001を使用した。装置の仕様は、X線管はRhターゲット、X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。測定条件は、測定時間240sec、照射径10㎜、電流3～4μA、電圧50kV、試料室内雰囲気真空に設定した。

産地推定には、黒曜石産地推定法において用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法（例えば望月2004）を、分析対象をサヌカイトに置き換えて適用した。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）とルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計７元素のX線強度（cps；count per second）について、以下に示す指標値を計算する。

１）.Rb分率=Rb強度×100/（Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度）

２）.Sr分率=Sr強度×100/（Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度）

３）.Mn強度×100/Fe強度

４）.log（Fe強度/K強度）

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図（横軸Rb分率－縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率－縦軸log（Fe強度/K強度）の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定するものである。

原石試料も、採取原石を割って新鮮な面を表出させた上で産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第42表に各原石採取地とそれぞれの試料点数を示す。

第42表　原石採取地と判別群名称

エリア	判別群	原石採取地（試料点数）
二上山	春日山	春日山みかん畑内（10）
讃岐	国分台１	自衛隊演習場付近（５）、神谷神社前（13）、高産霊神社谷（12）、国分台下みかん畑（５）、蓮光寺（10）
	国分台２	
	赤子谷･法印谷	赤子谷第1地点（５）、赤子谷第２地点（５）、法印谷（10）
	金山	北峰道路脇（10）、金山南麓（10）
	城山	城山南側（９）
	雄山・雌山	雄山（５）、雌山（５）
	双子山	双子山南嶺（10）

３．分析結果

第140図および第141図に、サヌカイト原石の判別図と北条遺跡出土試料をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

判別図は、讃岐エリアの原石は国分台、雄山･城山以外は非常に近接しており重複部分も多く、明確な区別は難しい。しかし、二上山エリアの原石と讃岐エリアの原石は明確にプロット位置が異なり、十分に区別可能である。

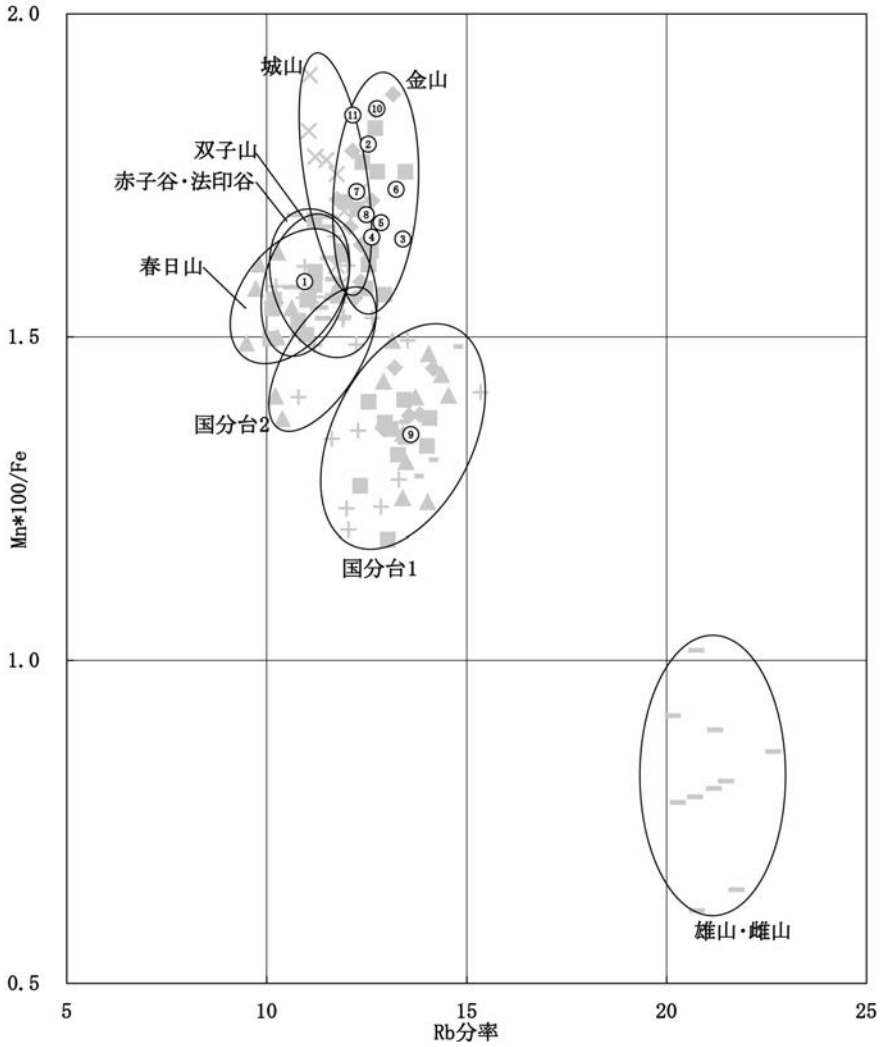
北条遺跡出土試料は、№1が二上山春日山、№９が国分台１、それ以外９点が金山の範囲内に第140図・第141図ともプロットされた。産地推定結果を第43表に示す。

第43表　産地推定結果一覧

分析№	判　別　群	エ　リ　ア
1	春日山	二上山
2	金山	讃岐
3	金山	讃岐
4	金山	讃岐
5	金山	讃岐
6	金山	讃岐
7	金山	讃岐
8	金山	讃岐
9	国分台１	讃岐
10	金山	讃岐
11	金山	讃岐

４．終わりに

北条遺跡より出土したサヌカイトについて、蛍光Ｘ線分析を用いた判別図法による産地推定を行った結果、11点の資料のうち、分析№１の１点が二上山、その他10点は讃岐の可能性が高いと推定された。



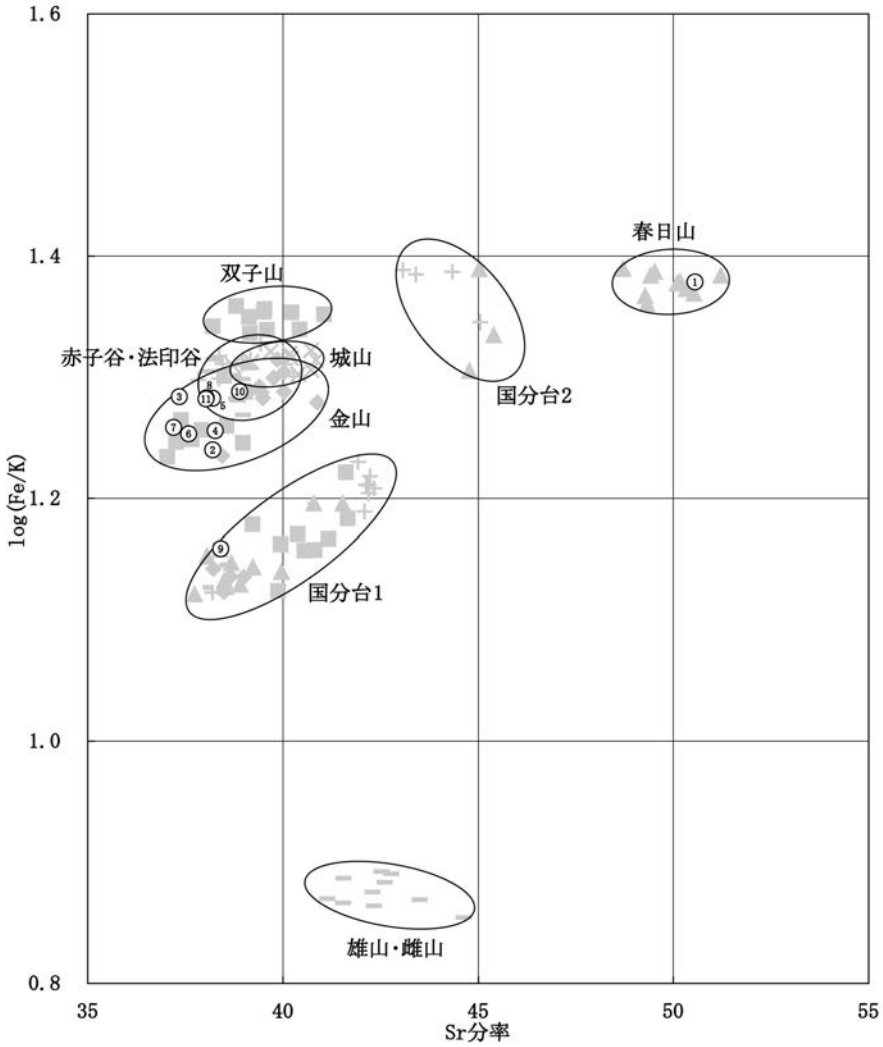
第140図　北条遺跡出土サヌカイト判別図（１）

謝　　辞

分析にあたっては、沼津工業高等専門学校望月明彦氏より便宜を図っていただいた。記して謝意を表します。

引用文献・参考文献

望月明彦（2004）用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定．かながわ考古学財団調査報告167　用田大河内遺跡、511-517、財団法人　かながわ考古学財団



第141図　北条遺跡出土サヌカイト判別図（２）

第３節　石器の石材同定

藤　根　　久・中　村　賢太郎（パレオ・ラボ）

１．はじめに

北条遺跡は、兵庫県姫路市北条に所在する主に奈良時代から平安時代にかけての遺構・遺物からなる。調査では、縄文時代晩期の石棒や縄文時代の敲石、奈良時代の砥石などが出土した。

ここでは、これら石器について肉眼および実体顕微鏡観察による石材の同定を行い、周辺地域の地質との比較を行い、石材産地の状況について考察した。

２．試料と方法

試料は、石棒１点、敲石１点、砥石１点、不明石製品１点の合計５点である（第44表・巻頭図版８）。

各石器は、肉眼観察および実体顕微鏡観察により石材を同定した。

第44表　石器の詳細と石材結果

報告№	遺　　構	用　途	時代	岩石名
Ｓ１	微凹地	石棒	縄文時代晩期	結晶片岩
Ｓ２	微凹地	砥石	奈良時代以降	砂質シルト岩
Ｓ３	ＳＫ06	敲石	縄文時代	花崗閃緑岩
Ｓ４	ＳＨ02	不明	古墳時代初頭	流紋岩
Ｓ５	ＳＢ06－Ｐ3	砥石	奈良時代	流紋岩

３．結果および考察

各石器の石材の特徴は以下の通りである。

報告№Ｓ１：主に雲母（黒雲母または白雲母）と石英からなる縞状で片理の著しい結晶片岩である。このタイプの結晶片岩は、領家変成帯で黒雲母帯と言われている地域の代表的な変成岩である（橋本、1993）。

報告№Ｓ２：200μm以下の灰色粒子を含むシルトサイズの粒子から構成される砂質シルト岩である。なお、量的には少ないが黒色の有色鉱物が含まれていた。

報告№Ｓ３：長石、黒雲母、長柱状の黒色結晶（角閃石と思われる）、透明の石英からなる等粒状組織を示す花崗閃緑岩である。全体的に白色の長石の占める割合が高く、次いで黒雲母、石英、角閃石の順であった。

報告№Ｓ４：１㎜前後の白色の斑晶（長石類）および斑晶の抜け跡が見られる流紋岩である。なお、流理構造を反映して鉄分と思われる層が縞状に見られた。その他の鉱物は実体顕微鏡観察において認められなかった。

報告№Ｓ５：１㎜前後の白色の斑晶（長石類）および斑晶の抜け跡が見られる流紋岩である。なお、流理構造は認められない。また、その他の鉱物は実体顕微鏡観察において認められなかった。

結晶片岩は、三郡変成帯、領家変成帯あるいは三波川変成帯に分布する岩石である。三郡変成岩類は、

福井県西端から近畿北部を経て中国地方に続く細長い地帯に分布する（第144図）。領家変成岩類は、中央構造線の北側に接して分布し、奈良盆地東側の山地や淡路島南部など部分的に見られる（第142図）。また、三波川変成岩類は中央構造線の南側に接して帯状に分布する（第142図）。この結晶片岩は、遺跡からやや離れた場所から持ち込まれたものと考えられる。

砂質シルト岩は、周辺地域において上部古第三紀－下部中生代の堆積岩類（相生層群）として分布する（第142図・第143図）。

花崗閃緑岩は、後期白亜紀－古第三紀の花崗岩類として分布し（第142図・第143図）、近接地では隣接する太子町の城山などに分布する。

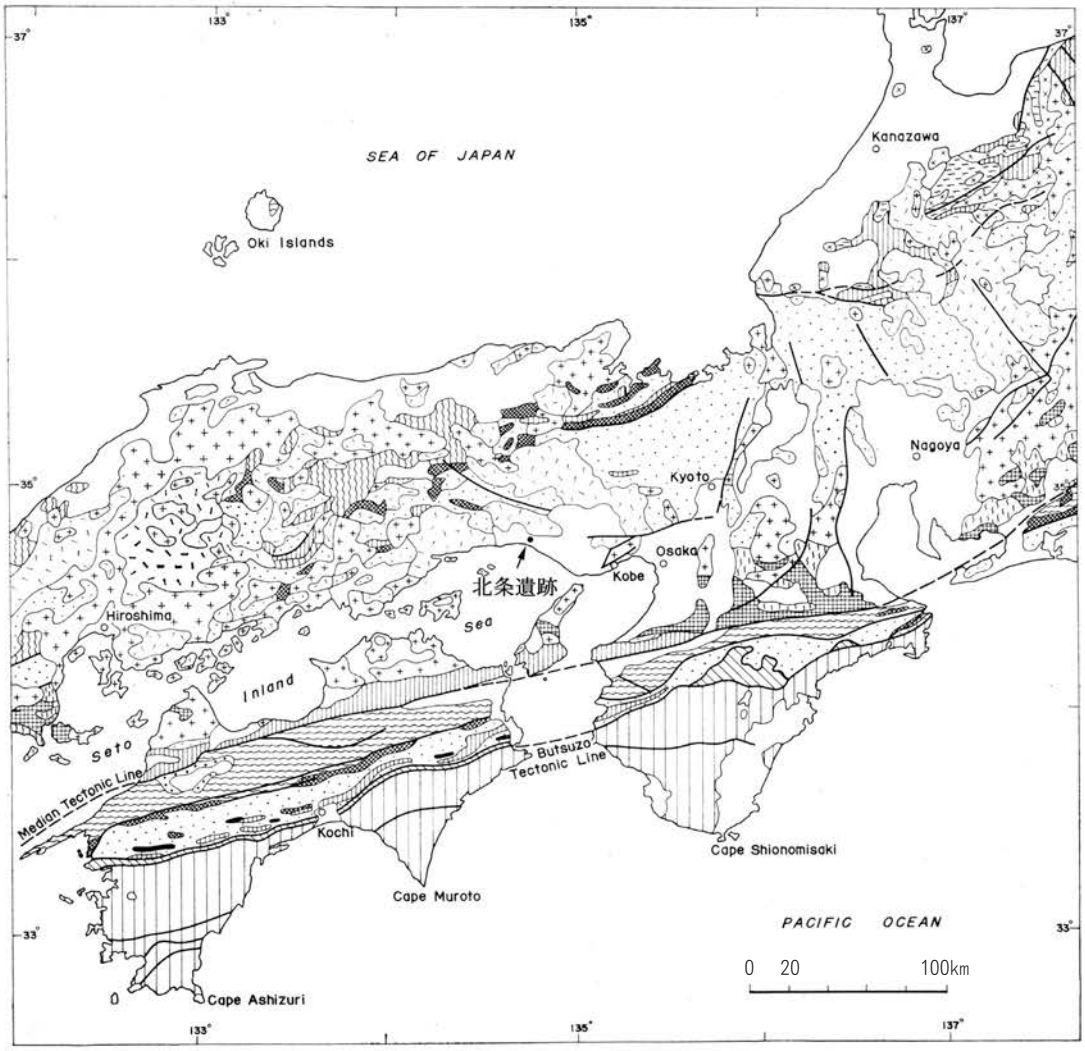
流紋岩は、遺跡周辺の白亜紀－古第三紀の火山岩類として広く分布する岩石である（第142図・第143図）。

〔引用文献〕

GEOLOGICAL SURVEY OF JAPAN(1977)GEOLOGY AND MINERAL RESOURCES OF JAPAN. 430p.

橋本光男（1993）日本の変成岩．159p.岩波書店

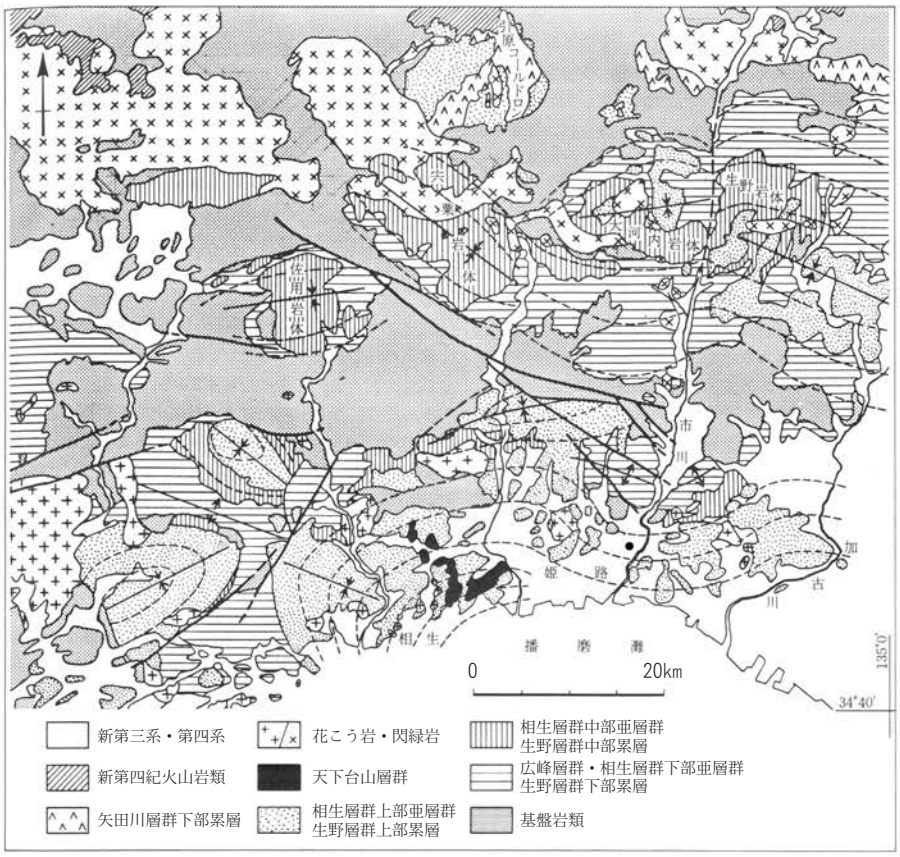
日本の地質『近畿地方』編集委員会編（1992）日本の地質6近畿地方．297p.共立出版



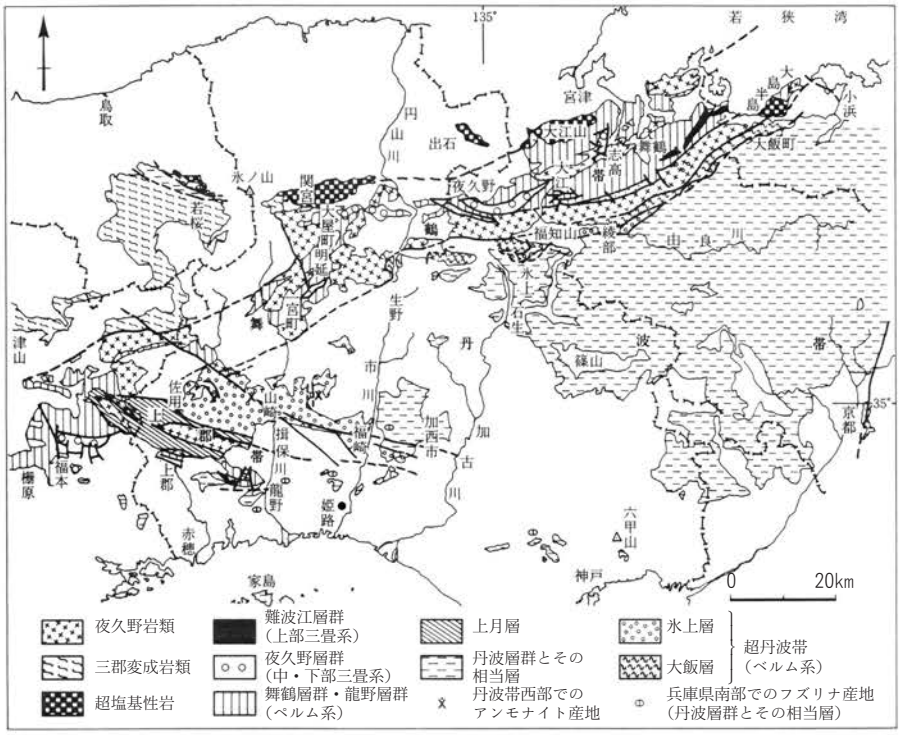
凡例

- 新第三紀―第四紀　堆積岩類、火成岩類ほか
- 古第三紀　堆積岩類
- 上部中生代―下部第三紀　堆積岩類
- 白亜紀―古第三紀　火山岩類
- 後期白亜紀―古第三紀　花崗岩類
- 前期白亜紀―花崗岩類（領家花崗岩）
- 中生代　堆積岩類
- 最上部古第三紀―中部中生代　堆積岩類
- 上部古第三紀―下部中生代　堆積岩類
- 前期中生代　花崗岩類（船津花崗岩）
- 内帯の高圧変成岩（三都編成帯）
- 外帯の高圧変成岩（三波編成帯）
- 低圧変成岩（飛騨変成帯）
- 低圧変成岩（領家変成帯）
- 古第三紀―中生代　塩基性岩と超塩基性岩
- シルル紀―デボン紀の堆積岩類、以前の花崗岩と変成岩類
- 主な断層または構造線

第142図　南西日本の概略地質図（GEOLOGICAL　SURVEY　OF　JAPAN（1977）に修正・加筆）



第143図　近畿南西部の地質図（●：北条遺跡、日本の地質『近畿地方』編集委員会編、1992より引用）



第144図　舞鶴帯・上郡帯および周辺の地質図
（●：北条遺跡、日本の地質『近畿地方』編集委員会編、1992より引用）

第４節　北条遺跡から出土した大型植物化石

藤　根　　久（パレオ・ラボ）

１．はじめに

北条遺跡は、兵庫県姫路市北条に所在する主に奈良時代から平安時代にかけての遺構・遺物からなる。ここでは、古植生や栽培･利用植物を明らかにする一端として、縄文時代晩期から平安時代にかけて堆積した河道状の微凹地および奈良時代の井戸内から得られた大型植物遺体について検討を行った。

なお、同定は、千葉大学園芸学部の百原　新准教授にご指導いただきました。

２．試料と方法

試料は、縄文時代晩期から弥生時代前期に堆積した河道状の微凹地内灰白色シルト層、灰色シルト層と奈良時代の井戸内下層試料の各試料である。大型植物遺体は、実体顕微鏡下で同定および計数を行った。

３．結果および考察

第45表に各遺構、各層位から検出された大型植物遺体の一覧表を示す。

第45表　大型植物化石一覧表（数字は個数、()内は半分ないし破片の数）

分類群名・部位＼遺構・層位名			井戸（ＳＥ01）	微凹地	微凹地	微凹地
			下　層	灰色シルト	灰白色シルト	灰色シルト
ヤマモモ科	ヤマモモ	核			4	
ブナ科	コナラ属	果実		(1)	17	
バラ科	ウメ	核				2
	モモ	核				6(13)
	サクラ属	核				4(2)
ミカン科	サンショウ	果実		30(1)		
ブドウ科	ブドウ属	種子	3	11		
	木本不明	芽			58	
ヒルムシロ科	ヒルムシロ属	果実	2			
イネ科	イネ	炭化胚乳	1	1	2	
	コムギ	炭化胚乳		2	1	
ミクリ科	ミクリ属	果実	7			
カヤツリグサ科	ホタルイ属	果実			1	
クワ科	カナムグラ	果実		1	1	
タデ科	イヌタデ	果実			1	
	ホントクタデ	果実			1	
	タデ屬	果実			4(5)	
マメ科	マメ科不明	種子	(1)			
ブドウ科	ノブドウ	種子		6(1)		
ウリ科	メロン仲間	種子			6(1)	
	ヒョウタン仲間	種子	12(2)			16(12)
	スズメウリ	種子			89(9)	
	キカラスウリ	種子			2	1
	トウガン	種子			1	
不明	不明	種子	1	2	2	
	不明	－			2	
	虫えい			1		

奈良時代井戸内下層からは、ブドウ属種子、ヒルムシロ属果実、イネ胚乳、マメ科種子、ミクリ属果実、ヒョウタン仲間種子、不明種子が検出された。このうち食用として可能な植物分類群は、イネ胚乳、マメ科種子、ヒョウタン仲間種子である。なお、ミクリ属果実やヒルムシロ属果実が特徴的に検出されていることから、浅い池あるいは沼地的環境が成立していたものと考えられる。

一方、縄文時代晩期から弥生時代前期に堆積した河道状の微凹地内下層試料では、ヤマモモ核、コナラ属果実、ウメ核、モモ核、サクラ属核、サンショウ果実、ブドウ属種子、イネ胚乳、コムギ胚乳、ホタルイ属果実、カナムグラ果実、イヌタデ果実、ホントクタデ果実、タデ属果実、ノブドウ種子、メロン仲間種子、ヒョウタン仲間種子、スズメウリ種子、キカラスウリ種子、トウガン種子などである。このうち食用として可能な植物分類群は、ヤマモモ核、コナラ属果実、ウメ核、モモ核、サクラ属核、サンショウ果実、ブドウ属種子、コムギ胚乳、イネ胚乳、メロン仲間種子、ヒョウタン仲間種子、トウガン種子である。なお、木本類の芽やスズメウリ種子が多産し、その他コナラ属果実も多いことから、近辺には樹木が生えつる性植物のスズキウリなどが生育していたことが推定される。

４．主な大型植物化石の形態記載

（１）ヤマモモ　*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.　核

灰～黄褐色で長さ８㎜程度の卵円形や広倒卵形。表面には短毛が密生する。果実は６月に熟し、球形で径1.5-2.0cm、赤く熟して食べられる。

（２）コナラ属　*Quercus*　果実

果実は、いずれも破片であり、果実の先端が欠損している。長さ8-10㎜前後である。

（３）ウメ　*Prunus mume*（Sieb.）Sieb. et Zucc.　核

側面観は楕円形、上面観は両凸レンズ形。下端に臍があり、一方の側面には縫合線が発達する。表面には小さく、深い穴が散在する。長さ16～17㎜程度である。

（４）モモ　*Prunus persica* Batsch　核

側面観は卵形、上面観は両凸レンズ形。下端に臍があり、一方の側面には縫合線が発達する。表面には不規則に流れるような溝と穴がある。長さ21～30㎜程度である。完形核は少なく、多くは破片であるが、一部の核はげっ歯類による食害を受けている。

（５）サクラ属　*Prunus*　核

核は灰褐色で楕円形。一方の側面には縫合線がある。長さ13～16㎜程度である。

（６）サンショウ　*Zanthoxylum piperitum*（Linn.）DC.　果実

種子は黒色で表面には細かい網目紋があり、一方の側面には短い臍がある。一部には外果皮が付く。

（７）ブドウ属　*Vitis*　種子

側面観は卵形、上面観は楕円形。背面には匙状の臍があり、腹面には穴が２つある。長さ４㎜弱である。

（８）ヒルムシロ属　*Potamogeton*　種子

淡褐色の長さ2.5㎜程度の扁平な円形状を呈し、周囲に溝が見られる。池や沼に生える多年草である。

（９）イネ　*Oryza sativa* Linn.　炭化胚乳

長さ４-5.5㎜前後である。

（10）コムギ　*Triticum aestivum* L.　炭化胚乳

長さ３㎜程度の卵形で、中央に条線が見られ、かつ着点が残る。

（11）ミクリ属　*Sparganium*　果実

褐色の先端に棘条の突起が見られる。浅い池などに生える多年草である。

（12）ホタルイ属　*Scirpus*　果実

黒色で表面に鱗片状の文様がある。山地や平地の湿地や池沼畔などに普通に生え、水田雑草としても生える。

（13）カナムグラ　*Humulus japonicus*　Sieb.et Zucc　果実

破片であるが、淡褐色の直径２㎜弱の球状を呈す。人里近くに生える一年生のつる草である。

（14）イヌタデ　*Persicaria longiseta*　（De Bruyu）Kitag.　果実

黒色で滑らかな表面で光沢がある。稜線をもつ。道ばたや原野に多い一年草である。

（15）タデ属　*Polygonum*　果実

黒色で網目状の微細構造を呈する。稜線をもつ。一年草または多年層である。

（16）マメ科　*Leguminosae*　炭化種子

全体の1/4程度の破片であるが、幅5.0㎜弱であることからササゲ属の可能性が考えられる。

（17）ノブドウ　*Ampelopsis brevipedunculata*（Maxim.）Trautv.　種子

種子は灰褐色ないし黒灰色で背面に棍棒状の臍があり、腹面には穴が2つある。なかば木性つるで、山野に普通に生える。

（18）メロン仲間　*Cucunis melo* Linn.　種子

６粒検出されているが、藤下（1984）による6.1～8.0㎜の中粒種子（マクワ・シロウリ型）が４粒と8.1㎜以上の大粒種子（モモルディカメロン型）が２粒検出された。

（19）ヒョウタン仲間　*Lagenaria siceraria* Standl.　種子

最大径８cm、最大壁厚７㎜の破片を含む。No.28は、最大径13cm、最大壁厚13㎜の破片を含む。

（20）スズメウリ　*Melothria japonica*（Thunb.）Maxim.　種子

淡褐色の長さ６㎜、幅4㎜の中央部が窪んだ扁平な皮針形を呈する。水辺や平地のやや湿ったところに生えるつる性植物である。

（21）キカラスウリ　*Trichosanthes kirilowii* Maxim. var. japonica（Miq.）Kitam.　種子

長さ11㎜、幅７㎜の褐色の中央がやや膨らんだ皮針形である。周囲に一条の溝が巡る。

（22）トウガン　*Benincasa hispida* Cogn.　種子

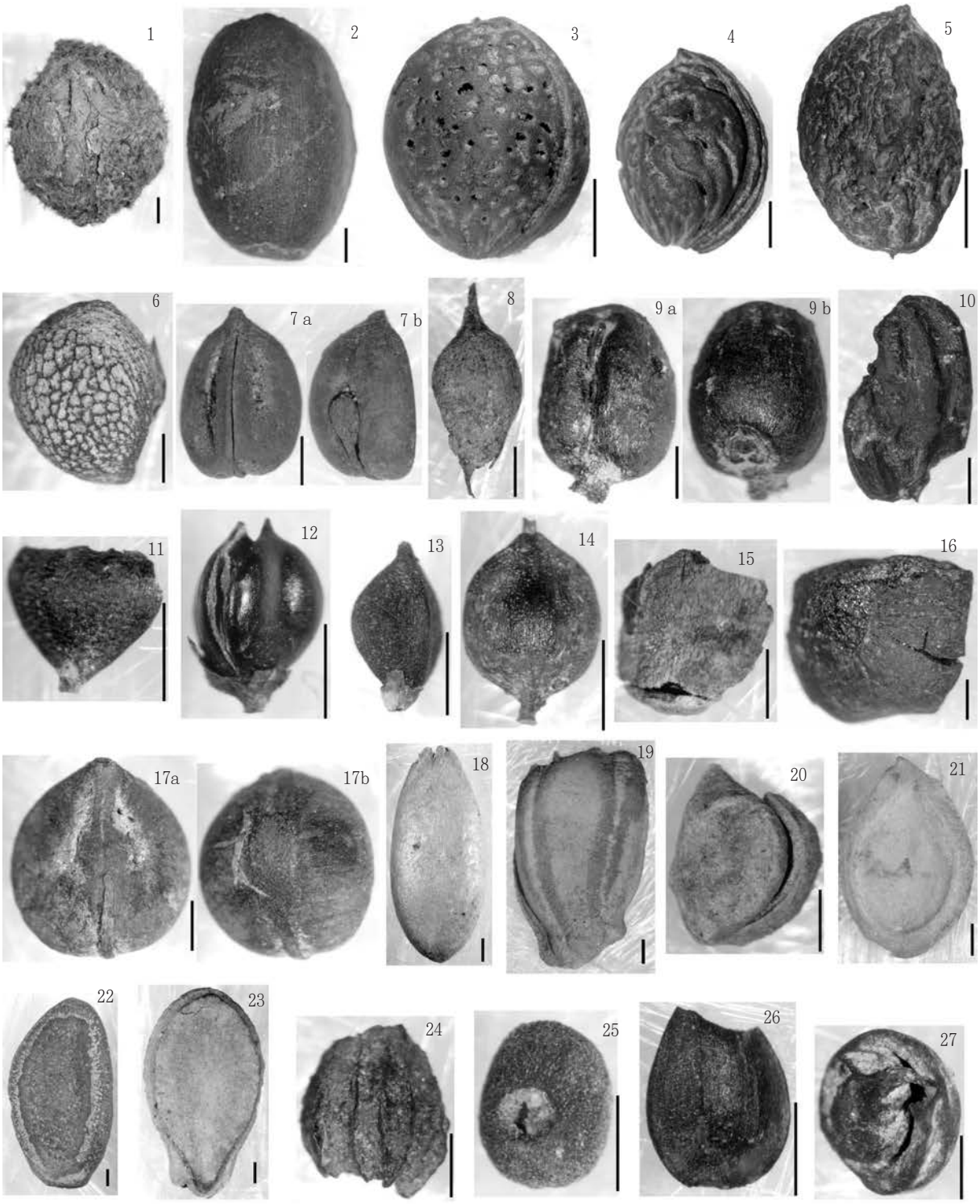
淡褐色の長さ10㎜、幅５㎜、1.5㎜程度の厚さが一定の扁平な皮針形である。周囲縁辺部には一条の溝が巡る。

（23）虫えい（虫こぶ）

黒色で大きさや外形は様々である。内部の中心には空隙があり、断面は果実や種子のような構造は見られず、均質である。

〔引用文献〕

藤下典之（1984）出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法．古文化財に関する保存科学と人文・自然科学 ― 総括報告書,638-654,同朋社.



１．ヤマモモ核（SE01）　２．コナラ属果実（SE01）　３．ウメ核（SE01）　４．モモ核（SE01）　５．サクラ属核（SE01）
６．サンショウ内果皮（SE01）　７．ブドウ属種子（微凹地）　８．ミクリ属果実（微凹地）　9a-9b．コムギ炭化胚乳（SE01）
10．イネ炭化胚乳（微凹地）　11．ホタルイ属果実（SE01）　12．イヌタデ果実（SE01）　13．ホントクタデ果実（SE01）
14．タデ属果実（SE01）　15．カナムグラ果実（SE01）　16．マメ科種子（微凹地）　17a-17b．ノブドウ種子（SE01）
18．メロン仲間種子（SE01）　19．ヒョウタン仲間種子（微凹地）　20．ヒルムシロ属果実（微凹地）　21．スズメウリ種子（SE01）
22．キカラスウリ種子（SE01）　23．トウガン種子（SE01）　24．不明種子（微凹地）　25．不明種子（SE01）　26．不明種子（SE01）
27．不明種子（SE01）

第145図　出土大型植物遺体（スケール：３－５が５㎜、その他１㎜）

第５節　北条遺跡住居跡カマド内出土炭化材の樹種同定

藤　根　　久・佐々木　由　香（パレオ・ラボ）

１．はじめに

北条遺跡は、姫路市北条、JR姫路駅の東約600mに位置する。調査では、主に奈良時代～平安時代の遺構・遺物が検出されている。

ここでは、奈良時代の竪穴住居跡SH05のカマド内から出土した炭化材について、その樹種を同定し、燃料材の樹種について検討した。

２．試料と方法

検討した炭化材試料は、竪穴住居跡SH05のカマド内から出土した複数炭化材のうち、比較的大きな炭化材を10点選んで樹種同定を行った（第146図）。

試料は、３方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定して金蒸着した。観察および同定は、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-5900LV型）を使用した。

３．結　　果

10試料を選んで樹種同定を行った結果、常緑広葉樹であるヒサカキ属とシイノキ属の２分類群が同定された。№１、２、４、５の４試料がヒサカキ属、№３、６～№10の６試料がシイノキ属であった。

10試料から検出された樹種は、シイノキ属とヒサカキ属の2分類群であったが、炭化材は埋没あるいは取り上げ過程において分割して細分化しやすいことから、量的な評価はできない。少なくとも、２種類の木材が燃料材として利用されたことが明らかとなった。いずれの樹種も薪炭材として利用されている樹木である。

次に材組織の解剖学的な記載と、生育環境、材質に関してまとめる。

（１）シイノキ属　*Castanopsis*　ブナ科　第146図　2a-2c（№９）、3a（№８）

年輪の始めに中型の管孔が間隔を開けて配列して除々に径を減じ、晩材では小型の管孔が火炎状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、放射組織は単列同性である。

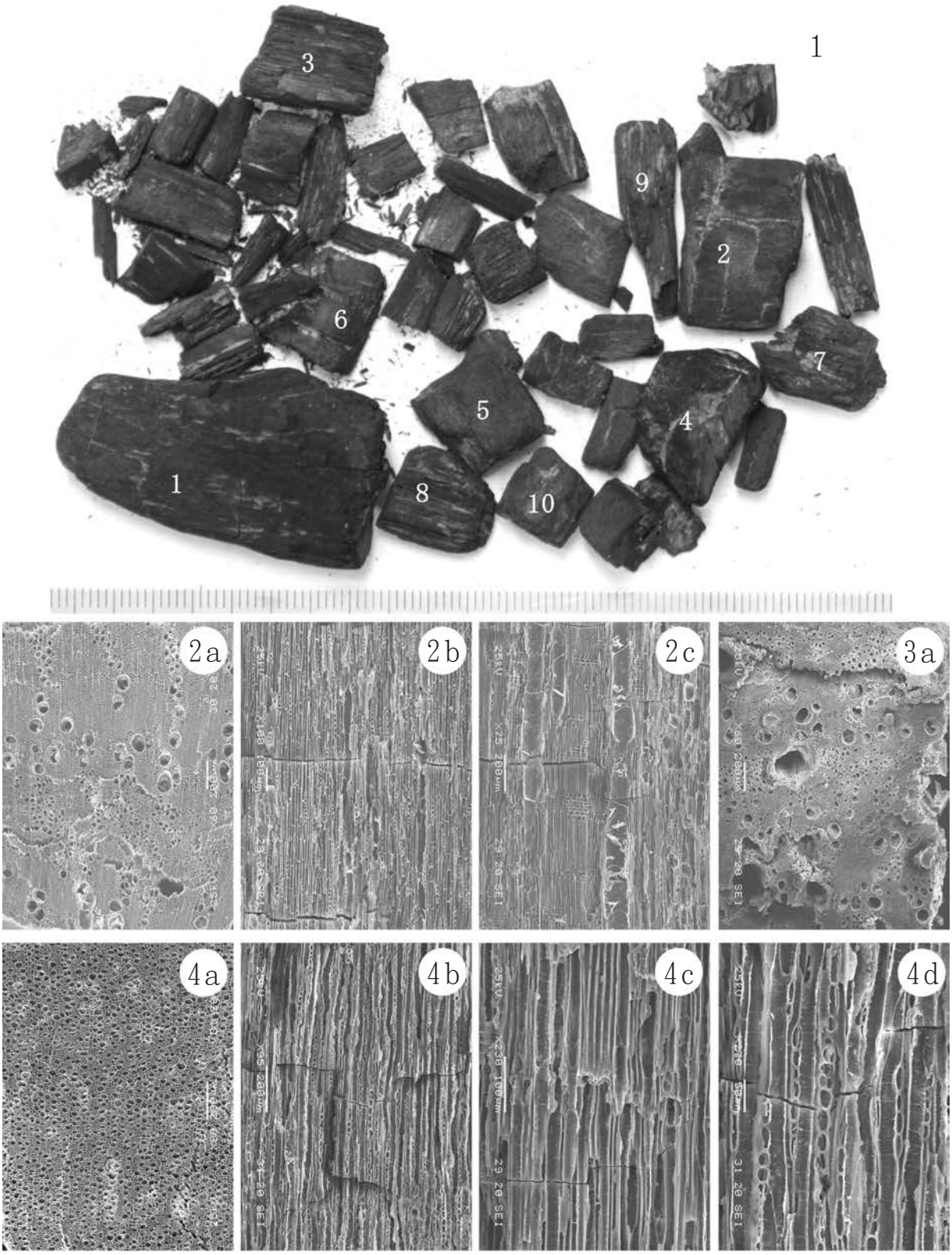
シイノキ属は、暖帯に生育する常緑高木で、関東以西に分布するツブラジイ（C.cuspidata）と福島県と新潟県佐渡以南に分布するスダジイ（C.cuspidata var. sieboldii）がある。現在でもスダジイとツブラジイ（＝コジイ）は、薪炭材に使われている。

（２）ヒサカキ属　*Eurya*　ツバキ科　第146図　4a-4d（№５）

小型の丸い管孔がほぼ単独で密に分布する散孔材である。道管の穿孔は50段程度の階段穿孔である。道管の内壁には、らせん肥厚が明瞭に見られる。放射組織は異性で１～２細胞幅、４～22細胞高である。

ヒサカキ属は常緑小高木で、本州、四国、九州、沖縄に分布し照葉樹林に普通にみられるヒサカキのほか、千葉県と愛知県以南の暖帯から亜熱帯に分布するハマヒサカキ（E. emarginata）やその変種がある。

材はおもに薪炭材として利用され、そのほかに小器具材として利用される。



１．水洗後の炭化材
２a-２c．シイノキ属（No.９）　３a．シイノキ属（No.８）　４a-４d．ヒサカキ族（No.５）

第146図　竪穴住居跡ＳＨ05カマド内の炭化材と樹種顕微鏡写真
（ａ：横断面、ｂ・ｄ：接線断面、ｃ：放射断面）

第５章　まとめ

第１節　遺物

１．出土土器の検討

土器の概要　第３章において、出土遺物についてその概要を報告してきた。その結果、今回の調査では、縄文時代後期から江戸時代にかけての遺物が明らかとなった。これらの遺物は、連続するものではなく、大きく、①縄文時代後期～弥生時代前期、②弥生時代中期、③弥生時代後期～古墳時代前期、④古墳時代後期、⑤奈良時代～平安時代前期、⑥平安時代後期、⑦江戸時代初頭の、７時期に分類することができる。そこで、本節では、上記の各時期の土器の特徴について、年代を中心に検討していくことにする。

Ｉ．縄文～弥生時代前期

（１）はじめに

縄文時代後期・晩期、弥生時代前期の土器が出土している。これらの土器は、ほとんどが微凹地から出土している。他に、ＳＫ06をはじめとした数基の土坑からわずかに出土している。ただし、これらの土坑から出土した土器については、残存状況が悪く、その特徴について検討することは困難である。よって、ここでは、微凹地出土土器を中心に検討していくことにする。

（２）縄文土器の検討

縄文後期　深鉢が出土している。２・３は、津島岡大遺跡（岡山市）の報告においてⅣ類深鉢Ｂに分類され、後期中葉に位置付けられている[1]。類例として、片吹遺跡（兵庫県たつの市）出土資料[2]に認められる。

この他、８については、いわゆる無紋深鉢に分類されるもので、後期後半と考えられる。ＳＫ06出土土器も当該期に位置付けられるが、残存状況が良好ではないため、詳細な時期の特定は困難である。北白川上層式３期を中心とした時期が考えられる。

縄文晩期　壺・深鉢・浅鉢が出土している。

壺　５が該当する。いわゆる浅鉢から壺への変容形として捉えられるもので、類例として口酒井遺跡第11次調査・第22次調査出土資料[3]を挙げることができる。船橋式に位置付ける説[4]や長原式に位置付ける説[5]があるが、いずれにしても突帯文土器から遠賀川式土器への移行期の資料として理解したい。

深　鉢　４は、常全遺跡に類例が認められ、晩期後半に位置付けられている[6]。

７は、「コ」字形の刺突文を特徴とするもので、中部瀬戸内地方を中心に分布が認められる土器である。平井泰男による編年においては「晩期Ⅳ期」に位置付けられ、近畿地方の篠原式に併行するものと位置付けられている[7]。ただし、この時期の土器は、従来「原下層式」に分類されていたもので、丁・柳ケ瀬遺跡においては、滋賀里Ⅲｂ式に併行するものとされている[8]。いずれにせよ、晩期中葉～後葉に位置付けられるものである。類例として、丁・柳ケ瀬遺跡[9]（姫路市）を挙げることができる。中部瀬戸内地域との関係の

一端を伺うことのできる資料である。

９と10は、播磨系突帯文深鉢に分類されるもので、中村健二による突帯分類のＣ類に相当するものである[10]。口縁端部よりやや下がった位置に突帯を貼り付けるもので、その類例は、丁・柳ケ瀬遺跡（姫路市）・雲井遺跡[11]（神戸市）・上沢遺跡[12]（神戸市）で認められる。雲井遺跡では第Ⅷ類に、上沢遺跡では３類に、それぞれ分類されている。各遺跡の報告において、長原式もしくはそれ以降に位置付けられている。

11については、突帯の特徴から播磨系突帯文深鉢に分類されるものではないが、突帯が貼付けられている位置から判断して、長原式に位置付けられるものと考えられる。

浅　　鉢　６が該当する。鍵形口縁をなすもので、口酒井式（滋賀里Ⅳ式）に位置付けられるものである。片吹遺跡ＳＫ160出土資料[13]に類例が認められ、原下層式（晩期中葉）に位置付けられている。

小　　結　以上から、一部、篠原式・滋賀里Ⅲｂ式まで遡るものを除いて、多くが長原式に平行する時期のものと考えられる。

（３）弥生前期の検討

概　　要　当該期の土器は、全て微凹地から出土している。これらの土器は、いずれも湿地性堆積層からの出土であるため、良好な一括資料とはいいがたいものである。器種としては、壺・甕・甕蓋・鉢が出土しているが、壺と甕で大多数を占める。各器種とも、完存もしくは完形に復元できる個体は、全く認められない。

壺　　器種を特定できるものは、いずれも広口壺に分類されるものである。加えて、いわゆるＢ形態をとるものは認められない。そこで、本項では、体部～頸部における装飾を中心に分類する。本遺跡で認められる装飾は、大きく、①段、②削り出し突帯、③ヘラ描沈線、④貼付け突帯に分類できる。

段　　15～18の４個体である。いずれも小型壺に分類されるものである。15が第Ⅱ種に分類される以外は第Ⅰ種に分類されるものである[14]。

削り出突帯　19～22の４個体に認められる。いずれも削出突帯第Ⅱ種少条に分類されるものである[15]。

ヘラ描沈線　23・25～35の12個体に認められる。沈線の本数は全体的に少条傾向にあり、３条のものが最も多く認められる。31の５条が最多である。また、沈線そのものも微細で、断面が明確なコ字形をなさないものが多い点が特徴的である。

貼付け突帯　36～43の８個体に認められる。３条のものが最多で、ヘラ描沈線同様、少条傾向にある。

甕　　大きく、口縁部が如意形口縁をなすタイプと逆Ｌ形をなすタイプに分類できる。ただし、後者のタイプについては、細片も含めて69の１個体に限られる。段を有するものは出土していない。

甕　蓋　74の１点のみである。

鉢　　口縁部が如意形をなす76と直口する75の２タイプに分類できる。

小　　結　壺形土器においては、①段、②削り出し突帯、③ヘラ描沈線、④貼付け突帯、が認められた。播磨においては、①→②→③→④の順に出現するといわれている[16]。また、逆Ｌ字形甕については、④より若干遅れて出現するといわれている。以上から、当該期の土器は、弥生時代前期古段階から中段階にかけての資料と位置付けたい。

先述したように一括性を欠く資料であるが、時期的にはまとまった資料といえるのではないかと考えられる。また、いわゆるＢ形態の壺形土器が認められない点も、これを指示するものと考えられる。

甕についても、段が認められないものの、多条沈線も認められないことから、壺形土器と比較的近い時期に位置付けられるものと考えられる。逆Ｌ字口縁の甕の出現についても、丁・柳ケ瀬遺跡の編年[17]においては、壺の時期と矛盾するものではない。

ところで、当地域における弥生前期古段階まで遡る資料としては、丁・柳ケ瀬遺跡で少量ではあるが報告されているにすぎない。ただし、丁・柳ケ瀬遺跡では削出突帯第Ⅱ種多条が出土しているが、北条遺跡では出土しておらず、北条遺跡出土資料がより古い傾向にあるものといえる。また、当遺跡の東側に位置する市之郷遺跡出土資料[18]よりも、明らかに古く位置付けられるものである。よって、微凹地出土資料は、当該地域での弥生時代前期のなかでは、最も古く位置付けられる資料といえよう。

他の特徴として、①いわゆる生駒西麓産の土器は、小片も含めて出土していない。②半截竹管が認められない、といった点を指摘することができる。②については、半截竹管の出土例が、当該期のなかでも新しい時期に出現することに起因するものと考えられる。

（４）小結

当該期の土器は、ほとんどが微凹地から出土したもので、決して良好な一括資料として扱えるものではない。しかし、当該期の遺構の存在が周囲に想定することができ、この時期の土器の様相をある程度伺うことの出来る資料と考えられる。

特に、弥生前期の古段階から中段階に位置付けた資料については、多くの遺跡で縄文時代晩期（長原式）と平行するといわれている[19]。したがって、微凹地出土のこれらの土器が、長原式と弥生前期が平行する時期の、比較的まとまりをもった資料である可能性が考えられる。よって、当地域における突帯文系土器と遠賀川系土器の共伴の実態を究明していく上での、一資料を提供するものと考えられる。

Ⅱ．弥生時代中期

当該期の遺物は、微凹地から数点出土しているに過ぎない。図化できたのは甕と壺の底部に限られる。甕の口縁部の特徴から、中期中葉（Ⅲ期）に位置付けられるものと考えられる。

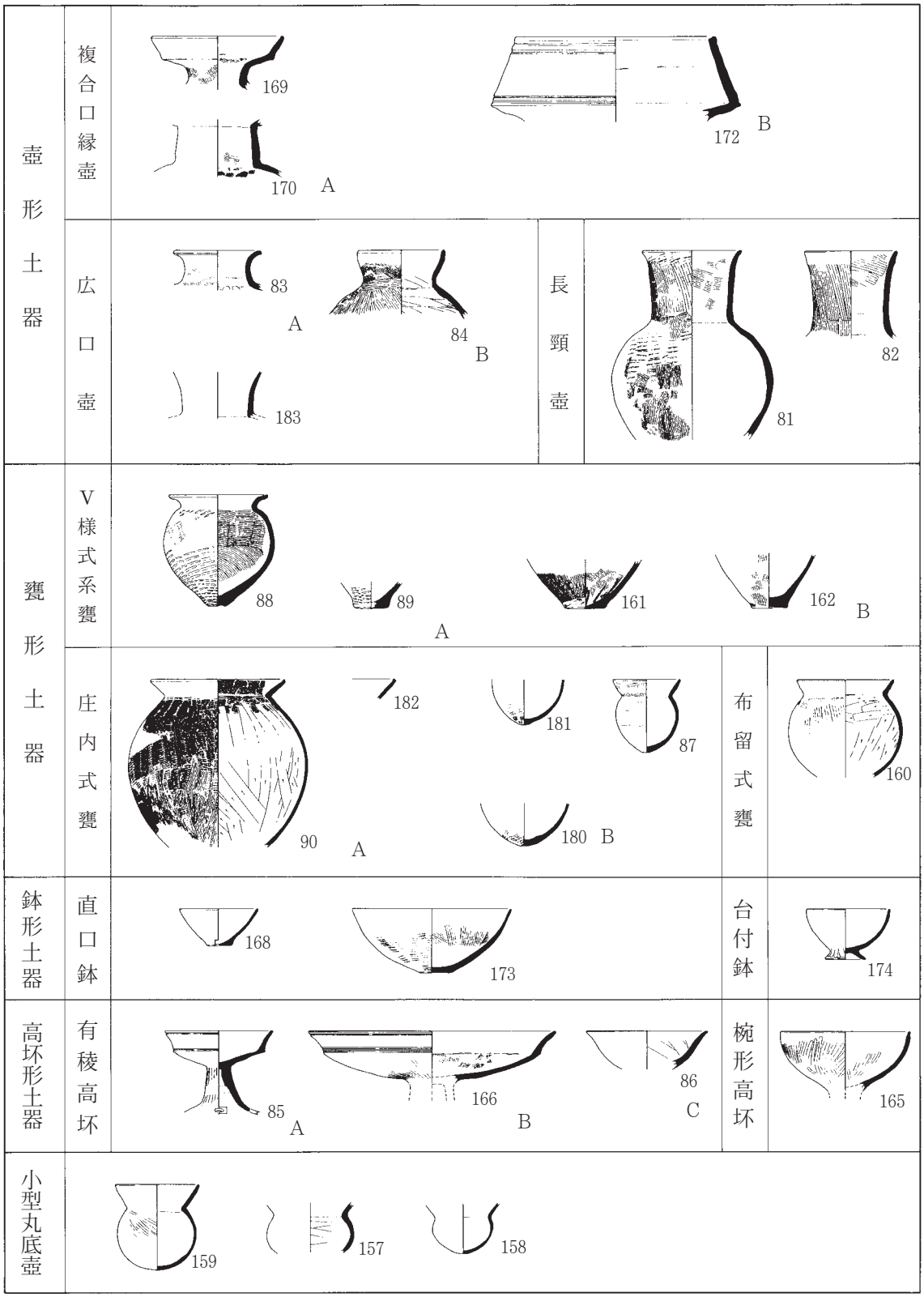
Ⅲ．弥生時代後期～古墳時代初頭

当該期の遺物は、いくつかの遺構から出土している。器種としては、壺形土器・甕形土器・鉢形土器・高坏形土器・小型丸底壺が出土している（第147図）。ここでは、上記の器種ごとにその年代観を中心に検討していきたい。

（１）器種分類

壺形土器　複合口縁壺・広口壺・長頸壺に分類できる。

複合口縁壺　大きくＡタイプとＢタイプの２タイプに細分できる。Ａタイプについては、169・170が該当する。在地産の複合口縁壺である。Ｂタイプについては、172が該当し、いわゆる



第147図　弥生時代後期～古墳時代前期の土器

「讃岐産」の複合口縁壺である。両タイプとも、庄内併行期に位置付けられる。

広　口　壺　　口頸部が大きく外反するＡタイプ（83）と、受口状をなすＢタイプ（84）に細分できる。

長　頸　壺　　81と82が該当する。後期中葉に位置付けられる。

甕形土器　　Ｖ様式系甕・庄内式甕・布留式甕に分類できる。

Ｖ様式系甕　Ａタイプ・Ｂタイプ・Ｃタイプの３タイプに細分できる。Ａタイプは88・89が該当する。外面を平行叩き、内面をハケ調整により仕上げるもので、底部は平底をなすもの（89）と、尖り底傾向にあるもの（88）とが認められる。後期後半に位置付けられる。

Ｂタイプは、161～163が該当する。外面をハケ仕上げ、内面をナデもしくはハケ調整による仕上げを特徴とする。後期中葉に位置付けられるものと考えられる。

Ｃタイプは、164が該当する。底部は平底をなし、内面の縦方向のヘラ削りを特徴とする。体部外面はハケ調整により仕上げられている。後期中葉に位置付けられる。

庄内式甕　いわゆる庄内型甕に分類されるもの（Ａタイプ）と、それ以外のもの（Ｂタイプ）に分類できる。Ａタイプについては、90と182の２個体出土しているが、いずれも在地産のものである。

Ｂタイプについては、底部が丸底もしくは尖り底をなすものである。87・180・181が該当する。180・181は、体部を平行叩きにより仕上げられているが、Ａタイプのように細筋のものではない。87に関しては、かなり小型で、甕としての機能をなさないもので、鉢もしくはミニチュア土器に分類されるべきものと考えられる。Ａ・Ｂ両タイプとも庄内併行期に位置付けられる。

なお、Ａタイプについては、北条遺跡の南西約2.3kmに位置する長越遺跡[20]で多く認められ、近くでは市之郷遺跡でも出土している。

布留式甕　160の１個体が該当する。口縁端部は肥厚せず、典型的な布留式甕ではない。

鉢形土器　直口鉢と台付鉢に分類できる。

直口鉢　168と173の２個体が該当する。168が明確な平底をなすのに対して、180は大型で、底部はわずかに平底を観察することができる。168が後期後半に（直口鉢Ａ）、180は庄内併行期に（直口鉢Ｂ）位置付けられる。

台付鉢　174の１個体が該当する。庄内併行期に位置付けられる。

高坏形土器　有稜高坏（165）と椀形高坏に分類できる。有稜高坏は、Ａ（85）・Ｂ（166）・Ｃ（86）の３タイプに細分できる。３タイプとも時期を異にし、ＡとＢは後期中葉に、Ｃは庄内併行期以降に位置付けられる。

椀形高坏は、庄内併行期に位置付けられる。

小型丸底壺　157～159の３個体が該当する。時期の特定は困難であるが、おおよそ口縁部高と体部高の比から布留２式に位置付けられる[21]ものと考えられる。

（２）時期の検討

以上、器種分類をとおしての検討結果から、大きく後期中葉と庄内併行期、布留式期の３時期に分類できることが明らかとなった。

後期中葉　長頸壺・Ｖ様式系甕・直口鉢Ａ・台付鉢・有稜高坏Ａ・有稜高坏Ｂが該当する。有稜高坏ＡとＢについては、Ａ→Ｂの変化が考えられ、高坏Ｂは後期中葉に位置付けられる。

庄内併行期　複合口縁壺・庄内式甕・有稜高坏Ｃ・椀形高坏・直口鉢Ｂ・台付鉢が該当する。

布留式期　布留式と小型丸底壺が該当する。布留式甕については、布留式初頭に位置付けられるものと考えられる。小型丸底壺についても、布留式前半に位置付けられるものと考えられる。

（３）小結

遺構の時期　上記の検討結果をふまえ、当該期の遺構の時期を明らかにしていきたい。

後期中葉の遺構としては、ＳＨ03とＳＤ03が挙げられる。この他、微凹地からも当該期の土器が出土している。

庄内併行期の遺構としては、ＳＤ01が挙げられる。この他、微凹地からも当該期の土器が出土している。

布留式期の遺構としては、ＳＨ01・ＳＨ02が挙げられる。なお、土器のみからは両者の前後関係を判断することは困難である。

地域性　当該期の土器のなかで、庄内併行期の一群に限り他地域の特徴をもった土器が認められる。明らかに搬入品と判断できるのは、172の讃岐系壺に限られる。また、90と182は搬入品ではないが、明らかに畿内中央部系の土器である。わずかな資料ではあるが、当時の交流の一端を理解することの資料といえよう。

Ⅳ．古墳時代後期

（１）出土土器の検討

当期の土器としては、須恵器がほとんどで、他に土師器等が数点出土している。

須恵器　杯身・杯蓋・杯Ａ・壺の各器種が出土している。杯身と杯蓋は、田辺編年[22]のＭＴ15型式タイプとＴＫ217型式タイプが出土している。ＭＴ15型式に位置付けられるのは、ＳＨ04出土の185～188に限られる。ＴＫ217型式に位置付けられるのは、193～196の４個体である。このなかで、193・194についてはその法量から飛鳥Ⅰ期に位置付けられる[23]。同様に、196については飛鳥Ⅱ期に位置付けられる[24]。

杯Ａの195については類例が白沢２号窯（加古川市）出土資料[25]に認められ、永井信弘はⅢ期１Ａ小期、つまり飛鳥Ⅲ期に位置付けている[26]。

壺については、ＳＨ04においてＭＴ15型式タイプの杯身・杯蓋とセットで出土しているもので、当該期に位置付けられる。

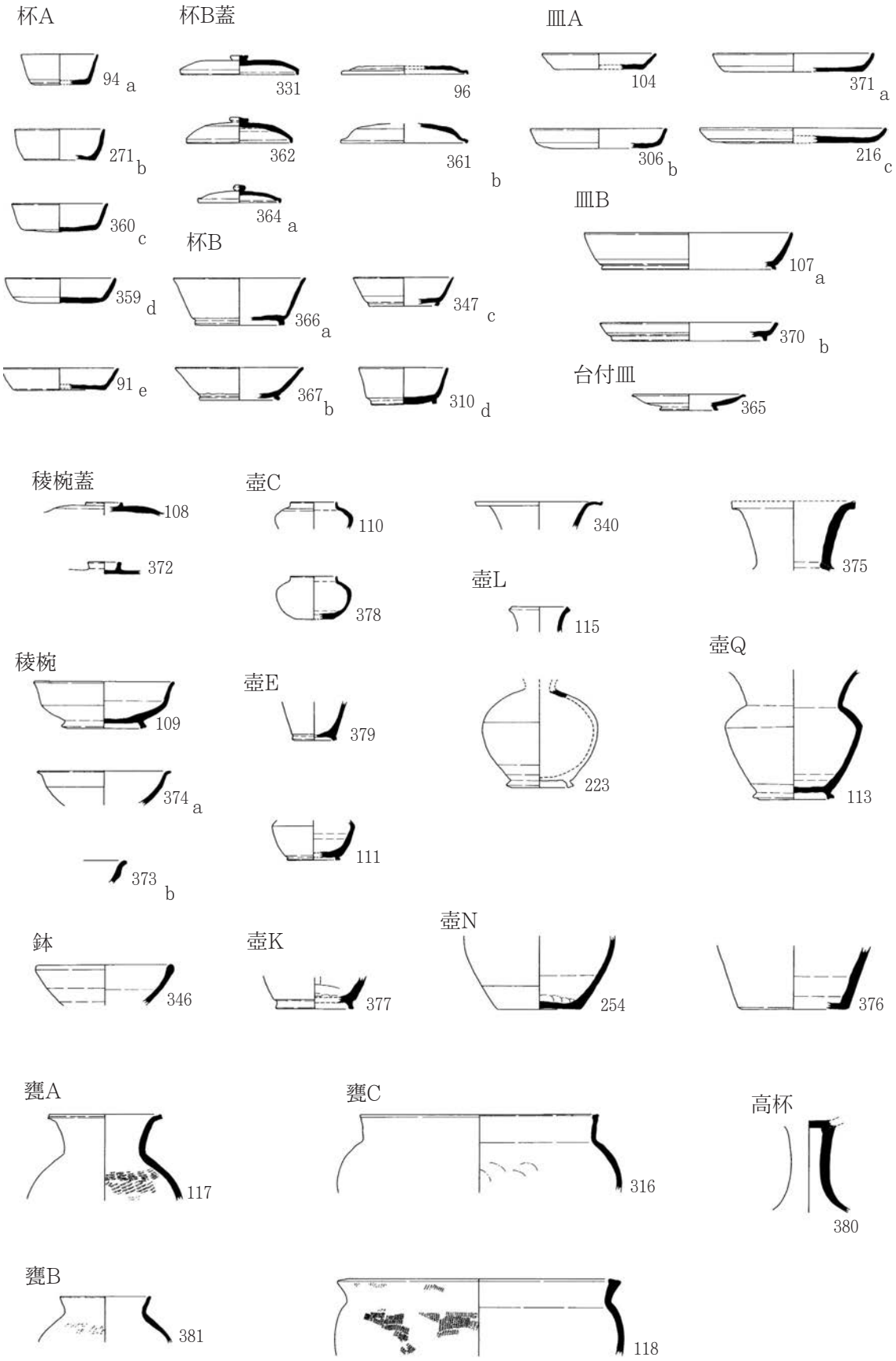
土師器　甕が１個体（192）出土している。ＳＨ04においてＭＴ15型式タイプの須恵器と共伴している。

（２）小結

以上から、当該期は大きくＭＴ15型式段階とＴＫ217型式段階の２時期からなる。ただし、後者のＴＫ217型式段階については、飛鳥Ⅰ期～Ⅲ期と時期巾が認められる。つまり、ＳＨ04がＭＴ15型式に、Ｐ01が飛鳥Ⅰ期に、ＳＤ04が飛鳥Ⅱ期に、ＳＤ05が飛鳥Ⅲ期に位置付けられる。

Ⅴ．奈良時代

本項で対象とするのは、平安時代前期までを含むものである。大きく、須恵器と土師器が出土している。ここでは、須恵器と土師器の供膳形態を中心に分類し、その年代観を明らかにしていきたい。



第148図　奈良時代出土須恵器の分類

（１）器種分類

須　恵　器　　杯Ａ・杯Ｂ蓋・杯Ｂ・皿Ａ・皿Ｂ・台付皿・稜椀蓋・鉢・壺・甕の各器種が出土している（第148図）。おな、当該期の須恵器については、前章での胎土分析の結果、志方窯跡産のものが多く含まれていることが明らかとなっている。したがって、器種分類・時期比定にあたっては、当該窯跡の報告[27]を参考としたい。

杯　　Ａ　　第149図の法量分布および形態的特徴から、ａ～ｅの５型式に細分する。

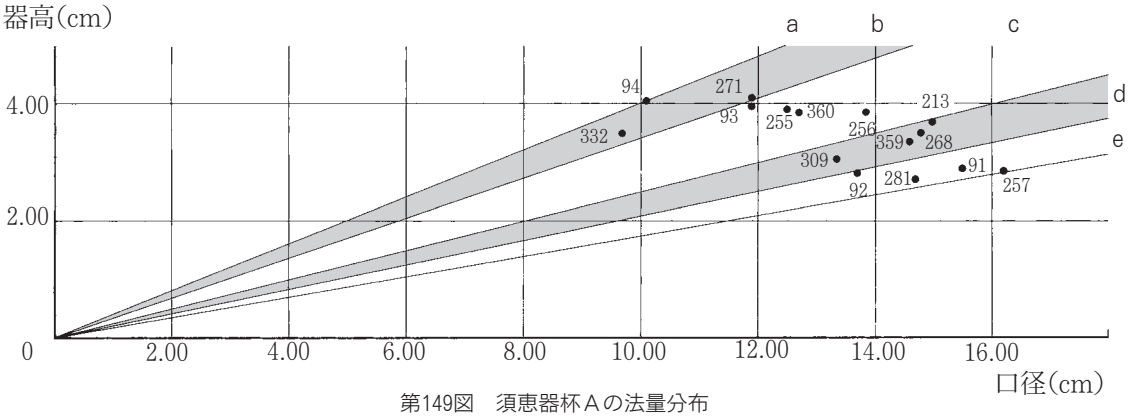
ａ　　体部から口縁部にかけて直線的で、底部から体部への変換部が明瞭である。径口指数40。94の１個体のみである。投松６号窯に類例が認められ、平城宮土器Ⅴ～Ⅵ段階に位置付けられている。

ｂ　　底部から体部への変換部はａタイプ同様明確であるが、体部は内湾傾向、口縁部は外反傾向にある。径口指数34～36。271・332の２個体である。平城宮土器Ⅲ段階のＳＥ01から出土している。

ｃ　　ａ・ｂタイプと比較して、底部から体部への変換部が明確でないもの。後述するｄタイプ・ｅタイプに対して、器高が高いもの。径口指数27～33。93・255・256・360の４個体である。器高が４cm以下であり、平城宮土器Ⅴ～Ⅵ段階の志方窯跡群投松２号窯・中谷１号窯と同様の法量的特徴が認められる。

ｄ　　ｃタイプに対して器高が浅く、ｅタイプに対して器高が高いもの。径口指数22～24。309・359・213・268の４個体である。法量的に、309とそれ以外に細分可能である。器高が４cm以下であり、平城宮土器Ⅴ～Ⅵ段階の志方窯跡群投松２号窯・中谷１号窯と同様の法量的特徴が認められる。

ｅ　　ｄタイプより器高が浅く、皿に近い形態のもの。径口指数17～20。91・92・257・281の４個体である。投松２号窯（１次）に類例が認められ、平城宮土器Ⅴ～Ⅵ段階に位置付けられる。

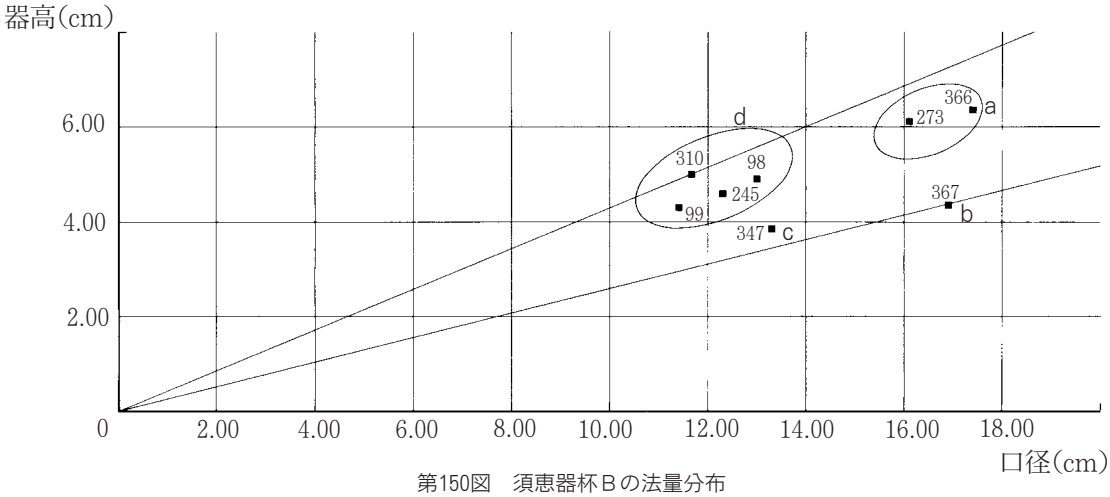


第149図　須恵器杯Ａの法量分布

杯　Ｂ　蓋　　形態的特徴から、大きくａとｂの２型式に細分する。

ａ　　縁部が屈曲せず、いわゆる笠形をなすものである。いわゆる「Ｂ形態」と称される[28]タイプである。口縁端部は下方に突出し、断面三角形をなす。法量的な差が認められるとともに、つまみの形状もいわゆる釦形をなすもので、擬宝珠形をなすものは認められない。243・331・362～364が該当する。平城宮土器Ⅰ～Ⅲ段階前半に特徴的な型式である[29]。

ｂ　　縁部が屈曲するものである。いわゆる「Ａ形態」と称される[30]96のように端部が上方に



第150図　須恵器杯Ｂの法量分布

そりあがるものも認められる。つまみまで残存するものは認められない。平城宮土器Ⅲ段階後半以降に特徴的な型式である。特に、96については、平城宮土器Ⅶ段階にみられる特徴である。

杯　　Ｂ　第150図の法量分布および形態的特徴から、ａ～ｄの４型式に細分する。

ａ　法量的に最も大型に分類されるものである。273と366の２個体が該当する。底部から体部への変換部は明確に屈曲し、この変換部よりやや内側に高台が貼付けられている。体部から口縁部にかけては直線的に伸びている。径口指数36～38。投松２号窯（１次）に類例が認められ、平城宮土器Ⅴ～Ⅵ段階に位置付けられている。

ｂ　ａに対して器高の低いタイプである。367の１個体が該当する。底部から体部にかけての変換部が緩やかで、内湾傾向の体部に対して口縁部は外反傾向にある。径口指数25。投松１号窯に類例が認められ、平安京Ⅰ期新に位置付けられる。

ｃ　347の１個体が該当する。形態的にはｂタイプにちかいが、口径が明らかに小さい。径口指数29。投松６号窯に類例が認められ、平城宮土器Ⅴ～Ⅵ段階に位置付けられる。

ｄ　口径はｃタイプに近いが、器高がｃタイプより高い一群である。98・99・245・310の４個体が該当する。径口指数37～43。投松４号窯に類例が認められ、平城宮土器Ⅲ古段階に位置付けられる。

皿　　Ａ　形態的特徴からａ～ｃの３タイプに細分する。

ａ　底部から体部にかけての変換部が明確に屈曲するもの。104・105・241・371の４個体が該当する。さらに、口縁部が直線的な104・241と、内湾傾向にある105・371とに細分可能である。径口指数９～14。前者は、投松６号窯・２号窯（１次）に類例が認められ、平城宮土器Ⅴ～Ⅵ段階に位置付けられる。後者については、豆腐町遺跡Ａ区旧河道出土資料中に認められ、平城宮土器Ⅲ段階を中心とした時期に位置付けられている[31]。

ｂ　ａに対して、底部から体部への変換部がゆるやかなカーブをなすもの。306の１個体が該当する。径口指数15。皿Ａａと同様、豆腐町遺跡Ａ区旧河道出土資料中に認められる。

ｃ　ｂに対して、口縁部の立ち上がりが低いもの。106・216・272の３個体が該当する。径口指数７～８。皿Ａａと同様、豆腐町遺跡Ａ区旧河道出土資料中に認められる。

皿　　Ｂ　３個体しか出土していないが、器高と口径の関係から２タイプ（ａ・ｂ）に細分可能で

ある。両タイプとも投松６号窯に類例が認められ、平城Ⅴ～Ⅵ期に位置付けられる。

a　器高が高いものである。107の１個体が該当する。径口指数18。

b　ａに対して器高の低いタイプである。285と370の２個体が該当する。径口指数８～10。

台付皿　365の１点のみである。投松１号窯に類例が認められ、平安京Ⅰ期新段階に位置付けられる。

稜椀蓋　108と372の２点のみ出土している。いずれもつまみ部分のみの残存のため、詳細な検討は困難である。

稜椀　体部と口縁部の高さの比から、口縁部高が高いタイプ（ａ：109・374）と、低いタイプ（ｂ：373）に分類することができる。ａについても、詳細な点については特徴を異にする。なお、ａタイプについては胎土分析が行われており、志方窯跡を含む札馬窯跡群産との分析結果が得られている（第４章第１節）。

北条遺跡を含めた播磨地域の稜椀に関しては、小川真理子の研究がある[32]。ａタイプについては、小川真理子の（Ⅰ）タイプに分類されるものである。類例として、志方古窯跡群の中谷４号窯出土例が挙げられ、当該窯は平城宮土器Ⅲ古段階に位置付けられている[33]。109についても、全体的にていねいに仕上げられており、この時期に近い時期に位置付けられるものと考えられる。なお、ｂタイプについては、小川真理子の論考には認められないタイプである。

鉢　346の１点のみである。

壺類　壺Ｃ・壺Ｄ・壺Ｌ・壺Ｑ・その他が認められる。

壺Ｃ　110と378の２個体である。平城宮編年においては、平城宮土器Ⅰ段階～Ⅲ古段階までみられるようである[34]が、志方窯跡群では平城宮土器Ⅲ古段階の中谷4号窯のみで生産されている。したがって、当該期を中心とした時期を考えたい。

壺Ｄ　図化できなかったが、把手部分のみ残存する120と121の２個体（写真図版40）が該当する。

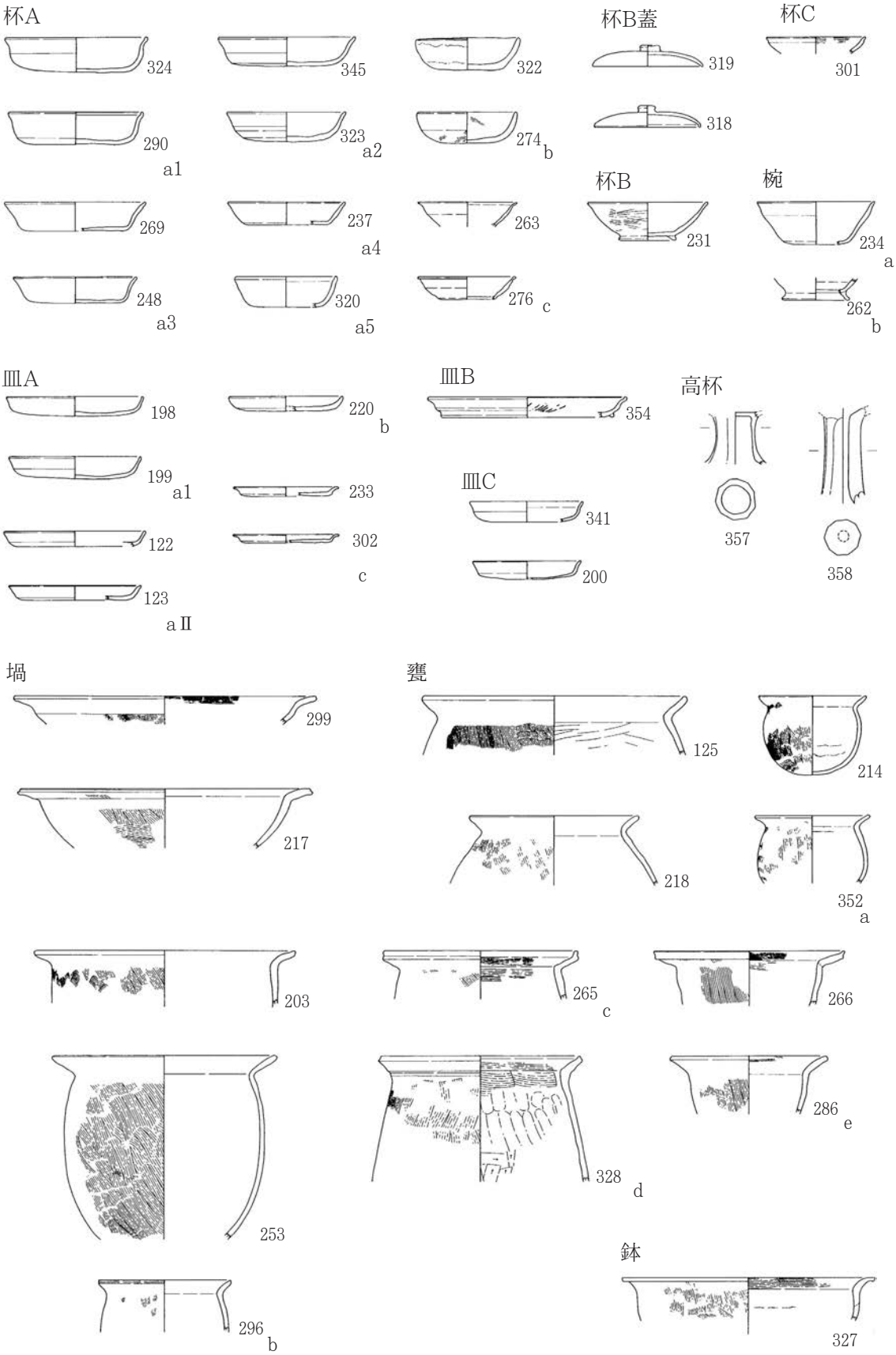
壺Ｌ　115と223の２個体である。白沢・志方窯跡の器種変遷表によると、壺Ｌの体部は球形から長胴化の傾向にある。223の体部はほぼ球形に近いことから、中谷１号窯出土例に類似する。よって、平城宮土器Ⅴ～Ⅵ段階に位置付けられる。

壺Ｑ　113の１個体である。中谷４号窯に類例が認められ、平城宮土器Ⅲ古段階に位置付けられている。

その他　小片のため部分的にしか残存しないため、器種の特定が困難であるが、376が壺Ｂ、377が壺Ｋ、254が壺Ｎ、112・340・375が壺ＮもしくはＬの可能性が考えられる。また、379については、志方窯跡群投松６号窯の報告において、壺Ｅに分類され、平城宮Ⅴ～Ⅵ段階に並行する時期を想定されている。

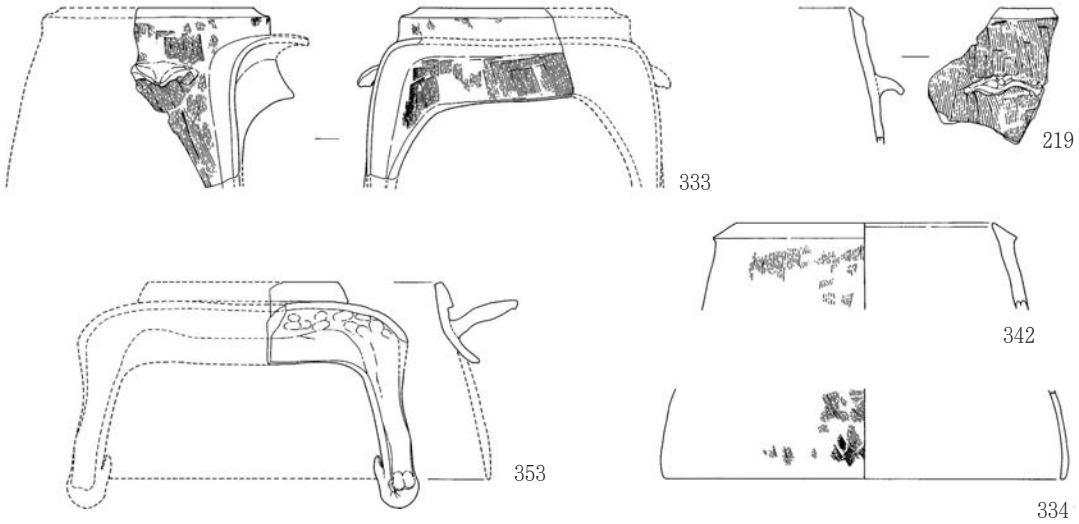
甕類　甕Ａ・甕Ｂ・甕Ｃが認められる。甕Ａは117と382が、甕Ｂは381が、甕Ｃは118と316が、それぞれ該当する。甕Ｃに関しては、投松６号窯・同２号窯に類例が認められ、平城宮土器Ⅴ～Ⅵ段階に位置付けられる。

高杯　380の１個体が出土している。脚部のみであるが、長脚であることから、平城宮土器Ⅴ～Ⅵ段階を中心とした時期に位置付けられる。



第151図　奈良時代出土土師器の分類（１）

カマド



第152図　奈良時代出土土師器の分類（２）

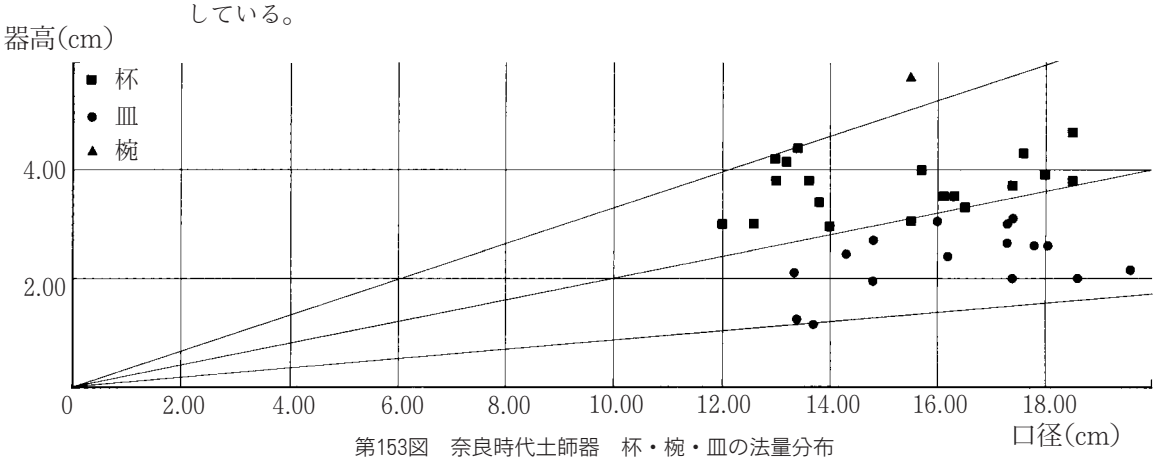
土　師　器　　杯Ａ・杯Ｂ蓋・杯Ｂ・杯Ｃ・皿Ａ・皿Ｂ・皿Ｃ・椀・高杯・堝・甕・鉢・カマドの各器種が出土している（第151図・第152図）。ところで、杯Ａと皿Ａについては、個体差がありその分離が困難な部分がある。そこで、両者の区分を、口径と器高の比から分離を試みたい。第153図が、両者を合わせた法量分布である。当該分布において、径口指数19を境に、それより器高の低いものを皿として分離し、他を杯に分類する。

杯Ａ　　形態的特徴から、大きくａ～ｃの３タイプに分類する。

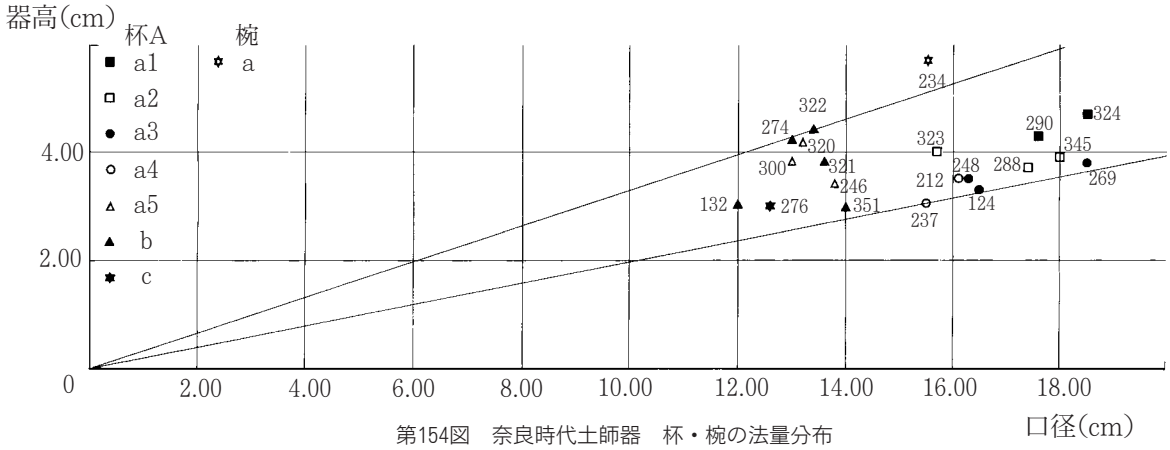
ａ　　口縁部形態が、いわゆるＡ形態[35]を基本形とするものである。ただし、口縁端部の形態および底部から体部にかけての特徴において、５タイプ（a1～a5）に細分できる。

ａ１　　内湾する体部に口縁部がやや外反し、端部を内側へ肥厚気味に折り返す、いわゆる典型的なＡ形態をなすタイプである。290と324の２個体が該当する。内面に暗文は認められないが、これは磨滅に起因するものである。本来は暗文があったものと考えられ、その形態的特徴から、平城宮土器Ⅲ段階に位置付けられる。

ａ２　　口縁端部がわずかにつまむように薄く納められるもの。288・323・345の３個体が該当する。法量的な差が認められる。323は、ＳＥ01で、平城宮土器Ⅲ段階の杯Ａａ１と共伴している。



第153図　奈良時代土師器　杯・椀・皿の法量分布



第154図　奈良時代土師器　杯・椀の法量分布

ａ３　　ａ２に類似するが、底部から体部にかけての変換部がより明確なもの。124・248・269の３個体が該当する。Ａ形態と基本的には同技法によるものである。よって、平城宮土器Ⅲ段階もしくはそれに続く時期と考えられる。

ａ４　　底部から体部にかけての変換部が明確で、体部から口縁部にかけては直線的なもの。口縁端部はつまむようなヨコナデにより、内側にわずかに段が認められる。212と237が該当する。

ａ５　　法量的に小型の一群である（第154図）。口縁端部を強くつまみ出し、内端部に沈線状の段が認められるものである。246・300・320の３個体が該当する。320が、ＳＥ01で平城宮土器Ⅲ段階の杯Ａa1と共伴している。

ｂ　　口縁部形態が、いわゆるＢ形態を基本形とするものである。ａタイプに対して、全体的に小型である（第154図）。器壁が全体的に厚く、口縁端部がまるく納められている。132・274・321・322・351の５個体が該当する。ＳＥ01で、杯Ａａ1と共伴している。

ｃ　　体部から口縁部にかけて直線的で、口縁部をわずかに外反させるタイプである。ｂタイプより小型で、器壁が薄く仕上げられている。225・229・228・276・263・260・261・275・278等が該当する。類例が本町遺跡溝11出土資料[36]中に認められ、奈良時代後半から平安時代前半にかけての時期と考えられる。

杯　Ｂ　蓋　　227・318・319の３個体が該当する。227・318と319に法量的な差が認められる。ＳＥ01で、平城宮土器Ⅲ段階の杯Ａa1と共伴している。

杯　　Ｂ　　231の１個体に限られ、底部のみ残存する。

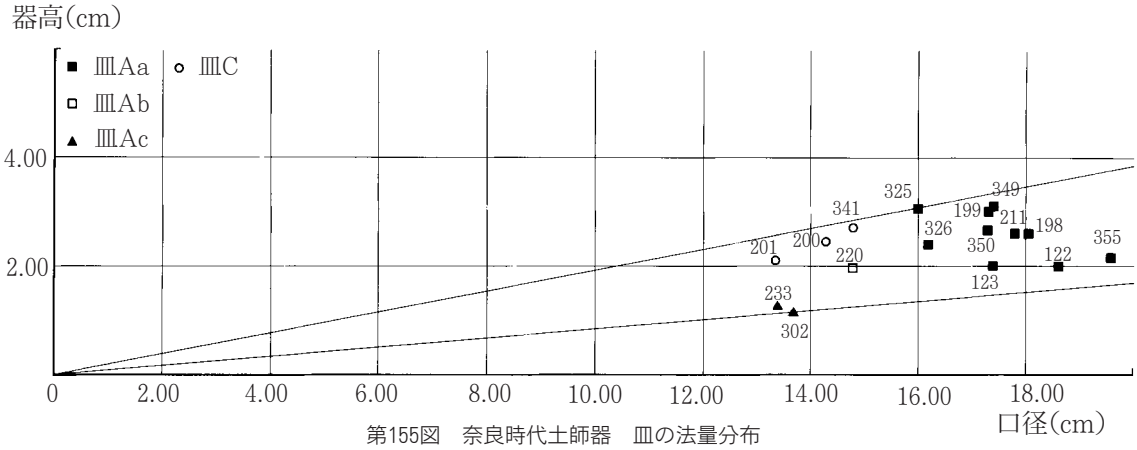
杯　　Ｃ　　301の１個体に限られる。小型の杯で、口縁部をわずかに外方につまみ出している。Ｐ43で、平城宮土器Ⅲ段階の杯Ａa5と共伴している。

皿　　Ａ　　形態的特徴から、ａ～ｃの３タイプに分類する（第155図）。

ａ　　底部に対して口縁部の立ち上がりが明確なもの。法量により、口径に対して器高が比較的高いもの（Ⅰ：198・199・211・325・326・349・350）と、逆に器高が低いもの（Ⅱ：122・123・355）の２つに細分できる。325・326ともに、ＳＥ01で、平城宮土器Ⅲ段階の杯Ａa1と共伴している。

ｂ　　底部に対して口縁部がゆるやかに立ち上がるもの。220の１個体が該当する。

ｃ　　底部に対して口縁部が短く外反するもの。口径に対する器高の比が皿のなかで最も小さ



第155図　奈良時代土師器　皿の法量分布

いタイプである。233・267・302の３個体が該当する。Ｐ43で、平城宮土器Ⅲ段階の杯Ａａ５と共伴している。

皿　　Ｂ　285と354の２個体が該当する。内面の暗文が一段斜放射暗文で、これは平城宮土器Ⅲ段階に特徴的なものである。

皿　　Ｃ　200・201・341の３個体が該当する。長岡京左京太政官厨家跡ＳＤ1301・平城京左京五条二坊十四坪ＳＥ03出土資料に類例が認められ、いずれも平城宮土器Ⅵ段階に位置付けられている[37]。

椀　　底部が平底をなすもの（ａ）と高台が付くタイプ（ｂ）に細分できる。

ａ　　234の１個体が該当する。径口指数37。

ｂ　　231・232・262の３個体が該当する。底部のみの残存のため、特徴を明確にすることは困難である。

高　　杯　脚部が出土している。断面が多面体をなすもので、脚が短いタイプ（357）と長いタイプ（358）に分類できる。

埵　　217・289・299の３個体出土している。いずれも同タイプに分類できるものである。播磨では、７世紀代の資料が多いようである[38]が、Ｐ30において、平城宮土器Ⅲ段階の土師器杯Ａａ3と共伴していることから、この時期まで存続するものと考えられる。

甕　　完存するものがないため、口縁部と体部の特徴から、ａ～ｄの４タイプに細分する。

ａ　　口径に対して体部最大径が大きなもの。いわゆる丸胴タイプの甕である。口縁部はく字形をなし、端部がまるく納められるものと、つまみ上げ気味のものとが認められる。125・214・218・282・293・343・352が該当する。小犬丸遺跡を中心に類例が認められ、８世紀後半に位置付けられている[39]。

ｂ　　ａに対して、口径より体部最大径が小さいもの。いわゆる長胴タイプの甕である。口縁端部は、ａタイプ同様、まるく納められるものと、つまみ上げ気味のものとが認められる。203・204・253・259・287・294・296が該当する。296と287は明らかに小型で、法量的に２分できる。小犬丸遺跡を中心に類例が認められ、８世紀後半に位置付けられている[40]。

ｃ　　口径に対して体部最大径が同じ、もしくは小さいもので、体部が直線的である。また、口縁部は受口状をなし、頸部内面の稜が顕著である。口縁端部は強くつまみ上げられ、明確な端面を有する。265の１個体が該当する。

ｄ　体部はｃタイプと同じであるが、口縁部がく字形をなし、端部は明確な面を有するもの。328の１個体が該当する。ＳＥ01で、平城宮土器Ⅲ段階の杯Ａa1と共伴している。

ｅ　鉢形をなすもの。頸部内面の稜が明確で、器壁が全体的に厚く仕上げられている。266・286の２個体が該当する。

鉢　327の１個体が該当する。口縁部は如意形をなす。

カマド　６個体分出土しているが、良好に残存するものがないため、細分は控えたい。

小結　土師器については、時期を中心に検討してきた。ここで、他に気づいた点について触れておきたい。それは、杯Ａ・杯Ｂ蓋において化粧土が施されている点である。これは、豆腐町遺跡でも、杯Ａと杯Ｃで指摘されていることである。豆腐町遺跡の報告では、本町遺跡出土資料にも同様の特徴が認められることから、当該地域の地域性と考えている。北条遺跡出土資料は、この見解を補強する資料といえよう。

この他、暗文については、ⅢＢの354を除いては残存状況が良好ではないため、観察することはできなかった。また、同様の理由から、製作技法を詳細に観察することができなかった。

製塩土器　わずかではあるが、微凹地・Ｐ38・ＳＥ01・ＳＫ32などから出土している。基本的には同タイプに分類できるもので、ほぼ同時期の豆腐町遺跡ではＢ１類に分類されている。例外として、ＳＥ01出土の330は、内面に布目が認められ(第100図)、豆腐町遺跡ではＢ２類に分類されている。

（２）小結

時期　以上の検討結果から、大きく奈良時代中期（平城宮土器Ⅲ段階)、奈良時代後期～平安時代初頭（平城宮土器Ⅴ～Ⅵ段階～平安京Ⅰ）の２時期からなるものと考えられる。

奈良時代中期の資料としては、ＳＨ05・ＳＢ03・ＳＢ06・ＳＢ15・Ｐ05・Ｐ19・Ｐ30・Ｐ31・Ｐ34・Ｐ36・Ｐ37・Ｐ39・Ｐ43・ＳＫ15・ＳＫ23・ＳＫ24・ＳＫ32・ＳＫ36・ＳＥ01・ＳＤ13・ＳＤ22・畠２・畠６・畠９が挙げられる。

奈良時代後期～平安時代初頭の資料としては、ＳＢ09・Ｐ08・Ｐ09・Ｐ13～Ｐ17・Ｐ21～Ｐ24・Ｐ29・ＳＫ09・ＳＤ23・ＳＤ24が挙げられる。

他の遺構に関しては、出土遺物のみからは時期を特定できないものである。次節で、遺構相互の切り合い関係を含めて、再検討していきたい。

Ⅵ．平安時代後期

（１）出土土器の検討

須恵器・土師器・瓦器が出土している。

須恵器　椀のみが出土している。基本的に同時期のものと考えられ、底部の特徴から、11世紀後半と考えられる。口縁部の393についても、端部を薄く仕上げる特徴から、底部片（401～404）と同時期に位置付けられるものと考えられる。

土師器　椀と皿が出土している。椀は高台付の椀（394・395）と杯形の椀（400）が出土している。高台付の椀については、岸本道昭が小犬丸遺跡出土資料をもとに分析を行っている[41]。こ

こでは、小犬丸遺跡出土の高台付土師器椀を11世紀前半に位置付けている。しかし、北条遺跡出土資料は、高台がより退化傾向にある。したがって、より新しい11世紀後半を中心とした時期に位置付けられるものと考えられる。

杯形の椀については、12世紀代と考えられる。

小皿については、底部を指オサエによる397、底部をヘラにより切り離す398、回転糸切りにより切り離す399と、タイプを異にする。ただし、ＳＫ37で共伴していることから、時期的な差はなく11世紀～12世紀代と考えられる。

瓦器椀については、底部のみの残存で詳細な検討は困難である。ただし、和泉型と考えられ、高台が断面逆台形と比較的しっかりしていることから、11世紀中葉～後半に位置付けられるものと考えられる[42]。

（２）小結

このように、当該期の土器の大半は、11世紀後半から12世紀にかけての時期に位置付けられる。具体的には、Ｐ48とＰ50が11世紀後半に、ＳＫ37が12世紀代に、それぞれ位置付けることができる。

Ⅶ．江戸時代

当該期の遺物は、全て微凹地から出土している。種別としては、備前焼・丹波焼・唐津焼・染付磁器が出土している。

備前焼は擂鉢が出土しており、Ｖ期に位置付けられるもので、安土桃山時代と考えられる。唐津焼は、碗・皿・盤が出土しているが、いずれも17世紀初頭に位置付けられるものである。丹波焼は18世紀後半に位置付けられる甕が出土している。染付磁器は、伊万里産と瀬戸産が認められ、伊万里産は17世紀初頭と18世紀以降のものが、瀬戸産は19世紀以降に位置付けられるものである。

〔註〕

（１）阿部芳郎「後期第Ⅳ群土器の型式学的検討」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第７冊　津島岡大遺跡　４－第５次調査－』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1994

（２）市村高規・泉　拓良『片吹遺跡』兵庫県龍野市教育委員会　1985

（３）小長谷正治『口酒井遺跡発掘調査報告書　第22次・25次調査』伊丹市教育委員会　1995　なお、当該報告では「浅鉢形土器」として報告されている。

（４）田崎博之「壺形土器の伝播と受容」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会　2000

（５）南　博史「大阪湾周辺地域における縄文晩期凸帯文土器の変遷－口酒井遺跡第11次調査を中心として－」『京都文化博物館研究紀要　朱雀　第２集』財団法人　京都文化財団　1989

（６）磯崎正彦他『兵庫県太子町常全遺跡調査概要』太子町教育委員会　1971

（７）平井泰男「中部瀬戸内地方における縄文時代後期末葉から晩期の土器編年試案」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会　2000

（８）岡崎正雄「縄文時代の土器」『丁・柳ケ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会　1985

（９）前掲（８）

(10) 中村健二「播磨系突帯文深鉢について」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会　2000
(11) 丹治康明『雲井遺跡　第１次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　1991
(12) 口野博史「遺物－縄紋時代晩期～弥生時代前期の遺物」『上沢遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会　1995
(13) 前掲（２）
(14) 佐原　真「山城における弥生式文化の成立－畿内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡出土の占める位置－」『史林』50巻５号　1967
(15) 前掲（14）
(16) 深江明比古・釜江秀典「弥生時代の土器　１．弥生時代前期」『丁・柳ケ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会　1985
福井　優「播磨における櫛描文出現期の一例」『喜谷美宣先生古希記念論集』喜谷美宣先生古希記念論集刊行会　2006
(17) 前掲（16）
(18) 山田清朝『市之郷遺跡－JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－』兵庫県教育委員会　2005　以下、市之郷遺跡に関する記述は当該報告による。
(19) 田畑直彦「畿内第Ⅰ様式古・中段階の再検討」『立命館大学考古学論集Ⅰ』
立命館大学考古学論集刊行会　1997
(20) 松下　勝『播磨・長越遺跡－昭和49・50年度調査報告書－』兵庫県教育委員会　1978
(21) 次山　淳「小型丸底土器の地域色－形態からみた大和と河内」『古式土師器の年代学』財団法人大阪文化財センター　2006
(22) 田辺昭三『陶邑古窯址群１』平安学園研究論集　第10号　1966
(23) 小川真理子「播磨　３．まとめ」『古代の土器５－２　７世紀の土器（近畿西部編）』古代の土器研究会編　1998
(24) 前掲（23）
(25) 森内秀造・深江英憲『白沢３・５号窯－山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸⅨ－』兵庫県教育委員会　1999
(26) 永井信弘「播磨　窯跡出土の須恵器の変遷」『古代の土器５－２　７世紀の土器（近畿西部編）』古代の土器研究会編　1998
(27) 森内秀造『志方窯跡群Ⅰ－中谷支群－山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸＸⅠ』兵庫県教育委員会　2000
森内秀造『志方窯跡群Ⅱ－投松支群－山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸＸⅣ』兵庫県教育委員会　2001
以下、当該窯跡群に関する記述は、上記報告による。
(28)『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所　1976
(29) 玉田芳英・岸本直文「平城宮土器研究の現状」『平城宮発掘調査報告ＸⅣ』奈良国立文化財研究所　1993
(30) 前掲（28）

(31) 岡田章一『豆腐町遺跡Ⅰ－ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』兵庫県教育委員会　2007　以下、豆腐町遺跡に関する記述は、上記報告による。
(32) 小川真理子「稜椀研究の再検討」『瓦衣千年－森　郁夫先生還暦記念論文集－』森　郁夫先生還暦記念論文集刊行会　1999
(33) 森内秀造「中谷４号出土遺物について」『志方窯跡群Ⅰ－中谷支群－　山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸＸⅠ』兵庫県教育委員会　2000
(34) 宮本長次郎『平城宮発掘調査報告ＸⅢ』奈良国立文化財研究所　1991
(35)『平城宮発掘調査報告XI』奈良国立文化財研究所　1982
(36) 秋枝　芳『本町遺跡』姫路市教育委員会　1984
(37) 古代の土器研究会『古代の土器１　都城の土器集成』1992
(38) 池田征弘「摂津西部・播磨」『古代の土器４　煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会編　1996
(39) 前掲（38）
(40) 前掲（38）
(41) 岸本道昭「布勢駅家廃絶期の土器」『布勢駅家Ⅱ－小犬丸遺跡1992・1993年度発掘調査概報－』龍野市教育委員会　1994
(42) 尾上　実「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古希記念　古文化論叢』藤澤一夫先生古希記念論集刊行会　1982

２．出土瓦について

（１）はじめに

平瓦と丸瓦が出土している。量的にはわずかで、平瓦が大半で、丸瓦がわずかに出土している。また、軒瓦は１点も出土していない。本節では、平瓦と丸瓦について、その特徴をまとめておきたい。

（２）平瓦

概　　要　微凹地・ＳＨ05・ＳＥ01および包含層中から出土している。まず、本遺跡出土の平瓦の特徴として、その使われ方が、建物の屋根に葺かれていたものではないらしいという点である。これは、全体的な出土量が少ない点もあるが、ＳＨ05における出土状況に端的に示されている。

SH05出土状況　ＳＨ05は竪穴住居であるが、この床面に敷かれたような状況で出土している（写真図版17・18)。つまり、瓦本来がもつ機能として使用されたのではなく、転用された形での使用状況を示すものである。したがって、平瓦が生産された時期とは若干の時期差があるものと考えられる。

叩　　き　平瓦自体の特徴をみると、いずれも桶巻技法によるもので、凹面には布目が顕著に認められる。凸面については、叩き痕が顕著で、縄目叩き（308・383～386）・斜格子叩き（206・339・388・389・391）・格子叩き（338・392）が認められる（巻首図版７)。いずれの叩きも細分が可能である。市之郷廃寺出土瓦[1]と比較すると、縄目叩きには、縄目叩きⅠ・縄目叩きⅡが、斜格子叩きには格子叩きⅦ・格子叩きⅠが認められる。一方、北条遺跡で認められた格子叩きは市之郷廃寺では認められない。逆に、市之郷廃寺で多く認められた平行叩きは全く出土していない。

（３）丸瓦

概　　要　微凹地とＳＨ05・ＳＥ01・Ｐ41・ＳＢ13から出土している。量的に少なく、残存状況も小片であるため、詳細な検討を加えることは困難である。いずれも、凹面には布目が認められ、凸面はナデ調整により仕上げられている。これらの丸瓦のなかで、ＳＢ13とＳＨ05から出土している丸瓦が、玉縁式に分類されるものである点が、一つの特徴として指摘することができる。

（４）小結

これらの瓦の時期であるが、共伴土器等から、奈良時代の範疇で理解できるものと考えられる。また、市之郷廃寺出土瓦と比較して、①須恵質焼成を基本とする、②焼成不十分の製品を多く含む、③平瓦の叩き目、④丸瓦に玉縁式が認められる、などの点に類似した特徴を認めることができる。

〔註〕

（１）山田清朝『市之郷遺跡－JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－』兵庫県教育委員会　2005

３．火打金について

Ｐ36から火打金が１点（Ｍ１）出土している。山形に分類されるもので、一般的に多く認められる紐穴は認められない（第156図）。

第156図　M1Ｘ線透過写真

火打金の時期　この火打金の時期についてであるが、Ｍ１が出土した柱穴内からは、土師器の杯が共伴している。この杯は、図化できなかったが、本章第１節の杯Ａa1に分類されるもので、平城宮土器Ⅲを中心とした時期に位置付けられるものである（第５章第１節）。したがって、火打金についても、奈良時代中期まで遡る可能性が非常に高いものといえる。

類　　例　ところで、火打金は大きく、山形・鋌形・短冊形の３タイプに分類できる。このなかで、山形の火打金については、兵庫県下では今回報告する例を除いて、25例報告されている（第46表）。これらの多くは、平安時代後期から鎌倉時代前半にかけてのものが多く、奈良時代まで遡る例は認められない。山形の火打金は、全国では200例以上知られている。このなかで、最も確実に古く位置付けられるのが、南栗遺跡（長野県松本市）竪穴遺構出土例[1]・平城京右京八条一坊十一坪の西一坊坊間大路西側溝ＳＤ920出土例[2]・山田水呑遺跡(千葉県東金市)竪穴住居出土例[3]・高沢遺跡（千葉県）竪穴住居出土例[4]・将監塚・古井戸遺跡（埼玉県本庄市）竪穴住居出土例[5]などで、その例は限られている。いずれも奈良時代まで遡るとされている。北条遺跡出例は、これらの古く位置付けられる一群に含まれる一資料といえるものである。

以上から、当遺跡出土の火打金については、山形タイプでは、少なくとも最も古い部類に位置付けられるものである。もちろん、兵庫県下では最も古く位置付けられるものである。

〔註〕

（１）市村勝巳『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書８　北栗遺跡』日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・（財）長野県埋蔵文化財センター　1990

（２）巽淳一郎『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所　1984

（３）松村恵司他『山田水呑遺跡－上総国山邊郡山口郷推定遺跡の発掘調査報告書－』日本道路公団・山田遺跡調査会　1977

（４）高島幸男『火の道具』柏書房　1985

（５）赤熊浩一・富田和夫他『将監塚・古井戸－歴史時代編Ⅱ　児玉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1988

第46表　兵庫県下　出土山形火打金一覧

No.	遺跡名	住所	報告No.	出土遺構	時期	文献
1	二郎宮ノ前遺跡	神戸市北区	Ｆ11	包含層	鎌倉時代(12世紀～14世紀)	1
2	伊丹郷町	伊丹市宮ノ前	751	ＳＥ3002	江戸時代後半(17世紀後葉～18世紀中頃)	2
3	二葉町遺跡	神戸市長田区	623	ＳＤ304	平安時代後期(11世紀末～12世紀初頭)	3
4	加都遺跡	朝来市和田山町	M30	ＳＫＣ008	平安時代後期(11世紀末)	4
5	中郷朝日遺跡群	豊岡市中郷	12	溝	戦国時代(16世紀中頃以降)	5
6	国領遺跡	丹波市春日町	20	柱穴984	平安時代後期～鎌倉時代前半(11ｃ後半～13ｃ中頃)	6
7	横田遺跡	丹波市氷上町	Ｍ２	木棺墓	鎌倉時代初頭(12～13世紀)	7
8	火山遺跡	丹波市春日町	M172	溜り状遺構	鎌倉時代初頭	8
9	初田館跡	篠山市初田	Ｆ２	墓１	鎌倉時代前半(13ｃ前半)	9
10	箱塚古墳群	篠山市西紀町	Ｆ20	近世墓	近世	9
11	箱塚古墳群	篠山市西紀町	Ｆ22	近世墓	近世	9
12	箱塚古墳群	篠山市西紀町	Ｆ23	近世墓	近世	9
13	箱塚古墳群	篠山市西紀町	Ｆ24	近世墓	近世	9
14	思い出遺跡群	多可郡中町	14－Ｆ１	墓１	平安時代末～鎌倉時代初頭	10
15	思い出遺跡群	多可郡中町	14－Ｆ６	墓２	平安時代末～鎌倉時代初頭	10
16	田野口・箆町遺跡	多可町中区	Ｆ10	土坑６	12世紀末	11
17	糀屋・里の垣内遺跡	多可町中区	Ｆ４	溝４	鎌倉時代前半	12
18	淡河木津遺跡	神戸市北区	3	ＳＴ01(土坑墓)	鎌倉時代前半(13世紀前半)	13
19	垂水・日向遺跡	神戸市垂水区	20	ＳＢ13　SP02	平安時代末～鎌倉時代前半(12～13世紀)	14
20	勝手野古墳群	小野市黍田町	1065	１号墳石室内	平安時代後期？	15
21	生栖遺跡	宍粟市一宮町	Ｍ８	黒褐色土	鎌倉時代以降	16
22	中谷遺跡	たつの市揖西町	M29	包含層		17
23	福田片岡遺跡	たつの市誉田町	277	Ｐ430	鎌倉時代以降？	18
24	福田片岡遺跡	たつの市誉田町	278	ＳＤ16	室町時代前半(14世紀～15世紀前半)	18
25	福田片岡遺跡	たつの市誉田町	279	ⅡＳＫ12	鎌倉時代以降？	18

〔文献〕

1．山上雅弘『公園都市線（第２期）車両留置施設設置事業に伴う　二郎宮ノ前遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会　2001

2．長谷川　眞『伊丹郷町発掘調査報告書』兵庫県教育委員会　1993

3．川上厚志『二葉町遺跡発掘調査報告書　第３・５・７・８・９・10次調査』神戸市教育委員会　2001

4．甲斐昭光『加都遺跡Ⅰ－播但連絡有料道路５期合併施工事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会　2005

５．中村由美『中郷朝日遺跡群－簡易水道排水池建設に伴う中世山城などの発掘調査報告書－』豊岡市教育委員会　2002
６．村上泰樹『国領遺跡（Ⅱ）－近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書ＸＸＩ－』兵庫県教育委員会　1993
７．久保弘幸『横田遺跡・横田北古墳群発掘調査報告書』兵庫県教育委員会　2006
８．中川　渉『火山古墳群　火山城跡　火山遺跡－一般国道483号北近畿豊岡自動車道（春日和田山道路Ｉ）建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告Ｉ－』兵庫県教育委員会　2005
９．岡崎正雄『初田館跡　近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書（ＸⅨ）』兵庫県教育委員会　1992
10. 宮原隆文『思い出遺跡群Ⅳ』兵庫県多可郡中町教育委員会　2002
11. 宮原文隆『田野口・箆町遺跡Ⅱ－中町東線建設に係る文化財発掘調査－』兵庫県多可郡多可町教育委員会　2007
12. 宮原文隆『糀屋・里の垣内遺跡－糀屋中村町中央線に係る埋蔵文化財調査－』兵庫県多可郡中町教育委員会　1999
13. 川上厚志「淡河木津遺跡　第１次調査」『平成９年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2000
14. 谷　正俊『垂水・日向遺跡　第１、３、４次調査』神戸市教育委員会・財団法人神戸市スポーツ教育公社　1992
15. 井守徳男『勝手野古墳群』兵庫県教育委員会　2002
16. 小川良太『生栖遺跡－県道八鹿山崎線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会　2005
17. 別府洋二『小犬丸　中谷廃寺　中谷遺跡・中谷古墳－山陽自動車道新宮インターチェンジ建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２－』兵庫県教育委員会　2006
18. 岡崎正雄『福田片岡遺跡－太子・竜野バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会　1991

第２節　遺構

１．はじめに

前節での土器の分析結果をふまえ、遺構の変遷をまとめていく。特に、当遺跡の中心時期をなす奈良時代については、遺構の変遷が複雑である。当該期の遺構の変遷を中心に検討していくことにする。

２．縄文時代～弥生時代前期（第158図）

当該期は、縄文時代後期と縄文時代晩期～弥生時代前期の大きく２時期からなる。

縄文時代後期　遺構としては、ＳＫ06に限られる。この他、微凹地から当該期の土器がわずかではあるが出土している。また、時期を特定できなかったが、いくつかの土坑が当該期に位置付けられるものと考えられる。

縄文時代晩期～弥生時代前期　当該期の遺構は認められず、すべて微凹地から出土している。土器は、晩期中葉から後葉までと時期巾が認められる。弥生時代前期の土器のなかには古く位置付けられる土器が認められることから、縄文時代晩期後葉と平行する可能性が考えられる。

３．弥生時代中期（第159図）

当該期の遺構は認められない。土器がわずかではあるが、微凹地から出土している。

４．弥生時代後期～古墳時代前期（第159・160図）

前節で検討したように、後期中葉・庄内併行期・布留式の３時期に細分できる。後期中葉のＳＤ03を除いては、当該期の遺構は調査区西側に偏在している。

後期中葉　遺構としては、ＳＨ03とＳＤ03が挙げられる。この他、微凹地から当該期の土器が少なからず出土している。

庄内併行期　遺構としては、ＳＤ01が挙げられる。この他、微凹地から当該期の土器が少なからず出土している。

布留式期　遺構としては、ＳＨ01・ＳＨ02が挙げられる。両住居跡については、近接すること、その方向性が異なることなどから、時期を多少違える可能性が考えられる。しかし、土器からはその前後関係を明らかにすることはできない。

５．古墳時代後期（第161図）

前節で検討したように、ＭＴ15型式段階とＴＫ217段階の２時期に細分できる。弥生時代後期～古墳時代前期同様、当該期の遺構は調査区西側に偏在する傾向が認められる。唯一、Ｐ01が調査区中央部で検出されている。

ＭＴ15型式　ＳＨ04のみである。

TK217型式　Ｐ01・ＳＤ04・ＳＤ05が該当する。この他、ＳＢ01については、Ｐ６から出土した土器が、小片のため詳細な検討は困難であるが、当型式のなかで最も古く位置つけられるものと考えられる。このように、当期の遺構間には若干の時期差が認められ、ＳＢ01・Ｐ01

（飛鳥Ⅰ期）→ＳＤ04（飛鳥Ⅱ期）→ＳＤ05（飛鳥Ⅲ期）と変遷するものと考えられる。

小　　結　以上のように、ＭＴ15型式段階からＴＫ217段階への変遷において、竪穴住居から掘立柱建物への変化を観ることができる。

６．奈良時代の遺構（第162図～第165図）

当該期の遺構の時期については、前節での検討結果の通りである。しかし、出土土器のみからは時期を特定できない遺構も多いのが実情である。さらに、前節で出土遺物を検討したが、出土遺物のみから時期を特定することは困難な状況である。

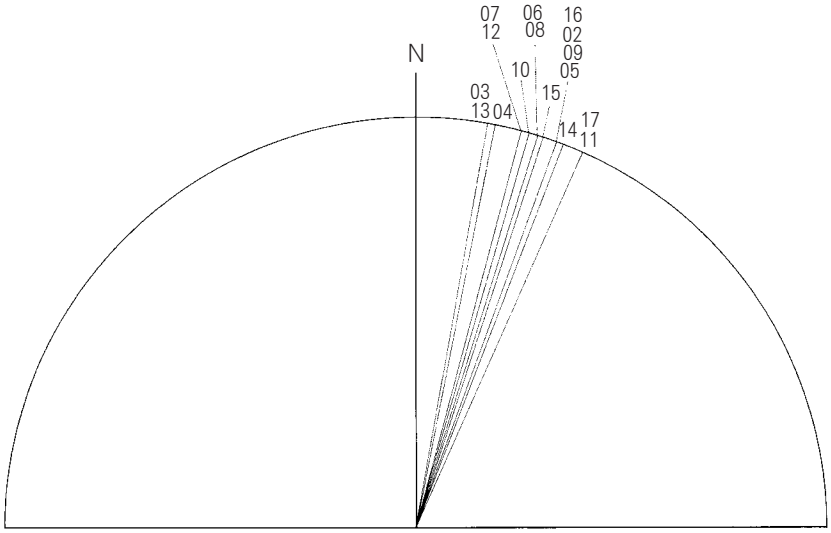
分析方法　そこで、本項では、掘立柱建物跡・溝・畠跡を中心に、主要遺構の時期について、遺構相互の切り合い関係および遺構の方位等を考慮に、検討していくことにする。出土遺物の時期については、大まかな傾向として理解していくことにする。

切り合い関係の整理　まず、主要遺構の切り合い関係について、整理しておきたい。調査区中央部のＳＢ04及び畠２～畠６については、ＳＢ04・畠４→畠６→畠３→畠２・畠５と変遷を復元することができる。ただし、ＳＢ04と畠４、畠２と畠５については、その前後関係を明らかにすることは困難である。

調査区中央部北東部では、畠９→ＳＫ32→ＳＤ24と畠９→畠８→畠７→ＳＢ13の変遷を復元することができる。畠７とＳＢ13については、直接の切り合い関係は認められないが、両遺構の出土土器から、その前後関係を判断した。

この他、畠１→ＳＢ03、ＳＤ22→ＳＢ08の関係を復元することができる。

建物の棟軸方向　当該期の掘立柱建物跡の棟軸方位をまとめたのが、第157図である。これによると、Ｎ10°ＥからＮ16°Ｅの範囲にあり、顕著な差は認められない。このなかにあって、ＳＢ03・ＳＢ04・ＳＢ13が他とは若干方位を異にし、ひとつのグループを形成している。



第157図　奈良時代掘立柱建物の棟軸方向（数次は建物番号）

時期の設定　上記の切り合い関係および前節での出土土器の検討結果をもとに、奈良時代中期と同後期以降の２時期（Ⅰ期・Ⅱ期）にわけて、遺構の変遷を検討していきたい。なお、微凹地については、Ⅰ期・Ⅱ期を通じて機能していたものと考えられる。

Ⅰ　　期　　３小期（Ⅰ－１期～３期）に細分できる。

Ⅰ－１期　当期に位置付けられるのが、ＳＤ26である。畠１と畠４についても、同じく平城Ⅲの遺構（ＳＢ03・畠６）に切られていることから、当該期に位置付けられる。ＳＢ04に関しても、遺構の平城Ⅲの遺構（畠６）に切られることの理由からは、当該期に位置付けるべきであるが、畠４と平面的に重複すること、後述するＳＢ03と棟軸方向をほぼ同じくすることから、次期に位置付けたい。なお、これらの遺構の具体的な時期の特定は困難で、平城Ⅲの遺構より古いことは明らかである。

この他、ＳＤ18についても、畠６に切られ、次期のＳＢ04との平面的な重複、畠４との方向性の一致から、当該期に位置付けられる可能性が高い。また、畠９に切られるＳＫ34も、当該期に位置付けられる。

Ⅰ－２期　平城ⅢのＳＢ03・畠９が挙げられる。加えて、前期に位置付けられなかったＳＢ04が位置付けられる。また、後述するように、次期に位置付けられるＳＢ08に切られているＳＤ22についても、当該期に位置付けられる。さらに、出土土器から平城宮土器Ⅲに位置付けられるＳＨ05とＳＥ01についても、当該期に位置付けたい。これを指示するように、ＳＨ05の方向性は、ＳＢ03・ＳＢ04の棟軸方向とほぼ一致する。

Ⅰ－３期　まず畠９を切るＳＫ32が挙げられる。この他、前期まで位置つけられなかった遺構のなかで、出土土器から平城宮土器Ⅲに位置付けられる畠６・ＳＢ06及びＳＢ06と棟軸方向が一致するＳＢ15・ＳＢ08も当該期に位置付けられる。

この他、時期を特定できないが、Ｐ05・Ｐ19・Ｐ30・Ｐ31・Ｐ34・Ｐ36・Ｐ37・Ｐ39・Ｐ43・Ｐ45・ＳＫ22・ＳＤ13などが、Ⅰ期に位置付けられる。さらに、後述するⅡ－２期以降のＳＤ10に切られるＳＤ09も、当該期に位置付けられる。

Ⅱ　　期　　５小期（Ⅱ－１期～５期）に細分できる。

Ⅱ－１期　当期の遺構として、ＳＢ09・ＳＤ24・畠３・畠８が挙げられる。また、ＳＢ02・ＳＢ05・ＳＢ16に関しても、棟軸方向がほぼ同じことから、当期に位置付けられるものと考えられる。この他、ＳＤ08に関しても、出土土器から判断して、当該期に位置付けられるものと考えられる。さらにＳＤ07も、ＳＤ08の延長と考えられることから、当該期に位置付けられる。

Ⅱ－２期　出土土器から畠７とＳＢ11が挙げられる。他に、ＳＢ14とＳＢ17の棟軸方向がＳＢ11とほぼ一致し、畠７と平面的に重複しないことから、当該期に位置付けたい。畠７と建物の方向性もほぼ一致する。

ところで、これらの遺構については、後述するⅡ－３期の遺構と、直接的に前後関係を判断することは困難である。ただし、ＳＢ17出土土器にやや古い傾向が認められることから、Ⅱ－１期に続く遺構と判断したものである。

この他、畠３を切るＳＤ17についても、他の遺構と方向性がほぼ一致することから、当該期に位置付けられるものと考えられる。また、これと方向がほぼ一致するＳＤ20も当該期に位置付けられる。

Ⅱ－３期　Ⅱ－２期の畠７に切られ、出土土器がⅡ－４期の遺構より比較的古い、ＳＢ13が位置付けられる。

第47表　奈良時代の遺構一覧

時期		竪穴住居・掘立柱建物	土坑他	溝	畠	その他
Ⅰ期	1		ＳＫ34	ＳＤ26・ＳＤ18	畠１・畠４	Ｐ05・Ｐ19・Ｐ30・Ｐ31 Ｐ34・Ｐ36・Ｐ37・Ｐ39 Ｐ43・Ｐ45・ＳＫ22・ＳＤ09・ＳＤ13
	2	ＳＨ05・ＳＢ03・ＳＢ04	ＳＥ01	ＳＤ22	畠９	
	3	ＳＢ06・ＳＢ08・ＳＢ15	ＳＫ32		畠６	
Ⅱ期	1	ＳＢ02・ＳＢ05・ＳＢ09 ＳＢ16		ＳＤ07・ＳＤ08 ＳＤ24	畠３・畠８	Ｐ08・Ｐ09・Ｐ13～Ｐ17 Ｐ21～Ｐ24・Ｐ29・ＳＫ09 ＳＫ15・ＳＫ23・ＳＫ24 ＳＫ26・ＳＫ36・ＳＤ10～ ＳＤ12・ＳＤ21・ＳＤ23
	2	ＳＢ11・ＳＢ14・ＳＢ17		ＳＤ17・ＳＤ20	畠７	
	3	ＳＢ13				
	4	ＳＢ10			畠２・畠５	
	5	ＳＢ07・ＳＢ12		ＳＤ19		

Ⅱ－４期　前期の畠３との切り合い関係から、畠２・畠５が挙げられる。また、ＳＢ10に関しても、出土土器からほぼ同時期と考えられる。平面的に上記の遺構と一致せず、方位も畠２・畠５とほぼ一致する。

Ⅱ－５期　出土遺物からＳＢ12が位置付けられる。また、ＳＢ07についても、棟軸方向がほぼ一致することから、当該期に位置付けられるものと考えられる。また、前期の畠５を切るＳＤ19についても、当該期に位置付けられる。

この他、時期を特定できないが、出土土器および切り合い関係から、Ｐ08・Ｐ09・Ｐ13～Ｐ17・Ｐ21～Ｐ24・Ｐ29・ＳＫ09・ＳＫ15・ＳＫ23・ＳＫ24・ＳＫ26・ＳＫ36・ＳＤ10・ＳＤ21・ＳＤ23などが、Ⅱ期に位置付けられる。ＳＤ10については、ＳＤ08との切り合い関係から、Ⅱ－２期以降に位置付けられる。さらに、ＳＤ09を切るＳＤ12、そしてＳＤ12の延長と考えられるＳＤ11も、当該期に位置付けられる。

小　　結　以上をまとめたのが、第47表である。この他、ＳＤ16については、畠２に切られていることから、Ⅱ－３期以前に位置付けられる。なお、奈良時代の遺構として報告しながら、第47表に掲載されていない遺構については、Ⅰ期・Ⅱ期の特定も困難な遺構である。

また、当該期の遺構の分布であるが、調査区中央部に集中し、古墳時代後期までとは明らかに異なる。その原因を明らかにすることは困難であるが、居住域が限られていた様相を示している。

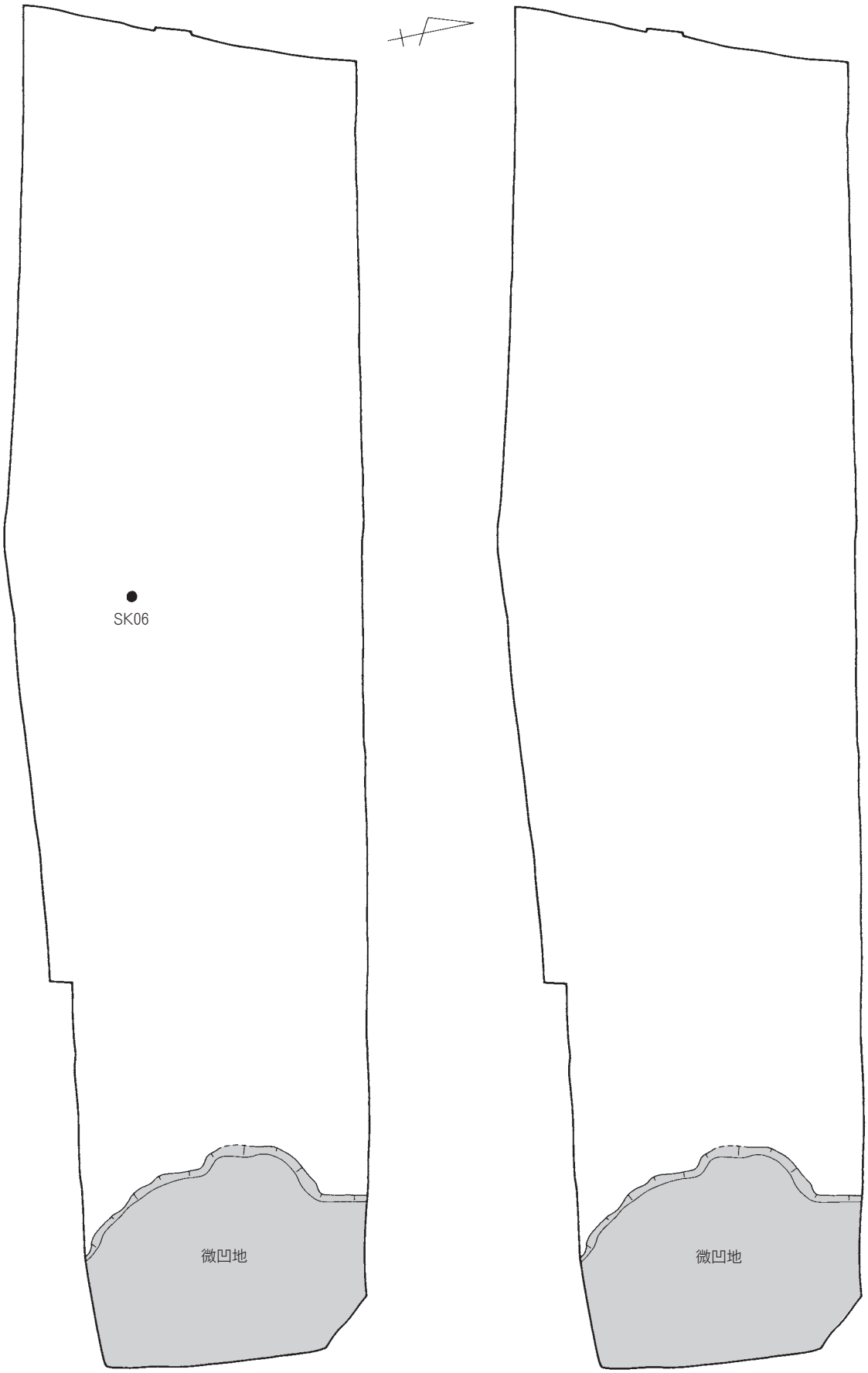
７．平安時代後期の遺構（第166図）

時期の特定できるＰ48・Ｐ50・ＳＫ37については、いずれも11世紀後半を中心とした時期に位置付けられる。この他、微凹地からも当該期の土器が出土している。

８．江戸時代の遺構（第166図）

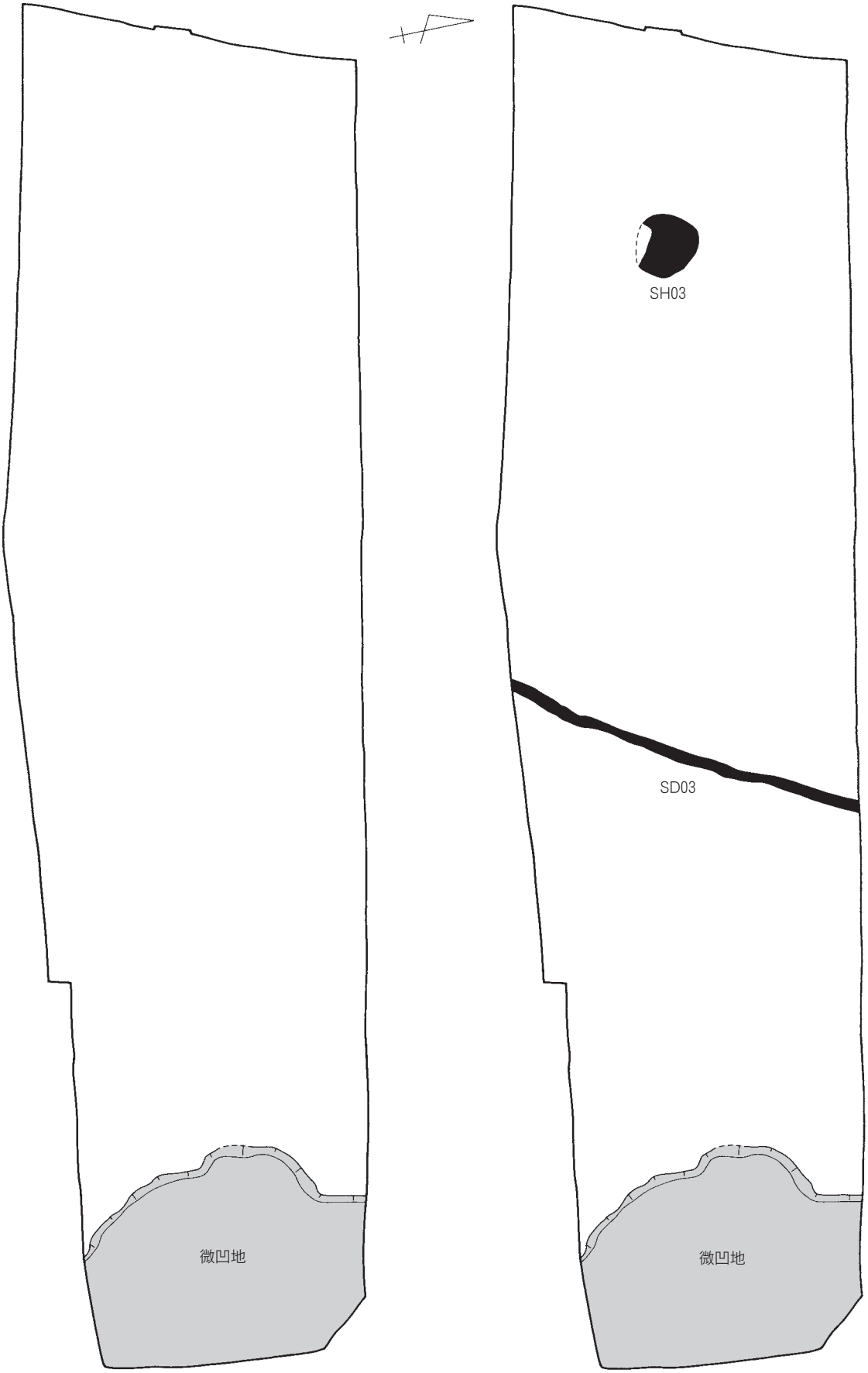
当該期の遺構は検出されていない。微凹地上層から17世紀初頭に位置付けられる土器が出土している。このことから、この時期に微凹地がほぼ完全に埋められたものと考えられる。その後、微凹地に18世紀・19世紀を通じて、土器が廃棄され続けたものと考えられる。

以上をまとめたのが、第158図～第166図である。



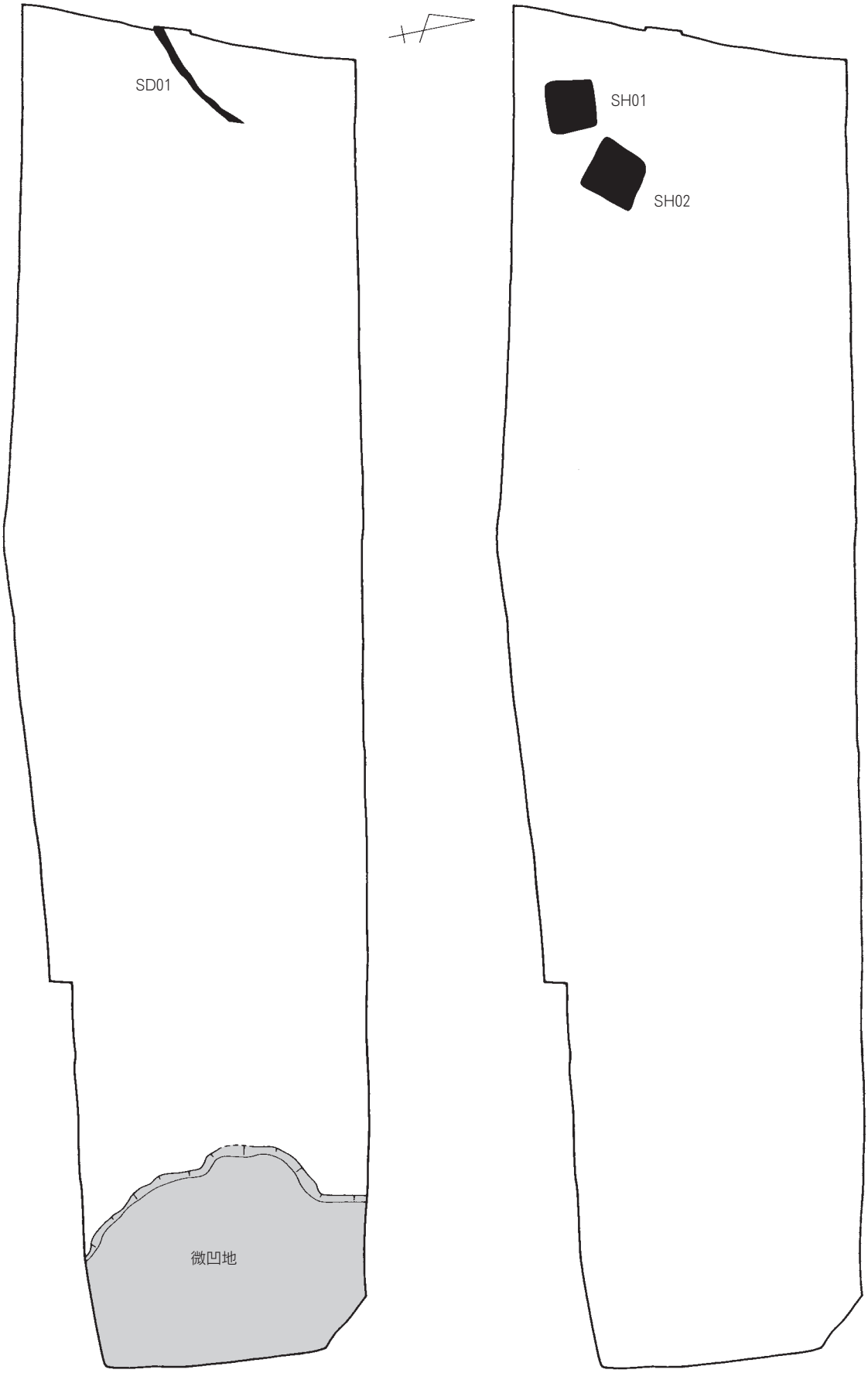
縄文時代後期　　縄文時代晩期～弥生時代前期

第158図　遺構の変遷（１）



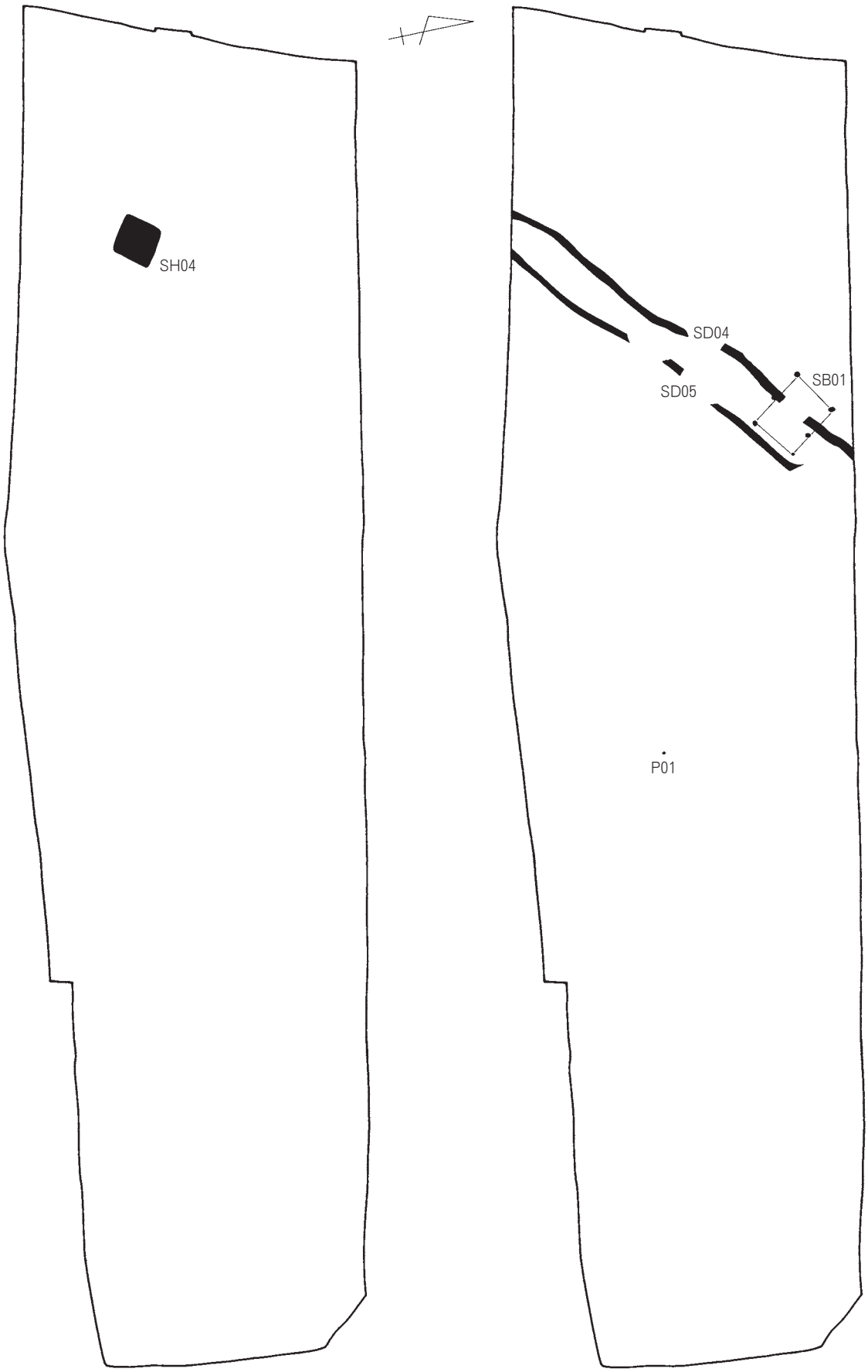
弥生時代中期　　弥生時代後期中葉

第159図　遺構の変遷（２）



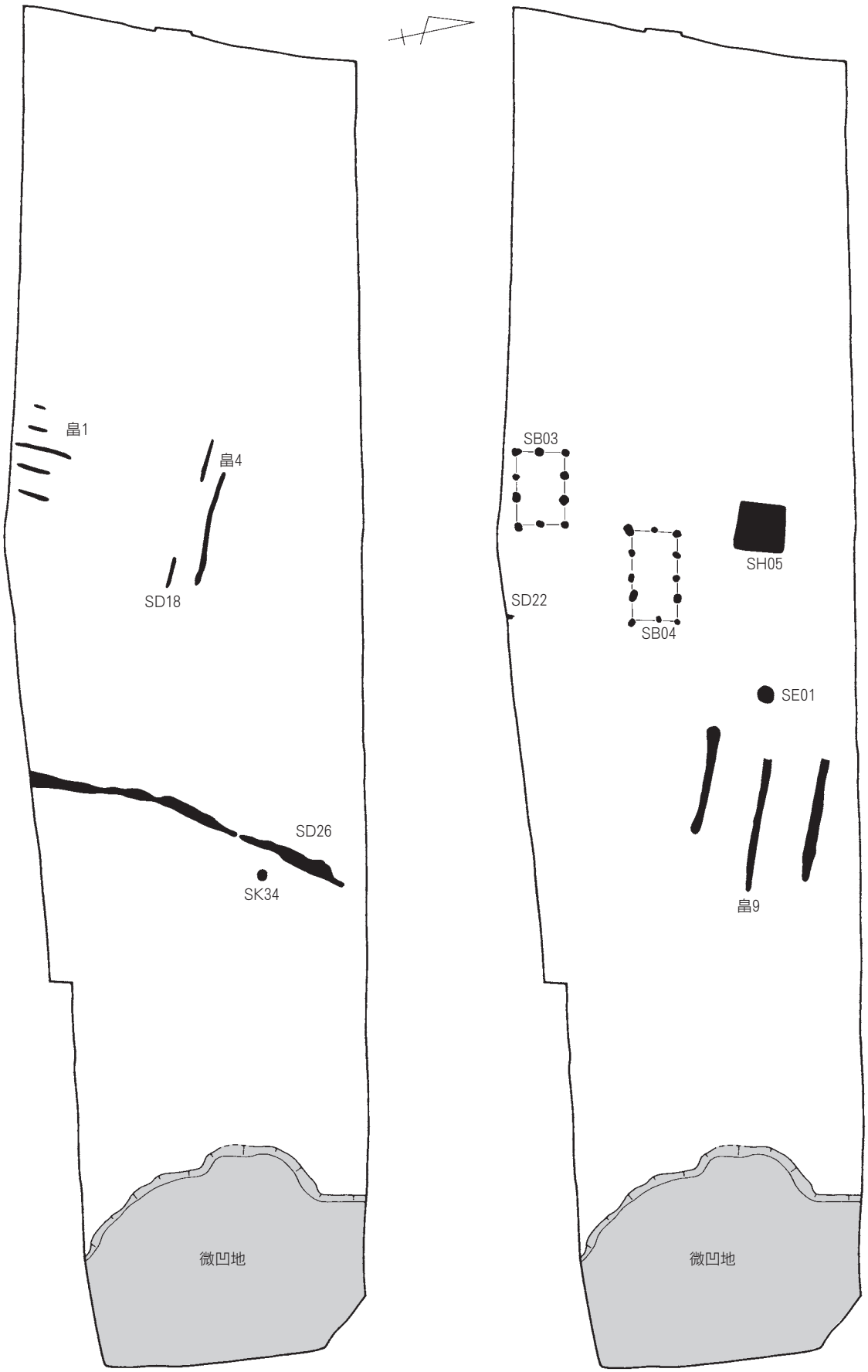
庄内併行期　　古墳時代前期

第160図　遺構の変遷（３）



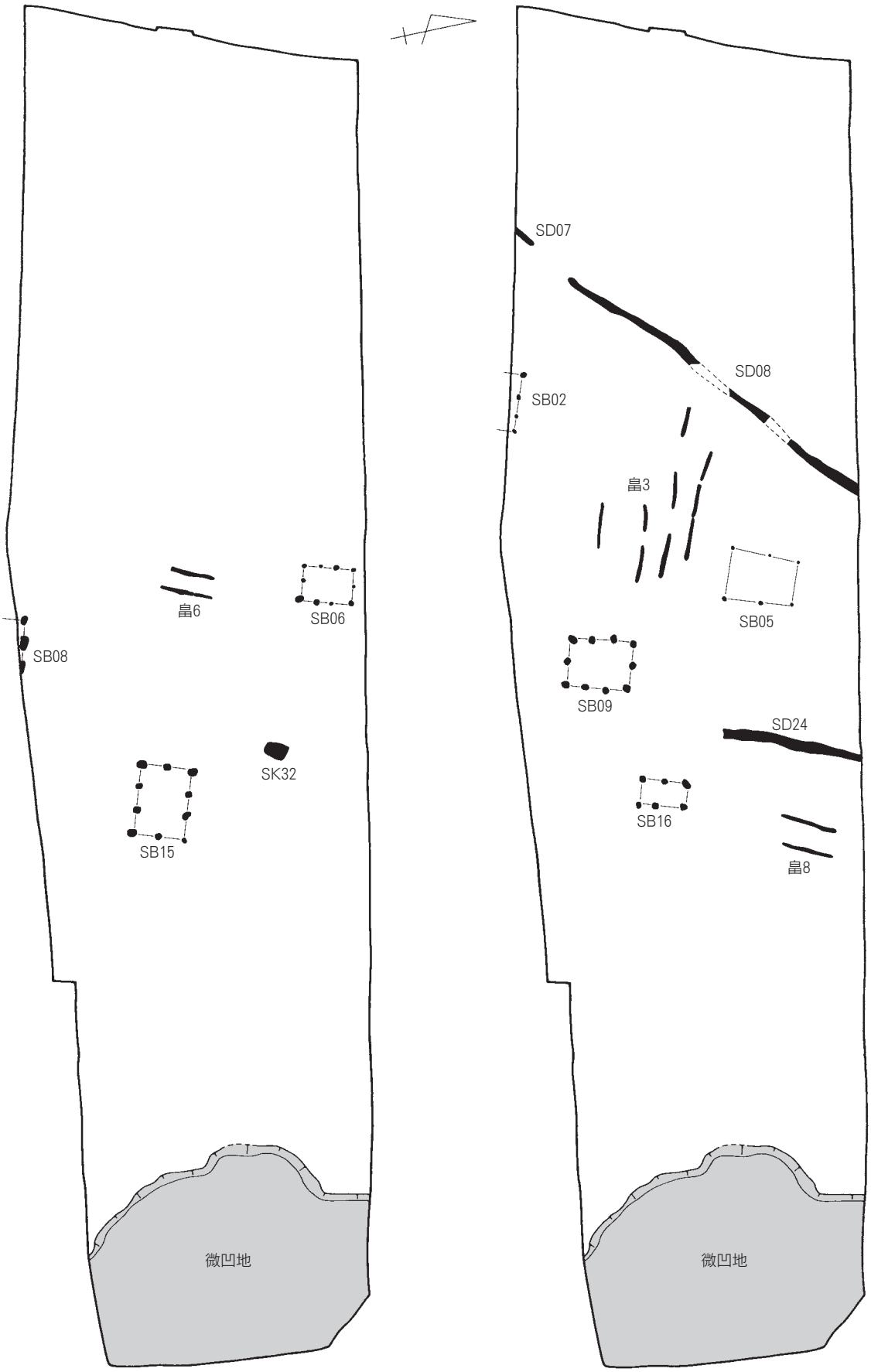
古墳時代後期（MT15型式）　　古墳時代後期（TK217型式）

第161図　遺構の変遷（４）



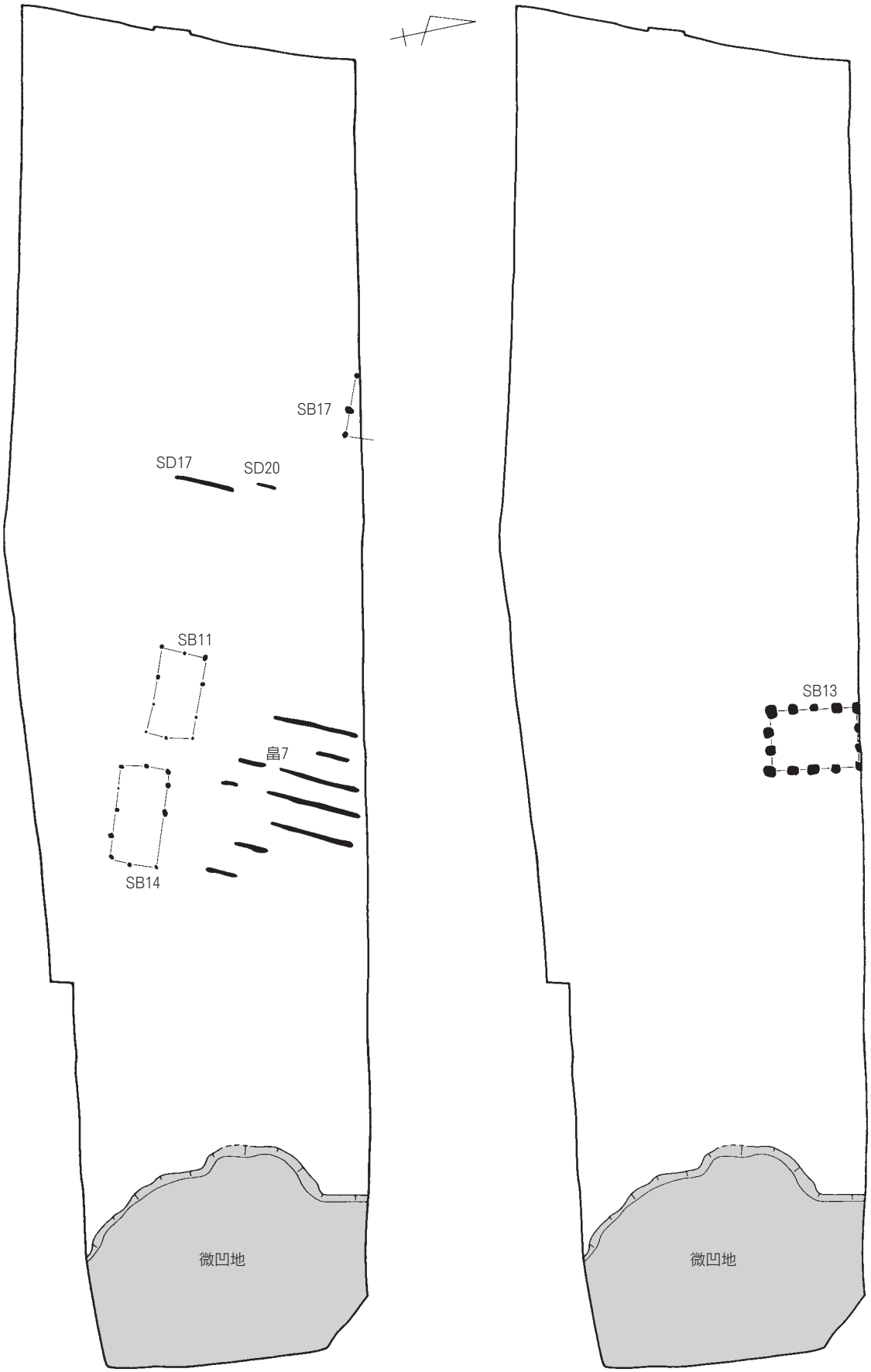
奈良時代（Ⅰ－１期）　　奈良時代（Ⅰ－２期）

第162図　遺構の変遷（５）



奈良時代（Ⅰ－３期）　　奈良時代（Ⅱ－１期）

第163図　遺構の変遷（６）

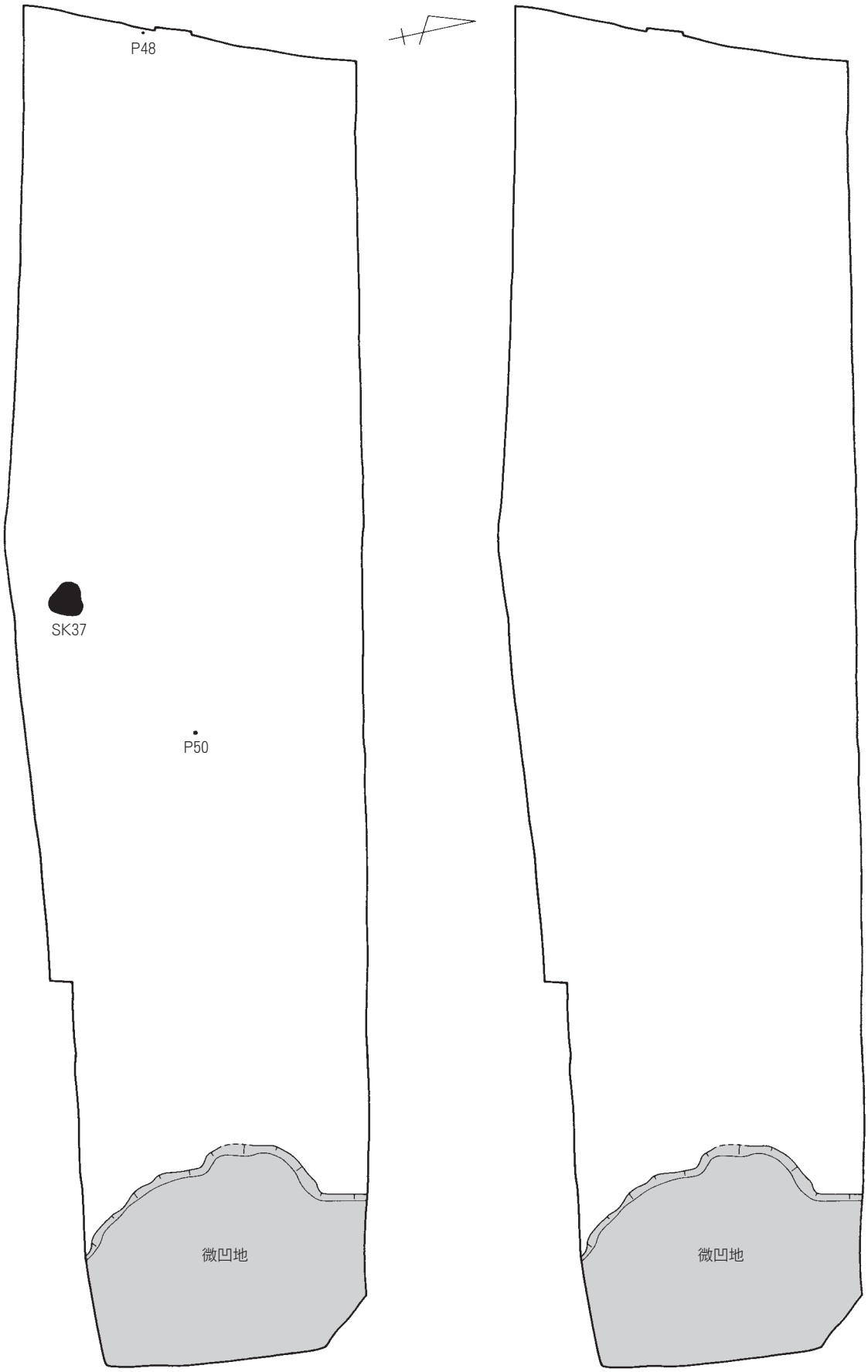


奈良時代（Ⅱ－２期）　　奈良時代（Ⅱ－３期）

第164図　遺構の変遷（７）

奈良時代（Ⅱ－４期）　　奈良時代（Ⅱ－５期）

第165図　遺構の変遷（８）



平安時代後期　　江戸時代

第166図　遺構の変遷（９）

９．小結

はじめに　第158図～第166図から明らかなように、今回報告する調査地においては、奈良時代の遺構・遺物が中心であることが明らかである。以下、奈良時代の遺構を中心に、気づいた点をまとめておきたい。

（１）遺構の変遷と立地

居住域の変化　今回調査した地区は、完新世段丘Ⅰ面に立地するものと考えられる（第１章第１節）。このため、縄文時代後期以降、顕著な地形環境の変化を認めることはできない。ただし、調査地内において、西側から東側の微凹地に向けて傾斜していることは明らかである。このことは、調査区の西側ほど後世の削平を受けている可能性が考えられる。この結果、調査区西側での遺構の検出がわずかであるという結果になった可能性が考えられる。

このような状況のなかで、弥生時代後期・古墳時代後期・奈良時代の居住域をみると、時期が新しくなるほど、東側つまり微凹地側へ移動している様子が理解できる。特に、古墳時代後期と奈良時代の間を境として、その差が顕著である。

地形環境の変化　以上から、当初、当遺跡の中心はより西側にあった可能性が考えられる。その後、微凹地の埋没に代表されるように、調査区の東側が地形的に安定し、居住域となっていったのではないかと考えられる。

（２）奈良時代の遺構群について

建物と畠　奈良時代の遺構は、掘立柱建物と畠が中心である。８期に細分したが、多くの小期において、建物と畠がセットとなっていたことが明らかとなった。これが、後世でいう屋敷地的な景観を示すものと考えられる。ただし、これらの建物群の性格等については、今後の検討課題としたい。

また、遺構の変遷において、竪穴住居が最も古く位置付けられ、その後は掘立柱建物に変っている。この変化は、畿内においては古墳時代後期において認められる現象である。先述した古墳時代後期において、当遺跡でも確認できた現象である。しかし、この変化が当遺跡では奈良時代においても見られる点が特筆すべき点と考えられる。

土地条件と畠　ところで、畠が盛んに作られた背景としては、先に述べたように、当遺跡が完新世段丘Ⅰ面に立地していることに、大いに起因するものと考えられる。つまり、完新世段丘Ⅰ面に立地することは、土地条件が比較的高燥であることを意味するからである。よって、水田より畠が選択されたものと考えられる。

（３）ＳＨ05について

概　要　奈良時代の遺構のなかで注目すべきは、ＳＨ05である。ＳＨ05は奈良時代中期（Ⅰ－２期）に位置付けられた竪穴住居である。一辺の中央部にカマドを有することから、竪穴住居であることは明らかである。一見したところ、古墳時代後期の住居と見違えるものである。ところが、床面を中心に出土した土器から、上記の時期に位置付けられることも明らかであ

る。これを肯定するように、床面から当該期の瓦片が少なからず出土している。

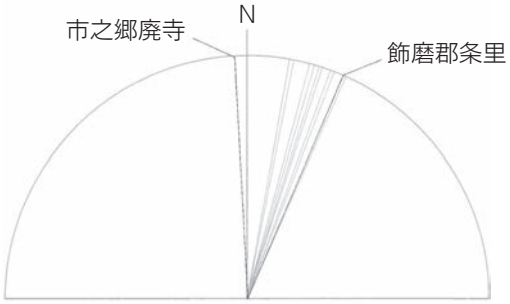
特　　徴　　このような、当該期の竪穴住居については、あまり類をみないものである。住居内からは、土器・瓦以外、特殊な遺物は出土していない。屋内施設についても、カマドが数次にわたり造り替えられている以外、特殊性は認められない。

ただし、出土した瓦類が市之郷廃寺で使用されたものと一部類似することから、居住者と市之郷廃寺との関係を探る必要はあろう。しかし、出土した瓦の使用目的等は調査では明らかにできなかった。

（４）奈良時代建物の方位について

建物の方位　　奈良時代の遺構の示す方位については、時期との間に相関関係を見出すことはできなかった（第157図）。

周辺遺跡の方位　これらの建物の方位と周辺遺跡の方位を比較してみたのが第167図である。これによると、白鳳時代まで遡る市之郷廃寺の方位[1]はＮ３°Ｗで、時代が異なることもあり、明らかに異なる。また、当地に復元される飾磨郡条里はＮ23°Ｅで[2]、特にＳＢ11・ＳＢ17とほぼ一致する。



第167図　建物の方位と周辺遺跡の方位

（５）ＳＨ03について

イチマル土坑　　当遺構については、出土土器から弥生時代後期中葉に位置付けた。ところで、この住居跡の屋内施設として、中央部にいわゆる「イチマル土坑」が認められる。イチマル土坑については、西播磨において弥生時代中期後半に一般的な屋内施設といわれている[3]。したがって、当住居跡で検出されたイチマル土坑は、他の例と比較して、極めて新しい時期に位置付けられるものである。

中央土坑　　播磨における当該期の竪穴住居の屋内施設の特徴としては、住居跡中央部に円形の土坑を掘り、その周囲にわずかな土手を有するタイプが一般的である。ＳＨ03の中央土坑においても、イチマル土坑の周囲に土手状の高まりが認められる。したがって、ＳＨ03で検出された中央土坑は、イチマル土坑から土手を有する中央土坑への過度的様相を示しているものと考えられる。同様の例は美乃利遺跡（加古川市）でも認められる[4]が、当遺跡より古く中期後半の住居に伴うものである。

〔註〕

（１）山田清朝『市之郷遺跡－JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－』兵庫県教育委員会　2005

（２）秋枝　芳『本町遺跡』姫路市教育委員会　1984

（３）多賀茂治「玉津田中遺跡の竪穴住居について」『玉津田中遺跡－第６分冊－　田中特定区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』兵庫県教育委員会　1996

（４）中村　弘「遺構の検討　第２節　住居跡」『美乃利遺跡』兵庫県教育委員会　1997

第６章　総括

はじめに　最後に、今回の調査で明らかとなった点を列挙し、本報告のまとめとしたい。

調査の成果

1．調査地は姫路平野下流域に位置し、完新世段丘Ⅰ面上に立地する。

2．調査で明らかとなった遺構・遺物は、大きく、①縄文時代後期～弥生時代前期、②弥生時代中期、③弥生時代後期～古墳時代前期、④古墳時代後期、⑤奈良時代～平安時代前期、⑥平安時代後期、⑦江戸時代初頭の、７時期からなる。

　これらのなかで、今回の報告の中心となったのは、⑤の奈良時代の遺構・遺物である。他の時期については、遺構も検出されているが、出土土器の多くは、微凹地から出土したものである。

3．縄文時代後期～弥生時代前期では、土坑以外顕著な遺構は検出されなかった。縄文晩期の土器のなかに、中部瀬戸内地域の土器が認められた。また、弥生前期の土器は当地域では最古の部類に位置付けることができた。

　さらに、縄文晩期と弥生時代前期の土器は、ほぼ同時期のものである可能性が考えられる。よって、突帯文土器と遠賀川系土器の共伴の実態を究明していくうえでの貴重な資料となりうるものと考えられる。

4．弥生時代後期～古墳時代前期においては、竪穴住居跡を中心とした遺構を検出した。弥生時代後期中葉に位置付けられた竪穴住居内で検出したイチマル土坑は、後期まで下がる他にあまり例をみないものである。

　また、庄内併行期の土器になかには、讃岐から搬入された壺や、在地産の庄内甕が出土している。

5．奈良時代～平安時代前期の遺構・遺物が、今回の報告の中心となるものである。奈良時代中期から後期にかけてが、その主要な時期である。掘立柱建物と畠がその中心となるもので、出土遺物および遺構相互の切り合い関係から、８期（Ⅰ－１期～Ⅱ－５期）にわたる遺構変遷を復元することができた。

　これらの遺構は、いくつかの時期において、掘立柱建物と畠がセットをなす景観を復元することができた。ただし、これらの遺構群の性格については究明することはできなかった。また、これらの遺構は、ほぼ同位置に集中し、幾度と建て替え・掘り替えが繰り返されている点が特徴的である。

　また、当該期の遺構のなかで注目されるのが、カマドを有する竪穴住居の検出である。当地域において、最も新しい時期の検出例になるものと考えられる。

6．奈良時代以前の遺構は、その分布の中心が西側にある。しかし、奈良時代以降は、調査区中央部に集中する傾向が認められる。

最後に　今回の調査で明らかとなった遺構、特に奈良時代の遺構について、その性格を明らかにすることはできなかった。当該期の遺構・遺物に関しては、近くにほぼ同時期の豆腐町遺跡が所在する。当該遺跡についても、ＪＲ山陽本線高架事業にともない発掘調査が行われている。したがって、豆腐町遺跡の調査成果と合わせ、当遺跡の遺構・遺物を検討する必要があるものと考えられる。

報　告　書　抄　録

ふりがな	ほうじょういせき
書名	北条遺跡
副書名	ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅲ
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第325冊
編著者名	山田　清朝・三辻　利一・藤根　　久・佐々木由香・中村賢太郎・竹原弘展
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	加古郡播磨町大中500
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650－8567　神戸市中央区下山手通５丁目10－１　　℡　078－362－3784
発行年月日	2008年（平成20年）３月21日

所収遺跡名（県遺跡番号）	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	調査番号					
北条遺跡（ほうじょういせき）（０２０４６０）	姫路市北条（ひめじしほうじょう）	28201	960042	34°49′34″	134°41′44″	平成８年８月５日～11月14日	3542㎡	ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北条遺跡	集落跡	縄文時代晩期	微凹地・土坑	土器・石棒・磨石	突帯文土器
		弥生時代前期	微凹地	弥生土器	
		弥生時代中期	微凹地	土器	
		弥生時代後期	竪穴住居・溝	土器	イチマル土坑
		古墳時代前期	竪穴住居・掘立柱建物・溝	土器	讃岐系壺・庄内甕
		古墳時代後期	竪穴住居・掘立柱建物・溝・柱穴	須恵器・土師器	
		奈良時代	竪穴住居・掘立柱建物・井戸・墓・土坑・溝・畠	須恵器・土師器・平瓦・丸瓦・火打金・馬歯	カマドをもつ竪穴住居
		平安時代後期	土坑・溝・柱穴	須恵器・土師器・銭	

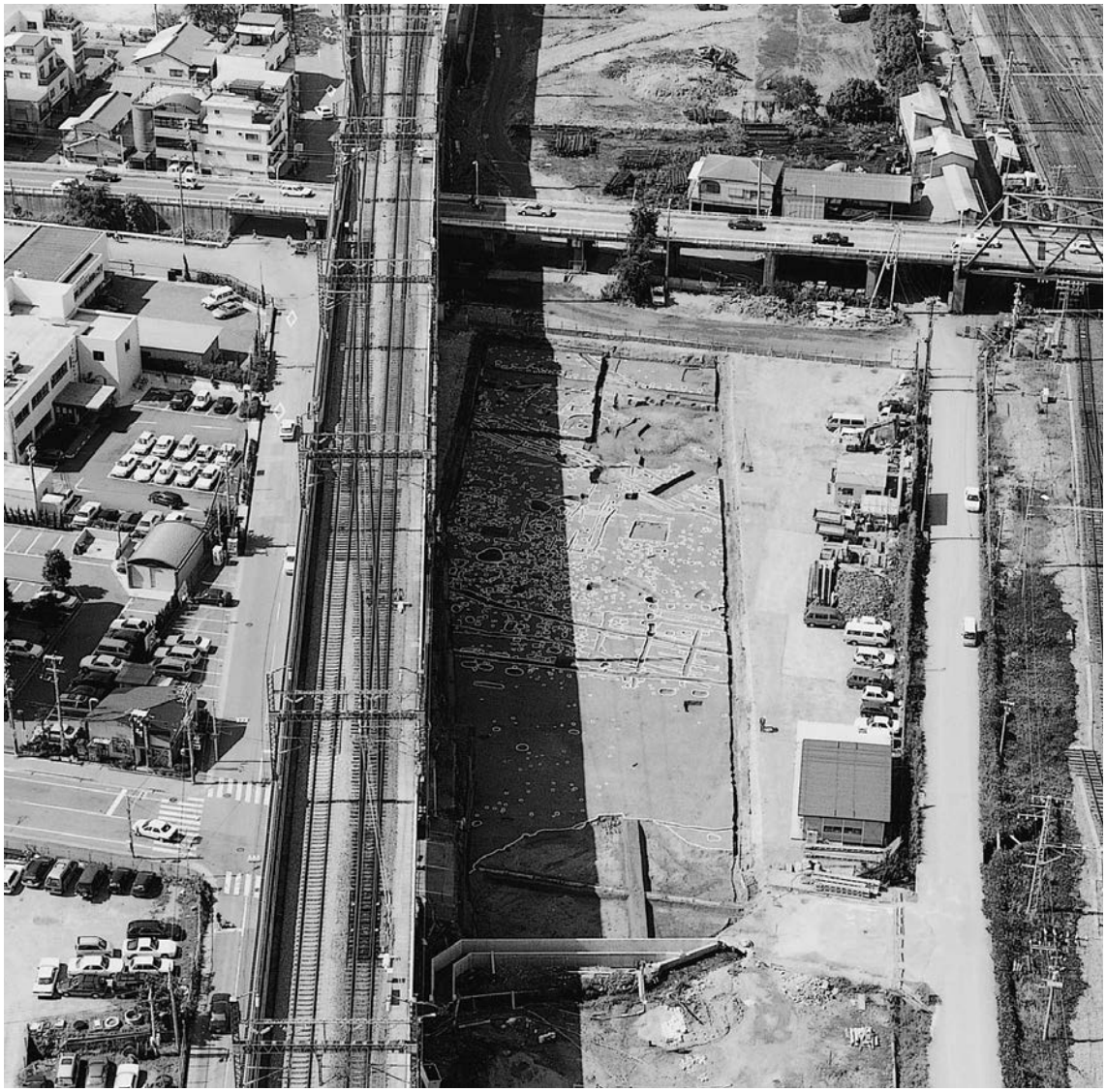
写　真　図　版

写真図版１　遺跡

遺跡の位置
（米軍撮影空中写真）

俯瞰　上空から

写真図版 3　遺構



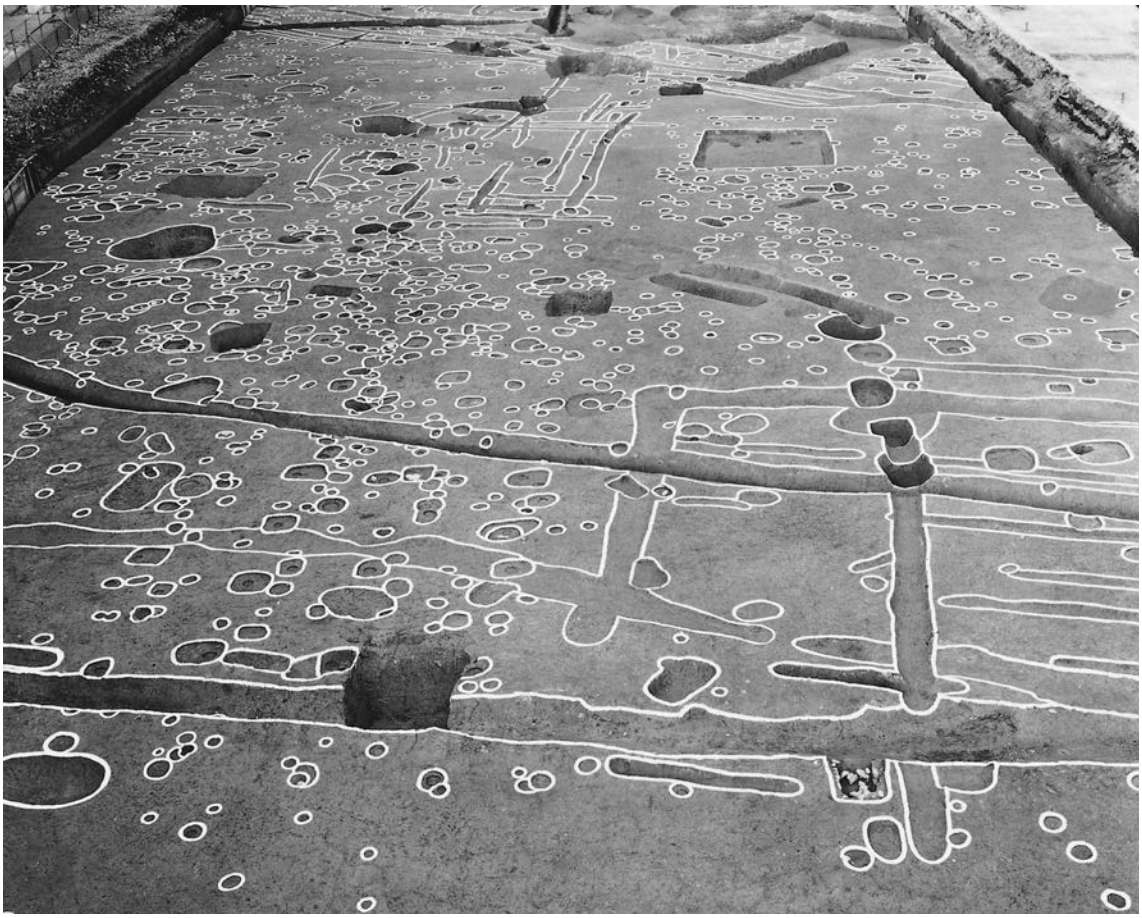
全景　東上空から

全景　東から

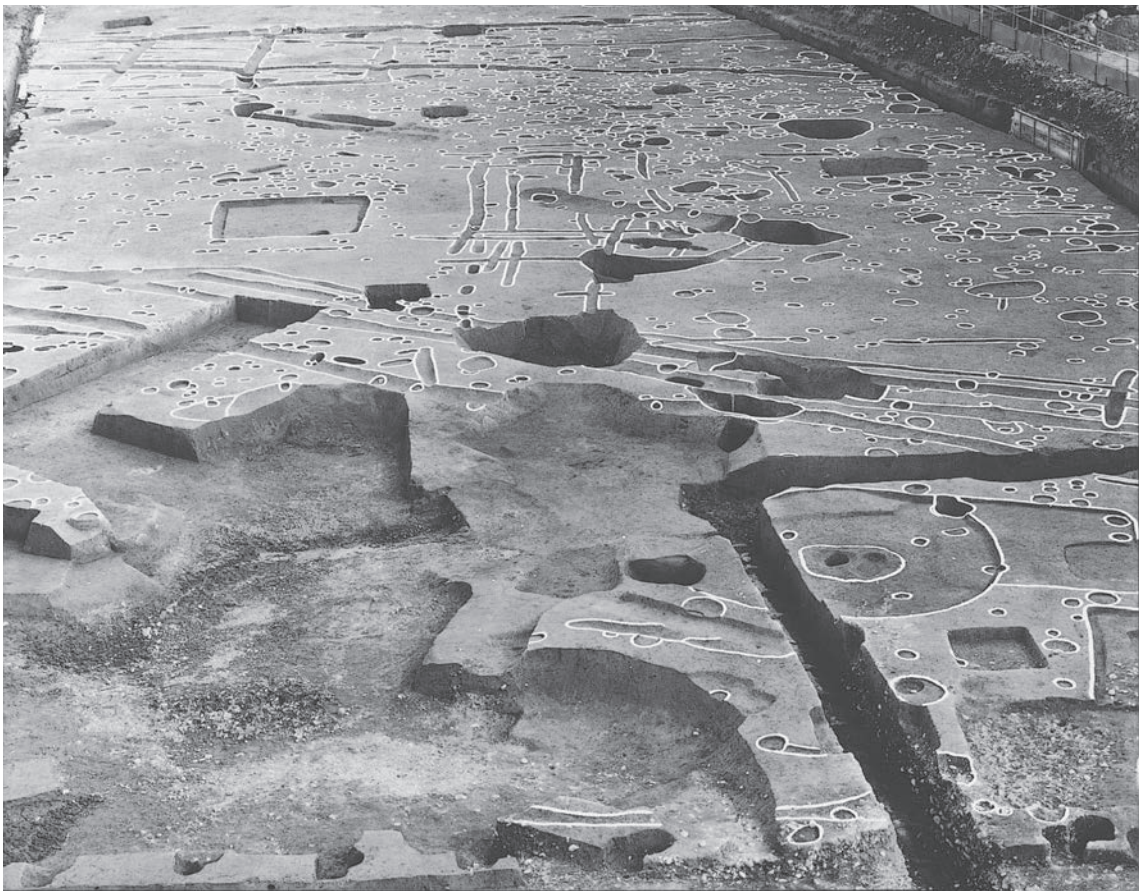
全景　西上空から

全景　西から

写真図版５　遺構



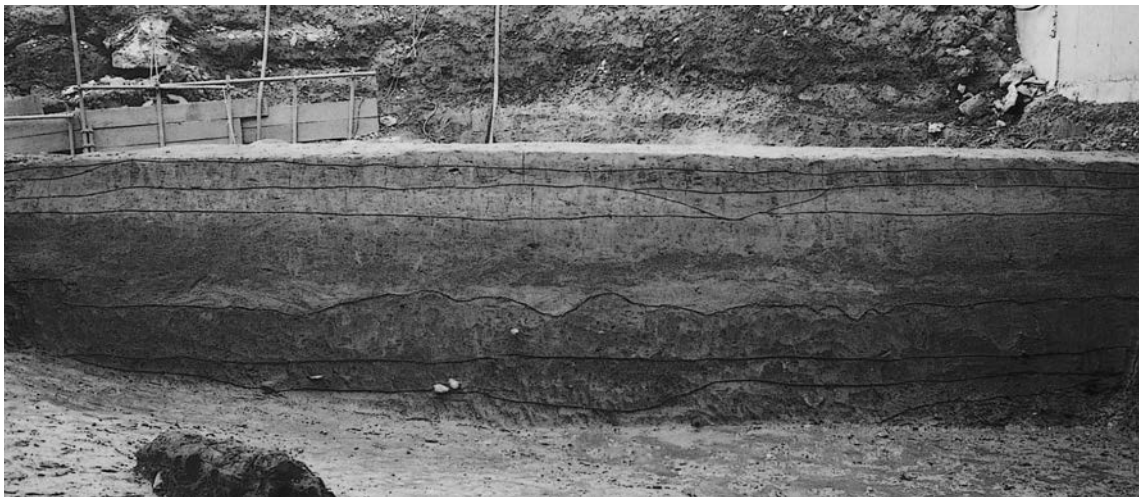
中央部　東から



中央部　西から

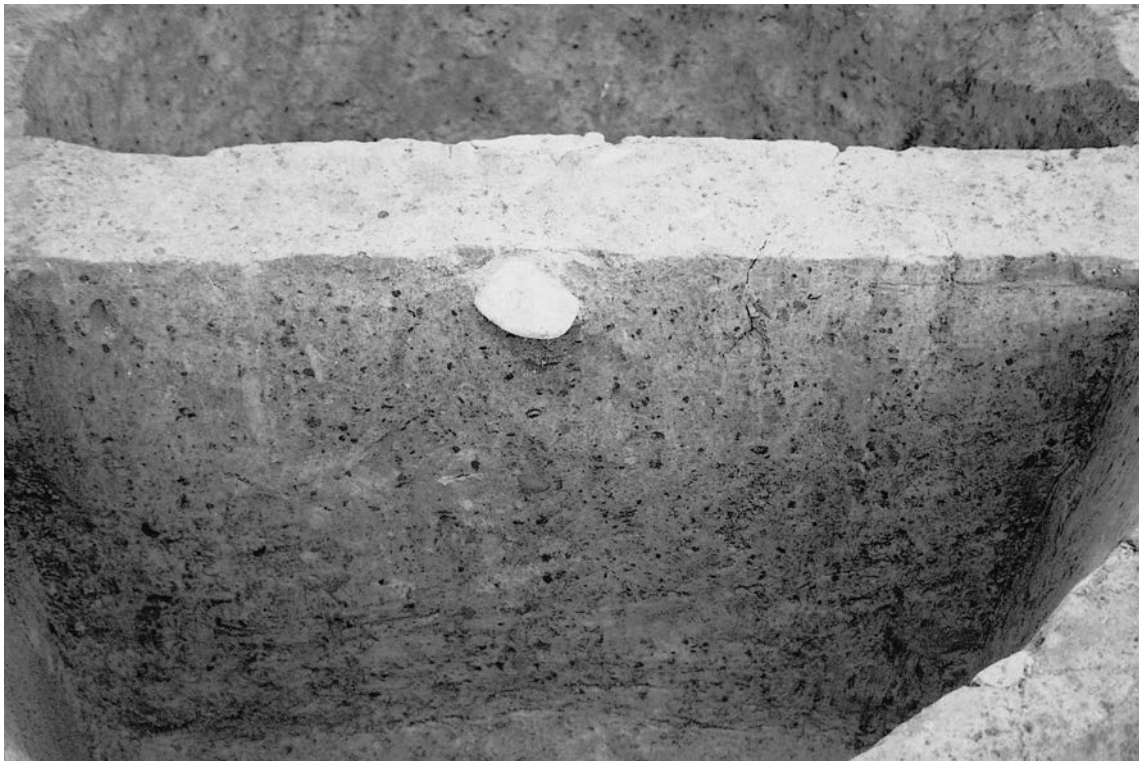
微凹地全景
南東から

微凹地断面（西側）
南から

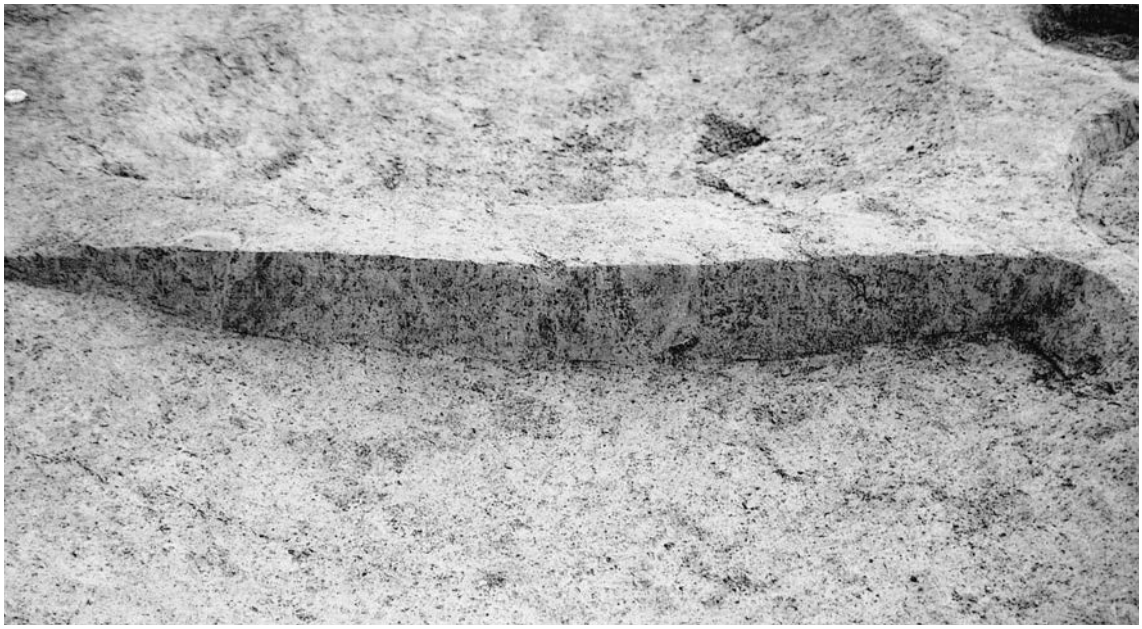


微凹地断面（東側）
南から

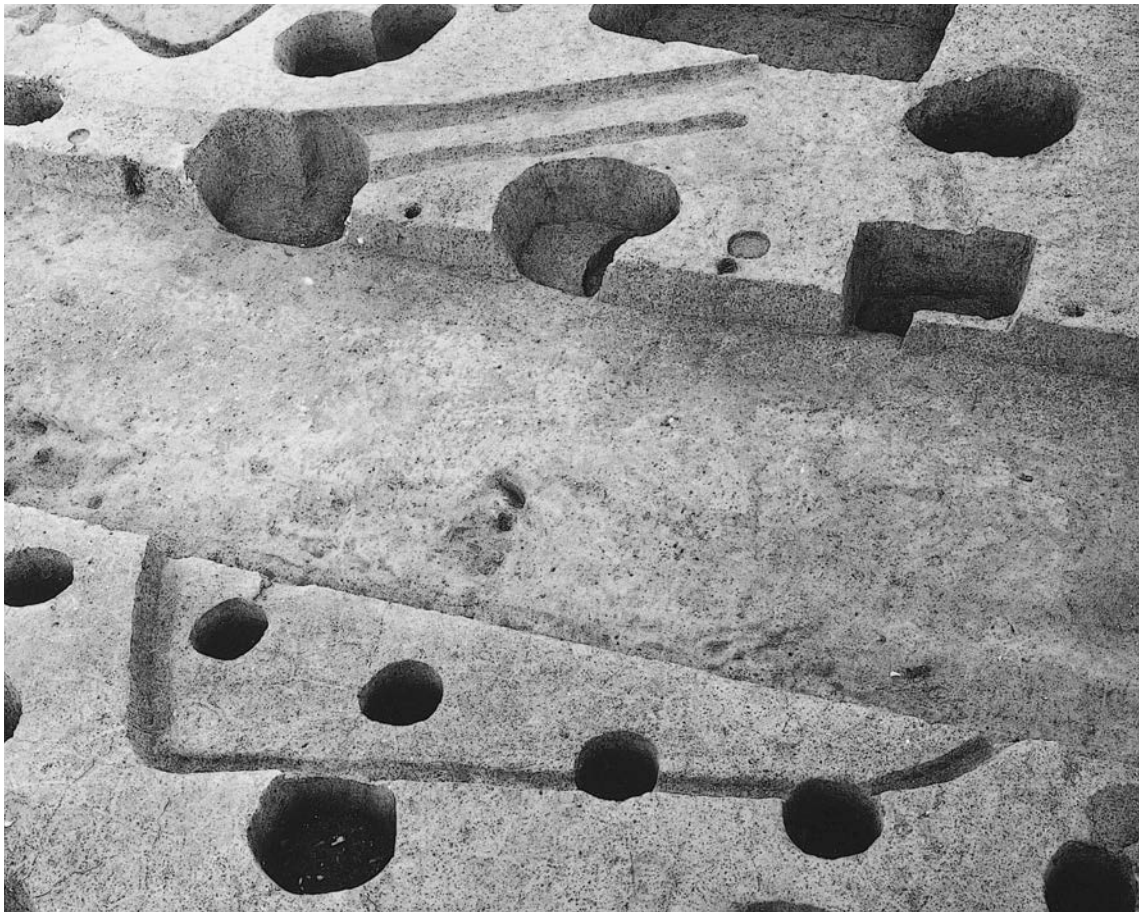
写真図版 7　遺構



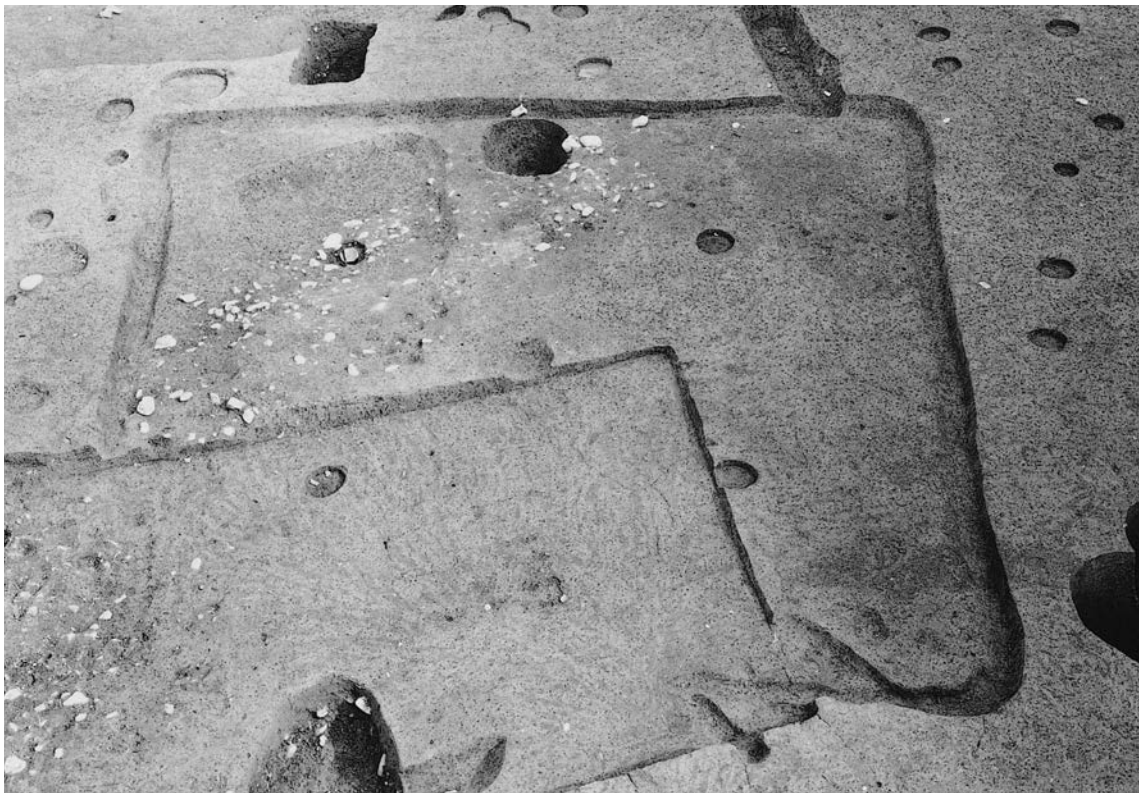
SK06断面　東から



SK08断面　東から



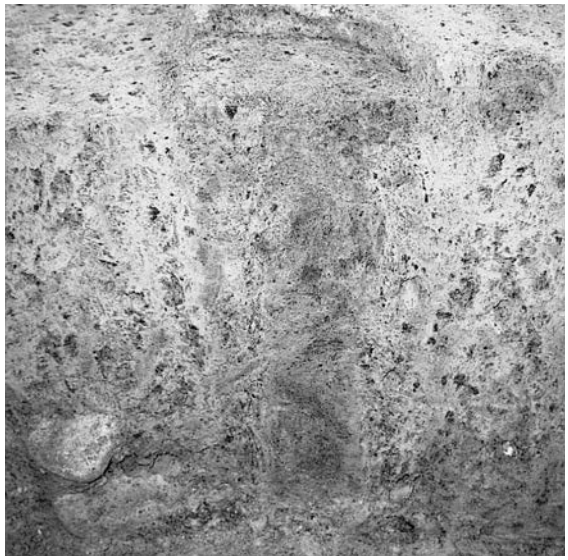
SH01全景　西から



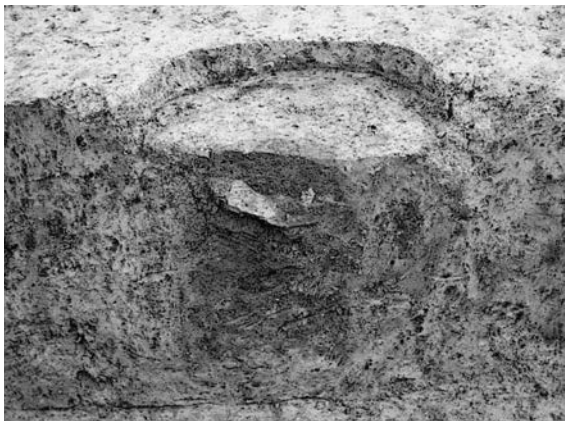
SH02全景　西から

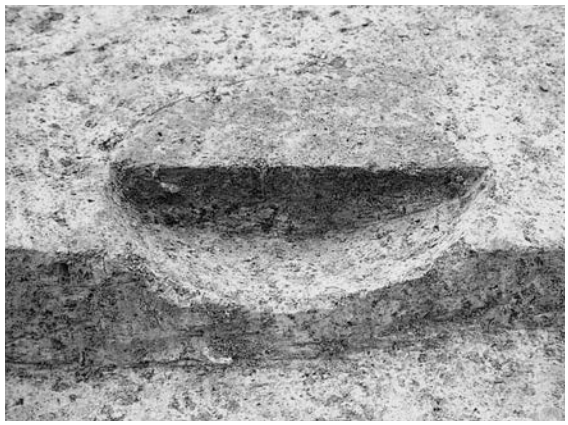
写真図版 9　遺構

SH02-P2　西から



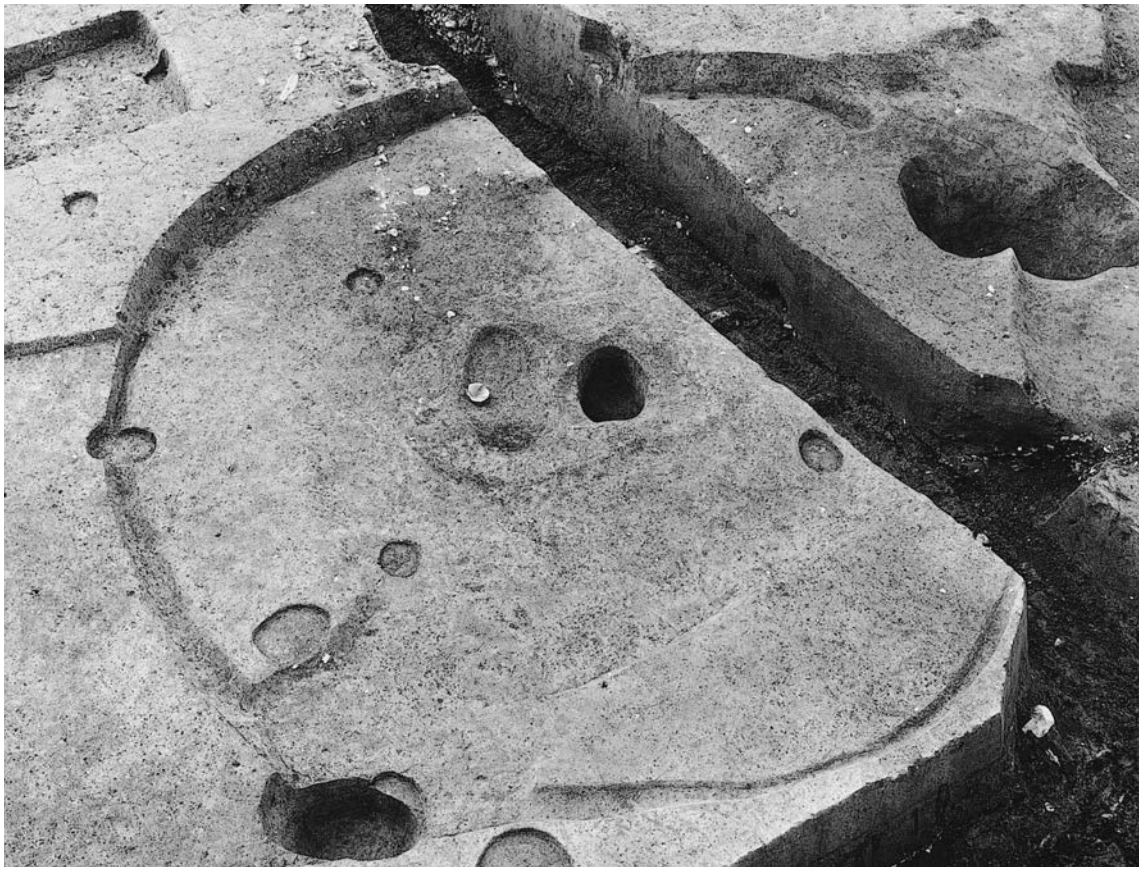
（左）SH02-P1
（上）平面西から
（下）断面西から
（右）SH02-P3
西から





SH02
（左）P4　西から
（右）土抗 2
西から

SH02　SK01
全景　南西から



SH03　南東から

SH03
（左）P1　北から
（中）P3　北から
（右）P4　北から

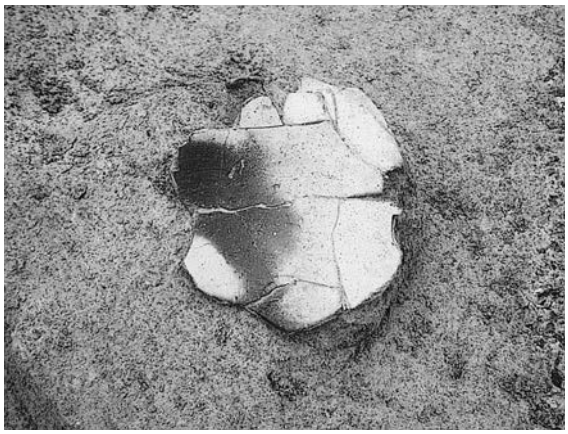
SH03
（左）166出土状況
南から
（右）168出土状況
南から

写真図版11　遺構

SH03　中央土抗
断面　南東から

SH03　中央土抗
南東から

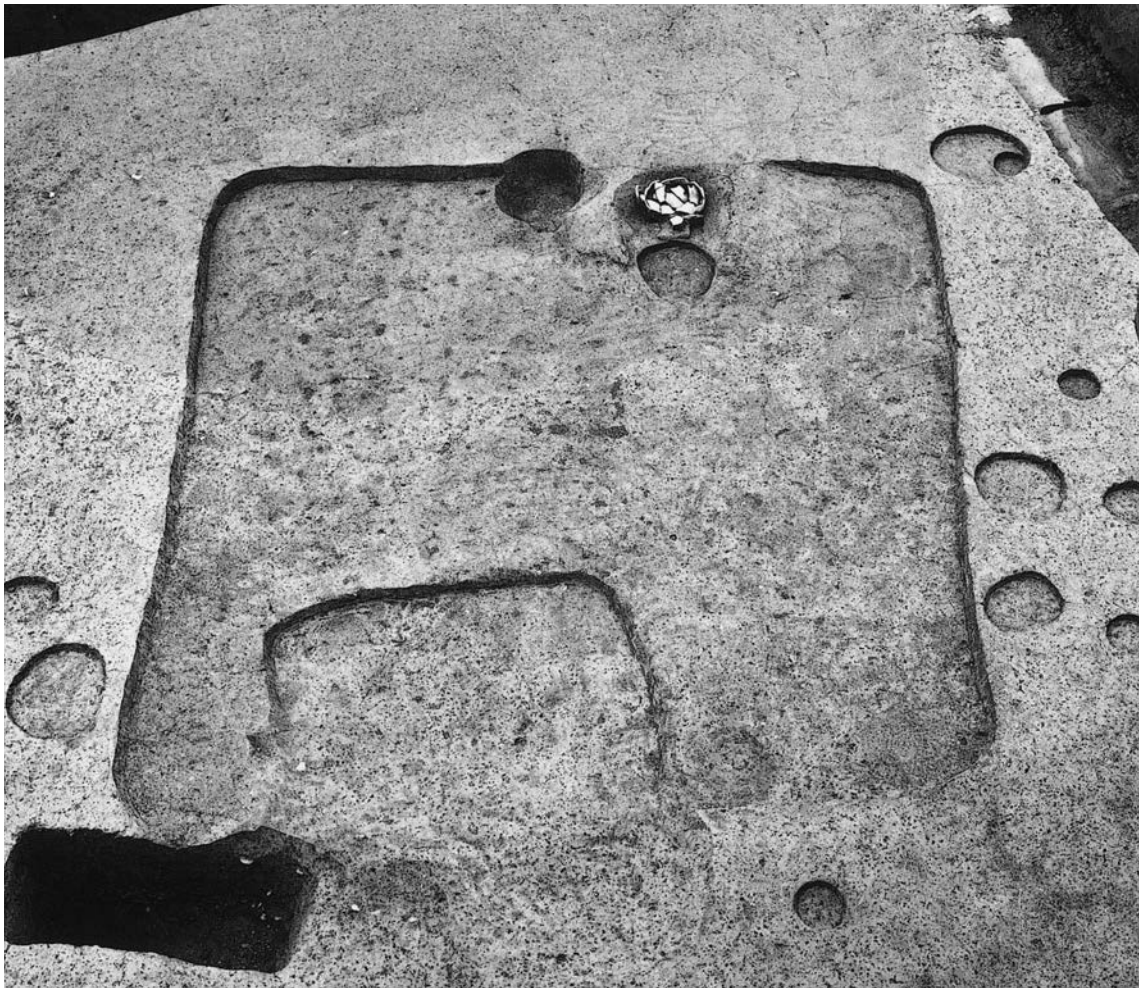
SD01断面　北から



SD01
（左）174出土状況
南から
（右）173出土状況
南東から

SD03断面　南から

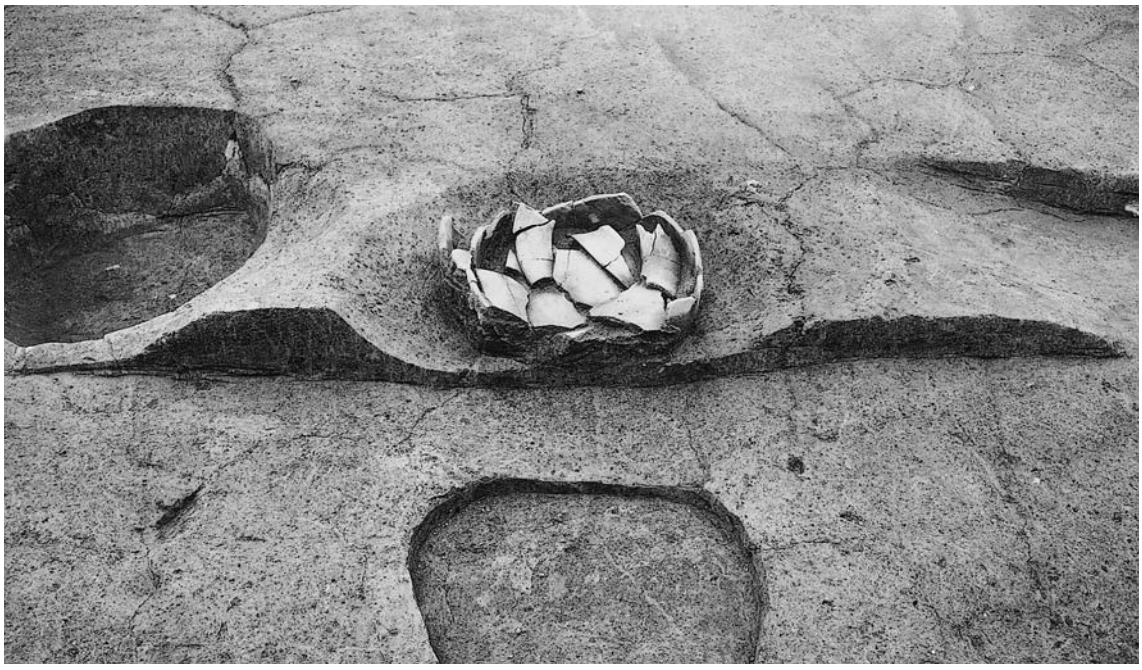
写真図版13　遺構



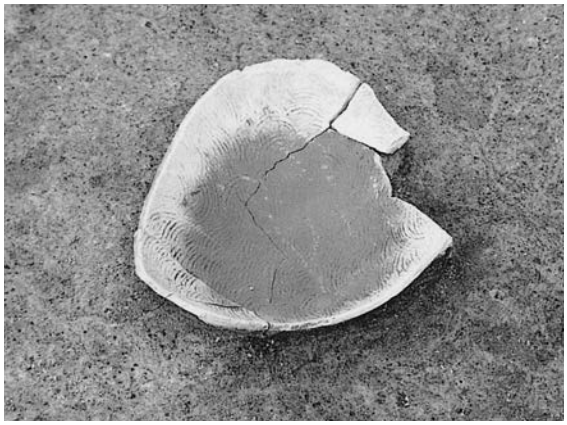
SH04　南から

SH04　土器出土状況
南から

SH04　カマド
南から

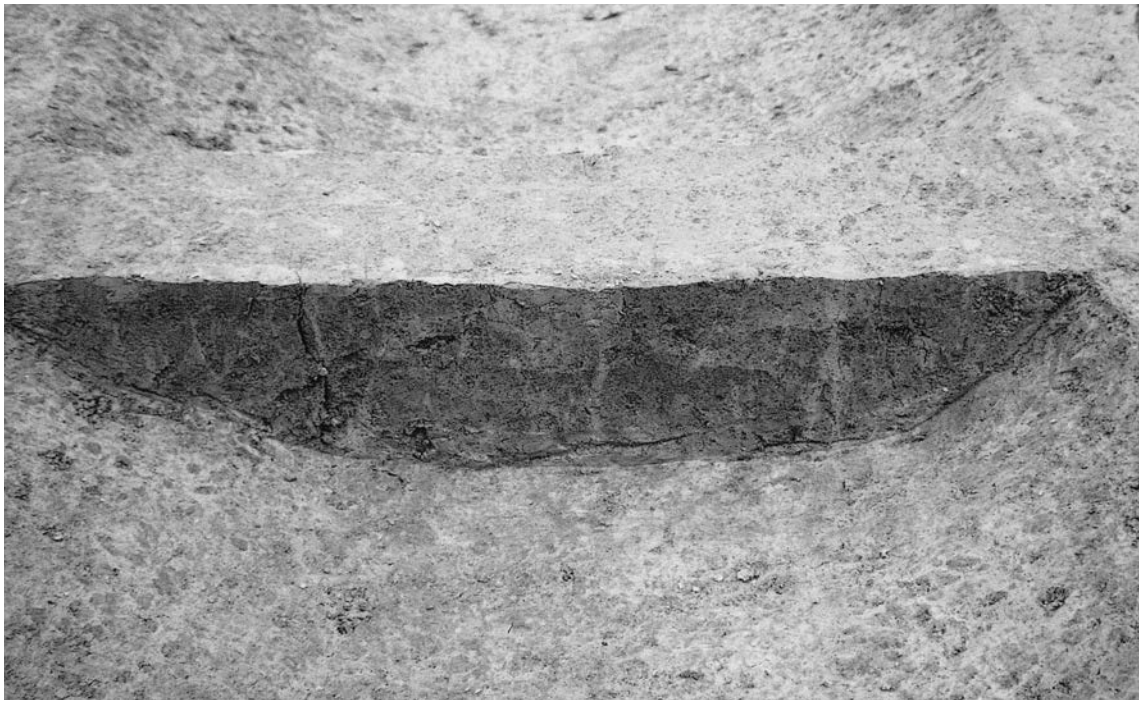


SH04　カマド
横断面　南から

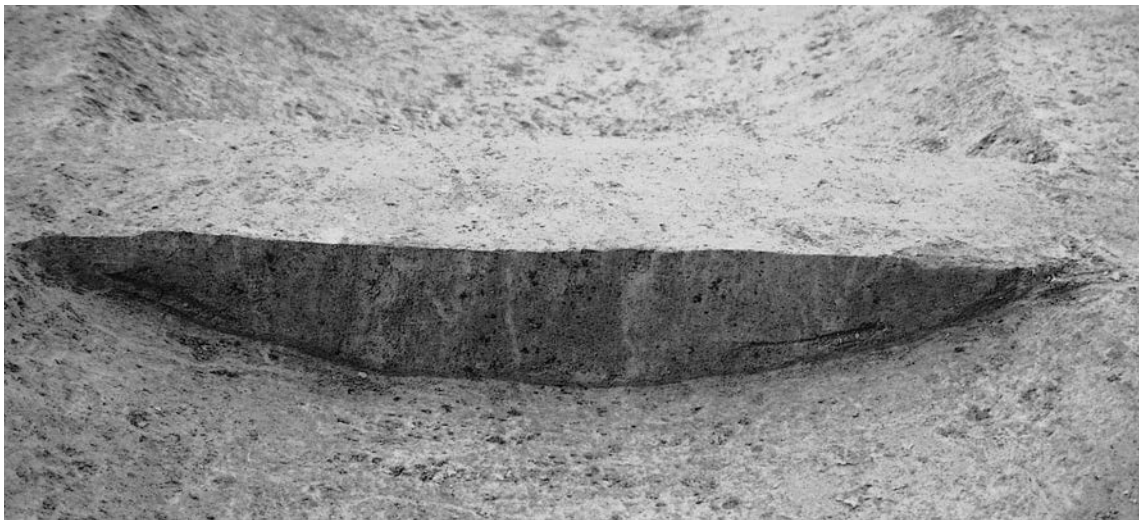


SH04
（左）カマド西側
土器出土状況
南から
（右）土坑断面
西から

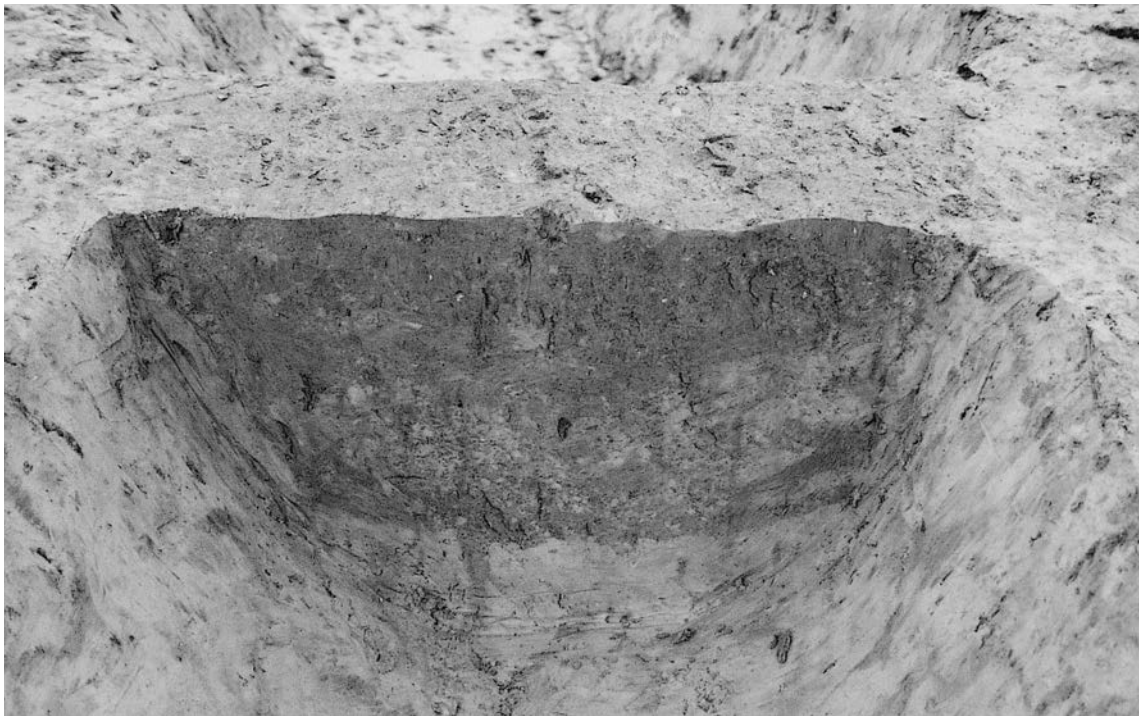
写真図版15　遺構



SD04断面　南西から



SD05断面　南西から



SD06断面　南から

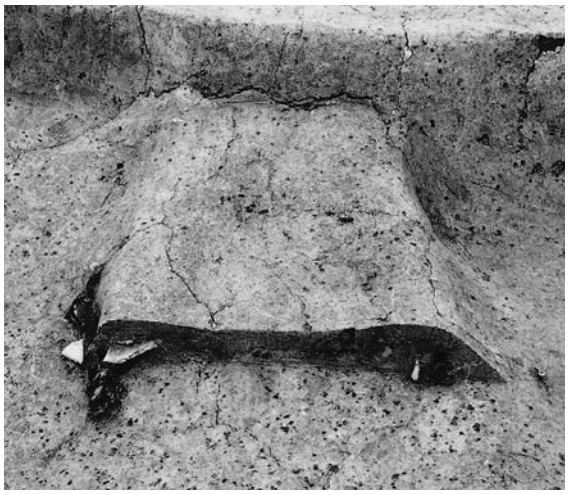
SH05全景　東から

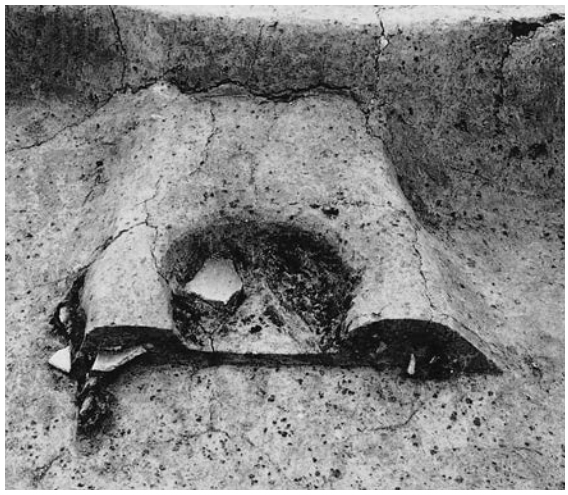
SH05
（左）P1断面東から
（右）P2断面東から

SH05
（左）P3断面西から
（右）P4断面西から

写真図版17　遺構

SH05　カマド
全景　東から



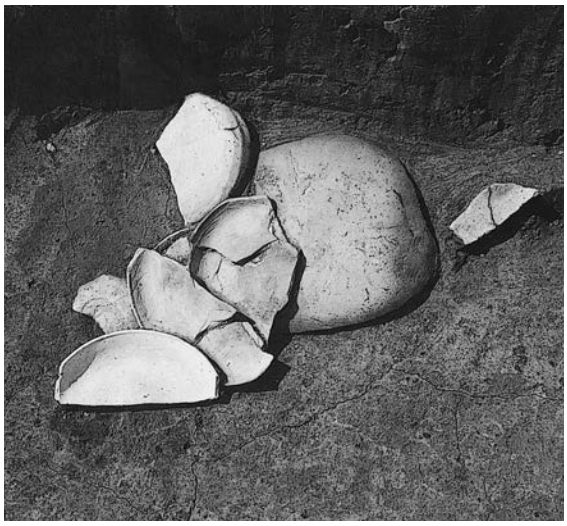


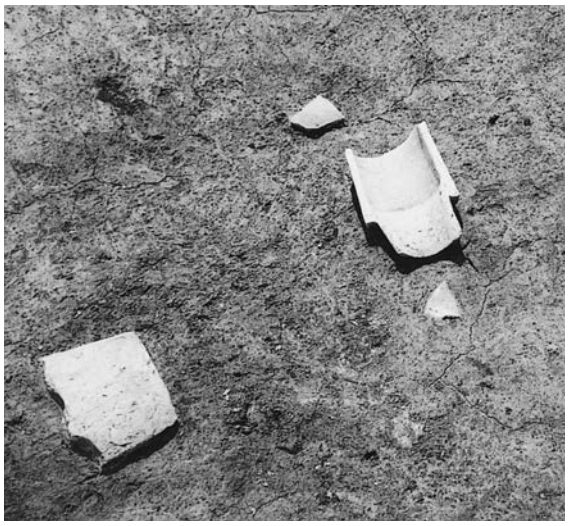
SH05　カマド
（左）横断　東から
（右）横断　東から

SH05
遺物出土状況　東から

SH05　カマド付近
遺物出土状況
北から

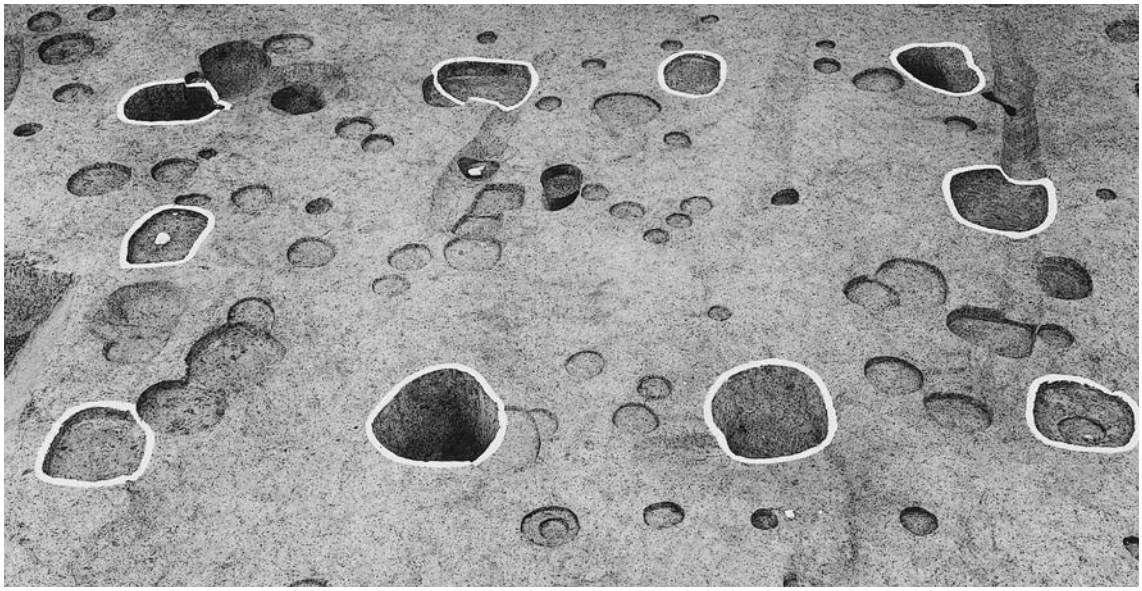
SH05　カマド付近
遺物出土状況
東から





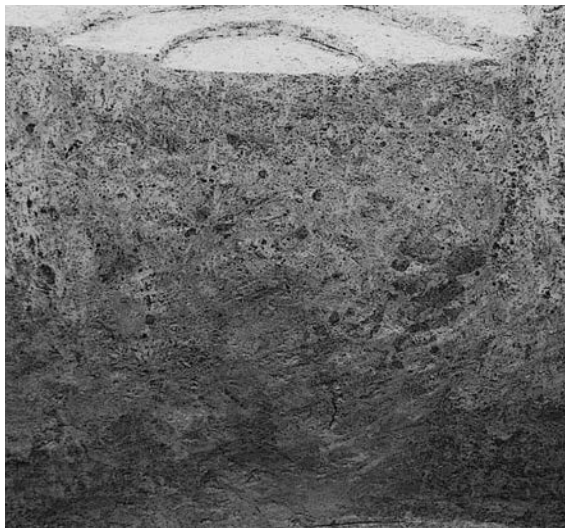
SH05
（左）土器出土状況
東から
（右）瓦出土状況
北から

写真図版19　遺構

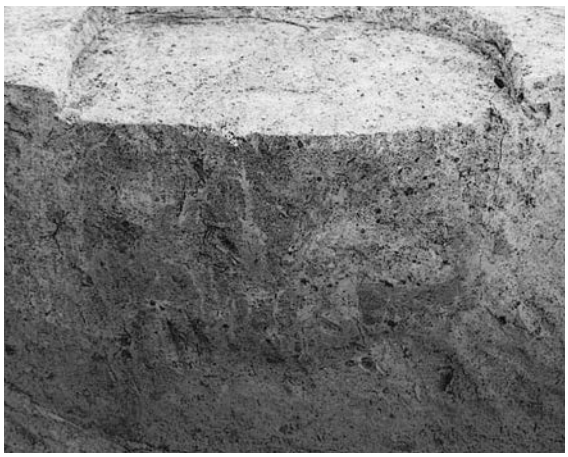


SB03全景　北から

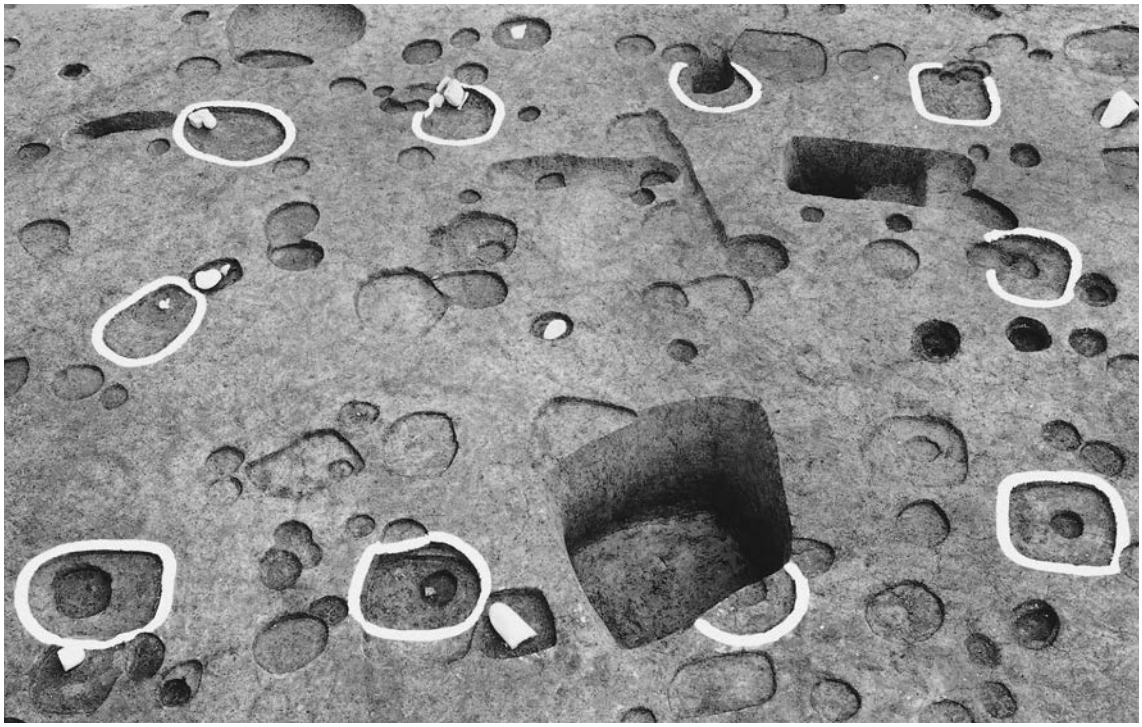
SB04
（左）P3断面
北から
（右）P9断面
北から



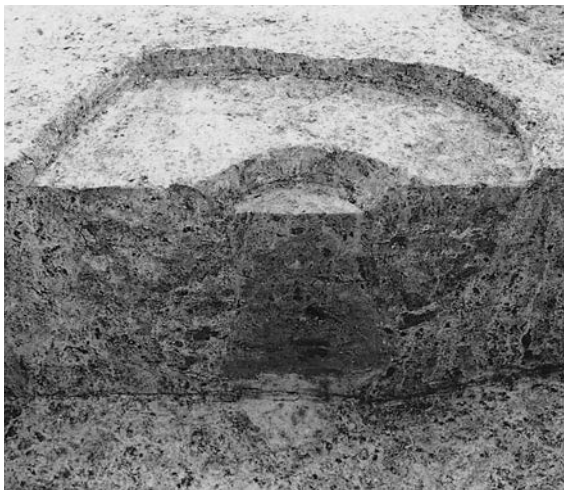
SB04
（左）P4断面
北から
（右）P7断面
東から



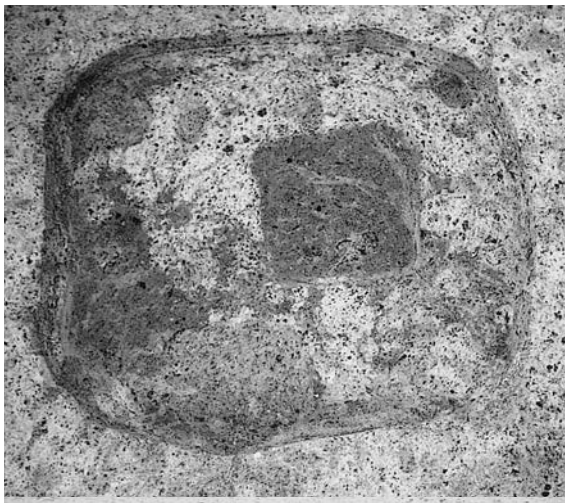
SB06
（左）P5断面
東から
（右）P6　土器
出土状況　東から



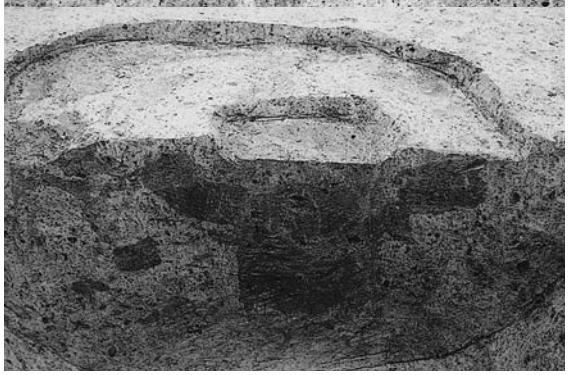
SB09　全景
東から



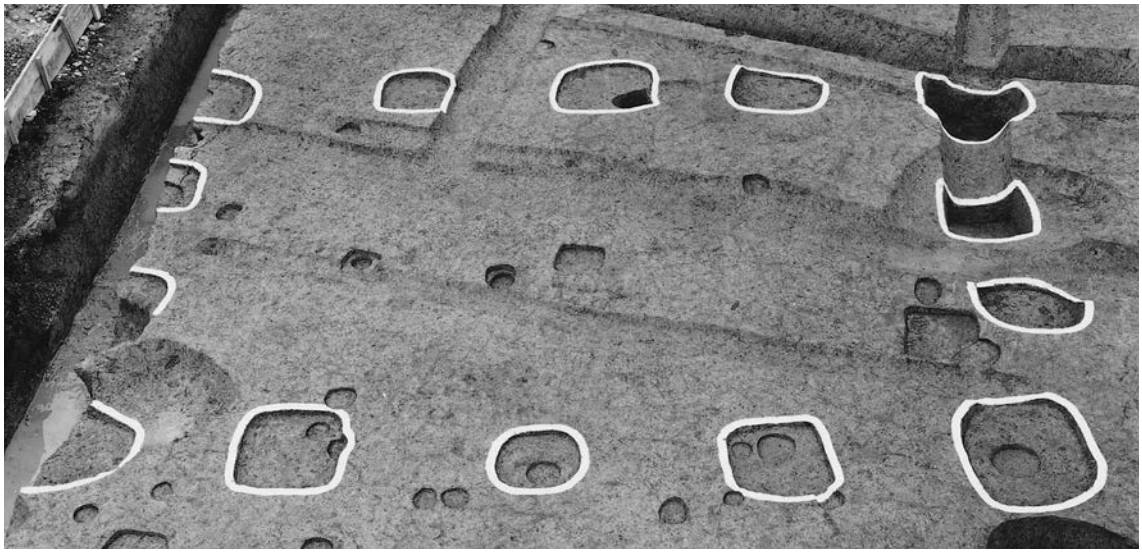
SB09
（左）P3断面
東から
（右）P10 西から



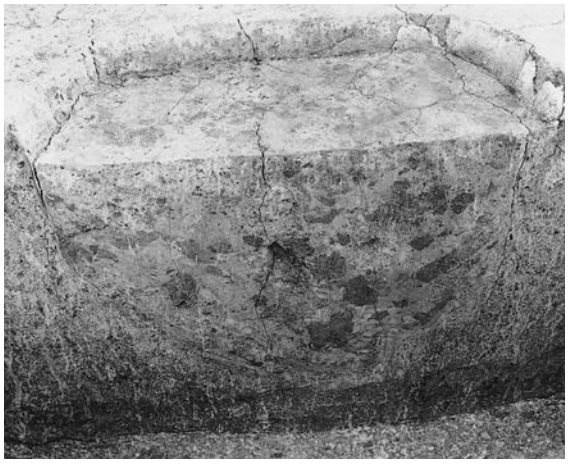
SB07　P1断面
北から

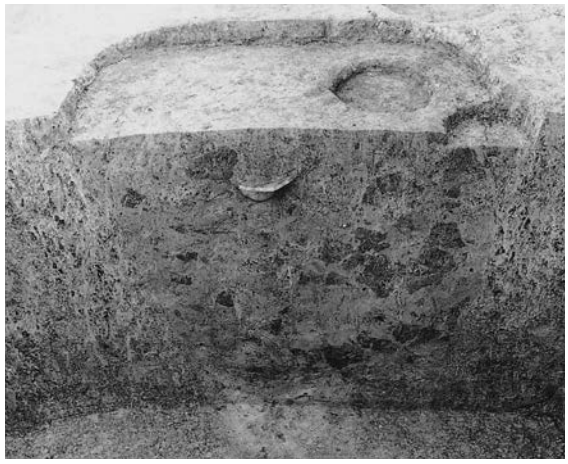


（左）SB17－P2
南から
（右上）SB10
P2平面　南から
（右下）SB10
P2断面　南から

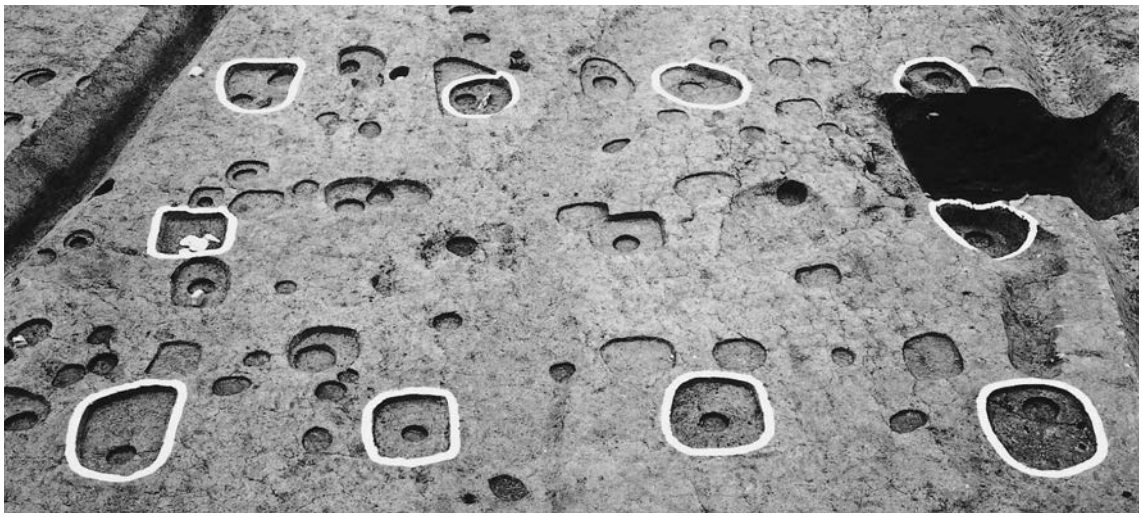


SB13　全景　西から

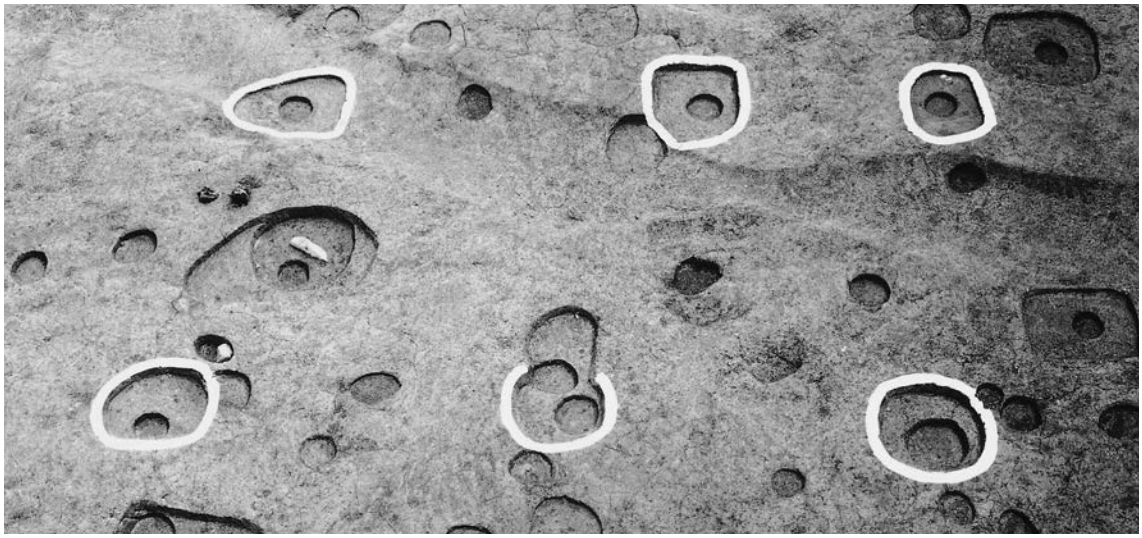




SB13
（左）P7　東から
（右）P14 西から

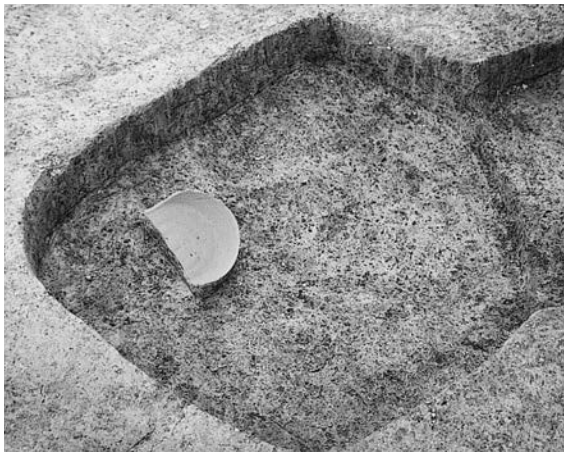


SB15全景　南から



SB16全景　西から

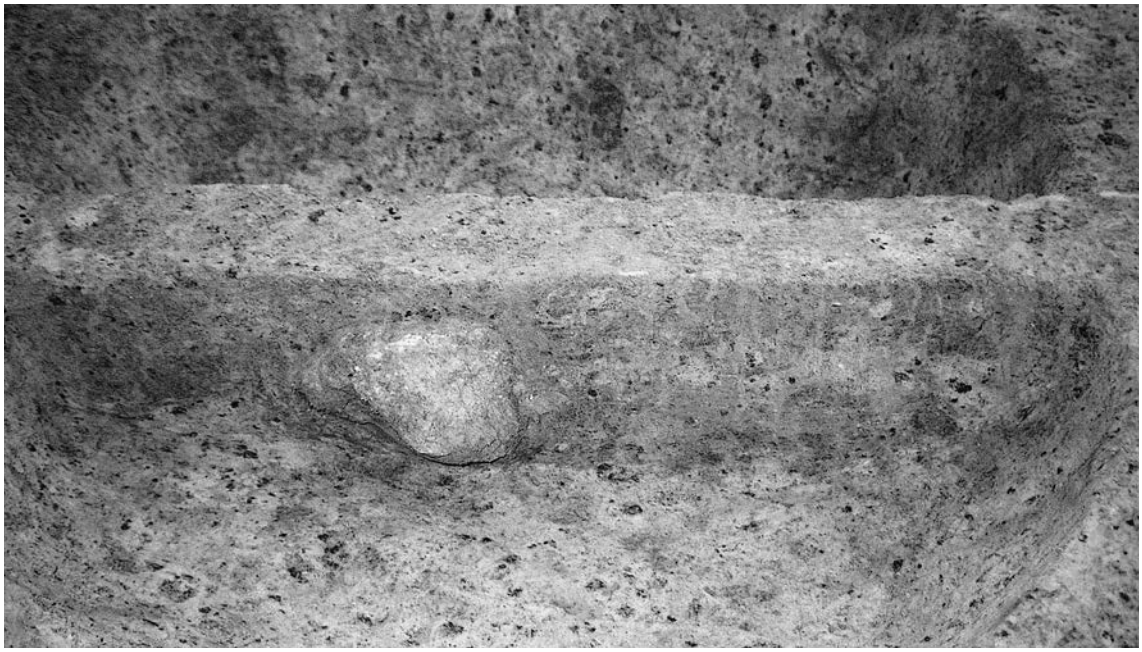
（左）
P03　土器出土状況
東から
（右）
P08　土器出土状況
南から



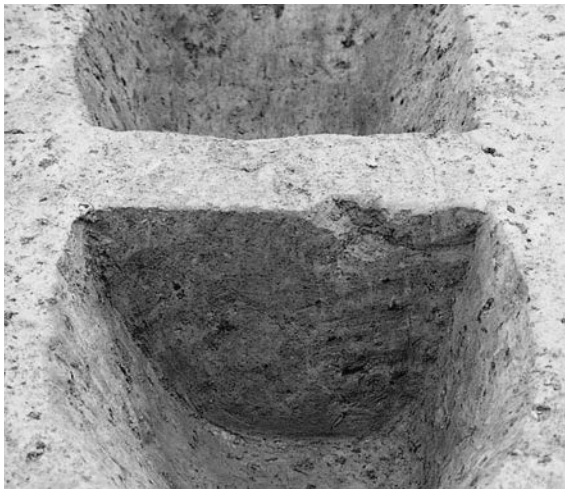
（左）
P09　土器出土状況
北西から
（右）
P30　土器出土状況
東から

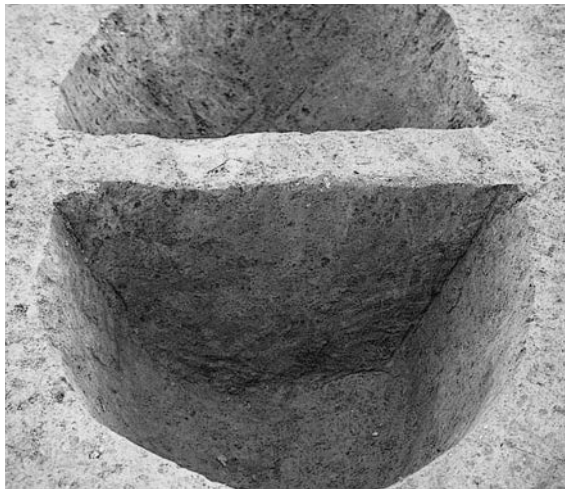
（左）
P40　土器出土状況
西から
（右上）
P06　断面　東から
P27　断面　西から

写真図版23　遺構



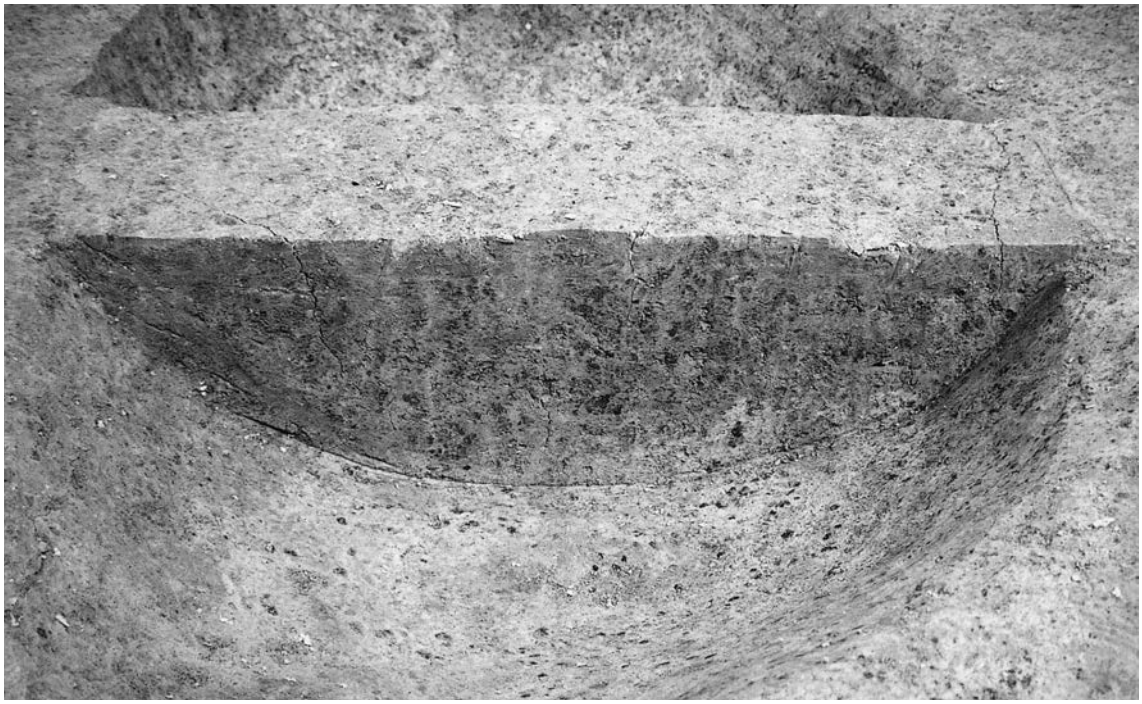
SK11　断面　西から



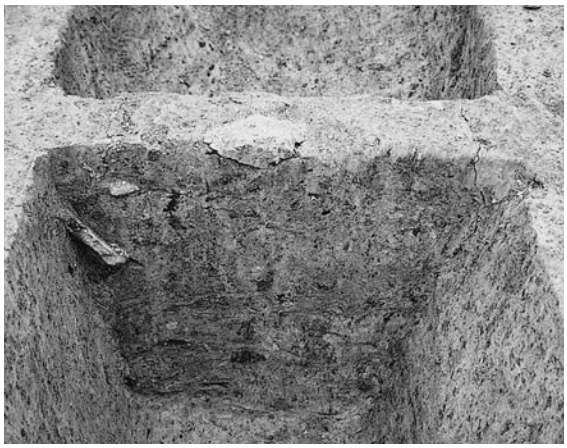


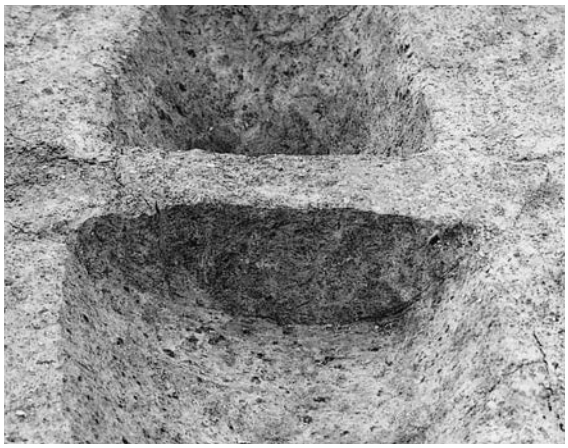
（左）SK19　断面
西から
（右）SK23　断面
南から

SK21　断面　南から

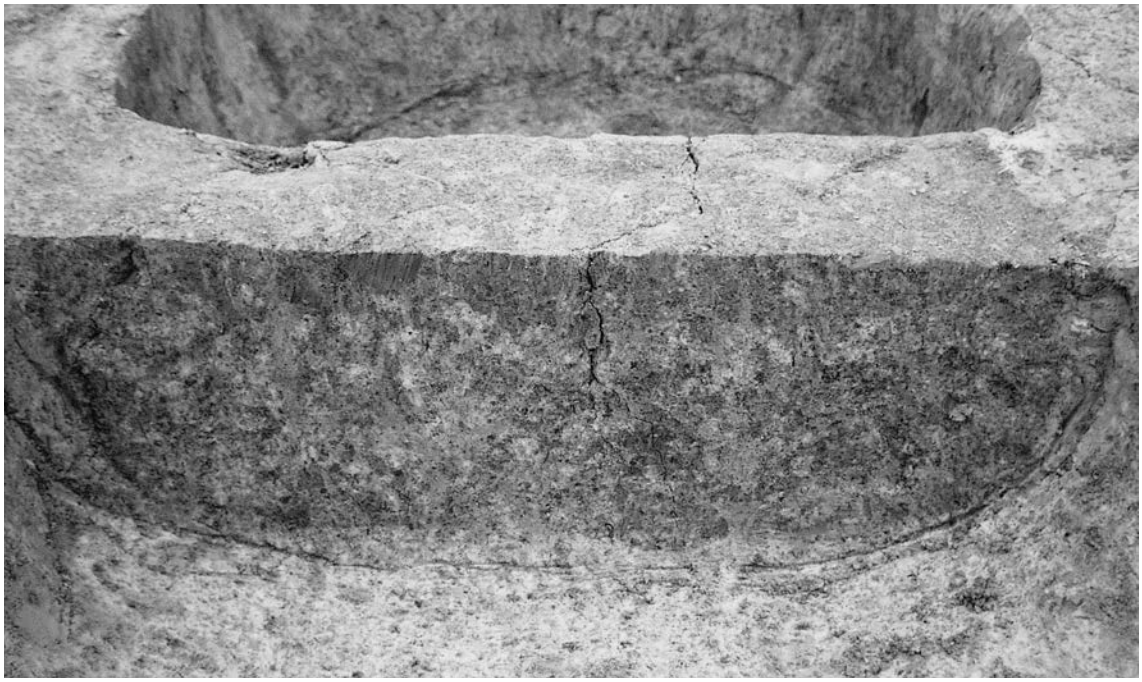


SK25　断面　西から





（左）SK27　断面
南西から
（右）SK28　断面
南から



SK33
断面　北西から

写真図版25　遺構

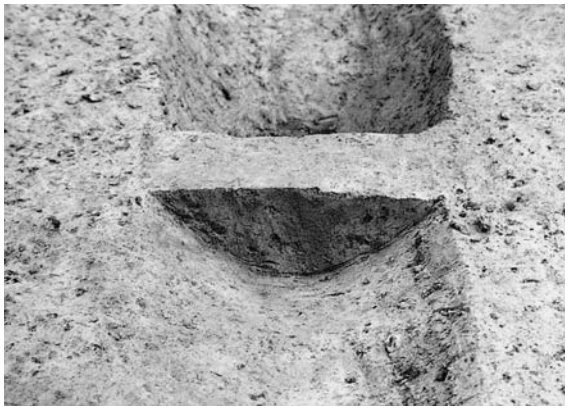
SE01　全景

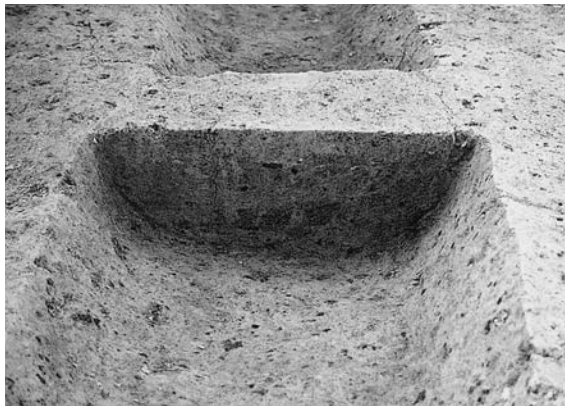
SE01
（左）土器出土状況
東から
（右）土器出土状況
南西から

SX01全景　西から

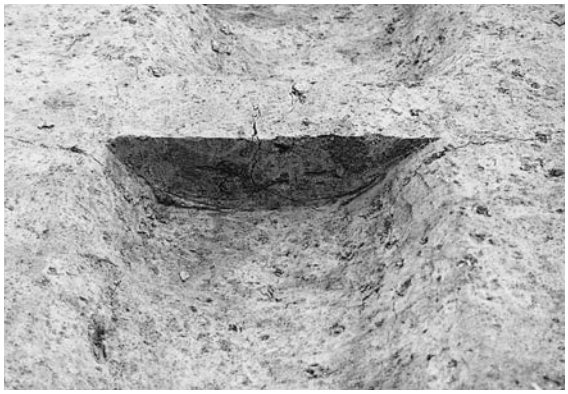
SX01断面　西から

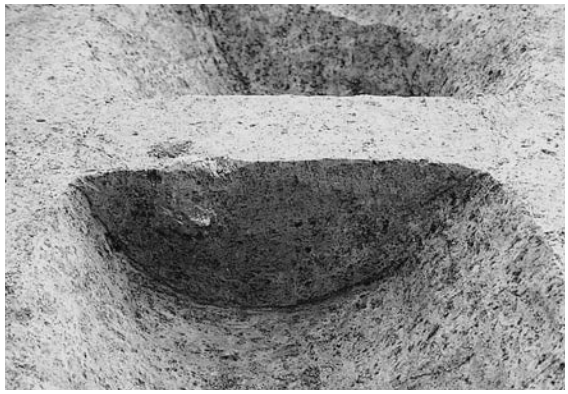
写真図版27　遺構





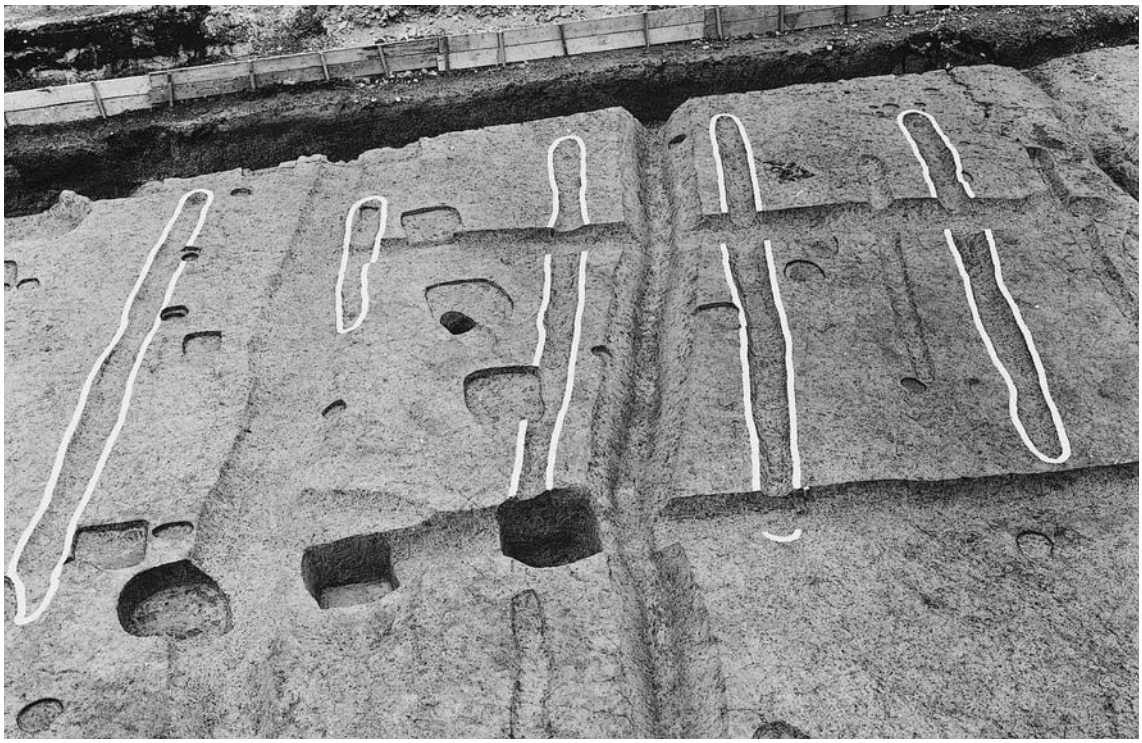
（左）SD11断面
南から
（右）SD16断面
東から





（左）SD20断面
南から
（右）SD23断面
東から

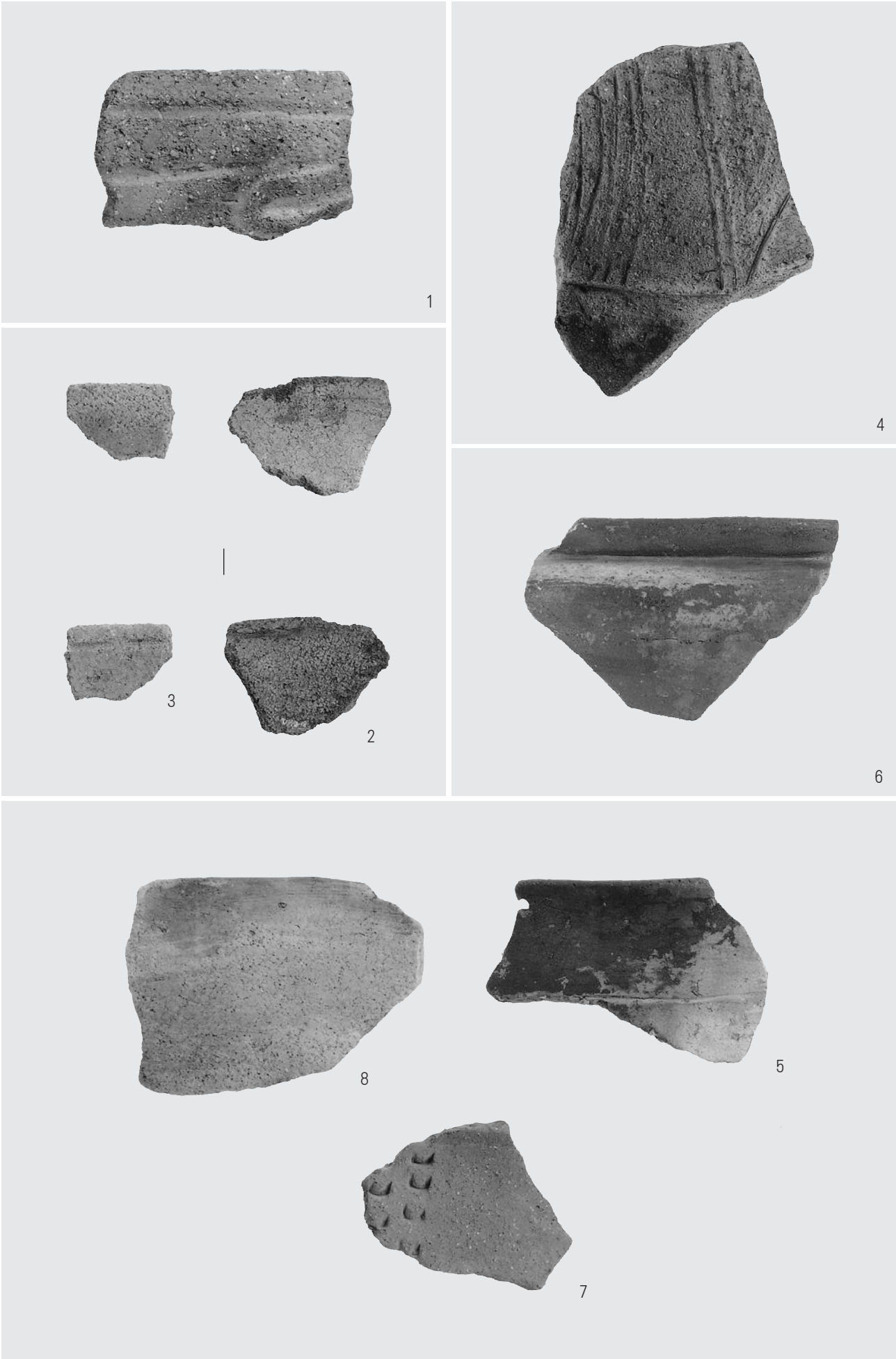
SD24断面　南から



畠７　南から

SD29断面
南から

SK37断面
南から

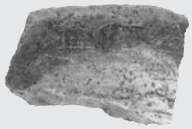


1～8：微凹地出土土器

10

9

11



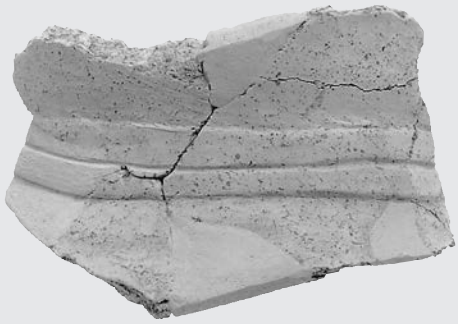
15

16

17

9～11・15～17：微凹地出土土器

18


20

19

21

26

27

22

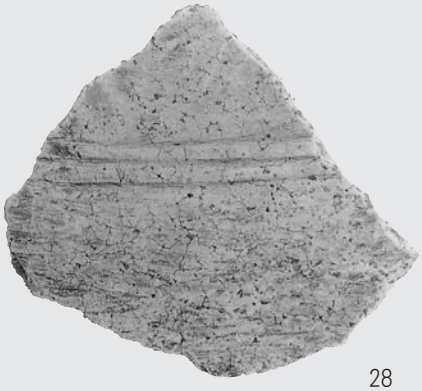
30

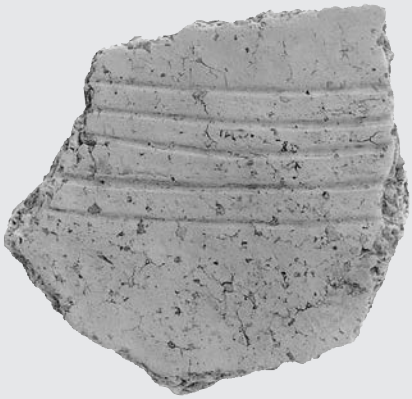
18～22・26・27・30：微凹地出土土器

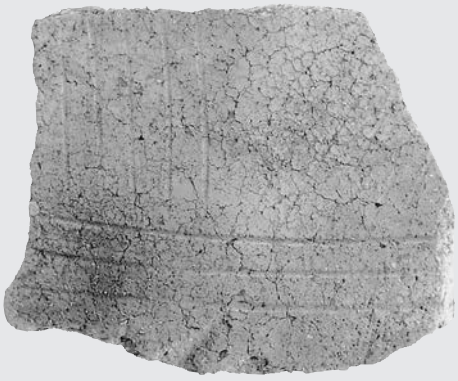
23

25

29


28


31


32

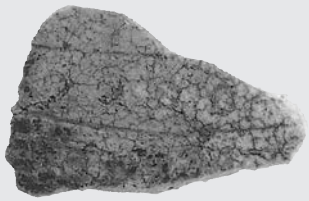
23・25・28・29・31・32：微凹地出土土器

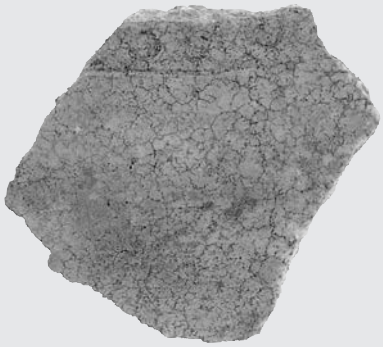
33

36

34

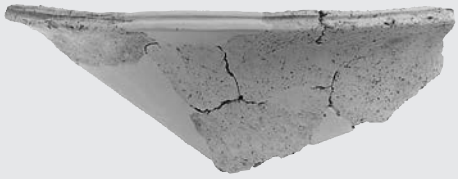
41





35

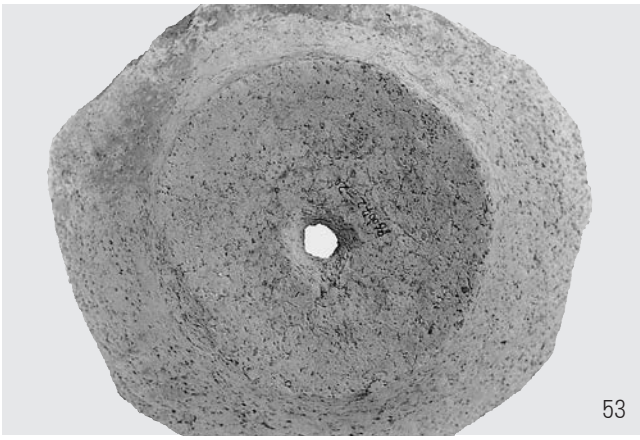
43



44

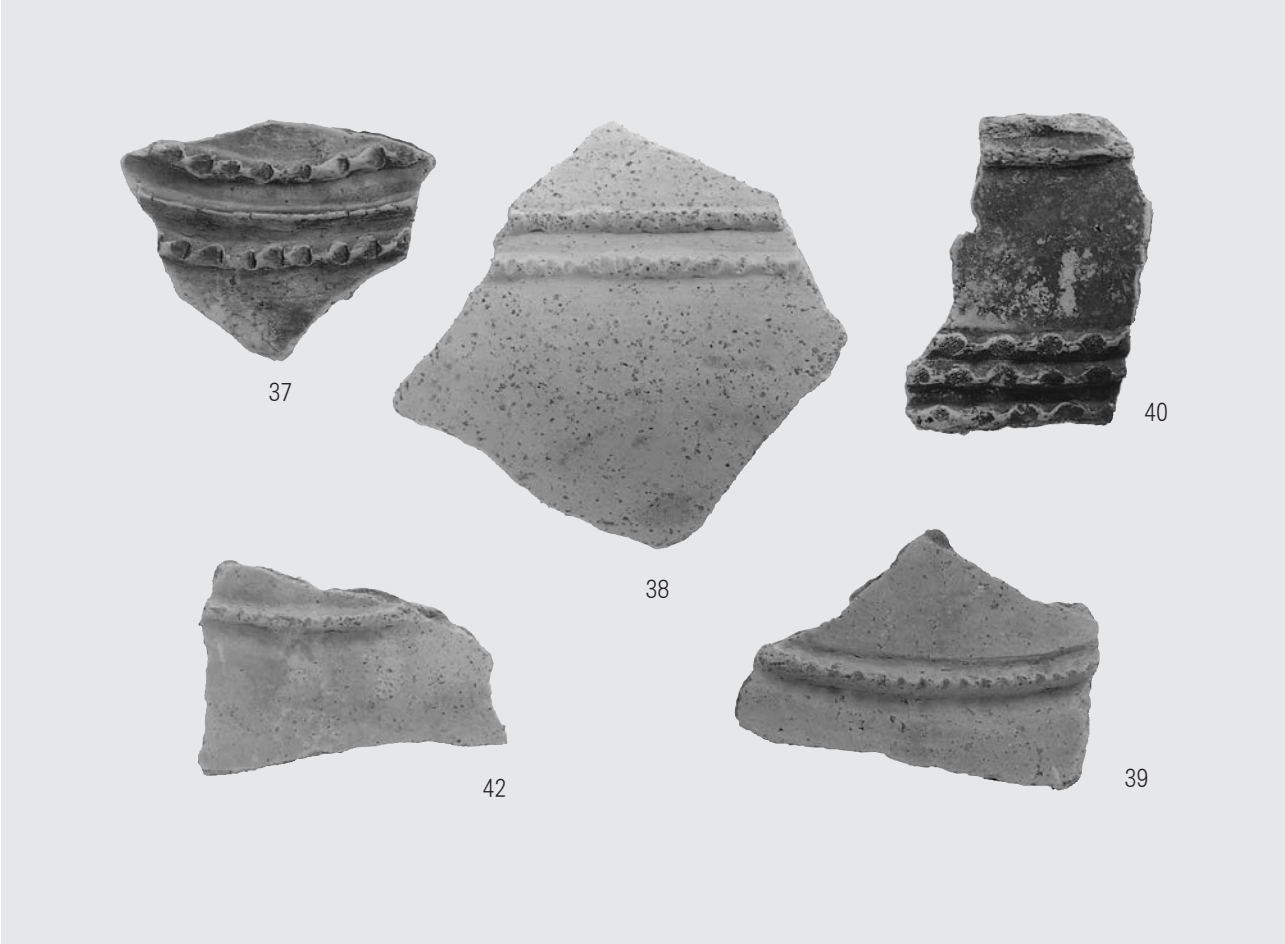
33～36・41・43・44：微凹地出土土器

48


53

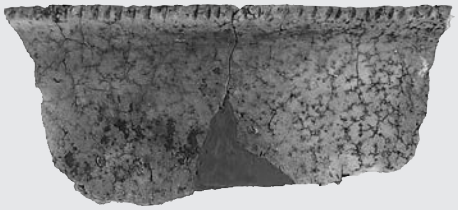
52

54



37～40・42・48・52～54：微凹地出土土器

55

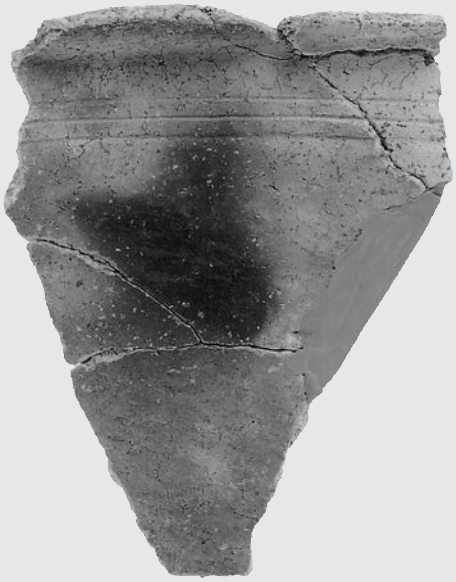


59

58

60

62



61

63

55・58～63：微凹地出土土器

64

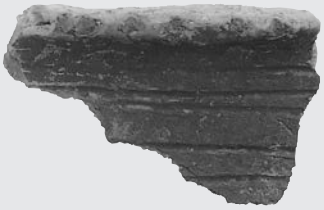
66

65

67

68

71


69

64～69・71：微凹地出土土器

76

77

78

81

82

83

76～78・81～83：微凹地出土土器

84

85

87

88

90

84・85・87・88・90：微凹地出土土器

93

105

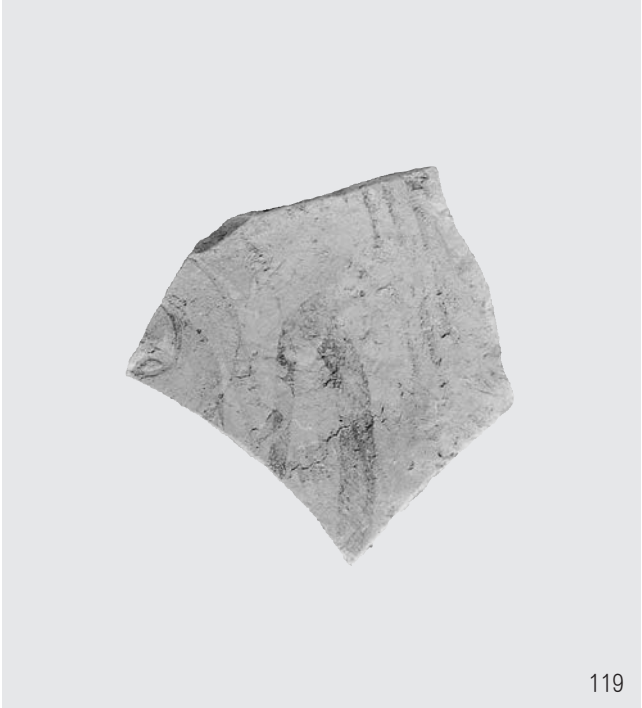
94

109

101

118

113


119

93・94・101・105・109・113・118・119：微凹地出土土器

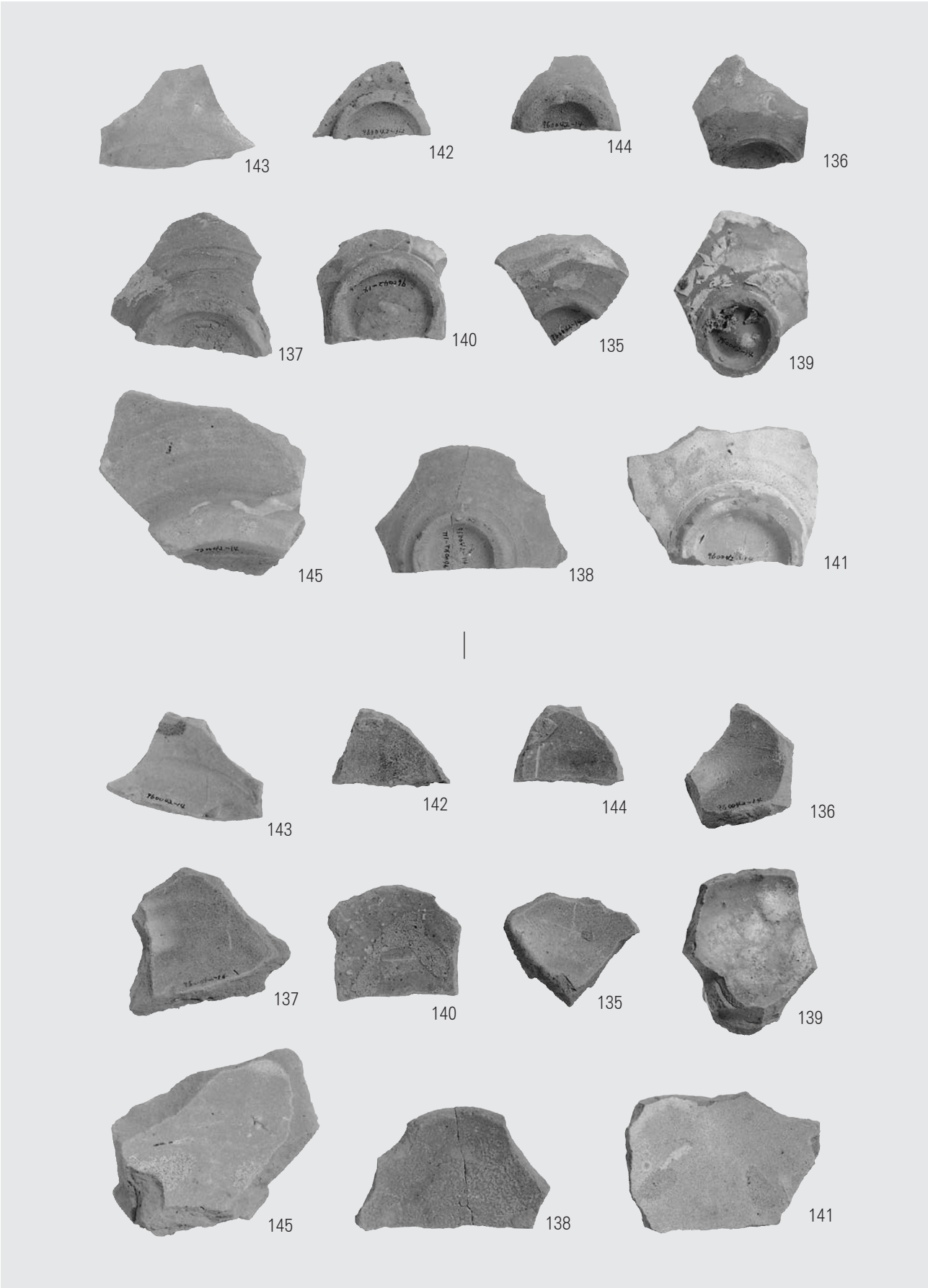
121

120

126

134

120・121・126・134：微凹地出土土器



135～145：微凹地出土土器

147

148

146

151

152

154

155

150

153

149

156

146～155：SK06出土土器　156：包含層出土土器

写真図版43　遺物

159

160

165

166

168

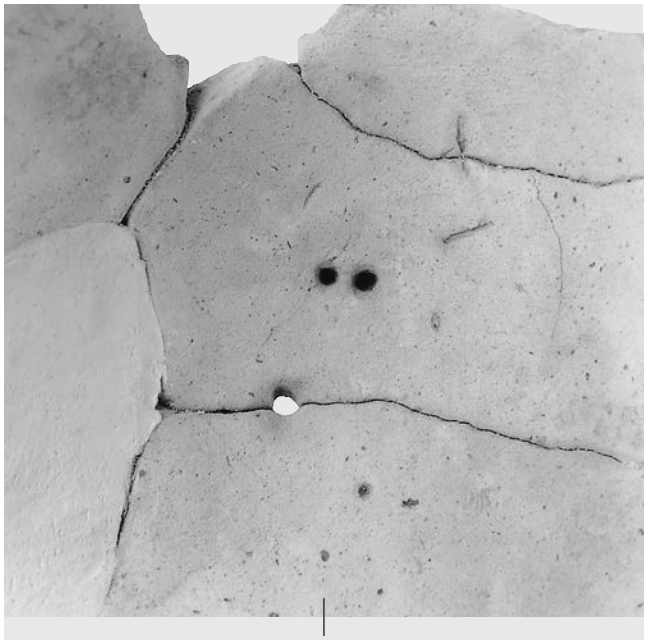
169

172

173

159・160：SH02出土土器　165・166・168：SH03出土土器　169・172・173：SD01出土土器

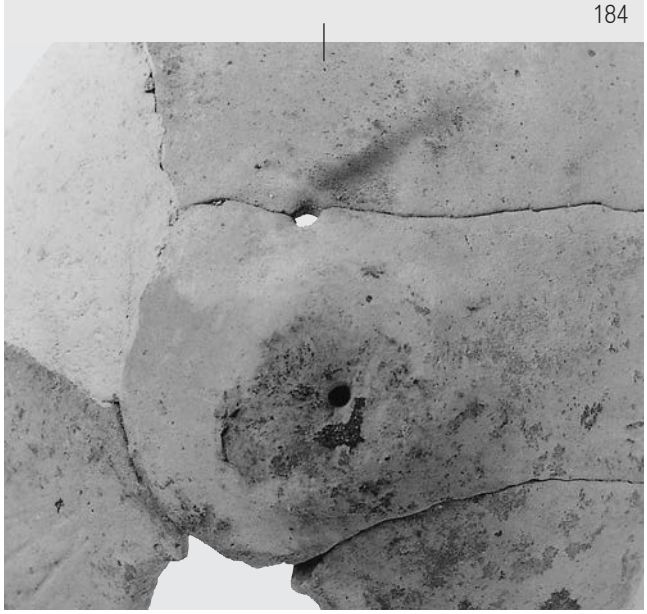
174



176

184

181



174・176・181：SD01出土土器　184：包含層出土土器

写真図版45　遺物

185

187

191

192

198

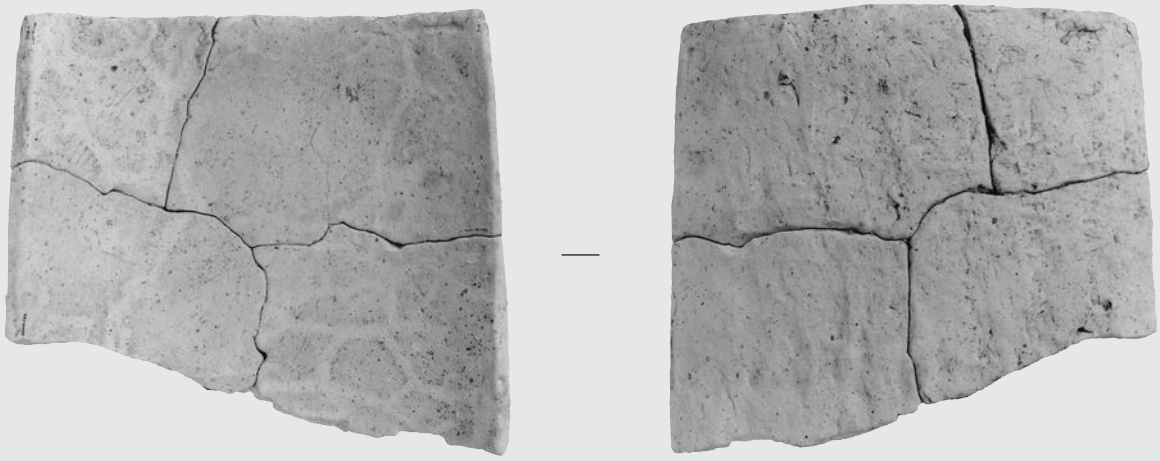
203

199

204

200

185・187・191・192：SH04出土土器　198～200・203・204：SH05出土土器

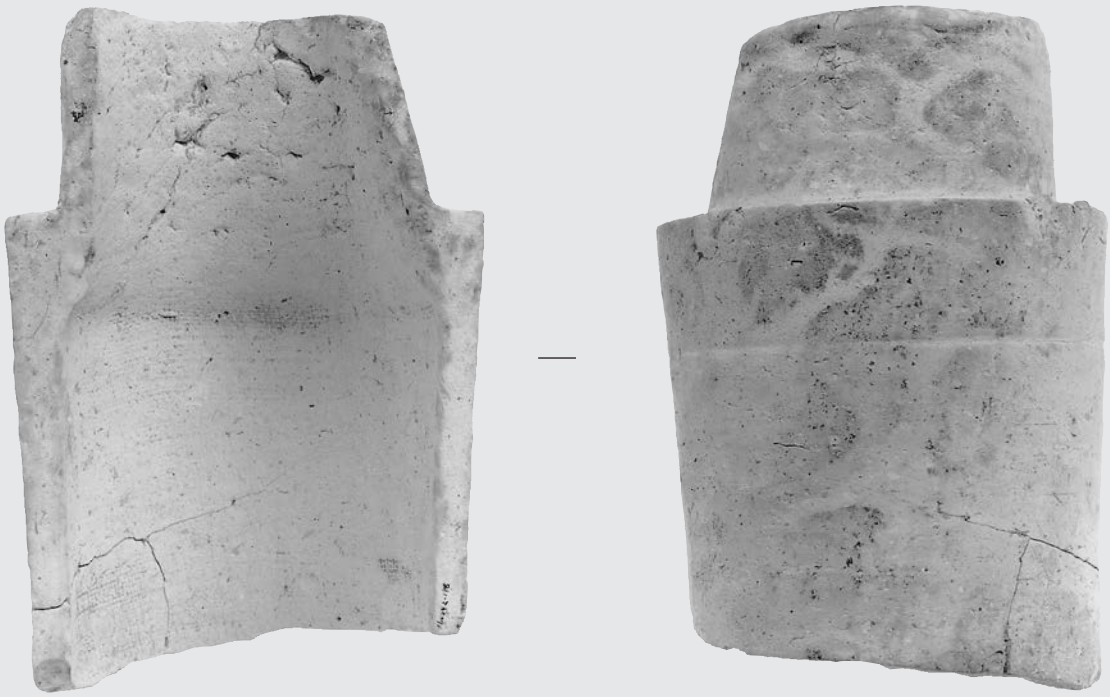


205

206

205・206：SH05出土瓦

写真図版47　遺物

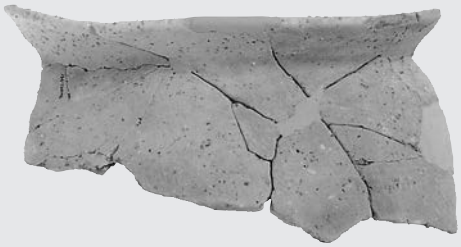


208

213

214

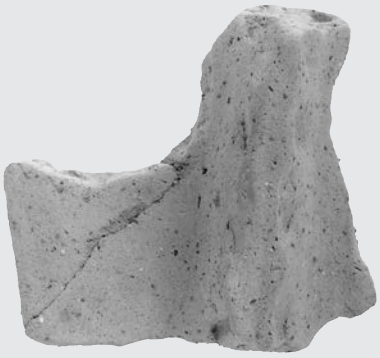
219



218

208：SH05出土土器　213：SB03出土土器　214：SB04出土土器
218・219：SB06出土土器

220



224

223

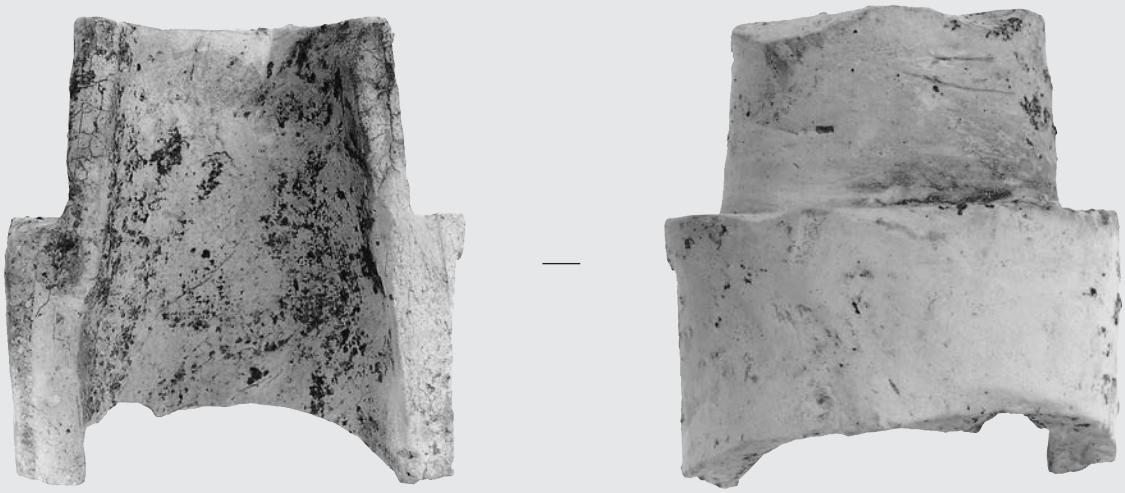
231

233

243

220・223・224：SB09出土土器　231・233：SB11出土土器　243：SB15出土土器

写真図版49　遺物

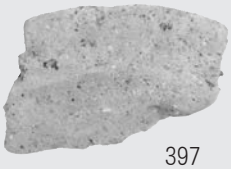


236

247

248

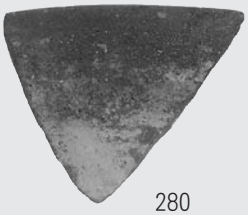
252



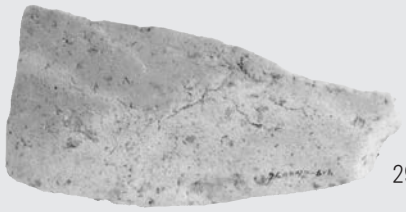
397

284

279



280



295

236：SB13出土瓦　247：P02出土土器　248：SB17出土土器　252：P07出土土器
284：P28出土土器　279・280：P25出土土器　295：P33出土土器　397：P49出土土器

253

255

256

259

266

260

270

273

253・255：P08出土土器　256：P09出土土器　259：P11出土土器　260：P15出土土器
266：P16出土土器　270：P18出土土器　273：P21出土土器

写真図版51　遺物

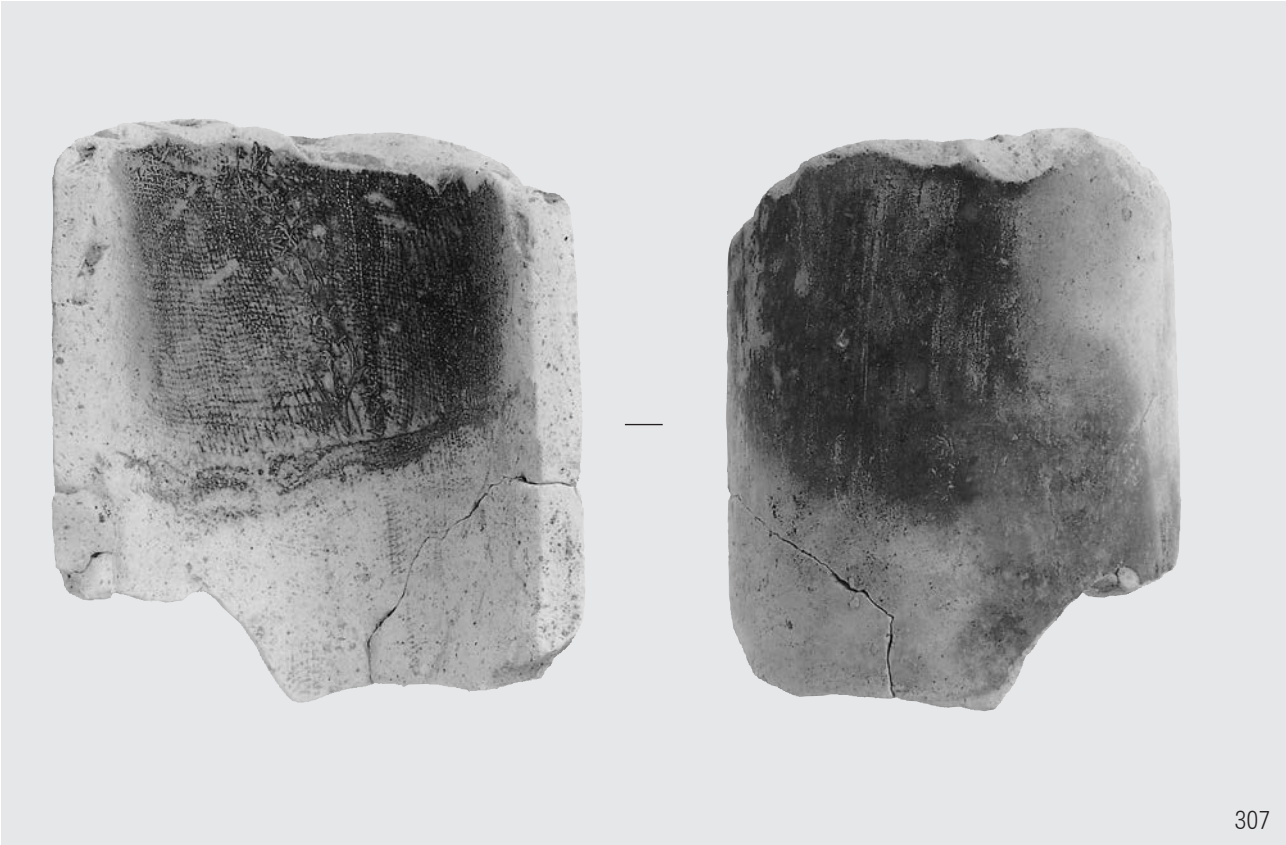
274

277

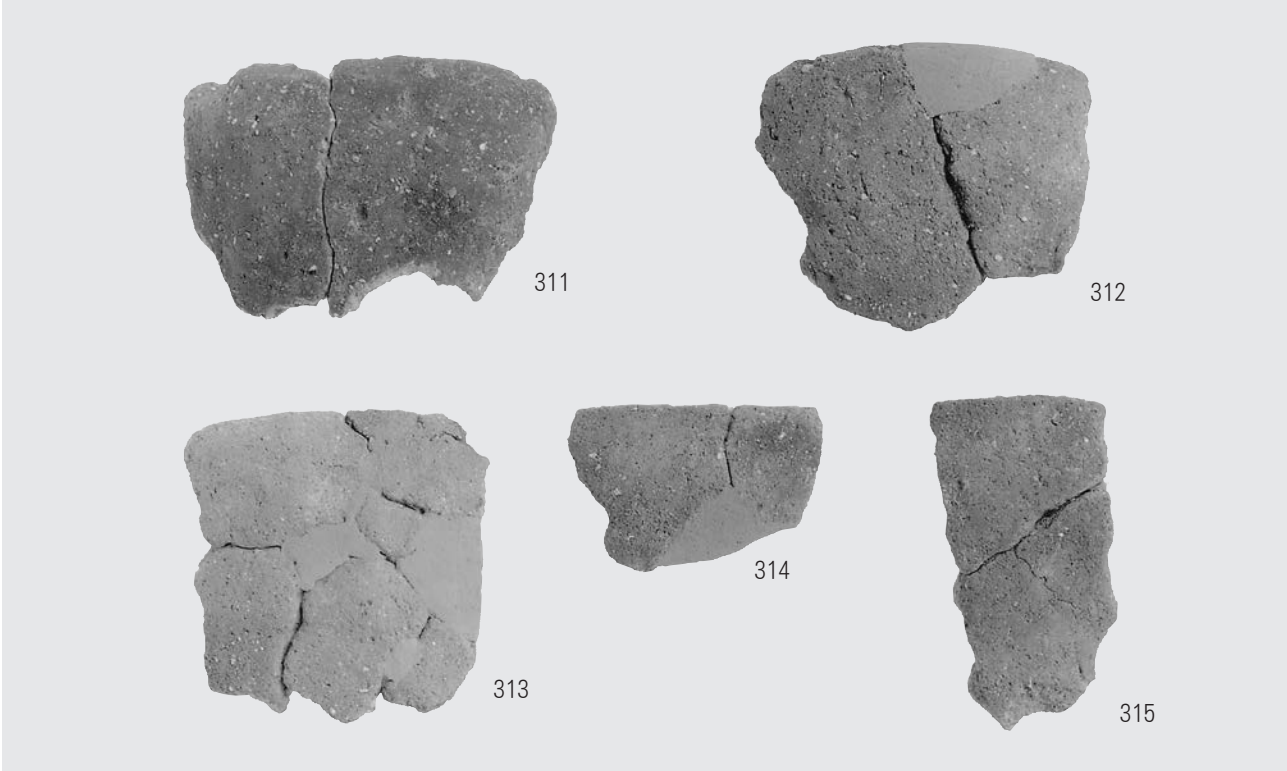
276

297

290


307

274：P21出土土器　276・277：P24出土土器　290：P31出土土器
297：Ｐ34出土土器　307：P41出土瓦



308：P44出土瓦　309～315：SK32出土土器

写真図版53　遺物

316

318

319

320

323

321

324

322

325

316：SK09出土土器　318～325：SE01出土土器

326

329

330

328

331

327

333

326～331・333：SE01出土土器

写真図版55　遺物

335

342

338

344

352

335・338：SE01出土土器　342・344：SD24出土土器　352：畠 9 出土土器

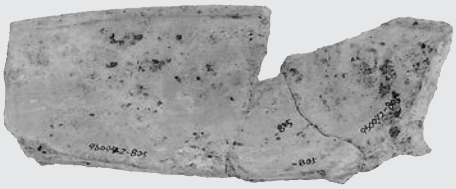
339

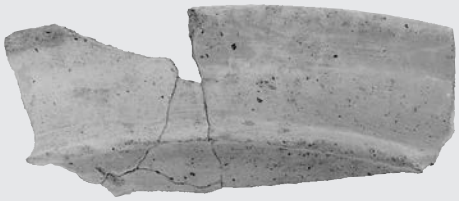
345

359

353

357





354

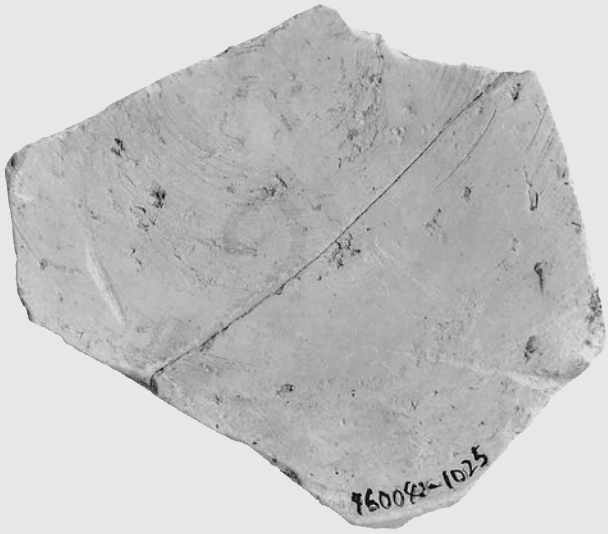
339：SE01出土瓦　345：畠 6 出土土器　353：畠 9 出土土器　354・357・359：包含層出土土器

写真図版57　遺物

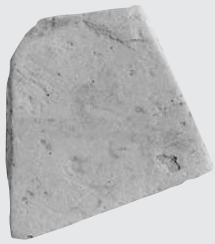
358

363

364



368



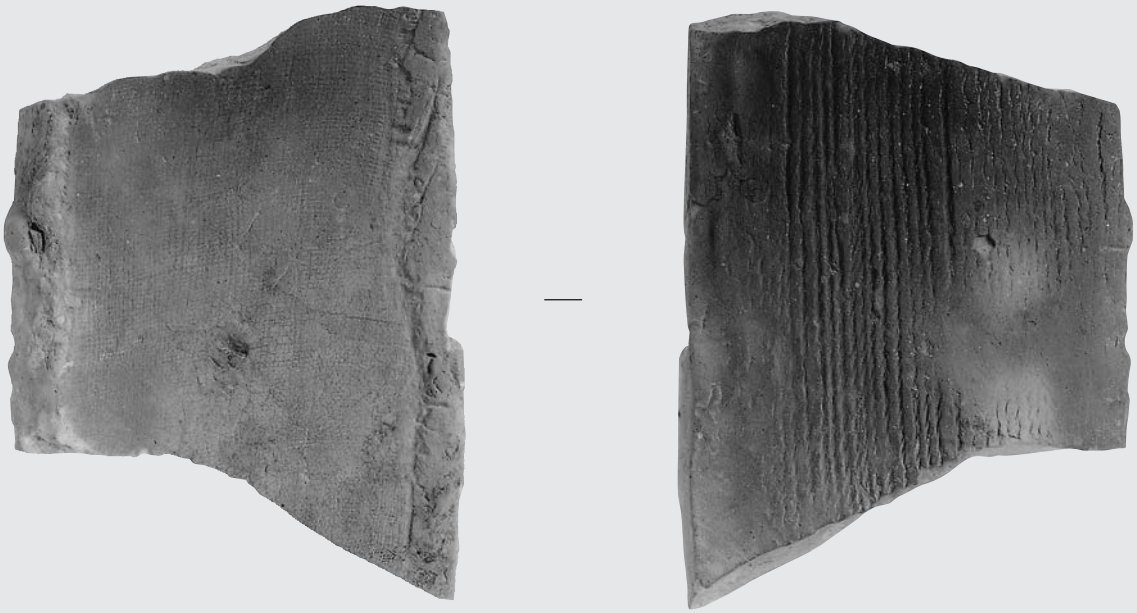
369

378

382

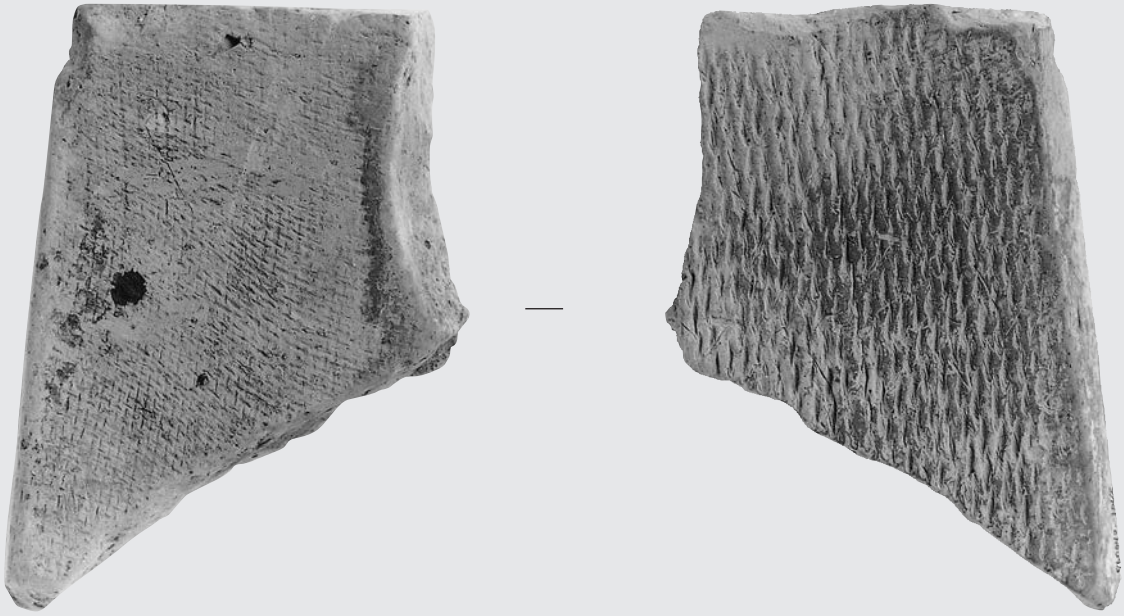
381

358・363・364・368・369・378・381・382：包含層出土土器



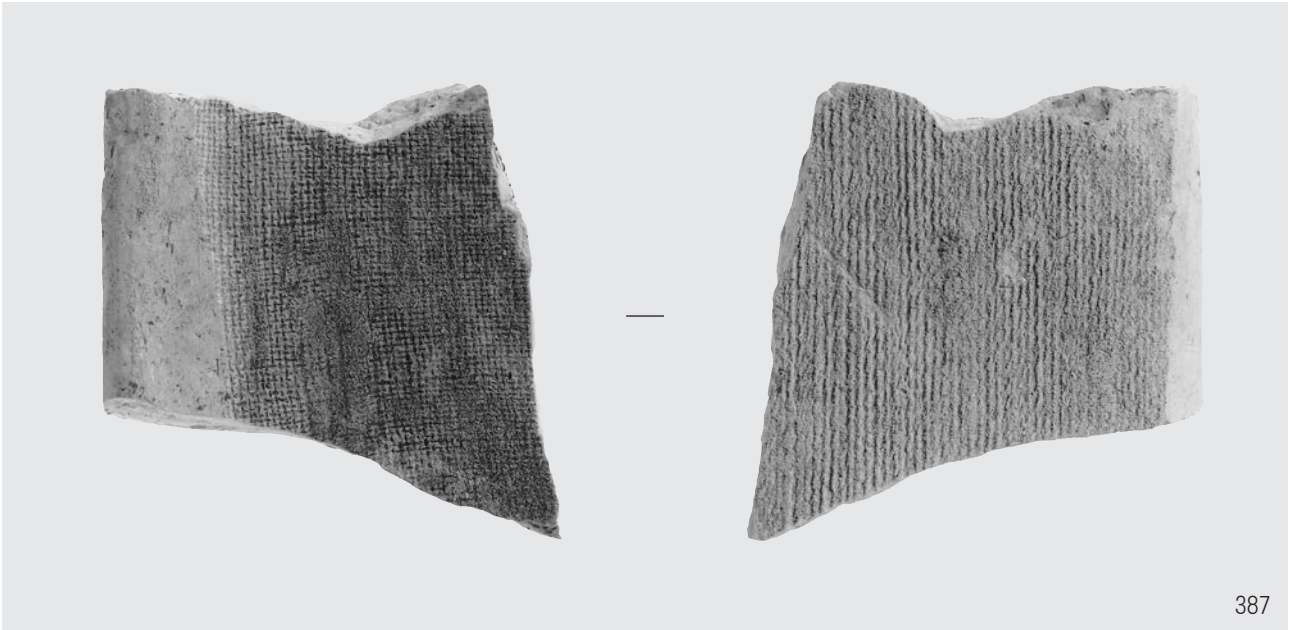
383

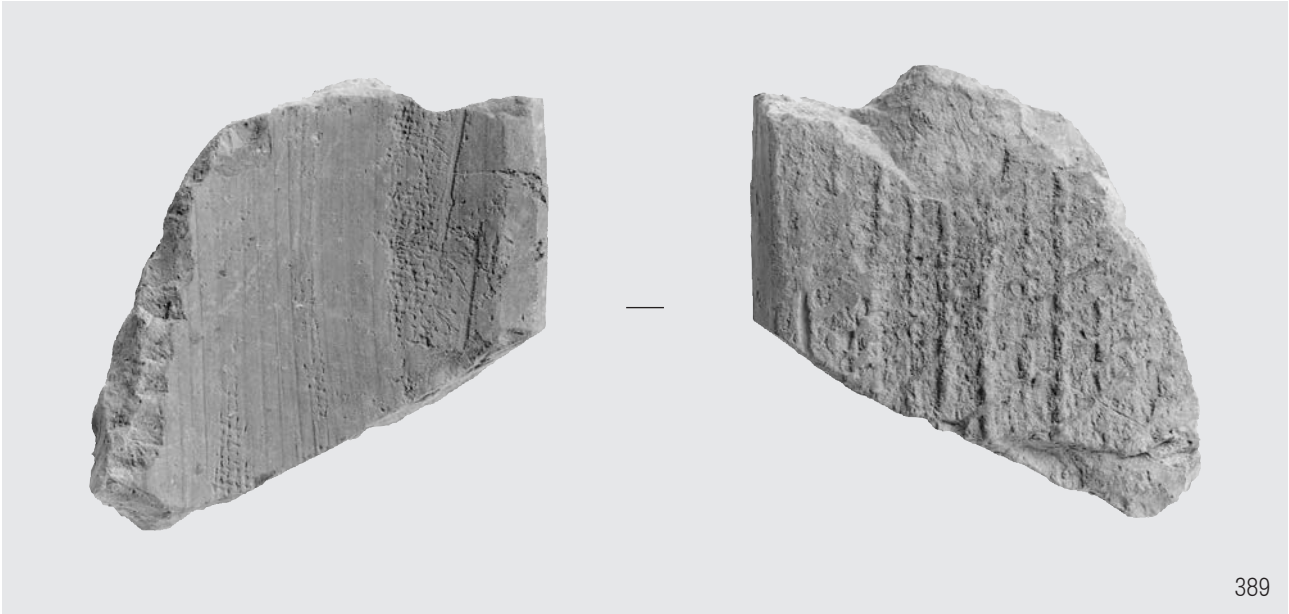
384



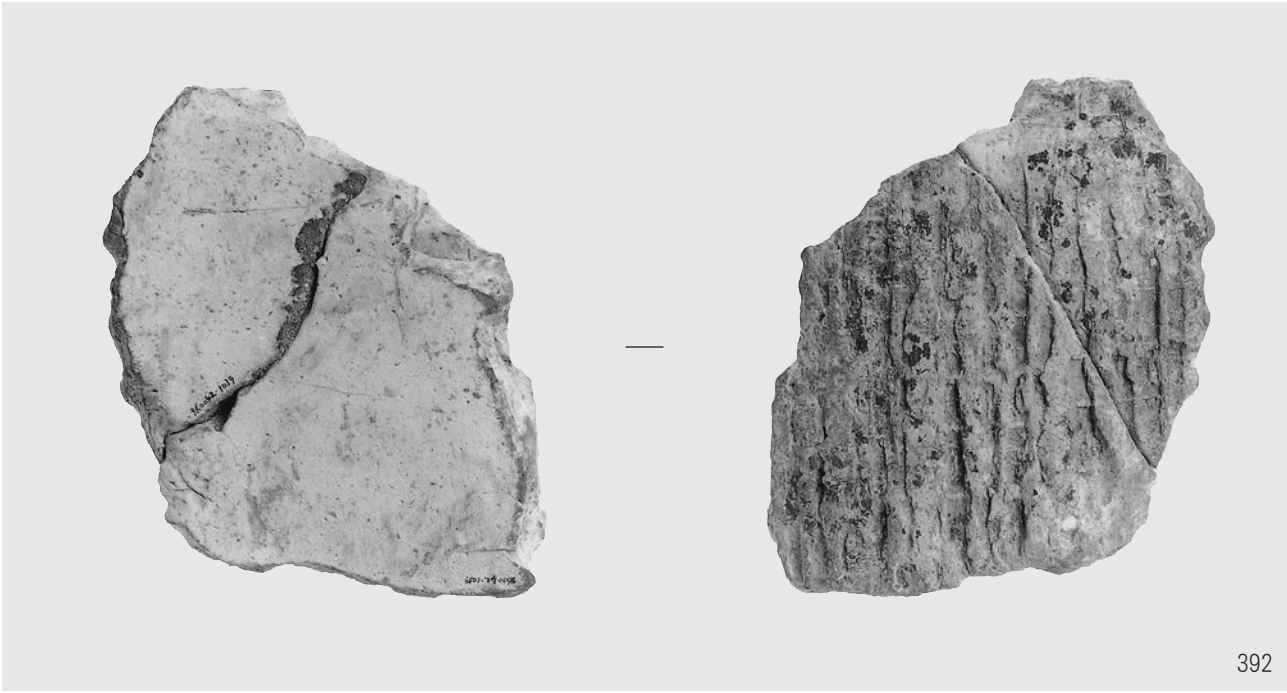
385

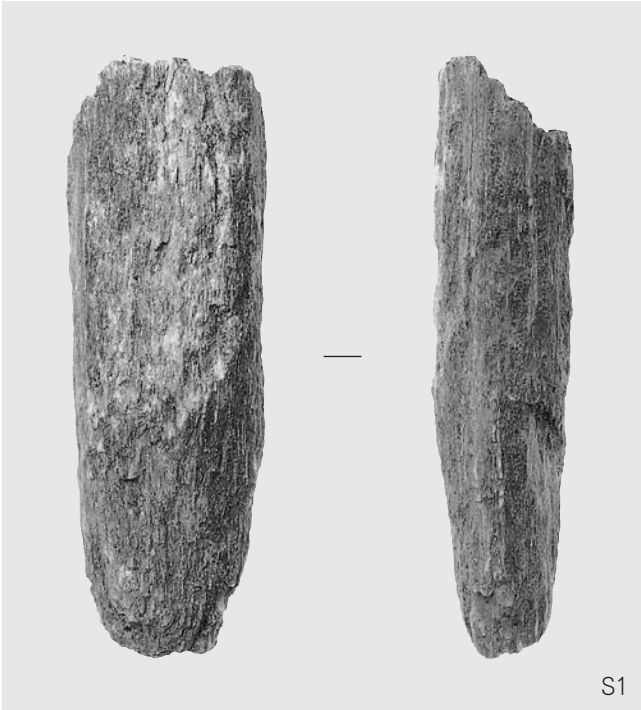
383～385：包含層出土瓦





387・389・391：包含層出土瓦





392：包含層出土瓦　400：包含層出土土器　398・399：SK37出土土器　S1・S2：微凹地出土石器

写真図版61　遺物

S3：SK06出土石器　S4：SH02出土石器　S5：SB06-P3出土石器
M1：P36出土金属製品　M2：包含層出土金属製品

兵庫県文化財調査報告　第325冊

姫 路 市

北　条　遺　跡

ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

平成20年３月21日　　発行

編　　集　　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　加古郡播磨町大中500
発　　行　　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10－１
印　　刷　　株式会社ソーエイ
〒673-0898　明石市樽屋町６－６